われら九人の戦鬼

柴田錬三郎

われら九人の戦鬼

柴田錬三郎

われら九人の戦鬼
柴田錬三郎

文藝春秋

490円

われら九人の戦鬼

柴田錬三郎

われら九人の戦鬼
柴田錬三郎
文藝春秋

われら九人の戦鬼

柴田錬三郎

文藝春秋

装幀　中尾　進

月と女と

満月が、新戦場を、照らしていた。

千騎と千騎が、激突し、血みどろになって闘った野を靄がつつみ、それに、月光が落ちたのである。

自然は、永劫に絶えることのない人間の争いとはかかわりなく、静かな夜を迎えていた。

新戦場に、もう、物音は絶えていた。

夜の静寂は、深いのであった。

と——。

白い闇の中に、騎馬の音が、迫った。

数騎である。

おそろしい迅さで、死の原野を一気に駆けぬけて、西方にわだかまる丘陵の松の木立の中で、蹄の音を、止めた。

この丘陵は、ぜんたいが砦になっていて、かなりむかしから、一隊がたて籠っていた模様である。

頂上には、かなりな構えの陣屋が建てられていた。

これを守備していた者たちは、今日、滅びはてた。

敵が放った火で、なかば焼けおち、月光は、その惨たるすがたへ、不気味な凄みをおびさせている。

黒影の群は、木立の中で馬をすてると、陣屋へ、のぼって来た。

先頭の者が、人をせおっている。月明りに、はっきりと、女と判る。

死んだように、ぐったりとなっている。

せおっているのは、具足武者であった。それにしたがっているのは、足軽たちのようである。

ようやく余燼のおさまった焼跡をふみこえて、陣屋の中に入ると、武士は、女を板敷きにおろして、

「あかりだ」

と、云った。

燭台がさがし出され、やがて、赤い灯火が、闇をすみずみへ、押しやった。

意識をうしなっている女は、まだ若く、美しい顔だちであった。

ゆれる灯の中で、顔にさした陰翳もゆれ、それがなまめかしかった。白いやわらかな肌理の頬やあごやのどが、この陰惨な屋内で、いたましいくらい清純なのであった。

まとった衣裳が、かなりの身分を示している。

裳裾がみだれて、白い脛がのぞいていて、それへ、足軽たちの視線が、集中していた。武士が、そのあさましい視線に気がついて、

「おい、もう、よい。外へ出ろ」

と、命じた。

武士は、いかにも度胸と膂力のありそうな、逞しい風貌と体軀の持主だった。

四人の足軽は、これと対蹠的に、下卑た面つきと、うすよごれた恰好をしていた。
　武士が、一軍の旗本の中でも重きをなす母衣（ほろ）衆ならば、足軽たちは昨日野伏だったのが、臨時にやとわれた虫けら同様の雑兵であった。
　武士は、足軽などを、人間あつかいにはしていなかった。
「おいっ！　外へ出ていろ、と申すのだ！」
　武士は、足軽たちが、意外にも、おし黙って、そこを動こうとせぬのに、声を荒げた。
　にも拘らず――。
「……」
「……」
「……」
　四つのきたない顔が、目玉を底光らせて、依然として、動こうとせぬのだ。
「ええい！　おのれら――」
　武士は、ようやく、足軽たちの肚の中を読んで、すっくと突っ立った。
「おれが、敗軍の侍大将と、あなどったか、おのれら！　毛利伝十郎は、おのれら野伏あがりに、見くびられるほど、まだ、鋭気が衰えては居らんぞ！」
　腰の大刀に、右手をかけて、にらみつけた。
　すると、足軽たちは、まるで、この瞬間を待っていたように、顔を見合せた。
　そして、一人が、
「その姫様を、どうするね、侍大将？」
と、たずねた。
　いかにも横柄な口のききかたであった。野伏あがりだから、言葉づかいを心得ているわけはないが、語気が、毛利伝十郎を、なめきっていた。
「どうしようと、おのれの知ったことか！」
「そりゃ、まあ、そうだが……、気になる」
「うるさいっ！　出て行け！」
　伝十郎は、いきなり、抜刀した。
　四人は、一斉に立った。
　しかし、怯えて立ったのではない証拠に、退くかわりに、横の間隔をひらいた。
　つまり、たたかうための陣形をとったのである。
　伝十郎は、愕然となった。
　虫けら同様の小者が、反抗しようとは！　夢にも考えなかったことである。
　伝十郎の五体に、かあっと、憤怒の血がたぎった。
　足軽たちは、伝十郎のこんたんを看破したのである。
　意識を喪っている女は、敵将の息女であった。
　敗軍の母衣衆としては、これを拉致して、わがものにし、あわよくば、高い身代金を要求する――その復讐をなそうというわけであった。
　この四人の足軽は、伝十郎が、偶然、戦場で生き残っているのを、ひろって来たのである。

　よもや、この足軽が、伏兵になろうなどとは、この砦に帰りつくまで、想像もしていなかった伝十郎である。
　闘いの陣形をとられてみて、この四人が、ただの小者ではなかった、と判った。
　しかし、武辺の面目として、この手輩と妥協はできなかった。
「来いっ！」
　伝十郎は、身構えた。
　戦場数を踏んでいる毛利伝十郎であった。
　野伏あがりの雑兵どもに、敗れるなどとは、夢にも、考えていなかった。
　いきなり、一人へむかって、吼号すさまじく、躍りかかった。
　次の瞬間であった。
　――こやつら、ただ者ではない！
　そう直感して、背筋に悪寒を這わせたのは。
　斬りつけた一人は、まるで、風のような迅さで、とび退っていたし、ほかの三人は、その場を動きもせずに、黙って、平然と立っていたのである。
「うぬっ！」
　伝十郎は、奮然と、四人を睨みまわすと、
「おのれら、どこかの忍びか！」
と、呶鳴った。
「野伏から、忍びに、格上げしてくれたぜ」
　一人が、ひっひっひ、と嘲罵的な笑い声をたてた。
「侍大将。おれたちを、買いかぶらんでもいいぜ。おれたちは、ただの百姓上りさ。……ただ、あっちの戦場や、こっちの戦場をうろうろしているあいだに、滅多に斬られねえコツをおぼえただけよ」
「ほざくな！」
　伝十郎は、次の一人へ、一太刀あびせた。
　対手は、苦もなく、身を沈めて、刃風を頭上に、唸り過ぎさせた。
　伝十郎は、もはや、我慢ならず、猛然とあばれはじめた。
　足軽たちは、四方へとびはねて、逃げていたが、そのうち、一人が、
「おれが、一番乗りだぞっ！」
と、叫んだ。
　伝十郎には、それが何を意味するか、すぐ判って、かっとなるや、
「くそっ！」
　その男めがけて、とびかかった。
　その刹那、
「おれだっ、一番乗りは！」
　背後で叫びざま、一人が、伝十郎へ、突きかけた。
　あやうく、それをかわしたが、体勢が崩れた。
　その隙につけ込んで、ほかの一人が、
「やったあっ！」
と、刀をまっすぐに突き出して、板敷きを蹴った。
　脾腹をふかぶかと刺しつらぬかれた伝十郎は、野獣のよ

うな唸り声をたてて、白刃を旋回させた。
それが、一人のあごを殺いだ。
「ちっ——いてえっ！」
はねあがって、あごをおさえた男は、その怒りを、一撃にこめて、伝十郎の脳天へ、片手なぐりに、斬り下した。
伝十郎は、たまらず、ぐらぐらと上半身をゆれさせて、板敷きへ、崩れ込んだ。
「おれだぞ！　一番乗り！」
脾腹を刺した男が、顔の返り血をぬぐいながら、どなった。
「いいか、おれだぞ、一番乗りは！」
その男は、もう一度、高声でくりかえした。
あとの三人は、返辞をしなかった。
「おい、きこえているのか！」
呶鳴っておいて、倒れている女へ、近づこうとした。
とたんに、一人が、
「弥蔵、籤だ。籤にせい」
と、云った。
「ごめんだ。おれが、この侍大将をやっつけたのだぞ。一番乗りにきまって居る。戦場の作法と申すものだわい」
弥蔵は、断乎として、肯かずに、女へ、手をかけた。
すると、三人のうち、二人が目くばせしあった。
次の瞬間——。
二人は、同じ迅さで、躍り立ちざま、左右から、弥蔵へ、一太刀ずつ、あびせた。
肩と腰を斬られながら、弥蔵は、屈せず、白刃とともに、からだを、独楽のように、旋回させた。
もとより、二人を、手負わせるにはいたらず、血ぶるいして、つっ立つと、
「おのれらっ！」
と、喚いて、振りかぶった。
そこをまた、二人から、同時に、襲いかかられて、こんどは、絶鳴をあげて、のけぞった。
二人は、ぶっ倒れた弥蔵へ、冷淡な視線を落していたが、どちらからともなく、顔を見合せた。
「籤か？」
一人が、云うと、もう一人が、かぶりを振った。
「はずれた方が、腹が立つ。一緒に、なぶろうではないか」
「それもよいのう」
にたりとして、のこりの一人を、かえり見た。
その男は、ずっとはなれたところに、うずくまっていた。
「柿丸——貴様は、どうする？」
「どうもせん」
「どうもせん？」
「わしは、見物して居る」
「ふん。どんじりでも、我慢するというのか？」
「いいや。わしは、お主らのように、飢えては居らん」
「飢えて居らんはずがあるか」
「女は、欲しゅうないのじゃ」

「禅坊主のようなことをぬかすな」
「本当だから、しようがない。お主らは、あさましすぎる」
「なんだと！」
二人は、柿丸を睨みつけた。
柿丸は、そっぽを向いた。
「すてておけ。わしらはわしらで、勝手にやろう」
「そうだの」
二人は、女のそばへ寄った。
四つの手が、みるみる、女の衣裳を剝ぎとりはじめた。
二人の足軽のまなこは、飢えた野獣の光を、ぎらぎら放っていた。
その光が、あらわになった若い肌へ、ぶすぶすと、突き刺さった。
四本の手は、ついに、女のからだから、まとうたものを、一枚のこらず、剝ぎとった。
赤い灯火に照らされた白い肢体は、まだ熟しきらぬ清楚で繊細なおさない線をのこしていた。しかし、白蠟のようになめらかなその曲線は、たとえようもなく、美しい。
二人の足軽は、ともに、ごくりと、生唾をのみ込んだ。
この時、奥にうずくまっている柿丸が、ひくく、
「あぶない！」
と、つぶやいた。
その独語は、女体に目をうばわれている二人の耳には、きこえなかった。
いや、上階に、あきらかに、人の動く気配が起っても、なお、二人は、気がつかなかった。
階段を降りて来る、みしっみしっ、という音で、はじめて、二人は、はっと、険しい視線を、向けた。
降り立ったのは、着流しの牢人者であった。
三十がらみの、眉目に、野性の翳のある人物であった。
貌ぜんたいが、くらいのだが、それを救っているのは、ひきむすんだ口もとの気品であった。
ただの牢人者とは思われなかった。
但し、みなりは、いかにも貧しかった。
「そのあたりでよかろう、女をいじめるのは——」
そう云った。
声音は、冴えている。
二人の足軽は、刀をつかむや、とびかかる身構えをとった。
獲物を襲わんとする猛獣に似ていた。
牢人者は、平然として、左手に、かなりの長剣を携げて、立っている。
足軽たちは、左右へ、じりじりと、はなれた。
「お主たち。おれは、そこに死んでいる侍大将のように、そうたやすくは、片づけられぬぞ」
そう云う牢人者の顔に、冷たい薄ら笑いが、刷かれた。
先刻から、上階にいて、一部始終を視下していたに相違ない。
いままで、沈黙を守っていたのは、他人事に対して、無

関心な気象であろう。
女が、一糸まとわぬ素裸にひきむかれたのを看て、それがういういしい処女の肌であったので、腰を上げたのだ、と思われる。
足軽たちは、対手がなにをうそぶこうが、これを殺す一念しか持たなかった。
牢人者は、完全に、敵二人から、左右一直線に、地歩を占められた。
にも拘らず、べつに、身構えようともしないのであった。
闘いは、一瞬にして、決した。
左右から、躍った足軽たちの速影が、牢人者の前と後を、とびちがった。
そして、それぞれ、仲間が立っていたところまで、跳んだ。
とみえた時、かれらは、ともに、のどから、噴水のように血汐をほとばしらせて、よろめき崩れ、板敷きを、響かせていた。
牢人者は、依然として、同じ場所に、立っていた。ちがっているのは、右手に、白刃を握っていることであった。
おそるべき迅業を発揮したものである。これは、ただ修羅場の場数をふんでいるだけで、なせる業ではなかった。
異常な修業を積んでいる、と判る。
牢人者は、やおら、頭をまわして、奥にうずくまる柿丸を、視やった。
「おい、お前は、どうする？」
そう問うた。
柿丸は、じっと、見かえして、
「どうもいたさぬ」
「仲間が斬られても、腹は立たぬのか？」
「べつに、好んで仲間になったわけではござらぬ。雑兵になっているうちに、偶然、四人生きのこっただけでござる。その侍大将が、手を貸せと申されるから、手つだったまでのことでござる」
「ふん――」
牢人者は、薄ら笑った。
「お前だけは、此奴らとは、すこしちがっているようだな。女に興味はない面をして居るし、傍観者になったのは、どうやら、ただの小ずるさではなかろう」
「……」
柿丸は、なぜか、ぺこりと頭を下げた。
この時、倒れている女が、ひくく、呻いた。
牢人者は、白刃を鞘におさめると、ひとつ大きく背のびしてから、
「……くだらぬ」
と、つぶやいた。
「お手前様は、強うござるな」
柿丸が、云った。
「世辞は止めろ」
牢人者は、その場にあぐらをかくと、
「酒が欲しいところだ」

と、云った。
「酒なら、ござる」
柿丸は、立って、牢人者のわきを通って、おもてに出て行った。馬の鞍へ、瓶（かめ）をくくりつけているのを思い出したのである。
牢人者は、柿丸がわきを通りすぎる時に、視やって、まだ二十歳を越したばかりの若者なのをみとめた。
女が、どうやら意識をとりもどした様子に、視線を移して、刀のこじりで、はだけた衣裳をはねて、前をかくしてやった。
若い女の美しい裸形など、一向に興味もないようなしぐさであった。
女は、はっきりと、おのれをとりもどすや、はじかれたように、はね起きた。
牢人者は、女が怯えながらあとへいざるのへ、じろりと、冷たい一瞥をくれた。しかし、べつに、声をかけようとはしなかった。
柿丸が、瓶を携げて、もどって来た。
木椀（きまり）も持っていて、それへなみなみと、白い液体を盛って、牢人者の前に置いた。
それから、女の方へむきなおって、
「気を失っているあいだに、形勢が変り申した。そなたを手ごめにしようとした者らは、見られるように、一人のこらず、相果ててござる」
そう告げた。
女は、なお、怯えの色を、顔にうかべている。
「わしも、そなたを拉致するのを手つだった一人じゃが、べつに、色情に狂っては居らん。……そなたを、救ったのは、このご牢人衆じゃ。礼をのべたがよかろう」
「余計なことを云うな」
牢人者は、二杯目をのみほしてから、木椀を、柿丸へさし出した。
「お前も、やるだろう」
「いや、わしは、一滴もやり申さぬ。この酒は、侍大将のものでござった」
「お前は、存外木訥な男らしいな」
牢人者は、笑った。
歯が、皓かった。
「木訥ではござらぬ。酒がきらいなだけでござる」
柿丸は、いかにも、不服げに、云った。
「それは、どこの娘だ？」
「この砦を滅ぼした高明寺高政の息女梨花どのらしゅうござる」
「相違ないか、女？」
牢人者は、訊ねた。
「はい――」
女は、うなずいた。
「いくさに敗れた腹いせに、敵将の娘をかどわかして、手ごめにしようとは、考えたものだったな」
牢人者は、三杯目をなみなみと、注いだ。斗酒なお辞せ

ずのようであった。
それを見まもる柿丸のまなざしが、畏敬の色をふくんでいた。
「お手前様は、どうして、ここに、在られたのでござろうか？」
「この砦の守将が、旧知だった。たずねて来たら、滅んで居った。人間の運は、わからぬ。天下人を夢みて居る奴だったが……」
「お手前様が、一日早く到着されていたならば、勝敗はどうなっていたか、わかり申さぬ」
「世辞は止せ、と云っているぞ。……おれは、野良犬だ。軍略など、何も知らん。第一、いくさに加わるためにやって来たのではない」
「そのようなことを申される御仁こそ……、いや、これも世辞になると、叱られそうだから、やめておこう」
柿丸は、かぶりを振った。
牢人者は、やおら、立ち上った。
「おれは、出て行く」
「あいや！」
柿丸が、呼びとめた。
「お手前様は、おいそぎでござろうか？」
「いそぐ？　はははは……」
牢人者は、声をたてて笑った。
「多門夜八郎に、急ぎの用など、あろうはずがない」
――たもん、やはちろう！
柿丸は、その姓名を、脳裡にたたみ込んでおいて、
「それでは、ひとつ、お願いの儀がござる」
「なんだ？」
「この高明寺高政殿の息女を、館まで、おつれ頂けますまいか。お手前様としては、助けたついで、と申すもの」
「莫迦を云え。救ってやったからといって、家までとどけてやる義理などはない」
「ほうびなど、欲しい御仁とは見え申さぬが……、女子はきらいでござるか？」
「好きだな」
「それでは、おつれ下され。梨花どのは、美女でござる」
「お前に云われなくとも、わかって居る」
「お願い申す」
柿丸は、両手を板敷きへついて、頭を下げた。
「お前が、つれて行け」
「それがしは、拉致した者でござる。つれて行くことは、叶い申さぬ」
「それでは、女を、ここへ　すてておけ。足があれば、歩いて帰るであろう」
「お手前様は、よほど、ひねくれたご気象でござるようじゃ」
柿丸は、歎息した。
この時、梨花が、きっと、顔をあげた。
「わたくしは、もう、館へは、戻れませぬ」
「戻れぬはずがあろうか」

柿丸が、かぶりを振った。
「館では、いまごろ、大騒ぎをしてござろう。戻れば、大よろこびをされるじゃろう」
「いいえ！　いったん敵の手にとらわれた者が、生きておめおめと戻ることは、できませぬ。……わたくしも、左様な恥辱には、堪えられませぬ」
「そなたの家では、そのように、家門の栄誉を誇って居るのか？」
夜八郎が、急に、鋭い視線を、梨花にくれた。
「桓武平氏（かんむへいし）以来の家ならば、当然でありましょう」
「そうか。そなたは、心から、そう思っているのだな？」
「思って居ります」
「よし！」
夜八郎は、柿丸を、振りかえると、
「お前は、おもてへ出て居れ」
と、命じた。
「どうなされるぞ？　まさか、これだけの美女を、むざと、殺されるのではござるまいな？」
「殺しはせぬ。犯すのだ」
夜八郎は、平然として、云ってのけた。
犯す、と云われて、柿丸は、啞然となった。
「どういう存念かのう？」
「よけいなことを、きくな！」
「それは、まあ……、人それぞれ、思案はあるじゃろうが……」
柿丸は、べつに、反対する理由も、思い当らなかった。
梨花が、家門の栄誉に誇りを持っている、と云ったのが、多門夜八郎のカンにさわったのである。
柿丸には、夜八郎が腹を立てた気持が、わかるような気もしたのである。
やがて――。
柿丸は、どこで見つけたか、柄の焼けた鍬を片手に携げて、廃墟に立った。
毛利伝十郎と仲間三人の屍骸を、葬ってやろう、と思いたったのである。
戦場の討死者は、味方が敗北した場合には、そのまま、野ざらしになってしまうのがならいであった。柿丸としても、べつに、葬ってやらねばならぬ義理はなかったが、この男の心には、そんな優しさがのこっているとみえた。
ざくっ、ざくっ、と土を掘り起しながら、柿丸は、口のうちで、なかば無意識に、念仏をとなえていた。
そのうち、柿丸の脳裡には、十年前の思い出が、よみがえっていた。
十年前、十一歳の柿丸は、病弱な母親につれられて、東国へむかって、旅をしていた。母親は、なぜ、東国へ行こうとするのか、息子には、打明けていなかった。しかし、柿丸の方では、うすうす感づいていた。
母親は、ある軍勢が暴風雨のような勢いで、通過して行った道筋の農夫の娘であった。その時、髯武者の一人に、

犯されて、柿丸を生んだのである。髯武者は、東国の住人であることを告げて、去っていたので、母親の念頭から、まだ見ぬその土地のことが、はなれなかった。
その髯武者が、でたらめを告げたのかも知れないし、本当であったとしても、はたして、まだ生きているかどうか、わからなかったが、息子が大きくなるにつれて、母親は、一目会わせたい想いがつのって来たのである。
そして、ある郷士の家の下婢をしていた母親は、思いきって、柿丸をつれて、東国をめざしたのであった。
だが、病弱な女にとって、生れてはじめての長旅は、到底無理であった。
もう、故郷にはひきかえせない遠い他国まで来て、母親は、倒れた。
ある古刹の裏にある墓守りの小屋で、十日あまり寝てから、息をひきとったのであるが、その臨終で、母親は、柿丸に、はじめて、父親の名を告げたのである。
柿丸には、横川勘兵衛というその名など、おぼえておく気持はなかったが、なんとなく、いまも、脳裡に、刻んでいる。
柿丸は、墓守りが、老爺であったので、自分一人で、墓穴を掘って、母親のなきがらを埋めたのであった。
——あの夜も、月がきれいじゃった。
柿丸は、大きく掘りひろげた墓穴へ、月光が降って来るのを眺めて、胸のうちで、呟いた。
母親のなきがらは、少女のように、小さいものになっていた。それを、そっと、穴底へ横たえた時、月光をあびた死顔が、十一歳の柿丸には、大層美しいものに見えたことである。
柿丸は、泪をぽたぽたとこぼしながら、その死顔へ、土をかぶせたものであった。
その思い出をよみがえらせて、柿丸は、胸の底に、微かな痛みをおぼえている。
「つらかったのう」
思わず、そう呟いてから、柿丸は、われにかえり、墓穴から、はい上った。
四個の死体は、近くに、ならべて、寝かせてあった。
それを、つぎつぎと、墓穴へはこんで来た柿丸は、葬りおわると、
「殺しあった者同士が、一緒に葬られるのは、あじけなかろうが、あきらめてもらおう。穴を四つも掘ってやるほどの親切心は、持たぬ」
と、ことわって、合掌した。
それから、ゆっくりと、建物へひきかえして来た。
恰度その時、多門夜八郎が、出て来た。
「犯されたかな?」
柿丸は、訊ねた。
こんな質問は、ひどくばかげている。
夜八郎は、こたえずに、歩き出そうとした。
「梨花どのを、すてて行かれるのか?」
「お前に、まかせる」

「それは、迷惑至極でござる」
柿丸は、かぶりを振った。
「お前は、どうやら、善良な若者らしい。不運な娘を世話するために、ここにいるようなものだ」
「勝手なことを申されるものじゃ」
不運な女など、母親を見ただけで、たくさんである。
あの梨花が、この牢人者に犯されたために、もし、懐妊したら、どうなるというのであろう。
柿丸が、一人だけ、仲間からはずれて、傍観者の立場をえらんだのは、不幸な母親のことを思い出していたからである。
「お願いでござる。梨花どのを、おつれ下され」
夜八郎は、こたえず、歩き出そうとした。
「梨花どのが、もし、お手前様の子供を生んだら、かわいそうでござる」
「子供を生む?」
「お前は、なぜ、そんな想像をするのだ?」
「……」
夜八郎は、柿丸の言葉に、頭をまわした。
柿丸は、ちょっと、返答に窮した。
「そうか」
夜八郎は、合点した。
「お前が、そうやって、生れて来たのか」

野の果て

丘陵の麓に、かなりの騎馬の音が、起ったのは、その時であった。
夜八郎は、ちょっと、耳をすましていたが、柿丸を振りかえると、
「おい——、どうやら、かぎあてられたようだな」
と、云った。
「高明寺高政の手勢だと、申されるのか?」
「敗走して来た者どもなら、あのように馬脚に力をあませては居るまい」
蹄の音をきいただけで、それを判断できるには、相当の経験を積んでいなければならぬ。
——この牢人衆は、いよいよ、ただものではないようだ。
柿丸は、あらためて、自分に呟いた。
「いかがされるかな?」
柿丸は、たずねた。
「女に、きいて来い」
「かしこまった」
柿丸は、すばやく、屋内に駆け入ると、板敷きに巨きく映した影法師を、ゆらゆらとゆらめかせて、ひっそりとう

なだれた梨花に、
「高明寺家の手勢が、迎えに参り申した。いかがなされるぞ？」
と、声をかけた。
梨花は、すっと、立った。
「わたくしは、戻りませぬ」
「されば……、多門夜八郎殿に、従いて行かれるか？」
「従いて参ります」
「よし、きまった！　さ、ござれ」
柿丸は、燭台のあかりを吹き消すと、梨花の手を引いて、おもてへ奔り出た。
と――。
夜八郎の姿は、どこにもなかった。
「おっ！　わしらを置いて、逃げるとは卑怯！」
柿丸が、叫ぶと、
「ここだ」
夜八郎の返辞があった。
夜八郎は、建物の蔭に、毛利伝十郎が乗って来た馬に、またがっていた。
「梨花どのは、馬をこなすことは、どうじゃ？」
柿丸が問うと、梨花は、かぶりを振った。
「習うて居りませぬ」
これをきくや、夜八郎が、手をさしのべた。
「乗れ」
梨花は、夜八郎の心の裡を読みとりかねて、一瞬、ためらったが、斜面を駆け上って来る騎馬の音に、はっとなって、その手にすがった。
柿丸は、すでに、自分の乗って来た馬に、またがっていた。
二騎は、追手と反対の方角へ、疾駆しはじめた。
夜八郎も柿丸も、ただの乗り手ではなかった。
梨花は、必死に、夜八郎のせなかにしがみついて、まぶたを閉じていた。
ふしぎな陶酔感が、梨花のからだをひたしていた。
男の体軀の逞しさを、頬や腕や胸に、じかに感じながら、疾駆するがままにまかせていることに、梨花は、はじめて、若い血の燃えるのをおぼえたのである。
この男は、つい、先刻、自分のからだを、弄んだ憎むべき人物であった。にも拘らず、梨花は、もう、みじんも、憎悪を抱いてはいなかった。
自分は、文字通りすがりつくべき男を、得たのである。
その意識が、はっきりと、心にあった。
梨花は、不幸な育ちかたをした娘であった。
梨花の母は、梨花を生むとすぐ、亡くなった。美しく、優しい婦人であった、ときく。梨花にとって、第一の不幸がそれであった。
第二の不幸は、父高明寺高政が、城取りの野望の権化で、わが子のことなど一顧もしない冷酷非情の武将であったことである。梨花は、父に抱かれたことはおろか、優しい言葉ひとつ、かけられた記憶がなかった。

第三の不幸は、つぎつぎにとりかえられる義母が、一人のこらず、意地悪な女だったことである。そして、梨花を守ってくれる老女も侍臣もいなかったのである。
梨花の十九年間は、完全な孤独であった、といえる。
もし、このような不幸な育ちかたをしていなければ、自分を犯した男に対して、すぐに憎悪を忘れることはできなかったであろう。
十九歳の若い生命は、いまようやく、自由の世界へとび出して、はつらつとはばたこうと、しているようであった。
逞しい男に、しがみついていることが、こんなにも、快いことなのか。身がおどるにつれて、心もおどっていた。
「あっ！」
突如、梨花は、悲鳴をあげて、宙をもんどりうった。
馬が、かなりの幅の川を跳び越えた瞬間、前脚を折ったのである。
ひらっと、はねあがって、草地に立った夜八郎は、つづいて、たくみに跳び越えて来た柿丸が、たづなを引いて、
「これに乗られませい」
と、すすめたが、黙って、夜明けの狭霧（さぎり）の中をせわしく蹄の音をひびかせて追って来る黒い速影の群へ、視線を置いた。
「それがしが、この川ぶちで、なんとか、くいとめ申す！」
柿丸が、馬からとび降りて、叫ぶと、夜八郎は、
「ばかを云え」
と、云いすてておいて、その馬へ、ひらりと、またがったか、とみるや、川面の上を躍って、追手陣めがけて、逆に、まっしぐらに、馬をとばしはじめた。
夜八郎は、追手を、七八騎と、看ていた。
これは、まちがいなかった。
指揮をとるのは、高明寺高政の甥にあたる高明寺源太郎といい、まだ二十歳をこえたばかりであったが、膂力三十人力と称される巨漢であった。
梨花を、いずれ、わが妻に、と心にきめていたので、拉致された、ときくや、憤怒凄じく、ただ一騎で、陣屋をとび出したのであった。
二里を迅駆けて、ようやく、七騎の血気武者たちが追いつくのを待ち、四方へ奔らせ、焼け砦に、梨花がつれて行かれた、とつきとめたのであった。
こちらが、麓に到着するや、はやくも遁走を企てる敵を、
――小面憎し！
とばかり、馬脚をあおった高明寺源太郎は、一気に追いついて、討ち果す闘志を、全身にみなぎらせていた。
追手勢にとって、邪魔であったのは、夜明けの狭霧であった。
これがなければ、もっと早く、追いつけたはずである。
ようやく、あと一息と源太郎とその供七騎が、闘志を昂めた――その時である。
狭霧の中を、むこうから、逆に、こちらへ向って、一騎が疾駆してきたのである。
「なんだ、彼奴っ！」

高明寺源太郎は、不審のままに、腰の太刀を抜きはなった。
　つづいて、うしろの七騎も、抜刀した。
　狭霧を割って、敵騎の速影が出現した。
　とみた刹那——。
「おーっ！」
　高明寺源太郎は、物凄い吶号をほとばしらせて、そやつめがけて、三尺四寸の白刃を、あびせかけた。
　次の瞬間、刃金の鋭いひびきの中で、高明寺源太郎は、その右手がしびれ、大きくゆれて、宙へ抛り出されていた。
　自分でも、どうして、こんなぶざまな敗北を喫したのか、わけのわからぬままに、源太郎は、地面へ、たたきつけられたのである。
「く、くそっ！」
　はね起きた源太郎は、おのが部下が、つぎつぎと、馬からころげ落ちるのを、目撃して、一瞬、唖然となった。
　人間業とも思われぬ敵であった。
　げんに、その一瞬には、
　——何かの化身か？
　と、神仏の存在などみじんも信じない源太郎が、思ったことである。
　敵は、追手八騎を一人のこらず、馬上から消えさせておいて、さっと馬首を向けかえて、ひきかえして来るや、こんどは、主を失ってうろつく馬どもを、追いはらった。
　どの馬も、尻を斬られて、悲鳴をあげて、八方へ、めくら滅法に、駆け散ってしまった。
「待てっ！」
　高明寺源太郎は、そのまま自分の横手を駆け抜けようとする敵騎に向って、狂気のように、躍りかかった。
　しかし、あっという間に、数間の距離をはなされてしまった。
「待てぃっ！　卑怯っ！」
　源太郎は、あらん限りの声をふりしぼった。
　それをきいて、多門夜八郎は、たづなを引いて、頭をまわした。
　皮肉にも、狭霧は、その時きれいに散っていた。
「卑怯とは？」
「卑怯ではないか、おのれ！　馬から、降りろ！　降りて、尋常に、勝負せいっ！」
　そう叫びたてる源太郎の形相は、悪鬼に似ていた。
　夜八郎は、にやりとして、
「その折れ刀でか」
「な、なにっ！」
　源太郎は、はっとなって、おのが右手につかんだ太刀を、視た。
　なかばから、折れている。
　どうして、これに気がつかなかったのか。
「ふふふ……。剛勇を自慢する面だましいをそなえているようだが、刀を両断されていることも気がつかぬほど、逆上していては、勝ち目はない。……生命びろいをした、と

胸でも、撫でおろすがいい」
「うぬ！　ほざくなっ！」
　源太郎は、倒れた部下の一人の手から、太刀をもぎ取って、
「勝負せいっ！　勝負っ！」
　と、絶叫した。
「ひろい刀で、勝てるか！　莫迦者っ！」
「降りろっ！　降りんかっ！」
「勝負は、後日にあずけておく。自分の得物で、かかって来い。……おれは、多門夜八郎。主人も家も持って居らぬから、いずれは、何処かの山野で出会うだろう」
「よしっ！　高明寺源太郎の名を、おぼえておけ」
「忘れることもあるが、出会ったら、思い出してやろう」
　夜八郎は、皮肉な一言をのこして、みるみる遠ざかって行った。
　源太郎は、大きく吐息した。
　こんな惨めな敗北は、生れてはじめてであった。
　どうして、あんなに、あっけなく、馬から抛り出されたのであろう。どう考えても、納得できなかった。
　敵は、ただ、さっと、脇を駆け抜けて行ったばかりである。その白刃の閃きすらも、源太郎は、目にとめていなかった。
　にも拘らず、こちらの太刀は半ばから両断され、身は宙へ抛られていたのである。
「くそっ！」
　呻きながら、源太郎は、視線をまわした。地上に倒れた七名の部下は、のこらず、息絶えていた。
　川を躍り越えて、夜八郎は、柿丸と梨花のそばへ、戻って来た。
「いやあー、おどろき申した。お手前様は、鬼神に等しい御仁じゃ！」
　柿丸は、心から、叫ばずにはいられなかった。
　朝陽をあびた夜八郎の面貌は、やはり、くらいものだった。無表情が動かぬのである。
「お前が、この娘をつれて行くなら、馬をやる」
　夜八郎が、そういうと、柿丸は、あわてて、かぶりを振った。
「それがしは、徒歩で、お供つかまつる」
「馬について、走れるのか？」
「まあ、ごらんなさるがよい」
　柿丸は、にやっとしてみせた。
　二十歳の若者の健康な表情であった。
　夜八郎としては、行きがかりから、やむなく、梨花をつれ、柿丸を供させることになった。
　孤独を好み、これまで、ただの一度も、徒党に入らず、友もつくらず、まして、愛する女などを連れにしたおぼえのない夜八郎であった。
　いわば、群から離脱した剽悍な一匹の狼であった。
　——煩わしいな。
　そう思いつつ、梨花を、うしろに乗せ、馬を走らせはじ

めた。
　一里ばかり、かなりの迅駆けをやりながら、夜八郎は、一度も、うしろを振りかえらなかった。
　丘陵を二つばかり越えて、平原が地底へ落ちるように傾斜して、展望される一角へ降りた時、夜八郎は、はじめて、馬をとめて、頭をまわした。
　柿丸は、ちゃんと、うしろに、くっついていた。
　喘ぎもせず、汗をかかず、けろりとした様子をみせている。
「お前は、小鷹の術でも習ったのか？」
　夜八郎は、たずねた。
「なんとなく馴れて居るだけでござる」
「なんとなくか――ふん」
「まことでござる。戦場の雑兵は、わが生命を守るには、人よりも一歩はやく、逃げなければなり申さぬ」
「成程な。しかし、お前は、ただ馴れだけで、今日まで、無事に生きのびたのではなかろう。適当な血の巡りの早さと、四肢に生れついての敏捷さがそなわっているようだ」
「おほめにあずかって、恐れ入りたてまつる」
「ほめているのではない。此後は、それが、かえって、おのれに、禍となるかも知れぬ、と申すのだ」
「左様でござろうか。たとえば、どういう場合でありましょうか？」
「たとえば、おれのような、あまり幸運というものに縁のない牢人者に、なんとなく、くっついて来るがごときだ」

　夜八郎と梨花と柿丸は、陽が中天に昇った時刻に、ようやく、傾斜する広大な平原を、つききった。
　そのあいだ、ついに、人家を一軒も、みとめなかった。
　海にむかってひろがった野とちがって、これは、完全に不毛地帯であった。
　途中で、夜八郎が、小柄を投じて、兎を仕止めて、これを焼いて、腹を満たした。柿丸が、塩を持っていたので、梨花も、口に入れることができた。
　その憩いのひととき、柿丸が、夜八郎に、遠慮ぎみに、素姓をきいた。
　すると、夜八郎は、口辺に冷やかな微笑を刷いて、
「おれが、天子の落し子とでも打明けたら、満足するのか」
　と、こたえた。
「まことでござるか？」
　柿丸は、居ずまいを正しそうになった。
「お前は、血の巡りの早いくせに、虚仮（こけ）にちかいほど莫迦正直な奴だな」
「こういう人間を、おどろかせるものでは、ござらぬ」
「おれが、たとえ、天子の落胤としても、それが、どうだというのだ。その反対に、犬神人の末裔であったとしても、それが、現在のおれに、どんなかかわりがある。……天子も犬神人も、この牢人者とは、無縁だ。氏だの素姓だの、そんなものは、おれたちのような者には、一椀の飯ほどの、ねうちもありはしない」

「そういうものでござろうか」
　柿丸は、梨花の意見をもとめるように、ちらと、見やった。
　梨花は、小さな声で、
「わたくしも、そう思います」
　と、云った。
　――女子は、一度、肌身をゆるすと、その男に、同化しようと努めるそうだが……。
　柿丸は、そう思いつつ、梨花の整った白い横顔を、見まもったことだった。
　平原をつききったところに、かなり深い森が、視界をさえぎっていた。
　森の彼方に、山嶽はなかった。
「地の果て、とでも申したくなるところでござる」
　柿丸が、云った。
　夜八郎は、この森は馬ではくぐれぬ、と思うと、未練気もなく、乗りすてることにした。
「柿丸」
「はい」
「おれは、森の中を歩くのは、不得手だ。お前は、どうだ？」
「いささか、心得て居り申す」
　柿丸は、先に立った。
　その時分から、梨花は、貧血を起し、めまいをおぼえるようになった。
　これに、気づいて、夜八郎が、
「おれの背に乗れ」
　と、すすめた。
「いえ……、まだ歩けます」
　梨花は、ためらった。
「歩けるとみれば、背負いはせぬ」
　夜八郎は、冷やかな声音で、云った。
　柿丸が、近づいて来て、
「よいしょ」
　と、梨花を持ち上げて、夜八郎の背中に乗せた。
　森の中は、昏かった。
　重なりあって、層をなした枝葉が、陽をさえぎって、すこしはなれると、顔も判別し難くなった。
　そして、灌木や茨や熊笹に掩われた地面は、数歩進むのさえ、容易ではなかった。
「引きかえした方がよくはないか？」
　夜八郎が、云うと、柿丸は、かぶりを振って、
「この森を突破せねば、里へ出ることは、かない申さぬ」
　と、こたえた。
　とある地点では、突如、巨きな黒い獣が、躍りかかって来て、柿丸は、灌木を烈しくざわめかして、格闘していたが、ようやく、仕止めて、立ち上った。
　顔が、血だらけになっていた。
「まだ子熊でござったが、親熊が、知ったら、追いかけて来申す。そうなったら、ことでござる」

柿丸は、革袋から竹筒に詰めた薬をとり出して、傷口に塗りながら、そう云った。

「街道を奔るのと、どちらが、安全であったか」

夜八郎は、薄闇の中で、苦笑した。

高明寺勢に追われるのをきらって、わざと、こちらへ駆けて来てみたのだが、人間の代りに、野獣を対手にしなければならぬとすると、むしろ、街道を行った方がよかったような気もする。

柿丸のカンに、万事まかせて、歩くよりすべはなかった。

小半刻も進んでから、柿丸が急に、伏せて、土に耳をあてていたが、のこのこと起きあがると、

「はてな?」

小首をかしげた。

「どうした?」

「どうも、妙でござる。これだけ、地面が傾いていれば、もう、そろそろ、渓水の音が、ひびいて来ても、よさそうでござるが……、一向に、きこえ申さぬ」

「谷は、ないのかも知れぬではないか」

「そんなはずは、ないと思うのじゃが……」

柿丸は、なんとも、納得のいかぬ様子を示した。

「ともかく、ここまで来たら、進むよりほかはあるまい」

「それは、そうでござるが——」

さらに、半刻を費した。

柿丸が、ふと思いついて、かたえのかなり高い樹にとびついて、するすると、のぼって行った。

やがて、降りて来た柿丸は、ひとつ、大きく吐息してから、云った。

「森を出たところは、屏風を立てたような絶壁でござる。谷は、そのむこうでござった」

そそり立つ絶壁に沿うて、進むうちに、日が暮れた。

森の中から、山犬の吠え声が起こると、けものたちが、それに応じて、擾(さわ)いだ。

「果てしがないようだな」

夜八郎も、流石にうんざりした。

「夜の明けるのを、待つことにしてはどうだ、柿丸?」

「いや、それは、危険でござる。けものどもが、匂いをかぎつけて、寄って参る。それが、すくない頭数ではござらぬ」

「お前は、山中の経験は、豊富のようだな」

「里ぐらしがいやになって、木樵小屋で、四年ばかり、くらしたことがござる」

さらに——。

一里も進んだろうか。

「お!」

柿丸が、闇をすかし視て、声をあげた。

「灯がござる」

「灯?」

「人家がござる」

「こんなところにも、人間が棲んでいるのか?」

夜八郎は、ずうっと彼方に、螢火のように、小さくまた

たいている灯を、みとめて、あきれた。

やがて、絶壁が、きれて、下方から、渓流の音が、きこえて来た。

「それがしが、様子を見て来申す」

柿丸は、要心ぶかかった。

夜八郎は、梨花を、湿った地面へおろした。

「……手足まといに相成り、申しわけありませぬ」

梨花が、ひくい声音で、詫びた。

夜八郎は、黙っていた。

「迷惑だとお思いではありませぬか?」

「迷惑でないとは云わぬ。……だが、連れて来た以上、やむを得ぬ」

夜八郎は、冷やかな語気で、こたえた。

しばらく、沈黙を置いてから、梨花は、つぶやくように、

「わたしを、ここで、おすてになっても、お恨みには思いませぬ」

と、云った。

「本心か?」

夜八郎は、問うた。」

「はい——」

「ばかっ!」

梨花の頬が、鳴った。

そこへ、柿丸が、ほとんど音もたてずに、駆けもどって来た。

「あれは、山賊のすみかでござる」

「そんなところであろうと思っていた」

「炉をかこんで、五人。いずれも、ひと癖ありげな面がまえの輩が、酒をくらって居り申す」

「ふむ」

「どうなされる?」

「その小屋で憩うには、片づけるよりほかはあるまい」

夜八郎は、あっさりと云ってのけた。

将軍の旗

成程――山賊にふさわしい凄味とうすぎたなさをそなえた五つの貌であった。
のみならず、いま、博奕がたけなわとなって、さらに、その目つきも血走り、片肌双肌ぬいで、焼け皮膚をあぶらぎらせて、いよいよ、すさまじい光景を呈していた。
就中――、もっとも際立っているのは、いま、一人勝ちのにやにや笑いをうかべている男であった。
まず、異様なのは、天狗の落し子のように、極端に突出した鼻梁であった。しかし、泥団子をくっつけた、といった形容は、当らぬ。鼻梁自体は、実に立派な形をしているのであった。ただそれが、目や口とおよそ釣合わぬ、途方もない巨きさなのであった。
目などは、むしろ、小さく、丸く、愛敬があった。
からだは、小柄で痩せて、いかにも貧弱であった。
「へっへっへ……、どうも、すまねえな。今夜もまた、おめえがたは、丸裸になるらしいぜ」
なんともげびた笑い声をたてながら、「ホイ、ホイ……」と、小ばかにした掛声とともに、四人の前から、つぎつぎに、銭をひろい取っていた。
どうやら、この小男のために、他の者たちは、ずうっと、取られっぱなしの模様である。
それに、懲りずに、また、はじめて、たちまち、してやられているけしきであった。
と――。
一人が、小男の手がのびて、自分の前の銭をつかんだ瞬間、凄い目つきになった。
小男は、その殺気をあびて、ひょいと、鎌首をもちあげた。
「遊びに、恨みは禁物だぜ、角兵衛」
そう云った。
角兵衛と呼ばれた男は、顔中に、槍傷刀創をつくっている、いかにも、戦場武者崩れの年配者であった。
「てめえの勝ちぶりに、腹を立てねえ者が、あるか！」
「その気持は、わかるがね、しかし、遊びは、遊びよ。おめえのような荒武者に、かっとされては、おちおち、博奕はやっていられねえ」
小男は、ひろいあつめた銭を、じゃらじゃら、わざとらしく鳴らして、胴に巻きつけた汚れ布の中へ、しまった。
「百平太！」
ほかの一人が、小男を、睨んだ。
「てめえは、まさか、手妻を使っているんじゃねえだろうな？」
「なんだと？」
「てめえは、むかし、放下師だった、ときいたことがある

ぞ」
「おいおい、おめえら、いくら、負けつづけたのが口惜しいからといって、あらぬ疑いをかけるのは、止してもらおうぜ」
たしかに――。
小男百平太の方に、やり込める利があった。
しかし、しだいに険悪な空気になって来ると、百平太の巨きな鼻が、四人の目には、なんとも、小憎らしいものに、映って来たのである。こんなばかげた鼻を持っている奴は、仲間を騙して、金をまきあげるくらいの狡猾なまねは、平気でやるに相違ない。そんな腹立たしさが、期せずして、四人の胸中にわいた。
「百平太、銭を、みなにもどせ。てめえが、手妻を使っているかどうか、もう一度、やりなおして、とくと見とどけてやる」
角兵衛が、云った。
「冗談じゃねえ。やりたけりゃ、おれから、借りてもらおうぜ。せっかく勝ったのを、もどすなんて、まっぴら御免だね」
「百平太！　てめえは、たしかに、手妻を使いやがった！」
突如、一人が、呶号して、野太刀をひっつかむと、立ち上った。
「なんだ！　どうしようと云やがるんだ？」
百平太は、他の四人もまた、あきらかに殺意をこめた気色をみなぎらせたのを視て、狼狽を示したが、
「くそ！」
と、恐怖をはねのけて、痩せ肩を張った。
「おれは、手妻なんぞ、絶対に使わねえぞ！　神に誓ってやらあ、神に！」
「笑わせるな！　てめえが神に誓ったら、神様の方が、逃げ出すぜ」
一人が、いきなり、手槍をつかむや、柄で、百平太を突きとばそうとした。
瞬間――百平太は、敏捷な身ごなしで、それをかわしざま、槍をひったくって、とびさがった。
「百平太！　やる気か！」
角兵衛が、せせら笑った。
「てめえらとの仲間づきあいは、もうまっぴらだ。……おい、この百平太は、そう、むざむざ、殺されはしねえぜ」
「ほざくなっ！」
一人が、抜刀するや、青眼にとって、じりじりと、肉薄した。
急に――。
小屋の中は、静かになった。
追いつめられた者の、死にもの狂いの反抗が、いかに凄じいものか、四人とも知っていたからである。
百平太を、たたきのめすだけでは、すまなくなったのである。
肉薄した者も、槍の穂先に、おのが太刀の切先が交叉するや、ぴたっと動かなくなった。

対峙が、いつまでも、つづくかと思われた。
と――。
「待て！」
と、角兵衛が、声をかけた。
「おもてに、人がいるぞ！」
――おもてに人がいる？
他の三人も、また百平太も、信じ難い表情になった。
「おれが、見る！」
角兵衛が、云いざま、土間へ跳んで、戸を蹴り開けた。
瞬間――旋風がとび込むように、黒影が、角兵衛へ、体当りをくれた。
「うっ！」
胸いたを、背中まで、刺しつらぬかれて、角兵衛は、のけぞった。
角兵衛ほどの戦場往来の強者（つわもの）が、みじんの油断もなく、戸を蹴り開けながら、あっけなく、白刃を突き通されたとなれば、これは、いっそ、対手の迅さを、ほめるべきであった。
侵入者は、刀を抜きとって、角兵衛を突きころがしておいて、
「今晩は、山賊がた――」
と、挨拶した。
まことに小莫迦にした振舞いであった。
虚を衝かれた残り四人は、茫然と、痴呆のごとく、棒立った。
「月がいいぜ。満月だ。外で勝負しようか」
侵入者は、また、人を食った言葉を吐いた。
「ほざくなっ！　野郎、どこの馬の骨だ？」
一人が、われにかえって、嚙みつくように、呶鳴った。
「馬の骨じゃねえ。渡り鳥だ」
「なにおっ！」
「ねぐらが、欲しいんだ。お主らを斬ったあとで、ゆっくりと、その炉端で、寝かせてもらう」
「この青二才め！　どこまで、人をなめてやがる！」
一人が、抜き討ちに、躍りかかった。
柿丸は、おそろしく、敏捷なかわしぶりをみせて、ひょいと、おもてへ、にげた。
山賊たちは、どっと、追って出た。
ただ、百平太だけは、何を思ったか、炉端にのこった。
呶号と刃風と、地面をふみ鳴らす音と、そして、濡れ手拭いを振るような人体の斬られる音が、絶鳴を呼んで、つづけざまに、起った。
百平太は、首を縮めて、それを、じっと、きいていた。
おもてが、静かになった。
すっと、土間に入って来たのは、角兵衛を突き刺した若い侵入者ではなく、昏い翳を刷いた牢人者であった。
そのあとから、若い侵入者と、もう一人――若い女が、姿をみせた。
百平太は、女の顔の美しさに、目を光らせた。
夜八郎は、のそりと、板敷きに上ると、

「お前は、なぜ、そこに、のこっている？」
と、問うた。
「へへへ……」
百平太は、殊更に卑屈な笑顔をつくってみせた。
「斬られたくはなかったんでね」
「これから、斬られるかも知れぬぞ」
夜八郎は、云った。
「降参します。この通りに――」
百平太は、両手をつくと、平伏した。
「ひどく、気の弱い山賊だな」
「左様。いまだ、人を殺したことがござらぬ」
「べつに、自慢にはなるまい。おのれが、狡猾に生れついているからではないのか。殺す役目は、他人にまかせて、女や金品を掠めとる――そうではないのか」
「よくおわかりでござる」
「お前のような男の方が、たちがわるいといえるな」
夜八郎は、一歩、出た。
「お、おゆるしを！」
百平太は、懐中から、金袋をつかみ出すと、前へ置き、ずるずるっと、あと退って、平蜘蛛のようになった。
「そうやって、内心、舌を出している――それが、お前の、今日までの処世方法だろう」
「おゆるしを！　何卒、おゆるしを！」
「年貢の納め時だ。覚悟をせい」
夜八郎は、さらに、一歩迫った。
百平太は、顔を擡げて、夜八郎を、視あげた。
「本、本当に、斬ると、いわれるのか？」
「斬る！」
「どうしても？」
「四人の仲間が、あの世の入口で、待っている。お前一人だけ、たすかろうというのは、いささか、虫がよすぎるぞ」
夜八郎は、じっと、睨み下している。
百平太は、またたきもせずに、見つめかえしていたが、
「成程――」
と、合点した。
「たしかに、これまでは、このように卑屈な態度をみせれば、どうやら、生命の安全だけは保て申した。が、お手前様には、通用せぬらしい。……あきらめると、いたそう」
「よい覚悟だ」
「斬って頂きましょう」
百平太は、正座しなおすと、目蓋を閉じて、合掌した。
「念仏は、声をあげて誦す方がよかろう」
夜八郎が、云った。
「勝手でござる。……どうせ、極楽には行けぬ身なれば、これは、恐怖をはらいのけるための方便にすぎ申さぬ」
「よし！」
一瞬――。
炉火を反射して、一刀が、振り下された。
閃光は、旋回して、はねあがった。

百平太は、
「うわああっ」
と、悲鳴をあげて、ひっくりかえった。
仰向けに、板敷きをひびかせた百平太は、わななく手で、両耳を押さえた。
その指のあいだから、みるみる、血汐が噴いた。
二つの耳が、虫のように、板敷きに、落ちていた。
百平太は、激痛に堪えて、仰臥しながら、夜八郎を仰ぎ、
「ど、どうして、耳だけを、斬られたぞっ？」
と、わめいた。
「のぞみとあれば、こんどは、両手を刎ねてくれようか」
「な、なにをっ……、阿呆らしい！」
百平太は、顔中を、くしゃくしゃに歪めて、のろのろと起き上った。
そして、ふたつみつ、大きな喘ぎをみせてから、
「生命だけは、たすけて、下さるんで、しょうね？」
と、たずねた。
「生かしておいても、益にはなるまいが……」
「毒にならんように、お手前様の、家来にして頂きましょう」
「おれ自身が、悪党の部類に属する」
「そ、それなら、それで、役に立ちまさあ」
そう云いながら、百平太は、だんだん、うなだれてゆき、ついに、俯伏してしまった。
意識を、喪ったのである。

「柿丸、手当をしてやれ」
「かしこまった」
柿丸は、百平太を仰向けに寝かせながら、
「途方もない鼻よのう」
と、感嘆した。
夜八郎は、炉端に、腰を下すと、粗朶をくべて、火を大きくした。
梨花が、むかいに坐ると、夜八郎は、ふと視やって、
「そなた、熱があるようだな？」
「いえ……」
梨花は、俯向いて、かぶりを振った。
「かくさんでもよかろう。……横になるがいい」
「はい――」
「親切で申しているのではない。患われては、面倒だから、云うのだ」
「はい……、では、やすませて頂きます」
梨花は、横になると、たちまち、深淵へ落下するような疲労感で、いったんとじた目蓋を、ひらく力も失せた。
柿丸は、手当をしてやった百平太を、片隅へ寝かせておいて、
「さて、――、また、墓穴を掘らねばならぬが……」
と、独語して、土間に降りた。
「すてておけば、けものが、きれいに白骨にしてくれよう」
夜八郎が、冷淡に、云った。

「いや、そういうものではござるまい。生命をすてて、この小屋を提供してくれた御仁たちでござるゆえ、埋めてやらねばなり申さぬ」
柿丸は、土間に仆れている角兵衛の死体をかつぎ上げて、おもてへ出て行った。
梨花は、ふっと、目がさめた。
かなり高い熱が出ているらしく、からだ中がけだるく、手足をうごかすのも億劫であった。
うるんだ眸子（ひとみ）を、そっと移して、夜八郎の姿を、もとめた。
意外にも――。
夜八郎は、炉端に――同じ場所に、依然として、坐っていた。
目蓋を閉じて、まどろんでいる。
坐ってねむることのできる男なのであった。
「……！」
梨花は、まばたきもせずに、夜八郎の横顔を、見つめた。
なぜか……。
その横顔には、淋しい色が、ほのかに滲んでいる。
梨花には、それが、はっきりと、見てとれた。
孤独に育った者のみが、それはみとめ得るものかも知れなかった。
――この御仁も、ひとりさびしく生い育ったのであろうか。

きっと、そうなのだ、と梨花は、自分にうなずいた。
常に、皮肉な言辞を弄し、冷たい態度を持しているが、実は、その心の奥底には、孤独の哀しみを、湛えているに相違ない。
梨花は、その横顔を見つめているうちに、ふっと、泪ぐんだ。
――さびしいおひと！
――わたくしが、そばにいて、なぐさめてさしあげられるものならば……。
梨花は、胸のうちで、つぶやいた。
その時、梨花のまなざしで、ねむりをさまされたように、夜八郎は、双眼をひらいた。
梨花は、反射的に、目蓋をふさいで、ねむったふりをした。
こんどは、夜八郎が、梨花の寝顔を、見下す番になった。
夜八郎は、つと、片手をのばして、梨花のひたいへ、てのひらをあててみた。
「熱が高いな」
夜八郎は、立って行くと、台所の水瓶から汲んで、布を濡らして、もどって来た。
それを、梨花のひたいにあててやり、炉火に、粗朶をくべて、焔を大きくした。
と――。
夜八郎は、梨花のふさいだ眸子から、睫毛を押しあげるようにして、泪の粒が、湧きあがるのを、視た。

——目を覚ましていたのか。
ちょっと、当惑の面持になった。
かけてやる言葉を見出せないままに、夜八郎は、腕組みをした。
感傷というものを、極度にきらう生きかたをして来た夜八郎である。
こうした、夜の静寂の中で、若い女に泣かれるのは、まことに苦手であった。
「……貴方様は、お優しいかたなのですね」
梨花が、つぶやくように云った。
「優しい？」
夜八郎は、梨花を見かえして、けげんな表情になった。
自分という男に対して、優しい、などという言葉を与えられたのは、生れてはじめてであった。
ほかのいかなる言葉よりも、夜八郎を、あっけにとらせ、そして狼狽させた。
「おれが、優しい？」
「はい——」
「どういうのだ？　なんのこんたんから、そんなことを云うのだ？」
「ただ、そう思いました」
「ただ、そう思った？……おれが、慍（おこ）るのを承知で、そんなふざけたことを云うのか？」
「い、いいえ！　わたくしは、ただ、心から、そう思って——」
「止せ！」
夜八郎は、炉火へ、あらたな枯枝を、たたき込んだ。
「おれは、そなたを、犯した。厄介に思っている。いっそ、すて来れば、さばさばしたものを、と後悔しているくらいだ。おれは、おれ自身の心のままに振舞い、正直な言葉を吐いている。ひとつとして、そなたに感謝されるようなことを、して居らぬし、云っても居らぬ。……そなたは、おれが、額をひやしてやったので、おれを、優しい男だ、と思いちがえたのか。親切心からではない。明朝ここを出発する時、熱を出されていては、厄介だからだ。背負うて行くのは、やりきれぬ。歩いてもらいたいものだ」
夜八郎は、喋っているうちに、次第に、烈しい語気になった。
しかし、梨花は、もう怯じなかった。
「わたくしは、ひたいをひやして頂いたので、貴方様が、お優しいかたと、思ったのではありませぬ」
「……？」
「貴方様の、まどろんでおいでの横顔を、拝見しているうちに……、貴方様が、さびしい心をお持ちのかたなのだ、と思いました」
「……」
「ちがって居りましょうか？」
「……」
「ちがって居りましたら、お詫びいたします。……わたくし自身、さびしく育った女でありますゆえ、貴方様のお顔

に、あらわれたさびしい色が、わかります」
「おれは、女に同情されるような生きかたは、して居らぬ。孤独は、おれの好むところだ」
「まどろんでおいでの時は、心の奥にひそめていたものが、お顔にあらわれるのでは、ありますまいか」
「ことわっておく」
夜八郎は、云った。
「女というやつは、いかなる環境に置かれても、おのれの都合のいいような考えを働かせて、おのが座をつくろうとする。そなたは、おれという男を、自分勝手に、解釈して、定めてしまおうとしている。あいにくだが、おれは、ちがう。おれは、気が変れば、そなたを、ここへ、すてて置くことのできる男だ。このことを、ことわっておく。……もう、やすんでくれ。おれも、ねむる」
夜八郎は、ごろりと、横になって、梨花に、背中を向けた。
梨花も、熱のために、もう、眸子をひらいている力はなかった。
……梨花が、ふたたび、目ざめた時は、もう、朝であった。
まだ陽はささなかったが、なかばひらいた戸口から、白い霧が流れ入っていた。
炉火が消えて、冷気が屋内を占めていた。
梨花は、夜八郎の姿が、消えているのに気づいて、はっとなった。
「柿丸殿——」
梨花が、呼ぶと、柿丸は、
「うむっ……」
と、寝がえりうって、
「もう、朝か」
と、起き上った。
「あっああ、あーっ！　よう、寝た」
両手をさしあげて、あくびする柿丸へ、梨花は、不安のまなざしを当てて、
「多門殿の姿が、見えませぬ」
と、告げた。
「ふーん」
柿丸は、ちょっと小首をかしげたが、ふと、炉端に、妙なものがあるのをみとめて、寄って来た。
それは、錦でつくられた日輪模様の旗であった。
「立派なしろものだが、あの御仁が落されたのか？」
「そうだ。あの牢人衆が、落して行った」
百平太が、云った。
柿丸は、ふりかえって、
「おい！　お主は、多門殿が、出て行くのを、見ていたのか？」
「ああ——」
「こやつ、なぜ、わしを起さなんだ？」
「おのれの耳を斬った者を、呼びとめるばかは、あるま

い」
百平太は、こたえた。
そう云われれば、その通りだった。
柿丸は、舌打ちして、梨花をかかえ起すと、
「追わねばならん！」
と背負うた。
「おい、おれも、連れて行ってくれ」
百平太が、たのんだ。
「病人を二人も、連れて行けるか。お前は、勝手に、どこへでも行け」
百平太は、一人とりのこされると、さほど悲嘆した様子もなく、すてられた旗を手に把った。
「これは、将軍の旗らしいが……、どうして、あの牢人が、持っていたのか？」

雌雄

おそろしく巨きな幟であった。都大路の四つ辻のまん中に、立ててある。
この辻へむかって歩いて来る人々は、ずうっと遠方から、これをみとめることができた。
兵火のために、あとかたもなく焼きはらわれたこの地域も、三年と経たぬうちに、あらゆる店が櫛比（しっぴ）して、以前にまさる賑いをみせている。
米、小麦、油、蜜——それぞれ、升や椀に盛られて、売られている。小麦は一斗九升百文、油は一升六十文。値札が貼られているのも、近頃の流行である。
べらぼうに、物価があがってしまったのである。
古着店、道具屋も、多い。古着店には、都をにげ出した公家が、すて行ったのか、売りはらったのか、束帯やら狩衣やら袿やら、はては舞楽衣裳まで、ぶら下っている。道具屋には、大鎧、冑、鉄面、弓具、太刀、槍から、馬具、指物、陣太鼓まで、その気になれば、たちまち侍大将のいでたちが整う光景であった。
こうした都の中心にあたるこの四つ辻のまん中に、突然、途方もなく巨きな幟が、立てられたのである。

織るほどの雑沓の流れを、せき止めたのは、髯だらけの、六尺ゆたかな壮漢であった。
幟とともに、長い床几をかついで来て、これに、悠々と寐そべったのである。
まことに、人を食った振舞いであった。
幟には——
天下第一兵法者・九十九谷（つづらや）左近
天道照覧真剣試合
と、筆太に、記してあった。
つまり、この繁華な辻を利用して、挑戦者をもとめて、名を売ろうとするのであった。
数十人に包囲され、じろじろと眺められながら、肱枕で、目蓋を閉じている。
「往来をふさいでは、ただでは、すむまいの」
「いまに、騒動が起るわさ」
「兵法を売りものにするようでは、名人とは申せまい。ぶざまに負けて、こそこそにげ出すのが落ちではないかや」
がやがやとざわめきたてられながら、壮漢は、まるで、午睡でもしているように、微動もせぬ。
やがて、どこかの武将の麾下らしい騎馬の一団が、この辻へ駆けて来て、これをみとめた。
「横道者が、大層な幟を立てたな」
先頭の士が、笑って、うしろをふりかえると、
「からかってつかわすか」
と、云った。
「止された方が……。討ちすてても、手柄にはなり申さぬ」
「しばらく戦場に出ぬので、髀肉の嘆をかこって居ったところだ」
士は、ひらりと、馬から降り立った。
見るからに強そうな戦場武者が、ツカツカと、近づいて行ったので、群衆は、どっと、どよめいた。
「九十九谷左近！」
思いきった大声が、長床几に寐そべった兵法者へ、あびせられた。
「足利高晴が家中、栗崎左馬之助が、勝負を挑むぞ。起きい！」
しかし、九十九谷左近は、薄目をひらいて、じっと見やっただけで、動こうともしなかった。
「おいっ！　その方、つんぼか！」
栗崎左馬之助は、呶鳴った。
「きこえて居る」
「ならば、さっさと、立てい！　それとも、対手を見て、強いと知れば、狸寐入りして、避ける存念か？」
「その反対だ」
「なに？」
「勝つことがきまっている対手には、起き上る必要はない」
九十九谷左近は、不敵な言葉を、吐いた。
栗崎左馬之助の面上に、みるみる、朱の色が、散った。

「その高言を、この栗崎左馬之助に向って、ほざくのだな」
「左様――」
「うぬがっ！」
栗崎左馬之助は、足利高晴の麾下として、かなり名を知られた、膂力二十人力を自負する豪の者であった。
これほどの侮辱を受けたのは、はじめてであったろう。
陣太刀のくり形をひっ摑んだ左馬之助の左手が、ぶるぶるっ、とふるえた。
次の瞬間――。
「くらえっ！」
大喝もろとも、抜き討ちの一閃を、あびせた。
ばああん、と烈しい音が、はじけた。
ま二つになったのは、長床几であった。
はね起きて、躱した左近の速影は、誰の目にも、とまらぬくらいであった。
左近は、一間のむこうに立って、左馬之助が、長床几を両断して、よろめくのを、眺めた。
左馬之助は、向きなおって、ひとつ、「ふうーっ！」と熱い息を吐いた。
左近は、にやにやして、
「それがしの申したこと、いつわりではあるまい」
と、云った。
「ま、まだっ――わ、わからぬっ！」
左馬之助は、喚いた。
「わからぬとは？」
左近は、眉宇をひそめて、
「これでまだ、腕の差が、わからぬというのか？」
「そうだっ！　わからぬぞっ！」
左馬之助は、絶叫した。
栗崎左馬之助としては、こんなぶざまな失敗をやって、すごすごと退くよりは、死んだ方がましであった。
蝟集した見物人の目が、ぜんぶ、自分をわらっているような気がした。
生れてはじめて、なんとも堪え難い屈辱をあじわったのである。
「抜けっ！　尋常の勝負っ！　勝負っ！」
左馬之助は、吼えたてるや、陣太刀を、大上段にふりかぶった。
九十九谷左近は、両手をダラリとたらしたなりで、
「ちと、しつっこいな」
と、呟いた。
この時、一人の男が、人垣をかきわけて、ひょいと、首をつき出し、
「ほっ！　やり居る！」
と、愉しそうに、にたっとした。
両耳が、なかった。傷あとがひきつれている。
耳というものは、ある時は、いかにも無駄なしろものみたいであるが、こうして、いざ無くなってみると、面相のかたちがすっかり変ってしまい、いかにも滑稽である。

百平太は、あの森林地帯から、どうやって脱出したか、都へまぎれ込んで、賽ころひとつを元手に、餌あさりをしているらしい。
あれから、もう三月が過ぎている。
百平太は、ちらっ、ちらっと、左近と左馬之助を見比べたが、
「ちえっ！」
と、舌打ちした。
「猟師に、案山子が、棒をふりあげているようなもんだ。話にならねえ」
即座に、どっちが、強いか判断できたのである。
百平太は、止せばよいのに、よけいなお節介をやきたくなった。
「おーい！　そこの騎馬のお武家衆。お前さんがたの仲間は、えらそうに、大上段にふりかぶっていなさるが、いっぺんに斬られてしまいますぜ。助太刀しなけりゃ、駄目じゃねえか」
左馬之助の耳には、そんな言葉は、全く入らぬようであったが、左近は、悠々たる余裕ぶりを示して、
「くだらん口をきくな、耳無し！」
と、叱りつけた。
「へん！　そうじゃねえか。勝つにきまっているんじゃねえか。いっそ、あの五六人もむこうにまわして、派手に、やらかしてもらいてえや」
百平太は、大声で、云った。
その時、左馬之助が、満身からの懸声を噴かせて、斬り込んだ。
左近は、そのわきを、すりぬけて、さっと、数尺をすべり出た。
どのような迅業をつかったか。
左馬之助の両手から、陣太刀は、はなれて、空中へ、舞い上っていた。
その陣太刀は、ちょうど、左近の頭上へ、ひらひらと、落ちて来た。
左近は、ひょいと、つかみとって、
「得物がなくなっては、勝負になるまい」
と、いかにも無造作に、左馬之助へ、ほうり返した。
群衆が、どっと、笑いだした。
その中でも、百平太の、ひっひっひっ、という下卑た笑い声が、いちばん高かった。
左馬之助の顔面は、悲惨なまでに、蒼ざめていた。
左馬之助は、援助でも乞うように、ちらっと、うしろの朋輩をふりかえったが、突如、野獣のような唸り声をしぼると、左近めがけて、滅茶滅茶に、斬りかかった。
狂人そのもののあばれ様であった。
そうでもしなければ、この重なる屈辱を、どうしていいか、わからなくなったのであろう。
左近の方は、にやにやしながら、その無謀太刀を、とびかわし、すべりよけていたが、そのうちに、
「いい加減にせぬかっ！」

凄じい一喝をあびせた。
一瞬、左馬之助が、ふりかぶったまま、動きをとめた。
左近は、その隙をのがさず、抜く手もみせぬ迅さで、白い閃光を、左馬之助の胴へ送った。
峰撃ちであった。
左馬之助は、一本の棒になったように、まっすぐになったままで地ひびきたてた。
左近は、刀を腰に納めると、左馬之助の朋輩たちに向って、
「お主らのうちには、報復したいと思う御仁は、どうやらいないらしい。ならば、この猪殿をつれて、さっさと退散されるがよかろう。……おっと、そうだ、忘れて居った」
昏倒した左馬之助にしゃがみかかると、懐中をさぐって、金袋をひき出した。
「これは、当方の勝代として、頂戴しておく」
そう云っておいて、大股に、酒を売る店へ、歩いて行った。
この姿を見送って、群衆は、夢からさめたように、一時にさわぎたてた。
こんな途方もなく強い兵法者を、見たことがなかった。
幟に書いてある文句は、いつわりではなかったのである。
「まったく、強すぎるぜ、あン畜生っ！」
百平太は、かぶりを振ってから、歩き出した。
――あんなに強い奴を味方につけて、なにか、ひと儲けする仕事はねえかな？
そんなことを、内心、考えながら、辻を抜けて、とある道すじを、ぶらぶらと行く。
やがて、一軒の武具屋の前を通りすぎようとして、何気なく店内を見やった百平太は、
「おやっ！」
と、目を剝いた。
とっさに――。
百平太は、くるっと、踵をまわすや、辻へむかって、とぶように駆けもどって来た。
九十九谷左近は、酒店の床几に腰を据えて、大きな木椀になみなみと盛ったのを、飲みつづけていた。
「天下第一の兵法者殿！」
百平太は、大声で、呼びかけた。
左近は、血相を変えている醜面の男を、じろりと視た。
「お、お願いがござる！」
「なんだ？」
「お手前様の剣術を、買いとうござる！」
「いくらで、買う？」
「こ、これだけ――」
百平太は、懐中から、鹿皮で作った袋を、ひき出すと、そっくり、左近に手渡した。
左近は、紐を解いて、てのひらに、受けてみた。
ざらざらと落ちたのは、銅銭ばかりであった。
「それがしの業前を買う金子にしては、チト足りぬな」
「いま、それだけしか、持ち合せがないのでござる。あと

で、欲しいと申されるだけ、つくり申す」
「それがしに、押込み強盗の手伝いでもやらせるつもりか？」
「そ、そうではござらぬ。仇討を、つかまつりたい」
「仇討？」
「左様――、父の敵を」
「嘘をつくな！」
左近は、笑った。
「父の敵を討つような、殊勝な面など、しては居らぬ」
「そ、それは……、しかし、ともかく、仇討を――」
「わかった。察するところ、貴様のその両耳を殺ぎ落した奴に、復讐したいのであろう。そうであろう？」
「ご賢察！」
百平太は、正直に叫んだ。
「何者だ？」
「何者とも判り申さぬが……、ともかく、滅法に強い牢人者でござる」
「それがしは、これまで、途方もなく強いとか、はかり知れぬ腕前とか、噂に高い使い手と、立合ったが、いずれも、程が知れた輩であった。貴様ごときが、銅銭五六枚で、それがしを買って、勝負させるような対手なら、見ずとも、わかる。立去れい！」
左近は、金袋を、百平太に、投げかえした。
「まことに強いのでござる！　嘘いつわりは申さぬ！　兵法者なれば、断じて、たたかいたくなる対手でござる！」
百平太は、必死であった。
「うるさいっ！　まごまごして居ると、貴様の首を刎ねるぞ！」
左近は、一喝した。
思わず、とびさがったとたん、百平太は、
「あ！　あそこへ来た！」
と、指さした。
左近は、百平太が、指さす方へ、視線を向けた。
ゆっくりと歩いて来る牢人者を、一瞥したとたん、左近は、急に、鋭くひきしまった表情になった。
百平太は、その様子に、
――しめた！
と、にやりとした。
「彼奴、いかがでござる？　立合うに足りる男でござろうが――」
「うむ！」
左近の双眸が、妖しいまでに光った。
歩いて来た牢人者の姿に、みじんの隙もないのを、左近は、みとめたのである。
「お立合いなさるか？」
「むこう次第だ」
左近は、こたえた。
「かしこまった！」
百平太は、走って、その前に立ちふさがると、
「多門夜八郎殿！」

と、大声で、呼びかけた。
夜八郎は、例の暗い翳を刷いた無表情で、百平太を視かえした。
「耳無しか。しぶとく、生きのびたようだな」
「遺恨をはらさんと存ずる」
「白昼、堂々と名のりかけるとは、お前らしくないぞ」
「それがしは、到底お手前の敵ではござらぬ。されば、天下第一の兵法者を、やとって、遺恨をはらす存念でござる」
「成程——。その天下第一とやらは、どこにいる？」
「あそこに——」
百平太は、酒店を、指さした。
夜八郎は、左近を視た。
左近の眼光が、尋常ではないのを、みとめながら、夜八郎は、眉宇もうごかさず、
「強そうだな」
と、呟いた。
「強うござるとも！　あの幟を、見られい」
夜八郎は、視線をまわして、幟に記された文句を読んだ。
「耳無し——」
「それがしには、百平太という、立派な名前がござる」
「悪事でよごれ果てた名前だろう。耳無しの方が、よほど、いいぞ。……おれは、売名兵法者などと、立合う興味はない」
夜八郎は、云いすてて、歩き出した。
「挑戦をさけるとは、卑怯！」
百平太は、呶鳴った。
夜八郎は、蠅がたかったほどにも感じない態度で、行こうとした。
「待たれい！」
左近が、酒店から出て来て、呼びとめた。
夜八郎は、立ちどまって、首だけまわした。
「九十九谷左近、ひさしぶりで、真剣試合の闘志を起し申した。立合って頂きたい」
「あいにくだが、おれは、兵法者ではない。剣に、生甲斐など托しては居らぬ」
夜八郎は、こたえた。
「兵法者ではないと申されるが、その五体に、一分の隙もないのは、兵法修業を積んでいる証拠でござろう」
「山野に起き臥しする流浪人が、おのが身を守るすべを、いつの間にか、備えていても、べつにふしぎはあるまい」
「その業を観たいと念ずるのが、兵法者の貪欲と申すもの」
「ことわる！」
「多門夜八郎といわれたな」
「それが、どうした？」
「お主が、あくまでさけようとされるなら、やむを得ぬ。あの幟を立てたところに、高札を立て申す」
「……」
「日時と場所を指定し、もし現れぬにおいては、再び高札

をかかげて、天下に、その臆病を嘲罵いたす」
夜八郎は、一瞬、眉目に、殺気めいた気色を掠めさせたが、無言で、左近からはなれた。
「ちえっ！」
百平太は、いまいましげに、舌打ちした。
「畜生っ！　野郎は、太刀さばきに、迷いでも、生じていやがるんだな」
「そうではあるまい」
左近は、その後姿へ、じっと、視線をつけながら、
「あれは、それがし以上に、闘うために生れて来たような人物と、みた。ただ、今日は、なにやら、別の思念が、胸中にあるように、察しられた。その思念が、闘志をおさえたに相違ない。……高札を立てておけば、必ず、やって参る！」
「本当に、そうお思いですかい？」
「確信する」
「よーし！　しめた！　千人の見物人を集めて、その前で、斬り殺されるざまに、手をたたいてやるぞ」
「百平太、ことわっておくが、それがしが、勝つとは、限らぬぞ」
「冗談じゃねえ。お手前様が、負けるはずが、あるものですかい」
「いや、勝敗は、五分五分と思われる。毛ひとすじの差で、どちらかが、仆れる。それが、それがしか、あの仁か、神のみぞ知る」
「心細いことを、云わねえで頂きてえ。お手前様が負けたら、おれは、いったい、どうなるんだ？」
「お前も、あの仁に、斬られるだろうな」
「まっぴらだね。……おねがいでござる！　どうぞ、勝って下され。おれは、お手前様が欲しいだけ、黄金をかきあつめて参りますぜ。おねがいします！」
百平太は、両手を合せた。
左近は、高笑いした。
「お前の正直さは、気に入った。せいぜい、金子を盗んで参れ。柳町で、酒池肉林といこう」

煩悩花

多門夜八郎は、それから一刻あまりのち、宇治川から、木幡里に入って、竹の小藪に沿うた細径を、辿っていた。

やがて――。

古びた山門の前に立つと、暗い視線をあげた。

山門にかかげられた「天心山」と雄渾に記された額が、まっ二つに割れている。

七年前、夜八郎が、地面を蹴って、跳び上りざま、斬ったのである。

額は、そのまま、傾いて、支えあって、かかっている。

「……」

夜八郎の蒼白い、殺（そ）げた頬が、ぴくりと痙攣した。

山門は、無法の振舞いをなした者が、再び訪れるのを、待っていたようである。

夜八郎は、山門をくぐった。

ここは、都にある無数の寺院の中でも、指に折られるほどの古刹とおぼしい。

広い境内は、白く、美しく掃ききよめられている。

宝殿、法堂、祖師堂、伽藍堂、禅悦堂など、いずれも、その古びたすがたを、互いに、調和させ、密林の山を背景にして、いかにも、古刹の気品をたたえている。

境内の中央に立った夜八郎は、視線を一巡させてから、

「変っては居らぬ。何も、変っては居らぬ」

と、独語した。

七年前の厳冬――。

夜八郎は、七色の糸で屋根を美しくふいた糸毛車を、牛ならぬ騎馬にひっぱらせ、その騎馬を鞭打って、この山門を、駆け込んで来たのであった。

そして、追跡して来た北面の武士三名を、境内で、またたく間に斬り仆したものであった。

夜八郎が、最後の一人を地に匍わせた時、凄じい一喝が、あびせられた。

枯木にも似た老僧が、杖をついて、立っていた。

「荒れ古びたりとはいえ、当寺は、夢窓国師が開基になる五山随一であるぞ！　解脱（げだつ）門に通じる菩提路上にあって、殺生の暴虐をなすとは何事ぞ！」

睨みすえられて、夜八郎は、一瞬ひるんだが、

「くそ！　邪魔をすれば、桑門といえども、容赦はせぬっ！」

と、青眼につけた。

「青二才！　愚禿が、斬れるか」

老僧は、微笑した。

「案山子を斬るよりも、造作はないぞ」

「よし、かかって参れ」

「斬るぞ！」

夜八郎は、じりじりと、迫った。

老僧は、静止相をそのままに、微動もせずに、夜八郎の迫るにまかせた。

夜八郎の長身から、凄じい殺気が噴いた。

夜八郎は、それまでに、正しい剣の修業などはしていなかった。

ただ、おそるべき天禀をそなえているままに、無法無頼の日々を送って、かぞえきれぬほど人数を殺傷していた。

いわば、荒武者が、合戦の場数を踏むうちに、十人の敵に包囲されても、余裕をもって、血路をひらく業を身につけるように、夜八郎は、ひとたび白刃をかざせば、いかなる強敵であろうとも、これを討ちとる凄じい闘志が燃えたつのであった。

恐怖というものを知らぬ不死身の強さが、夜八郎を、それまでの無数の争闘に、勝たせつづけて来たのである。

いわば、神がかりにも近い自信であった。

枯木にも似た老僧を、ま二つにするのに、なんの造作があろうか。

じりじりと、肉薄した瞬間、しかし、夜八郎の目に、どうしたことか、その白衣の痩姿が、にわかに、巌（いわお）のように、巨きなものと化したのである。

夜八郎は、

――くそ！

とばかり、全身から、凄じい殺気を噴かせた。

次の一瞬、

「えいっ！」

と、斬りつけた。

その一閃の白刃が、おのれの双手からはなれて、宙へ飛ぶのに、夜八郎は、愕然と、棒立った。

細い篠竹の杖に、あっけなく、太刀をはねとばされたのである。

信じ難いことが、起ったのである。

老僧は、もとのままの姿勢で、同じ地点に立っている。

「斬れなかったの、若い衆？」

老僧は、微笑した。

「おのれは、なんの化身だ？」

夜八郎は、叫んだ。

「化身に見えるか。おのが頭脳が狂っていることに、気がつくがいい」

老僧は、云いすてておいて、糸毛車に寄った。

中には、猿ぐつわをかまされ、手足を縛られた上﨟が、気を失っていた。

「若い衆、この姫君を、どこから盗んで参ったな？」

「陽明御殿からだ」

「ほう――それは、大層な館から、盗んで来たものだ」

陽明御殿とは、近衛家を称する。

関白太政大臣になる摂家である。

「この姫君は、近衛殿の御息女かな？」

「ちがう。摂州の水無瀬（みなせ）家から近衛の次男に嫁入りして来たむすめだ」

「すると……、お許（こと）は、婚儀の席から、盗んで参ったのか？」
「そうだ。おれは二年前から、惚れていたのだ」
夜八郎は、胸を張った。
老僧は、しばし、夜八郎の顔を、凝視していたが、
「お許は、足利一門の生れだの？」
と、問うた。
「そんなことは、どうでもいい」
「どうでもよくはない。足利一門の面貌の特徴は、尊氏殿以来、その大耳にある。お許の耳は、あきらかに、それだな。……あるいは、公方の職を襲う公達として、生れたのではないのかな？」
「うるさいっ！　おれは、このむすめが、欲しいだけなのだ！」
「水無瀬家の姫君を妻にせんとする勇気はたのもしいが、その手段がいやしい。お許が、将軍家のおん曹子ならば、ほかにとるべき手段はなかったかの？」
「おれは、名門の、家柄の、地位だ身分だ、と空威張りする長袖族が、大きらいだ。おれは、おれだ！　おれは、おれ自身の力で、生きるのだ！」
喚きたてる夜八郎に、老僧は、憐憫のまなざしをそそいだ。
「お許が、この姫君を、おのが腕に抱く資格を得るまでには、なお、数年の修業が要ろう」
「おいぼれ！」
夜八郎は、遠くへ落ちた白刃へ、走って、つかみとるや、再び、猛然と、斬りつけたが……。
眉間に、矢のごとく、落ちた杖の一撃に、あえなく、昏倒してしまった。
意識を、吹きかえした時、老僧の姿も、水無瀬家の姫君の姿も、境内から、消えうせていた。
夜八郎は、満腔の無念をはらすすべもないままに、山門にかかげられた額を、両断して、立去ったのであった。
あれから、七年の歳月が流れすぎている。
再び訪れまい、と思っていたこの古刹へ、夜八郎は、足をはこんで来た。
どうして、おとずれたのか、自分でも、わからなかった。
都へ舞い戻って来たのも、あの時以来である。
漂泊の七年間に、夜八郎は、剣を把る腕を、鍛えあげていた。といって、あの老僧と、再び闘う意志はなかった。
老僧は、さらに老いているであろう。あるいは、もう、この世の人ではないかも知れない。
ただ、日本中を、さまよい歩いているあいだ、夜八郎の脳裡では、老僧の姿が、しだいに、なつかしいものになっていたのである。
陽明御殿から奪って来た水無瀬家の姫君のことなど、はるか遠い、無縁の存在になっていたにも拘らず、老僧だけが、なぜか、記憶の中で、ひときわ鮮やかに、生きていたのである。
さりとて、再会したいという思いは起きなかったのだが

……。
――おれは、やはり、あの老僧に、会いに来たようだ。
夜八郎は、おのれに、云いきかせた。
まっすぐに、方丈に足をはこんだ夜八郎は、玄関に立って、案内を乞うた。
若い納所が出て来た。
「御住持は、ご健在であろうか？」
「昨秋来、病牀に罷り在りますゆえ、どなたとも、ご面晤の儀は――」
「左様か――。では、こうお伝え頂こう。七年前、水無瀬家の姫を拉致した無法者が、たずねて参ったが……、姫の消息をご存じならば、お教え頂けまいか、と。……姫の消息が、わかれば、ただ、それだけで、満足いたす」
「しばらく、お待ちを――」
納所は、奥へ入って行ったが、すぐに、出て来た。
「会おう、と申されて居ります。お通り下されませ」
「会って頂けるのか。忝けない」
そこは、三十畳以上もある広い座敷であった。
その中央に、小さく牀がのべられていた。
人が寝ているとは思えぬくらい、掛具は、平べたくなっていた。
枕にのせている首は、宛然、木彫の像のようであった。
夜八郎が、距離をとって、正座し、挨拶すると、枯れはてた首が、ゆっくりと、こちらへまわされた。
その双眸だけが、生きて、光があった。
しばらく、じっと、夜八郎を、見つめていたが、やがて、微かに口をうごかした。
「七年の歳月は、無駄には、流れなかった、とみえる」
呟くように、そう云った。
「心身とも、未だ修業は、成って居り申さぬ」
夜八郎は、こたえた。
「成らぬ、と慙じる精神を、お手前は、持った」
「……」
「いや……、死にぞこないの老いぼれが、説法でもあるまい」
老僧は、視線を天井に向けた。
「愚禿は、お手前に、わびなければならぬ」
「それがしに？……それは、どういう――？」
夜八郎は、眉宇をひそめた。
「水無瀬家の姫君のことじゃ」
「……」
「お手前は、あの時、むりやりに、拉致したつもりでござったろう。いやがる姫君を、縛って、掠奪した、と思って居られたな」
「……？」
「ちがった。……姫君は、近衛家の次男との婚儀には、死ぬ思いであった由」
「なに！」
夜八郎は、愕然となった。
老僧は、その枯れた木彫のような小さな貌に、ほのかな

微笑を刷いて、夜八郎を、視た。
「姫君は、お手前が、出現するや、救いの神、と悦ばれたそうな」
「まことですな？」
「姫君ご自身の口から、愚禿は、きかされた。……お許は、姫君とは、以前からの知りあいでござったのじゃな？」
「左様――」
「姫君は、お許が、突如、出現いたすや、夢ではあるまいか、と心がおどった由――」
「……」
夜八郎は、茫然となった。
あの夜のことが、まざまざと、脳裡によみがえって来た。
近衛邸へ侵入した夜八郎は、天井裏をつたって、姫の控え部屋へ、とび降りたのであった。
とび降りざまに、燭台のあかりを消したが、もしその時、姫の表情を見とどけておけば、あのような乱暴な拉致のしかたをせずにすんだのだ。
夜八郎は、部屋を闇にしておいて、
「多門夜八郎、姫に、想いを寄せて居り申す。近衛の莫迦息子などに、そなたをくれるわけに参らぬゆえ、うばって行き、それがしの妻にいたす」
そう宣告するや、矢庭に、猿ぐつわをかませ、手足をしばったものであった。
姫に口をきくいとまも与えなかったことが、いまにして、痛恨となる。
もし、姫に口がきけたならば、身柄を掠奪されることが、どんなに、うれしいか、夜八郎に告げたはずである。
おのれが、おそるべき悪業をなしている、という心のあせりが、全く一方的な行動を夜八郎にとらせてしまったのである。
夜八郎は、猿ぐつわをかませ、手足をしばったのみでは気がすまず、当て落して、死人のように無抵抗なものにしておいて、近衛邸から、はこび出したのであった。
あらかじめ、糸毛車を盗んでおいて、それに押し込んで、牛のかわりに、駿馬をつけて奔り出した。
糸毛車の雑色が、それと気づいて、急報したので、激しい追跡を受けることになったのだが、夜八郎は、いやがる姫を無理無体に強奪したと思い込んでいたため、あの結果を招いてしまったのである。
もし、夜八郎が、姫のまことの心を知っていたならば、おのずから、逃亡の方法も、変っていたに相違ない。
なぜ、あの時、闇の部屋で、姫の心を、ききだす時間を持たなかったのか。
もとより、そうなっていたならば、夜八郎自身の人生も、別の道を歩むことになったであろう。
なんという軽率であったろう。
たしかに――姫は、なんの抵抗も示さなかったではないか。
夜八郎は、ふかくうなだれたまま、微動もしなくなった。
後悔が、千本の針となって、全身を刺している。

それに堪えていることが、姫への詫びになっていた。
夜八郎は、ようやく、顔をあげた。
「姫は、いま、何処に？」
老僧は、その問いに、しばらく、こたえなかった。
夜八郎は、待った。
老僧は、ようやく、口をひらいた。
「姫は、墓地に、ねむっている」
「墓地に！」
夜八郎は、心も身も、冷たくこわばるのをおぼえた。
「姫は、この寺で、三年すごされた。それから、燭台の灯がしだいに細くなって、消えるように、この世を去られた。……姫は、お許が、ここへ、やって来るのを、毎日、待っていた模様であった。ひと言も、口には、されなんだが、お許が、現れるのを、唯一の希望にして、消え細ろうとする生命を、一日でも一刻でも、保とうと、努力されていた」
「……」
「お許は、ついに、現れなんだ。……姫は、亡くなる日の朝、枕元に坐った愚禿に、世話になった礼をのべられたのち、多門夜八郎殿がもし参られた節には、わたくしが、感謝しながら逝った、とお伝え下さい、と遺言された」
「……」
「ままならぬ浮世のさだめに、すこしもあらがわずに亡くなられた姫の顔は、安らかで、この上もなくけだかいものであった」
「……」
「お許に、見せたかった」
老僧は、長い話に疲れて、目蓋を閉じた。
納所が、小声で、
「お墓へ、案内申上げます」
と、うながすまで、夜八郎は、茫然と、虚脱したように、坐っていた。
広い墓地の南隅に据えられた小さな墓碑は、もう四年の歳月を経た色をつけていた。
風もなく、陽の明るい墓地には、鳥のさえずりもきこえず、森とした静寂を保っている。
凝然と、墓の前に佇立して、夜八郎は、もう悔いさえも消えて、淡い虚無感の中にいた。
あの美しい姫が、この一基の墓碑と化している。
そのことに、悲しみや怒りをおぼえるかわりに、
――無常とは、これか。
とおのれに問う、なかば痴呆の状態を迎えていたのである。
納所が、背後で、ひくく、誦経をはじめたので、夜八郎は、われにかえって、あか桶から、水を汲んで、墓碑にそそぎ、合掌した。
合掌をつづけているうちに、姫の声が、きこえて来るような気がして来た。
夜八郎が、その前半生に、はじめて、おぼえる菩提心であった。

夜八郎は、まぎれもなく、将軍足利義晴の子であった。

但し、義晴が、その家臣美濃辺某の妻を、むりやり、手ごめ同然に、犯して生ませた子であった。

足利義晴は、京を追われたり、また攻め戻って来たり、いくたびも同じことをくりかえしている不運な将軍であった。

したがって、わが子が、どの女の腹から生れたか、知るいとまさえもなかった。

夜八郎自身も、母のふところに抱かれた頃から、兵火に追われて、転々とした。

物心ついた頃は、相国寺にいた。その時、すでに、母は亡かった。

やがて、相国寺鹿苑院が炎上して、夜八郎は、一人の武者に背負われて、遁れた。そして、近江坂本に在った父義晴に、はじめて、対面させられたが、それは、夜八郎の心を傷つける効果しかなかった。

義晴は、夜八郎をつれて来た武者から、

「和子様にございます」

と、告げられたが、じろっと一瞥しただけで、

「下げろ」

と、命じたことだった。

義晴は、おのれに叛いた武将らを、討伐することに躍起になっていて、見知らぬ幼児をつれて来られても、わずらわしいだけであった。

夜八郎が、人間不信の孤独感を胸に抱いたのは、その時——八歳の日からであった。

十歳になってから、夜八郎は、細川高国にあずけられ、高国が、三好勢と闘い、摂津の伊丹城を攻めたり、池田城を抜いたりした陣中で、育っていった。

やがて、高国は、摂津広徳寺で自殺した。

その際、高国は、夜八郎に、

「もののふの最期のさまを、とくと見とどけておくがよい」

と、云って、凄絶な割腹の状況を、目撃させたのである。

十三歳の少年にとって、これは、あまりにも、強烈な衝撃であった。

夜八郎の人となりは、このようにして、将軍の子らしからぬ逆境の中での、おそろしい経験をあじわわされつつ、成ったのである。

夜八郎が、その本名義澄をすてて、多門夜八郎と名のって、牢人の生涯を送ろうと、心にきめたのは、十五歳の元服の時であった。

左様——。

夜八郎は、まさしく、野性の若者として、それからの数年間、あばれまわった。

将軍の子のおもかげなど、全くなかったのである。

今日——多門夜八郎は、漂泊の牢人者以外の何者でもない。

亡き人をとむらう菩提心さえも、いまはじめて、心に生んだのである。

納所の誦経が、おわった。

夜八郎は、われにかえった。

ふと、墓碑のかたわらに、咲いている早春の小花へ、目をとめた。

はかないほど、純白な薄い花びらであった。

「これは、なんという花であろうか？」

夜八郎は、指さした。

「煩悩花と申します。墓地にしか咲かぬ花なので、そう名づけられているのでございましょう」

「煩悩花か——」

夜八郎は、つぶやいた。

——姫の墓のかたわらに咲くに、ふさわしい。

夜八郎は、感傷を、胸のうちから、はらいすてると、方丈へもどって来た。

枯木のような老僧は、枕辺に端坐した夜八郎へ、べつに目蓋をひらこうとはせず、

「姫の霊は、お許の祈りに、応えたであろうかな？」

と、問うた。

「いや、べつに——」

夜八郎は、老僧の木彫のような顔を見下して、

——どういう意味か？

と、いぶかった。

「それでよい。……姫の霊は、いま、やすらかに、ねむっているのであろう」

「霊魂などというものが、この世に存在するとは、思わぬが……」

「左様さの……、あるといえばあるし、べつに、霊魂があることを、信じなければならぬ心境には、ないであろう」

「御坊——」

夜八郎は、語気をあらためて、

「七年前、御坊は、それがしの剣を、苦もなく杖で、払われたが……、あれは、兵法の修業による手練であったか、うかがいたい」

と、たずねた。

老僧は、目蓋をうすく、ひらいて、夜八郎を視た。

「愚禿は、兵法の修業など、やったおぼえはない」

「すると、禅の修業による会得であろうか？」

「会得と申せば、面はゆい。……ただ、お許の剣気を、こちらの心に映してみたまでのこと——」

「剣気を、心に映す？」

「わからねば、それでよい。いずれ、わかろう。それよりも、お許は、七年前とは、比べもならぬ強者になっているようじゃが……、あれから、多くの人命をあの世へ送ったのであろう」

「……」

「それで、いまだ、なんの罰も蒙らずに、生きていることは、よほど、業力が強いと申せる。……なろうことなら、その業力を、善行に使ってほしいものじゃな」

「……」

夜八郎は、黙して、腕を組んでいるばかりであった。

剣、その手に

三日すぎた。

そのあいだ、夜八郎は、食事と厠に立つほかは、本堂で、微動だにせぬ坐禅を組んで、すごした。

べつに、老僧に、すすめられたからではなかった。

自分でも、説明のつかぬ、なんとはなしに、そうしてみたくなっただけのことであった。

夜も、結跏趺坐の姿勢で、ねむった。

山野を起き臥しした身には、それは、大した苦痛ではなかった。

四日めの朝が、明けるや、夜八郎は、本堂を出て、南隅の井戸端に行き、素裸になって、冷水をあびた。

いかにも、悟りをひらかん、としてのふるまいに似ていた。

食膳に就いた時、心身がさわやかになっていたならば、おのずと、悟ったような気分にもなったろうが、夜八郎は、ただ、空腹であったにすぎない。

給仕をする納所は、箸をとりあげた夜八郎を見まもって、

「いよいよ、勝負に対する心構えが、おできになりましたご様子」

と、云った。

「勝負？」

夜八郎は、不審の視線を、返した。

「勝負とは？」

「おかくしになることは、ありませぬ」

「べつに、何も、かくしては居らぬが……、勝負とは、何であろう？」

「この三日間のご精進は、九十九谷左近殿と、雌雄を決する心構えをつくられるためのものではありませなんだか？」

「いや――」

「はて？」

こんどは、納所の方が、いぶかしい表情になった。

「昨日、托鉢に参り、行幸大路の辻にて、九十九谷左近殿が、お手前様に、勝負を挑む高札を、覩て参りました」

そう告げられて、夜八郎は、合点した。

「たしかに、あの兵法者は、そんなことを申していたが……」

「お手前様は、お受けにならぬわけには、参りますまい」

「と申すと？」

「もし、これを避けるに於ては、天下にその臆病を嗤うであろう、と附記してありました」

「それがしは、剣をもって生きる兵法者ではない。臆病者とわらわれても、一向にさしつかえはないが……」

「そう仰言るなら、強いて、おすすめはいたしませぬが、

あの高札は、万余の人々が読むのではありますまいか」

「多門夜八郎の名が、売れた以上は、あとへひけまい、というわけか」

夜八郎は、笑った。

同じ時刻――。

宇治川沿いの道を、男女二人の旅人が、辿っていた。

市女笠をかぶった女人は、馬の背に腰かけ、男は、そのたづなをとっている。

多門夜八郎をさがして、山野を越えて来た梨花と柿丸であった。

柿丸の風体は相変らずであり、その顔つきも、二十歳の健康な表情を保っている。

それにひきかえて、市女笠の下の梨花のおもては、いたいたしいまでに蒼ざめていた。

あの日以来、梨花のからだは、その疲労からのがれることができずにいるのであった。微熱も出ていたし、めまいにもおそわれつづけていた。

もし柿丸という親切な若者が、つき添っていなければ、すでに、梨花の生命の灯は消えてしまったに相違ない。

柿丸は、まるで、こういう役を勤めるために生れて来たような若者であった。

寺や神社の片隅を借りて、三日とか、五日とか、静養するくらしをつづけながら、京の都へむかって来たのだが、そのあいだ、柿丸は、ただの一度も、世話することが面倒になったそぶりなど見せなかった。

梨花が喰べたいものを、きき出して、必ず手に入れて来たし、梨花のその日の気分を看て、花を採って来たり、そっと一人にしておいたり、あるいは、子供たちを多勢寄せ集めて、にぎやかに遊ばせたり――いろいろと、なぐさめる方法を考えた。

――この世に、こんなに、親切なひとがいるものであろうか！

梨花は、いくど、その優しい心づかいに、泪ぐんだか知れなかった。

柿丸は、決して、親切を押しつけては来なかった。何気ないように振舞って、それが、みんな、梨花につくしていることになったのである。

「京へ上ってみなされぬか。都のにぎわいが、気分をかえてくれ申そう」

柿丸は、そういうすすめかたをしたが、夜八郎の消息がわかるかも知れぬことと、良い医者に梨花のからだを診せることが、心にあったからに相違ない。

梨花は、すぐ、柿丸の心がわかって、

「参ります」

と、こたえたのである。

かなり遠い道中であったが、柿丸がつき添っていてくれる限り、梨花は、なんの不安もなかった。

からだの加減については、梨花自身よりも、柿丸の方が、よくわかっているくらいであった。

いつの間にか――。

梨花は、多門夜八郎にめぐり会うことだけを、生甲斐にしていたのである。
　夜八郎が、会った時、どのような態度をみせるか——そのことは、すこしも考えていなかった。
「すこし、やすまれるか」
　柿丸は、馬をとめた。
　梨花が、小松の根かたに腰を下すと、柿丸は、すぐに、川べりへ降りて行って、白い布を濡らして来た。
「すみませぬ」
　梨花は、それで、顔やうなじを拭いた。
「陽のあるうちに、都へ入れます」
　柿丸は、云った。
　いつも無表情で、滅多に笑顔を見せぬ若者であったが、それは、孤独で育ったせいであろう。
　梨花には、かえって、その方がよかった。
「梨花様は、都で、たずねたい御仁がありますか？」
「いえ、べつに……、知り人はありませぬ」
　こたえてから、梨花は、急に不安な面持になり、
「あの……、わたくしは、貴方の親切にあまえて、路銀のことをききもいたしませんでしたが、都に入れば、またなにかと、お金が要ると思いますけど——？」
「それは、心配無用でござる。その日をすごす金子など、どうにでもなります」
「でも、わたくしを、良い医者に診せて下さるとなれば、お金が要ります」
「そういうことは、この柿丸におまかせ下され。これで、ちょっとしたあきないをするすべも、知って居り申す」
　柿丸が、珍しく、そう云って、にやっとしてみせた。
　梨花は、うつ向いた。泪が、あふれそうになった。
「……貴方は、神様のようなおひとなのですね」
　梨花は、つぶやくように、云った。
　柿丸は、当惑して、梨花を、ちらと見やった。
「貴方のようなおひとが、この世にいるなどとは、夢にも思ったことがなかったのです」
「……」
「わたくしは、貴方につくして頂いたご恩にむくいるためにも、からだをなおしたいと思います」
「梨花様。わしは、貴女様をかどわかすのを、手つだった男です。神様だなどと云われると、わしに罰があたります。そういうほめかたは、止して下され」
「いいえ。わたくしは、高明寺館から、つれ出されたのを、むしろ、よろこんで居ります。そのおかげで、わたくしの人生が、変りましたもの」
「……」
「貴方のような親切なおひとに、会えたのだけでも、よかったと思って居ります」
　梨花は、顔をあげて、遠くを視た。
　自分に暴力をくわえた多門夜八郎を、いつの間にか、生涯の良人、と心にきめていることも、ふしぎなよろこびであった。

　こういう人生が、自分にあったのだ。
「やあ！　まるで、人間の洪水だ！」
　柿丸が、珍しく、表情を動かして、大声をあげた。
　都大路の四つ辻に、梨花をともなって、出て来たのである。こんなにおびただしい群衆を眺めたのは、生れてはじめてであった。
　梨花も、市女笠をあげて、そのにぎやかな光景に、目をうばわれた。
「梨花様。こういうにぎわいを眺めると、なんとなく、気分がうきうきいたしますな」
「そうですね」
　梨花も、そう思った。
　人影のない山野を辿っていると、人間の微小さに、つい、心が暗くなり、滅入り込むことがしばしばである。
　人間が人間を対手にしてつくりあげる世界の活況は、一歩入って来た者に、たちまち、強い刺戟を与えることになる。
　——負けてはいられぬぞ！
　おのれが生きている証（あかし）を、その世界の中でつかもうとする気力が、わきたつのである。
「梨花様。どの顔も、いきいきして居りますぞ。働いていることは、いいものでござる」
　柿丸は、ぐるぐる見まわしながら、辻のまん中へ出て来た。
　そして、そこに、立てられている巨きな幟を、仰いだ。
「ふうん。天下第一兵法者か。大層な披露をするものよ」
　柿丸は、首をふりつつ、幟の下の高札へ、目をくれた。
とたんに——。
　柿丸の顔が、緊張した。
　高札には——

　　試合所望の事
　多門夜八郎殿に告ぐ、天下の剣は竝び立たず、利剣は厲（と）いでわが腰間に在り、貴下が剣と交えることを望んでやまず、わが挑戦に応じて、雌雄を決すべし
　日時　来る七日卯刻
　場所　小倉山北麓化野（あだしの）
　　　九十九谷左近、つつしんで申す
付けたり、もし、当日当時刻当場所へ来らざる時は、高札をもって、その卑怯を天下に嗤うもの也

「梨花様！　多門殿は、この京においでござる！」
　柿丸は、高札を指さした。
　梨花は、息をのんで、その挑戦文を読んだ。
「柿丸殿は、多門様が、試合をなさるとお思いですか？」
「それは、もう、こんな高札をかかげられたからには、応じないわけには参りませんぞ」
と、こたえてから、柿丸は
　——いや？
と、思いかえした。

――あの御仁は、相当のひねくれ者ゆえ、もしかすると、現れぬかも知れんぞ?」

深更――。

夜八郎は、ねむって、夢の中で、水無瀬家の姫君と会っていた。姫君は、夜八郎の前に、つつましく、うつ向いて坐っている。

なにか、話しかけなければ、消えてしまいそうな不安にかられながら、夜八郎は、言葉が、口から出なかった。

そのもどかしさに、おのれに嫌悪さえおぼえた。

――率直になれ、夜八郎! お前は、この姫を、愛しているのではないのか。いま、姫の心も身も、とらえておかなければ、もう、永久に、お前の許へは、現れぬのだぞ!

その声が、どこからか、ひびいて来る。

夜八郎は、焦躁した。

なぜ、姫に話しかけることが、できないのか?

心で叫びながらも、口は、膠で付けられたように、ひらこうとはしないのだ。

――おれは、この姫が、欲しいのだ!

夜八郎は、おのれを憤り、叱咤し、憎みさえした。

ついに――。

「姫!」

一言だけ、口から発した。

……瞬間。

夜八郎の五体は、寝床から、飛鳥のごとく、はねとんでいた。

姫が突如、悪鬼と化して、躍りかかったからである。

夜八郎は、すっくと、突っ立って、はじめて、目をさましていた。

寝床をへだてて、佇立しているのは、意外にも、むこうの部屋で、垂死の身を横たえているはずの老僧であった。

杖をにぎって、じっと、夜八郎を、見すえている。

「御坊――、それがしを、撃たれたか?」

夜八郎は、問うた。

「いかにも、試した」

「なにゆえに?」

「お許は、このおいぼれと、再度、たたかいたい存念を抱いて、たずねて来たのではなかったのかな?」

「……」

「お許は、夢の中で、うなされていた模様であった。これを撃つのは、嬰児をなぶるにひとしい、と思われた。……ところが、お許は、この杖を、みごとにかわして、そこへ立った」

「……」

「さとったかな?」

「いや――」

夜八郎は、かぶりをふって、

「わからぬ。自身におぼえはない」

「それじゃな、剣の極意というものは……」

「……」

「九十九谷左近に挑戦された由、受けてみては、どうか?」

――この老僧は、九十九谷左近を、知っているな。

夜八郎は、直感した。

「御坊にことわっておくが、それがしは、兵法者ではない」

「剣に拠って、生きて居らぬ、と申したいのであろうが……、では、お許は、何をもって、おのが生ける証しをたてるのであろうか?」

「……」

「お許は、姫の墓の前で、おのれの中にある敬虔をさとったはず――。お許は、こん後、いままで通り、無目的に、風の吹くままに、生きて行くことは、かなわぬ。何かを求め、何かを為そうとして、生きて行かねばならぬ。……まず、その剣をもって、試しては、いかがだ?」

「御坊は、あの兵法者を、ご存じか?」

「知って居る」

老僧は、うなずいた。

「三十年前、斑鳩(いかるが)寺の門前で、ひろって、育ててくれた。二十歳まで育てて、その性(さが)の悪に愛想をつかして、追うた。剣に、異常の天稟はあった」

「……」

「噂にきいただけでも、この十年のあいだに、二十七人の兵法者と試合して、一人のこらず、斬って居る。その強さは、比類がない、と申せる。……だが、人間である限り、永久に無敵であることは許されぬ。一度は、敗れなければならぬ。敗れることによって、おのが身に限りのあることを知らねばならぬ。……人間は、万能ではない。日月に私照はない。九十九谷左近は、あるいは、その技に於て、お許よりも秀れて居るかも知れぬ。しかし、その驕(おごり)は、必ず、不覚を招かざるを得まい」

「……」

「七年前、お許は、このおいぼれの一本の細杖に翻弄された。巧の偽は、拙の誠に如かず――それだけのことであった。こんどは、それを、お許が、左近にむかって、示す番であろうかな」

「……」

「いや、これは、おいぼれのさかしら口であった。……つかれた。やすむことにいたそうかな」

老僧は、急に、おのが病める身に、気がついたように、杖にすがって、去った。

夜八郎は、それから、なお、長いあいだ、その場に、佇立したままでいた。

――おれに、なんの悟りがあるのか?

――おれは、昨日のおれ、去月のおれ、一年前のおれと、なんの変りもない。

夜八郎は、おもてへ出ると、井戸端に行き、素裸になって、幾杯も水をあびた。

部屋へもどった時、あわただしく、納所が入って来た。

「上人様が、ご他界でございます!」

夜が明けた。
黙然として、老僧のなきがらの枕辺に正座していた夜八郎が、われにかえって、しろじろと浮きあがって来た庭へ、視線を向けた。
納所が、置石をふんで、広縁へ近づいて来た。
「よい日和でございます。雲影もありませぬ」
おちついて、そう云った。
昨夜、牀にもどった老僧が、この世の人でなくなったのを発見した時は、流石に動転したらしいが、今朝は、いつもの通りのおだやかな表情にもどっている。
二十歳すぎたばかりの若さにも拘らず、立派な態度と、云わざるを得ない。
老僧は、可念と呼んでいたが、その名のごとく、幼い頃から仏門に入って、勤行（ごんぎょう）をつとめているうちに、このようなおちつきを身につけたのであろうか。
可念は、老僧を葬る墓穴を掘って来たのである。
「多門様、おそれ入りますが、上人様を、拙僧に背負わせて下さいませぬか？」
「かしこまった」
夜八郎は、なきがらをかかえあげて、可念の背中にのせた。
これほど、もの静かな埋葬は、なかった。
また、上人の位を与えられているひじりとして、このような粗末な葬儀をいとなまれるのも、稀有のことであったろう。
かねての遺言であった。
可念は、樒（しきみ）をしとねにした穴の中へ、なきがらを仰臥させ、胸で手を組ませると、それを、樒で掩った。
土を落すのは、夜八郎が、手つだった。
土まんじゅうを盛ってから、可念の誦経が長くつづけられた。夜八郎は、そのあいだ、すこしはなれた地点で、身じろぎもせずに、佇立していた。
方丈にもどって、可念の点前を受けた時、夜八郎は、口をひらいた。
「お願いがある」
「申しつけられませ」
「九十九谷左近の挑戦を受けて、立合うことにいたす」
「勝利は、貴方様のものでございましょう」
「いや――。それがし自身は、四分の勝目しか考えて居らぬ。ついては、それがしが、敗れた際、貴所の手で、葬って頂けまいか。それを、お願いいたしたい」
「……」
「引受けて頂けまいか」
「お引受けつかまつります」
可念は、うつ向いてこたえた。
「忝けない」
夜八郎は、頭を下げた。
可念が、つと立って、奥へ入った。すぐにもどって来た可念の手には、一振の太刀が持たれていた。
「上人様のお形見でございます。お腰に、どうぞ――」

一滴の水

建物も人間も、これ以上きたなくすることはできない、と思われる光景であった。
建物は、兵火をあびて、なかば焼け崩れた神社の社殿であった。
月明りが、破れた屋根から、落ちている。柱も板壁も黒こげになり、祭壇は滅茶滅茶である。のみならず、長い年月、怪しい者どものすみかにされていて、夜具がわりの莚やら藁やらを持ち込まれて、散乱している。そのほか、食いのこしの猪や狸の骨つきの肉などが、干からびて、ほうり出されている、といったあんばいであった。
ここに毎夜集って来る人間どもは、それにふさわしい野伏、コソ泥、女さらい、破戒坊主、破落戸（ごろつき）など、まともな世間からはみ出したやからであった。
もともと、この神社そのものが、こうなる運命にあった、といえるかも知れぬ。
「毒蛇様」
その俗称で知られた神社であった。
牛尾山の布引滝からすこし下って、蛇ケ淵がある。
その蛇ケ淵に棲む大蛇を、祀った神社であった。
むかし、この淵に大蛇が棲んでいて、人民をしきりに、なやましていた。
伊賀寺景綱という剛の者がいて、常に牛尾観音を信じ、某日、この淵を通りかかったところ、長（たけなが）の大蛇が躍り出て、とびかかって来た。
景綱は、すこしも怯じずに、腰の太刀を抜きざまに、その太胴を両断、さらに、首を刎ね、尾を斬った。
洛東清水寺の音羽滝は、その夜、おびただしい血汐が流れて来て、真紅と化した。
景綱は、大蛇のしかばねを、川辺の芝生で焼きすてた。いまも、そこに、焼芝の名がのこっている。
景綱は、わが家へ帰ったのち、毒蛇の瘴気にあたり、高熱を出した。生命も危くみえたところへ、香染めの衣をつけた異僧が、忽然として現れて、薬の霊方を与えた。調合して、服薬したところ、景綱は、たちまち、平癒した。
この秘薬は、伊賀寺家に、代々伝えられて、いまも、これをもとめる人が多い。
伊賀寺家では、その秘薬でもうけた金で、毒蛇明神を建てたのである。
いずれは、このようなあさましいすがたになる運命の社であった、といえる。
いま――。
どこからか盗んで来たらしい三基の短檠に、灯火をまたたかせて、八九人のあぶれ者たちが、二個の賽の目に、まなこを血走らせている。

毒蛇の眷属（けんぞく）と見えないこともない。
男ばかりではなく、女も二人ばかり交っている。
のみならず、その一人は、色香のしたたる仇めいた風情の女であった。
片膝立てて、水色の二布（こしまき）のかげから、白い脛をちらつかせながら、男どもの目にぬすませているのであった。
壺を振っているのは、片肌ぬぎの耳無し男であった。
「さあ、張ってもらおうぜ。……へっへっ、丁と出ても、半と出ても。――勝っても負けても、どうせ、汗を流してかせいだ金じゃねえ。あぶくのような悪銭だあ。――さあ、いいか」
百平太は、きょろきょろっ、と小ずるく、見まわした。
「よーし、張ったな。みんないい度胸だ。ここが一番――えいっ！」
さっと壺をあげた。
「へっへっ……すまねえ。丁だあ」
百平太は、張られた金を、自分の前に、かき集めた。
親の自分が丁、子の一同が半――これでもう、四回も百平太は、勝ちつづけていたのである。
もうほとんど大半の金が、百平太の前に、かき集められていた。
「ちょいと、お館――」
仇な女が、呼んだ。
「へっ、お館と呼んで下さりましたね。なんだよ、色っぽいの？」
「お前さんは、大層壺さばきがうまいけど、どこかで修業して来たのかい？」
「馴れだあ、馴れ――」
「自分の思うままに、賽の目が出せるようだねえ」
「おいおい、へんな云いがかりは、止してもらおうぜ。おれは、べつに、親をやりつづけてえとは、云ってやしねえんだ。おのぞみなら、どなた様にでも、おゆずりいたしますぜ」
と、うそぶかれても、親になるほど金を持っている者は、一人もいなかった。
「ちえっ！　お前さん一人に、みんな、キリキリ舞いさせられているあんばいだよ」
「あいにくだがな、姐さんよ。おらァ金をつくらなけりゃならねえ、泪ぐましい理由があるんだ。今夜だけは、負けてやるわけにいかねえんだ。さあ、もう一丁、張って来る奴は、いねえか？」
流石に、もう、どの顔も、しぶる色をみせた。
その時――。
すこしはなれた場所に、寝そべっていた男が、やおら、起き上った。
先刻から、ずうっと、寝そべって、動かずにいたのである。
坊主あたまの、何を食っているのか、まるまると肥った男であった。

「わしが、ひとつ、張り合うかな、耳無しのお館」
そう云って、のそのそと近づいて来た。
眉が八の字になり、目尻も下り、百平太の前にあぐらをかいて、にやっと笑った顔が、ひどく愛敬のあるものになった。
頸から頭陀袋を下げていたが、それから、金をつかみ出して、
「まず、これぐらいで、やるか」
と、じゃらんと、置いた。
瞬間――。
百平太は、
――このふとっちょ、ただ者じゃねえな！
と、直感した。
「おめえさん、和尚さんですかい？」
「極楽に見はなされた蛸坊主さ。そんなことは、どうでもよかろ。張ったぜ」
「へい、承知――」
百平太は、賽ころふたつ、壺へ入れて、ガラガラとふって、さっと伏せた。
「行こうぜ、和尚さん！」
百平太は、きょろっ、と上目づかいに、ふとり坊主を見上げた。
「ちょっと、待った」
ふとり坊主は、合掌し、瞑目すると、口のうちで、ぶつぶつと、お経をとなえていたが、かぶりを振って、
「いかんな」
と、云った。
「なにが、いけねえ？」
「阿弥陀如来のお告げがあった。もういっぺん、壺を振りなおせ、と」
「ふざけちゃいけねえや。真剣勝負なんだぜ、和尚さん」
「だから、もういっぺん、壺を振ってもらおうか」
「しようがねえな」
しぶしぶ百平太は、壺を上げて、賽ころを入れなおし、カラカラと、ころがした。
ふとり坊主は、双眼をほそめて、百平太の手さばきを眺めていた。が、壺が、さっと伏せられようとした刹那、間髪を入れず、
「喝っ！」
と、途方もない大声を発した。
百平太の全身が、ぶるるっと、ふるえた。
当然、文句を云うところであったろうが、百平太は、おそろしく緊張した顔つきになって、黙って、ふとり坊主を、睨んだ。
「半にするかな、それとも、丁にするかな」
ふとり坊主は、にやにやした。
――勝手にしやがれ！
百平太は、肚の中で、叫んだ。
ふとり坊主は、また、口のうちで、お経をとなえていたが、

「半だ」
「半か？」
「いや、丁にいたそう」
「どっちだ？」
「ひとつ、お前さん、きめてくれぬか？」
「コケをぬかせ。はやくきめろ」
「では、丁と参ろう」
「丁でいいんだな」
「まァな」
「じらすねえ！」
「丁と参る」
「いいんだな？」
「あけるがいい」
百平太は、パッと、壷をあげた。
固唾をのんでいた一同の視線が、二個の賽ころへ、集中した。
丁であった。
ふとり坊主の勝であった。
皆の口から、それぞれの言葉や嘆息がもらされた。百平太の負を、小気味がいい、とあざけることでは、一致していた。
「和尚さん！」
百平太は、ふとり坊主を、睨みつけて、
「ひとつ、大きくやる気はねえかね？」
と、云った。
「わしは、バクチというものを、実は、生れてはじめてやるのじゃよ」
「だから、阿弥陀如来だか、菩薩だかに、きいてみるのか？」
「まあ、そうだな」
「ふん——。おれの眼力では、和尚さんは、相当なバクチ打ちに、見えるがね」
「ちがうな。わしは、バクチや女で、寺を追われたのではない」
「ともかく、やるな？」
「乗りかかった船だ。お前さんの前にある金を、そっくり頂戴するかな」
「止しやがれ」
しかし、ふとり坊主のうそぶきは、必ずしも脅しではなかった。
百平太に、二度も三度も、壷を振りなおさせ、壷を伏せる瞬間をはずさず、一喝をくれる手間をかけて、百平太から、ごそっ、ごそっ、とまきあげていった。
「負けた！　とても、敵わねえ！」
ついに、百平太が、悲鳴をあげた時には、もうその前から、三分の二の金が、ふとり坊主の方へ、移っていた。
「はっはっは……、とうとう、参ったかな。しかし、どうせ、いさぎよく負けるのなら、その残り金も、度胸よく賭けてみたらどうかな」
「ようし！　和尚さん、あんた、親になってみろい！」

「いいとも——」
ふとり坊主は、気楽に、賽ころと壷を、引き寄せた。
「お前さんは、念仏のかわりに、流行歌でも唄ったらどうかな」
ふとり坊主は、からかった。
百平太は、口を歪めたが、ふっと気がついて、一同を見まわし、
「おい、お前がたは、もう、引き上げてもらおうぜ。気が散っていけねえ。最後の勝負は、誰にも見られたくねえ」
「わしは、一向にかまわんが……」
「おれは、かまうぜ。……さあ、引き上げたり、引き上げたり」
百平太は、せきたてた。
二人きりになると、百平太は、掌へ、べっべっと唾を吐きかけて、パンパンと拍つや、
「よしっ！　来い！　糞坊主！」
と、呶鳴った。
ふとり坊主は、無造作に、壷へ賽ころをほうり込んだ。
「壷を伏せてもいいかな？」
ふとり坊主は、笑いながら、きいた。
「よけいなことを、きくない！」
「では——」
ふとり坊主は、ゆっくりと、壷を伏せた。
「どっちじゃ」
「半だ！」
「半でええかな？」
「うるせえっ！」
「されば——」
ふとり坊主は、壷をあげた。
一瞬——百平太は、息がつまった。
こんな経験は、はじめてである。博奕で、これほど追いつめられたのは、はじめてである。
自分は、博奕のために生れて来た男だ、と思っていた百平太である。
このぬけぬけとした破戒僧に、どうして、こんなにやすやすと負けたのか。負けたいまでも、信じ難かった。
しかし、完全に敗北したのである。
百平太の前から、有金は、のこらず、ふとり坊主の前に移ってしまっていた。
「運否（うんぷ）天賦とは、よくぞ申したな。気の毒じゃった」
「和尚！」
百平太は、眉をピクピクと痙攣させた。
「嘘をつきやがったな！　うぬは、バクチに素人じゃねえぞ！」
「はっはっは……、わしは、生れてはじめて、バクチをやったから、虚心坦懐に、勝ったのじゃわい」
「しらばくれるな！」
百平太は、うしろにかくしていた短刀を、つかむや、抜きはなった。

「おいっ！　おれを、なめやがるかっ！」
　殺気をみなぎらせて、切っ先を、徐々に、つき出した。
　ふとり坊主は、一向に、怯じ気をみせようとはしなかった。
「百平太、といったな」
「それが、どうした？」
「お前は、ちょっとおもしろい男だと思っていたが、どうやら、ただの、どぶ鼠らしい」
「なにおっ！」
「負けて、刃物をつきつけて、居直るとは、あさましすぎる。……お前が、壺を伏せる時、賽ころに、手妻をつかうのを、わしが、看破らなかったとでも、思って居るのかな」
　ふとり坊主は、世間話でもしているような口調で、云った。
「ちえっ！」
　百平太は、舌打ちした。
「知っていやがったのか、畜生め！」
「はっはっは……。負けた時は、いさぎよく、兜をぬぐがよい。それが、男らしい、と申すものじゃ」
　百平太は、ふてくされた。
「おれは、金が要るんだ。どうしても、要るんだ！」
「何に、金が要る？　女かな？」
　ふとり坊主は、訊ねた。
「ちがう！　仇討をやるんだ！」
　百平太は、喚いた。
「仇討を――。ほほう、これは、柄に合わぬことを申すぞ」
　ふとり坊主は、下り眉を、さらに完全な八の字にした。
「おれが、仇討をやったら、おかしいか？」
「べつに、おかしくはないぞ。あっぱれな心掛けじゃ。父か兄の殺された恨みをはらすのかな？」
「いいや――。この耳を殺ぎ落しやがった野郎に、復讐してやるんだ！」
「ふむ。察するところ、お前は、手妻を看破されて、その耳朶（みみたぶ）を、刎ねられたのじゃな？」
「そうじゃねえ！　おれが、平あやまりにあやまって、金はぜんぶ、くれてやると、拝んでいるのにも拘らず、容赦しやがらねえで、殺ぎ落しやがったんだ」
「それで――仇討をするのに、どうして、金が要るのだな？」
「野郎は、滅法強い牢人者だから、こっちも、それに負けねえ兵法者をやとうんだ。九十九谷左近、といってな。こいつは、途方もねえ強い兵法者よ」
「九十九谷左近は、わしも、知って居る」
「知っているのか。知っているなら、猶更だ。あの兵法者をやとうには、そこにある金でも、まだ足りねえ」
「あきらめるがよい。お前は、負けたのじゃ」
　ふとり坊主は、金を、頭陀袋へ、しまいはじめた。
　その隙をうかがって、百平太は、バッタが跳ぶようにし

て、短刀を突きくれた。
「おっと！」
　ふとり坊主は、さもあぶなさそうに、顔をそらした。
その時は、もう、百平太の利（きき）腕をつかんでいた。
「いてっ！」
　百平太は、ねじあげられて、悲鳴をあげつつ、短刀を、ポロリと落した。
　ふとり坊主は、百平太を突きはなすと、
「この天満坊を刺すには、九十九谷左近といわずとも、その弟子ぐらいの腕前が必要だな」
　そう云って、笑った。
　百平太は、強い者に対しては、一も二もなく、降服する男であった。
「かんべんしてくれ。和尚は、ただ、デブデブふとっているだけだ、と思っていたんだ」
「あいにくだったな」
「どうも、和尚は、ただ者じゃねえようだね」
「なあに、ただの破戒坊主にすぎん」
「いいや、ちがう！」
　百平太の顔には、もう、畏敬の色さえうかべられていた。
「和尚さん――」
　百平太は、膝小僧をそろえると、ぺこんと、ひとつ、頭を下げた。
「おれはね、生れつきは、善人だ、と自分でも、思っているんだ。乳のみ児の時に、母親にすてられてから、自分一人で生きて行かなけりゃならねえために、こういう調子に、小すっからくなったんだが……、これでも、男いっぴきの、意気地だけは、すててはいねえつもりだ」
「ふむ、ふむ」
　天満坊と名のったふとり坊主は、おもしろそうに、うなずいている。
「和尚さんは、笑うかも知れねえ。しかし、おれが、おれの耳を殺ぎ落しやがった多門夜八郎という牢人者に、復讐したいと誓いをたてたのは、嘘じゃねえ。信じてもらいてえ」
　たしかに、百平太の巨きな鼻の突出した顔面は、真剣そのものであった。
「嘘ではなかろう。信じてもよい」
　天満坊は、こたえた。
「じゃ、たのみます。その金を、おれに、十日ばかり貸して頂きてえ」
　百平太は、両手をついて、頭を下げた。
「百平太――」
「へい」
「その多門夜八郎とやらを、九十九谷左近に討ちとらせたら、お前の耳朶が、茸のように生えて来るというのかな？」
「意地悪なことを云うものじゃありませんや。生えて来るわけがねえ」
「それなら、討っても、討たなくても、結局は、おなじではないかな」

「ちがいますぜ。多門夜八郎が、斬り仆されるところを、見とどけりゃ、おれの胸の中は、すーっ、と溜飲が下るじゃありませんか」
「たった、それだけの話ではないか」
「お前自身の手で、討てばいざ知らず、金でやとった兵法者に討たせて、溜飲を下げるなどとは、むしろ、男の風上に置けぬ」
「じゃ、憎い敵（かたき）が、目の前を歩いていても、指をくわえて、眺めていろ、というんですかい？」
「もう一度、おのれのやっていることを、考えなおしてみるとよい」
天満坊は、じっと、百平太を見据えた。
この眼光は、別人のように、鋭いものになっていた。
「お前という男は、いままで、他人のために尽したことがあるかな？　どうじゃ？」
「……」
百平太は、唇をとがらせて、首をひねった。
「ないであろう？」
「そう云われりゃ、まあ……、他人の役に立ったことはねえが――」
百平太は、天満坊を、ちらと見やって、その鋭い眼光に、あわてて、うつ向いた。
「他人のために尽すことが、どんなに、気持がいいものか、お前は、知らぬ」
天満坊は、云った。
「……」
百平太は、頭を上げなかった。
「なにも、後生をねがうために、善行をほどこせ、と申しているのではない。貧しい人に金をめぐんだり、困っている人をたすけたりしてみることは、努力を要することだ。よろこんでやる者は、まず、千人に一人も居るまい。だが、やったあとで、どんなに気持がいいものか――それは、やってみなければ、わからぬ」
「……」
「お前は、これまで、そういう努力を、爪のカケラほども、払ったことがないらしい。幼くして、食うためにおぼえたのは、盗みであろう。そうじゃな？」
「へい」
「お前は、働いて、生きるというすべを、さけた。それが、いちばん安易な生きかたじゃからな。バクチで、他人から金をまきあげる。それも、必死になってやるのではなく、手妻をつかって、人の目をごまかして、まきあげる。バクチという遊びにすらも、お前は、最も安易な手段をえらんで居る。仇討をするのも、自分ではやらずに、他人の力を借りる。……人間として、下の下だ」
「……」
「お前は、このくそ坊主、大層偉そうな説法をしくさる、と内心思っているのではないか？」
「へ――、い、いいや……」

「思っているだろう。思うのが、当然だ。しかし、わしは、福徳兼備の、悟りをひらいた善知識ではない。見かけた通りの乞食坊主だ。だから、お前に、こんな説法をするのだ。二十年前のわしは、実は、お前そっくりであった。つまり、わしは、お前に、二十年前のわしの姿を見て居る」
「……？」
百平太は、顔を擡げて、天満坊を視た。
「きかせようかな」
天満坊は、遠い視線を宙に送って、遠くすぎ去った日のことを回想する面持になった。
「ひどいものであった、わしの若い日は――」
天満坊は、かぶりを振った。
夜は、更けわたっていた。
いつの間にか、雨が降り出して、軒端をつたう音が、この静寂をいっそう、さびしくしている。
百平太が、胴顫いしたのは、急に底冷えて来たためである。
百平太は、脱いだ袖を、腕に通して、ひとつ、くしゃみをした。
天満坊は、百平太の存在も忘れたように、宙を見つめている。
「和尚さん、きかせて頂きてえ」
百平太が、うながした。
天満坊は、語り出した。
「むかし、淀川を上り下りするあきない船に、酒を売ってくらしている女がいた。三度嫁いで、三度とも、亭主にきらわれて、すてられた女じゃった。からだの岩乗な、つかれを知らぬ働き者であったが、欲情も深かった。……やがて、女は、淀川船に酒を売るよりも、もっと、もうかる方法を思いついた。夜半に比叡山にのぼって、酒や干魚や焼餅を密売することであった。
殺生禁断、女人結界、葷酒（くんしゆ）山門に入るを許さぬ霊山には、たくましい青道心（あおどうしん）が、三千余も、うようよしている。
おのずから、裏道がつくられて、男装した遊び女（め）が、酒さかなをひっかついで、登って来ることも、黙認されていたのじゃ。
といっても、青道心らは、際限もなく旺盛な胃袋を所有していても、あいにく、懐中の方が、甚だ乏しかった。そこで、仏具を盗み出して、売りとばす荒っぽい手段もとられていた。
女は、そういう仕事の手先につかわれて、調法な存在となった。
ある日、女が、いつもの通り、かついで来た荷を、僧房でさばいて、食堂の裏手から、去ろうとした。そこへ、ふいに、数人の青道心が、とび出して来て、有無を云わせぬすばやさで、女の手とり足とり、食堂（じきどう）内へつれ込んだ。
そうして……、女は、およそ二十人の青道心から、矢つぎばやな手ごめを受けたのだ。青道心どもが、にげ去った

時、女は、死んだように、気を失って、動かなかった。
　それから、十月後に、まるまると肥えた嬰児が、東塔の庭に、置きすてられていた。それが、わしであった」
　そう語って、天満坊は、さすがに、ゆがんだ笑顔になった。
「どうだ、百平太、同じ捨児でも、お前の方は、父親が何者か、わかっているだろう」
「へい」
「わしをみるがいい、二十人の青道心のうちの一人が、父親なのだぞ。こんな、悲惨な話が、またとあるか」
「……」
「わしの母親としても、父親が何者か、ちゃんとわかっていれば、わしを捨てはしなかったろう。入れかわり立ちかわり、おそいかかって、手ごめにしたけだもののような青道心の、どれか一人が、子の父親と思えば、くやしさが、たぎりたち、その子を、比叡山へすてざるを得なかったろうではないか」
「ま、まことに……」
　百平太は、うなずいて、生唾をのみ込んだ。
「そのような因果な捨児が、どうして、心正しい修行に精進することができようか」
　天満坊は、十一二歳から、おそるべき奇行をやってのけて、気性の荒い比叡山僧房のめんめんの舌をまかせたことだった。
　青大将を生きたまま嚥み下してみたり、霏霏として降りしきる雪の中に、すっ裸で、一晩中あぐらをかいてみたり、放尿脱糞は、一丈も高い檜の老樹の枝に、しゃがんで、やってのける習慣をつけた。
　いつの間にか、この小坊主だけが、特別扱いされるようになったのも、むりはなかった。
　天満坊は、十一二歳で、すでに、十七歳の若者に負けぬ膂力をそなえていたからである。
　天満坊が、月のうち、十日ばかり、僧房から姿を消すようになったのは、十五歳の時からであった。
　天満坊は、九尺の六角棒をひっさげて、比叡山に棲息する猪、猿、狐などのけものを追いまわしはじめたのである。
　そして、一年経った頃には、どんな敏捷な猿でも狐でも、狙えば、必ず、撃ち殺すことが、できるようになった。
　独力によって、棒の迅業をならいおぼえた天満坊少年は、もはや天下におそれる者はなし、とうぬぼれた。
　その増上慢が、いよいよ奇行を、はなはだしいものにした。
　盗みと、女を犯すことこそしなかったが、そのほかの悪いことは、のこらず、やってのけた。
　そして、ついに――。
　ある日、数十人の青道心から包囲されて、生捕られ、僧牢へ、ぶち込まれたのであった。
「わしの師は、慈願禅師という、もう古稀にちかいひじりであった。師が、わしにくわえた罰は、なんであったと思う？　水を一滴もくれぬことであった。さよう、わしに与

えられたのは、猪や狐や狸の肉だけであった。それも、塩からく焼いた肉であった。これをくらえばたちまち、のどが、かわく。だが、師は、水をくれなかった。……わしは、ありとあらゆる罵り、わめきをやった。やればやるほど、のどが、かわいた。五日経つと、わしは、一椀の水が与えられるならば、どんなことでもやる、と哀訴した。それでも、なお、師は、水をくれなかった。どんなに、つらかったか。文字通り、狂い死にそうであった。……七日めに、わしは、ひき出された。
　師は、わしに、追放を申し渡し、乞食坊主になって、諸国を放浪して、他人のために、どれだけの善行が積めるものか、やってみせい、と云われた。
　その時、わしは、地べたに仰のけに倒れていたが、折からの山風に松の梢がゆれて、ひとしずく、たまり雨が、わしの口に落ちて来た。
　おお、どんなに、その一滴の水が、うまかったことか！
　わしは、その時はじめて、悟りのようなものを、おぼえたのだ」
　天満坊は、語り了えて、微笑した。
「お前は、その時の、一滴の水によみがえったわしの気持を、想像できるかな？」
　そうきかれて、百平太は、きいていただけで、のどのかわきをおぼえた緊張面になって、
「わ、わかる！」
　と、大きく合点してみせた。
「では、きこう。お前は、いま、わしが一滴の水を、欲したごとく、奪われた金を、欲しているか、どうかじゃ」
「……」
「どうじゃな？」
「い、いや……、それほどのことでも、ござらぬが――」
「そうであろう。復讐をしとげたところで、殺ぎ落された耳朶は、生えて参らぬからな」
「う、うん――勿論、それは、そうだが……」
「お前は、まだ、死ぬか生きるか、ギリギリに切羽詰ったところへ、追い込まれたことがない。それが、お前という男に、真剣に生きる、ということが、どんなものか、さとらせて居らぬ」
「たしかに、ち、ちがいねえ」
「わしが、一度、お前を、どこかの牢獄へほうり込んで、十日ばかり、水を与えずにおく試練を加えてやればよいのじゃが……」
「と、とんでもねえ！」
　百平太は、あわてて、手をふってから、あらためて、両手をつくと、
「和尚さん、弟子にして下され。おれは、心がけをあらためます」
　と、願った。
「ははは……、わしの弟子になったところで、一朝一夕に、その小ずるい根性がなおるものでもあるまいが……九十九谷左近と多門夜八郎の試合を、見とどけるかな」

「え――? おれは、もう、九十九谷左近をやとうことは、止めたのですぜ」
「九十九谷左近は、すでに挑戦の高札を立てているではないか」
天満坊は、すでに、そのことを知っていた。
「多門夜八郎に、もののふの血が流れているのであれば、挑戦に応ずるであろう」
「へ、へい……」
「この試合は、想像しただけで、おもしろそうじゃな。お前を斬らずに、耳朶だけ殺ぎ落した牢人者ならば、さためし、気骨のある変り者に相違ない。九十九谷左近と剣を交えるには、ふさわしい人物と思われる」
「なにやら、浮世をすねたような男でござる」
「わしも、見物いたそうかな。……百平太! もし、その時、九十九谷左近が、多門夜八郎に勝ったならば――」
「勝ったならば?」
「わしは、即座に、お前の首を刎ねてくれよう。どうじゃ、この賭は?」

春風譜

いくたびか焼けおちては、架けなおされたその橋は、幽霊橋と称ばれている。
そのむかし、音にきこえた北面の武士が、禁廷の御用で、東国へおもむいているあいだに、京の都では、突如として叛乱が起り、武士の父は、敵の手にかかって、果てた。それと知らず、都へもどって来た武士は、昏れがた、この橋を渡りかかって、血まみれの父の亡霊に会った。まだ、父が果てたことを知らずにいた武士は、驚愕して、その仔細を問うた。
亡霊は、去月、この橋を輿で通りかかったところを、兇漢に襲われて、無念の最期をとげたことを、語った。
復讐の一念に燃えた武士は、それから、半歳の間、昼夜をわかたず、この橋袂の小屋にひそんで、待ちかまえていた。
やがて、ある宵、禁廷でも隠然たる権勢を有(も)った公卿が、輿に乗って通りかかったところ、先払いの者が、悲鳴をあげて、あとずさった。
行手に、血まみれの亡霊が、出現したのである。
小屋の中から窺っていた武士は、公卿が輿の上でのけぞ

るのを視てとり、
――此奴こそ!
と、合点するや、風の如く、躍り出て、公卿の首を刎ねた。
幽霊橋の名は、それによって起った、という。
そのせいか、昏れがたになると、この橋を渡る人影は、ばったり絶えて、急に、ものさびしくなる。
梨花をともなった柿丸が、さしかかったのは、恰度その時刻であった。
「ほう……、このあたりが、しずかなのは、なんとしたことであろうかな?」
宵の雑沓を抜けて来た者の目には、いかにも不思議な静寂が、ここにはある。
梨花も、市女笠をあげて、けげんなまなざしをめぐらせた。
「梨花様。むこうの橋袂に、旅籠(はたご)がござる。しずかな場所ゆえ、ひとまず、あそこで、やすむことにいたしましょう」
柿丸は、きめた。
その旅籠に入った時、梨花は、ふと、なにか、いやな予感をおぼえた。
しかし、べつに、理由とてもないので、梨花は、口にはしなかった。
旅籠の中が、妙に、しーんと、ひそまりかえっているのが、梨花の病んで鋭くなった神経に、ある薄気味わるさを、感じさせたのである。
ふつう、この時刻ならば、旅籠は、にぎやかなものである。
柿丸も、それをちょっと、いぶかったが、病人には、しずかな方がよいので、べつに気にせず、
「だれか居らぬかな?」
と、呼んだ。
しばらく、なんの気配もなかった。
ようやく、奥から出て来たのは、からだが二つに折れた老婆であった。
「泊めてもらえるか?」
柿丸が、云いかけると、老婆は、二人を見くらべて、ちょっと小首をかしげるていであったが、黙って、二階を指さした。
「無愛想なばあ様だな」
柿丸は、苦笑してから、梨花を見かえり、
「このあんばいでは、なんの世話もしてくれますまい」
と云った。
二階には、かなり広い部屋と小部屋が二つばかりならんでいたが、ひっそりとして、客のいる気配もなかった。
柿丸は、広い部屋を、梨花にえらんで、押入れから、夜具をとり出して、延べた。
「七日まで、あと四日でござる。そのあいだ、ゆっくりと休養なさることです」
柿丸は、下座に坐ってから、云った。

「多門様は、あの挑戦を、お受けになるでしょうか？」
梨花は、なお、そのことを、疑っていた。
「おそらく……。この京の都で、武士の恥をさらせば、日本全土へきこえ、生涯の汚辱となり申すゆえ――」
柿丸は、そうこたえたものの、はたして、夜八郎が、当日その時刻、小倉山北麓化野へ、出現するかどうか、断言しきれる自信はなかった。
梨花は、敏感に、柿丸の心のうちを読みとって、強いて、微笑をつくった。
「よろしいのです。このように早くお目にかかれようなどとは、夢にも考えて居りませんでした。……お目にかかるのが、半年さき、一年さきになっても、わたくしは、かまいませぬ。ただ、お目にかかるのが、わたくしの生きて行く希望となって居りますゆえ、多門様が、万一、試合でお果てなさるようなことがあれば、わたくしも生きては行けませぬ。なろうことなら、試合をさけて下さることを、わたくしは、願って居ります」
「よう申されました。そのお気持ならば、それがしも、貴女様と同じ心構えをつかまつる。……なに、四日あれば、必ず、多門殿の在処をつきとめることも、できぬ相談ではありますまい。……さ、ともかく、おやすみ下され」
柿丸は、梨花を牀に横にならせてから、
「ちょっと、出かけて参ります」
と告げた。
「今夜は、貴方も、休息なさるとよろしいのに――」
梨花は、そばにいてもらいたそうな表情をした。
「わたくしのために？」
「やはり、一度、医師に、診てもらわれた方がよろしゅうござる」
柿丸は、出て行った。
一人きりになると、梨花は、急に、孤独感にとらわれた。
この旅籠の静寂がはらむ不気味さが、にわかに、はっきりと、梨花を、おそれさせたのである。
老婆は、猫のように丸く小さくなって、炉端に、じっと動かぬ。
廊下に足音がひびいても、べつに、顔をあげようとはしなかった。
「ばば」
声をかけられたが、ふりかえるかわりに、枯木のような片手をのばして、火箸を取ると、粗朶火をかきたてた。
「おい、ばば……、青助は、まだか？」
そう問うて、どっかとあぐらをかいたのは、野盗のたぐいと一瞥でわかる髯だらけの男であった。
老婆は、歯のない口のうちをもぐもぐさせてから、何か云った。
「なに？　なんだ？」
男は、ききなおして、
「二階に客？　どんな奴だ？」

「夫婦じゃ」
「夫婦だと？」
「若いのう」
「若い夫婦か――ふん。金を持って居る様子があるか？」
老婆は、こたえたが、男にも、意味がよく汲みとれなかった。
「こんな旅籠に、何も知らずに、迷い込んで来る奴がいるとはのう。……ああ、腹が鳴る。酒はないか？」
「買うて来るがええ」
「金などあるか！」
男は、いまいましげに、吐きすてた。
そこへ、また一人、同じくうす汚れた風体の男が入って来た。しかし、これは、まだ若く、むしろ美男に属する。
「お――青助か。四五日、どこへ姿をくらまして居った？　おんしが見つからぬので、あたら、うまい仕事をのがしたぞ」
「おれは、これからは、仕事は一人でやる」
青助は、冷やかに云って、むかい側に、坐った。
「一人でやる？　おい、仲間を裏切る気か？」
男は、気色（けしき）ばんだ。
「早合点するな、黒太――」
青助は、その冷酷な性情を示す刺すような眼眸（まなざし）をかえして、
「おれは、これからは、女であきないをやるのだ」
と、云った。
「なんだ、それは？　おんしは、これまでも、さんざ、女をだましては、売りとばしていたではないか」
黒太は、云った。
「こんどは、ちがう。女たちを集めて、可愛がってやる。つまり、おれは、娘子軍（じょうしぐん）をつくって、大将になるのだ」
「どういうのだ、そりゃ？」
「まあ、みておれ。おもしろいことになる」
「もったいぶるな、話せ」
黒太は、首をつき出した。
青助は、にやりとしただけであった。
この時――。
ふいに、老婆が、顔をあげて、云った。
「若い、美しい女子（おなご）なら、二階に、居る」
「なんだと？」
青助の目が、きらっと光った。
「それは、ほんとか、ばば？」
「上って行って、みるがええ」
「よし！」
青助は、精気のあふれた身ごなしで、足音をしのばせて、梯子段を、そーっと、のぼって行った。
黒太も、梯子段の下まで行って、見上げていた。
やがて、青助が、ゆっくりと降りて来た。
「とびきりの上玉だ」
ささやかれて、黒太は、

「迷い込んだのが、因果か」
と、にやっとした。
「赤松や白次のもどらねえうちに、やるぜ」
青助が、云った。
「それは、約定にはずれるぜ」
「約定を破りたくなる上玉よ。赤松や白次に食わせるのは、もったいねえ」
「てめえは、全く、油断も隙もならねえ野郎だな」
黒太の方は、ためらいをみせた。
「てめえだって、ひと目、拝んだら、仲間を裏切りたくなるぜ。あんな滅法きれいな上玉は、いままで、見たことはねえ」
青助は、老婆のそばへ寄ると、連れの有無を問うた。
「若い男が、つれて来たが、すぐ、出て行った」
「どんな奴だ？」
「土くさい男じゃったが、強そうじゃった」
「どこからか、かどわかして来やがったかな」
「いいや。家来のような態度をみせていたぞえ」
「それじゃ、愚図愚図してはいられねえ」
青助は、黒太に、目くばせした。
老婆は、炉ばたにうずくまったまま、二人の男が、二階へ忍び上って行くのへ、ちらりと、一瞥をくれた。
悲鳴がつらぬき、一瞬の烈しい物音が起った。
老婆は、依然として、うずくまったままである。
青助が降りて来、つづいて、ぐったりとなった梨花を背負うて黒太が、降りて来た。
「ばば、赤松や白次が来ても、黙っていろ」
青助が、云ったが、老婆は、返辞もしなかった。
青助は、老婆へ、青銭を、抛っておいて、
「ぬかしたら、承知しねえぞ！」
と、云いのこした。
老婆は、青銭をひろって、かくしながら、
「連れの若い男がもどって来たら、どうするのじゃ？」
「つんぼで唖になっていろ」
蓬髪を、こよりでむすび、あご髭を長くのばし、小袖の裾をしり端折りして、痩せこけた両脚をむき出し、鹿皮の袋を背中に負っている。
これが京洛随一の名医師とは、誰も気がつくまい。
日本健康斎と称している。
若い頃、八幡（ばはん）船に乗って、海を渡って行き、三十年の永い年月を、異邦ですごした人物であった。
陋巷のぼろ家に住まって、貧しい人々を対手に、施療をつづけている。禁廷をはじめ、三管領や四職から、招かれても、一向に応じない一徹さが、庶民の人気の的になっていた。
「コレ、若いの――」
健康斎は、幽霊橋を渡りながら、
「年寄を、そう、急がせるものではない。息切れがして、かなわぬ。もそっと、ゆっくり歩いてもらえぬかな」

と云って、立ちどまると、背中をのばして、ヤレヤレ、とひと息ついた。
柿丸は、しかたなく、足をとめて、健康斎を振りかえり、
「あの宿でござるゆえ、お願いつかまつる」
と、云った。
「ふん――」
健康斎は、ちょっと眉宇をひそめた。
「患者は、若い女子と云うたの？」
「左様でござる」
「おぬしは、あの旅籠に、若い女子をのこしておいて、すこしも心配せぬのかな？」
「それは、どういうことでござる？」
「おぬしは、京の市中には不案内ゆえ、あの旅籠がどんな宿か、存じて居るまいが、集って来るのは、蛆やダニやら蛇やら、満足な人間は、いっぴきも居らぬ」
「なるほど……、それで、妙にしずかでござった。それなら、なおさら、ゆっくりして居れぬ。先生、早う――」
柿丸は、走るような急ぎ足になった。
健康斎は、かぶりを振って、とことこと、ついて行った。
柿丸は、土間にとび込んで、草鞋をぬぐのももどかしく、梯子段を駈け上った。
「いないっ！」
柿丸は、血相変えた。
ダダ……と、駈け降りて来た柿丸は、炉端の老婆の肩を、つかんだ。
「おばば！　わ、わしの連れは、どうしたぞ？」
老婆は、肩をゆさぶられて、とろんとした顔つきで、柿丸を仰いだ。
「おばば！　わしの連れは、どうした、ときいているのだ？」
柿丸は、二階を指さして、どなった。
老婆は、口を半開きにして、かぶりを振った。
いかにも、もうろくしきった様子を示した。
「唖でつんぼで、ぼけている――といったところじゃ」
健康斎が、上り框に、腰を下して、云った。
「唖であろうと、つんぼであろうと、梯子段がここにあるんだ。梨花様が、さらわれるのを、見とどけなかったはずがない！」
柿丸は、躍起になって、老婆のむなぐらをつかむや、
「ばばっ！　わしの連れが、どこへつれ去られたか、云わぬと、しめ殺すぞ！」
と、叫んだ。
「無駄じゃな、その婆さんを責めるのは――」
健康斎は、そう云いながら、上って来ると、炉の中から、燃える粗朶を一本とりあげて、すっと、老婆の鼻さきへ、近づけた。
「熱っ！」
老婆は、思わず、声をたてて、のけぞった。
「ははは……、唖ではなかったのう、婆さん」
健康斎は、笑った。

柿丸は、老婆の枯木のような片腕をねじあげた。
「ばば、白状せぬと、この腕を、へし折るぞ！」
老婆は、苦しがりつつ、かぶりを振った。
「知、知らぬ！」
「知らぬとは、云わせぬぞ！　この古狸め！」
柿丸は、本当に、老婆の腕を折ろうとした。
「待った、待った」
健康斎が、あわてて、とめた。
「婆さんの腕を折ったところで、おぬしの連れをさらって行った悪党どもの行先は、判りはせん」
「先生っ！　た、たのむ！　お手前様が診なければならん患者が、さらわれたのでござるぞ！　お手前様も、さがし出す義務がござる！」
「まあ、おちつかっしゃい」
健康斎は、別の燃木をひろいとって、老婆の鼻さきへ、近づけると、
「女子をさらって行ったのは、なんという悪党どもであったかな、婆さん？」
と、問うた。
老婆は、ためらっていたが、ひくい声音で、ぼそぼそと、こたえた。
「青助と、黒太じゃな。よし、わかった」
健康斎は、柿丸に、「参ろう」と、うながした。
柿丸は、老婆を、殺してもあきたらぬ憎いものに、睨みつけていたが、健康斎のおちついた態度に、怒りをおさえて、ついて、出た。
健康斎は、歩き出しながら、
「悪党の巣というものは、そう多いものではない。見つけるのが、かんたんではないが、さりとて、むつかしいというほどのこともない」
と、云った。
「しかし、愚図愚図して居っては、梨花様は、けがされてしまうのじゃ！　先生、はようして下され！」
旅籠を出て、橋を渡りかけたとたん、健康斎が、
「ほう、参ったぞ」
と、にやりとした。
破落戸（ごろつき）ていの男が二人、酔った足どりで、近づいて来たのである。
「おい、お前ら――」
健康斎が、声をかけると、男たちは、
「おう、先生じゃねえか」
「こんなところで、亡霊をとっつかまえて、薬餌でも採ろうってえのかい」
「亡霊の代りに、つかまえたい奴が居る」
「誰でえ、そいつは――？」
「青助に、黒太だ。どこに居る？」
「そこにゃ、いねえのかい？」
「婆さんが、どこかへ行った、と申したな」
「それじゃ、きまってらあ。毒蛇様だ」
「毒蛇様？　あの神社は、焼け落ちたはずだが――」

「半焼けだ。毎夜、賭場になっているぜ」
「その神社は、どっちだ？」
柿丸が、一人の胸ぐらをとった。
「わしが知って居る」
健康斎が、歩き出した。
柿丸は、健康斎の腕をつかむと、
「たのむっ！　走って下され、先生！」
と、ひっぱった。
「待て、待て――。近頃、とみに心悸亢進で、走るのは、苦手じゃわい」
健康斎は、ひきずられながら、悲鳴をあげた。
柿丸は、いきなり、健康斎を、
「ござれっ！」
と、背負った。
「ほっ、これは安楽じゃ」
「方角を指示なされい」
柿丸は、奔り出した。
牛尾山麓の蛇ケ淵までは、かなりの距離であったが、柿丸は、一気に、疾駆した。
「あれじゃ――」
柿丸の背中から、健康斎が指さすところに、巨大な化物のように、なかば焼け崩れた社殿が、ぬっと、松の木立の中にそびえていた。
柿丸は、とっさに、健康斎を、そこへ、ほうり出しておいて、矢のごとく突進して行った。
だが――。
境内に立った瞬間、ぴたっと足を停めて、眉宇をひそめた。
社殿の中から、のんびりとした歌声が、ひびいて来たのである。

花をな、へだてそ垣ほの梅
さてこそ、花の情なれ
花に三春の約あり
人に一夜をなれそめて
後いかならむ、うちつけに
心は空に、奈良むらさきの
………

健康斎が、柿丸のそばへ寄って来て、社殿内から、ひびいて来る歌声に、
「ほう、これはまた、いささか、状況がちがったな」
と、云い、
「はてな？　あの声には、ききおぼえがあるぞ」
と、云った。
二人は、肩をならべて、社殿へ入って行った。
社殿内のうすぎたない光景は、すでに、百平太を中心にした賭博の場面で、説明した通りである。
そこに、大あぐらをかいて、春の歌をうたっているのは、破戒僧天満坊にまぎれもない。
かたわらに、梨花が、横たわって、白い寐顔をみせている。

青助と黒太は、太柱に、ぐるぐる巻きに、くくりつけられて、世にもなさけない面になっている。
青助と黒太は、梨花をもてあそぶべく、ここへかつぎ込み、天満坊に、とりおさえられたのである。
「ほう……、これは、珍しいの。天満坊ではないか」
健康斎が、声をかけた。
天満坊も、健康斎を視て、
「なんだ、藪医者か――」
と、笑った。
旧知の間柄であった。
柿丸は、梨花のそばへ寄って、
「梨花様、こらえて下され。それがしが、あのいかがわしい旅籠へおつれ申したために、かような目にお遭わせして、申しわけござらぬ」
と、頭を下げた。
天満坊が、健康斎に、小声で、
「美人薄命じゃな」
と、云った。
健康斎は、梨花のそばへ寄って、額へ手をあてた。
燃えるように熱い。
「そなた、これまで、血を喀いたかな？」
健康斎は、たずねた。
「はい――」
梨花は、まぶたを閉じたまま、うなずいた。
「養生が足らぬな。滋養物も、摂って居らぬ」
そう云って、柿丸を、視かえした。
柿丸は、黙って、頭を下げた。
天満坊の方は、青助と黒太をひきたてて、社殿を出た。
「春が来たと、風がささやいて居る。……どうじゃ、お前ら、春にさきがけて、散るか」
青助と黒太は、地べたへ、へたばりこむと、額を土へこすりつけた。
「ははは……、虫けらも、せっかくめぐって来た春を、生きのびたいか」
天満坊は、二人を解き放ってやると、また、のんびりと、唄いはじめた。

生命ある日に

柳の遊廓、という。
つい数年前までは、小さな沼をとりかこんで、柳が五六本、ものさびしく、水面に、枝をたらしていたのであるが、大内裏を抜け出した美しい女官と、身分のひくい青ざむらいが、からだをひとつにしばって、沼に投じたのを、きっかけにして、にわかに、絃歌が夜半までひびく色里になってしまったのである。
大門までの二町あまりの往還には、柳の並木が植えられ、駕籠やらかくれ笠の遊客が、行き交う景色は、一度通った者には忘れられないものとなる。
彼方に、大門が、くろぐろと構えられ、その内側に、無数の灯が、なまめかしく、またたいている。
心うきうきと、今様を口ずさみながら、急ぎ足に近づく男たちの脳裡からは、妻子のことや家のことなど、どこかへ、ふっとんでしまっている。
その遊客の群に交って、くるわへ行くにはふさわしからぬ人物が一人。
おそろしく巨きな幟に、長剣を一振り、くくりつけたのを、肩にかついでいる。
六尺ゆたかの巨軀も目立つが、それよりも、着たきりのぼろ小袖が、すれちがう者に思わず、顔をそ向けさせるほど、プンとくさい。
九十九谷左近は、多門夜八郎に挑戦した日を明日にひかえて、遊廓にあそびにやって来た。
大門をくぐると、たちまち、左右に並んだ青楼から、袖ひき婆さんたちの声が、かかって来るのだが、左近が通りかかると、
「おや、いやだ」
とか、
「なんだろうね、ありゃ――」
とか、露骨な声が、あびせられた。
左近は、一向に耳にとめる気色もみせず、悠々と通って行く。
やがて――。
とある青楼の前に立ちどまると、
「ここだな」
と、つぶやいた。
床几に腰かけていた袖ひき婆さんが、うさんくさげに、睨み上げて、
「うちは、お公家なら、六位の蔵人、お武家なら、大大名の近習――」
と、云った。
左近は、その言葉を黙殺して、入って行こうとした。
「ちょいと！」

婆さんは、あわてて、前をさえぎった。
「失礼だけど、うちは、ご牢人衆を上げないことにしているんですよ」
「おれは、牢人者ではない」
「どう見たって、牢人さんとよりほかに、受けとり様がありませんよ」
「あいにくだが、おれは、兵法者だ」
左近は、そう云って、婆さんの膝へ、小粒銀を二つばかり、投げた。
「へえ！」
袖ひき婆さんは、目をまるくして、左近を、まじまじと見上げた。
こんなたくさんの心づけをくれる客は、滅多にいるものではない。
乞食同然の装（なり）をした兵法者が、いったい、どうしてこんな気前のよさを示すのか。
婆さんは、うす気味わるくさえ感じた。
「花鳥大夫に会いたい」
左近は、云った。
「へえ――」
婆さんは、急いで、奥へ入りかけてから、客の名をきいていないのに気がついた。
「どなた様で――？」
「むかしの知りあい、と云ってもらおうか」
「かしこまりました」

婆さんに耳うちされた下部（しもべ）の女が、左近を部屋へ、案内した。
あまり上等の部屋ではなかったが、左近は、その裏座敷にあぐらをかくと、
「まともに、夜具に寝るのは、幾年ぶりかのう」
と、云いつつ、下部の女にも、小粒銀を投げてやった。
女は、びっくりして、左近を視、
「お気に召さねば、ほかの座敷に、ご案内を――」
と、云った。
「手の裏を返したように、扱うな。おれは、気が変ると、同じ銀でも、こっちの方で、お前の首を刎ねるかも知れぬぞ」
左近は、にやりとした。
女は、首を縮めて、にげて行ってしまった。
「こらっ、酒を忘れるな！」
左近は、家中にひびき渡る大声をあびせた。
酒は、はこばれて来たが、遊女は、容易に現れなかった。
さびしい顔つきの禿が入って来て、かたわらへ、ちょこんと坐って、酌をしようとしたが、
「要らぬ」
とことわって、左近は、手酌で、飲みつづけた。
ようやく、廊下に、草履の音が、近づいた。
「こちらかえ――？」
きれいな声がした。
「あい」

禿が、すぐ立って、障子を開けた。
俯向きかげんで入って来た遊女は、両手をつかえて、挨拶してから、顔をあげたとたん、
「あ！」
と、おどろきの声をあげた。
「二年ぶりだな、青蓮尼――」
左近は、遊女を、そう呼んで、薄ら笑った。
遊女は、禿に、
「呼ぶまで、あちらへ――」
と、命じた。
禿は、敏感に、二人の顔を、見くらべておいて、立って行った。
遊女は、二人きりになると、
「青蓮尼は、二年前に、亡くなりました」
と、云った。
しずかな声音であった。
「生れかわって、花鳥という大夫が、ここに在る、か――。ははは」
左近は、笑い声をたてた。
「どうだな？　あのまま、山科の古寺で、尼として、勤行三昧にくらしていた方が幸せであったか。それとも、こうして、紅灯の中で、夜毎、うかれ客を対手にして酒をくらっている方が愉しいか。……それも、ききたくて参った」
「貴方様は、地獄へつきおとした女が、どのように、みだらな色にそまったか、見とどけに参られましたのか？」

花鳥大夫は、じっと、左近を見つめた。
「なんの……。おれは、そなたを、金をはらって、抱きに来た。ただの客にすぎぬ」
「……」
花鳥大夫は、左近の冷たい面貌を見つめているうちに、二年前のいまわしい記憶が、まざまざとよみがえったか、視線を膝に落した。
灯かげでつくられた陰翳が、眉目を、さびしいものにした。
二年前――。
山科の山道を通っていた左近は、不意に、五人の飢えた牢人者に、襲われた。
山賊をはたらくのは、はじめての連中であった。
きわめて、平凡な風貌の、どこかの武将の家来になれば、可もなく不可もない一員になりそうな牢人者たちであった。
左近は、久しぶりに、愛刀を血ぬらせる快感に躍り立って、五人を、みるみる斬り伏せていった。
左近の凄じい腕前と剣気は、牢人者たちに、たちまち、恐怖の表情をつくらせた。
仲間三人を斬られた残りの二人は、一人は刀をほうり出し、一人は松の幹に背中をすりつけて、許しを乞うた。
しかし――。
左近は、寸毫の容赦もせず、一人を袈裟がけにし、もう一人の顔面を真二つにした。
その瞬間、女の悲鳴があがった。

すこしはなれた地点に、三人の尼僧が立ちすくんで、この光景を目撃していたのである。
二人の尼僧は、年老いていたが、一人は、目のさめるような美貌であった。
「むごい！」
年老いた尼僧の一人が、云った。
「むごい？」
左近は、薄ら笑って、白刃を腰に納めてから、近づくと、
「五人に一人、しかも、斬らねば斬られる死地に置かれたのだ。……なにが、むごいのか、教えてもらおう！」
「か、かたなをすてて、許しを乞う者を、斬るとは、あまりに、残忍ではありませぬか？」
老尼は、恐怖を抑えて、左近を責めた。
左近は、三人の尼僧を眺めやって、不意に哄笑した。
それから、
「むごい、とか、残忍、とか――それが、どんなものか、貴女がたに、お教えいたそうか」
と、云いはなったことである。
尼僧たちは、左近が放つ殺気をあびて、怯えた。
次の刹那――。
左近の腰から、白刃が、閃光を描いた。
尼僧たちは、悲鳴をほとばしらせて、遁れるいとまもなく、峰撃たれて、つぎつぎと、その場へ、崩れ落ちた。
意識をとりもどした時、年配の尼僧二人は、それぞれ、松の幹へ、後手にくりつけられていた。
そして――。
左近は、若い美しい尼僧を、地べたに、仰臥させ、白衣の前をひきめくって、あられもないすがたにさせていたのである。
「尼がた――」
左近は、老尼たちへ、冷たい視線をくれて、
「仏に帰依（きえ）しているとか、阿弥陀の十方無碍（じっぽうむげ）の光に浴しているとか、せいぜい、自分をだますのに、日々あけくれて居る模様だが、生き身を持っているかなしさを、ひとつ、とくと、見とどけるがいい。……頭をまるめようが、法衣をつけて居ろうが、女は女だ。女は、男に抱かれるようにできて居るのだ」
うそぶいておいて、片手をのばすや、思いきりみだらなしぐさを開始したのであった。
二人の尼僧は、顔をそ向け、経文をとなえて、その残忍な光景に堪えようとした。
しかし、左近にうそぶかれたごとく、本能に加えられる強烈な刺戟に、うち克つすべはなく、若い美しい肢体の犯されるさまから、ついに、視線をそらしたままではすごせなかった。
二人とも、すでに四十路（よそじ）を越えた未通女（しょじょ）であったが、それだけに、好奇心のそそられかたは、名状し難い烈しさであった、といえる。
左近は、目撃させることの快感にかられつつ、思うさまに、その美しい白いからだを、もてあそんだのであった。

左近が、その上から、身をどけた瞬間、若い尼僧は、はじかれたようにはね起きて、断崖から身をおどらせて、果てようとした。
それを、さえぎって、抱きかかえた左近は、老尼たちへ、
「どうする、この女を？」
と、問うた。
「許すか、それとも、追放するのか？」
左近は、がっくりとうなだれた若い尼僧へ、
「あの二人が、そなたを許すか、許さぬかで、仏の有無が判るぞ」
と、ささやいておいて、その二人を、松の幹から、解いてやったのである。
左近の予測は、的中した。
二人の比丘尼（びくに）は、自由の身になるや、互いに顔を見合せ、急に法衣をひるがえして、駆け去ってしまったのである。
若い尼僧には、一瞥すら与えずに、すて去った。
左近は、冷笑した。
「どうだ、これが、現実というものだ。そなたが、おれに犯されたのは、不可抗力による不運であったのだ。まことに、阿弥陀如来の光があるものなら、不運にも傷ついたそなたを、広大無辺の慈悲によって、包んでやるべきではないのか。あの尼めらは、そなたを、すてて、逃げたぞ。仏門に帰依した者に、あの冷酷があってよいのか。どうだ？これでも、そなたは、なお、阿弥陀を信じるのか？」
左近は、尼僧の肩をつかんで、烈しくゆさぶると、哄笑したことであった。
あれから、二年――。
青蓮尼は、この柳の遊廓で、花鳥大夫と名のって、一二をあらそう傾城となっているのであった。
尼から遊女へ――女として、これほどの烈しい変りかたをした者は、万人に一人もあるまい。
いま、左近は、花鳥大夫を、眺めて、二年前を思い出しながら、にやりとした。
左近は、青蓮尼をつれて、京の都へ出て、三月あまり、一緒にくらしたのである。
そのあいだに、左近は、二度ばかり、青蓮尼から、ねむっているところを、短剣で、刺されようとした。
左近は、わざと、ねむったふりをして、女の様子をはかったものである。
青蓮尼は、切っ先を、左近ののどへ、擬しながらも、ついに、突くことができなかった。
憎みつつも、いつの間にか、左近に抱かれることを欲している自分が、あさましく、いとわしく、そして、あわれで、青蓮尼は、ひそかに、泣きつづけたことだった。
青蓮尼が、いっそ、女が地獄の使いであるならば、おのが身を泥沼に沈めてみよう、と決意したのは、左近によって、官能をめざめさせられた瞬間であった。
青蓮尼は、左近に、そのことを告げて、別れたのであった。左近は、冷たく笑って、敢えて止めようとはしなかった。

た。
「傾城になって、そなたは、何をさとったな？」
左近は、たずねた。
「男が、けだものであることを、あらためて、さとった、と申上げたならば、貴方様は、ご満足でありましょうか？」
「ふん――」
「わたくしは、男が、大層かわいい生きものであることを、知りました」
「なんだと？」
左近は、あきれて、目を光らせた。
「わたくしは、貴方様によって、男は、おそろしいもの、と教えられて参りました。ところが、この世界に入ってみて、男は、案に相違して、大層かわいい生きものであることを知りました」
「その理由をきこうか」
左近は、花鳥大夫を、見すえた。
「こうした世界は、嘘と嘘でかためているはずなのに、いのちがけで、傾城に惚れる男が、一人や二人でないことを、わたくしは、知りました」
「そなたには、幾人でも、男は惚れるだろう」
「いえ。わたくしのことではありませぬ。……わたくしどもの目には、まさしく地獄の使いの悪性女に、善良な商人が、無我夢中になって、かよいつめ、十年もかかって、たくわえた金を、のこらず、つかいはたす例を、ひとつふたつならず、みせられました。乞食同様になって、すごすごと、どこかへ去って行くあわれな後姿を眺めて、わたくしは、男が女よりも、どれだけか、お人好しであることか、としみじみ、さとりました」
「だが、同時に、ここには、蛇蝎のような悪党も、うようよしているはずだな」
「蛇蝎にみえる男でも、心のどこかには、女に対する弱さ、もろさを持って居ります」
花鳥は云った。
「大層慈悲ぶかいことだ。それでは、この九十九谷左近を、許す寛大さもあるだろう」
「……」
花鳥は、こたえるかわりに、手をたたいた。
禿が入って来た。
「離れに、席を――」
花鳥は、命じた。
「おれは、ここでかまわぬ」
左近が云うと、花鳥は、あでやかな微笑をかえして、
「今宵かぎりのおいのちなれば、もてなしに、心をこめたく存じます」
と、云った。
「今宵かぎりの生命？」
左近は、眉宇をひそめた。
「おれが、多門夜八郎に挑戦したことを、そなた、知って居るのか？」
「都のまん中に、高札を立てれば、噂はここへもつたわり

ます」
「おれが、どうして、多門夜八郎に敗れると、きめているのだ？」
「貴方様の影のうすさを、入って来た瞬間に、感じました」
「はっはっは……」
左近は、声をたてて、笑った。
「おれが、影がうすい、というのか。これは、そなたが、おれを憎むかわりに、はじめての男を忘れかねている、という証拠になるぞ」
そう云って、また、声をたてて、笑った。
離家は、一戸建ての茅葺屋根で、小松にかこまれていた。
花鳥は、左近を、そこへみちびくと、入口で、頭をまわし、
「お泊りなされるのですね？」
と、たずねた。
「そなた次第だ」
左近は、こたえた。
「わたくしは、遊女ゆえ、お客がのぞむままになります」
「花鳥大夫は、わがままで、客をえりごのみすると、噂にきいて居るぞ。まして、自分を、この泥沼へつき堕した男を、黙って迎えてくれようなどとは、考えられなかった」
「そのご心配はありませぬ」
室内は、炉で燃える榾柮（ほだ）火で、あたたかかった。
炉をへだてて対坐すると、左近は、禿がはこんで来た酒を、手酌で飲みはじめた。
花鳥は、なにやら居心地わるそうな左近を見まもりながら、
「貴方様は、どこやら、すこし、お変りになりました」
と、云った。
「べつに、当人は、変ったとは思って居らぬ。そなたと別れてからも、兵法修業を名目にして、多くの人を斬ったぞ」
「わたくしのことを、お忘れにならずに、会いにみえましたのは？」
「む――」
左近は、ちょっと、首をひねって、考えた。
花鳥を視かえした左近は、自嘲に似た微笑をつくった。
「おれのこれまでの生涯で、おれをののしらなかった女は、そなた一人だけだ」
「……」
「内心では、どれほど、おれを憎んでいたか、それは、知らぬ。しかし、そなたは、表面では、おれにむかって、一言も、うらみがましいことを云わなかった。それが、別れたあとで、おれに、そなたを忘れられなくしたのだろう」
「………」
「と申して、おれは、いまさら、あやまる存念はない。……おれは、そなたを、抱きに来た。抱かせるか？」
「売りもののからだでありますゆえ、こばみは、いたしませぬ」

「そうか。……いや、氷のように冷たいからだでも、おれは、一向にかまわぬ」
左近は、たてつづけに、盃をあけた。
花鳥は、榾柮火が乏しくなったので、細薪をくべ足した。と――。
左近が、炉の中へ、首をのめり込ませるように、上半身を傾けて来た。
花鳥は、じっと、左近を見まもった。
「……ねむい」
呟いた左近は、いったん、姿勢をととのえてから、ぐらりと、横臥しになった。
とみるや、もう、寐息をたてていた。
正体をうしなった左近へ、じっと、視線をそそぐ花鳥の表情は、別人のように、冷たく、きびしいものになっていた。
酒には、ねむり薬が、混じてあったのである。
――わたくしは、この男を、亡きものにするために、ねむらせたのであろうか？
花鳥は、自分に問うた。
ねむり薬を混じる決心をしたのは、左近から、「そなたを抱きに来た」と云われた瞬間であった。
どんなイヤな客に身をまかせても、左近にだけは、許せなかった。
そのぬけぬけとした言葉をきいた瞬間、花鳥は、はじめて、左近を憎んだのである。
昨日まで、時おり、脳裡にうかぶ左近の俤（おもかげ）は、むしろ、ふしぎに、なつかしいものであった。
左近に対してすこしも憎悪の念がない自分が、ふしぎなくらいであった。
この二年間、花鳥は、無数の男を眺めているうちに、左近という人物が、判って来るような気がしたのである。
柳の遊廓へ来る客の大半は、嘘つきであった。本性をかくして、女を抱くのが、客というものであった。
花鳥は、左近にむかって、
「男は、かわいいもの」
と云ったが、それは、左近に示す虚勢でしかなかった。
花鳥自身の心の中には、客たちの嘘でかためた遊びぶりが、堪えがたいものとして、あったのである。
思えば、左近は、おのれをいつわらぬ男であった。おのが意志のままに行動する男であった。たまたま、その犠牲になって、尼僧から遊女へ、転落したとはいえ、花鳥は、左近から裏切られて、そうなったのではなかったのである。
花鳥は、左近のような男を、まだ一人も、客のうちに、見出してはいなかった。
二年のあいだに、花鳥は、いつの間にか、
――自分の生涯では、やはり、あの人だけが、唯一のおとこであった。
と、信じるようになっていたのである。
その左近が、客として姿を現して、
「そなたを抱きに来た」

と、云ったので、花鳥は、思わず、かっとなったのである。
なぜ、正直に、
「明日、おれは死ぬかも知れぬゆえ、女のからだを抱いておきたい」
と、云わぬのか。
左近も、やはり、客となると、嘘つきでしかなかった。
花鳥は、その憤りで、左近をねむらせてしまったのであったが……。
正体もなくねむる左近を、じっと見まもるうちに、花鳥は、
――このひとも、孤独なのであろうか？
ふと、うたがわずには、いられなかった。

化野決闘

夜明け――。
多門夜八郎は、広沢池の畔を、ゆっくりと歩いていた。
暁闇に鹿（しし）ガ谷の古刹を出て来たのである。そこには、可念の紹介で、三泊していた。
といって、べつだん、決闘にそなえて、心気を冴えさせるべく、坐禅を組んだわけではない。
ただ、三日間、無為にすごして来ただけである。
剣に拠って生きようとしている身ではなかった。決闘に、生命が燃えるわけではない。
夜八郎は、三夜を、古刹の方丈ですごしながら、逝った老僧の言葉を、脳裡に、その声とともによみがえらせていた。
老僧は、云ったことである。
「お許は、姫の墓の前で、おのれの中にある敬虔をさとった。お許は、こん後は、いままで通り、無目的で、風の吹くままに、生きて行くことは、かなわぬ。何かを求め、何かを為そうとして、生きて行かねばならぬ」
そのために、九十九谷左近との試合をするがよい、と老僧は、すすめたのである。

夜八郎は、べつだん、自分が一夜にして、人格が一変したとは思えなかった。

したがって、老僧の言葉に、納得することはできなかった。

左近の挑戦に応じよう、と肚をきめたのは、老僧が、

「左近の技は、お許よりも秀れて居るかも知れぬ」

と、云ったからである。

敵に六分、おのれに四分の勝目――と、測った夜八郎は、ふと、

――ここらあたりが、おれの散り秋（どき）かも知れぬ。

と思ったのである。

宵に寐て、夜半に目ざめた夜八郎は、井戸端へ出て、冷水をかぶった時、ふしぎなすがすがしさをおぼえた。

老僧が、どこからか、微笑をもって見まもっているような気がした。

夜八郎は、苦笑した。

――おれを、悟りに近づけようとしてくれているのか。

死後の霊魂の存在などを、すこしも信じていない夜八郎は、老僧の暗示にかかったおのれに、意外な善良さを見つけた。

山門を出ようとすると、いつの間にか、そこに、可念が立っていて、

「ご武運のほどをお祈りいたします」

と、挨拶した。

もし敗れたならば、葬ってくれるように、この若い僧侶にたのんであった。

夜八郎は、黙って、頭を下げておいて、可念の前を過ぎた。

可念は、あとから、決闘場へ来るであろう。

夜八郎は、おのが屍（むくろ）の前で、可念が誦経する光景を、想像しながら、暁闇の中を歩いた。

そして、

――おちついているこの気持が、いささかの悟りの境地というのなら、悟りとはさしたるものではなさそうだ。

と、考えたことである。

化野（あだしの）への近道をえらんで、膝までからまる雑草の野の中に、細径をさがそうとした時、前方を、鹿が音もなく影を掠めさせた。

瞬間――。

夜八郎の脳裡に、天啓のごとくひらめくものがあった。

足を停めて、雑草の中へ、身を沈めた夜八郎は、鋭く、野へ視線を配った。

南方の松の木立に、鹿の影が大小ふたつ。親子であろう。

――よし！

夜八郎は、距離を目測した。

鹿たちは、おそるべき敵が近くにひそむとは知らずに、木立の中から、出て来た。

夜八郎は、頃あいを見はからって、石をひろうと、その木立の中めがけて、投じた。

幹を打つ音とともに、鹿たちは、風の迅さで、跳躍しはじめた。

その速影が、二間の前方に来るや、夜八郎は、猛然と、とび出した。

すでに、その時、二刀を抜きはなって居り、夜八郎は、それを、ともに、肩にかつぐように、後方へ流していた。

危険に対して、疾駆の護身本能しか持たぬ鹿たちは、夜八郎の姿を、みとめたせつな、もう方角を転じていた。

それをのがさず、夜八郎は、

「うむっ！」

と、気合もろとも、二剣を、双手から放した。

二条の閃光を発した白刃は、吸い込まれるように、鹿たちを襲った。

雑草へ伏した鹿たちは、もう動かなかった。

ゆっくりと近づいた夜八郎は、長剣短剣とも、鹿親子の頭に突き立っているのを、見とどけた。

夜八郎は、鹿の脚に勝ったおのが迅業に、満足をおぼえた。

二剣を、腰に納めて、歩き出そうとしたとたん、夜八郎は、近くに人が立っているのに気づいて、頭をまわした。

ずんぐりと肥った、ぼろ法衣をまとった僧体の男が、雑草の中に出現していた。

視線が合うと、男は、にやっとした。

「大層な手練でござるの、多門夜八郎殿」

「……？」

夜八郎は、自分を知っている見知らぬ男を、鋭く見据えて、沈黙を守った。

「これから決死の勝負をなさるにあたって、おのが迅業を試されたかな」

「……」

「しかし、そのような試しをされるほかに、もうひとつ、お手前に、して頂かねばならぬことがござる」

「お主、何者だ？」

「これは、申しおくれた。天満坊という乞食坊主でござる」

「それがしに、何をせよ、というのか？」

夜八郎は、天満坊に、たずねた。

「会って頂きたい人が、一人ござるな」

天満坊は、そう云って、坊主あたまを、ガシガシと、かいた。

「それがしには、別れを惜しまねばならぬような者は、一人も持たぬが……」

「それが、ござるな」

「……？」

「若い、美しい女人（にょにん）でござる」

「おんな？」

夜八郎は、眉宇をひそめた。

「左様、それも、氏素姓正しい、上臈でござるわい」

「おぼえがない」

「梨花殿じゃ」

「梨花？」
「おのれが抱いた女人の名まで、忘れるとは、なんとつれない御仁かのう」
「むだな足どめは、止してもらおう」
夜八郎は、歩き出した。
梨花のことは、すぐ、思い出していたが、未練のある女性ではなかった。
偶然に救い、気まぐれに犯し、そして、途中で、すてた娘であった。
「待たっしゃい！」
天満坊は、大声をあげて、夜八郎を、とどめた。
「梨花殿は、お手前を、生涯の良人と思いさだめて、あとを追うて、この京へ参ったのじゃ。お手前にとっては、その場かぎりのなぐさみものであったかも知れぬが、若い女にとっては、はじめて操をくれた男を、ひたむきに慕うのは、その心情の美しさを証（あか）すものだ。お手前は、会ってやらねばなり申さぬ」
「よけいなお節介であろう」
「いいや、さにあらず。鹿を仕止めて、おのが腕を試してみたところで、九十九谷左近に、必ず勝てるとは、限って居らぬ。陽が中天に昇った頃には、お手前は、化野のくさむらに、冷たくなって居るかも知れぬ。そうではない、と誰人も保証することはできぬ。……万が一、お手前が、討たれたならば、せっかく、京へたどりついた梨花殿は、いかが相成る。ひと目だけでも、会っておけば、この後、尼になろうとも、思い出が、梨花殿を生かして行くのではあるまいかな」
「……」
「梨花殿自身が、さほど長い生命とも思えぬやまいの身であれば、お手前に会えぬのと会うのとでは、明日からの心がまえが、どれだけちがうか——そこのところを、考えてやって頂こう」
「……」
夜八郎は、野の果てへ、暗い視線を放っていたが、しずかに、天満坊を、かえり見ると、
「いま、どこに？」
と、たずねた。
「参られい」
天満坊は、夜八郎を、いざなった。
夜八郎は、ちょっとためらっていたが、
——女の心の哀しさを、測れるようになったおのれではないか。
と、自身に云いきかせて、そのあとにしたがった。
天満坊は、飄々たる歩きかたで、ひくく、唐の陸魯望の離別詩を、口ずさんだ。

大丈夫涙なきに非ず
灑（そそ）がず離別の間
剣に依りて樽酒に対す
遊子の顔を為すを恥ず

ひょいと、夜八郎をふりかえるや、

「多門殿は、女子というものを、どう思われるかな？」
と、問うた。
「べつに、どうとも思わぬが……」
「女子は、可愛いもの、と思われたことは、ござらぬかな？」
「……」
「はっはっは……。この乞食坊主が、妙なことを云い出したので、面くらわれたようじゃ。……これで、若い頃、女子に死ぬほど、恋したことがござる。笑われるな」
「笑いはいたさぬ。……それで、その女子とは——？」
「女子には、良人が居り申したわ。その良人が、極道の限りをつくす悪党めで、愚僧は、とうとう、肚をすえかねて、討ち果してくれようと、決意したものでござった。ところが、女子め、良人を斬るなら、さきに、自分を殺してくれろ、と申したわ。この時の愚僧の気持は、まことに、名状し難いものでござったな」
「……」
「あれほど、自分をいためつけている極悪人を、かばおうとする女心が、どうしても判らなんだのでござる。愚僧、あっけにとられて、言葉もなかったげにござる」
「……」
「女子という者は、とうてい、男の理解し難い心根を持っている、と絶望して以来、こちらから、女子には近づかぬことにいたした」
「……」
「多門殿には、そのような経験は、おありではござらぬかな？」
「ない、とこたえれば、嘘になる。しかし、ある、とこたえるのも、はばかる」
夜八郎は、朝靄のはれて行く野へ、目をはなちながら、あいまいな返辞をした。
「それは、また、どういう経験でござろうか？」
「お主のように、こともなげに語ることのできぬ思い出なれば……」
「ああ、さようか。きかぬことにいたそう。ただ、ここで、愚僧が申上げておきたいのは、むこうの森の中の家で、お手前を待つ女人は、女子の心の美しさを持っている、ということでござるわい」
夜八郎が、案内された、その森の中の小さな家は、いかにも、美しい女性が待つにふさわしい風雅なたたずまいであった。
「では——」
天満坊は、立ちどまった。
「ここまでの案内役が、愚僧のつとめでござる」
そう告げて、くるっと踵をまわした。
木立の中に入ると、まだ、暁闇がのこっていた。
夜八郎は、戸口に立つ人影を、視た。
柿丸であった。
夜八郎が、その前に立つと、柿丸は、黙って、頭を下げた。口下手な男なのである。

「お主が、今日まで、あの娘の面倒をみていたのか？」
「行きがかりにて……」
柿丸は、ひくい声音でこたえた。
夜八郎は、この誠実で朴訥な若者には、なつかしさをおぼえた。
夜八郎が斬りすてた男たちを、黙々として埋葬してやった柿丸である。
この戦乱の浮世に、縁もゆかりもない、しかも悪党に属する男たちの遺骸を、埋葬してやる誠実を持ちつづけることは、貧しい放浪者として、まことに、むつかしい。
この若者なら、おそらく、死ぬまで持ちつづけるに相違ない。
今日まで梨花を世話して来たのも、無償の無心がなければ、できるわざではない。
梨花が、夜八郎の妻になることをねがっているのを見て、柿丸は、二人を会わせようと、そのことのみを考え、努力して来たのである。
「あの娘の容態は、いかがだ？」
夜八郎は、たずねた。
「わるうござる」
柿丸は、目を伏せて、こたえた。
「どこがわるい？」
「胸でござる。……しばしば、血を喀かれたのでござる。永くは、保たぬと、この京に住む名医が申されました」
柿丸は、夜八郎へ、哀訴するような表情をみせた。
しかし、口のうちで、云った言葉は、あまりに、ひくくて、夜八郎には、よくききとれなかった。
妻にすると云って欲しい、という意味の言葉であったろう。
夜八郎は、家の中へ入った。
煎じ薬の匂いがこもっていた。
夜八郎は、土間に立って、一瞬、眉をひそめた。
当然、臥床にあるものと想像していた梨花が、きちんと正座していたのである。
「あ――梨花様！　何をされるぞ！」
夜八郎のうしろで、柿丸が、おどろきの叫びをあげた。
梨花は、ずっと寐ていたのである。今朝、夜八郎を迎えるために、いつの間にか、起きて、夜具を片づけたのである。
夜八郎は、上って行くと、
「そなた、寐ていなくともよいのか」
と、何気ない口調で、云いかけた。
夜八郎の、もの静かな態度が、梨花のはりつめた心を救った。
「ご心配には及びませぬ」
梨花は、両手をつかえて、つとめて、気分のさわやかな様子を装おうとした。
――熱があるからだな。
夜八郎は、正座すると、
「柿丸が、そなたの世話をしていたようだな？」

「はい。柿丸殿がいなければ、わたくしは、もういまごろは、この世の者ではなかったと存じます」
「あれほど誠実な男は、珍しい」
「はい。万人に一人も居りませぬ」
二人は、すでに数年も一緒にくらしている夫婦のような会話を交していることに、気がついて、視線を合せた。
めぐり会いながら、肝心の話が、互いに、口にできぬもどかしさをおぼえた。
夜八郎の方は、むしろ、その方がよかったのかも知れぬ。
しかし、梨花の方は、たまらないことだった。
夜八郎は、あるいは、死に行くのかも知れないのである。
女としては、そのさいごの別れに、男の胸のうちで、泣いてみたい衝動があった。
しかし、夜八郎の、むしろ、そらぞらしげな態度に対して、じりとも寄ることさえも、叶わなかった。
かなり長い沈黙の時間が流れた。
梨花は、しだいに、堪えがたくなった。身の内には、火と燃えるものがありながら、じっと動かずにいなければならない苦しさは、名状しがたかった。
やがて――。
夜八郎が、
「約束の時刻が、迫った。行かねばならぬ」
と、告げて、膝を立てかけた。
梨花は、どきっとなって、夜八郎を仰いだ。
しかし、ただ、
「ご武運のほどを――」
それだけ云って、目ですがるよりほかに、とるべきすべを知らなかった。
「では――」
夜八郎は、一揖（ゆう）して、立った。
梨花は、ふかく頭を下げた。
その時――。
柿丸が、ぬっと土間に入って来た。
その表情は、憤懣をみなぎらせていた。
「……？」
見下す夜八郎へ、ぎらぎら光る眼眸で、睨みかえした。
「お手前様の血は、白う冷たく、にごってござるのか？」
夜八郎は、朝陽のさしそめた野道を、かなりの急ぎ足で、辿りながら、いま、柿丸からあびせられた言葉を、よみがえらせていた。
「お手前様の血は、白う冷たく、にごってござるのか？」
憎悪をふくんでいたのであれば、さまで、心にこたえはしなかったろう。
その声には、哀訴のひびきがあったのである。
柿丸とすれば、そう叫びたくなるのは、当然であったろう。
せっかく、八方をさがしまわった挙句、ようやく、夜八郎をさがしあて、梨花にひきあわせたのである。
二人が、期待に応えてくれる再会の光景をみせてくれた

ならば、柿丸は、それで、満足であったのだ。
なんという、そらぞらしい再会であったろう。なんという夜八郎の態度のつめたさであったことか。また、梨花も、幼女のようにからだをこわばらせて、じっとしているだけとは、あまりにも、じれったいことであった。
柿丸としては、思わず、叫ばずにはいられなかったのである。
それに対して、夜八郎は、黙って、わきをすり抜けて、おもてへ出たのであった。
そして——。
いちども、ふりかえらなかった。
夜八郎は、おのれの冷酷を、後悔はしなかった。
——おれに、ほかに、とるべきすべがあったか。
胸に問うてみて、それよりほかに、こたえは出なかったのである。
梨花に対しては、詫びる気持もなくはなかった。
しかし、心から愛している女性ではなかった。
梨花の必死な思慕に応えて、抱きしめてやるのは、おのが心をいつわることであった。
——いっそ、これで、おれをあきらめてくれるとよいのだ。
夜八郎は、いつの間にか、背後に、のこのこと従いて来る者があるのに気がついた。
「天満坊殿か？」
「左様——」
「それがしの最期でも、見とどける所存か？」
「まず、そんなところであろうな」
天満坊は、否定しなかった。
「それがしが、女に冷淡な会いかたをしたのを、御坊も、おこった一人か？」
「愚僧は、ただの案内役。男女の間の機微については、そ知らぬふりをいたすのが、方針でな」
天満坊は、高い笑い声をたてた。
それから、不意に、声音をあらためて、云ったことである。
「それよりも、お手前の五体には、油断がなさすぎるのう」
油断がなさすぎる、と云われて、夜八郎は、はじめて、天満坊をふりかえった。
「それは、どういうことか？」
「お手前は、女子に再会なされても、一瞬の油断もなかったのでは、ござらぬかな？」
「……」
「それは、無駄でござったな。女子は、お手前に、ただ、抱いて欲しい、とねがって居り申した。そのいじらしい女子に対して、一瞬の油断もせなんだとは、どういうことでござろうかな」
天満坊は、そう云って、大きなてのひらで、つるりと顔をなでた。
夜八郎は、苦笑して、

「修業のために生きては居らぬ」
と、こたえた。
「では、何故に、九十九谷左近の挑戦を受けられたな？」
天満坊は、肩をならべた。
「気まぐれ——であろうか」
「気まぐれにしては、対手が強すぎる」
夜八郎は、天満坊の表情が、ひきしまったのを視て、
「お主、あの兵法者をご存じか？」
と、問うた。
「知らなければ、このように、お手前につきまとって、心配はせぬ。左近は、剣鬼と申してもよい」
「……」
「なろうことなら、これから、ひきかえして、女子を安心させて頂きたいものだが……、それもなるまいな」
「お主に心配してもらう筋はないが……」
夜八郎が、そう云うと、天満坊は、にやっとした。
「多門夜八郎という仮名をもって、京洛を横行した若者が、いかなる素姓か——その当時から、愚僧は、存じ上げて居った」
「……？」
「いや、素姓などは、どうでもよいことだが、その若者を生んだ美しい婦人に、愚僧は、二度ばかりお目にかかったことがござる。いまも、その美しい容子（ようす）を、ありありと、想いうかべることができ申すて——」
「……」
「美人薄命、とはよく申した。ご不幸なかたであった」
「……」
夜八郎は、物心ついた頃には、その母と別れていた。
母は、美濃辺某という北面の武士の妻であった。その美貌が、仇となって、将軍足利義晴に、良人からひきはなされ、手ごめ同然に、犯されたのである。
夜八郎が、そのことを知ったのは、十五歳になってからであった。
夜八郎は、実父である足利義晴を、憎んだ。
将軍家は、夜八郎にとって、他人よりも冷酷な存在だったのである。
夜八郎は、生れて三月も経たないうちに、母のふところに抱かれて、兵火に追われて、都を遁れ出ていた。
畿内はもとより、紀伊、中国、山陰、北陸と、転々として、母とともに、移り住んだのである。
物心ついた頃には、相国寺境内の草庵に、ひっそりと、かくれていた。その時、すでに、母は、かさなる苦難に、病みやつれて、臥床（ふしど）に就いている日が多かった。
しかし、夜八郎は、母が亡くなった日のことは、ふしぎに記憶になかった。
いつの間にか、寐ていた母の姿が消えて、部屋は、ひろびろとしたものになっていたのである。
夜八郎の脳裡に、なお、いまもあざやかに焼きついているのは、相国寺鹿苑院が、兵火をあびて、炎上した光景であった。

地獄というものがある、と誰かにきかされていたが、その地獄が、自分の目の前にやって来たことを、夜八郎は、感じたことだった。
　おびえて立ちすくむ夜八郎を、不意に出現した一人の髯武者が、はせ寄って、
「さ——ござれ！」
と、背負ってくれたが、なんという安堵であったろう。
　その髯武者は、夜八郎を背負って、山野を疾駆し、近江坂本に陣営を構えていた足利将軍に伺候したのである。
　その時の光景も、夜八郎の脳裏に、なお、まざまざとうかぶ。
　義晴は、いかにも疲れたような様子で、曲彔（きょくろく）によりかかっていた。
　髯武者が、平伏して、
「お上、これは、和子様にございます」
と、ひきあわせると、義晴は、うさんくさいものをつれて来られたように、じろっと一瞥しただけで、一言、
「下げろ」
と、命じただけであった。
　夜八郎は、八歳であった。
　髯武者から、「和子様のお父上は、おそれ多くも将軍家でございまするぞ。日本一偉い方でございます」と、教えられて来たのであった。
　その人が、なんという冷淡な態度をみせたことであったか。
——こんな人は、父でもなんでもないぞ！
　夜八郎は、人間不信の孤独感を胸にわかせて、義晴を、にらんだことだった。
「お主——」
　夜八郎は、天満坊を、視た。
「わたしを、将軍家の許へ、背負って行ってくれた武者がいたが、もしや、お主ではなかったのか？」
「ははは……、おぼえはござらぬの」
　天満坊は、かぶりを振った。
　否定されると、夜八郎は、急に、——この僧に、まちがいないようだ。
と、直感した。

　ふっ、と左近は、目がさめた。
　瞬間、
「おっ！」
と、驚愕の声を発して、左近は、はね起きた。
　陽ざしが、明るく、室内へさし込んでいる。
「しまった！」
　左近の顔色は、変っていた。
　寝すごしたのである。
　多門夜八郎に対する挑戦の高札に、時刻を卯の刻（明け六つ）と指定したのは、自分の方である。
　その自分が、卯の刻を半刻もすぎて、目をさましたのである。

「しまった！　しまった！」
　天下にその卑怯を、わらわれるのは、自分の方ではないか。
　左近は、刀をひっつかんで、とび出した。
　すると、庭の伝い石の上に、あでやかに、春の花を剪（き）りとって、花鳥大夫が、たたずんでいた。
「お目ざめになりましたか」
　美しく微笑みかけた。
「そなた、おれの決闘時刻を知っていたはずだぞ！」
「存じて居りました。卯の刻でありましょう」
「それを知っていながら、すておいたとは、どういうわけだ！」
「あまりに、よくおやすみでありましたゆえ——」
「嘘をつけ！　おれに、恥をかかせる冷たい心であったのだろう。どうだ？」
「……」
「そうにちがいあるまい！」
　左近に、にらみつけられて、花鳥は、微笑を、顔から消した。
「貴方様は、ただ、酒に酔って、不覚にねむってしもうた、と思っておいでですか？」
「なに！」
「酒の中に、ねむり薬が、しのばせてあったとしたら？」
「なんだと！」
　左近の総身が、ぶるっと顫えた。
「おれを、ねむらせたと？」
「このわたくしの手で、貴方様の生命を奪おうとして——」
「なぜ殺さなんだ？」
「寝顔が、やすらかであったゆえ……」
「莫迦っ！」
　呶号しざま、左近は、花鳥を、蹴倒した。
　その時、なぜ、花鳥を、一刀両断にしなかったのか、後のち、左近は、思いかえして、ふしぎであった。
　柳の遊廓を、奔り出て行きながら、左近は、おのれの不覚に、五体を裂きたいほどの激情をわきたたせていた。
　左近が、化野の原野へ、駆け着いた時は、すでに、辰の刻（午前八時）になろうとしていた。
　左近は、血眼になって、八方を見まわし、
「多門夜八郎っ！　何処に？」
と、絶叫した。
　原野は、春のよそおいにつつまれて、ひっそりと、陽光を受けている。
　さらに、人影は、見当らなかった。
「多門夜八郎っ！　九十九谷左近が、ただ今、到着いたした！　仔細あって、遅れたが、卑怯心のためではないっ！」
　左近は、わめきたてた。
「出あえっ！　勝負するぞ！」
　すると——。
　くさむらの中から、むっくりと、坊主頭がのぞいた。
「お！」

左近は、目を瞠った。
「天満坊！」
「ははは……久濶。お互いに、健在でめでたい」
「見物に参ったのであれば、多門夜八郎の姿を見かけたろう。どこにいる？」
「勝負は、もうついたのではないかな」
天満坊は、とぼけ声を出した。
「おれは、たったいま、到着したばかりだぞ！」
「だからさ、もう勝負はついた。お主の負けじゃ」
「なんだと！」
「一刻ちかくもおくれたのじゃ。弁解にならぬ。お主の負けじゃ」
「仔細がある。おくれたのは、おれの意志ではない」
「いくら弁解してみてもはじまるまい。おくれたことは、消し様もない。多門夜八郎は、お主を、さげすんで、立去った」
「く、くそっ！」
左近は、満面朱となった。
天満坊は、にこにこしながら、左近を見まもって、
「負けたからには、いさぎよく、この決闘はあきらめることじゃな」
「あきらめるものか！　もう一度、高札を……」
「愚者（おろかもの）！　何を申す！」
突如として、天満坊の凄じい一喝があびせられた。
左近は、反抗的に、刀へ手をかけて、身がまえた。
「兵法者ならば、恥を知れ！　斬られて、地に伏した時、おのが刀が短かかったからとか、二刀を使えばとか、弁解してみたところで、はじまろうか！　約束の刻限がすぎれば、おのれが負けたのは、明白なる事実。それを、いさぎよくみとめぬばかりか、もう一度、高札を立てようなどと、愚行も沙汰の限り――。高札を立てて、天下にその卑怯をわらうのは、多門夜八郎の方だぞ。おろか者め！」

餓鬼

春はすぐに逝き、その年は、空梅雨で、すぐ夏を迎え、その異常な暑気が、疫病を生んで、日本全土へひろげた。
その恐怖に堪えて、ようやく生きのこった人々が、秋風に、ほっとしたのも束の間、冬将軍の襲来は例年にない早さであった。そして、貧しい人々が、多く、餓えて、こごえ死んだ。
年があらたまっても、人々は、なんの吉兆もおぼえず、今年はもっとおそろしいことが起るのではなかろうか、と怯えた。
兵乱はなおひきつづいていたし、気候の不順は、春を迎えても、なおつづいていた。
迷信ぶかい時代であった。
さまざまの流言がひろがり、まことしやかな不吉な予言が信じられ、日本全土の人々が、神仏に祈ることに、むだな時間をついやした。
めぐり来た春も、寒いままに、足早に去った。
と思うや、たちまち、異常な熱気が、大地を包み、空に一点の雲影もない日が、つづきはじめた。
そして、この日照りは、梅雨の季節を迎えても、変らなかった。雨雲は、地の果て、海の彼方にひそんで、さらに、起る気配はなかった。
何かにのろわれたような気候は、諸国の武将たちの闘志を、にぶらせたくらいであった。
去年も、旱魃であった。
今年も、旱魃は、うたがいもなかった。
そうなれば、武将たちは、みだりに、兵を動かすことを警戒しなければならなかった。
城に蓄えた糧秣を、大切にしなければならなかったからである。
武将らは、合戦を一時中止しても、領土内の百姓たちがかくし持っている米や麦を徴発することにした。
百姓たちは、奴隷の智慧をしぼって、隠匿のしかたが巧妙になっていたので、いたるところで、血が流されることになった。
この人為の暴力が、ますます、不吉な予言を生み、末世の惨状は、ひどくなるばかりであった。
当然――。
窮鼠、猫を嚙む光景が、現出することになった。
土一揆の蜂起である。
それは、まず、京洛において起り、大和へひろがり、そして、日本全土へひろがった。
すると、山法師も、牢人、野伏の集団も、横行しはじめた。
一揆は、まず、酒屋や土倉を襲撃し、めくら滅法に放火

してまわった。いわば、一種の狂人のふるまいであった。
だが、土一揆といっても、幾種類かに区別された。
悪党の集団は、破壊することに躍起になっていたが、農民の徒党は、徳政要求であった。
それは——。
およそ、三四百人の群衆であった。
どれ一人として、まんぞくな衣服をつけている者はなかった。過半数は、半裸であった。
鎧旗をひるがえして、街道を、黒雲のようにかたまって、奔って行く。
雲にかくれることを知らぬ太陽の下で、眩しくきらめくのは、鍬とか鋤とか、農具であった。刀をかざしているのは、かぞえるほどしかいなかった。
他の者は、棒をつかんでいた。
指揮をとる牢人の姿は見当らなかった。
ぜんぶが農民であった。女も子供も交っている。
指揮者を持たぬこの集団は、まさしく、今日を餓えきった貧しい人々であった。
街道の左右にひろがる広大な田野に、水は一滴もたまってはいないのである。地面は、ことごとく、ひび割れていた。
いつもならば、苗代は、青あおとして、田植えを待っている頃である。
苗代は、どこにも、見当らなかった。
二年間も、天から水をもらえない農民たちは、ついに、米麦を徴発した城主にむかって、憤怒を爆発させたのである。
伊吹野というこの平野は、肥沃な土地として、兵を起す武家たちの垂涎するところであった。
伊吹野が、田丸豪太夫という武将によって占領されたのは、五年前であった。
五年前までは、伊吹野の管領の実権は、西方にそびえる大庄山に蟠踞する奈良城義胤（よしたね）の手に在った。
田丸豪太夫は、伊賀の地侍から身を起した人物であった。
当時——。
武家衆、牢人、国衆と区別される階級があった。
国衆は、地侍・庄官を指す。牢人は、武家で、その所領からはなれた者。この牢人が、多く、土一揆の大将となった。また、武家衆に従って、合戦に身を投じ、勝利にみちびいたあかつき、何かの地位を得ようとする野望を抱いていた。
武家衆は、守護やそれに準ずるように大きくなった武家をいう。
すなわち、武家衆は、牢人や国衆（地侍）を集めて、強力な戦力をつくって、合戦を起したのである。
国衆の下に、耕作農民がいたのである。
田丸豪太夫は、そうした最も下級のさむらいであった。
おそるべき狡智と、五十人力と称せられる膂力をもって、田丸豪太夫が、武家にのしあがったのは、三十になったばかりの頃であった。

その武力によって、伊吹野から、奈良城義胤を追うに、わずか二十日あまりを要しただけであった。
伊吹野を奪った田丸豪太夫の苛斂誅求（かれんちゅうきゅう）は、言語に絶する凄じいものであった。
そして、圧政は、二年間の飢饉によって、さらに拍車をかけられたのである。
その圧政に追いつめられた農民たちの蜂起は、京洛や大和に於ける牢人指揮の土一揆とは、おのずから、質を異にしていた。
濛々として舞い立つ土煙は、はるかな遠方からもみとめられ、この一揆に加わるべく、あちらこちらから田畦を走って来る百姓の影も、すくなくなかった。
一人一人にひきはなされると、卑屈な農奴でしかない人人も、徒党を組むとともに、狂暴な野獣心をあふらせていた。
と——。
彼方の森から、二十数騎の一隊が出現した。
しかし、これは、暴徒の狂気に、油をそそぐ逆効果があった。
うわっ！
うわっ！
暴徒は、鯨波をあげた。
「やっつけろ！」
「城のさむらいを、みんな、やっつけろ！」
「田丸豪太夫を、ぶっ殺せ！」
口々にわめきたてて、得物をふりかざしながら、森へむかって、突進した。
すると、騎馬隊は、さっと間隔をとって、左右にひらいた。
一騎ずつ、暴徒たちを対手にたたかう陣形をみせたのである。
暴徒たちは、これしきの頭数など、苦もなく、押しつぶせるぞ、とばかり、津波のように、押しかけた。
騎馬隊の列と、暴徒の群との距離が、三間あまりに、せばまった。
突如——。
森の中から、凄じい唸りを生じて、数百本の矢が一斉に射かけられた。
「うあっ！」
「ぎゃっ！」
「ひーっ！」
暴徒たちは、顔に、胸に、腹に、手足に、矢をあびて、よろめき、のけぞり、きりきり舞いし、ぶっ倒れた。
その混乱の渦めがけて、森にかくれていた千余の兵が、どっと、躍り出た。
暴徒たちは、しかし、殺到する武装の大隊に、怯え上る者は一人もいなかった。
父を、子を、兄を、弟を、友を、矢で射殺された者たちは、完全に逆上し、狂ったけだものと化した、といえる。
うああっ！

槍と刀にむかって、滅茶滅茶に、突撃した。

たちまちに——。

惨たる修羅場が、そこに、くりひろげられた。

呶号と悲鳴と呻きと断末魔の声と——。

土煙の中に、血汐がとび散り、人間の最後ののたうちまわる生地獄の光景が、しばらく、つづいた。

槍に胸を刺されて、のけぞる者、刀で脳天を割られる者。片手を斬られながら、しがみつき、噛みつく者。むき出された乳房を、刀で突き刺されつつ、鎌を投げつける女。兵の脚にしがみついて、ひきずりまわされる少年。

一人の屈強な若者は、敵の槍をうばいとって、女の乳房を刺した兵を、なぐりつけ、けとばしておいて、

「くそっ！　さむらいなんか、こわくねえぞっ！」

と、呶号しつつ、騎馬武者めがけて、突進して行った。

しかし、馬上から降り下される太刀に、顔面をまっ二つにされて、ころがってしまった。

地べたに仆れた者は、もはや、二度とは、起き上れなかった。光を喪った双眼を、ぱっくりとみひらいたまま、咽喉を、胸を、腕を、脚を、ふみにじられるにまかせていた。

まだ動ける者は、どうにかして、土足の下からのがれようと、もがき、のたうったが、やがて、無抵抗になって、俯伏すと、ごぼごぼっと、口から血泡を噴いて、のびてしまった。

一揆に対する騎馬武者の暴力は、正視に堪えぬものがあった。

棒や鍬をふりかざした者たちめがけて、

「おりゃっ！」

と、おめきたてて、馬を煽らせて、躍りかかるや、のけぞったのをみじんも容赦せずに、だだっと馬蹄にかけた。

その凄惨さに、おびえ、立ちすくんだ者も、次の瞬間には、馬蹄の下に、横たわっていなければならなかった。

思うままな虐殺ぶりであった。

ようやく——。

農民たちは、ばらばらになり、崩れたった。

そうなると、やはり、烏合の集りのかなしさで、あっという間に、十人へ伝播し、それはさらに、五十人へとひろがった。

文字通り、蜘蛛の子を散らすような悲惨な光景が、そこに現出した。

それに対して、田丸豪太夫の城兵たちは、いささかも容赦しなかった。

逃げ散る農民たちを、兵らは、まるで愉快な遊びでもやっているような喚声をあげて、追いかけ、突き刺し、斬り仆した。

ついに——。

森の内外に、農民全員が、土を、草を、あけにそめて、むくろとなって、動かなくなった。

軍勢が、引きあげた頃——。

この血なまぐさい地獄場へむかって、旅の一騎が、近づいて来た。

旅の一騎は、多門夜八郎であった。

衣服は旅塵によごれ、髯ものび放題であった。

そのうすぎたない風体にふさわしく、乗っているのは、見るからに痩せさらばえた駄馬であった。

荷物といえば、うしろに、大きな革袋を、ふり分けに積んでいた。ひとつの袋には、水を入れ、もうひとつの袋には、糒（ほしい）を入れていた。

「……？」

たづなを引いて、馬を停めた夜八郎は、そこに、見るも無慚な光景に、眉宇をひそめた。

——土一揆だな。

これは、すぐに、判った。

それにしても、これは、あまりに凄じい虐殺ぶりであった。

——この土地の城主は、よほど残忍な男だな。

夜八郎は、山を越えて、この土地に入った時、見はるかす平野が、水が涸れはてているのをみとめて、

——これは、ただではすむまい。一揆が起っているに相違ない。

と、推測したことである。

それは、的中していた。

みな殺しにしたところをみると、城主は苛斂誅求の権化かと想像される。

——長くとどまる土地ではないようだ。

馬を歩み出させようとした時であった。

るいるいたる死骸の中から、一人、ふらふらと立ち上って、こちらへ、手をさしのべ、

「み、水を——」

と、喘いだ。

女であった。

まだ、若い。

血汐にまみれているが、見受けたところ、さしたる負傷もしていないようであった。

よろめきながら、寄って来た。

「水を……、下され」

夜八郎は、黙って、革袋を把りあげると、紐を解いて、女の口へ、あてがってやった。

女は、無我夢中で、飲んだ。

そして、急に、めまいに襲われたように、馬腹へよりかかり、そのまま、ずるずると、地べたへ崩れ落ちそうになった。

夜八郎は、肩をつかんで、さっと、馬上へひきあげた。

この女が、唯一の生存者のようであった。

夜八郎は、かかえてやって、どこにも、重傷を負うていないのを、たしかめた。

顔は、まだ少女のなごりをとどめている。十七か八であろう。

「送ってやろう。家は、どこだ？」

たずねると、不意に、泪をあふらせて、身をふるわせた。

「家は、あるのだろう？」

「あります。……けど、もう、誰も、いないんです」
「親兄弟は、みな殺されてしまった、というのか？」
夜八郎が、問うと、娘は、黙ってうなずいた。
夜八郎は、娘に、方角を指ささせておいて、馬を走らせはじめた。
その時――。
ふっと、
――おれは、もしかすれば、この土地で、生命をすてるかも知れぬ。
そんな不吉な予感がした。
こういう気持は、はじめてのことだった。
一望の田野は、荒れて、ひび割れ、娘が指さした方角にむかって、一直線に、馬を走らせることができた。
夜八郎は、苗代もないのを、いぶかった。
「苗代をつくっていないのは、どうしたのか？」
夜八郎は、問うた。
「水が、ありませぬ」
「水がないのは、判っているが、山に湖水はあるだろう？」
「……」
娘は、なぜか、こたえなかった。
――何か、仔細があるな。
夜八郎は、直感した。
前方にそびえる山嶽の容（かたち）を眺めれば、山上に湖がある、と判る。
二年や三年の旱魃で、水が全く涸れるということは、考えられぬのである。
しかし、百姓が、苗代もつくれぬ、という絶望的状態は、渓流に一滴もなくなった証左である。
夜八郎は、娘の沈黙から、その絶望を汲みとった。
やがて――。
夜八郎と娘は、濠と築地（ついじ）をめぐらした宏壮な館の前に着いた。
由緒ある豪族の末裔であることは、そのたたずまいを一瞥すれば、足りた。
「これは？」
たづなを引いてから、夜八郎は、胸によりかかった娘に、問うた。
「公卿館――と申します」
娘は、こたえた。
源平のむかし、遁れて、ここへ移り住んだ公卿の子孫に相違ない。
濠には、刎ね橋が架けられていた。
その濠は、大層な深さであったが、底まで完全に涸れあがっていた。
夜八郎は、刎ね橋を渡り、ぴったりと閉ざされた大きな正門の前で、馬を停めると、
「おねがいいたす」
と、大声で、呼ばわった。
返辞はなかったが、門扉が左右にひらかれた。
夜八郎は、娘をおろし、自分も降りた。

屈強な若者が、二人を迎えた。
娘は、地べたに跪（ひざまず）いて、若者を仰いだ。
若者は、娘へ、異様に緊張した表情を据えると、
「そなた一人か、生き残ったのは？」
と、たずねた。
「はい。……このご牢人衆にたすけられました」
そうこたえて、娘は、うなだれると、むせび哭きはじめた。
若者は、夜八郎へ、一礼すると、
「どうぞ、こちらへ――」
と、案内すべく、背中を向けた。
夜八郎は、そのあとに従いながら、この館が、そのまま城砦の構造をもっているのを、知った。
源平いずれかの落人として、この里に移り住んで以来、地下（じげ）人たちの尊崇を受けて、隠然たる勢威を誇って来たに相違ない。
戦乱の世になって、その勢威は、ようやくおとろえ、領主に対立する力を喪ってしまったのであろう。
建物は、荒れはてていた。
広い、さむざむとした書院に通された夜八郎は、やはりただの牢人者ではないだけに、縁上げの格（ごう）天井や襖や壁画に、この家が、大納言の格式を備えているのを、観た。
若者にささえられて、病弱らしい老人が入って来た。
その風貌は、まぎれもなく、堂上公卿の特徴を持っていた。
「泰国清平（やすくにきよひら）でござる。これは、一子太郎と申す。……下婢をおたすけ下されて、忝(かたじけ)のうござった」
老人は、挨拶してから、息子を下らせた。
「土一揆の指揮は、御当家か？」
夜八郎は、たずねてみた。
泰国清平は、かぶりを振った。
「当家では、必死に、押えようとしたのでござるが……、やむなき仕儀でござった」
沈痛な面持で、清平は、こたえた。それから、夜八郎を、じっと見て、
「下婢は、一揆ことごとく虐殺された、と報らせ申したが、貴殿は、惨状をごらんなされたかな？」
「見とどけました」
「この伊吹野の支配者は、それをもって示す暴君でござる」
「……」
「たまたま、二年つづきの飢饉が、農民らをして、あのような狂徒と化さしめたのでござるが、たとえ飢饉におそわれずとも、いずれは、一揆が起るものと、考えて居り申した。むごいことでござる」
「武器を持たぬ者は、反抗いたせば、なぶり殺されるだけの話でござる。それがしは、農民らに、そう申して、なだ

めつづけて来たのでござるが……」
　清平は、歎息した。
　この館を、覇者にふみにじらせないためには、さざえのごとく、かたく殻をとざすことが唯一の手段であったのであろうが……。
　夜八郎の前に、茶がはこばれて来た。
　はこんで来た者の手くびに、白い布が巻きつけられ、血がにじんでいるのを見て、夜八郎は、その顔へ、視線を向けた。
　たすけてやった娘であった。
　よごれを洗った顔は、清潔で美しかった。
　清平が、微笑しながら、
「これは、気丈夫な娘でござってな、この館から、一揆に加わったのは、この娘ただ一人でござる」
「……」
「それがしが、門扉を閉ざして、一揆を見て見ぬふりをしているのを、さだめし、薄情とお思いでござろう」
「保身は、誰でも、必要ゆえ、やむを得ぬ仕儀と存ずる」
「いや、門扉を閉ざしているのは、保身ではござらぬ」
「……」
「この土地の敵は、城主田丸豪太夫一人だけではないのでござる。大庄山に籠る旧城主奈良城義胤殿も、農民の敵に、まわったのでござる」
「御当主——」
　夜八郎は、清平の言葉をさえぎった。
「わたしは、ただの通りすがりの旅者にすぎ申さぬ。窮状をうかがっても、役立つ身ではないのです。また、役立てようとも思い申さぬ。ご容赦ねがいたい」
「そうでござったな。年寄の愚痴をおきかせしても、はじまらぬこと。失礼いたしました」
　清平は、手をたたいて、息子の太郎を呼ぶと、扶けられて、書院を出て行った。
　夜八郎は、横臥すると、目蓋をとじた。
　一刻をまどろんだら、出て行くつもりであった。
　しばらくして、忍び入って来る気配があった。
「ご牢人様——」
　ひくく、呼びかけて来たのは、救ってやった娘であった。
「なんだ？」
「お願いがございます！」
　両手をつかえた娘の顔には、必死の色があふれていた。
「お館様に、力添えをしてあげて下さいませ。お願いでございます」
「おれには、そんな力はない」
「いいえ！　あります！　ご牢人様は、あのむごたらしい光景をごらんになっても、おちついていられました。ただのご牢人衆とは思われませぬ」
　夜八郎は、起き上った。
「おれが、いささかの腕を持っていたところで、どうなるものでもあるまい。雨を降らせる神通力を持った人間を、さがして来ることだな」

　夜八郎は、冷淡に、つきはなした。
　小幸（こさち）という娘は、夜八郎がいくら冷たい態度を示しても、ひきさがらなかった。
　夜八郎は、押問答が面倒くさくなった。
「おれに、どうしろ、というのだ？」
「この館に、おとどまり下されませ。しばらくのあいだでよろしいのです」
「とどまっていたら、どうなるというのだ？」
「田丸豪太夫の手勢が、必ず、押し寄せて参ります」
「ここに、それをふせぐ兵の用意があるのか？」
「ございませぬ」
「農民が、たて籠ったところで、なんのふせぎにもならぬことは、そなたが、その目で見とどけている」
「はい——」
「では、おれ一人が、とどまっていたところで、何の役に立つ？」
「田丸豪太夫の、むごたらしい仕打を、見とどけて下さいませ」
「ただ、見とどけるだけでよいのか？」
「はい」
「ただ見とどけただけで、何になる？」
「……」
　小幸は、うつ向いて、こたえなかった。
「第一、この館を、城兵が襲って来る、とは限るまい」
「いいえ！」
　小幸は、頭を擡げて、必死に、夜八郎を、見つめた。
「この館には、米と麦の、たくわえがあるのでございます」
「……」
「もし、このたくわえがなければ、百姓たちは、もう昨年のうちに、みんな、死んでしまって居ります」
「年貢米をひそかにけずって、この館にかくした、というのか？」
「はい。……そのたくわえを、すこしずつ、みんなで、分けて、粥にして、喰べて居ります。でも、近頃では、三日に一回しか、粥はすすれませぬ。そうしなければ、秋までには、無くなってしまうのでございます。……今年は、どうしても、田植えをしなければならぬのでございますけど——」
　それならば、苗代をつくっておくべきであろうが、それもしていないのは、農民らの、田丸豪太夫に対する反逆であろうか。
「川には、一滴もなく、涸れているのだな？」
「はい」
「井戸の水は、まだのこっているだろう？」
「はい、すこしは——」
「それで、苗代をつくるがよいではないか。おれに、それを見とどけさせるがよかろう」
　夜八郎は、云ってしまった。
　小幸の顔に、歓喜の色が、浮かんだ。

「はい。みんなに、そうつたえますでございます」

地獄野

雲ひとつない空が、いちめん黄色にかすんでいる。

水のない平野を吹き渡る風が、黄塵をまきあげているからであった。

樹木もまた、ほこりにまみれて、いかにも生気をうしなっている。

二頭の牛をつれた六つの人影が、松木立の中を、峠の頂上へのぼって来た。

この丘陵を越えれば、伊吹野になる。

丘陵は、小松で掩われていて、いかにも、国境らしく、ここから景色を変えるのである。

旅の一行は、一上一下する道を辿って来たのだが、それは、常に、視界をさえぎる山の中であった。

峠の頂上へ出れば、ひろびろとした沃野が展望される愉しみで、旅人たちは、山の中を歩いて来たわけである。

しかし、頂上へ来るや、一行の目に映ったのは、むざんに横倒しになっている休み茶屋のすがたであった。

「ちえっ！」

先頭の牛を曳いていた若い男が、いまいましく、舌打ちした。

「草餅でも、たらふく、くらっていてやろう、と思っていたのに、なんでえ、こりゃ——」

路上にころがっている欠け茶碗を、蹴とばした。

若い男は、青助であった。

うしろの牛を曳いているのが、黒太であった。

かなりの荷をかついだ男が二人——赤松、白次という。

加茂川の、九条あたりに架けられた幽霊橋の袂にある旅籠に巣食っていた小悪党たちであった。

さんざ働いた積悪のつぐないをさせられるために、こうして、旅へ出て来たのである。

すこしおくれて歩いて来ている天満坊が、かれらの主人というわけである。

天満坊の背後には、百平太がいる。

まことに、組むにふさわしい一行であった。

百平太は別として、青助・黒太・赤松・白次が、天満坊に心服しているわけではなかった。

この四人は、ある公卿屋敷へ忍び込んだところを、役人に捕えられ、あやうく打首にされようとしたところを、偶然、天満坊に見かけられて、助けられたのである。

天満坊が、その役人と旧知の間柄であったのが、四人にさいわいした。

「愚僧は、旅へ出るから、お前らも、連れて参ろう」

天満坊は、四人に命じ、百平太を加えて、京の都をはなれたのであった。

旅に出てから、もうそろそろ一月になる。

百平太も四人も、天満坊が、いったいどこへ行くのか、知らぬ。

きいてみても、天満坊は、こたえなかった。

四人は、ふてくされて、地べたへ坐り込んだ。

天満坊が、近づいて来て、笑いながら、

「浮世と申すものは、まず、こういうあんばいに、期待を裏切るものでな」

と、云った。

「ここで、和尚の説法など、ききたくはねえや」

青助が、ぺっと唾を吐き出した。

天満坊は、何を思ったか、かたわらの大きな岩の上へ、ひょいと、とび乗って、小手をかざした。

「これはひどい」

そう云って、かぶりを振った。

「何が、ひどいんですかね、和尚さん？」

百平太が、けげんに、仰いだ。

「沃野は、化して、荒土となって居る。水がないのじゃ、水が——」

天満坊は、こたえた。

黒太が、云った。

「雨が降らなけりゃ、水はねえやな」

「ただの水のなさではないのう」

天満坊は、見わたして、

「苗代もない田野を、はじめて見たぞ。どういうのであろうかの」

「そんなことは、こっちには、なんの関係もねえや」
青助が、立ち上って、
「都合で、ひきかえしても、こっちは、ちっとも、かまわねえんですぜ、和尚さん」
「愚僧の方が、かまうな」
天満坊は、岩から降りると、百平太に、牛の背中に積んだ水と糧食は、どのくらいある、とたずねた。
「ほしいは、十日分もありますがね。水は、二日も保ちませんぜ」
「二日分とは、心細いな。そうなると、一日一椀ということになろうな」
「冗談じゃねえ！」
青助が、憤然となった。
「おれたちは、好きこのんで、地獄のような野へ、降りて行くことはねえんだ」
「そうよ。ばかくせえ。ひきかえそうじゃねえか」
黒太が、同調し、赤松も白次も、同じ表情になった。
とたんに、百平太が、
「うるせえっ！」
と、呶鳴りつけた。
「てめえら、いったい、誰に、生命をたすけられたんだ？　青助、黒太、てめえら二人は、二度までも、和尚さんに、生命をたすけられていやがるんだぞ！　つべこべほざかずに、和尚さんの行くところへ、ついて行きゃいいんだ」
「し、しかし――」
「しかしもくそもあるか」
百平太は、いきなり、青助の横面を、なぐりつけた。
青助は、かっとなったが、百平太の凄じい眼光を射込まれると、うつ向いてしまった。
百平太は、別人のごとく、邪念をすてた男になっていた。天満坊から、一滴の水の尊さを教えられ、自分勝手に、弟子になったつもりの百平太は、その日以来、女にも博奕にも目をくれず、完全な忠僕になっていたのである。
天満坊が、
「お前の謹厳も、いつまでつづくものかの？」
と笑うと、百平太は、ムキになって、
「半年や一年で、元へもどるようなら、観世よりで、首をくくってみせます」
と、こたえたものだった。
この一年間、百平太の行動は、すこしの表裏もなかった。単純な気象なだけに、志をあらためると、これほど、きれいさっぱり過去をすてられる男はない、といってよい。
青助たちは、百平太の剣幕に、おそれをなして、黙りこくってしまった。
天満坊は、面白そうに、百平太と四人を見くらべていたが、
「では、地獄のような荒土へ、降りるといたそうかな」
と云った。
「おい、お前ら、途中で、音（ね）をあげたら承知せんぞ」
百平太は、四人へ宣言しておいて、天満坊のあとへ、し

たがった。
「百平太――」
「なんです？」
「もしかすれば、伊吹野で、われわれのうち、一人か二人――いや、われわれ全員、生命を落すような運命になるかも知れぬな」
「どうしてですかね？」
「どうも、見わたしたところ、ただの荒土ではないらしい。農民は、おそらく、餓狼になっているであろうし、領主は――領主も尋常の人物ではない、相当な暴君と、想像されるな」
「そうですかねえ」
「北の山を見るがいい。湖水をもった山容だ。山上の湖水というものは、二年ぐらいのひでりで、涸れるものではない。……これだけの沃野に、一滴の水もないのは、その湖水をせきとめてしまって、渓流をかわかしてしまった証拠であろうよ」
「成程――」
「恰度、わしが、牢にとじこめられて、水を与えられなかったように、農民たちは、領主から、水を断たれているように思われる。もし、そうでなければ、さいわいだが……」
「つまり、領主と百姓は、仇敵同士になっているというわけで？」
「まず、そうとしか、考えられぬ」
「和尚さんは、当然、百姓の味方になって、ひと合戦やってやろう、という肚づもりじゃな。これは、おもしろい！」
百平太は、顔をかがやかした。
荒れはて、かわききった野へ降りると、陽光は、まるで、この空の上でだけ、熱気を増しているように、ギラギラとまぶしかった。
田畑も草地も林も、なにもかも、水気をうしなって、いたずらに、陽光を吸っているせいであろうか。
「暑いぜ」
と、黒太がぼやき、青助が、
「地獄よ！」
と、吐きすてていた。
赤松も白次も、すっかり、しょげきった顔つきであった。天満坊は、野に降りてみて、あらためて、その悲惨な景色に暗然となり、
「これは、ひどい」
と、かぶりを振った。
街道は、小川に沿うているのだが、水は全く涸れている。人と牛が舞いあげる灰のような土煙りが、いかに、雨から見はなされているか、という証拠である。
と――。
森のかなたで、異常な絶叫があがった。
「おっ！　早速、何か異変が起ったぞ！」
と、百平太が、目を光らせた。
森かげから、二つの人影が、とび出して来た。
必死に、こちらめがけて、草径を走って来る。

それを追って、騎馬の群が、おどり出て来た。
あっという間に、二つの人影を、包んで、縄を投げかけるのを、みとめたものの、距離がありすぎて、天満坊一行は、どうすべくもなかった。
十数騎は、こちらへ向って、疾駆して来はじめた。
「ありゃ、ひどいことをし居る！」
白次が、叫んだ。
逃げようとした二人の男が、縄をひっかけられて、地べたを、ぼろきれのように、ひきずられているのであった。
十数騎が疾駆して来る道筋と、こちらの一行が進んで行く街道が、ぶっつかるところが、どうやら、村辻になっていて、雨乞いの阿弥陀堂や、石地蔵や、高札が、立っていた。
たちまち、十数騎は、二人の男を、その辻へ、ひきずって来た。
そして、阿弥陀堂の蔭から、十字に組んだ磔（はりつけ）柱を、かつぎ出すと、虜（とりこ）たちを背中合せにくくりつけて、地上へ直立させた。
もうその時、天満坊の一行は、そこへ近づいていた。
天満坊から、
「そ知らぬふりをしているのじゃよ」
と、命じられていたので、百平太はじめ、四人の無頼漢たちは、黙々として、牛を曳いて来たのである。
十数騎は、天満坊一行へ、険しい視線を向けたが、先頭に立つのが僧侶と見て、そのまま、反対の方角へ駆け去った。
天満坊は、磔柱の下へ、歩み寄った。
なんとも、むざんなすがたの囚徒であった。二町余も、地べたをひきずられたので、からだ中がすりむけて、血だらけになっていた。
ぐったりと、案山子のように、首をたれているが、生命はあるらしい。
「さて、どうしたものかの」
天満坊が、つぶやいた。
「和尚さん、人助けするのが、お前様の使命でござる」
百平太が、云った。
「一人、二人をたすけても、しかたがあるまいが……」
天満坊は、云いながら、杖をさしのべて、囚徒の鳩尾（みぞおち）を突いた。
「う……うっ！」
ひくいうめきが、もらされた。
「地下（じげ）衆――」
天満坊は、大声で、呼んだ。
囚徒は、どんよりとにごった目をひらいて、見下した。
「どうして、このようなひどい目に遭うたのじゃな？」
「……」
「ほ――まだ、意識がしっかり、もどらぬ様子じゃ」
「裏側の方の奴が、若いぞ」
青助が云った。
天満坊は、そちらの囚徒も、杖で、息をふきかえらせた。

「あ、ああっ！」
若い農夫は、すぐに、叫びをあげて、視線を、一行へはなった。
「お、お前がたは？」
「旅の者じゃが、お主らが刑罰を受けたのを見て、気になってな」
天満坊が、云いかけると、若い農夫は、突如、狂ったように、
「お、お願いじゃ。公卿館へ、報らせて下され！」
と、叫んだ。
「公卿館とは？」
「あの巽の森のかげにあるお屋敷じゃ。わ、わしら百姓らをまもって下さる豪族殿じゃ」
「何を報らせるのかな？」
「城から、米を奪いに、兵どもが、大挙して、おし寄せて来ますのじゃ！　わしらは、それを、ぬすみぎいたので捕まって、こ、こうなりましたのじゃ」
天満坊の想像は、ほぼ当っているようであった。
天満坊は、青助たちに、磔柱を倒して、たすけるように、命じた。
「こう来なくちゃ、おもしろくねえ」
百平太は、にやっとした。
天満坊は、巽の方角に、こんもりとわだかまった森を、見やった。

公卿館の庭は、広かった。
落人ではあっても、堂上公卿の誇りをすてぬために、建物はもとより、その庭の造りにも、都の風雅に心を使っていた。
荒れてはいるが、木立のけしき、築山のたたずまい、そして心字をかたどる泉水のひろがりに、都の邸第や寺院をしのばせるものがあった。
夜八郎は、足利将軍の子であった。
風雅を解する心をそなえていた。
築山の休み石に腰を下して、庭を眺めながら、長い間、動かずにいる。
眼下の心字池は、全く水が涸れて、落葉をつもらせているばかりである。
やがて――。
夜八郎の放心を破ったのは、鋭い懸声であった。
夜八郎は、視線をまわした。
母屋と別棟をつないで、廻廊になっている。その前の白砂の庭上に、泰国清平の長子太郎が、一人立って、槍を、さしのべていた。
「えいっ！」
満身からの気合を発して、宙を突く。
ぱっと、身をひるがえして、背後へも、ぴゅっ、とくり出す。
怨敵田丸豪太夫を、突き殺す一念をこめての稽古であろう。

夜八郎は、しばらく、その必死な稽古ぶりを眺めていた。
泰国太郎は、業をそなえているわけではなかった。
独習には、おのずから、欠陥が露呈する。それを、当人も気がつかずに、無我夢中である。
築山の裏がわから、人がのぼって来たのは、そのおりであった。
「多門夜八郎様」
呼ばれて、夜八郎は、頭をまわした。
頭髪に白いものをまじえている初老の婦人が、すこしさがった場所に立っていた。
公卿館と称される屋敷に住むにふさわしい品のいい婦人であった。
「わたしは、当館に身を寄せて居りまする杉乃江と申す者でございます」
いんぎんに挨拶した。
「失礼ながら、わたくしは、貴方様を、存じ上げて居ります」
「……」
「もう、十余年のむかしになりましょうか。貴方様が、五条の拝領館におすまいなされた頃――」
杉乃江というこの女性は、どうやら、御所に仕えていたようである。
「さようか」
夜八郎は、素姓を知られていては、いまさら、かくすにもおよばぬので、
「手のつけられぬ不良児は、処々方々に迷惑をかけた。貴女のまわりの人々にも、かけたかも知れぬ」
そう云った。
杉乃江は、微笑した。
優しい表情は、その心の優しさをあらわしているようであった。
「貴方様が、乱暴な和子であったことは、洛内外で、噂されて居りました。わたくしが乗っていた牛車も、貴方様が、市中を横行する無頼者たちと大立ちまわりをされているのに行き会うて、道をさけねばならなかったのを、おぼえて居りまする」
「それは、ご迷惑をおかけした」
「かようなところでお目もじいたそうとは、露存じませなんだ。おなつかしゅう存じます」
「都から、どうして、落ちられたのか?」
「兵乱にあけくれる都よりも、平和な里がよかろうか、と存じて、参りましたが……」
「その里が、このような凄じい世界と化した、といわるか」
「都では、水は、絶えず、川を流れているものと思って居りましたが、かほどまでに貴重なものとは、夢にも知りませなんだ」
夜八郎は、ほっとふかい溜息をつく初老の婦人を眺めて、自分の母親も生きていれば、これぐらいであろうか、と思った。

その感傷をふりすてるために、夜八郎は、すっと、立った。
築山を降りて、夜八郎は、泰国太郎の前に立った。
泰国太郎は、双眸を光らせて、夜八郎を視た。
「お教えするほどの業は持たぬが、案山子がわりに、突かれ役を、お引受けいたそう」
夜八郎は、云った。
「忝けないが、怪我をされるおそれもある」
「その心配は無用にされい。どこで、果てても、べつだん悔いをのこさぬ牢人者ゆえ、遠慮なく、突いて頂こう」
「容赦なく、突き申すぞ」
太郎は、ぴたっと、槍を構えた。
夜八郎は、両手をダラリと下げたなり、しずかに、立っている。
太郎は、構えもみせず、むかい立った夜八郎を、一瞬、いぶかる表情になった。
ひと突きすれば、なんの造作もなく、夜八郎の胸を刺しつらぬいてしまいそうに思われた。
「参る!」
叫んで、太郎は、じりっと迫った。
そうすれば、夜八郎が、さっと身構えると思ったのである。
夜八郎は、平然として、動かぬ。
太郎は、一片の疑念を抱きつつ、
「えいっ!」
と、突き出した。
瞬間、夜八郎は、かわしもせずに、手刀で、くり出された槍の柄を、発止と、搏った。
太郎の両手は、じーん、としびれて、槍をぽろりと、落してしまった。
天満坊が、百平太と四人の小悪党をつれて、公卿館へ到着したのは、恰度その折であった。
小幸が、小走りに庭へあらわれて、
「若様――」
と、泰国太郎を呼んだ。
「旅の僧が、門前に訪れて居ります。お館様にお目にかかりたいと申して――」
「一人か?」
太郎は、夜八郎に、なんの苦もなく、手刀で槍を撃ち落されて、不機嫌であった。
「いえ、むさい恰好をした家来を四五人つれて居ります」
「追いかえせ。そのような者に食わせるものはない」
「大事のことを、告げたい、と申して居りますけど」
「坊主なら、小ずるい口上をつくるだろう。追いかえせ」
「はい――」
小幸は、裏門へ、走って行った。
「多門殿、いま一手、教えて下され」
太郎は、槍をひろうや、二三度、しごいて、ぴたっと、穂先を、夜八郎の胸もとへ、狙いつけた。
――むだな稽古だが……。

夜八郎は、内心、思いつつ、ことわりもならず、じっと、太郎を視た。
「やあぁっ！」
太郎は、懸声だけは、凄じく、噴かせた。
しかし、こんどは、容易に、突きかかって来なかった。
夜八郎は、うっそりと、自然体（じねんたい）で、立っているばかりである。
その姿が、太郎には、急に、巌（いわお）のように巨大なものに思われて来た。
——くそ！
と、歯をくいしばって、睨みつけた。
闘志は、いやが上にも、若い軀幹にみなぎりあふれているのだが、技のともなわぬかなしさで、じりとも、つめ寄れぬのだ。
「どうした？」
夜八郎が、ひややかに、声をかけた。
「なぜ、突いて来ぬ？」
そのさそいのおわらぬうちに、太郎は、猛然と突きかけた。
はっ、となった。
もうその時には、夜八郎の姿は、そこには、なかった。
——おのれ！
血走ったまなこを、ぐるっとまわして、太郎は、狼狽した。
「おれは、ここにいる」
高い縁側から、夜八郎は、云った。
そこへ、小幸が、ふたたび、あらわれた。
「若様——、坊さまは、どうしても、去（い）にません」
「なんだ！」
太郎は、どなった。
「よし！　わしが、追いかえしてくれる」
太郎は、ずかずかと、歩き出そうとした。
すると、小幸が、
「坊さまは、わるい人ではないようです。磔（はりつけ）にされた村の衆をすくってくれたのだそうでございます」
と、告げた。
「口実をつけて、入り込んで来るのであろう。乞食坊主め、ひと突きだぞ」
「若様。坊さまは、お館様に、むかし、京の都でお目にかかったことがある、とも申して居ります」
「なに！　でたらめをほざき居る。なんという坊主だ？」
「天満坊とか……」
「天満坊？　呼びすて名しか持たぬ乞食坊主など、くそ——」
太郎が、走り出そうとすると、
「待った！」
夜八郎が、呼びとめた。
「その僧侶は、それがしが存じ寄りだ。ただの乞食坊主ではない」
「まことか、多門殿？」

「うむ」
夜八郎は、縁側から、降りた。
表門の扉が、ひらかれた。
「おう！」
天満坊は、意外の人物を、そこに見出して、微笑したし、百平太もまた、
「おやっ！」
と、叫び声をあげた。
夜八郎は、べつに、眉宇もうごかさず、
「御坊を、待ちうけていたかたちに相成った」
と、云った。
「うむ。どうやら、多門夜八郎も、その剣を、人助けに振う秋（とき）を迎えた、というわけかな」
「自ら進んで、そうなったわけではないが、時と場合が、おのれを、大層な善玉にしたててくれるようだ」
「善哉、善哉——。入れてもらっても、よろしいな？」
天満坊は、夜八郎のうしろに立つ、敵意をもった表情の太郎へ、目を向けた。
夜八郎は、太郎をふりかえって、
「この館にとって、強い味方を迎えたことになる」
と、云った。
そう云われても、眺めたところ、たのもしい援助者とは、とうてい受けとれなかった。
太郎は、不機嫌に、口をつぐんで、去ってしまった。
天満坊は、書院に通されると、
「泰国清平殿には、一度、お目にかかったことがあるが、春風をさそう慈顔の持主であったな。この土地では、神様の次に位するお館様というわけであろうわい」
と、云った。

暴君城

「うああっ！」
突如、どこからか、けだものじみた絶叫があがるのを、きっかけにして、あわただしい人の動きが起った。
ここ――伊吹野城は、城内に六千余の将兵を擁して、昼夜殺伐の空気をみなぎらしていた。
したがって、日に一度や二度、どこかで、喧嘩沙汰が起るのはやむを得なかったのである。
それにしても、いま、発しられた絶叫は、異常であった。
城主の館に近い場所で起ったのである。
城主田丸豪太夫は、あらたにさがして来た十七八のういういしい侍女三人に、からだをもませながら、六尺余の巨軀をよこたえて、いい気分で、うとうとしていたところであった。
かっ、と双眼を剝いた豪太夫は、
「なんだ？」
と、呶鳴った。
憤ると、四肢は鋼鉄のかたさに変じ、侍女たちは、びくっと、怯えた。
膂力五十人力と誇るこの野伏あがりの武将は、寛容というものをみじんも持たぬ人物であった。
憤怒すれば、それが十年の股肱であろうとも、容赦なく、首を刎ねた。
その代り、これはと見込んだ者なら、それが足軽であろうと人足であろうと、直ちに士分にとりたてて、惜しげもなく五百貫、千貫を呉れるような長所もあった。
これから、午睡に入ろうとする矢先、異常な絶叫と騒擾に、目をさまさせられた豪太夫は、
「華丸！」
と、稚児姓（ちごごしょう）を呼んだ。
「何が起ったか、見とどけて来い。狼藉を働いている奴は、しょっぴいて参れ。新刀の試しにしてくれる」
華丸は、かしこまって、館を走り出て行った。
城主の館と重だった家臣たちのあいだは、土居でへだてられ、かなりの火除（ひよけ）地が、公孫樹（いちょう）でかこまれていた。
騒擾は、そこで起っていた。
一本の公孫樹の根かたに、一人の士が仆れていたが、その頭蓋は、ざくろのようにむざんに、割られて、脳漿が流れ出していた。
中央に、うっそり立って、おそろしく長い棒をつかんでいるのは、どこをどう辿って、この城の食客になったのか、兵法者九十九谷左近にまぎれもない。
七人ばかりの士が、太刀を抜きはなって、包囲していた。
左近は、どうやら、かなり酔っている様子であった。

まなこがすわって、不気味である。
包囲者たちへ、順々に、視線をまわして、
「どいつも、こいつも、案山子に見えるぞ」
と、うそぶいた。
伊吹野城の旗本たちとしては、昨日今日ふらりとやって来た、どこの馬の骨ともわからぬさすらい者に、こうまで、なめられては、逆上しないではいられなかった。
城主の館に近いと知りつつも、一斉に、吼えたてて、殺気を渦巻かせた。
正面の一人が、猛然と、斬りつけた。
左近は、無造作なひと振りで、そいつを、もんどりうたせて、地べたへのびさせると、
「次っ！」
と、云った。
いかにも、小莫迦にした態度であった。
「おのれっ！」
背後の一人が、
「くたばれ！」
呶号しざま、刀身を水平にして、ひと跳びに、突きかかった。
左近は、これに、視線をめぐらせるいとまはなかった。
とっさに、地を蹴って、おのが身を五尺の空中のものにした。
次のせつな、突きかかった者は、脳天を、ま二つに割られて、
「げえっ！」
と、前へ、つんのめった。
土へ落ちた顔は、陰惨で、みるみる口から、血泡を噴かせた。
「次だ！」
左近は、長い棒を、直立させ、にやりとした。
酔いは、この冷酷な兵法者を、いやが上にも、狂暴にしていた。
「おしずまり下されっ！」
華丸が、土居をのりこえて来て、叫んだ。
「殿が、おいかりでござるぞ！」
これをきいて、旗本たちは、われにかえった表情になった。
左近だけは、一人平然としていた。
「殿が、おいかりか！　ふん――騎虎の勢いなれば、中止するわけに参らん、とつたえろ」
こんな無礼な言葉は、家臣では、とうてい口にできるものではない。
「心されい！」
華丸は、忠告した。
「殿にそのようなことを申上げれば、お手前の生命（いのち）はないものと、覚悟されい！」
「うるさい！　稚児風情が、つべこべ申すな。ひっ込め！」
華丸は、呶鳴りつけられて、憤然となって、館へ、かけもどって行った。

報告をきいた豪太夫の眉間が、びくびくと痙攣した。
その兵法者の風貌さえも、思い出せなかった。
天下第一、などと豪語するのを、かえっておもしろいと思って、食客にしてやったのである。
豪太夫は、むっくりと起き上った。
「どうした、案山子どのがた――」
左近は、にやにやして、急に萎縮した旗本たちを、見まわした。
「殿のいかりが、それほど怕いか、腰抜けども――」
いかにののしられても、旗本たちは、手も足も出ないのであった。
そこへ――。
大身の槍をつかんだ田丸豪太夫が、その巨軀を出現させた。
「おのれら！」
凄じい大声を発した。
「その痩牢人いっぴき、討ちとれぬのか！」
「左様――」
こたえたのは、左近の方であった。
「伊吹野城は、天下に鳴りひびいた荒武者ぞろい、などとは笑止。拝見いたしたところ、いずれも、土民の小伜あがりといったところ――。刀槍の振りかたなど、さっぱり知らぬように見え申す」
そのうそぶきをきいて、一人が、我慢ならず、
「やあっ！」
と、雄叫びして、斬りつけた。
左近は、これを地面に匍わせるのに、目にもとまらぬ迅業を示した。
「おのれら、引けい！　どうやら、おのれらに討ちとれる敵ではなさそうだ」
豪太夫は、旗本たちを散らせておいて、左近の前面へ、進んで来た。
「九十九谷左近、と申したな？」
「左様――」
「当城の食客になりながら、旗本たちを斬るとは、それ相当のこんたんがあってのことであろうな？」
「売られた喧嘩を買ったまでのこと。他意はござらぬ」
「まことか？」
豪太夫は、旗本の一人を、じろりと見やった。
「雑言罵詈（ばり）を許しがたく――」
主君を必死に見かえしながら、その返答があった。
豪太夫は、左近へ、視線をもどすと、
「天下第一の兵法、と高言いたして居ったな？」
「いかにも――」
「いまだ、一度も――」
「一度も？」
「それがしは、いまだ、主取りなどいたして居り申さぬ。ひたすら、兵法修業に心身をうち込み、その開眼によって、世間へ出て来申した。国取り城取りの野望の道具になど、

わが剣を役立て申さぬ」
「では、なんの意志があって、当城へ入って参った？」
「ここには、米と水が、たっぷりあるとききましたゆえ――」
左近は、しゃあしゃあとこたえた。
「人もなげな高言を吐く度胸は、買ってやる。……田丸豪太夫のこの槍を、みごとかわしたら、当城に於ける傍若無人ぶりも、見遁してつかわす」
云いざま、豪太夫は、大身の槍を、たかだかと、頭上へ、かざした。
「……ふむ！」
左近は、にやりとした。
尋常の気力体力をもってしては、容易に太刀撃ちできぬ対手であることは、いうまでもない。
しかし、左近は、当然、こうなることを予想しながら、あばれていたのである。
この城に入って、田丸豪太夫に会ったとたん、左近は、
――この巨漢に、ひと泡噴かせてやると、どういうことになるか？
と、不敵な予想をしてみたのである。
一瞥しただけで、稀代の暴君に相違ない、と判ったのである。
この暴君に、いまださからった者は、一人もいないであろう。
さからった者がいたとしても、生命（いのち）をとりとめた者はあるまい。
左近は、敢えて、豪太夫にひと泡噴かせる機会をねらっていたのである。
「御城主に、一言うかがっておきたい」
「申せ」
「もし、それがしが、勝をおさめたならば、いかがされる？」
「わしの槍をかわすだけではなく、勝つ、とほざくのか？」
豪太夫は、残忍な笑みを、口辺に刷いた。
「天下第一と称す身なれば――」
「黙れっ！」
豪太夫は、一喝した。
「尋常の勝負をいたしてくれるだけでも、慈悲と思え、痩牢人めが！」
あびせざま、長槍を、凄じい唸りを生じて、旋回させはじめた。
左近は、あとへあとへ、退るよりほかにすべはなかった。巨大な刃円を、宙に描かれては、これに対抗する兵法は、まず、あるべくもない。にげまわるよりほかに、ほどこす策はあり得ないのである。
尤も――。
左近自身、豪太夫が襲って来るのは、こうした荒業であろう、と予測していたはずである。
しばらくは、後退するばかりのおちつきを示すことになる。

旗本たちは、固唾をのんで、見まもっている。

左近は、だんだん、追いつめられた。

背後には、高い築地（ついじ）があった。

それと知りつつ、左近は、後退しつづけたのである。

唸る刃円の下で、豪太夫の巨大な姿は、まさに悪鬼に似ていた。

ついに——。

左近は、築地ぎわまで、追いつめられた。

見まもる旗本たちの目には、左近が、絶体絶命の一瞬に立たされた、と映った。

豪太夫自身も、唸る刃円で、左近の首が刎ねとぶのを、確信したに相違ない。

その刹那であった。

左近の五体が、地を蹴って、築地の上へ、跳び上り、さらに、宙のものとなった。

「う——むっ！」

豪太夫は、その速影にむかって、とっさに、長槍を振り変えようとした。

その隙を、左近が、のがすはずがなかった。

豪太夫の頭上を、左近は、鳥のごとく、翔けすぎた。

「うぬがっ！」

豪太夫が、喚いた瞬間は、もはやおそかった。

その長槍は、穂先から一尺ばかりの柄を、両断されていたのである。

左近は、二間のむこうに、降り立って、冷然と、狼狽する巨漢を、見まもった。

豪太夫は、両断された長槍の柄を、憤怒のままに、左近へ投げつけておいて、

「太刀を貸せ！」

と、旗本たちへ、呶鳴った。

「殿、無駄でござろう。それがしは、兵法者。剣をもってたたかって、それがしに勝つのは、不可能でござる」

「ほざくなっ！　戦場を駆けめぐること十八度び、百五十余のさむらい首を取った田丸豪太夫を、あなどるかっ！」

旗本の一人の太刀をひったくりざま、豪太夫は、猛虎が躍るように、左近へ、襲いかかった。

だが、そのもの凄い攻撃も、次の瞬間には、鋭い金属音とともに、太刀が鍔もとから折れ飛ぶ結果を生んだだけであった。

左近は、さらに、一間余を、跳び退っていた。

「うむっ！」

流石に、豪太夫も、茫然となった。

「おのれは、天狗にでも、その迅業をならったか！」

「ということに、いたしておこう」

左近は、にやりとした。

「おのれの迅業に、尋常の太刀撃ちはできぬ、とわかったぞ。よし、盃をつかわす。参れ」

豪太夫は、折れ太刀をほうり出しておいて、大股に、館へ遠ざかって行った。

左近は、旗本たちを見まわして、

「お主らは、いさぎよい主君を持ったな」

と、皮肉をあびせておいて、館へむかった。

侍女にみちびかれて、その部屋へ一歩入りかけた左近に、電光の槍がくり出されて来た。

これを、苦もなくかわして、柄をつかんだ左近は、

「このあたりで、存念をかえられぬと、首級（しるし）を頂戴いたすぞ！」

と、きめつけた。

豪太夫は、槍をすてて、上座にもどると、

「盃をくれよう、左近」

と、云った。

左近の無類の強さを、二度たしかめた豪太夫は、もう、率直に、それをみとめて、親しみさえ抱いた模様である。

左近の方が、この暴君に対する警戒心を解きかねて、

「なんの意味でござろう？」

と、冷たく見かえした。

「その方の強さを、賞してくれるのだ」

「それだけでござるか？」

「はは……、うたがいぶかい兵法者よの。……酒に、毒でも混じてあるか、と思うなら、わしが毒見をしてくれる」

豪太夫は、侍女に、先に酌させて、ひと息に飲みほして、左近に、盃を投げた。

「どうじゃ、左近、わしの股肱にならぬか？」

豪太夫が、すすめた。

「おことわり申す」

「三千貫をくれるが、いやか？」

「兵法者は、主取りはせぬもの。食客が気ままでござる。時が来れば、立去らせて頂き申す」

「はっはっは、欲のない男よのう。では、女をくれる。この三人のうちから、えらべ」

そう云われて、左近は、ういういしい娘たちを、見やった。

いずれも、無理むたいに、拉致されてきた郷士の子女らしい。

男の手でけがされて居らぬ清浄な肌をもっている。

左近の冷たい眼眸（まなざし）を受けて、娘たちは、俯向いた。

左近は、ふっと、柳の廓へ売った尼僧のことを思いうかべた。

「そのうちに、気が向いたならば、頂戴つかまつる。それまで、殿も、これらの娘たちに、手をつけずにいて頂けますまいか」

「勝手なことを、ほざき居る。今日は、その方の申し条を、受け入れねばなるまい」

豪太夫は、承知した。

その時、旗本の一人が、入って来た。

「申上げます」

左近は、それをしおに、立って、部屋を出た。

「泰国清平の館には、米七十俵が隠匿されていること、つきとめましてございます」

「七十俵もかくして居ったか。清平め、先日、やって参った時には、一粒もなくなった、と空とぼけ居った。よし、」
今夜にも、襲って、奪（と）りたてろ」
「かしこまりました」
「手向う奴ばらは、のこらず、斬れ！」
「はい」
廊下をゆっくりと歩きながら、左近は、この会話を、のこらず、きいた。
——大層な悪党だ。
しかし、そう思ったものの、左近の心には、飢餓迫った農夫たちに対する同情など、すこしもわいてはいなかった。

いざ戦わん

「どうするかの、多門夜八郎殿？」
書院で寝そべっている天満坊が、縁側に立つ夜八郎に、声をかけた。
宵闇が、庭を閉ざそうとしていた。
「この館に味方して、田丸豪太夫と一戦交えるか、それとも、退散するか——思案は、ここらあたりで、きめねばならぬの」
夜八郎は、ひとたびは、飢餓に瀕した農民たちの味方をするほぞをかためていたのだが、伊吹野城には、六千の将兵がいて、昼夜殺伐の空気をみなぎらせている、ときいて、
——これは、無駄死になる。
と、迷いはじめたのである。
六千の軍勢に抗するには、いかに寡勢とはいえ、二千の兵を率いなければ、勝算はおぼつかぬ。
精鋭なれば、五百でもよい。
しかし、これは、ギリギリの頭数である。
ところが——。
この公卿館には、太刀の使いかたを知っている者は、わずか二十名あまりである。それも、合戦らしい合戦に参加

したことのない、久しく土にしたしんだ者ばかりである。
敵を引き受けて、堂々と闘えるのは、夜八郎自身と、天満坊と、泰国太郎の三人だけであろう。百平太、青助、黒太、赤松、白次の五人が、まあ、なんとか、役に立つであろう。
わずかこれだけの人数で、夜襲をしかけて来る伊吹野城の猛者（もさ）隊を、どうふせぐか？
不可能としか考えられぬ。
「どうするな、夜八郎殿？」
天満坊が、かさねて、問うた。
夜八郎は、頭をまわした。
「おれの決意をしきりに促すところをみると、御坊には、何か、思案があるのか？」
「うむ——」
天満坊は、やおら、起き上って、
「ないこともない」
「押し寄せて来るのは、五百か千か、わからぬのだぞ？」
「敵の数をかぞえてみてもはじまらぬの。こちらは、まるっきり、兵を持たぬのだからな」
「兵を持たずに、どうして、策がたてられる？」
「孫子曰く、呉を以てこれを度（はか）るに、越人の兵多しといえども、亦なんぞ勝に益あらんや。故（いにしえ）に曰く、勝は為すべきなり、敵、衆（おお）しといえども、闘うこと無からしむ可し、と」
「策をきかせてもらおう」
夜八郎も、ついに、ほぞをきめた。
「策は、これから、お手前と、練ることにいたそうか」
「おれには、策はない」
夜八郎は、天満坊の前に、坐った。
天満坊は、いつの間に用意したのか、円座の下から、この館を中心にした見取図をとり出した。
公卿館の北隅に、土蔵が建っていた。
元は、ここを牢獄にでもしていたものか、入口の扉も高窓も、太い鉄格子造りであった。内部は、だだ広い土間である。
その土間にあちらこちらに陣どって、せっせと何やら仕事をしているのは、天満坊にくっついて来た五人の無法者たちであった。
白次が、鍋で何やら、ひどく臭気を発するものを煮つめている。
赤松が、黄色の粉状のものを、薬研でおろしている。
黒太は、桶の上に渋紙をひろげて、鍋で煮つめたものを、こしている。
青助は、ひと節に切った青竹へ、何やら細工をほどこしている。
百平太は、鼻唄まじりに、青竹へ、細棒を麻縄でくくりつけている。
「えいや、こーら、と来たぜ。手柄づくしは、那須野の国よ、那須の与市というさむらいは、男小兵で御座候えど、

つもるお年は今十九歳、残しおかれしところをきけば、お国讃岐の屋島ガ浦の、源氏平家のお戦（いくさ）に、平家方なる沖なる船の、舳（みよし）に立てたる棹の上、黄金（こがね）の扇がキラキラと、光るを見てとり、源氏の大将、九郎判官義経公はえ、与市御用とお呼びでござる」
「うるせえな」
　青助が、首を振って、
「こんなしろものを、こさえて、天満坊主は、いってえ、何をしようというんでえ？」
と、云った。
　赤松が、こたえた。
「雨乞いの花火をあげるんだとよ」
「花火をあげりゃ、雨が降るのか。莫迦くせえ。花火をあげるより、土を掘った方が、手っとり早えじゃねえか」
「頓馬だのう、黒太。雨が降らねえと、地底に水は溜まらねえのよ」
「阿呆ったれ！　地底へ溜めるよりさきに、田に溜めなけりゃ、いけねえじゃねえか」
　百平太が、呶鳴った。
「どっちにしても、しんきくせえ仕事だあな。いい加減で、こんな水っ気のねえ国は、おさらばしてえぜ」
「愚図愚図云っても、はじまらねえ。はやいところ、仕事をあげろい」
　青助は、叫んでおいて、すっと、百平太に、口を寄せた。
「おい、百――」
「なんだ？」
「この館にいる娘たちは、そろって、目鼻立ちが、ととのっているぜ」
　そうささやいて、ヒヒヒといやしい笑いをもらした。
「目の早え野郎だ。夜這うつもりか？」
「どうだ、今晩――。寐小屋は、ちゃんと、しらべてある」
「ふん――」
「やろうぜ！」
「そういえば、もう長いこと、柔かい肌を抱いていねえな」
「そうよ。なにも、坊主にくっついているからといって、こっちまでが、精進していることはねえやな」
「ふん――」
　百平太は、青助を、視た。
「そんなに、てめえ、女に飢えているのか？」
「男なら、女に飢えていねえはずがあるめえ」
　青助は、思わず、大声を出した。
「そうよ、きまってらァな」
　黒太が、応じた。
「おれなんざ、京の都じゃ、三日に一度ずつ、とっかえひっかえ、女を抱いていたぜ」
「嘘をこくな。てめえ、博奕で勝ったためしがあるか。女を買う金なんぞ、持っているはずがあるけえ」
　青助が、きめつけた。
「な、なにをぬかしやがる。金はなくても、女は、抱けらあ」
「へっ、わらわせるな。女に惚れられたけりゃ、生れなお

して来やがれ、鬼瓦め」
「なんだと！」
　黒太が、かっとなって、突っ立った。
「やるか！」
　青助も、さっと立ち上った。
「止せ！　てめえら――、ここは、京の都じゃねえぞ」
　百平太が、あいだへ割って入った。
　こんなに殺気立つのも、久しく、女の肌に接していないせいかも知れなかった。
「あああ……あっ、あっ、あーっ！」
　わざと大声あげて、青助は、どたんと、仰のけにながながと、寐そべった。
　ほかの三人も、仕事の手を、やすめてしまった。
　百平太一人、いらいらして、
「おい、晩飯までに、仕上げなけりゃならねえんだぞ」
と、呶鳴った。
「花火を上げるのに、なにも、急ぐことはあるめえ、一日や二日おくれたって、どうということはねえや」
　青助が、ふてくされた声音を、返した。
「和尚が、命じたんだ。和尚は、いい加減なことを命令する御仁（ひと）じゃねえぞ」
「百平太、おめえは和尚の家来になっているのかも知れねえが、おれたちは、家来になったつもりはねえぜ。ついて来い、と云うから、ついて来ただけだ」
「莫迦野郎！　和尚が、いなけりゃ、てめえらは、いま頃、地獄の針の山で、ヒイヒイ泣きわめいていやがるんだぞ。……さあ、さっさと、仕事をつづけろい！」
　百平太に、せきたてられて、四人は、しぶしぶ、おのおの座に就いた。
　泰国太郎が、姿をみせたのは、その時であった。
「何をしているのだ？」
「ごらんの通りでさ」
　青助が、つっけんどんに、こたえた。
「こんな作業は、はじめて見るのだ」
「いくさには、必要なものですぜ」
　なにげなくこたえた青助は、とたんに、「おっ！」と声をあげた。
　青助は、自分で口にした言葉で、はっと、直感が働いたのである。
「そうだ！　こいつは、和尚が、ひと合戦やらかすためじゃねえのか！」
　大声で、叫んだ。
「なに?!」
　泰国太郎が、愕然として、百平太のつくった竹筒をつかみあげてみた。
「これは？」
「さあ、何でござんしょうかね」
　百平太は、そらとぼけた。
　泰国太郎は、この館が夜襲を受けることを、まだ、きかされていなかった。

「お、和尚が、ひと合戦やらかす、といっても、兵隊を、ど、どうするんだろ？」
　赤松が、云った。
「そんなこと、知るもんけえ。おれは、まっぴらだぞ。敵が、攻め寄せて来やがったら、スタコラさっさと、三十六計だあ！」
　青助が、叫んだ。
「敵が攻め寄せて来る？」
　太郎は、はっとなって、
「伊吹野城から、田丸豪太夫が、攻めて来る、というのか？」
　と、百平太に、きいた。
「まあ、そういうわけらしゅうござんすね」
　百平太は、おちつきはらっていた。
　太郎は、身をひるがえして、走り出て行った。
「おい、百平太！　どうするんだ？」
　青助が、そばへ寄って来た。
「どうするとは？」
「おちついている場合じゃあるめえ」
「だから、いそいで、仕上げようとしているのよ」
「そうじゃねえ。おれたちは、兵隊じゃねえんだ。なにも、この館を守ってやる義理はねえんだぞ」
「そうさな。……しかし、和尚が、守ると云うのだったら、おれたちは、従わないわけにいくまい」
「いやだ！　まっぴらだ。どうせ、攻め寄せて来やがるのは、百や二百じゃねえだろう。この館には、それをふせぐ兵隊は、十人もいねえじゃねえか」
「だから、和尚が、孔明、正成の奇策をめぐらそうという次第に相成るのさ」
「奇策だって、兵隊が三百もいる上でのことよ。これだけの頭数で、どうしようもあるか！」
「それじゃ、いまから、コソコソ逃げ出すか？」
「……」
「青助、おめえが、こんな弱虫野郎とは、知らなんだぜ」
「くたばるとわかっているのに、みすみす、とどまっている必要はねえじゃねえか」
「青助！」
　突如、百平太が、もの凄い一喝を発した。
「男なら、度胸をきめろい！　莫迦野郎！」

「父上」
　太郎は、奥の部屋にふみ込むと、大声で、呼んだ。
　屏風のむこうに、泰国清平は、牀に臥していた。
「なんだな？」
「伊吹野城より、夜襲して参るとは、まことでござるか？」
　太郎は屏風をまわって、父の枕元に、坐った。
「夜襲？」
　清平は、眉宇をひそめた。
「そのような噂をきいたのか？」
「噂ではござらぬ。すでに、今夜にも、襲撃して来る、とあの坊主は、防戦の準備をいたして居りますぞ」

「わしは、べつに、法師から、何もきかされては居らぬが……」
「父上」
　太郎は、目つきを鋭いものにして、
「あの坊主、信用なり申そうか」
「わしは、むかし、京の都で、会うている。相当の器量人であった、と記憶して居る」
「しかし、いまは、うらぶれ果てたさすらい者ですぞ。……もしかすれば、田丸豪太夫の廻し者かも知れません」
「疑惑をかけるのも、人によりけりであろう」
「いや、それがしは、どうしても、あの坊主を信用いたさぬ」
「しかし、法師は、多門殿とも懇意の由ではないか」
「それがしは、多門夜八郎にも、疑いを抱いて居ります」
「多門殿も、伊吹野城の廻し者と、疑うのか？」
「あるいは——」
「疑いすぎるようだ」
　清平は、目蓋を閉じて、云った。
「父上！　田丸豪太夫は、父上が、五摂家よりおあずかりした金銀のこと、かぎつけたのではありますまいか？」
　太郎は、声をひそめて、云った。
　清平は、黙って、息子の真剣な表情を見上げた。
　五摂家とは、摂政関白に補せられるのを先途とする家柄の公卿をいう。近衛、九条、二条、一条、鷹司の五軒である。
　近衛家を陽明御殿、九条家を陶化御殿、二条家を銅駄御殿、一条家を桃華御殿、鷹司家を楊梅御殿、という。
　この五つの御殿の中に、それぞれ、多くの金銀が蓄えられていたことは、勿論である。
　しかし、応仁の大乱が起り、京洛にいくたびとなく兵火があがる悲惨に、五摂家では、その金銀を何処かへ移して、安全を計らねばならなかったのである。
　その保管を受ける家は、よほど、信頼がなければならなかった。
　泰国清平が、それに、えらばれたのであった。
　五摂家の金銀が、荷駄二十数頭に積まれて、ひそかに、この公卿館に運ばれて来たのは、二十年前のことである。
　泰国清平は、これを、館の裏手にある小山の中に、埋めたのである。清平がえらんだ場所を、掘って、匿す仕事をしたのは、運んで来た三十六名の公卿ざむらいであった。
　清平は、五摂家のひそかな指令によって、その三十六名の公卿ざむらいを、その夜の宴で、毒殺したのであった。
　残忍な所業であったが、秘密を保持するためには、やむを得ぬ処置であった。
　三十六基の墓標は、小山の頂上に並んでいる。
「太郎、滅多なことを口にすまいぞ！」
　清平は、たしなめた。
　秘密を知っているのは、父と子の二人きりであった。
「しかし、父上……」

「田丸豪太夫は、さとるはずがない。よけいな心配であろう」
「万が一、ということも、考えられますぞ」
「いや、わしは、そのような疑懼は持たぬ。田丸豪太夫が、欲しているのは、倉にたくわえた米に相違ない」
「では、父上は、多門夜八郎も天満坊も、信用なさるのか？」
その時、障子がしずかに開かれた。
「太郎殿——」
入って来たのは、杉乃江という老女であった。
「多門夜八郎殿の素姓を、明かしておきまする」
そう云って、座に就いた。
「小母御は、あの牢人者の素姓をご存じか？」
「存じて居ります」
「何者です？」
「将軍足利義晴殿の御子（みこ）です」
「え？」
清平も太郎も、愕然となった。
「将軍家の御子でありながら、お生れなされた時から、兵火に追われて、あちらへ二日、こちらに三日、と転々となされ、物心つかれた頃には、お母君も喪われて、不幸なお育ちをなされたおかた、ときおよびまする。……わたくしが、お見かけした時には、それは乱暴な和子（わこ）でありましたが、十余年を経て、ゆくりなくも、当館で、お会いしてみますと、別人のように、秀れた兵法者におなりなされて、やはり、高貴の血筋を享けられたおかたは、どのようなくらしをなされても、立派な面目を失われぬ、と思ったことでありまする」
杉乃江の言葉は、太郎の目の前をあかるいものにした。
「そうか！　あの御仁は、将軍家の——。ふむ！」
太郎は、目をかがやかすと、
「味方として、千人の力に思えるぞ！」

倉の中では——。
百平太と青助ら四人との間に、険悪な空気が、みなぎっていた。
四人は、逃げ出す、と主張し、百平太は、そうはさせぬ、と睨みすえていた。
天満坊が、ひょっこり姿をみせたのは、その時であった。
「ほう——」
ただならぬ様子を眺めて、天満坊は、一向に、動じなかった。
「たぶん、こうではないか、と思っていたぞ」
天満坊は、いっそおもしろそうに、にこにこした。
「和尚！　おれたちは、犬死はまっぴら御免だぜ」
気色ばんだ青助が、叫んだ。
「べつに、お前たちに、犬死させようとは、して居らんが……」
「だって、和尚は、伊吹野城から攻めて来やがる軍勢に、おれたちを、ぶっつけようと、いうんだろう？」

「お前たちに、そんな大層な戦闘力があるかな？」
「なんだと？」
「お前たちは、いわば、吹けば飛んでしまう羽虫だ。まともに闘って、ものの十人も殺すことはできはすまい。戦場往来の荒武者にむかえば、ひとたまりもなく、ぺちゃんこだ」
「ぺちゃんこだと！　くそ！」
青助は、憤然となった。
他の三人も、
「何をぬかしやがる」
「おれたちは、そんな腰抜けじゃねえぞ」
「ば、ばかに、するねえ」
ぶつぶつ云った。
「はっはっは、お主らにも、いささかの男の誇りはあるとみえる」
「おいっ！　和尚！　おれたちを、羽虫だとほざいたな？」
「ほざいたぞ。せめて、蜂ぐらいだと、たよりになるのだがのう」
「畜生っ！　羽虫か蜂か、トンビか鷲か、おいっ、いっちょう、夜襲勢に、おれたち、ぶっつけてみろ、ってんだ！」
青助が、すごんでみせた。
「ほほう、やる気はあるのかの？」
「くそ坊主に、これだけなめられちゃ、あとへ引けねえや！　なあ、みんな——」
青助は、三人を見やった。
「そうとも！　おれたちが、どれぐらいの働きをするか、見もしねえでよう、莫迦にされちゃたまらねえや」
黒太が、うそぶいた。
「ふむ。それほどまで云いはるなら、ひとつ、大いに働いてもらおうかの」
天満坊は、にこにこしながら、云った。
——うめえもんだ。
百平太が、内心、くすぐったい思いをしていた。
——脳みその足りねえこいつら、うまうまと、和尚に乗せられやがったぜ。

火炎陣

伊吹野城の城主館の控えの間で、小姓の華丸は、こくりこくりと、居睡りをしていた。

戌刻（午后八時）をまわった頃あいであろう。

華丸は、三更——真夜中までは、そこに、控えていなければならなかったのである。

寝所では、田丸豪太夫が、あたらしい侍女を抱いて、寝ていた。

華丸は、がくん、首を畳へぶつけそうになって、はっと目がさめた。

瞬間——。

華丸は、ぎょっとなった。

唐戸が音もなく開いていて、暗い廊下に、黒影がひとつ、立っていたのである。

「何者っ」

華丸は、太刀をつかんで、片膝立てると、誰何（すいか）した。

「城主に、会おう」

黒影は、ひくいが鋭い声音で、云った。

「何者だ、と問うている！」

「京の都から参った公卿忍者だと伝えい」

「公卿忍者？」

「そう申せば、城主は、判る」

「なんの用向きだ？」

「おのれごとき小わっぱに申しても、はじまらぬ。城主を起せ」

「お起しはできぬ」

「なぜ、起せぬ？」

「殿は、癇癖でござる」

「ははは……」

公卿忍者と称する黒影は、かわいた声音で、わらい声をたてた。

華丸は、はらはらした。

はたして、豪太夫は、そのわらい声で、目ざめた。

「華丸！」

「はっ——」

「何者が、そこに居る？」

「公卿忍者と申す者、無断にて侵入つかまつりました」

「公卿忍者だと！」

豪太夫は、我破（がば）とはね起きた。

「そやつ、そこに、居るのだな？」

「はい」

華丸は、首をすくめた。

寝所は、控えの間を通らねば、入れぬ造りになっていた。

公卿忍者は、ゆっくりと、控えの間に入って来ると、仕

切りの襖へ手をかけた。

「殿！」

華丸が、警戒をうながした。

襖が、開かれた。

瞬間——手裏剣が、飛来した。

公卿忍者は、身をひねって、これを、うしろへ流した。

「げえっ！」

絶鳴をあげて、華丸が、のけぞった。

手裏剣は、あやまって、華丸ののどに突き立ったのである。

「わざわざ、寵愛の小姓を殺されることはござるまい」

公卿忍者は、皮肉をあびせた。

豪太夫は、手裏剣を投げた手に、佩刀を抜きはなっていた。

「わしの首を奪りに参ったのか！」

「早合点されるな」

公卿忍者は、ゆっくりと、寝所に入って来ると、ピタリと正座した。

「おちつかれい、田丸豪太夫殿」

「……」

豪太夫は、油断なく、対手を睨んでいたが、やがて、しぶしぶ、座に就いた。

豪太夫は、曾て、検非違使（けびいし）の地下（じげ）官人だったことがある。

が、一夜、十余名の浮浪の徒を率い、一条家の倉を破って、かなりの金銀を盗んで、遁走したのである。

その前科があるために、公卿忍者が現れたときくや、生命を取りに来たものと、思い込んだのである。

「貴様は、一条家のやとわれか？」

「いかにも——。七位の大乗と申す」

宮廷には、六位蔵人というのはあるが、七位はない。

わざと七位と称するのは、ひねくれ者の証拠であろう。

「一条家から、遣わされて参ったか？」

「さにあらず」

七位の大乗は、かぶりを振った。

「摂家の公卿には、あいそがつき申した。当城の客分にして頂こうかと存じて、参上つかまつった」

「公卿忍者などをやとう必要は、さらにないぞ」

「土産を持参いたしました」

「土産？」

「左様——。それがしが、この伊吹野に参ったのは、この土地の何処かに、荷駄二十数頭の金銀が、隠匿されてあることを、知ったからでござる」

「莫迦な！　そのような事実があれば、この田丸豪太夫が、すでに、さがしあてて、城倉に置いて居るわ」

「そう申されると思うて居りました。これは、絵空事ではござらぬ。ちゃんと、証拠がござる」

「証拠があると？　きこう」

「もはや、二十年前のことに相成るか、と存じます。五摂家では、諸国より興って来る武家どもの、京洛乱入を憂慮

し、その蓄えた摂銀を、遠くに、かわして、かくすことを一議に及んだのでござる」
「ふむ？」
「一日、五摂家では、一家より一人ずつえらんで、平和祈願のために、出家して、高野山へのぼる、という名目をたて、その行列を、京から、送り出したのでござる。いずくんぞはからん、出家する者の荷とみせかけたのは、莫大な金銀でござった」
にわかに、豪太夫の顔面が、かがやいた。
「その金銀が、この土地へはこばれて来た、と申すのか？」
「左様でござる。伊吹野には、公卿館と称する屋敷がござるはず――」
「ある」
「五摂家では、泰国清平に、金銀を預けたのでござる」
「まことだな？　まさか、わしを、一杯くわせるのではあるまいな？」
「疑い深い御仁とは、きいて居り申したが……、相違はござらぬ」
「荷駄二十数頭の金銀が、公卿館に、隠匿されて居る！ふむ！」
豪太夫の炬眼が、狂おしいほどに、燃えた。
「殿――」
七位の大乗は、冷やかに、豪太夫を眺めて、
「その金銀を、掌中にされたならば、それがしに、いかほど、下さるか、うかがっておきたく存じます」
「左様さの――」
豪太夫は、にやりとした。
「わしも強欲だが、その方も、したたかな我欲の持主らしゅうみえるぞ」
「まさしく――」
大乗も、笑いかえした。
「半分けにしてくれる、と申したら、その方満足いたすであろうが、そうは参らぬの」
「兵を動かす分をみる、と申されますか？」
「その通りだ。その方には、三分の一をくれよう」
「お約束されますな？」
「疑い深いのは、その方だぞ」
「殿に申上げておきますが、金銀は、必ずしも、公卿館に隠匿されているとは、限り申さぬ。あるいは、館の裏手にある山の何処かに、埋められている、とも想像されるところでござる」
「泰国清平を捕えて、拷問をかけ、白状させるまでだ」
「なまなかの責めで、口を割るような男ならば、五摂家で、これほどの信頼はいたしますまい」
「まかせておけい」
豪太夫は、床の間から、法螺貝を把るや、吹き鳴らした。
それから、四半刻のちのことであった。
城門がひらかれ、一隊の騎馬が、蹄の音高く、走り出て行った。
およそ、三百騎とかぞえられた。

望楼上に、豪太夫と公卿忍者は、立っていた。
「百騎もあれば、充分であろうが、念のために、三百騎をむかわせてくれるぞ」
「公卿館の抵抗の力は、微弱だと申される？」
「手勢は居らぬ。ひと押しに、もみつぶす」
「はたして、そうたやすく、成るものでござろうか？」
「疑い深い忍者よの。はっはっは……、夜明けには、田丸豪太夫は、日本一の大金持ぞ！」
月明に、土煙りをもうもうとまきあげて、三百騎は、かわききった原野を、まっしぐらに疾駆して行く。
伊吹野城と、公卿館の間には、約二里の距離があった。
ひくい丘陵が二つ、横たわっている。丘陵と丘陵のあいだを、かなりの川がうねっているが、勿論、涸れあがって、久しい。
三百騎を指揮するのは、田丸豪太夫の股肱随一の荒武者・荒巻鬼十郎であった。
田丸勢が向うところ、必ず、荒巻鬼十郎のたけだけしい姿が、先駆していた。
胸まで垂れた長髯は、有名であった。
荒巻鬼十郎は、夜風に長髯をなびかせながら、むしろ、不服のていであった。
泰国清平の公卿館に、敵襲に備える兵力も武器もないことが、あまりにあきらかであった。
膂力三十人力を、自他ともにゆるす豪勇無双の荒巻鬼十郎が、わざわざ、指揮をとるまでもないことに、思われた。
敵が、二千騎もいて、しかも、いくたびかの戦闘できたえあげた精鋭というのであれば、こちらは、武者ぶるいするところである。
――公卿館を、ふみつぶすことなど、ばかくさい。
鬼十郎は、主命だから、しぶしぶ出て来たものの、丘陵のあたりで、寐そべりながら、四五十騎を遣（つか）って、片づけて来させたいくらいの気持であった。
第一の丘陵の麓へ達した時である。
後方から、一騎、矢のごとく飛んで来て、鬼十郎のかたわらへ、出て来ると、
「油断大敵！」
ひくいが、鋭い一句を、投げかけた。
「なに？」
鬼十郎は、じろっと見やった。
「なんだ、お主は？」
「公卿忍者・七位の大乗と申す」
「殿をそのかせて、今夜の奇襲をさせたのは、お主だな」
「左様――」
「油断大敵とは？」
「公卿館には、天満坊という坊主が、昨日到着した由、たったいま、館内を探索していた者からの報告があったので、大急ぎで、忠告に参った」
「その天満坊が、どうした、というのだ？」
「それがしは、天満坊を存じて居り申す。ただの坊主ではござらぬ。曾ては、将軍家の軍師となり、十万の兵を率い

て、五畿内を馳せめぐり、向うところ敵なき神算鬼謀を発揮した怪僧でござる」
「いまは、零落して、乞食坊主になっているのではないか」
「零落はいたして居っても、頭脳までが衰えて居るとは、思い申さぬ」
「その坊主に、千騎二千騎の手勢があれば、話は、別だろう。徒手空拳で、何ができる！　おそるるには、足りぬ。……いや、そやつと一騎討ちができると思えば、急に、力がわいて来たぞ！」
荒巻鬼十郎は、公卿忍者の忠告など、歯牙にもかけず、
「進め！」
吸号して、自ら先頭をきって、第一の丘陵を、一気に駆け越えようとした。
「ふん——猪武者が！」
七位の大乗は、いまいましく、吐きすてた。
勝手にしろ！
そう思って、大乗は、敢えて、ともに進もうとはしなかった。
丘陵は、けものの通り路のように、しぜんに、松の林の中を、一筋の道がつけられていた。
荒巻鬼十郎は、疾風の勢いで、それを奔り抜けようとしていた。
頂上から川までは、かなりの勾配になっていたが、鬼十郎は、いささかも、馬脚の速力をゆるめようとはしなかった。
ちょうど、坂の中途に来た瞬間であった。
突如——。
地面に、凄じい炸裂音が発して、馬が、棹立った。
鬼十郎の巨軀は、もんどり打って、松の梢へ、ほうり出され、はげしく枝葉を鳴らして、斜面へ、ころげ落ちた。
つき従っていた騎馬隊は、勾配の急な坂道を、隊長におくれじと、勢いまかせに疾駆していたので、その突如の地変に、たづなを引くいとまもなかった。
七八騎が、つぎつぎと、衝突して、折り重なるぶざまな光景を呈した。
さらに、そのうしろを駆け降りて来た者たちは、衝突を避けようとして、左右の木立へ、馬首を向けかえたが、これをいやがる馬の荒れ狂いにあって、宙へほうり出されてしまった。
地面にしかけた一個の火薬筒が、およそ数十騎をひっくりかえしてしまったのである。
さらに、後続する者たちは、そこに伏敵があった、と思い込んで、収拾つかぬ混乱を起してしまった。
田丸豪太夫の手勢は、食いつめ牢人、野伏、無頼の土民など、いわば寄せ集めの連中であった。
軍法を学んで、兵略に習練のある武士は、ほとんどいなかった、といってよい。
ただ、豪太夫や鬼十郎の凄じい豪勇ぶりを真似て、敵にぶっつかって行く我武者羅な度胸と力をそなえていたばかりである。

したがって、こういう場合、それぞれが、とっさに、心得ある行動をとることなど、不可能であった。
「なんだ？」
「どうしたっ？」
「突破しろ！」
「やれっ！」
口々に吸号して、滅茶滅茶に、突進することしか、考えなかったのである。
あいにく——。
荒巻鬼十郎は、馬の蹄がふみつけた火薬筒から、濛っと発した白煙で、目をつぶされていた。
煙は、猛毒だったのである。
「ええい！　おのれっ——」
鬼十郎は、狂いたって、「馬だっ！　馬を引けいっ！」と吸号した。
しかし、まわりの武者たちは、同じく、毒煙に目をくらまされて、右往左往しているばかりであった。
鬼十郎は、松の幹にぶっつかって、ころがったり、斜面をすべったりしているうちに、ようやく、一頭の馬にさわって、
「おっ——りゃっ！」
と、とび乗った。
「つづけっ！」
めくら滅法に、馬腹を蹴った。
もとより、これにつづく騎馬は、なかった。
たった一騎で、馬が疾駆するにまかせた鬼十郎は、川ぶちまで降りて、カンでたづなをひきしめると、
「おのれら！　何をぐずぐずいたし居るっ！」
と、後方へ絶叫した。
すると、これに応えたのは、川むこうからであった。
「そこに、あるのは、伊吹野城随一の猛将荒巻鬼十郎殿とおぼえたり！」
「なにっ？……おのれは、何者だ？」
「京より下った乞食坊主に候」
「天満坊とほざくは、おのれか！」
「すでに、わが名をおぼえていて下されたか。かたじけなや——」
からかわれた鬼十郎は、盲目であることを忘れて、遮二無二馬を川へ跳び入れた。
そこへ、ようやく、数十騎が、なだれを打って、駆け入って来て、鬼十郎につづいて、川へ躍った。
瞬間——。
涸れた川床が、蹄に踏まれざまに、凄じい轟音を発して、火を噴かせた。
二段に伏せた火炎陣であった。
川幅に比して、底が深いのは、まさに、火薬を伏せるには、絶好であった。
収拾すべからざる混乱は、丘陵上のそれとはくらべもならなかった。
火と毒煙と人馬の悲鳴が、眼下に渦巻くさまを、天満坊

は、馬上から、眺めていた。

あとの軍勢が、そこへ、殺到して来て、茫然と立往生する光景も、天満坊を、にやりとさせたことであった。

と——。

その生地獄の中から、猛然と駆け上って来た武者があった。

荒巻鬼十郎であった。

陣太刀をふりかざして、

「天満坊っ！　出あえっ！」

はらわたをしぼるように喚きたてた姿は、まさしく、悪鬼であった。

天満坊は、馬上から、ひややかに、その惨たる姿を見下して、

「あいにくだが、盲武者を討っても、手柄にはならぬ」

と、云った。

鬼十郎は、その声の方角へむかって、突進すると、滅茶滅茶に、陣太刀を振りまわした。

とたんに——。

「荒巻鬼十郎！　血迷うな！」

天満坊の一喝が、あびせられた。

肺腑をつらぬく鋭さに、鬼十郎は、全身をびくくっ、と痙攣させた。

「な、なにっ！　くそ坊主！」

「坊主であればこそ、慈悲を知る！　一勝一敗は、兵家の常——、この心得あってこそ、もののふと申すもの。敗れたりと判りつつ、なお、血迷うて、狂いまわるのは、見苦しいぞ。孫子も曰うて居る。善く勝つ者は、勝ち易きに勝つ。……出なおして参れ、猪武者め！」

あびせすてると、天満坊は、馬首をめぐらして、悠々と駆け退いて行く。

遠ざかる馬蹄の音に、鬼十郎は、躍起になって、

「待てっ！」

と、狂人のごとく、追おうとしたが、地面の窪みに足をとられて、転倒してしまった。

天満坊は、森かげまで、馳せもどって来ると、

「皆、いるかな」

と、声をかけた。

「おーっ！」

百平太と青助と黒太と赤松と白次が、一斉に、応じた。

「どうであったな、わが神算鬼謀ぶりは？」

「うめえもんだ！　和尚が、楠正成の生れかわりにみえたぜ」

これは、青助の声であった。

「みろいっ！　だから、おれは、和尚を信頼しろ、と云ったんだぞ」

百平太は、得意だった。

「さて——、敵は、このままでは、引きさがらぬ」

天満坊は、云った。

「懲りずに、やって来ますかい？」

「来る。三度目のおどかしで、退却させることになる」

「奴らは、しかし、まだ、百騎や百五十騎は、のこっているんじゃありませんかね。こっちは、たった六人ですぜ」

もう、地面には、火薬を仕掛けていなかったのである。

「ははは……、六人いれば、充分だ」

天満坊は、こともなげに、笑った。

やがて——。

百騎あまりが一団になって、疾駆して来た。

森のわきを、掠めすぎようとした刹那、天満坊の下知とともに、五人が、満月にひきしぼった弓から、矢を切って放った。

矢は、飛びざまに、火を噴いて、白煙を、虹のように、宙に架けた。

逆　襲

「やれやれ——」

天満坊が、のっそり座敷に入って来た時、夜八郎は、着流しのまま、寝そべっていた。

床の間に、具足が据えられたままになっていた。

泰国清平が、わざわざ、倉から出して、貸してくれたのであるが、夜八郎は、手もふれずにいたのである。

「ほう、のんびりのていじゃな」

天満坊が、あぐらをかくと、夜八郎は、やおら起き上って、

「御坊なら、夜襲隊を、途中で、片づけるものと思っていた」

と、こたえた。

館では、婦女子まで、武装して、必死の備えに加わっていたのである。夜八郎一人だけ、天満坊の奇策の成功を信じていたようである。

「いや、どうして、なかなか、敵は、生命知らずの猛者ぞろいでな。危いところであった」

五本の火矢が、夜襲隊を、その地点から退却させたのは、いわば、僥倖であった。

指揮の隊長を喪った夜襲隊は、森から火矢をあびせられるや、ついに、今夜の突進をあきらめてしまったのである。
　公卿館へ到着するまでには、いたるところに、火炎陣が伏せてある、とおそれざるを得なかったからである。
　荒巻鬼十郎が、健在ならば、たとえ無数の火炎陣が待ちかまえていようとも、猛進して来たに相違ない。
　もし、火矢が撒いた毒煙をかいくぐって、夜襲隊が、突撃して来たならば、もはや、あとには、抵抗する用意は何ひとつなかったのである。
　いま頃は、この館の中は、凄じい修羅場と化していたであろう。
「今夜は、まずまず、事なきを得たが、さて、明日はどうなるかだな」
　天満坊は、頤をなでた。
「御坊に、その思案が成って居らぬはずはなかろう」
　夜八郎は、薄ら笑いながら、云った。
「思案は成っても、はたして、それが、図にあたるかどうかな。今夜のように、うまくはゆくまい」
「きこうか」
　夜八郎は、うながした。
　天満坊は、夜八郎を視かえした。
「伊吹野城に、逆襲をしかける。これじゃな」
「逆襲？」
　夜八郎は、あきれた。
「手勢もないのに、どうして、逆襲をしかけられるのだ？」
「手勢はある」
　天満坊は、にやっとした。
「どこに？」
　夜八郎は、天満坊を見まもった。
「この伊吹野に、いる」
　天満坊は、云った。
「……？」
「この伊吹野には、なお、八千の農夫とその家族が、住んでいる。これらが、手勢となる――とは、どうじゃな？」
「武器を取ったこともない者たちを、一日や二日で、兵として訓練することは、考えられぬが……」
「ははは……、そこが、つけ目じゃな」
「というと？」
「伊吹野城でも、そう思って居ろう。農夫というものは、虫けらのように、土にしがみついている生きもの、と勝手にきめているところに、こちらの策が生れる。……伊吹野城では、あのむごたらしい虐殺によって、農夫などが何千集まろうと、案山子の山だ、という甘い考えを起して居る。成程、指揮統率がなければ、惨めな烏合の衆でしかあるまい。しかし、神算鬼謀をもって、これを動かせば、伊吹野城の荒武者隊に、まさるとも決して劣らぬ働きを、発揮するのではあるまいかな」
「……」
「窮鼠も、猫を噛む。追いつめられた者は、復讐の一念に燃え立つならば、いかなる危険を冒すことも辞せぬ。そう

ではなかろうかな」
　天満坊は、そう云うや、おのがむき出しの膝をぴしゃりと叩いて、
「虎穴に入らずんば、虎子を得ず」
と、叫んだ。
　――この桑門は、どうやら、天下を狙う大伴の黒主になれそうだ。
　夜八郎は、微笑した。
「御坊が、その決意なら、こちらに反対する理由はない」
「左様。賛成して頂こう。農夫隊を率いて、伊吹野城を逆襲するのは、お手前の役目だからな」
「それがしに、指揮をとれ、というのか？」
「他に、誰が居るのじゃな」
「御坊がいるではないか」
「ははは……、軍師は、かるがるしゅうは動かぬもの。総大将は、自ら先頭に立って、その勇猛ぶりを示してもらわねばならぬのでな」
「やれというなら、やってもよいが……、田丸豪太夫の首を奪ることが、はたして、できるかどうかだ」
「いや、首は頂かんでもよろしい。そのかわり、伊吹野城にたくわえてある兵糧を頂戴いたすことにいたそうではないか」
　天満坊は、不敵なことを、うそぶいた。
　この時、夜八郎は、なにげなく、庭へ投げていた眼眸を、急に、光のあるものにした。
　くらい樹蔭を、けもののようにすばやく掠める影を、みとめたのである。
　常人ならば、狐狸のたぐいであろう、と見のがしたであろう。
　夜八郎の直感力は、鋭かった。
「曲者が忍び込んだようだ」
　ひくく、つぶやいた。

　泰国清平は、太郎から、天満坊と五人の無法者たちの奇策の成功を、告げられて、
「みごとな軍師だの」
と、微笑していた。
「しかし、父上、奇策はやはり奇策にすぎません。今夜の敗退は、田丸豪太夫を、激怒させますぞ」
「そうであろうな」
「とすれば、明日は、豪太夫自身が、手勢を率いて、押し寄せて参るおそれがあります」
「ないとは申せまい」
「その時は、どうするのです？　あの出家に、これを撃退する方法があろうとは、考えられぬ」
「天満坊殿は、そのことも、ちゃんと、思慮に入れているのではあるまいかな」
「いいや、今夜の奇策がせい一杯のところでありましたろう。もし、豪太夫が、攻め寄せて参ったら、出家らは、遁げ出してしまうのではありますまいか」

「太郎、お前は、どうして、そのように、疑い深くなったのじゃな？」
「名君と仰いでいた先の城主が、あのように、われわれ地下（じげ）の者たちを、むざんに裏切られて以来、もう誰人をも信じることは、できなくなりました」
太郎の言葉には、憤りがこもっていた。
無理もなかった。
伊吹野城の前城主奈良城義胤は、田丸豪太夫に追われて、大庄山の天険に拠る城砦に籠っているが、それは、おのが一族の安泰だけをはかる卑劣な行為であった。
それというのも——。
田丸豪太夫が、この伊吹野をしばしば侵寇して来はじめたのは、六年あまり前からのことであった。
その頃すでに、奈良城義胤は、ひそかに、たくわえていた兵糧を、大庄山の城砦へ、はこびはじめていたのである。
春風駘蕩たる温容そのままの人格者として、領民から慕われていた義胤は、実は、小ずるい臆病者でしかなかったのである。
それが、判明したのは、田丸豪太夫が、全軍を率いて、伊吹野城に、総攻撃をしかけた時であった。
守備の将兵は、能く闘った。
我に数倍する田丸勢を、ひきつけてビクともせず、しばしば、夜陰に乗じて、城を出て、死闘を演じたことであった。
それにも拘らず——。
奈良城義胤は、城門をひらいて、田丸豪太夫に降服し、大庄山へ去ったのである。
悲憤のあまり、数十騎が、田丸の陣営へ斬り込んで、玉砕する悲劇も起った。
領民は、城主の不甲斐なさに、絶望した。
田丸豪太夫に、城を奪われたならば、伊吹野が、どのような惨状を迎えるか、目に見えていたのである。
奈良城義胤が、兵糧と武器を、ことごとく、大庄山にはこび去っていたことが判ったのは、田丸豪太夫が、入城してみてからであった。
豪太夫は、
「しまった！」
と、歯がみして、口惜しがった。
義胤が、わずか二百名の家来だけを、ひきつれて、のこりの将兵を、見すてたのは、こんたんがあったのである。
すなわち、ごく少数の家来を擁していれば、三年や四年は、平然として、たて籠っていられるからであった。
背後を人跡未踏の大密林と断崖にまもられ、前面に、神秘な深みどりに底知れぬ深さを示す湖水がひろがった城砦には、これを守備する武力は、さまで多勢を必要としなかったのである。
いま、義胤は、悠々として、下界の飢餓地獄を、眺め下している。
太郎が、義胤に対する憎悪を、露骨に表情に現すのは、当然であった。

若い太郎は、義胤をこそ、世人の亀鑑たるべき人格者と、慕っていたのである。その城主に裏切られて以来、人間というものが、信じられなくなったのである。
「太郎、天満坊殿だけは、信じてよい人物であろう。わしは、そう思う」
清平は、云った。
「父上が、そう云われるならば……」
太郎は、しぶしぶ、こたえた。
やがて、太郎が出て行ってから、ひとときの夜の静寂が、部屋にこもった。
と——。
どこかで、微かに、鼠が小走るような、小さな物音がひびいた。
清平は、病める者の鋭く冴えた神経で、それを、怪しむべきものに察知した。
「だれだ？」
清平は、誰何（すいか）した。
屏風の蔭に、あきらかに、人の気配が生れた。
「だれだ？」
「おしずかに！」
対手は、ひくい声音で、制した。
「わしの寝首を掻きに参った者か？」
「さにあらず、内密の相談を申しあげたく、参上いたしたる者」
「名のれい！」
「公卿忍者・七位の大乗と申す」
「公卿忍者と？」
「左様、五摂家様がたより遣わされて参った者とお思い下さいますよう——」
「五摂家より、なんの目的があって、遣わされて来た？」
「それがしが、これだけ申上げれば、すぐに、合点なさるはず……」
「わからぬ、なんのことやら——」
「清平様、おかくしなされるな。七位の大乗は、五摂家様がたより、旨を奉じて参った者でござる」
泰国清平は、対手が、なんと云おうとも、油断をしなかった。
「五摂家より、お主が、遣わされた理由など、このおいぼれに、わかろう道理がない」
「ふふ……。それだけの要心ぶかい御仁なれば、莫大な金銀を、五摂家では、おあずけなされたことでござる」
七位の大乗は、ずばりと、云ってのけた。
「……」
清平は、内心愕然となった。
金銀をはこんで来た公卿ざむらい一行を、一人残らず暗殺せよ、と命じたくらい、五摂家では、このことの秘密保持には、要心ぶかかったのである。
この公卿忍者が、どうして、さとっているのか？
「お館——。お疑いはご尤もでござるが、この七位の大乗は、一条関白様から、忝くも、股肱と思う、とお言葉を頂

戴した者でござる。信じて下され」

「……」

「一条関白様には、都もようやく平穏にかえったゆえ、御所も修築し、五摂の館も新しく構えようと存ずるゆえ、伊吹野にかくしてある金銀のうちの半分を、はこびもどそうと存ずる、その方、泰国家へおもむいて、たしかに、その場所にかくしてあることを、たしかめて参れ、と仰せつけなされたのでござる」

「……」

「泰国殿！」

大乗は、急に、語気を鋭いものにした。

「おこたえにならぬところをみると、よもや、田丸豪太夫に奪われたのではござるまいな？」

「何を申す！ 大切な金銀を、あの野伏あがりなどに、奪われてたまろうか。もし、奪われていたならば、こうして、のめのめと、生きては居らぬ」

「いや、それをうかがって、安堵つかまつった。では、たしかに、此処に埋めてある、という証拠をみせて頂きとう存ずる。たしかめたならば、即刻、都へたちかえって、関白様に、ご報告つかまつる」

大乗は、いかにも、誠意ありげに、云った。

「お主が、五摂家よりの使者である証拠は？」

清平は、それをもとめた。

「もとより、持参つかまつる」

大乗は、懐中から、油紙で包んだ密書をとり出し、うやうやしく、おし頂いてから、清平にさし出した。

清平は、披いてみて、一読してから、さらに、丹念に、贋ものであるかどうか、しらべた。あきらかに疑惑を呼ぶ怪しい点は、発見できなかった。文章、筆跡とも、関白らしいものであったし、捺された印璽（いんじ）も、関白のものであった。

だが、なお、清平は、警戒心を解かなかった。

「成程、この書状を拝見いたせば、お主が、五摂家のお使者のように、受けとれる。……だが、一条関白ともあろうお方が、身分も地位もない、かくれ衛士（えじ）のお主などに、どうして、この大事を打明けられるものであろうかな。信頼のできる六位蔵人あたりに、打明けられて、遣わされたのであればまだしも、お主などが、じかに、関白殿と口をきけた、ということさえも、疑わしい」

「それがしが、身分も地位もないかくれ衛士であればこそ、関白様には、深夜ひそかに、膝もとへお呼びなされることが、できたのでござる」

「さあ、どうであろうかな」

「信じ難い、と申されるか？」

――この老いぼれめ、なかなか、要心ぶかいぞ！

大乗は、内心少々あせりを生じた。

清平としては、語るに落ちるで、大乗から、金銀を田丸豪太夫に奪われたのではないか、とあびせられて、つい、そのようなことがあったならば、おめおめと生きては居らぬ、とこたえてしまい、それが、たしかに、金銀を預って

いる、と白状してしまう結果になったのに、気がついていた。

「ともあれ――」

清平は、居ずまいを正すと、

「押問答は、無用の儀と思う。早々に、立去って、二度と姿をみせてもらわぬよう、これが当方の希望――」

と、云った。

「泰国殿。それがしは、余人ではござらぬ。公卿忍者でござる。しかも、このように、関白様の蠟書を携えて参った者でござる。……怪しいから、立去れと申されても、すごすご退散いたすわけには参り申さぬ」

大乗は、云いおわると同時に、さっと立つや、風のように奔って、次の座敷との杉戸をひきあけた。

そして、そこに、身をひそめた者を、ねじ伏せた。

ねじ伏せられたのは、青助であった。

青助は、若い女をねらって、この母屋へ忍び入り、あまりの広さに方角を見失って、迷い迷い、奥へ進み入って来て、偶然、清平と大乗の問答を、ぬすみぎいたのである。

「おのれ！ 内密の話をぬすみぎいた上からは、たとえ、当家の下僕であっても、許せぬぞ！」

大乗は、小刀を抜きはなった。

青助は、もがくことさえかなわぬねじ伏せられかたをして、

「……う、うっ！」

いたずらに、床へ押しつけられた顔を、左右に振るばかりであった。

大乗は、小刀を、振りかざして、青助の頸根へ、突きたてようとした。

その瞬間であった。

「忍者！ 大層に、身振るな！」

その声とともに、すっとふみ入って来たのは、夜八郎であった。

大乗が、青助を刺せば、間髪を入れず、夜八郎の腰から、白刃が鞘走って、刺殺者の首を刎ねるであろう。

その殺気をあびて、大乗の振りかざした小刀が、宙で固着した。

夜八郎は、氷のような双眸を据えて、大乗を見据えている。

一瞬――。

大乗は、青助の上から、はね上って、一間の後方に立った。

「おのれは、公卿忍者と称したそうだな？」

「いかにも、左様――」

「笑止！」

「なに！」

「公卿忍者というものは、単独で行動はせぬ。必ず三人一組となって行動するのが掟だ。そのことを知って居る者はない、とたかをくくって、忍び入って来たのか？」

「……」

「あいにくであったな、七位の大乗――」

「おのれは、何者だ？」
「おれが、将軍足利義晴の子であったら、どうする？」
「なにっ?!」
「ははは……、おれが、将軍家の倅であろうとなかろうと、そんなことは、どうでもよい。いまは、ただの牢人者だ。下忍ずれが、物欲しげに、七位などと名のる根性とは、いささかちがうぞ！」
「その高言を、太刀で示してもらおうか」
大乗は、小刀を左手に、太刀を右手にかざすと、ゆっくりと、右まわりにまわりはじめた。
「大乗、遁走は卑怯だぞ！」
右方には、杉戸があった。
夜八郎は、大乗がそれを破ろうとするのだ、と看破したのである。
看破された以上、大乗は、闘うよりほかはなかった。
夜八郎が、どれだけの業をそなえているのか知らぬが、そのおちつきはらった態度に示されている微塵の隙のなさは、なみなみならぬもの、と大乗はみとめざるを得なかったのである。
大乗は、決死の闘志を燃えたたせなければならなかった。
大乗には、おそるべき特技があった。助走なくして、翼があるごとく、二間余の宙を翔けることができるのであった。
大乗は、床を蹴った。
忍び装束の姿が、天井に吸いあげられるごとく、舞い立って、夜八郎の頭上を飛行した。
夜八郎は、身をひねりざまに、抜きつけの太刀を一閃させた。
颯っと鳴る白い光芒の中を、襲って来た小刀が、はねとんだ。
大乗は、清平の坐る寝床の近くに降り立ちざまに、身をひるがえして、庭へ奔ろうとした。
「どっこい！」
庭から、一喝が、あびせられた。
「ここは、地獄の一丁目じゃ。なかなかもって、通り過ぎることは、かなわぬぞ」
大乗は、その声をきいて、戦慄した。
——天満坊だ！
「大乗、思いがけないところで、めぐり会うたものだ。陰陽寮のやとわれ下忍が、いつの間にやら、七位まで出世して、一条関白殿から、使命を受けるまでに信頼を得たとは、めでたい。……拙僧が知るお主は、大吉大凶の贋の陰陽札を、豪家の門やら座敷やら台所に貼りつけておいて、しきりに善男善女だましをやって居ったがのう……」
「ええい！　うるさいっ！」
大乗は、狂気のごとく、喚きかえすや、再び、身を宙のものとした。
夜八郎を頭上から襲う秘術を、もう一度こころみたのである。
結果は、同じであった。

翔けつつ、撃ちおろした大乗の太刀は、一颯の刃風を受けて、遠くへはねとんでいた。
大乗は、元の位置へ、無手になって、舞いもどっていた。
「どうする？」
夜八郎は、薄ら笑いながら、問うた。
「なに？　どうするとは？」
大乗は、夜八郎を睨みかえした。
「いい加減で、降服したら、どうだ、というのだ？　それとも、懐中にかくしている忍び道具を、もう二つ、三つ、使用するか？」
「……」
「欲にからんで、忍び入って来た下忍に、面目も意地もあろうとは思われぬぞ」
「……う！」
「ついでに、申しておけば、おれは、むしろ、お主のような狡猾で、欲張りで、行動力を持っている闇馴れの男が、きらいではないので、斬りたくはない」
この言葉は、効果があった。
「参り申した」
大乗は、あっさりと、かぶとをぬいだ。
その場へ正座した大乗は、
「御随意に——」
と、云った。
夜八郎は、太刀を腰におさめると、清平にむかって、
「おさわがせした」
と、一礼した。
「あやうく、この忍者の口車に乗せられるところでござった。まことに、おはずかしい」
清平は、そう云って、頭を下げた。
その時、庭から、天満坊が、
「大乗、ちと、話したいことがある。書院へ来てもらおう。……多門殿は、お館と、相談があろう。……大乗、来さっしゃい」
と、うながした。
天満坊は、大乗を、書院にともなうと、
「早速じゃが、五摂家のかくし金銀のこと、どこで、かぎつけたな？」
と、訊ねた。
大乗は、それに返辞をする前に、小ずるい眼光をかえした。
「御坊も、その秘密を知って、当館へ乗り込んで参られたのか？」
「ははは……、盗賊は、仲間を語らいたがる。ま、お主の好きなように解釈するがよかろう。……どこで、かぎつけたぞ？」
天満坊の表情が、急に、きびしいものに変った。
「つい、先般、失火によって、桃華御殿（一条家）の倉三棟が焼け申した。その時、それがしは、御殿の廻廊の下にひそんで居り、関白様と若御所様の交される話を、ぬすみぎいたのでござる」

その時、一条関白は、子息に、

「こうした時には、気が楽なものだな」

と云い、子息はこたえて、

「わたしが、近く、伊吹野へ参って、泰国清平に、しかと、あずかってくれているかどうか、たしかめて参りましょうか」

と、云ったのである。

そのみじかい会話をきいただけで、大乗は、敏感に、

——はてな？　これは、くさい！

と、ピンと来たのである。

大切な財宝が入れてあるはずの倉が炎上するのを眺めて、平然としている御所父子の態度を、どうも妙だ、と感じていた矢先に、この会話をきいたのである。

それからの大乗の行動は、すばやかった。

五摂家の御殿へつぎつぎに忍び入って、さぐってみたのである。

それぞれの倉が、なんの警備もされていないのを調べてみれば、その中がすでに空であることが明白であった。

二十年前に、五摂家から、多数の荷駄がはこび出されたこと、そして、これをはこんで行った公卿ざむらいたちが、一人も帰って来なかったこと。

その事実をきき出すのに、大乗は、さして苦労をしなかった。

「成程な。関白殿の不覚であったな。そこでお主は、大層な野望を燃えたたせた……」

「よもや、当館に、天満坊殿や将軍家の御子がおいでであろうとは、存じ寄らざるところでござった」

「ところで、大乗——」

天満坊は、にこにこしながら、

「お主は、この伊吹野に入るや、まっすぐに、当家をねらって、忍び入って参ったのかな？」

「それは、勿論のことでござる。ほかに、うかがうところとてござらぬ」

「黙れっ！」

大乗に、凄じい一喝をくらわした。

大乗は、びくんと、全身を痙攣させて、亀の子のように、首を縮めた。

「大乗！　余人はごまかせても、この天満坊をだますことは、かなわぬぞ。おのれは、この伊吹野に入るや、まず、伊吹野城に忍び入って、田丸豪太夫に会うたであろう。相違あるまい！」

「……」

大乗は、上目づかいに、ちらりと、天満坊を見やった。

「負け犬」というやつがいる。犬は、一度、喧嘩をして、負けると、次からは、その敵を見かけるや、必ず、尻尾をまき込んで、こそこそと、かくれてしまう。もう、永久に、その敵には、勝てぬ、と思い込んでしまうのである。

大乗は、まさに、いま、「負け犬」であった。

「どうだ、大乗——。白状せい」

「恐れ入り申した」

大乗は、両手をつかえて、平伏した。

「豪太夫に、五摂家のかくし金銀のことを告げて、夜襲をそそのかしたのだな？」

「たしかに——」

「お主は、相当小ずるい性に生れついて、欲深さもかなりのものであろうが、少々智慧が足らぬようだ」

「それがし自身は、そう思うて居り申さぬが……」

「馬鹿は、おのれを、むしろ、利巧と思い込んで居るぞ」

「智慧が、どう足りぬか、お教え頂こう」

「お主は、田丸豪太夫に、かくし金銀を奪わせて、山分けをもくろんだであろう？」

「その通りでござる」

「もし、かりに、豪太夫が、それをせしめたとして、お主に、分けるかどうか——それに疑いを持たなかったか？」

「……」

「豪太夫が、ただの粗暴な成上り大名と、甘く見くびって居ったのであろう。そこが、智慧が足りぬ、と申すのだ」

「……」

「豪太夫は、かくし金銀をせしめたあかつき、お主に半分呉れるかわりに、お主を殺すことを考えるであろうな」

「成程——」

大乗は、天満坊に云われてみて、その通りだ、と合点した。

「敵が悪党ならば、こちらも悪党の心得をもって、敵の肚のうちをさぐってみる。これが、智慧の働かせどころであろうではないかな」

「恐れ入り申した」

大乗は、あらためて、頭を下げた。

「大乗、お主は、忍びの術では、多門殿に敗れた。この天満坊には、智慧の足りなさを指された。どうじゃな、もう小ずるく立ちまわる料簡をすてては——」

「服従つかまつる」

大乗は、こたえた。

「負け犬」は、全く素直になっていた。

「さて——ところでと」

天満坊は、微笑しながら、

「お主のことゆえ、伊吹野城に忍び入ったからには、城内の様子を、つぶさにしらべたであろうな？」

大乗は、おのれの行動を、ぴたりぴたりと云いあてられて、すっかり感服した。

「しらべ申した」

「田丸豪太夫が、諸方から強奪した財宝は、おびただしいものであろうな？」

「それがしは、いつぞや、伊勢管領の北畠家の館に忍び入ったことがござる。伊吹野城にあつめられた財宝は、それにまさるとも、劣らぬほどでござった」

北畠家は、足利家に次ぐ名家であった。

田丸豪太夫は、想像以上の悪辣な強盗を働いたことになる。

「米倉は、どうだな？」

「つめ込むだけ、つめ込んで居り申す。二年が三年の籠城をいたすとも、なんの不安もあり申さぬ。たくわえた糒だけでも、どれだけ積んであるか、想像もつき申さぬ」
「そうか」
天満坊は、目蓋をとじて、しばらく、黙念としていたが、
「やはり、逆襲あるのみだの」
と、つぶやいた。
「逆襲——と申すと?」
大乗は、けげんに、天満坊を見つめた。
「先んずれば、敵を制すじゃ」
「伊吹野城へ、戦いを挑むのでござるか?」
「左様——」
「し、しかし——」
大乗は、あきれつつ、
「当館に、兵は居り申さぬが……」
「いる」
「どこに?」
「伊吹野にちらばる農夫らが、明日から、鍬をすてて、武器をとる。指揮をとるのは、将軍家のおん曹子だ。……面白かろう」
「農夫らを兵に? それは、無理な企てでござろう」
「兵は、闘魂を与えて、奇策をもって動かすもの。伊吹野城の烏合の雑兵どもと、生きんがために死にもの狂いになった農兵らと、いずれが強いか——これは、面白い闘いとなろうわい」
「そう申されるならば、そんな気もいたすが……」
「お主の浅智慧などで、結果は測れまいの」
「天満坊殿。それがしを、どうお使いめさる?」
大乗は、問うた。
「もう一度、伊吹野城へ、ひきかえしてもらおうかな」
「え?」
「三転——豪太夫の方へ、裏切るかな?」
「とんでもござらぬ」
大乗は、あわてて、かぶりを振った。

さすらい姫

今日も——。
陽が昇るにつれて、熱気が、山肌からあふれ出るように、急坂をのぼって行く旅人を、襲っていた。
二頭の痩せ馬は、うなだれて、石塊の多い坂道に、ぽくっ、ぽくっと、蹄の音をひびかせていた。
前の馬の上には、市女笠の若い女人が腰かけ、あとの馬は、旅の荷をのせていた。
前の馬の口をとるのは、柿丸であった。
幼くして家を失って、山野に起き臥しすることをおのが人生と思いさだめたこの男は、目くるめくような暑気にも、汗ひとつかかずに、かえって、喘ぐ馬をひきあげるような足どりをみせている。
「梨花様、もうすぐ、頂上でござる」
柿丸は、告げた。
市女笠をあげた梨花の貌は、あいかわらず血の気の薄い白蠟の色であったが、旅をする体力をとりもどしている証拠を、その眸子(ひとみ)に示していた。澄んで、あかるいのであった。
「峠を越えれば、伊吹野でしたね」
「左様でござる」
「幼い頃、母にともなわれて、京へ上るために、一度通ったことがあります。……公卿館とよばれる屋敷で一泊いたしました」
「では、今夜も、その公卿館に、宿をたのむことにいたしましょう」
「御当主が、健在ならば、わたくしのことを思い出して下さると思います。……泰国、と申された、と記憶して居ります」
「公卿館というからには、京から落ちられた公家衆でありましょうな?」
「幼い頃の記憶なので、どのような素姓の御仁か、判りませぬが……、お庭が大層広く、立派であったことを、おぼえて居ります」
梨花は、遠い記憶の糸をたぐる表情になった。
柿丸は、その顔を仰いで、
——すっかり、恢復された。
と、安堵した。
健康斎という名医の家で、一年の療養をした梨花である。
——あるいは、半年か一年の寿命かも知れぬ、と内心おそれていた柿丸も、健康斎の指示によって規則正しい療養の日々を送る梨花を眺めているうちに、
——大丈夫だ! これで、二十年、いや三十年の生命をひろわれた。
と、確信するようになったのである。

しかし、ある日、梨花が、
「夜八郎様のあとを、追ってみたい、と存じます」
と、云い出した時には、狼狽した。
永い旅に堪えるまでに、健康をとりもどしているとは、考えられなかったのである。
「もう一年ばかり、お待ちなされては？」
と、柿丸は、とどめざるを得なかった。
しかし——。
夜八郎のあとを追おう、と心にきめたのは、急に思いついたことではなく、梨花は、健康をとりもどすにつれて、考えていたことのようであった。
「柿丸殿には、ご迷惑をかけますけど、行かせて下さらぬか」
梨花の態度は、その決意のかたさを示していた。
しいて止めれば、一人だけで、出て行くに相違なかった。
梨花は、いつ還って来るかわからぬ夜八郎を、じっと待っていることに、堪えられなかったのである。
それというのも——。
別れる時、
「いつ、おもどりなさいましょうか？」
と、問うと、夜八郎は、冷やかに、
「わからぬ」
と、こたえたのである。
「三年さきになるか、五年あとになるか……。おれは、自身の気のむくままに、生きて行きたい」
この言葉は、梨花にとって、この上もなく悲しいものであった。
しかし、そのような孤独な意志を抱いている夜八郎を、おのが愛情でつなぎとめることはできなかったし、帰って来る日を約束させる勇気も出なかった梨花である。
梨花は、病みやつれた身を、牀の上に起して、出て行く夜八郎を、だまって、見送っただけであった。
柿丸が、追って行き、
「せめて、来年、それができなければ、三年過ぎたら、帰って来る、とお約束して下され」
と、たのんだが、むだであった。
「おれは、修業のために旅に出るのではない。放浪するために、京を去るのだ。おのれ自身をしばるような約束は、できぬ」
夜八郎の返辞は、まことに、冷淡なものであった。
一処不住の漂泊者、とおのれの人生を思い定めてしまっている者に、心をひるがえさせることは、不可能であった。
梨花が、いかに慕っていても、それは梨花だけの気持であり、夜八郎が、受け入れているわけではなかった。
夜八郎は、ただ、
「東へ行く」
それだけ告げのこしたのであった。
ふつうの考えでは、ただ漠然と、東へ行く、とだけ云いすてた人のあとを追うのは、まるで、広い野の中に落ちた金をひろいあげるほどのたよりなさであろう。

梨花は、敢えて、その心細さを押し伏せたのである。
柿丸は、恋に生きる女の強さに打たれないわけにはいかなかったのである。
「梨花様が、それほどの決意をされているのであれば！」
柿丸は、従った。
二人が、京の都を出たのは、二十日前であった。
梨花は、さいわい、疲れをみせなかった。
柿丸は、梨花のことよりも、むしろ、突如として襲って来る野盗土賊に対して、油断なく心を配らなければ、ならなかった。
旱魃のうちつづく山野を越えて来たのである。
あらゆる人間が、飢えて、野獣に近い状態になっていた。
二十日のあいだに、二人は、八度びも、そうした人間野獣に、襲いかかられていた。
柿丸は、そのうちの幾人かを斬り仆し、また、多勢とみて、必死の逃走をやっていた。
このような殺伐な、弱肉強食の状態が、諸国にくりひろげられていることは、勿論、出発する時覚悟していたことである。
しかし、噂にきくのと、その目で見るのとでは、おのずから、ちがっていた。
梨花は、あまりのしばしばの襲撃に遭って、思わず、決意がにぶり、
「京へもどりましょうか」
と、云った。
柿丸一人の奮戦にたよらねばならぬのは、あまりに、心苦しかったのである。
すると、柿丸は、笑ってかぶりを振り、
「貴女様は、多門様にお会いなさる日のよろこびだけを、想うていて下され」
と、こたえたことだった。
かえって、柿丸の方が、いかなる障害があろうとも、これを排除して、必ず、梨花を夜八郎にめぐり会わせてみせる、と不退転の覚悟をかためていたのである。
梨花のからだが、病いを再発させること以外、柿丸のおそれるものは、行手に何もなかった。
「さあ、そこが、頂上でござる」
柿丸は、馬を曳く足をいそがせた。
その頂上は、数日前、天満坊たちが憩うたところであった。
柿丸は、倒れた茶店を眺めて、
「どこも、ここも、人間が住みにくくなってしまって居る」
と、つぶやいた。
梨花は、なつかしそうに、眼下にひろがる伊吹野を見やったが、たちまち、
「これは！」
と、見わたすかぎり涸れはてた荒野に、声をのんだ。
田植えがおわって、野はいちめんに、青あおと息づいているべき季節であった。
目に入るのは、黄色にかわききった、死の世界のように

不気味な静寂をたたえている広大な地表であった。
柿丸は、のびあがってみて、
「これは、いたましい！」
と、叫んだ。
「まるで、人間は一人のこらず、死に絶えているようじゃ」
柿丸が、うしろの馬の背中から、荷のひとつが、失くなっていることに気がついたのは、その直後であった。
「これは、しもうた！」
柿丸は、愕然となった。
その荷には、山の清水を汲んだ大きな革袋がくくりつけてあったのである。
「途中で、おとしたぞ。……梨花様、しばらく、ここで待っていて下され。ひろって参る」
その水がなくては、伊吹野を越えることは、おぼつかなかった。
柿丸は、韋駄天のように、いま来た道を奔って行った。
梨花は、松の木蔭に入って、涸れはてた平原へ、目を置いた。
東へ行けば、いつか、多門夜八郎にめぐりあえる。
その希望を胸に抱いて、ここまで来たのだが、思えば、これは、あまりにも心細い旅であった。
あるいは、ついにめぐり会えないままに、旅がおわるのではあるまいか。
それというのも――。
梨花は、おのが生命の短かさを予感していた。
さいわい、健康斎という名医によって、こうして旅のできる体力をとりもどしたとはいえ、すっかり治癒したとは、云えないのである。
柿丸に対しては、気づかれないようにつとめてはいるが、もう細身の中に、疲れはつもっていた。
いつ倒れて、起き上れなくなるか、という危懼が、絶えず、心をおびやかしているのであった。
――このまま、京へひきかえして、どこか、山かげの草庵で、ひっそりくらしながら、多門様のおかえりを待っているのが、わたくしの生きかたではあるまいか？
ふと、その呟きを、胸でもらした時であった。
五六騎の蹄の音が、後方からひびいて来た。
土賊や野伏は、馬を駆らぬので、梨花は、べつに、警戒もせずに、そこに、うずくまっていた。
坂を駆け降りて来たのは、いずれも、猛者(もさ)めかして髯をたくわえた武者連であった。
先頭の者が、そこに憩うている馬をみとめて、視線をまわし、梨花を発見するや、
「ほう――」
と、たづなを引いて、目を光らせた。
それから、うしろをふりかえって、
「狐かの？」
と、笑った。
「かも知れぬ」
うしろの者も、にやりとした。

思いがけず、都の匂いをただよわせる美女を見つけて、武者連は、そのまま、駆け抜けるわけにいかなかった。
「ひろって行くか」
一人が、云った。
「くじをひくことになるかの」
「待て――」
先頭の者が、云った。
「これは、献上品だのう。田丸豪太夫殿は、大層な色好みときいたぞ。随身の土産としては、恰好であろうがな」
「成程――、うまい考えだ」
この五人の騎馬武者は、伊吹野城へ、行こうとしているのであった。
五人は、馬から降りた。
梨花は、対手がたの不穏な態度と会話をきいて、木立の中へさがり、すでに、懐剣を抜き持っていた。
「娘御――」
三人ばかりが、木立にふみ入って来た。
「われわれに出会ったのが、不運であったと、あきらめてもらおう。抵抗は、無駄だぞ」
「……」
梨花は、懐剣をかまえながら、じりじりと、あとずさった。
「べつに、取って食おうと申すのではない。この伊吹野の領主に、そなたを、側室として、献じようというのだ。あるいは、そなたが、領主の鼻毛を三寸も長くのびさせて、思うがままに栄華を愉しむことができるかも知れぬのだぞ」
「……」
「女子（おなご）というものは、色香によって、天下を牛耳ることができる。幸せなものよ。われわれは、身体中に無数の刀創槍傷を負うても、侍大将になるのさえ、容易ではない。……さ、おとなしゅうせぬか」
「寄ってはなりませぬ！」
梨花は、懐剣の切先を、おのがのどに、擬した。
「寄れば、死にますぞ！」
「はっはっは……、その態度をみると、どうやら、ひとかどのさむらいの娘のようだな。ますます、気に入ったぞ」
こういう狼藉には、馴れている武者たちであった。
合戦におもむけば、その土地土地で、女をあさり、犯して、それを当然のことと考えている輩であった。
不意に――。
「いかん！　娘御、まむしが、足もとに来たぞ！」
一人が、大仰に叫んだ。
梨花が、はっとなって、足もとへ視線をおとした。
その隙をうかがって、二人が、さっと、とびかかった。
苦もなく懐剣を奪いあげると、
「おう――久しぶりで、餅肌を抱くぞ」
「うむ！　このやわらかさは、無上のものよ」
矢庭に、四肢をつかんで、かつぎあげてしまった。
柿丸が、そこへもどって来たのは、梨花をさらった五騎

が、遠く、平原の彼方に、豆つぶのように、小さくなった頃あいであった。
「おや？」
柿丸は、見まわし、
「どこへ、行かれたぞ？」
と、つぶやいたとたん、視線を、木立の地面へ、釘づけた。
健康斎から与えられた薬函が、そこへ落ちていた。
梨花が、常時、懐中にしていた品である。
とっさに――。
柿丸は、平原へ、鋭い視線を放った。
彼方に――。
騎馬の一列が、消えかかろうとしている。
「彼奴らかっ！」
柿丸は、おのが馬に、とび乗るや、坂を駆け降りて、追いはじめた。
だが、その馬は、戦場で馴れた駿足ではなかった。ただの駄馬であった。
はやる柿丸にとっては、いかにも、のろい脚力であった。
「くそっ！　はしらぬかっ！」
柿丸は、積んであった荷を抛り出したばかりか、ひろって来た水入りの革袋までも、すてた。
にもかかわらず、駄馬は、一向に、先の騎馬との距離を、縮めようとはしなかった。
徒労と知りつつ、もっと奔らせようとしたことに、むりが生じた。
一瞬――。
駄馬は、前脚を折って、つンのめった。
柿丸は、もんどり打って、涸れた川床へ、投げ出された。
不覚にも、脾腹を打って、柿丸は、意識が遠のこうとした。
それを、必死にこらえて、路面まで、匍いあがったが、立つことは、おぼつかなかった。
そのまま、土べたへ爪をたてて、呻いた。
いくばくか経って、
「どうなされた？」
と、声をかけられた。
「た、たのむ！」
柿丸は、声をしぼった。
「わ、わしの背中を、踏んで、くれ」
「踏めば、どうなるのかや？」
「たのむ！　云う通りにしてくれ」
「うーむっ！」
喰べられる草をつんだ竹籠を背負うている農夫は、たのまれた通りに、柿丸の背中へ、土足をのせた。
呻きを噛みしめて、ぐっと、こらえた柿丸は、農夫が背中から降りると、よろよろと立ち上った。
「取りかえすぞ！」
農夫は、狂おしい形相と化した柿丸を、いたましげに、見まもって、

「いま行ったさむらい衆を、追おうとなさるのか？」
と、問うた。
「わしの、仕えている姫君を、奪われたのだ！　取りもどさずには、おかぬ！」
柿丸は、歩き出そうとして、よろめいた。
農夫は、あわてて、手を添えてやり、
「はかないことじゃ」
と、つぶやいた。
「お、おぬしら、米づくりの衆は、あきらめが早いか知らぬが……、わしは、あきらめぬぞ！　姫君は、わしのいのちだ！」
「しかれども……」
農夫は、かぶりを振った。
「あの武家らが、伊吹野城へ入ってしもうては、どうするすべもありますまいが……」
「なぜだ？」
「旅の御仁なら、ご存じあるまいが、伊吹野城の頭領は、それはもう、血も泪もござない。わしら、百姓など、虫けら同様に思うてござるおそろしい御仁ゆえ……、あきらめられるがよろしかろ」
「いいや！」
柿丸は、農夫の手をふりはらうと、よろめきながら、足をふみ出した。
そのような暴君なら、なおさらのことである。梨花を蹂躙されては、たまらぬ。
――救い出すぞ！
――たとえこの生命にかえても、奪いかえさずにはおくものか！
「旅の衆――」
農夫が、あわてて、追いついた。
「止めなされ。とても、一人の力では、無理じゃ」
「……」
「なぶり殺しにされるのが、目に見えているのを、行かせるわけにはいきませぬわい。のう、思いとどまりなされ」
「……」
「のう――、わるいことは、云わぬ。止めなされ。田丸豪太夫は、鬼か蛇にひとしい、途方もない悪者でありますのじゃ」
「……」
「どうしても、お娘御をとりもどしたければ、公卿館へ行きなされ。公卿館には、味方になってくれる人々がおいでじゃ」
「……」
「のう、たのみじゃ！　ここは、ひとまず、心をおちつけて、思案の時を置きなされ」
「そんなひまはない。すておいてくれ。わしは、行くのだ！」
農夫は、歎息して、足を停めた。
かわききった埃道を、進んで行く柿丸を、いたましげに見送りながら、

「詮もない！」
農夫は、かぶりを振った。
梨花を拉致した五騎は、伊吹野城の城門を彼方にのぞむ松林に達した。
「成程——。想像通り、相当な構えだな」
「よくぞ、のしあがったものだ。二十年前は、京洛をうろついていた偸盗（ちゅうとう）であった奴がのう」
「いや、豪太夫殿は、あの当時から、相当の曲者であったぞ。ただの偸盗ではなかった。おれは、よく知って居る」
そう云ったのは、梨花を、随身の土産にしようと、云い出した男であった。
「おい——」
一人が、不服顔で、云った。
「これだけの美女を、無傷のままで、豪太夫に献上するのか」
「なに？」
「もったいないではないか。せっかくひろったのだ。われわれ五人のうち、誰かが、まず頂戴しておいても、罰はあたるまい」
「……」
他の四人は、顔を見合せた。
「どうだ、くじをひこうではないか？」
「うむ。それも、わるくはないが……」
「わるくないどころか、滅多に頂戴できぬ稀有の美女だぞ。こう、寐顔を眺めているだけで、むずむずして来るぞ」
梨花は、まだ意識をうしなったままであった。
みだれた裳裾のかげから、白い脛がのぞいていた。それへ、視線をつけていた一人が、
「よし！　くじをひくか」
と、決断を下した。
五人は、馬から降りた。
松林の中は、ちょうど、あつらえ向きの空地ができていて、褥がわりの芝もきれいにひろがっていた。
「よかろう、ここで——」
「ところで、一人だけ、というのは、どういうものだろうな」
「われわれ五人が、次々と乗りかかってみい。この娘のからだは、ぶっこわれてしまうぞ。どうやら、病弱とみえるではないか。一人だけにせい」
「この場にいたって、慈悲をかける必要もなかろうが——」
「大切な献上物だ。扱いに気をつかいたいものぞ」
「指をくわえて見ているのは、やりきれたものではないが……、やむを得ん。当った奴は、せいぜい、そっと可愛がるのだな」
一人が、草を五本抜くと、長短をつくって、
「さあ、引け」
と、さし出した。
「南無！」
と、となえる者もあったし、うやうやしく合掌する者もあった。

「八幡！　この血槍又九郎に、なにとぞ！」
柏手を鳴らす者もあった。
五人の手に、長短の草が一本ずつ、渡った。
「こりゃ、あかん！」
短いのを、ほうり出す者。
「ふむ！　どうやら、おれらしい」
と、にたりとする者。
「待て、おれのと比べろ」
真剣な表情で、さし出す者。
そのおりであった。
ものの三間もはなれていないいくさむらで、突然、動いたものがある。
「いい加減にしろ、無駄な遊びは——」
そうあびせておいて、すっくと、立った。
五人の視線に、さらされたのは、九十九谷左近であった。
「なんだ、お主は？」
「見かけた通り、山野を道場にしている兵法者だ」
左近は、気色ばんだ五人の顔を、ひとつひとつ、見やって、云った。
「見かけ倒しであろうが、一人前の髯面をして居るではないか。女を抱きたければ、一人一人勝負して、勝ちのこった者が、存分に愉しんだらどうだ？」
「余計な指図をするな！」
一人が、凄じい敵意を示した。
「余計な指図をしたくなったのは、女をこっちにもらおう、と考えたからだ」
「なにっ！」
五人は、一斉に、立って、身構えた。
左近は、にやりとした。
「髀肉の嘆をかこつ、という文句があったな。おれは、ちょうど、その状態にある。しばらく、刀を抜かぬと、脳中が狂いかけて来る。まさか、敵意をみせぬやからを、斬るわけに参らぬので、餌あさりに里へ降りて来た熊を、やっつけてくれようと、こうして、ここに寐そべっていたところだ。熊の代りに、お主らが出現してくれたとは、有難い。おまけに、景物まで持参してくれてな」
「ほざくな！」
一人が、いきなり、抜刀して、ずかずかと、迫って来た。
左近は、氷のように冷たい視線を据えつけて、
「戦場で、雑兵を四五人も斬ったか」
と、あざけった。
武者は、吶号をあげざま、斬りつけた。
同時に、左近は、ひょいと、身を沈めた。
武者と左近の速影が、交叉した。
とみた時——。
左近の右手には、いつの間にか、一刀が抜き持たれて居り、武者のからだは、かんまんに傾いていた。
具足の音たてて、芝生に仆れた者へ、一瞥もくれずに、左近は、

「腕は、にぶって居らぬようだ」
と、うそぶいた。
この勝負に、梨花は、意識をとりもどして、眸子（ひとみ）をひらいていた。
「次は、どの御仁だな？」
左近は、のこり四人を、見わたした。
目にもとまらぬ迅業を目撃させられて、武者たちは、完全に、息をのまされていた。
「どうした？　臆病風に吹かれて、その見事な髯が、寒気立ったようだな。……遠慮なく、多勢をたのんで、かかって来たらどうだ！」
左近は、ゆっくりと、二歩進んだ。
「く、くそっ！」
一人が、悪鬼の形相になって、大上段にかまえた。
「待て！」
仲間をとどめた者が、
「お主、城に身を寄せているのか？」
と、問うた。
あきらかに、妥協を示す声音であった。
「田丸豪太夫は、強い者が好きなのでな」
「われわれも、田丸豪太夫殿に随身すべく、やって参った。……無意味な私闘は、避けたい」
「私闘？……おいっ！」
左近は、睨みつけた。
「おれは、兵法者だぞ！　兵法者は、剣を揮うことを、生甲斐とする。私闘とはなんだ！　おれを強いとみて、遁辞を弄するのか、この腐れ武者ども！」
いきなり、大きく跳躍した左近は、その武者へ、真っ向から、凄じい一太刀をあびせた。
絶鳴をあげて、のけぞる仲間を見て、他の三人は、ぱっと、散った。
左近は、睨みまわして、
「来い！　来ぬかっ！」
と、叫んだ。
業はもとより、気魄において、問題にならなかった。
闘志を殺ぎ落された三人は、見栄も外聞もなく、首をすくめて、ずるずると、後退した。
「ふん――」
左近は、ばかくさげに、かぶりを振った。
「消えうせてしまえ！　腰抜けども、斬るに足らん――」
三人は、その嘲罵をあびて、申しあわせたように、身をひるがえした。
左近は、白刃を腰におさめると、芝生に起き上っている梨花へ、視線をくれた。
梨花は、大きく眸子をみはって、左近を見返していた。
恐怖の色は、みじんもみせていなかった。
「そなたのような上臈が、虎狼のうようよしている山野を、どうして、一人旅をして居る？」
左近は、訊ねた。
「連れが居ります」

梨花は、こたえた。
「そなたを拉致されるような腰抜けが、連れとして役に立つか」
梨花は、敢えて、このおそろしい兵法者に、事情を説明する気にはなれなかった。
左近は、木漏れ陽にあたった梨花の貌へ、視線を当てているうちに、ふっと、
――似ている！
と、思った。
青蓮尼から転落して、柳の遊廓の遊女花鳥になった女性の面差に、どことなく似ているような気がした。
「そなた、京の生れか？」
「いえ――」
梨花は、かぶりを振った。
「しかし、そこいらの名もない武家の生れではないようだぞ」
「……」
「生家は、名のある家であろう。どうだ？」
「……」
「なぜ、こたえん？」
左近は、一歩寄った。
梨花は、怯じずに、左近を仰いだ。
「わたくしが、たとえ名のある家の生れであろうとも、そのことは、いまのわたくしと、なんのかかわりもないこと。……お手前様は、名家の娘ならば、敬意をはらうとでも、申されますか？」
「ふん――」
左近は、にが笑いをした。
「そなたの容子（ようす）がみせる気品に、いささか、心をひかれたまでだ」
左近の心の底には、やはり、花鳥大夫という存在が、ある重い位置を占めていたようである。
左近に、一片の良心がのこっているとすれば、それは、花鳥大夫に対する悔いであったろうか。
そうでなければ、五人の武者を、斬り、追いちらした左近は、かれらに代って、梨花を犯すことを考えたであろう。
左近は、その獣欲を持っていなかった。
といって、このまま、この美女を、去るにまかせる気もなかった。
「城へ来てもらおう」
左近は、命じた。
「わたくしは、連れの参るのを待ちたく存じます」
梨花は、こたえた。
「連れとは？」
「わたくしを、守護してくれる者です」
「そやつに、からだを与えているのか？」
「ご自身の性情で、他人をはかるのは、まちがって居ります」
「なに！」
左近は、狂暴な表情になった。

「わたくしを守護してくれている柿丸と申す若者は、心を特別に修めないにも拘らず、聖人の誠をそなえて居ります。そのような人も、この世には、いることを、知っていて頂きたく存じます」

「うるさい！……そなたを、城へつれて行くぞ！」

左近は、どなった。

闇の中の叫び

満天に、星がきらめいていた。

花鳥風月とは全く無縁に生きている百平太が、見上げて、思わず、

「餓鬼の頃を、思い出すなあ！」

と、声をあげたくらいである。

「あの星が、雨雲で掩われぬ限り、伊吹野に平和は来ないだろう」

前を歩く多門夜八郎が、云った。

「雨ってえやつは、もう、この国を見はなしたのじゃありませんかね」

百平太は、独語のように云った。

「どうして、そんなことを考える？」

「こりゃ、空梅雨というものじゃなくて、雨が、天から、いなくなった、としか思えねえ。つまり、地上で、人間どもが、あんまり、あさましい戦さばかりくりかえしているから、ひとつ、こらしめてくれようとね」

「そう思いたくなるほど、全く、降らぬな。雲ひとつさえ、あらわれぬ」

戦乱にあけくれて、生命というものが、あまりに無価値

にとりあつかわれていると、人情として、天変や地異を、それを神仏の怒りと解釈したくなる。

惑信迷妄の時代であった。

一昨年も昨年も、そして今年も、かわいているべき厳冬に、雨が降りつづいて、降るべき季節に、ピタリと、とまってしまっているのであった。

神仏が、人類に愛想をつかして、しばらくのあいだ、地獄の苦しみを与えようとしているのだ、というおそれが、上下すべての人の心にわいたとしても、ふしぎはないのである。

「百平太――」

森蔭の闇道を、ゆっくりと辿りながら、夜八郎が、呼んだ。

「へい。なんです？」

「お前は、どうやら、心を入れかえたようだな」

「まあね。へへへ……」

「天満坊の感化か？」

「そういったところで――」

「お前のような男が、心を入れかえたとは、人間というものは面白いものだな」

「多門様、おれは、和尚さんから、一滴の水が、どんなに大切なものか、話をきかされたんでさあ。その話は、おれの胸に、じーんと、しみわたりましてね」

百平太は、天満坊からきかされた話を、夜八郎に、語った。

夜八郎は、黙って、ききおわってから、

「成程、お前を改心させるねうちのある話だな」

と、云った。

「そうでしょう。この話をきけば、どんな野郎だって、感動しますぜ。おれは、その時以来、和尚さんの弟子になったんでさあ」

「おかげで、おれは、お前から、復讐されずに、すむ」

「おれはね、多門様――」

百平太が、云った。

「両の耳を殺ぎ落したお手前様に、どんなことがあっても、復讐してやろう、と誓いをたてて居りましたぜ。本気で、そう誓っていたんでさあ。ところが、和尚さんから、もしかりに、多門夜八郎を討つことができたとしても、切り落されたあとに、また、茸のように耳が生えて来るか、ときかれた時にゃ、うなりましたぜ」

「……」

「おれは、そんなことは、爪のカケラほども考えちゃいなかった。ただ、耳を殺ぎやがった奴に復讐することだけに、一念をこりかためていたんでさ。……まちがって居りましたぜ」

「いや、まちがっては居らぬ。復讐心というものは、男の性根には、あってよいものだ」

夜八郎は、云った。

「お手前様も、誰かに、復讐してやろうと、考えていなさるのか？　それは、お止めなされ。つまらぬことでござる

て」
「はは……、百平太から、説法されようとは、思わなんだぞ」
「い、いや、説法などと……、とんでもない。おれは、ただ――」
弁解しようとする百平太を、
「しっ！」
と、止めた夜八郎は、立ちどまって、星明りの野を、すかし視た。
彼方には、もう、くろぐろと、伊吹野城の外郭が、浮きあがっていた。
それへ通じる街道を、一騎、疾駆するのを、夜八郎は、みとめたのである。
街道は、この森わきをぬけている。
「百平太。あいつを、捕えるぞ」
夜八郎は、告げた。
夜八郎と百平太は、伊吹野城を偵察すべく、公卿館をぬけ出して来たのである。
伊吹野城襲撃の策略は、天満坊にまかせてある。
天満坊は、どうやら、肚裡に、意外の策略を成らせた模様である。
夜八郎は、城内の構造、ならびに、人数を、正確に、しらべて来ることを、天満坊に約束して来たのである。
「ここで、待って居れ」
云いのこしておいて、夜八郎は、足音を消して、森蔭から奔り出ると、大きく跳んで、街道わきの小川へ、身を伏せた。
そこへ――。
蹄の音をたてて、まっしぐらに、騎馬が来た。
瞬間――。
夜八郎が、どんな業をつかったか、馬は棹立ちになり、乗り手は、もんどり打って、小川へ落ちた。
「やったあっ！」
百平太は、そこへ、つッ走った。
涸れた川底では、争いはなかった。夜八郎は、苦もなく、対手をねじ伏せていた。
路上へ、虜（とりこ）をひきずりあげた夜八郎は、
「伊吹野城の者か？」
と、尋問を開始した。
「ちがう！」
武者は、生捕られた無念を、声音にこめて、かぶりをふった。
「何処の使者だ？」
「……」
「さまで遠方から参ったのではなかろう。馬脚が、疲れて居らなんだぞ」
「……」
「隣国の城から来た、とみたが、どうだ？」
「……」
対手が、頑固に沈黙をまもろうとするや、夜八郎は、いきなり、対手の腰から、脇差を抜き取って、すっと、鼻さきに突きつけた。

「無抵抗になった者を、殺すのは、好まぬ。鼻を殺ぎ落すか、目玉をえぐるか――いずれにいたそうか。おのれで、えらべ！」
「……」
対手は、なおも、口をつぐんでいた。
そこへ、百平太が、寄って来て、
「さむれえ！　おれの顔を、よく見てくれ。両の耳がないぜ。この御仁は、やるときめたことは、容赦なくやってのけるのさ」
と、云いかけた。
武者は、あきらかな動揺を示した。
「鼻っ欠けになるか、それとも、ど盲になるか――どっちにしても、あまりぞっとしねえ面になるぜ。しかし、まあ、鼻っ欠けの方が、まだ、我慢できるだろうぜ。ど盲になったら、乞食になるよりほかはねえが、鼻っ欠けは、閨の声があげられねえことになるだけだからな。尤も、女にゃ、きらわれらァな」
百平太は、ずけずけとあびせた。
武者は、きくに堪えなくなったか、
「拙者は、何も、密命をおびた使者ではない！」
と、叫んだ。
「なんの使者だ？」
「田丸豪太夫殿に、隣国の友誼をむすぶべく、明日、米五十俵を贈ることを、申し伝えに参った使者だ」
「ほう……、それは、殊勝な心掛けだ。隣国は、たしか、神矢右衛門太郎であったな。田丸豪太夫の暴虐ぶりをきいて、おそれをなしたか」
「わが主人は、益なき闘争を避けようとするだけだ」
「この旱魃飢饉に、米五十俵の賄賂は、手痛かろうに、平和主義者は、気前がいいことだ。……立て！」
「ど、どうするというのだ。拙者の申したことに、みじんのいつわりもないぞ」
「と、信じたからこそ、お主を、伊吹野城へ行かせるわけに参らぬし、また、帰すこともできぬのだ。ほんの一日だけ、そこの森の中で、樹木と抱きあって、おとなしくしていてもらおう」
夜八郎は、百平太を手伝わせて、隣国神矢右衛門太郎の使者を、森の中へつれ込み、猿ぐつわをかませて、松の幹へ、しばりつけておいて、伊吹野城へむかった。
城の周囲の地形は、すでに、くわしく、調べてあった。
城内の構造も、城主が奈良城義胤時代に、城造りの人夫として、長いあいだ、働いていた男が、公卿館にいて、その記憶を見取り図にさせて、夜八郎は、おぼえ込んでいた。
まず、忍び入るには、不便はなかった。
伊吹野城は、山城ではなかった。
小丘陵を占めて、後方に人跡未踏の密林をひかえさせ、左右に盛りあがったもうひとまわり大きな丘陵を砦にして、前面に、目くらむような深い濠を設けていた。

左右の丘陵の裾を、竹藪が掩うていたが、これが、この城の守りを堅固なものにしていた。竹藪の中には、熊や狐狸を生捕る鉄環（かなわ）の刎ね罠と、ひとたび落ち込めば、匍い上ることの不可能な陥穽（おとしあな）が、無数に設けてあったからである。曾て――。

この竹藪を突破して、攻撃しようとした軍隊の遺棄した骸骨が、たくさんちらばっているはずである。

前面の深い濠には、長さ五間、幅二間の刎ね橋が架けられ、夜になると、ひきあげられてしまう大がかりな仕掛けになっていた。

夜八郎と百平太は、その刎ね橋ぎわに、身を伏せて、しばらく、城門を、うかがっていた。

城門の両脇に、高い望楼が、星空にむかって突出していた。

そこに、昼夜をわかたぬ見張りの兵がいるのである。灯の中で、人影がうごくのが、はっきりとみとめられる。

「多門様、これァ、とても、忍び込むことは叶いませんぜ」

百平太が、ささやきかけた。

夜八郎は、それにこたえるかわりに、

「戌刻（午後八時）が、そろそろ近づいたようだな」

と、つぶやいた。

「戌刻になったら、どういうことが起るんですかい？」

「その橋が、つりあげられる」

冬ならば、酉刻（午後六時）、夏ならば、戌刻に、橋がつりあげられるならわしであることを、夜八郎は、きいて来たのである。

つまり、ちょうど、その時刻をねらって、やって来たのである。

百平太は、橋がつりあげられる時、夜八郎が、いかなる行動をとるのか、さっぱり見当がつかず、

――ああやって、見張られていては、手も足も出ねえ。

と、かぶりを振った。

やがて――。

城内の奥から、太鼓の音がひびいて来た。五つ鳴った。戌刻である。

地面に伏せた夜八郎は、二つの望楼へ、鋭く目を配っていたが、灯の中の人影が急にせわしく動いて、ふっと消えた瞬間、

「百平太、おれに、つづけ！」

と、命じざま、ツツ……と匍匐（ほふく）して、橋袂に進むや、その裏側へ、もぐり込んだ。百平太も、それに、ならった。

戌刻になり、刎ね橋がつりあげられる、ときいた夜八郎は、そのつりあげの役目を、望楼の見張りの兵がつとめる、と予想したのである。予想は、的中した。

橋をつりあげた兵らは、夜の見張りの兵らと、交替するのであった。

この時、望楼は、ほんのわずかの時間だけ、空になる。

まさしく、絶好の機会であった。

夜八郎と百平太は、橋の裏側の太い桁につかまった。

城門内から、橋を釣った鉄鎖を巻く音がひびいた。

巨大な橋は、徐々に、不気味な軋り音をたてて、動きはじめた。

「成程！」

百平太が、はじめて、合点した。

「こいつは、いい智慧だ。じっとしていりゃ、しぜんに、からだを、城へはこんでくれる」

橋の裏側に、ぴったりとからだを吸いつけているのであるから、城側から、絶対に、発見される心配はなかった。

橋が、直立するまでには、ゆっくりと、五十をかぞえる時間を要した。

夜八郎は、直立した橋の先端が、望楼よりも、高いのを、ちゃんと測っていた。

その先端から、城門の屋根へ、跳ぶのを、見張りの兵から、発見されるおそれはなかったのである。

「さて――」

城の一角に降り立った夜八郎は、星明りに、ずうっと見わたして、

「あとは、大手を振って歩くことになる」

と、云った。

「大丈夫ですかい？」

百平太は、不安だった。

「城内を警備する兵は、一人も居らぬはずだ」

「へえ――？」

百平太は、合点がいかなかった。

夜八郎は、暴君田丸豪太夫の性格から、判断して、外敵からの攻撃に対しては、巨大な刎ね橋を工夫している一例をみても、万全の備えを設けているが、内敵が起ることなど、みじんも考慮に入れていまい、と断定していたのである。

配下としている将士は、いずれ、得体の知れぬ怪しい手輩も多かろうが、それらの者を、田丸豪太夫は、すこしも警戒してはいないに相違ない。

城主として万能である自信に満ちて、いかなる狂暴な、陰険な性情を持つ家来といえども、おのが一喝をあびせれば、小猫のように縮みあがるであろう、と思っているであろう。

夜八郎の判断は、あやまっていなかった。

二人は、二ノ丸から本丸に進み入るあいだに、幾組かの兵の群れに出会ったが、一言も、とがめられなかった。

約一刻をついやして、二人は、丹念に、城内の構造を、しらべあげた。

夜八郎は、てごろの場所を、物色した。

「およそのところは、つかめたぞ。しばらく、どこかで、ひとねむりしよう」

やがて、二ノ丸はずれに、幾棟か小さな建物がならんでいるのを、みとめて、二人は、近づいて行った。

その半数が、毀れかかっているのを、みとめたからである。

端の一棟だけから、灯かげがもれ出ていた。

そこにだけ、足軽でも住んでいるのであろう。いずれは、とりはらってしまう古建物のようであった。
夜八郎と百平太は、灯のある棟と反対の小屋に入った。
「敵の腹中で、ねむるのも、わるくはない」
そう云って、夜八郎は、埃まみれの床板の上へ、ごろりと横になった。
百平太は、おちつかないままに、裏口からのぞいてみた。
そこから、断崖になり、はるかな下方に、竹藪がひろがっていた。
――二人だけで、忍び込むのは、刎ね橋を利用すりゃ、造作はないことが、判ったが、さて、一同うちそろって襲うとなると、いったい、どうするんだろうな？
百平太には、見当もつかなかった。
夜八郎は、もう睡ったとみえて、微動もせぬ。
百平太は、横になったところで、ねむれそうもなかったが、ともかく、横になることにした。
その時――。
突然、深夜の静寂を、鋭い叫び声が、破った。
「なんだ？」
百平太は、はね起きた。
「多門様、ありゃ、女の声ですぜ」
「すてておけ」
夜八郎は、云った。
「おれたちと、かかわりのないことだ」
「しかし、女の悲鳴をきいちゃ、どうも、じっとしていられませんや」
「ここは、自由にどこへでも身をはこべる処ではない。敵の城内だ」
「わかっていまさあ。わかってはいるんだが……」
再び、叫び声が起った。
百平太は、
「手ごめにしてやがるらしいな」
と、つぶやいた。
「興味があるなら、忍んで行ってみるがいい。むこうの、明りのついた小屋の中で起っている」
夜八郎は、云った。
もし、夜八郎自身が、興味を起して、その小屋へ忍び寄って、のぞいてみたならば、愕然となったはずである。
そこで、烈しく争っている男女は、どちらも、夜八郎に目を瞠らせる者だったのである。
男は、九十九谷左近であり、女は、梨花であった。
左近は、ねじ伏せて、氷のように冷たい視線を、その白い顔へ、そそいでいた。
左近が、一変して狂暴な野獣と化したのは、理由があった。
左近が、この小屋へ、梨花をともなった時は、邪念は、意識していなかった。
足軽を呼びつけて、食事を命じ、梨花がそれを摂るあいだ、どこかへ出て行く心づかいまで示した。

梨花は、左近を、思いのほか心の優しい男ではなかろうか、と考えたくらいであった。
足軽を家来のように使いながら、城内でいちばんみすぼらしい小屋に住んでいることを、不審に思い、それをたずねると、
「兵法者に、家などない。したがって、立派な構えに住むと、おちつかぬのだ」
と、こたえたことだった。
自ら好んで、毀れかかったぼろ小屋をえらんで住んでいるのも、おのれに厳しい掟を与えているのだ、と好意を抱かせた。
左近は、酒を携げて、もどって来て、飲みはじめたが、梨花とは距離を置き、酌の所望などしなかった。
梨花は、破れた板壁によりかかって美しい星空を仰いでいた。
――あの星のひとつになれば、夜八郎様がどこにおいでか、すぐわかろうものを。
そんな感慨にふけっていると、左近が、長い沈黙を破った。
「そなたは、どこへ行こうとしているのだ？」
「東国へ参ろうと存じます」
「東国といっても、広いぞ」
「はい」
「東国のどこへ行く？」
「わたくしにも、わかりませぬ」
「わからぬ？」
「はい」
「どうしてだ？」
「東国のどこかに、わたくしのたずねる御仁が、おいでのはずなのです」
「ふん――」
左近の顔に、微かに、同情の色が、浮いた。
「それは、池の中へ落ちた一本の針を、ひろうにひとしい」
「いえ――」
梨花は、かぶりをふった。
「わたくしは、かならず、たずねあてまする。会わねばなりませぬ！」
きっぱりと、云った。
左近は、問うた。
「そなたが、恋する男か？」
梨花が、はじらって、目を伏せるのを眺めて、左近は、微笑した。
「うらやましいことだ、その男は――」
左近は、云った。
「しかし、そなたのような上﨟から、一途に慕われる果報を、その男は、知っているかどうかだ」
「……」
「知らないのではないか？」
「……」

「薄情な男ほど、心の優しい娘に慕われる、という。その男は、薄情者ではないのか？」

「いいえ、そんな――」

梨花は、かぶりを振った。

左近は、その様子が、自信のないものであるのを、みとめた。

「どうやら、おれの云うことは、当っているようだな。……はるばる、東国まで旅をして行って、首尾よく会うことが、できても、つれなくされれば、何もなるまい」

「……」

「もしかすれば、さんざなぐさみ者にされて、女郎に売りとばされるかも知れぬ」

「いいえ！」

梨花は、きっとなった。

「多門夜八郎様は、そのような御仁ではありませぬ！」

「なに?!」

左近は、その名をききとがめた。

「なんと云った？」

にわかに険しい面相となった左近を、梨花は、怯えて視かえした。

「そなた、いま、その男の名を、多門夜八郎、と呼んだな？」

「呼びました」

「多門夜八郎が、そなたの慕う男か？」

「はい」

「……む！」

左近の奥歯が、ぎりっと、鳴った。

「夜八郎様を、貴方様は、ご存じないのでしょうか？」

「おれの宿敵だ」

「え？」

「おれは、京で、多門夜八郎に試合を挑む高札をかかげた九十九谷左近だ」

梨花は、あっとなった。

「そなた、知っているようだな。……夜八郎め、おれが指定した場所へ、現れなんだ。……そうか、彼奴は、東国へ遁走し居ったのだな」

左近の双眸が、ギラギラと燃えた。

梨花は、立ち上った。

「どこへ行く？」

「夜八郎の宿敵である貴方様に、お世話になることはできませぬ」

梨花は、云った。

「そなたが、宿敵の女房と判ったからには、どこへもやるわけには参らぬ」

左近が、梨花に、とびかかったのは、次の瞬間であった。

「な、なにをなさる！」

梨花は、悲鳴をあげて、抵抗した。

左近は、梨花の両腕を、ひっつかむと、顔を近ぢかと寄せて、

「そなたは、もう、多門夜八郎と、契っているな？」

と、睨みすえた。

「け、けがらわしい！」

梨花は、必死に、両腕の自由を、とりもどそうとした。

「契っているのだろう、どうだ？」

「さげすみまするぞ！」

「ふん――。夜八郎と契っているなら、そなたを、彼奴の妻とみなすぞ。よいな」

「妻ならば……、どうされるのじゃ？」

「犯す！」

左近は、云いはなった。

「け、けだもの！」

「いかにも、女子（おなご）を犯すには、けだものにならねばならぬ。多門夜八郎の妻を犯してくれるのだ。最も残忍なけだものになってみせてやる！」

その言葉をきいて、梨花は、あらん限りの声で、悲鳴をほとばしらしたのであった。

その悲鳴を、五棟へだてた小屋で、偶然にも、夜八郎自身が、耳にしたのであった。

病み疲れている女性であっても、操を守ろうとする本能が、意外な反抗力をふりしぼらせた。

不覚にも、左近が、突きとばされて、仰のけに倒れた。

その隙に、梨花は、左近が置いた大刀をひろいとって、抜きはなつ敏捷さを示したのである。

左近は、立ち上ると、にやりとして、

「剣を習うたおぼえはないようだな」

と、云った。

おぼえはなくとも、操を奪われるよりは、死をえらぶ、と文字通り必死の覚悟をきめて、白刃を構えているのである。

左近といえども、容易に、近づけなかった。

梨花に撃ち込ませておいて、白刃を奪い取る以外に、手段はなかった。

左近は、じりじりと、迫った。

梨花は、すこしずつ、あと退った。

ついに――。

梨花の背中が、板壁に、ふれた。

「おれは、多門夜八郎に出会えば、必ず、斬る。……良人の敵だ。いまのうちに、良人の敵を、斬っておいたらどうだ？」

左近は、にやにやした。

梨花は、斬りつけさせようと、こころみるのであった。

梨花は、しかし、追いつめられた者の自己保護の本能から、撃ち込めば、白刃を奪われる、とさとっているようであった。

左近は、さらに、一歩迫った。

「斬って来ぬか！」

あびせざま、両手を大きく、ひろげた。

絶体絶命の立場に追いつめられた梨花は、ついに、

――南無！

と、祈りざま、白刃を、ぱっとふりかざした。

その隙を、一流兵法者たる左近が、どうして、のがそう。
さっと、肉薄した。
——八幡っ！
梨花は、白刃を振りおろした。
と同時に——。
左近の長身が躍って、梨花の利腕を、つかんだ。
白刃は、遠くへはねとんで、板壁へ、ぐさと突き立った。
その時である。
「ははは……、見苦しいぜ、九十九谷左近。女子を犯すのに、大層手間をとって居るではないかよ！」
おもてから、そのあざけりが、破れ戸をくぐって来た。
「なにっ！」
左近は、一瞬、梨花を当て落しておいて、白刃をひろいとるや、
「何奴だ！　ぶった斬ってくれる！」
と、呶鳴りざま、おもてへ、とび出した。
人影は、どこにもなかった。
「にげかくれるか、卑怯者！　出ろっ！」
左近は、悪魔のように、吼えたてて、あちらへ走り、こちらへ駆けた。
しかし、どこにも、人影は、見当らなかった。
「くそ！」
左近は、べっと、唾を吐きすてておいて、小屋へひきかえした。
城内の将士で、自分を忌みきらう者は、すくなくないのだ。
忍び寄って来て、あざける者がいたとしても、ふしぎはない。
左近は、逆上した自分がばかげていた、と思いかえして、小屋へ入った。
とたんに、あっとなった。
当て落したはずの梨花の姿が、そこから、煙りのように、消えうせているではないか。
梨花が、意識をとりもどして、遁げたとは考えられなかった。当て落した以上、半刻は、そのまま倒れているはずであった。
あざけった者が、忍び入って、かついで、遁げたのだ。
城内をくまなくさがすことは、容易ではなかった。
「おのれっ！　明朝になってみろ！　必ず、さがし出して、両断してくれる！」
深夜、さがしまわってみたところで、徒労におわる、と考えて、左近は、朝を待つことにしたのであった。
東の空が、しらんで来た時刻——。
夜八郎と百平太は、天にむかって直立した刎ね橋の裏側に、ぴったりと吸いついていた。
百平太の背中には、梨花が背負われていた。
左近にあざけりをあびせたのは、百平太であり、梨花をその小屋からぬすみ出したのは夜八郎であった。
百平太は、夜八郎から、
「興味があるなら、のぞいて来い」

と云われて、退屈まぎれに、そっと、その小屋へ忍び寄ってみたのであった。
そして、男が九十九谷左近であるのをみとめ、その問答から梨花が夜八郎にとってどんな女性であるか、をさとって、あわをくらって、こちらの小屋へ奔りもどって、夜八郎に、急報したのであった。
おどろいた夜八郎は、とっさの智慧で、百平太にあざけらせて、左近を外へおびき出し、その隙に、梨花をすくったのであった。
梨花は、百平太の背中で、なお、死んだように、意識を喪ったままであった。
夜八郎が、わざと、そのままに、ねむらせておいたのである。
「……世の中というやつは、せまいものですねえ、多門様」
百平太が、そう云って、白い歯をみせた。
「うむ——」
夜八郎は、ちらと、梨花の寐顔を視やった。
——おれを慕って、京を出て来たに相違ない。
いつかは、京へ帰って来る、と冷たい言葉をのこしたのを、思い出しながら、夜八郎は、微かな胸の痛みをおぼえた。
ひとすじに、恋の道を生きようとする女の、おそれを知らぬ心の強さを、いまはじめて、知らされた。
自分は、ただ、漠然と、東国へ行く、と云いのこしたのである。
梨花は、ただその一言をたよりに、見も知らぬ国への旅を、思いきめ、そして、京を出て来たのである。
その道中が、いかにおそろしいものか、東国がどんなに広いところか——そのことにおそれず、ひたすら、恋する男に会う一念のみを、心に火と燃やして来たのである。
男には、この強さはない。
女の一念は、ついに、そのねがいを叶えたのである。
めぐり会ったのを、偶然とか奇蹟とか、いうよりも、梨花自身の意志がそうした必然、と考えてやれることだった。
どーん
どーん
城内から、朝を告げる太鼓の音がひびいた。
刎ね橋は、徐々に、おろされて来た。

荒土の中に

朝陽のさしそめた森の中に、チチチ……と、小鳥が、さえずりはじめた。
夜八郎は、梨花の顔を、膝の上に置いていた。
おのが身は、松の幹によりかけて、縞を織ってそそいで来た光を、視ていた。
奇妙なことに――。
自分と梨花とが、いつか、こうして会うような予感が、ずっと以前から、あったような気がした。
――おれにも、女人に恋われることに、よろこびをおぼえる情愛が、あったのか。
わざと、冷たく、自分に呟いてみる。
しかし、その冷たさの方が、そらぞらしいものに思われた。
梨花の慕心を、すなおに、受けてやるのが、いまの自分のなすべき唯一の正直な振舞であった。
夜八郎は、視線を落して、梨花の寐顔を視た。
寐顔には、一条の光が、あたっていた。
美しかった。
女の顔が、このように美しいものだということを、夜八郎は、はじめて、知った。
この美しいものが、けがされずに、清浄なままであったのは、やはり、神が味方したのであろうか。
と――。
梨花の長い睫毛が、かすかに、ゆれた。
潤んだ眸子（ひとみ）が、夜八郎を、見あげた。
夜八郎は、この一瞬を待っていたにも拘らず、なぜか、微かな狼狽をおぼえた。
梨花は、はっきりと、双眸をひらいた。
「おれだ。夜八郎だ」
夜八郎は、わざと、感情をころした声音で、云った。
夢の中にいた梨花は、その一言で、小さな叫びをあげた。
次に――。
両手をさしのべて、夜八郎の袖にすがると、顔を胸に押しつけて、烈しく嗚咽しはじめた。
夜八郎は、抱きしめてやるべきであったろう。
しかし、夜八郎は、片手を、こまかにふるえるせなかへまわしただけであった。
抱きしめてやることを、ためらったのは、近くに、百平太がいるのを意識したからであった。
その百平太は、すこしはなれた場所で、前後不覚にねむっていた。
ようやく、嗚咽をおさめた梨花は、起きなおって、坐ると、両手を、胸にあてた。
「……夢で、ありませぬように――」

小声で、つぶやいた。
そのいじらしさが、夜八郎の胸中を、不意に、熱くした。
「夢ではない」
夜八郎は、云った。
「おれは、おれ自身知らずに、そなたを救い出しに、城内へ忍び入ったようだ」
不意に――。
百平太が、ぱっとはね起きた。
「多門様っ！」
「なんだ！」
「馬の蹄の音がきこえますぜ」
「うむ――」
「見て来ます」
百平太は、けもののようなすばしこさで、木立の中を掠めて行った。
「多いな」
夜八郎は、騎馬の群が、五騎や十騎ではない、とさとった。
城から、こちらへ向って来る。
「梨花、歩けるか？」
夜八郎は、きいた。
「歩けます」
「いざとなれば、たたかうことになる」
夜八郎は、腰から脇差を鞘ごと抜きとって、梨花に与えた。
百平太が、血相を変えて、駆けもどって来た。
「いけねえ！　追手ですぜ。この森めがけて、ふっとんで来やがるんでさ。ど、どうします？」
「ひそめるだけひそんで、発見されれば、阿修羅だ」
夜八郎は、笑ってみせた。
その不敵なおちつきぶりが、百平太にも、度胸をきめさせた。
「三十騎は居りますぜ」
「よかろう。おれが、二十五騎を斬る。お前が、五騎を対手にする。やれるか？」
「やりまさあ！」
その三十騎が、森に到着した時、三人の姿は、灌木の茂みの中に沈んでいた。
一斉に、馬から降りたが、べつに、木立の中へ、目を配るでもなく、けもの道を、一列になって、黙々と進んだ。
どの顔の表情も、険しかったが、追手の目つきをしていなかった。
一騎だけ、おくれて、そこに到着したが、これは、九十九谷左近であった。
左近が、大股に森へふみ入った時、三十騎は、空地に、半円の陣をかまえていた。
左近へそそがれる視線は、食いつきそうな鋭さであった。
左近と城内の若い旗本たちとの軋轢は、ついに、爆発の時を迎えたのである。
それというのも――。
女を盗んだのが旗本の一人だ、と思い込んだ左近が、夜

が明けるとともに、旗本館へ呶鳴り込み、罵詈の応酬があって、
「よし、それならば、太刀で解決してくれようではないか」
「のぞむところだ」
と、いうことになったのである。
旗本たちとすれば、左近が、何かのこんたんあって、云いがかりをつけて来たもの、と憤激したのである。
左近の方は、女をかくされた、と信じて疑わなかったのである。
城の縄張り内での私闘には、面倒があるので、この森が、修羅場にえらばれたのであった。
三十人を対手にしようとして、左近は、いっそ、はればれとした顔つきをしていた。
「ふうん、そろったのう、地獄行きの面々が――」
そう云って、悠々と半円陣の中へ、進み入った。
「九十九谷左近、おのれは、大庄山に遁げ込んだ奈良城義胤のまわし者だろう。どうだ？」
一人が、あびせた。
「奈良城義胤？ そんな奴は、知らん」
「この期（ご）におよんで、しらばくれるな！」
「うるさい！ おれは、天下を独歩する兵法者だ。田舎大名などにやとわれるようなケチな料簡など、毛頭みじん持たぬ」
「それならば、なぜ、無法の云いがかりをつけて、城内の攪乱を企てるのだ？」
「おれに、なんどくりかえさせるのだ。この中に、おれがつれて来た女を、さらった奴が居るのだ。そやつを許すことは、断じてできんのだ」
「われわれの中に、お主の女を奪るような卑劣な者は居らん」
「では、曲者が忍び入って、さらったというのか？ いったい、どうやって、城から、つれ出したのだ？ こたえられる者がいたら、きこうではないか」
「そんなことは、われわれの知ったことではない。ともかく、お主の女など、奪っては居らん」
「たしかに奪ったぞ！」
「酒に酔いしれて、阿呆夢でもみたのだろう」
一人が、あざけって、笑い声をたてた。
瞬間――。
左近の五体が、飛鳥と化した。
対手は、恐怖の形相で、とび退こうとしたが、そのいとまを与えられず、脳天から血飛沫（ちしぶき）を噴かせてしまった。
左近は、血刀を地摺りに下げて、すす……と、一間あまりあとずさった。
「さあ、どこからでも、かかって来い！」
ぴゅっ、と血刀をひと振りして、ゆっくりと、片手を青眼にかまえた。
左手を空けて、自由にしているのは、多勢を敵にした場合、応変の迅業を、小太刀で発揮するためであった。

二十九本の白刃に、迫られて、自若とした静止相に、兵法者の凄じい鋭気が、たたえられている。
この瞬間を生甲斐としている左近であった。
兵法者となるために生れて来たような人間なのであった。
二十九人が、たった一人の敵に対して、威圧されたように、容易に動けないのも、あきらかな技の差であった。
不意に――。
左近が、青眼の構えをすてて、太刀を、ダラリと下げた。
「腰抜けどもっ！」
突如とした一喝をあびせて、つかつかと、三歩ばかり前進した。
「頭数が、これだけ、そろって居って、初太刀をしかける勇気のある奴は、一人も居らんとは！」
べっと、地面へ、唾を吐きつけて、ぐるりと見わたしておき、不敵にも、くるりと、踵をまわした。
そのまま、立去るかとみせたのである。
この侮辱を、誘いの手と、判らぬ者はいなかった。
しかし、全くばかにしたように、背中を向けられては、旗本の面目にかけて、黙って見送ることが、できなかった。
一斉に――五六人が、呶号をあげて、その後姿めがけて、奔った。
とみたせつな。
くるっと、向きなおった左近は、すでに左手にも小太刀を抜きはなって居り、
「来たかっ！」
その声とともに、五体を跳躍させた。
木漏れ陽の中で、それは、魔影のような速力で、敵群へぶっつかって行った。
血煙りが、波濤の飛沫にも似て、はね散った。
左近が、とある松の幹を後楯にして、ぴたりと静止にかえった時、地面には、五つのむくろが、横たわっていた。
返り血をあびた左近の面貌は、幽鬼さながらであった。
騎馬数十が一団となって、城からまっしぐらに、この森へ、駆けつけて来たのは、そのおりであった。
先頭をきって来たのは、城主田丸豪太夫であった。
怒気を満面にみなぎらせて、修羅場へ、疾駆して来ると、
「莫迦者どもっ！」
と、大喝した。
旗本たちは、顔面を一変させたが、一人、左近だけは、薄ら笑いをうかべた。
「左近！ 増上慢も、ほどほどにせい！」
豪太夫は、睨みつけた。
「増上慢ではござらぬ。この連中が、卑劣者をかばうために、やむなく、私闘いたして居り申す」
「女子一人をかくされて、逆上したその方だ！ 私闘は、許さん。……それとも、左近、この豪太夫が指揮をとる旗本全員をむこうにまわして、たたかってみせる、と申すか？」
「おのぞみなれば――」
不敵にも、左近は、そうこたえた。

このおそるべき度胸が、豪太夫には、気に入っていた。

「その方は、まさしく、剣鬼というべき奴だ！」

一同が、城へひきあげて行く時、馬が二頭、消えていることを、いぶかる者はいなかった。

左近に六人が斬られたので、六頭の馬があったわけであるが、四頭しかあまっていなかった。

それに気づいた者も、馬が勝手に、城の厩へ帰ったものと思い、べつに、気にもとめなかった。

二頭の馬は、反対側の森かげに、曳かれていた。

百平太が、ぬすんだのである。

馬蹄の音が遠ざかると、百平太は、くさむらから身を起して、

「多門様、馬の用意ができて居ります」

と、声をかけた。

夜八郎は、梨花をともなって、木立の中から出て来ると、

「手まわしがよいな、百平太」

と、笑った。

「役に立つことを、みとめて下さりゃ、それで、満足でさあ。これも、和尚さんのおみちびきで、性根があらたまった証拠でありましょうわい」

帰途、夜八郎は、次の森の中へ寄ってみた。

そこには、昨夜とらえた隣国神矢右衛門太郎の使者を、松の幹へしばりつけてあったのである。

夜八郎は、すぐに、森から出て来ると、黙って、馬へ乗った。

「あいつ、どうなったんで？」

百平太が、たずねた。

「毒蛇にかまれて、果てていた」

こたえておいて、夜八郎は、馬を疾駆させはじめた。

街道を行く必要はなかった。

すべての田が、ひび割れた荒土であった。それを、まっしぐらにつききって行けばよかった。

梨花は、夜八郎の背中にすがりながら、水をうしなったいたましい世界を眺めた。

——農夫たちは、どうして、生きて行くのであろう？

梨花は、点々とちらばっている貧しい家に住む人々の苦難を、想った。

身も心も捧げた人にめぐり会えたよろこびは、このむざんな飢渇の野にあっては、一時、おさえなければならぬことだった。

「夜八郎様——」

「うむ？」

「貴方様は、みじめな領民の味方をしようとなされているのでしょうか？」

「もののはずみで、城主を敵にして居る」

「うれしゅうございます」

「ことわっておく。おれは、べつに、しいたげられた者たちを眺めて、心を痛めたわけではない。また、暴君の行状をきいて、義憤をおぼえた次第でもない。……ほかにすることがないから、やっている、と云えるかも知れぬ」

しかし、梨花は、その言葉を、決して、虚無が吐かせたものとは、きかなかった。

伊吹野城には、諸方から拉致されて来た若い女が、百人あまり、五棟の館に、住まわせられていた。

この中で、城主の寝所で伽をつとめた女が、六十人あまり。

田丸豪太夫は、一度、手をつけて、気に入らなければ、すぐに、家臣へ下げ渡す。

これまでに、すでに、数十人の女が、家臣へ、呉れられていた。豪太夫にとっては、女は、ただの玩弄物でしかなかった。

しかし、この玩弄物は、一夜も欠かさずに、豪太夫の臥床（ふしど）をあたためなければならなかった。

豪太夫は、おそるべき精力家だったのである。

豪太夫は、夕食を摂りおわると、女館から、十人を呼び、眺めわたして、その夜の伽を、その中からえらぶならわしであった。

女たちは、夕刻になると、美しく化粧し、きらびやかな衣裳をつけて、呼び出されるのを待っていなければならなかった。

その中には、ひそかに、殿の寵を一人じめにしたい、と野心を抱いている女もいたし、一夜の伽に、その荒々しい暴力を受けて死ぬ思いをしたので、二度と自分にまわって来ないように祈っている女もいたし、また、まだ一度も呼び出されたことがなく、伽とはどういうことをするのか、すこしもわからずに、おどおどしている女もいた。

五棟百部屋に住む女たちの心はさまざまであった。

いま——。

美しくよそおいおわった女の一人が、鉄格子のはまった窓から、じっと、たそがれの平原へ、まなざしをなげていた。

眸子（ひとみ）の色は、暗かった。

志保、という。

一月ばかり前に、つれて来られた娘であった。

まだ、一度も、伽をしていなかった。

美貌であったが、骨が細く肉が薄く、魅力にとぼしかったので、係りの小姓が、いつも、はずしたのである。

たしかに、志保の容子には、その生立ちに何か悲惨な因果を負うたような、暗い翳がつきまとうていたのである。

眉目の美しさは、その暗い翳でころされてしまっていた。

田も河も林も、そして人家も、水一滴もなくかわききってしまった伊吹野を、じっと、眺めている志保の表情は、さらに、陰惨なまでに、暗いものになっていた。

と——。

コトリ、とどこかで、かすかな物音がした。

その音で、われにかえった志保は、窓からはなれた。

志保は、気がつかなかったが、いつの間にか、天井板が、はずされ、そこから、ひとつの顔が、のぞいて、鋭く見下していたのである。

志保は、何気なく、天井を仰いだ。

はっ、と大きく眸子をみひらいたが、なぜか、声は立てなかった。

天井裏に、ひそんでいた者は、音もなく、志保の前に、降り立った。

「曲者に相違は、ござらぬが、お許（こと）に、危害をくわえる者ではござらぬ」

そう云った。

志保は、おどろきとおそれを押えると、

「なにが、目的であろう？」

と、見まもった。

「柿丸と申す。昨日、当城へ拉致された若い女人の供をいたして居った者」

「……？」

「それがしにとっては、大切な女人でござれば、ぜひとも、救って、去りたく存ずる」

この女人館に住む女たちは、自由に外を出歩くことを許されていなかった。したがって、城内で、どんな出来事が起っても、全く知るすべはなかった。いや、同じ棟に住みながら、ほとんど顔を合せない孤独なくらしだったのである。

新しい女人が、拉致されたことなど、志保が、知るべくもなかった。

ただ、一棟二十部屋、五棟の館なので、百人以上は、住まわせられぬため、新しい女人が拉致されて来れば、当然、ふるい女が、その数だけ、追われることを、志保は知っていた。

「お手前は、すでに、この女子衆の館をおしらべでありましょうか？」

「五棟ござるな」

「二十部屋ずつ、百部屋あります。その部屋を、ひとつずつ、さがしてまわるのは、容易のわざではありませぬ」

志保は、冷たい表情で、云った。

柿丸の顔に、困惑の色が、うかんだ。

だが、すぐ、そこへ、正坐すると、両手をつかえた。

「お願いでござる。力を、おかし下され。なにとぞ！」

柿丸は、平伏した。

「お手前は、わたくしを、どうして、おえらびなされた？」

「この棟に忍び入り、天井裏から、幾部屋かを、のぞいて、歩き申した。窓から外を眺めているお許を、見たとたん、この女人ならば、味方になって下さる。と直感いたした。失礼ながら、お許の、その顔のくらさは、身の不幸を知って居られるためのものでござろう」

「……」

「お許は、それがしを見つけても、声を立てられなんだ。とらわれの身をあきらめては居られぬ証拠でござろう。……お願いつかまつる！　もし、お許も、遁れたいとお考えであれば、手引きつかまつる」

その時、廊下に、ドヤドヤと足音がひびいた。

「今宵のお伽を申しつけられる者、左の者たちである」

近習の大声が、ひびいた。

偶然にも――。

近習は、この棟で、二人の女の名を呼んだが、その一人に、志保が加えられていた。

志保は、廊下へ出て、近習へ、一礼して、応えた。

部屋へもどった志保は、依然として、冷たく動かぬ表情を、たもっていた。

「わたくしは、今宵はじめて、夜伽の候補にされました。殿の面前には、候補十人が、ならぶならわしになって居ります。たぶん、お手前の連れのかたは、その一人に加えられていると存じます」

「忝い。お願い申す。……梨花という女人でござる」

志保は、柿丸の必死な態度を眺めて、

「わたくしにも、お手前のような、たのもしい味方がありますれば……」

と、云った。

「……？」

柿丸は、志保を、見かえした。

「ぐちでした。……わたくしは、一人ゆえ、自分の力でなさねばなりませぬ」

「なにを、なそうといわれる？」

「もし――、わたくしが、夜伽にえらばれたならば、その時……」

「……？」

「その時、いのちをすてます」

「……？」

「いのちをすてても、べつに、悲しんでくれる者は居りませぬ」

「貴女は、城主を、刺そうといわれるのか？」

「はい」

「どうして、そのような無謀を――？」

「……？」

「田丸豪太夫は、父母の敵だからです」

「わたくしの家は、検非違使（けびいし）の裔（すえ）で、野に下って、郷士として、百姓たちの平和な館をかまえて居りました。田畠はすべて、百姓たちの自由にまかせ、山林の経営に、父は熱心な人でした。武将たちの攻めつ攻められつのあわただしい交替とは、かかわりのない平和なくらしでした。武将たちもまた、一時の覇権争いに、田畠を荒らしても、わたくしの家にまで、兵火をおよぼすことは、さけてくれたのでした。領土を奪いとったあかつき、わたくしの父がどんなに重要な立場にいるか、知っていたからです。父を利用することが、百姓たちの心をしたがわせるはやみちであったのです。……田丸豪太夫は、そうではありませんでした。領民の尊敬を一身にあつめている父を、憎んだのです。……父母は、館もろとも、焼かれました」

「……」

「この恨みは、はらさねばなりませぬ。……わたくしは、田丸豪太夫と同じ天をいただいて生きているわけには参りませぬ！」

志保の表情は、はげしいものとなっていた。
柿丸は、息をのんで、志保を見つめた。
それから、半刻のち——。
美しく装った十人の女が、城主館の広間に、ならんでいた。
いずれも、二十歳前後の、眉目のととのった、氏素姓のいやしくない清浄な容子の持主たちであった。
近習が奥へ入った隙をえらんで、志保が、口をひらいた。
「この中に、梨花と申されるおひとが、おいででしょうか？」
九人は、黙って、志保を見かえした。
「昨日、当城へ、つれて来られたおひとです。おいでになりませぬか？」
返辞はなかった。
志保は、一人一人の顔を、見やった。
どの顔にも、かくそうとしている色は、みとめられなかった。
——この中に、いないとすると？
志保は、当惑した。
当然、梨花がいるもの、ときめて、柿丸が、自分の部屋に待っている、と耳うちして、歓喜させるつもりだったのである。
もし、加えられていなかった時は、柿丸に、どんな連絡をするか、約束をしていなかったのである。
十人のうち、一人が夜伽にえらばれても、のこり九人は、そのまま、城主館に、朝まで、とどめておかれるならわしだった。
志保は、柿丸に、合図のすべがなかった。
もし梨花が加えられていない場合を考慮していたならば、なんらかの方法で、それを知らせる手筈はできたのである。
柿丸は、梨花が加えられているものと思って、この城主館へ、忍び入って来るに相違ない。
——どうしたらよいであろう？
志保は、はげしい焦躁をおぼえた。
どうしてよいか、見当もつかなかった。
そのおり——。
奥から、
「お入りっ！」
と、高い声が、かかった。
志保は、俯向いて、かたく、両手をにぎり合せた。
田丸豪太夫は、ずかずかと、広間に入って来るや、せわしく、十人の女を見わたして、
「相も変らず、人形同様の生気のない顔ばかりだのう」
と、云ったが、急に、志保の顔へ、視線をとめた。
「その女——はじめて、見るぞ！」
豪太夫は、志保を指さした。
「なぜ、今日まで、すてておいた？」
「は——。なにぶん、陰気なむすめでありましたゆえ……」
近習が、怯ず怯ずと、こたえた。
「陰気だと？」

豪太夫は、あらためて、志保の顔を、のぞき視て、
「間抜け者め、この顔を、陰気と看るとは、おのれの目玉は、節孔だぞ。男まさりの、烈しい気象をあらわして居るのじゃわい。わしの好みぞ」
と、にやにやした。
「では、今宵は、このむすめにあそばされますか？」
「おう、あたりまえだ。手ごたえのありそうな別品ではないか。はははは……愉しむぞ」
豪太夫は、志保の前に寄ると、その肩をつかんだ。
志保は、毒虫に百ぴきもたかられたような戦慄を、全身に走らせた。
「うむ。肉づきは上々だぞ。掘り出しものよ」
豪太夫は、満足して、奥へ去った。
近習は、険しいまでにこわばった、冷たい表情をしている志保を、じろじろと、眺めて、
——殿は、こんな女子（おなご）を、どうして気に入ったのか？ と、いぶかりつつ、
「志保と申したな。お伽の作法は、かねて、書きつけにして、渡してある通りだ。いささかでも、反抗の気色を示しては相成らぬぞ」
と、教えた。
「はい」
志保は、俯向いたまま、こたえた。
——とうとう、生命をすてる時が来た。
近習にうながされて、立ち上った志保は、自分に云いきかせた。
寐所の次の間には、燃えるような真紅の寐召が、用意されていた。
豪太夫の好みに相違なかった。
「殿が、鉦を叩かれたならば、伺候いたすように——」
近習は、命じておいて、立去った。
志保は、しばらく、その場に坐っていてから、ようやく、立って、衣裳を脱ぎはじめた。
懐中にしのばせていた懐剣を、どうしようか、とためらった。寐召にかくすわけにいかぬと考えて、小柄だけ抜きとって、下げ髪を結んだところへ、さし入れた。
もはや、自分の部屋で待っている柿丸のことは、念頭からすてていた。
こうして、生命をすてて、父母の讐を復（う）つのが、自分の運命であった、とあらためて、胸のうちで、つぶやいていた。
四半刻がすぎた。
寐所から、鉦が、打ち鳴らされた。
志保は、立ち上った。

みつぎ使者

さすがに——。

志保の胸は、早鐘のように、せわしく鳴った。

寝所には、あの毛むくじゃらの巨漢が、褥に仰臥している。

ちょっとさわられただけで、百ぴきの毒虫にたかられたような戦慄が走ったのだ。

その仰臥の姿を想像しただけで、悪感が、おこりのように、全身を粟立てた。

鉦は、つづけて、打ち鳴らされた。

志保は、力をこめて、ふるえをとめると、寝所に入った。

豪太夫は、大椀になみなみと酒を盛って、片手にしていたが、志保が入るや、

「おそい！」

と、どなりつけた。

「申しわけございませぬ」

志保は、褥のすそへ、坐った。

豪太夫は、寝酒をひと息に飲みほすと、

「くれてやろう」

と、その大椀をさし出した。

「いえ、わたくしは……」

志保は、辞退した。

「遠慮するな。酔った美女は、風情があるわ」

「一滴も、たしなみませぬ」

「いまから、飲むけいこをせい」

「お許し下さいませ」

「許さん！」

豪太夫は、大声をあげた。

自分の思い通りにならぬことは、この世にひとつもない、といった傲岸な態度であった。

志保は、困惑した。

酒というものを、生れてまだ一度も、口にしたことのない志保であった。

酔いが、どのような苦しいものか、わからぬが、おそらく、四肢がうばわれ、目がまわって、地獄におちた状態になろう、と想像できる。

「これに、たっぷり飲めとは申して居らぬぞ。……ためしじゃ。飲め」

豪太夫は、大椀を、志保の膝へ、投げた。

やむなく——。

志保は、それを、把った。

豪太夫は、にやにやして、

「よし、注いでつかわす」

と、酒壺を、つかんだ。

「近う——」

命じられて、志保は、おそるおそる、そのそばへ、寄った。

とたんに、豪太夫は、片手をのばして、志保の肩を抱きかかえた。

志保のからだは、石のかたさになった。

——生命をすてるのではないか！

志保は、自分を叱咤しながら、大椀にそそがれる白く濁った液体を、じっと、見まもった。

「さあ——飲め。飲めば、極楽にあそぶ気分になるぞ」

志保は、そっと、大椀のふちへ、唇をつけた。

しかし、容易に、飲むことができなかった。

「はっはっは……、まるで毒でも服すようにおそろしげではないか。よし、では、口うつしに飲ませてつかわそうか」

豪太夫に云われて、志保は、あわてて、ひと口、飲んだ。

意外にも、甘かった。

「どうじゃ、うまかろう」

「は、はい——」

「ぐっと、飲め」

「はい」

志保は、その意外な甘さに、軽率にも、酒に対する恐怖をすてた。

「ほう……飲んだぞ。みごとじゃ」

豪太夫は、大椀をかたむける志保を、ほめつつ、抱き腕に、力をこめた。

——なんでもない。わたくしは、酒につよいのであろう。

大椀を、三方にかえした志保は、そう思った。

父が、酒豪だったのである。その血を継いでいるのだ、と自分に云いきかせた。

「よしよし——、いますぐ、陶然となるぞ」

豪太夫は、志保を、褥の上へ押し倒した。

その毛むくじゃらな手が、胸をさぐって来るや、志保は、本能的に、拒もうとした。

処女の抵抗は、豪太夫の望むところである。

しゃにむに、五指で、その隆起をつかんだ。

瞬間——。

志保は、全身をつらぬく戦慄に、反射的な烈しい身もだえを示した。

それが、酔いを一時に発する結果をまねいた。

おそろしい勢いで、胸の鼓動が、迅鳴りはじめた。

「……あ、あっ！」

志保は、悲鳴をあげて、はね起きようとした。

「ふっふっ……」

豪太夫は、すでに、こうした残忍な行為を、いくたびもやってのけている、とみえて、猫が捕えた鼠をもてあそぶように、ゆっくりと時間をかけて愉しもうとする様子であった。

志保は、心臓が破れる、と思った。

——母さまっ！

祈りざま、志保は、下げ髪の結びめにかくしていた小柄を、さっと、抜き持った。

「南無っ！」
声を発して、小柄を、豪太夫の咽喉めがけて、突き出した。
「おっ――こやつ！」
不意をくらった豪太夫は、はらいのけようとしたはずみに、その手の甲を、ぐさと刺されてしまった。
「わしを殺そうとしたとは、小面憎いぞ」
血まみれの拳で、志保を、ひとなぐりに、悶絶させておいて、どっかとあぐらをかいた豪太夫は、熟柿くさい息を、吐いてから、にやりとした。
すこしも、腹を立ててはいなかった。
小柄で、手の中を刺されたのは、おのれの不覚であった。たしかに――。
はじめて接する手ごたえのある娘であった。
これまで夜伽をさせた数百人の女は、ひとしなみに、人形のように、おとなしく、まるで死んだようになって、されるがままに、身をまかせた。
生命を狙われたのは、今宵がはじめてであった。
生命を狙われることに、腹など立ちはしなかった。戦乱の時世である。これは、日常のことといえる。もし、殺されれば、それは、おのれが不覚であったことなのである。
むしろ、女の細腕で、この田丸豪太夫を刺そうとしたけなげさを、ほめてやってもよいくらいなのだ。
これほどの手ごたえのある娘を、わがものにすることに、大いに快感をおぼえるのだ。
豪太夫は、大椀に、酒を注いで、ひと息に、飲みほした。
それから、猿臂をのばした。
俯伏しに、気絶した志保を、ごろりと、仰向けにしてみた。
寝召の前は乱れ、はだけて、胸も太股も、あらわになっていた。
「意趣をふくむからには、両親を、わしに殺されたとみえるのう」
しかし、豪太夫は、この女が、どこの何者のむすめか、詮議してみる興味など、すこしもなかった。
その白いゆたかな肌にのみ、興味があった。
みずみずしい、ふっくらと盛りあがった乳房を、ぐい、とわしづかみにしてみた。
なんというあたたかい弾力であろうか。
このように美しい白いからだの中に、あらん限りの憎悪をひそめていた、というのが、まことにおもしろい。
「では――ゆるゆると、ものしてくれるかの」
豪太夫は、酒を口にふくむや、志保の寝顔へ、霧にして、吹きかけた。
ひくい呻きが、もらされた。
「目をさませい！」
豪太夫は、らんぼうに、ゆさぶった。
志保は、まぶたをひらいた。
次の瞬間――。
はじかれたように、はね起きて、乱れた寝召の前を、あ

わせつつ、じりじりと、あとずさった。
「勇気のほど、ほめてつかわすぞ」
豪太夫は、笑った。
「こ、ころせ！」
志保は、叫んだ。
「はっはっは……、そなたのような逸品を、なんで殺してたまろうか。もう、むだに、いきり立つのは、止めにせい」
「父上、母上のかたき！」
志保は、あらんかぎりの憎悪をこめて、にらみつけた。
「わかって居る。食うか食われるかの世の中だ。強者が勝ち、弱者が亡ぶ。それだけのことだ。そなたの父は、この田丸豪太夫よりも、力が弱かった。それで、相果てた。……わしを恨んでも、しかたがないぞ！」
「父は、なんの野望もなく、平和にくらしていたのです。これまで、この国に攻め入った大名で、父を厚くもてなしこそすれ、滅ぼそうなどと考えた御仁（おひと）は、一人たりともありはしませぬ！　お手前だけが、残忍むざんに、反抗もせぬ父を、殺されたのじゃ！」
「何者であったな、そなたの父は？」
「横尾喜左衛門を、お忘れか！」
「横尾？……うむ。あの君子面をした郷士か。おぼえて居る。わしにむかって、武将の道などを、説法し居ったのう」
豪太夫は、さっと、猿臂をのばして、志保を、とらえた。
志保は、死にも狂いに、もがいた。
「ころせ！　こ、ころせっ！」
もはや女であることを忘れて、志保は、胸も太股もあらわになるのを、いとわなかった。
かみつき、ひっかき、たたき、蹴った。
豪太夫は、志保が、死にもの狂いになればなるほど、快感をそそられるように、笑い声をたてて、あしらった。
そして、一瞬――。
隙をとらえて、馬乗りになり、四股をおさえつけた。
「どうじゃ、抵抗しながら、犯されるがよいか？」
「ちっ――こ、ころせ！」
志保は、ぺっと、唾を吐きかけた。
「はっはっは……」
豪太夫は、高笑いをたてつつ、巧みに、じりじりと、膝で、志保の両脚を、押しひろげようとした。
と――。
志保が、まぶたを閉じた。
「母様っ！」
悲痛な声で、亡き母を呼んだ。
次の瞬間、舌を噛んだ。
みるみる、血汐が口からあふれ出るのを見て、さすがに、豪太夫は、狼狽した。
「こやつ！　舌を噛むことがあるか！」
身をどけて、抱き起してみた。
志保のからだは、苦悶で、はげしくわななないた。
その折であった。
この寝所へ、ぬっと、押し入って来た者が、

「おっ！」
と、驚愕の叫びを発した。
柿丸であった。
志保の部屋で、じっとしていることが、できなくなり、召された十人の女の中に、梨花を見つけようとして、この館に忍び入って来たのであった。
建物に入るや、たちまち、奥から、女の悲鳴をきいた柿丸は、いそいで、廊下を、進み入った。
途中、近習の一人に発見されたが、一瞬裡に、これを斬り仆して、空部屋へ、蹴込んでおいた。
柿丸は、むざんな光景を一瞥するや、
「おのれっ！」
と、われを忘れた。
柿丸にすれば、この城主が、梨花をさらった、とばかり思い込んでいたので、憎悪が凄じかった。
一太刀に、斬りつけた。
「おっ！」
豪太夫は、巨軀を一廻転して、立った。
その左手くびから、血がしたたった。
「曲者め、わしに手傷を負わせたのう」
豪太夫の形相は、かえって、笑いを刷いた。
「くたばれい！　この暴虐人め！」
柿丸は、じりじりと迫った。
「若僧！　そのへっぴり腰では、この田丸豪太夫は、斬れぬぞ！」
「斬れるか斬れぬか――くそっ！」
柿丸は、猛然と、躍った。
あやうく、かわした豪太夫は、かわしざまに、床の間にたてかけてあった長槍を、つかみとった。
「呼吸をととのえなおせ、若僧！　喘ぐ奴を突くと、血汐がとびすぎるわ！」
豪太夫は、うそぶいて、穂先を、ぴたっと、柿丸の胸へ、ねらいつけた。
恐怖が、柿丸の全身をつらぬいた。
その恐怖が、結果として、柿丸を生かした。
――生きねば！
柿丸は、むだにすてる生命ではないことに、気づいたのである。
梨花を救わねばならぬ使命があった。
「うおっ！」
野獣に似た叫びをあげて、攻撃を示しておいて、柿丸は、ぱっと、身をひるがえした。
「にげるかっ！」
豪太夫は、跳ぼうとして、志保のからだにつまずいて、のめった。
その隙に、柿丸は、廊下へ、奔り出た。
その時、近習が、かけつけて来ていた。
柿丸は、板戸へ体当りをくれて、とある部屋へ、おどり込んだ。
そこには、九人の女たちが、いた。

「梨花様っ！」
柿丸は、絶叫したが、こたえはなかった。
絶望しつつ、柿丸は、その部屋を駆けぬけて行った。
庭へのがれ出た柿丸は、追いすがって来た近習に、池泉ぎわで、包囲された。
ついに梨花をさがし出せなかった絶望感が、いま、柿丸を、狂暴な野性にかえそうとしていた。
――くそっ！　どうともなりやがれっ！
こちらも死を覚悟したが、対手がたをも、一人でも多く、あの世へ道連れにしてくれるぞ、と睨みまわした。
一瞬――。
柿丸は、もの凄い叫びを発して、包囲陣へむかって、身をおどらせた。
柿丸は、さむらいではなかった。雑兵として戦場をかけまわった男であった。したがって、これだけ多勢の敵をむこうにまわしてたたかうのは、はじめてであった。どうたたかうか、そのすべを知らなかった。
ただ――。
死にもの狂いに、野獣があばれるように、あばれまわるだけであった。
それが、いたずらに、体力を消耗させることであることを知らぬではなかったが、ほかに、受けて立つ業など、柿丸に、そなわっているはずもなかった。
ただ、少年にして天涯孤独となり、たった一人の力で生きぬくためのきたえかたを、その五体は、していたのである。
これは、なまじの武技を修業しているのよりも、はるかに、戦闘力をやしなっているのを意味した。
その証拠に――。
十数人の近習がつくった包囲の陣形を、みるみる、崩してしまった。
あきらかに、近習たちは、柿丸の凄じいあばれかたを、もてあました。
たちまち、数人を手負わせておいて、柿丸は、本能の敏捷さで、木立の闇へ、奔った。
「待てっ！」
「のがすなっ！」
近習たちとしては、対手が、左近のような一流兵法者ならいざ知らず、見受けたところ、うすぎたない土民でしかない若者一人を、とりにがすのは、面目にかかわることだった。
いくら、あばれまわっても、そのうちに、かんたんに討ちとれる、とタカをくくったところに、油断が生じた。
たちまち、味方数人が負傷してしまい、
――こやつ、なかなか手強いぞ！
と、思った時には、もう、木立の中へ、のがしていた。
それは、この城郭が、まだ築かれていなかった頃のままに、のこされている密林の一部であった。
いまだに、狐狸も棲んでいる模様であった。
近習連は、ふみ込んだものの、墨を流したような暗闇に、

途方にくれなければならなかった。
　こうなると、一人だけというのは、有利となる。
　近習連は、闇の中で、互いに味方と呼び合わなければ、同士討ちをやりそうであった。
　およそ半刻近くも、必死に、さがしまわったが、近習連は、ついに、たった一人の敵を、見つけ、討ちとることは、できなかった。
「朝を待とう」
　一人が、云った。
「いや、是が非でもさがし出さなければ、殿が、承知されぬぞ」
「しかし、この闇では、如何ともしがたい」
「闇に目の利く者は、一人も居らんのか？」
「九十九谷左近にたのむか？」
「ばかな！　彼奴は、われわれの敵だぞ」
「朝を待とう、朝を――」
「この森を包囲して、待つのだ」
　やむなく、近習連が、木立の闇から、ひきあげて行く様子を、柿丸は、とある巨樹の高処（たかみ）から耳にしていた。
　一人ではなかった。
　一枝高いところに、もう一人、ひそんでいる者がいたのである。
　柿丸が、この木立の闇へのがれ込んだ時、不意に、一条の綱が、降って来て、輪が、首にかかった。
　あわてて、はらおうとしたが、そのいとまがなく、ぎゅっと、頸を締められてしまった。
　縊られそうになって、思わず、その綱をつかんだ瞬間、頭上から、
「敵ではない。助けてやるから、この綱にすがって、登って来い」
　という声が、降って来た。
　それは、綱をつたって、柿丸の耳にのみひびく、忍者独特の忍び声であった。
　で――。
　柿丸は、無我夢中で、綱をつたって、巨樹へのぼったのである。
　山中を、けもの対手に、猿のようなくらしをして育った経験が、こうした場合、役に立った。
「お手前は！」
　高処の枝にすがってから、頭上にうずくまる者に、たずねかけると、
「しっ！　しずかに――」
　と、制された。
　それから一刻、そこで、柿丸は、何者とも知れぬ男とともに、息をひそめていたのである。
　木下闇が、しずかになり、密林の外を包囲するざわめきが、汐騒のように、つたわって来た。
「やれやれ、ひと騒動のおかげで、こっちは、ひどう迷惑する」

　頭上の男が、云った。
「申しわけありません。やむを得ぬ仕儀にて……」
　柿丸は、詫びた。
「どうした、というのだ？」
「わしがお供をしていた姫君が、当城へさらわれたので、救い出そうと、忍び入って、……この騒ぎになりました」
「無謀なことをしたものだ」
　男は、云った。
「やむを得なかったのでござる。姫君をさらわれては、わしは、のめのめと生きていられないのでござる」
　柿丸は、こたえた。
　男は、ふふ……、と、ふくみ笑いをもらした。
「何をわらわれる？」
「飛んで火に入る夏の虫、ということわざがあるて」
　どうやら、頭上の男は、相当皮肉な性格の持主のようであった。
「お手前は、どうして、ここに、ひそんで居られるのじゃ？」
　柿丸は、その不審を問うた。
「使命を与えられて居る」
「なんの使命を？」
「かるがるしゅうは、打明けられぬて――」
「忍者でござろう、お手前は？」
「左様――。七位の大乗という忍者さ」
「この城主を攻めようとしている武将にやとわれて居られるのじゃな？」
「そんなところだ。……ところで、その姫君というのは、女人館に、とらわれて居ったかな？」
「いや、まだ、わかり申さぬ。たぶん、とらえられて居られる、と思うのじゃが――」
「おれは、三日前から、あの女人館に忍び込んで居った。で――館内の様子は、つぶさに、見とどけて居る。……その姫君とやらは、いつ、拉致されて来たのだ？」
「一昨夜でござる」
「それは、おかしいぞ。女人館には、新しい娘は、一人も殖えなかった」
　七位の大乗は、多門夜八郎と百平太が忍び入って来て、梨花を救って、去ったことを、知らなかったのである。
　これは、夜八郎の方が、まだ、大乗を、味方として信用して居らず、連絡をとらなかったためであった。
　大乗は、ひとたびは、天満坊に屈服して、公卿館側についたとはいえ、伊吹野城へひきかえせば、ふたたび、田丸豪太夫の方へ寝返りを打つかも知れぬ、と警戒されたことだった。
「梨花様は、たしかに、この城へ、拉致されたのでござる」
　柿丸は、云った。
「拉致されて来たのなら、女人館へ、つれ込まれるはずだが……」
「べつの場所に、監禁されているのかも知れますまい」
「それでは、お主は、姫君を見つけて、救い出すまでは、のがれ出られぬ、というのか？」

「姫君を見失っては、多門夜八郎殿に、合わせる顔がないのじゃ」
柿丸は独語を吐いた。
すると、大乗は、その名をききとがめた。
「なに？　なんと云うた？」
「なんと云うた、とは？」
柿丸は、ききかえした。
「お主、いま、多門夜八郎殿に、合わせる顔がない、と云ったな？」
「申したが……？」
「これは、偶然だのう。おれは、その多門夜八郎から、命じられて、当城に忍び入って、いろいろと、調べて居る者だ」
「そ、それは！」
思わず、柿丸は、高い声をたてた。
「しっ！　しずかに――」
と、制して、大乗は、
「姫君というのは、多門夜八郎氏のなにかに当るのだな？」
「妻におなりになるおひとでござる」
「成程の。つまり、多門氏のあとを追って、この土地まで、たどりついたところを、当城の荒くれ共にさらわれた、というわけだ」
忍者だけに、合点がはやかった。
「その通りでござる」
「そうすると……ふむ！」
大乗は、ちょっと思案しているようであったが、
「今夜は、警戒が厳重で、どうにも、ここから、動きはとれぬ。……明夜だな、明夜――」
と、云った。
「援助して下さるか？」
「やむを得ないの。多門氏の妻になる姫君、というのであれば、見すてるわけに参るまい。……そろそろ引きあげようか、とうかがっていたところだが、もう二夜、のばすことにいたそうて」
「かたじけのうござる。……夜八郎様は、この伊吹野においでなのですか？」
「うむ。公卿館という屋敷にの」
「有難い！　梨花様を、救い出して、夜八郎様にお会わせすることができる！」
柿丸は、胸がおどった。
やがて……。
夜は、明けた。
すでに、梨花が、救われて、夜八郎のそばに在る、とは、神ならぬ身の、知る由もなかった。
陽がのぼるまでのひととき、乳色の朝霧が、城内を包んだ。
その間に、大乗と柿丸の姿は、その巨樹の高処から、消えて、その潜伏場所を、どこかへ移していた。
今日もまた、空には、一斑の雲影も、みとめられなかった。

灼けた陽は、かわきはてた荒野を、容赦なく照りつけはじめた。
その時刻――。
街道上に、一群の行列が出現した。
それは、米俵を積んだ荷車五台を牛に曳かせた一団であった。
先頭を、馬で進んで来たのは、坊主あたまの具足武者であった。
天満坊にまぎれもなかった。

米

「どうも、いかん！」
田丸豪太夫は、朝食に、鶏一羽を丸焼きにしたのを、あらかた平げる健啖ぶりを示して、太鼓腹を、ひとなでしてから、大声を発した。
「どうなさいました？」
近習が、いぶかって、たずねた。
「髀肉がつきすぎた」
「は――？」
「久しゅう、戦場を駆けまわらぬので、五体の緊りが、ゆるんだぞ」
「殿のご威勢が、四隣を圧したために、兵火がおさまって、めでたい限りと存じますが……」
「ばかを云え！　この田丸豪太夫が、伊吹野城ひとつを占めて、満足して居る、と思うのか。京へ攻めのぼって、天下を制する覇道を進むのだ。それまでの一息を入れているにすぎぬわ」
「いずれは、その壮図を、おきかせ下さるものと存じて居りました」
近習は、口でへつらいながら、内心では、

――それほどの器量が、この巨男（おおおとこ）にはあるべくもないが……。
と、思っていた。
「休息が、ちと、永すぎたようだぞ」
「は――？」
「そろそろ、隣りの神矢右衛門太郎を、撃ち砕いてくれるか」
「神矢は、かねてより、恭順の意を表して居りますが……？」
「かまわん。右衛門太郎は、平家の嫡流だ。城内には、おびただしい宝物を蓄えて居るはずだ。一品のこらず、まきあげてくれよう」
――やはり、前身は、あらそわれぬ。盗人（ぬすっと）根性が、一城のあるじになっても、抜けきれぬ。
近習は、ひそかに、さげすんだ。
「数日うちに、出馬してくれよう」
「殿、それよりも、まずさきに、公卿館をお攻めになりましては？」
近習は、すすめた。
「うむ、そうであったな。泰国清平のことを忘れて居ったわ」
豪太夫は、先夜、忍び入って来た七位の大乗と名のる忍者の言葉を、思い出した。
泰国清平は、摂家五軒から委託された莫大な金銀を、館の内か外かに、隠している、という。
こころみに、一隊を送ったところ、伏兵のために、撃退されてしまった。侍大将荒巻鬼十郎は、その失敗の責任を負って、切腹して果てた。
豪太夫は、七位の大乗の言葉など、信用できなかったので、それきりに、すてておいたのであった。
公卿館を、蹂躙することなど、朝飯前のひと仕事にすぎなかった。しかし、いかに、土賊上りの豪太夫でも、泰国清平を滅ぼすことは、土一揆の頻発している目下の伊吹野の飢えた現状にあっては、得策でないことが、判っていたのである。
公卿館が、蓄えている糧秣を、土民たちに、すこしずつ、ほどこしているからこそ、まだ、惨状は、この程度で、くいとめられているのである。
もし公卿館を攻め滅ぼしてしまえば、土民たちは、救いの主を失って、完全に飢えてしまう。
餓死に追いつめられた土民たちが、ついには、一人のこらず、団結して、文字通り死にもの狂いになって、伊吹野城へ、襲いかかって来ることは、目に見えている。
これは、始末のわるい面倒事である。
公卿館は、当分、そのまま、すてておいた方が、よさそうであった。
豪太夫は、その肚で、一隊が撃退されても、自らが出馬して、公卿館をふみにじろうとは、しなかったのである。
しかし、いま、近習から、そそのかされて、ふと、七位の大乗の言葉を思い出した豪太夫は、

――京へ攻めのぼるには、莫大な軍資金を必要とする。
と、考えた。
充分の軍資金がなければ、強力な軍勢は組織できぬ。
もし、泰国清平が、五摂家から金銀を委託されているのが真実ならば、その額は、大変なものに相違ない。」
――ひとつ、公卿館を襲ってくれるか？
豪太夫は、急に、五体がむずむずして来た。
想像もしなかったほどの金銀が、眼前に置かれた光景が、目さきにちらついた。
――いやしかし、あの鼠賊めの言葉は、信じ難い。
幾千という土民が、狂気したごとく喚きたてて、城へむかって殺到して来る光景も、想像されるのだ。
「ひとつ、泰国清平を召捕って、拷問にかけてくれるか」
殺さねばよいのだ。
いためつけて、そのことが、事実かどうか、たしかめるだけでよいのだ。
「よし！」
豪太夫は、おのれにうなずいた。
その折、広縁に、旗本の一人が現れて、
「申し上げます。隣国神矢右衛門太郎殿の使者が、只今、大手門前に、到着いたし、みつぎの儀を、申し出て居ります」
「なに、みつぎだと？　みつぎをするのなら、あらかじめ、手紙を送って来るはずだが……？」
＊
「使者が申すには、あらかじめ、お手紙をさしあげるべきであったところ、主人急病のため、そのひまがなく、やむなく、突然参上した次第の由にございます」
「みつぎは、なんだ？」
「米五十俵にございます」
「五十俵か、ほう――」
豪太夫の顔面が、ほころびた。
「右衛門太郎め、思いきって、へつらい居ったのう」
隣国を攻撃してくれようか、と髀肉をなでていた矢先であったので、豪太夫は、気をよくした。
豪太夫が、書院へ出て行くと、坊主頭の巨漢が、一人正座していた。
「神矢右衛門太郎の筆頭家臣、叡山入道政道と申す者、爾後お見知りおき下されますよう――」
まことしやかに名のって、平伏した。
「右衛門太郎氏は、病臥ときいたが、まことか？」
「再起不能かと存じられます」
天満坊は、こたえた。
「ふむ、それは、気の毒だのう。後継ぎはあるか？」
「長子、次子――八歳と七歳でありますれば、主座に就く力はありませぬ」
「お主が、後見いたすのであろう」
「あいにくなことに、それがしは、譜代の家臣ではござらぬ。いささかの智謀を買われて、三年前に、随身いたした者。生え抜きの家臣らは、それがしが、筆頭の座に在ることだけでも、快からず思って居ります。まして、後見役に

でも就けば、それがしに野望ありと、疑いをかけて参りましょう。到底、それがし一人の力で、おさえきれますまい」
「そうか、それは、気苦労なことだな。右衛門太郎氏が、逝去した時が、神矢家存亡の危機ということに相成るの」
「そういうわけでありまする」
「お主の肚のうちは、どうじゃ？」
「と仰せられますと？」
「お主には、神矢の幼な子たちを擁して、奮闘する決意があるか、どうか——それを、ききたい」
「家臣一同が一致団結して、神矢家を守り、その指揮を、それがしにまかせる、というのでありますれば……」
「それは、のぞみ得ぬことだ、というのだな？」
「御意——。すでに、殿の病いが不治と知って、重臣らは、後見役はおのれの手に、と野心を起して、目に見えた反目をみせて居ります。それがしを除く密議もなされた気配にございます」
天満坊は、豪太夫を北叟笑ませる虚言を、おもおもしい口調で、吐いてみせた。
豪太夫は、これが、贋使者である疑いなど、夢にも気づかずに、じっと見据えていた。
天満坊も、まばたきもせずに、見かえしている。
豪太夫が、口をひらいた。
「どうじゃ、入道——。神矢城を、お主自身のものにせぬか？」
「なんと仰せられましたか？」
こっちから、巧みにそそのかし、とうとう、豪太夫を、口車に乗せることに成功しながら、天満坊は、何食わぬ顔で、ききかえした。
「お主が、神矢城のあるじになっては、どうじゃ、と申しているのだ」
「これは奇怪なことを仰せられる。それがしには、そのような、天をおそれざる謀叛心など、いささかもありませぬ」
「申すな！　お主は、智謀を買われて、筆頭家臣にまでのし上った男ではないか。智謀が長じて居れば、神矢城内の状況如何によっては、おのれが、主座に就けば、という野望が起らぬはずはないぞ！」
「……」
「どうじゃ！　しらばくれるな！」
豪太夫は、いい気分であった。この巨漢の肚裡を、見ン事看破してくれた、と自信満々だったのである。
天満坊は、いかにも、看破されたように、目を伏せると、
「なにさま、神矢城は、右衛門太郎様の人徳によって、平和を保たれて居りました故、ひとたび、主君がお亡くなりになることが、避くべからざる事実と知れば、重臣らは、おのれの無能を棚に上げて、扇の要が切れたごとく、各人ばらばらに、邪念を燃やすことに相成ります。まことに、なさけなき次第で……」
「そのことは、もう判った。お主自身の料簡だ。どうじゃ、右衛門太郎氏の逝去を好機にして、一城の支配者になってみせぬか。……この田丸豪太夫が、力を貸すぞ」

豪太夫は、そう云って、にやりとしてみせた。
天満坊は、
——この暴君の頭脳が単純なのか、それとも、わしの口舌が巧妙なのかな？
と、内心おかしさをおぼえつつ、
「それは、ご本心でござろうか？」
と、鋭く見つめかえした。
「本心でなくて、どうする。お主が、終生の味方であると誓うなら、いくらでも援助してくれるぞ。……わしは、いずれ、京の都へ攻めのぼる。覇道を猛進撃するにあたっては、お主のような人物が、左右の腕に必要じゃ」
「お言葉、有難きわみではありますが、犬といえども三年飼われれば、その恩を一生忘れぬ、と申します。まして、人間のそれがしが、筆頭家臣にされた恩を、忘れて、叛旗をひるがえすわけには、到底参りませぬ」
天満坊は、対手をじらせることにした。また、すぐに承知するよりは、気骨を示す方が、対手を信用させる効果があるのであった。
はたして、豪太夫は、
「今夜は、当城に泊って、ゆっくりと、思案してくれい」
と、云った。
「さて——」
別室を与えられた天満坊は、一人端坐して、つぶやいた。
「のるか、そるか——ここ一番の大ばくち！」
ほどなく、隣りの広間へ、天満坊がひきつれて来た従者たちが、案内されて来た。
泰国太郎ら、公卿館の地ざむらい数名は、神矢城の士になりすましていることは、容易であったが、百平太を走衆頭とする青助、黒太、赤松、白次らは、城兵の目がなくなると、たちまち、本性をあらわしてしまった。
「やれやれ——」
「どっこいしょ」
「どうも、さむらいの恰好は、窮屈でいけねえ」
いずれも、袴をまくりあげて、大あぐらをかいてしまった。
泰国太郎は、これらの無頼者たちを、走衆にしたのを、後悔していた。
農夫たちを小人にして、これらの無頼者たちをさむらい衆にしたのは、まちがっていたようである。
「お主ら、さむらいだぞ。もっと、威儀を持て」
太郎は、叱咤した。
「威儀を持て、って、どうすりゃいいんだ？」
「あぐらなど、かいてはならん」
「おめえさんみてえに坐るのは、苦手なんだ。かんべんしてもらおう」
青助たちは、太郎とは、どうしても、ウマが合わなかった。
「城の者たちに、見られたら、たちまち、疑われるではないか」
「へへへ……、さっと、早変りするのは、得意でさあ。な

あ、白次」

「おれは、いつでも、さむらいになってみせるが、おめえの恰好は、どう眺めても、いただけねえな」

「なにおっ！　おれの髯っ面こそ、いちばん、さむれえらしいじゃねえか。戦場でよう、大将首の取れそうなのは、おれだけだぞ」

青助は、胸をそらしてみせた。

「う、うそをこきやがれ。……いくさの経験があるのは、おれだけだぞ。おれは、ほんとに、敵軍のさむらいを、槍で突いたことがあるんだぞ」

赤松が、うそぶいた。

「わらわせるな。てめえは、いくさのおわったあとを、うろうろしやがって、討死したさむらいから、具足を剝ぎとるのを、あきないにしてやがったのさ」

「お、おい！　あんまり、おれを、見下げやがると、承知しねえぞ」

四人のあいだが険悪になるのを見て、百平太が、うんざりしながら、

「止せ！　ここは、敵城だぞ！」

と、きめつけた。

青助たちは、百平太から、敵城内にいるのだ、と云われて、ようやく、しんとなった。

「百平太の兄ィ」

白次が、小ずるい目つきで、

「田丸豪太夫ってえのは、大層な好色だそうだから、きれいな女子を、かっさらって来て、夜昼とりかえひきかえ、抱いてやがるんだろうな？」

と、きいた。

「そんなことは、知らん」

「だってよう、多門の大将と一緒に、忍び込んで、ちゃんと、城内の様子を、しらべあげているんだろう？」

「女子が何十人いても、わしらとは、無関係だ」

「そういうけどよう、五十俵もはこんで来たおれらに、女子を一人ずつあてがってくれても、罰は当るめえ」

「ばかなことを云うな！　わしたちは、みつぎ使者なのだぞ」

太郎は、いまいましげに、云った。

「みつぎ、ってなんのことだ？」

黒太が、問うた。

「ちえっ！」

百平太は、舌打ちした。

「降参したしるしに、米を持参して来た使いなんだ、わしらは——」

「ふうん。降参しているのか、おれたちは——。へえん、おもしろくねえね」

「おめえは、いったい、なんの使いだと思って、ついて来やがったのだ？」

「隣り国の城ざむらいに化けろ、というから、おれはまた、この城で、大歓迎を受けるものと思っていたァな」

「あきれた野郎だ」

「おい、もうすこし、声をひくくしろ」

百平太は、立って行って、警戒の目を、広間の外へ光らせた。

そこへ、天満坊が、入って来た。

「みんな、ご苦労だったの」

にこにこして、一同を見わたしてから、

「こうして、なごやかに、話し合っているお主らを眺めていると、生命をもらうのが心苦しい。しかし、やむを得ぬ」

と、云った。

「和尚さん、なんと云いなすったね？」

青助が、しかめ面になって、たずねた。

「生命（いのち）を、拙僧にくれ、と申したよ」

「冗談じゃねえ」

たちまち、青助たちは、憤然となった。

「おれたちは、こんなところへ、生命をすてに来たんじゃねえ」

「と申すであろう、と思って、企てていることを、打明けずに、つれて来たのじゃよ」

「なにを、企てているんでえ？」

「それを、これから、話す」

天満坊は、百平太に、念のために、広間のまわりを、見まわらせた。

みつぎ使者を怪しむ気配は、城内には、すこしもなく、この建物に、人影は見当らなかった。

＊

その時刻——。北隅の根小屋では、九十九谷左近が、城内の出来事などとは、全くかかわり知らぬ顔で、無為な午睡をむさぼっていた。

同じ場所に、このように、永いあいだ、滞在しているのは、左近としては、珍しいことであった。

これまでの左近ならば、とっくのむかし、城を去って、いま頃は、百里も遠いところを、放浪しているはずであった。

この城にとどまっているのは、居心地がよいからではなかった。城外の悲惨な飢饉のさまを、眺めたり聞いたりすると、わざわざ、生地獄の世界へ出て行くのが、億劫になったのである。

この城に在るかぎり、飲食は、思うがままである。

さらに、城士たちとの反目も、左近にとっては、刺戟になる。豪太夫は暴君であるだけに、城士と決闘して、幾人かを斬った左近を、べつに罰しようとはしないのである。

強い者が勝つ。

この方則を第一条にした野性の信念を持っている豪太夫は、左近の強さを高く買っている。

左近にとっては、豪太夫の態度が、おもしろいのであった。

まだ当分の間は、腰を据えているつもりであった。

「九十九谷殿」

しのびやかな声が、戸口で呼んだ。

左近は、薄目をひらいた。

近習の一人が、姿をみせていた。

左近は、やおら起き上ると、大きく背のびした。
杉戸某という近習は、いかにも小ずるそうな表情で入って来ると、
「折入って、相談申上げたき儀がござる」
と、云った。
左近は、こういう型の男が、最もきらいであった。
かねてから、主人の目をかすめて、酒や肴をはこんで来たり、女を世話したり、しきりに機嫌をとって来る男であったが、左近は、それを拒絶もしないかわりに、礼も云ったことはなかった。
「おきき下さるか？」
杉戸は、なれなれしく、そばへ寄って来て、首をつき出した。
「なんだ？」
「それがし生涯ただ一度の決死の覚悟をさだめた上での相談でござれば、何卒真剣におこたえ下され」
「……？」
「本日、神矢右衛門太郎より、米の五十俵のみつぎがされ申した。使者は、叡山入道と申す、見るからに豪傑にて、われらの主人と対坐して、かえって威圧するほどの貫禄でござる」
「……」
「それがしは、殿と使者との問答を、屏風の蔭にしのんで、のこらず、ききとり申したのでござる」
近習の杉戸は、豪太夫が、叡山入道をそそのかして、神矢右衛門太郎が不治の病いに仆れたのをさいわい、その城を奪いとってしまえ、とそそのかしたことを、告げて、
「まことに、わが主人らしい、奸策でござる」
と、にやにやした。
左近は、興味もなさそうな表情で、無精髭を、抜いている。
「ところが、叡山入道の方は、毅然たるもので、犬も三日飼われれば三年恩を忘れぬ、ましてや人間に於ておや、などとうそぶいて、殿の申し出を、容易に受けつけぬ気色を示して居り申したが、さて、肚のうちは、どうでござろうか？」
「……」
「それがしは、思うに、あの入道は、ただ者ではござらぬ」
狡猾な男だけに、人を観察する目もあるようであった。
「貴殿も、とっくにご存じであろうが、城士すべての心は、すでに、殿から去って居り申す。心服いたしている者など、一人もござらぬ。ただ、あの威嚇の前に、黙って、頭を下げているだけでござる」
「そればかりではあるまい」
左近は、冷笑した。
「この城には、どうやら、三年も、のうのうと食って寝ていられるだけの糧秣がたくわえてある。金銀も山と積んである。それが、城主に頭を下げさせている理由だろう」
「ご尤もなお言葉じゃ。まさしく、その通りでござるわ。当城のたくわえ物は、想像以上に豊富でござる。……それ

じゃによって、それがしも、深く思慮するところがあり申すのだ」
「お主の考えは、見当がつくぞ」
左近は、わざと、あくびをしてみせてから、
「その叡山入道とやらと、共謀して、城主を片づけようというのだろう？」
「そ、その通りでござる。あの入道が、その気になれば、必ず、成功いたす」
杉戸は、おのがたてた陰謀をくどくどと、語りはじめた。
叡山入道が、豪太夫を、神矢城へ案内する。
豪太夫には、病気見舞いと称して、神矢城へ乗り込み、一挙に、城を奪いとる計画だ、とそそのかす。豪太夫が、これに乗らぬはずはない。
で――、豪太夫を、神矢城にともなうや、逆に、入道の手で、討ちとってしまう。
この壮挙は、神矢城に於ける入道の立場をも、絶対のものにしてしまうであろう。
まさに、一石二鳥である。
「いかがでござろう？　それがしの計略は、必ず成功すると存ずるのじゃ」
杉戸は、打明けたからには、是が非でも、左近を味方にひき入れねば、と顔面を必死にこわばらせていた。
左近は、しばらく、沈黙していたが、
「おもしろそうだ」
と、こたえた。
「賛同して下さるか！」
杉戸は、大きく息をはずませた。
左近は、それにうなずくかわりに、
「お主は、殿に仕えて、幾年になる？」
と、問うた。
「七年余に相成り申す。されば、殿の表情ひとつを観て、いま、何を考えているか、おのが掌（たなごころ）を見るごとく、判り申すのじゃ」
杉戸は、得意げに、こたえた。
「お主は、さむらいの出ではないようだな」
「京の染物屋の小僧をして居り申した。商人がきらいで、折あらば、と考えていたところ、たまたま、野盗の群を率いた田丸豪太夫に出くわして、家来になったのでござる」
「ふむ。すると、殿には、染物屋の小僧から、ひろわれた恩があるわけだな」
「恩というほどのこともござらぬわ。それがしが、そばで、智慧袋となって、殿にいろいろと、策をさずけた功績も、買ってもらわねばならぬ」
杉戸は、小鼻をふくらませた。
「持ちつ持たれつか。わるくない話だが……、田丸豪太夫あってのお主、お主あっての田丸豪太夫、ということになるようだな」
「いや、それがしはそれがし――、仕えた時から、この主人には、永くは仕えられぬ、ときめて居り申した」
「お主の方が、主人よりも、はるかに、悪党らしい」

左近が、云った。
しかし、杉戸は、悪人と云われたことを、かえって、おのれの都合のいいように受けとって、にやにやとしてみせた。
「それがしの計画に、何卒賛同して下され」
「さあ、どうするかな」
左近は、まだ、物憂げなあくびをして、ふらりと立ち上った。
「おたのみ申す」
杉戸の顔に、不安の色が、刷かれた。
左近は、じろっと、杉戸を見下してから、黙って、壁に立てかけた剣を、把った。
次の瞬間――。
「莫迦めっ！」
と、一喝をあびせた。
「な、なにっ？」
杉戸は、血相を変えた。
「小智慧を、チョロチョロ働かせているうちに、おのれが、ひとかどの人物のように、錯覚を起したとは、笑止！　染物屋になって、女子どもを対手にして、機嫌をとっていれば、生命（いのち）に別状はなかったろうものを、なまじ分にすぎた野心をおこしたために、運命を変えたぞ」
左近の凄じい睥睨（へいげい）をあびて、杉戸は、ふるえあがった。
もし、その時、杉戸が、もうすこし悪智慧を働かせて、左近の前に四ン匐いになって、卑屈きわまる態度を示して、生命乞いをしてみせたならば、生命を落さずに済んだであろう。
杉戸は、恐怖が先立って、小ずるく頭脳を廻転させることが、できずに、あわてて、逃げ出そうとしたために、一太刀あびてしまった。
絶鳴をあげるいとまもないくらい、冴えた一閃の下に、杉戸は、くずれ伏した。
「小才子が――、自業自得というものだろう」
左近は、血ぬれた白刃を、杉戸の袴でふいて、腰に納めると、外へ出た。
念のために、叡山入道とやら称する人物を、見とどけておくことにした。
左近は、城内を――女人館は別として――いかなる場所も、自由気ままに歩きまわって、はばからぬ。
他国の使者を滞在させる建物に入るのも、べつに、遠慮をしなかった。
門をくぐろうとして、番士に、
「ここは、遠慮されたい」
と、さえぎられたが、左近は、冷然として、
「叡山入道に、用がある」
と、云いすてておいて、すうっと通ってしまった。
庭へまわって、建物へ、近づいた。
偶然であった。
広縁に、坊主頭の巨軀が、のっそりと立ったのである。

「……?!」
一瞬、左近の眉宇が、ひそめられた。
対手も、左近を見て、眼光を鋭いものにした。
十ばかりかぞえるくらいの短い時間が、おそろしく長く感じられる無言の対峙があった。
左近が、つと、足をふみ出した。
同時に――。
天満坊の緊張した表情も、ゆるめられた。
左近は、広縁に近づくと、
「叡山入道というのは、お主のことか、天満坊？」
と、睨んだ。
「左様――」
天満坊は、おちつきはらって、こたえた。
「乞食坊主が、いつの間にか、この地方の名家へ入り込んで、使者になるまでに、出世したとは――」
左近の面上に、あざけりの色が、露骨に刷かれた。
「どうだな、上って来ては――」
天満坊は、すすめておいて、踵をまわすと、部屋へもどった。
左近は、つづいて、入って来ると、
「どういうのだ、天満坊？」
と、見据えた。
天満坊は、平然として、左近の鋭い視線を受けとめて、
「お主は、この城でなにをしているのかな？　まさか随身したわけではあるまい」

＊

と、たずねかえした。
「随身などを、するものか。居候だ。……こう世の中が飢えて、米も水も無くなっては、そんな心配のない場所で、当分のんびりとくらしているのも、わるいことではない。……酒もあり、女もある。居心地はよいことだ」
「はははは……、あいかわらず、ぬけぬけとした兵法者よ。多門夜八郎を追うて、試合をする気持もゆるんだか」
「ばかを云え！　多門夜八郎は、生涯の宿敵だ。三年後、五年後、いや十年かかろうとも、必ず、見つけ出して、斬る」
「理由もない執念を燃やすのが、兵法者というものかの」
天満坊は、空とぼけた口調で、云った。
「おい、天満坊！　おれの尋問をはぐらかすな。お主は、まことに、神矢城の使者か？」
「そう見えぬか？」
「なに？」
「この坊主は、七変化が得意でな。数珠をまさぐって、お経をとなえれば、善知識にみえる。洛中を徘徊する無頼の徒の群に入れれば、破戒むざんの極悪売僧（まいす）にみえる。さらにまた、三軍を指揮する采配をにぎらせれば、古今無双の名将の威厳をそなえるがごとくみえる。……ははは、田舎城の使者としては、ちと、貫禄がありすぎる、と申すもの」
「云わせておけば、大層なほらを吹く。……天満坊！　贋使者だな？」

『左近——』
「なんだ？」
「お主は、野に飢えて、息絶え絶えになっている百姓たちの、悲惨な姿を眺めて居ろう。……一揆を起して、老人や女や子供たちまでが、悲痛な叫びをあげて、走るさまを、目撃しているであろう」
「それが、どうした？」
「お主も、人間ならば、感ずるところがあるはずだ」
「……」
「人間は生きねばならぬ。生きるためには、食わねばならぬ。米をつくる百姓が米を食えず、米をつくらぬさむらいが米を食っている。こんな阿呆な話はない。……一揆は、城取りの野望で起す軍とは、全くちがう。生きんがための、文字通り必死な神乞いともいえよう」
「……」
「この城には、おどろくべき米がたくわえられている。野には、米は一粒もない。……この不公平な現実を、正さねばならぬ。そのために、天満坊は、神の使者として来た。それでも、お主は、わしを、贋者と呼ばれるかな？」

掠奪行

一方、公卿館にあっては——。
伊吹野中の農夫たちが、続々と、館に入って来ていた。
「蓄え米を、のこらずわかつから、宵のうちまでに、館へ集まるように」
その布告を受けて、農夫たちは、夢かと思いながら、急いでやって来たのである。
書院にいた夜八郎は、およそ三千人あまり集った頃を見はからって、立ち上った。
庭へ出ようとするところへ、臥床しているはずの泰国清平が、杖にすがり、老僕にささえられながら、現れた。
「多門殿——」
はげしい怒気を顔にも声にもあふらせて、呼んだ。
「こ、これは、いったい、どうしたことで、ござるのか？」
夜八郎は、老人を、書院に坐らせると、
「おことわりしなかったのは、おわびする。しかし、毒には毒をもって制する手段もやむを得ぬ、と天満坊の企図するところに賛成して、今夜、伊吹野城を、襲撃いたす」
「と、とほうもない！　それは、暴挙と申すもの」

清平は、かぶりを振った。
「百姓をにわか兵にしたてて、伊吹野城を攻めるなど……、なんという、無謀な！　そ、そのようなきちがい沙汰を、天満坊ともあろう御仁が、どうして、くわだてるのか！」
「いや、勿論、伊吹野城を攻略するのではない。戦うために、百姓たちを集めたのではないのです」
「では、どうなされる、というのじゃ？」
「城内に蓄えた米を、奪うだけです」
「米を？」
「左様——。あの城には、ここ数年間百姓たちが汗してつくった米が、倉に山と積まれて居り申す」
「それは、存じて居る。存じて居るが……、どうして、奪えるものぞ。数千の兵が拠っている城の糧秣を奪いとるなどとは、想像もつかぬ」
老人は、かぶりを振った。
「それがしも、はたして、それが可能か、どうか——いささか、疑念は抱くが、天満坊は、絶対の自信を持って居るのです」
「その計画というのは？」
「天満坊の胸中に秘められていて、それがしも、よく判りかねる。ただ、天満坊が、それがしにたのみのこしたのは、百姓たちを、できるだけ多勢、集めて、これを軍勢とみせかけて欲しい、ということです。おそらく、隣国の軍勢が、押し寄せた、とみせかけて、田丸豪太夫に、兵を出させ、その留守中をねらう計画と思われる」
「すると、もう、天満坊は、伊吹野城へ、行かれたのか？」
「神矢右衛門太郎のみつぎ使者といつわって、米五十俵をはこんで、行きました」
「なんという、無謀な暴挙を！」
老人は、嘆息した。
「おしまいじゃ！　この公卿館は、滅びる」
夜八郎は、その様子を見まもって、
「ご老人は、米を奪ったあとの、田丸豪太夫の憤怒を、想像されているのか？」
と、問うた。
「そのいかりが、どのように凄じいものか、天満坊は、いささかの考慮もされなんだのか」
「いや、あれだけの深慮遠謀の智慧者ゆえ、当然、そのことに考え及んでいないはずはない」
「田丸豪太夫は、必ず、全兵を率いて、当家へ押し寄せて参ろう。その時は、ひとたまりもない」
「……」
夜八郎も、その時、天満坊がいかなる奇策を用いるか、想像もつかなかった。
「多門殿、お願いじゃ。これより、お手前が、なんとか、城内にある天満坊殿に、連絡をとって、思いとどまらせて頂けまいか」
「もはや、おそいことです」
「いかぬ！　いかぬ！　……よし、お手前には、もうたのまぬ。太郎を行かせよう」

「太郎殿も、天満坊に従って、城へ参った」
「げっ！」
　清平は、仰天した。
「そ、それは、まことか？」
「太郎殿は、われわれの壮挙に、賛成し、ひと働きを誓ったことです」
「なんという、おろかな！　……太郎は、わしが、この二十年の苦心を、つぶさに、見て居ったに……」
　清平は、わなわなと、全身をふるわせた。
　清平は、この公卿館が焼きはらわれることや、わが身が殺されることには、覚悟をきめることができた。
　ただ——。
　五摂家からあずかった金銀を、守らねばならぬ重大な任務があった。
　おのれが死ねば、息子の太郎に、その任務を与えなければならなかった。
　おのれも息子も死んでしまえば、その金銀は、永久に、地中にねむってしまうことになる。
「多門殿！」
　老人は、語気をあらためて、夜八郎を凝視した。
「杉乃江殿から、うかがった。お手前は、将軍家の御子息の由」
「……」
「相違ござるまいな？」
「当人は、氏素姓もない牢人者ときめて居る」
「お手前が、将軍家の御子息であることは、かくれもないのであれば、お願い申しておきたい儀がござる」
「……？」
「これは、せがれ以外に、お手前にはじめて、打ち明け申す秘密でござる」
「……」
「きかれたならば、胸にたたまれて、天満坊殿にも、口外されてはならぬ」
　遠く、広庭へ蝟集した農夫の群のざわめきを、ききながら、泰国清平は、その秘密を、夜八郎に、語った。
　腕を組んで、ききおわった夜八郎は、その顔に微笑をうかべていた。
「律儀に、二十年間も、五摂家の財産を守られたのは、ご苦労でした。しかし、その責任は、もう、はたされたのではあるまいか」
「とんでもござらぬ。五摂家へお返し申すまでは、なお、責任を負わねばなり申さぬ」
「では、おうかがいするが、五摂家では、二十年間に、泰国殿に、何かむくいるところがありましたか？　五摂家では、ただ、お手前の律儀な気象をいいことにして、預けぱなしで、そ知らぬふりをしていたのであるまいか」
　その通りであった。
「やがて、天下が泰平になれば、さっさと取りに来る。まことに、身勝手な話だ。元来、公卿衆というのは、そういうものだが、話をうかがっていると、他人事ながら、腹が

立って来る。むしろ、それだけの金銀を、貧しい百姓らに、わかち与えてやる方が、泰国殿らしい、と申せる」
「そ、そのようなことは、でき申さぬ！」
　清平は、秘密を打明けたのを、後悔した。
　夜八郎は、はははは、と笑い声をたてて、
「安堵されい、いかなることがあろうとも、田丸豪太夫に、金銀を渡すようなことはいたさぬ。これは、約束いたす。……しかし、矢はすでに放たれた。米は、伊吹野城から、奪わねばならぬのです」
　そう云いのこして、夜八郎は、さっと、座を立った。
　清平は、あわてて、呼びとめようとしたが、そのいとまもなく、夜八郎を出て行かせてしまった。
「……破滅じゃ！　この公卿館は、ほどなく烏有に帰そう」
　清平は、暗然として、つぶやいた。
　夜八郎は、広庭に面する廻廊に出た。
　広庭は、農夫の群で、うずまっていた。女も子供も多い。
　夜八郎が、鋭く冴えた一声をはなつと、ざわめきは、一時にしずまった。
「お主らは、飢えている。明日口にする米一粒も、持たぬ」
　まず、夜八郎は、そう云った。
「しかし、お主らは、生きねばならぬ。生きるためには、その米を、おのが手に、つかみ取らねばならぬ」
　群衆は、どっと、その言葉に、応じて、喚声をあげた。
　夜八郎は、ずうっと見渡してから、
「米はある！」
と、叫んだ。
　群衆は、一瞬、しーんとなった。
　次の瞬間、夜八郎の高らかな声が、その無数の頭の上を渡った。
「米は、伊吹野城にある！」
　農夫三千余は、息をのんだ。
　——いったい、この牢人者は、何を云い出すのか？
　ひとしく、とまどわざるを得なかった。
　おびただしい米が、伊吹野城に蓄えられていることは、きかされるまでもない。知りすぎるくらい、知っていることである。
　それが、いったい、どうしたというのであろう。
　伊吹野城に米はあっても、それは、自分たちとは、全く無関係ではないか。
　もし、その米が、自分たちにわかち与えられるならば、と想像することは、天から米が降って来るのを望むにひとしい。
　——この牢人者は、途方もないことを云い出すものだ。
　どの顔にも、その表情があった。
　見渡した夜八郎は、微笑して、
「まず、考えよ！」
と、声を張った。
「田丸豪太夫は、鬼神ではない。お主らと同じ人間だ。

……お主らは、いままで、田丸豪太夫を、自分たちのはるか上に立つ絶対権力者、と思い込んでいたであろう。ちがう！　いま、お主ら三千人の中へ、豪太夫をひきすえてみるとよい。ただの弱小の人間でしかあるまい。なぐる、蹴る、ふみつける——思いのままではないか。……お主ら一人一人は、力はないかも知れぬが、三千という頭数を結集させれば、この力は凄じい。伊吹野城の米を奪うことは、断じて、夢ではない」

「し、しかし——」

一人が、叫んだ。

「城には、兵が居りまするぞ。刀や槍を持った兵が、居りまするぞ！」

「わしらが、鎌や鍬を持って行ったところで、敵いはせぬ」

「みすみす、殺されに行くようなものじゃ」

「お前様はご存じあるまいが、城の兵らは、わしらを虫けらとしか、思うて居らぬぞい。……わしらの兄も弟も、殺されて居るのじゃ！」

「わしらを、兵にしようとしても、それは、なるまいぞ」

一斉に、農夫たちは、叫びたてた。

夜八郎は、その騒擾が、しずまるのを待って、

「それがしは、お主らに、軍勢を組め、とたのんでは居らぬ」

「すりゃ、なんとせい、と云われるのじゃ？」

「ただ、米を取りに行けばよいのだ」

「わからんことを申される」

「策がある。その策は、すでに、着々とおしすすめている。お主らは、それがしの指示にしたがってくれればよい。お主らに、武器をとってたたかってくれ、と申しているのではない。犠牲者も出さぬ！」

農夫たちは、夜八郎の言葉を、どうしても、信用することが、できないようであった。

無理もないことであった。

とうてい、考えられぬ壮挙であった。

ざわめきたてて、いつかな、しずまりそうもなかった。

その時であった。

夜八郎のかたわらへ、泰国清平が、杖にすがって、現れた。

「皆の衆——」

清平に呼びかけられて、群衆は、口をつぐんで、視線を集めて来た。

「きかせておこう。……この多門夜八郎殿は、足利将軍家のおん曹司であらせられる！」

清平の言葉は、農夫たちに、固唾をのませた。

「将軍職を継ぐ資格をお持ちのおん身が、故あって、こうして諸国を放浪されて居るのじゃ。たまたま、この伊吹野に参られて、あまりにむごたらしいお主らのさまを目撃され、決意なされた。……お主らは、将軍家おん曹司から、じきじきに、たのまれて居るのじゃ。それも、お主らを救わんがためなのじゃぞ！」

清平は、ここで、病軀を忘れて、声をはりあげた。

「もし、お主らが、それでもまだ合点が参らぬ、というのであれば、この清平が、輿に乗って、先頭を行こうぞ！」

悲壮な宣言は、農夫たちを、一にも二にもなく、熱狂させた。

喚声があがった。

「お館様っ！」

「やりまするぞ！」

「伊吹野城へ、押し寄せまするぞっ！」

闘志がふくれあがる光景に、夜八郎は、

——よし！

と、うなずいた。

いつの間にか、背後に、梨花が出て来ていた。

夜八郎は、ふりかえって、

「見るがいい。まことの人間の力が、ここにみなぎった」

と、云った。

梨花は、はじめて、青年らしい颯爽たる気概を満たした夜八郎の姿に接して、感動で、口がきけなかった。

夜八郎は、清平に向って、礼をのべた。

清平は、かぶりを振って、

「滅び行く者も、死花ぐらいは咲かせてみとう存ずる」

と、こたえて、杖にささえられながら、奥へ去って行った。

清平は、夜八郎が農夫たちに呼びかける声をきいているうちに、

——天満坊の奇策は、あるいは、成功するかも知れぬ。

と、思いなおしたのである。

さて——。

城内にあっては、天満坊は、夜に入っても、悠然と構えて、いささかも、事を急ごうとしなかった。

太郎が、そっと入って来て、

「この城内に、御坊を知る兵法者がいるのに、どうして、そのように、おちつかれて居る？」

と、なじった。

天満坊は、にこりとして、

「見物人が、居ってはいかぬかな？」

と、云った。

「見物人?!」

「左様さ。あの九十九谷左近は、わしらが贋使者であることを、城主に注進するような、卑劣者ではない。冷酷きわまる性情を持った剣鬼じゃが、その点だけは、信用できる」

「わかるものではない」

「太郎殿、お手前は、かなり疑いぶかい御仁じゃが、事を為すにあたっては、信ずべき者と信じ難い者を看わける目は、必要じゃな」

「あの兵法者は、信用できぬ。なぜ、斬ってしまわなかったのか……。大事を行なう上には、用心の上にも用心が、肝要であろうものを——」

いまいましげに、太郎は、云って、しりぞいた。

その直後であった。
天井板がはずされ、七位の大乗が、ひらりと、とび降りて来た。
「ほう……、お主も、信用できる忍者であったな」
天満坊は、笑った。
「七位の大乗、いったんの誓いは、死に代えても、守り申すな」
大乗も、にやりと笑いかえしてみせた。
「では、お主が調べたところをきこうか」
「ここに――」
大乗は、懐中から、城内の見取り図をとり出して、ひろげた。
天満坊は、大乗に、主として、武器蔵を調べさせたのである。
「ほう、武器蔵は、三つもそなえてあるのか。大層な物持ちじゃな。……多すぎるが、いたしかたがない。のこらず、片づけることにいたそう」
天満坊は、大乗を、視て、
「お主一人で、仕掛けて、片づけるのは、ちとむりであろうな？」
と、訊ねた。
すると、大乗は、
「さいわい、連れを、見つけ申した」
と、こたえた。
「ほう――連れをな？」
「柿丸という男で、御坊とも顔見知りときき申したぞ」
「成程、梨花殿を救いに、城内に忍び入っていたのじゃ。恰度よい連れじゃ」
天満坊は、大乗に、見取り図を扇子でさして、指令しはじめた。
払暁――。といっても、霧が野を流れていて、森と野と川がおぼろに見わけられる程度で、山もまだかくれている時刻であった。
伊吹野城の櫓の上では、物見の兵二人が、いずれも、柱によりかかって、こくりこくりとやっていた。
物見役は、夜明け前の一刻が、いちばん、つらい。
つい、居睡らずにはいられなかった。
すでに、四隣を制圧して居り、敵軍が突如として押し寄せて来ることなど、全く考えられなかったので、兵らは、物見など、いまは形式にすぎないことに、思っていたのである。
交替の時間まで、そこで、こくりこくりやっていれば、役目はすむ、ときめていた。
はるかな、遠方から、潮騒のように、人馬の進んで来る音が、つたわって来たが、兵らは、目ざめようとしなかった。
夜あけたばかりの、澄みきった空気は、その人馬の音を、しだいに、近いものにして来た。
三人ばかりの従士が、血相を変えて、櫓下へ駆けつけて

来た。
「おのれらっ！」
呶号されて、二人の兵は、はじめて、目をさまして、きょときょと、となった。
「おのれらっ！　あの軍馬の蹄の音と、いななきが、きこえぬかっ！」
そう喚かれて、兵らは、愕然となった。
従士三人は、櫓上へのぼって来るや、
「こやつ！」
「穀つぶしめ！」
「これを、くらえっ！」
矢庭に、抜刀して、あびせかけた。
兵のうち、一人は、顔面を斬られて、絶叫をほとばしらせ、もう一人は、無我夢中で、宙へ跳び出て、地べたで、ぎゃっと、断末魔の声をあげた。
従士たちは、のびあがって、南方をすかし見た。
「くそ！　見えぬ！　霧を利用し居る」
「あの音では、五千――いや、七千は下らぬぞ」
「いや、一万以上と、わしは、判断する」
いずれも、うわずった声音で、口走った。
「そ、それにしても、いったい、どこの軍勢だ？」
「わからぬ。……土一揆ではないのか」
「ばかを云え！　土一揆が、あれほど、軍馬を持って居るか」
たしかに――。
近づいて来る馬蹄の音といななきは、すくなからぬものだった。
城内は、たちまち、騒然となった。
小姓に起された田丸豪太夫自身、いったい何者が襲来したのか見当もつかぬままに、
「うむ！　ひさしぶりの合戦ぞ！」
と、武者ぶるいした。
ほどなく、霧が散った。
南方にわだかまる森のあたりに、旗と指物が、浮きあがった。それは、かぞえきれぬほどの多さであった。
田丸豪太夫は、武者溜を設けた広場に高くそびえている着到櫓の上に、立って、これをみとめた。
「うむっ！」
思わず、うめき声が、その口からもらされた。
豪太夫は、かつて、これほどおびただしい旗と指物を、見たことがなかった。
そこに、土煙りが、もうもうと舞い立っている。
これは、すくなくとも、三万は、下らない軍勢と受けとってよかった。
すでに、伊吹野の四方に、豪太夫に、抵抗する勢力は、なかったはずである。
さすがの豪太夫も、顔色が、青ざめた。
まして、伊吹野へ攻め入って来る勇気ある隣国があろうなどとは、考えられなかった。
――どうしたというのだ？

豪太夫は、われにもあらず、狼狽した。
こういう場合、専横主君であり左右に軍師も老臣も持たぬ豪太夫は、疑惑を問うべき左右の士がいない心細さをおぼえずにはいられなかった。荒巻鬼十郎がいないことは痛手であった。
それだけに、よけい、居たたまれない焦躁にかられた。
「くそ！　いったい、あれは、何者なのだ？」
豪太夫は、呶鳴った。
その時――。
ふいに、背後から、
「さあ、何者でござろう」
という声が、かかった。
ぎょっとなって、振りかえった豪太夫は、そこに、いつの間にか、九十九谷左近が立っているのを見出して、
「なんだ、その方か！」
と、吐きすてた。
「殿にも、あれが、何者か、見当がおつきにならぬところをみると、彗星のごとく出現した名もなき武将でござろうな」
「そ、そんな奴が、この近隣に居るわけがないっ！」
「では、あるいは……」
と、云いかけて、左近は、にやにやとして、次の言葉を、わざとひかえた。
「あるいは、なんだ？　もったいぶらずに、云うてみい！」
豪太夫は、苛立った口調で、せかした。
「あるいは、京都を見すてて、何処かに新領土をもとめて下って来た細川、山名あたりの一族でござろうか」
「ば、ばかな！」
豪太夫は、まなじりをひきつらせた。
もし万が一、そのようなことになれば、この伊吹野城など、ひとたまりもなかった。
左近は、豪太夫が、狼狽をかくしきれぬていへ、じろりと横目をくれて、
「そうでないとは、否定できますまい。すでに、京都は、御所をはじめ、将軍、三管四職の邸第は、灰燼に帰して居り、覇をとなうべき王城の地とは申されぬ。……賢明な武将ならば、ひとたびは、しりぞいて、新天地に兵を養い、捲土重来が上策と考えるのではござるまいか」
左近は、じわじわと、豪太夫を、おどかした。
権謀術策には、およそ縁遠い頭脳の、猪武者の豪太夫は、そう云われると、そうかも知れぬ、と思った。
「あれが、細川か山名なれば、反抗は、かなわぬ」
「田丸豪太夫ともあろう猛将が、なんと気弱な――」
左近は、せせらわらった。
「天下に名を馳せんと思うなら、いさぎよく、撃って出て、玉砕せんという覚悟がなくてはなりますまい」
「い、いや――」
豪太夫は、かぶりを振った。
「あれは、すくなくとも、三万の兵だ。こちらは、わずか、三千足らず。とうてい、抗すべくもない」

「寡兵をもって、大軍を撃ってこそ、天下に、名もあげられようものを――」
「おいっ！　他人事と思うて、やすやすと申すな。神算鬼謀には、稀代の軍師がいてこそ……」
「殿――。その軍師は、当城に在るではござらぬか」
「なに？」
「神矢城から参って居るあの大坊主は、それがしも、一瞥して、ただ者にはあらず、と看て取り申した」
「お――、あの叡山入道と申す男が、いたな」
豪太夫は、なぜ、あの法体（ほったい）の人物がいたことに、気がつかなかったか、と胸をはずませた。
「おいっ！」
武者溜に集っている家臣たちへ、大声を投げた。
「誰かある。叡山入道を、ここへ、呼べ！　早うせいっ！」
やがて、着到櫓へ、天満坊が、悠々たる態度で、現れた。
「大層な軍勢が、寄せて参るようでござるな」
にこやかな表情で、云った。
「お、お主――」
豪太夫は、興奮のあまりのどもり声で、
「あれを、わしは、京都を見かぎって、新しい領土をさがして来た細川か、山名か、とみたが、どうだ？」
左近の姿は、すでに、消えていたので、豪太夫は、自分の考えにして、問うた。
「さてな？」
天満坊は、ちょっと、首をかたげてみせた。
「わしには、そのほかには、この伊吹野へ攻め入って来る敵が、近くの国にあろうとは、思われぬのだ」
「ご尤もの仰せ――、それがしも、そう思います」
「では、細川か山名か――三管四職のうちの誰かが、下って来た、としか、考えられぬではないか」
「もし、そうであっても、殿は、一戦を交えられますかな？」
「……」
豪太夫は、左近から、弱気をわらわれたばかりなので、戦いたくない、とは云えなかった。しかし、戦ってやる、とはとうていこたえられなかった。
天満坊は、まんまと、わが策謀に乗って来た豪太夫を、にこやかに見まもりつつ、
「戦うべきか、戦わざるべきか――まさに、これは、興亡の岐路に立たれた、と申すべき――」
と、云った。
からかわれているとは知らず、豪太夫は、必死であった。
「お主！　わしの軍師になってくれい。軍師になってくれれば、意見に従うぞ」
「それがしなど、とても、軍師などつとまる智慧など持ちませぬな」
「いや、お主は、軍師として、またとない人物と、わしは見込んだ。たのむ」
豪太夫は、頭を下げた。
「それがしに、どうせよ、と仰せであろう？」

「あの軍勢を、黙って迎え入れるべきか、それとも、追いはらうべきか。追いはらうには、いかなる作戦をなせばよいか。考えてくれい。たのむぞ」
「……」
天満坊は、こたえるかわりに、小手をかざして、南方を見やった。
土煙りは、森の前の野いっぱいから、舞い立っている。
――うまいものだ！
天満坊は、感心した。
――あれでは、どう見ても、三万の軍勢以外の何者でもない。
夜八郎が、農夫たちを使って、そう見せかけているのであった。
――将軍家の御曹司ともなれば、いつの間にか、虚実の軍略を身につけているものだわい。
「おい！　叡山入道――きいてくれぬのか？」
豪太夫は、喚きたてた。
天満坊は、いよいよおちつきはらって、
「あの軍勢が、もし京都から下って来た細川、山名であれば、これを、黙って迎え入れれば、殿のお生命は、ありますまい」
「う、うむ。わしも、そう思う」
「さりとて、城内にある兵だけでは、蟷螂（とうろう）が斧に向うのたとえそのままでござろう」
「では――、いったいどうすればよいのじゃ？」
天満坊は、云った。
「真正面から、撃って出て、とうてい勝目がない、となれば、策を用いざるを得ますまい」
「そうだ！　その通りだ！」
豪太夫は、叫んだ。
「その策を、お主に考えてもらいたいのだ」
「策と申すものは、かるがるしゅう用いざるもの――」
「しかし、お主はいま、策を用いざるを得ぬ、と申したではないか」
「申してござる。しかし、策を用いる以上、敵を完全にだまさなければ、成功はおぼつかぬことでござれば、殿には、はたして、その巧妙なかけひきが、おできになるかどうか……」
「できぬわけはないぞ。……やる！　やってみせる！」
この時はじめて、天満坊は、異常に緊張した様子をつくると、再び、南方の野を、凝視した。
かなりのながい沈黙であった。
豪太夫は、不安な表情で、天満坊の横顔を見まもって、固唾をのんでいた。
天満坊は、豪太夫を見かえると、
「それがしに、城内の兵をお与え下されば、なんとか、敵を退却せしむる策が、ないことはござらぬ」
「そ、その策とは？」
「それがしが、兵を率いて、城を出て行き、途中で、布陣つかまつる。兵らにはなるべく平常のままの服装をさせ申

す。決して、槍や弓矢を携えさせぬのでござる」
「ふむ。それで――？」
「布陣いたしたならば、それがしが、数騎のみをつれて、敵陣営へ乗り込んで参る」
「ほう？」
「伊吹野城が、決して反抗の意志なき旨を述べ、つつしんで城内へ案内つかまつる、と申し出るのでござる」
「成程――」
「敵が、それがしの口上を信用するか、どうか――それは、それがしの態度如何にかかわること。おまかせ下されば、必ず、敵をだましてごらんに入れ申す」
「たのむぞ！」
「で――敵陣営を油断させておいて、口実を設けて、夜まで、そこに敵陣をとどめておき、わが兵を、忍び寄らせるのでござる。それがしが、隙をうかがって、敵将の首を刎ねるのを合図に、わが兵が一斉に、夜襲いたす」
「おお、そうか！　うむ！　これこそ、あっぱれな秘策だぞ。叡山入道、たのむ。やってくれ」
「はたして、図に描いた通りに、成しとげられるものかどうか、その自信はござらぬが……」
「いや！　成功するぞ！　絶対に大丈夫だ。やってくれい！」
田丸豪太夫は、みごとに、天満坊の策謀に乗せられてしまった。
「では、兵をおかりつかまつる」
「おう、のぞむがままの兵を率いて行け」
豪太夫は、みじんの疑いも抱かずに、ゆるした。
天満坊が出て行くと、入れかわりに、もう六十に手のとどく年配の士が、入って来て、平伏した。
豪太夫の脳中に、名をとどめている家来ではなかった。
「なんだ？」
「それがし、足軽頭をつとめまする加茂九兵衛と申しまする」
痩せこけて、貧弱なからだを、さらに縮めて、名のった。
「足軽頭が、なんとした？」
「はばかりながら、申上げまする。叡山入道と申される神矢城の謀将に、当城の全兵をおまかしなされるのは、いかがなものかと存じ、軽輩の身分をかえりみずに、罷り出た次第でございます」
「わしに、諫言（かんげん）に参った、と申すのか？」
「なにとぞ、いま一度、御考慮のほど、ねがわしゅう存じまする」
「九兵衛！」
「はい」
「おのれは、主人の頭脳に、智慧が足らぬ、とさげすんで居るのか？」
「とんでもございませぬ。……それがしは、あの叡山入道なる人物に、いささか、疑いをかけているだけでございまする」
「あの男は、わしが見込んだ。わしの方から、軍師になっ

てくれとたのんだのだぞ。おのれら、下っ端ざむらいに、何が判る！　下れっ！」
　しかし、加茂九兵衛は、よほどの覚悟をきめて来たとみえて、容易に、座を立つ気配を示さなかった。
「お言葉をかえすようなれど、それがしは、いささか、孫子が軍略を学んで居り、兵を動かすにあたっては……」
「黙れっ！　足軽頭に、孫子を講釈されるほど、田丸豪太夫は、間抜けではないぞっ！　下れっ！　下らぬと、討ちすてるぞ！」
「おん殿！」
　九兵衛は、じっと、豪太夫を見つめた。
「当城に、勇猛の士は数多くござりましょうが、虚実の兵策を用いる御仁が、一人でも居りましょうか。さればこそ、おん殿は、他城の使者をくどいて、軍師になされるのではござりますまいか」
　これは、豪太夫にとって、痛い言葉であった。
　しかし、城主として、まず、豪太夫が、えらんだ態度は、威厳を保つことであった。
「こやつ！　三万の軍勢が迫って参って居るものを、主人をとまどわせて、あざけろうという所存かっ！　許せぬぞ！」
　と、呶号した。
　加茂九兵衛は、豪太夫が、刀架けから陣太刀をつかみとるのを眺めつつ、みじんもたじろがなかった。
「軽輩の諫言をお怒りは、ご尤もなれど、まず、その前に、いかなる者の言葉にもせよ、それが、誠心から吐かれるものならば、上に立つお方は、一応耳をかたむけられるのが、肝要かと存じられまする」
「それぐらいのことは、云われなくとも、わかって居る。わしは、おのれの、小ざかしげな面つきが、気に食わん」
「おん殿！」
　加茂九兵衛は、もう一度平伏した。
「叡山入道と称するかの御仁、はたして、神矢城より遣わされた使者かどうか――、それがしは、まず、それを疑うて居りまする」
「黙れっ！　叡山入道は、米五十俵をみついで参った使者だぞ！　五十俵には、石ころでも詰めてある、とでも申すのか」
「正しく、米が詰めてありましたなれど、虚実の兵策を用いるのは、それは、当然のこと。そのことをもって、神矢城の正使者と早合点するのは、いかがでござりましょうや？」
「贋ものという証拠でもあるのか、証拠が！」
「べつに証拠とてありませぬが、ただ……」
「ただ、なんだ？」
「ただ、ひきつれて参った家来衆が、使者随従には、いささかおそまつな面々と見受け、ひそかに挙動をうかがうに、どうも、あやしむに足りる、と存じましたれば……」
「うつけめ！　足軽頭ふぜいに、そのような判断をつける目があるか」

「はばかりながら、それがしは、いささか、観相もつかまつります」
「観相？」
「はい。人はおのずから、昨日の運、明日の運を、その面様にあらわして居ります。それがしは、四十年にわたって、そのことを、究めて参りましてございます」
「よし、おもしろい。わしの人相を観るがよいぞ。どうじゃ、わしが、いかなる過去をもち、将来どれだけの大領主になるか――あててみせろ」
「……」
「高言ほざいたからには、わからぬとは、云わせぬぞ！　さあ、申せ！」
　豪太夫は、迫った。
　加茂九兵衛は、あくまでおちつきはらって、主君を、じっと見かえしていた。
「云わぬか！」
　豪太夫は、凄じい眼光を、射かけた。
「おん殿――」
　九兵衛は、わずかに眉宇をひそめて、
「人相と申すものは、その運につれて、変るもの。まず、叡山入道に、兵をお貸し与えになるのを、思いとどまられませ」
「こやつ！」
　豪太夫は、陣太刀を、ぱっと、抜きはなった。
「それへ、なおれっ！　観相をいたすなどと、高言ほざいて、わしの人相を観よと申せば、おそれをなして、ごまかそうとする。おのれのような下者（げもの）など、家来には要らぬぞ。そのそっ首を刎ねてくれる」
　しかし、九兵衛は、白刃をつきつけられても、自若として、いささかの動揺もみせず、
「云え、と仰せられるならば、申上げぬでもありませぬが、それよりも、焦眉の急は、叡山入道を城から出してはならぬことゆえ、お願い申上げましたまでのこと。おきき入れ下さらぬとあらば、やむなき仕儀と存じます。おん殿のお顔にあらわれた、未来のこと、申上げまする」
「まず、わしの過去を観ろ」
「それは、申上げても詮ないこと」
「なんだと！」
「おん殿のふみこえて参られましたのは、いずれも、白日の大道ではこれなく、陰惨な裏道ばかりでありましたれば、これを、当てるのは、はばかりあることに存じまする」
　豪太夫は、呶鳴った。
「かまわぬ。申せ！」
「では、ひとつだけ、当ててみまする。……おん殿が、十余年前、千騎をおのが旗下に置くために用意なされた軍用金は、どこで、手になされましたか？」
「……む！」
　豪太夫は、口をへの字に曲げた。
「おそらく、残忍むざんな行為によって、手になされたに相違ございますまい」

「おい、九兵衛！」
「はい――」
「おのれは、わしを悪人と観ながら、なぜ、随身した？」
「小人の哀しさ、それがしは、十年前おん殿にお目通りした時、おそろしいまでの覇気を観たのでござりまする。あるいは、天下人（びと）にまで、のしあがって行く覇気ではあるまいか、と感じ、即座に、その下につけば、かなりの出世もかなうか、と我欲を起した次第にござります」
「よし、わかった。……では、わしの未来を観よ！」
「……」
しばし、沈黙をまもって、じーっと、豪太夫の面相を凝視していた九兵衛は、
「命運、ここらあたりで、お尽きなされた」
と、つぶやくように、云った。
瞬間――。
白刃が一閃した。
九兵衛の首は、血飛沫（ちしぶき）の中に、高く天井へ飛んだ。
「何をぬかし居ったか！　命運尽きたのは、おのれの方ではないか！」
豪太夫は、吐きすてた。

さて――。
その森の前には、およそ三千の農夫たちが、多門夜八郎の指揮の下に、陣列を敷いて、旗指物を、ひるがえしていた。
旗指物といっても、公卿館で、大いそぎで作製された粗末きわまるしろものであった。遠望に堪えれば、それで、かまわなかったのである。
夜八郎は、組みあげた櫓の上に立って、城内の動静を、待ち受けていた。
火矢が、ひとつ、空高く、あがった。
「よし！」
夜八郎は、片手を挙げた。
それを合図に、農夫陣は、足もとの土をかきたてた。
土煙りが、もうもうと、舞いたって、あたりいちめんが、濃霧のように、包まれてしまった。
城がたから遠望すれば、いよいよ、進撃を開始して来た、と受けとれる。
農夫の一人が、櫓の上に、かけあがって来て、不安をいっぱい顔にあふらせて、
「ど、どうなりましたぞ？」
と、きいた。
「いま、城門をひらいて、城兵全軍が、押し出して来るところだ」
「ひえっ！　そ、そんな……、わ、わしらは、みな殺しじゃ！　約束が、ち、ちがう！」
農夫は、憎悪の目で、夜八郎を、にらみつけた。
「あわてるな。指揮をとっている大将は、天満坊だ」
「え？」
「田丸豪太夫を、たくみにあざむいて、城兵すべてを、野

へひっぱり出して来る策略だ」
「そ、そんなことが、できるものじゃろうか？」
考えられないことだった。
いや、夜八郎自身も、天満坊がたてた大胆不敵な計略が、果して、実現可能なものか、大きな不安を抱いていた。
もし露見すれば、天満坊らは、一人のこらず、殺されてしまうのである。
そうなれば、ここに集まる農夫たちも、生きてのがれる者は、殆どなくなるのではないか。
そのおそれを、胸中に押えながら、じっと、城を見まもっていたのである。
さいわいに――。
火矢が、打ちあげられた。
これは、城兵を野へつれ出す計画が成ったことを、知らせるものであった。
夜八郎は、正直、ほっと、蘇生の思いをしたのである。
「合図はあった。もう大丈夫だ！　安心して、待っているとよい」
夜八郎は、農夫へ微笑してみせた。
城門はひらかれ、天満坊を先頭に、城兵は、堂々と押し出して来た。
天満坊が、率いたのは、およそ三千。
曾ては、数万の軍勢を、おのが手足のごとく動かした天満坊である。ひとたび、馬上に、采配を握って、先頭にたてば、その威容は、三千の将士、兵らを、文句なく従わしめる力を、おのずから発揮した。
「全員、静粛を保ち、私語を許さず」
その指令が、ゆき渡っていた。
法螺貝、鉦、太鼓など、一切持たず、ただ、旗のみを高くかかげていた。
進む陣法は、また、戦闘のためのものではなく、ただの平和な行列をえらんであった。
半里を進んではじめて、天満坊は、采配をたかだかとかざして、
「鶴翼！」
と、命を下した。
諸葛孔明八陣のうちのひとつであった。
天満坊は、陣法が成るのを見てから、大音声をはりあげた。
「孫子曰く、三軍の衆、必ず敵を受けて敗るること無からしむべきは、奇正是なり。兵の加わる所、砥石をもって卵に投ずるが如き者は、虚実是なり。……凡そ戦いは、正を以て合し、奇を以て勝つ！」
将士のうちの大半は、その意味など、解すべくもない。
わかろうとわかるまいと、天満坊としては、われにある神算鬼謀ぶりに、これら三千の将兵をして畏敬せしめればよかった。
「そのむかし、源九郎義経が、一ノ谷の合戦に、ひよどり越えの険を冒して、一ノ谷の本陣を衝き、これを破ったごとき、まさしく、奇兵を用いて、疾風迅雷の勝ちを制したものである。……いま、わが三千は、三万の大軍に当らん

とする。奇兵をもって、敵の虚を衝かざるべからざる——まさに、興廃の一戦である。よって、まず、この叡山入道が、間(かん)を用いて、敵をあざむかんとする。すなわち、自ら、わずか三騎をひきつれて、敵が本陣に乗り込み、口舌をもって、恭順の意を表し、決して、敵対するものに非ざることを信じさせるであろう。そうしておいて、敵陣に、油断を生ぜしめ、夜に入るや、闇に乗じて、一挙に突入して、縦横むじんに蹴ちらそうとするものである。……諸士、それを、心得て、鋭気をひそめて、待つがよかろう」

申し渡された将兵は、ただ、天満坊の凄じいまでの威風をあびて、一語も発する者もなかった。

「よし！　されば——」

天満坊は、釆配を投げすてると、従者から、大薙刀を受けとり、かねて指名しておいた旗本三騎を駆け出させた。

三騎は、それにおくれじと、つづいて、疾駆した。

——ここらあたりか。

ひとつの森のわきをまわって、城兵の目からかくれた時、天満坊は、馬をとめた。

おもむろに、馬首をまわすと、大薙刀を、直立に持って、従って来た旗本三騎を、視た。

「お主らに、覚悟してもらわねばならぬ」

凜然として、いった。

三騎は、敵陣営に乗り込むための覚悟と、受けとり、一人が、

「もとより、申されるまでもないこと。いざとなれば、斬死つかまつる」

と、こたえた。

天満坊は、かぶりを振った。

「さにあらず！　お主らに、ここで、果ててもらうことだ」

「なにっ？」

三騎は、愕然となった。

「ごめん！」

天満坊は、ことわりざまに、馬を躍らせた。

次の瞬間には、一騎の首が、血煙りとともに、刎ねとばされていた。

「おのれがっ！」

「くそっ！」

あざむかれたと知って、のこり二騎は、陣太刀を抜きはなち、猛然と、反撃しようとした。

しかし、天満坊が、唸らせる大薙刀の前には、一太刀をあびせることも、かなわなかった。

一騎は、左肩から袈裟がけに斬られ、もう一騎は、胴を薙ぎ払われて、もろくも、地上へ落ちた。

「南無！」

天満坊は、片手拝みに、詫びておいて、さっと、馬首をめぐらすや、まっしぐらに疾駆した。

櫓上から、その騎影をみとめた夜八郎は、

「やったな、天満坊！」

と、微笑した。

たちまち、櫓下に到着した天満坊は、笑顔を擡げて、

「孔明、正成も、我に及ばず！」

と、云いはなってみせた。

夜八郎は、のぼって来た天満坊に、

「これから、どうなる？」

と、問うた。

「夜を待つだけだの」

「夜を待って、どうする？」

「お主には、農夫千人をひきつれて、城門前へ、忍び寄ってもらう」

「うむ」

「わしは、城兵を率いて、ここへ夜襲をしかける。ここには、この櫓ひとつがのこっているだけじゃ。つまり、城兵陣と農夫陣が、その処を交換するだけのことに相成る」

「それから？」

「それから、米を奪う」

天満坊は、愉快そうに、笑い声をたてた。

陽が傾き、夕風が立った。

城内も、城兵陣も、そして、この森の農夫の群も、ひそと鳴りをしずめている。

嵐の前のしずけさであった。

館にいた田丸豪太夫は、どうにもおちつかずに、再び、着到櫓へ出て来た。

叡山入道が、敵をあざむいて、油断をさせておいて、奇襲をしかけるという策略には、みじんの疑いを抱いてはいなかった。

旗本のうちの数名に申しつけ、刻々の状況を報らせる手段はとってあった。

叡山入道は、旗本三騎を率いて、敵陣営へむかって、進んで行った、という報告があってから、その後、なんの音沙汰もないままに、時間が過ぎていた。

報告がないことは、策略が着々と押しすすめられている証拠であろう。

ただ、豪太夫にとって、あまりにも、時間の経つのが、のろすぎた。

今日ほど、太陽が西の山蔭に沈むのが、のろいと思ったことはない。

「おいっ！」

豪太夫は、苛立たしく、櫓下にならんでいる侍臣を呼んだ。

一人が、駆け上って来た。

「待っては居れぬ。わしも出るぞ！」

「殿、それは、あまりに、性急にすぎますまいか」

「わしは、今日まで、おのが手勢の先頭に立たなかったことはない。……今宵は、叡山入道にまかせようと、思っていたが、どうにも、我慢がならぬ」

「し、しかし——」

「おのれが、先陣をきってこそ、勝利のよろこびはあると申すものぞ！　馬を引けい！」

ひとたび、云い出したら、断乎として、あとへ引かぬ人物であった。

城門が開かれ、刎ね橋が、軋りつつ、降ろされた。

「そのままに、しておけい！」

云いのこしておいて、豪太夫は、七騎ばかりをひきつれて、颯爽とうち出た。

太陽は、その時、そのすがたを没していて、残照が、西の空を彩っていた。

城にのこったわずかばかりの士や兵は、なんとはなしの不安をおぼえつつ、その後姿を見送った。

ただ、その中で、一人だけ、冷たい薄ら笑いをうかべて、見送る兵がいた。

七位の大乗は、いつの間にか、兵に化けて、残留隊の中にまぎれ込んでいたのである。

やがて、夕闇が、ただよい寄せて来た頃あい――。

七位の大乗は、泰国太郎、百平太、青助、黒太、赤松、白次らが、待機しているところへ、忍んで来た。

「城主も出て行き、もはや、城内は、空家も同然でござるな」

そう告げて、大乗は、にやっとした。

闇が、涸れはてた野を匍ってから、半刻も過ぎた頃あい――。

一本の火矢が、その森の蔭から、するすると、飛んで、消えた。

それが、叡山入道の合図であった。

長蛇の陣を敷いて、待機していた田丸勢は、城主を先頭にして、音をしのばせて、進みはじめた。

馬と旗指物をそこにすて、具足がふれ合わぬように間隔をとり、闇に目ばかり光らせて進む奇襲行であった。

豪太夫としては、そのむかしの野盗時代を思い出す。

このように、暗夜を利用して、山犬のように襲いかかっては、金を物品を女を、掠奪したものであった。

一城のあるじとなってからは、このような、興亡をかける奇襲は、一度も行っていなかった。

いまこそ――。

伊吹野城が滅びるか、存続するかの決戦である。

豪太夫は、はじめて、武将としての悲壮な気概が、全身に満ちあふれるのを、おぼえていた。

敵勢は、三万とも四万とも、かぞえられるのである。

ひくい丘陵の裾に来て、豪太夫は、

「ひらけ！」

と、指令した。

長蛇陣から、鋒矢陣に転じせしめ、丘陵を一気に越えて、森へ向って、まっしぐらに、突入することにしたのである。

足軽隊が、急いで前へ出て、三列縦隊をとった。

武者隊が、その後に、鋒矢の陣形をとった。

豪太夫は、武者隊の先頭に立つと、ひとつ大きく深呼吸をした。

大声をあげて、これぞ興亡の一戦であるぞ、と全軍を叱

咤したいところであった。

「よし！　進め！」

押しころした声で、下知を下した。

田丸勢は、丘陵を越えた。

越えた裾から、その森までは、三町あまりであった。

もはや、音を忍ばせる必要はなかった。

「突撃っ！」

豪太夫は、大声を口から噴かせた。

鋒矢陣は、鯨波こそたてなかったが、一人のこらず、けものと化した勢いで、疾駆して行った。

森蔭には、幾十となく、篝火が焚かれ、旗指物が、浮きあがっていた。

陣幕がめぐらされ、竹束の楯らしいものもならべられてあり、一瞥したところ、大軍の野陣と疑う余地はなかった。

ただ、その陣営が、ひそとしずまりかえっているのが、怪しかったが、それを疑っている余裕など、田丸豪太夫には、なかった。

うわああっ！

田丸勢は、あらんかぎりの喚声をあげて、その陣営へ突入した。

狐に化かされた。

そうとしか思えない奇怪な野陣が、そこにあった。

敵兵は、一兵もいなかったのである。

篝火だけが、あかあかと、燃えあがっているばかりであった。

「なんだ、これはっ！」

豪太夫は、総身の血汐が逆流した。

叡山入道と称した男の面貌が、闇の中に浮いて、あざ笑った。

――彼奴！

まんまと一杯くわされたのである。

これほどの憤怒は、曾ておぼえがなかった。

――どうしてくれよう！

八つ裂きにしたかった。

しかし、叡山入道は、はるか手のとどかぬ遠方に去って、

「ざまをみろ！」

と、うそぶいているであろう。

と――。

豪太夫は、頭上から冷水をあびせられたような戦慄におそわれた。

叡山入道が、ここへ、意味もなく、城兵全員をおびき出したはずがないことに、気づいたのであった。

その時、豪太夫の戦慄に、応えるかのごとく、後方にあって、

どーん！

どーん！

と、炸裂音が、起った。

「ああっ！」

闇夜を彩る火の粉が、舞い上るのをみとめて、豪太夫は、はらわたまで、青ざめた。

まさしく、城が爆破されたのである。
総勢、喚きたてて走り出したが、なんとおのが足の、のろかったことか。
奇襲のために、途中に馬をすてて来ていたのである。
そのことも、叡山入道の策略のひとつであったのだ。
まるで、小児のごとく、完膚なきまでに、田丸勢は、だまされたのである。
丘陵を越えて、野をひた走りながら、豪太夫は、城が、えんえんと夜空をこがして、燃えあがる光景に、わが身が焼かれるように逆上した。
城には、南蛮渡りの火薬が、おびただしく、たくわえてあった。それは、豪太夫の自慢のひとつであった。
それが、爆発させられたのである。
——彼奴め、何者だっ？
疾駆しながら、豪太夫は、おそれをおぼえた。
城内には、わずか三十人あまりの余卒をのこしていただけである。
なんの抵抗力もなかったろう。
えたいの知れぬ敵は、その空城へ乗り込んで来て、思いのままに、ふみあらしたのである。
駆け通しに駆けて、城へ辿りついた田丸勢を迎えたのは、夜風を誘ったように、無数に舞い散る火の粉であった。
火焔は、すでに、城門にまで、燃え移っていた。
「殿！　危険でござる！」
刎ね橋を、渡ろうとする豪太夫を、旗本の一人が、しがみつくようにして、とどめた。
「はなせっ！」
豪太夫は、家来を突きとばしておいて、橋の中ほどまで進んだ。
その時、城門が、轟然と、音たてて、崩れた。
「おのれ！　あの坊主め、草の根をわけても、さがし出して、八つ裂きにしてくれる！」
豪太夫は、叫んだ。
しかし、火焔を受けたその面相は、むしろ、うつろなものであった。
城内には、ただ、物の燃えつくす音響があるばかりで、人の叫びはなかった。
殺される者はことごとく果て、逃走する者は一人のこらず、城外へ去ったものであろう。
この時——。
三千の農夫の群は、二里の遠方を、歓喜の足どりで、急いでいた。
どの肩にも、背中にも、そして、荷車にも、伊吹野城の米倉から奪いとった米が、あった。
まるで、夢であった。
これほど、かんたんに、米が掠奪できたことが、その重みを五体に感じながら、まだ信じ難いくらいであった。
しんがりを、天満坊と夜八郎が、くつわをならべていた。
「御坊、これから、どうなる？」
夜八郎は、そのことを懸念していた。

「さあ、どうなるかな」
天満坊は、大仕事をやってのけたあととも思えぬ、いつものとぼけた口調で、こたえた。
「明日になれば、田丸勢は、公卿館へ、攻め寄せて来るであろう」
「まずな」
「どうする？」
「飢えた狼の大群を、迎えることになっては、むだな抵抗は、せぬことじゃて」
「では、館を、空っぽにしておくか」
「それがよいな」
「御坊は、もしその気になれば、天下も取れるな」
「なんの……、対手が田丸豪太夫だから、詐術が成功したまでのこと。いささかの頭脳があれば、わしの詐術ぐらい、看破できぬはずはない」
「いや。わたし自身、御坊の奇策が、判らなかった。舌を巻いた」
「ははは……これぐらいの策略におどろいてくれては、こまる。お手前には、これから、やってもらわねばならぬ異常な冒険がある」

宝

はたして——。
田丸豪太夫が、千騎あまりを率いて、公卿館へ、殺到して来たのは、夜明けたばかりの時刻であった。
土煙りをまきあげて疾駆して来るのをみとめて、農夫たちが、
「来たっ！」
と、はねあがって、走った。
天満坊に命じられて、林や堤などに伏せていたのである。
農夫たちは、館へは、走らず、それぞれ、別の方角へ、姿を消してしまった。
館の内は、ひっそりとして、田丸勢が、門前に殺到して来ても、なんの反応も示さなかった。
豪太夫は、馬上に、躍り立つようにして、
「門を開けいっ！」
と、呶号した。
門扉は、すぐに、開かれた。
城を焼かれた領主の形相は、人間ばなれのした凄じいものになっていた。
建物までの広い前庭は、しろじろと白砂が浮きあがって、

人影ひとつ見当らなかった。
田丸勢としては、いささか、勝手のちがった思いであった。
開門を命じても、容易に応じないであろうし、相当の抵抗があるものと、考えていたのである。
どういうものか、全くの無抵抗である。
豪太夫は、馬を乗り入れると、
「泰国清平、出いっ！」
と、叫んだ。
豪太夫は、この静寂には、何かのしかけがあるものと疑っていた。
城が烏有に帰したにも拘らず、この豪族の館がそのまま、堂々と大屋根をそびえさせているのが、憎かった。
ほんのわずかの反抗の気色でもあれば、たちまち焼きはらってくれよう、と気負い立っていた。
泰国清平は、下僕の肩にすがって、大玄関に現れた。
そして、そこへ、うずくまった。
豪太夫は、睨みつけて、
「伊吹野城に、火を放ったのは、土一揆の仕業であろうが！」
と、呶号した。
「何を申されることか？」
清平は、いかにも、けげんそうな面持になった。
「しらばくれるな！　おのれが、農奴らをそそのかして、奸計をなしたであろう？　どうだ、泥を吐けい！」
「毛頭、おぼえもなきこと――」
清平は、おちついた態度で、かぶりを振り、
「昨夕、軍勢らしいものが、この裏手の間道を通るのを、小者がみとめて、報らせて参りましたが、われらのかかわり知らぬことゆえ、そのままに、うちすごしましたが……」
豪太夫自身、まさか土一揆の仕業とは思っていなかった。
叡山入道という人物の用いた策略がおそるべきものであったところをみれば、おそらく、隣国の武将にやとわれた都落ちの軍師とも想像され、よもや、土一揆の指導者とは考えられなかった。
ただ、正体不明であるからには、この公卿館でやとった人物と、疑うことも可能であった。
その理由のひとつは、三万の兵を布陣させたとみせかけた場所に、のこされていた旗指物は、いかにも、粗末なにせものであったことである。急いでつくりあげたにしても、兵の手によるものであれば、ある程度、旗指物の恰好をなしたに相違ない。旗指物のなんたるかを知らない者たちによって、つくられたしろものであった。
農夫らをして、つくらしめた、と判定できたのである。
「泰国っ！　しらばくれるな！　おのれが仕業であるという証拠があるぞ！」
豪太夫は、馬からとび降りると、清平の前へ迫った。
「証拠と申されると？」
「叡山入道と称する男が、この館に滞在したことを、密告して参った者が居るぞ！」

「叡山入道？……一向に、おぼえがありませぬが――」
「老いぼれて、なお、生命が惜しいかっ！」
豪太夫は、清平の肩を、蹴った。
清平は、うしろへ倒れた。
小者に抱き起されると、そうしているだけでも堪え難そうに、肩で喘いだ。
豪太夫は、その様子を眺めて、この病みやつれた老人に、城を焼きはらうだけの気力がのこっていようとは、思われなかった。
豪太夫は、家臣たちへ目くばせした。
たちまち――。
館の中は、千騎の足に、ふみあらされた。
あちらこちらの片隅でおののいているのは、年老いた下僕や下婢だけで、屈強の男は一人も見当らず、建物はほとんど空家同様であった。
書院にふみ入って、床几に腰かけていた豪太夫は、家臣たちの報告をきくや、清平を面前へひき据えた。
「屋敷内を空にしたのは、このことを予知した上での小ずるい措置だな！」
と、きめつけた。
「とんでもござらぬ」
清平は、暗然たる表情で、かぶりを振り、
「せがれ太郎めが、伊吹野を見すてて、若い働き手ばかりをかき集めて、逃散いたしたのでござる」
「逃散？」
「左様でござる。この館は、虚名のみをとどめる廃墟とののしり、死期せまった父親をすてて、逃散つかまつった。倉などをごらん下されば、おわかりと存じます。せいぜい一月がほど食いつなげる糧秣しか、のこしてはくれなかったのでござる」
清平の言葉は、いつわりではなく、三つの倉には、ほとんど、米は、のこされていなかった。
豪太夫としては、清平を信じないわけにいかなくなった。
しかし、豪太夫には、もうひとつ、問い糺さなければならぬことがあった。
「当家は、二十年前、五摂家から、金銀を預けられた由、どこに、隠匿いたして居る？」
豪太夫は、預ったことは、すでに疑いもない事実だと知っているぞ、という程度で、問うた。
すると、否定するとばかり思っていた清平が、
「ご存じよりでござったか」
と、こたえた。
「うむ。承知して居るぞ。……軍資金として、わしがもらうぞ。処を申せ」
「御城主の所望とあれば、やむを得ぬ仕儀でござる。あれだけの金銀があれば、昨日にまさる難攻不落の城郭を築くのも、容易でござる」
「礼を云うぞ、泰国――」
豪太夫は、正直のところ、ほっとなった。
城を焼かれ、武器と糧秣をことごとく失った武将は、翼

をもぎとられたのにひとしい。擁する軍勢を、そのまま、従わせておくことは不可能であった。
　田丸勢は、四散する危機を迎えていたのである。
　五摂家からはこばれた莫大な金銀が手に入れば、その憂目（うきめ）に遭うこともない。
　城を再築し、武器も糧秣も手に入れられる。
「よし！　案内をたのもう」
　豪太夫は、床几から立った。
「それがしは、ごらんのごとく歩行もおぼつかぬ身でござれば、ただいま、図面を書き申して、下僕を案内させますれば、しばらくのご猶予を――」
「うむ、よかろう」
　清平が出て行くと、豪太夫は、家臣がさがして来た酒を飲みはじめた。
　――それにしても、叡山入道という奴、何者だ？
　また、あらたな憤りが、豪太夫の胸中に、沸きたって来た。
　――彼奴め、やっぱり、神矢城からの使者であったかも知れぬ！
　神矢城では、近隣の武将をかたらって、策略を用いたのかも知れぬ。
　その想像が、いちばん妥当のようであった。
「よし！　城を築きなおし、武器を集めたならば、神矢城を、ひと押しに、押しつぶしてくれる！」
　豪太夫は、叫んだ。
　その時、庭へ、ゆっくりと姿を現した者があった。
　九十九谷左近であった。
「おっ！」
　豪太夫は、目を剝いた。
「左近、どこへ姿をくらまして居った！」
　城が焼かれた時、左近は、城内にいたはずである。
　留守を守る士卒は、一人のこらず討死するか、焼け死んで居り、女人館の女たちは消えうせ、豪太夫が、入った時には、灰燼の中にとどまっている者は、たった一人も見当らなかったのである。
　当然、左近は、剣をふるうのは、この機会とばかり、阿修羅となってあばれたに相違ない、と想像されるところである。
　左近は、書院に上って来ると、
「寡兵をもって、十倍する敵を攻め破る壮烈な戦いぶりを拝見できなかったのは、かえすがえすも、ざんねんでござった」
と、云った。
「何？　おのれは、昨夜、どこに居った？」
「合戦見物に、罷り出たのでござる」
「城には、居らなんだのか？」
「殿が、馬で走り出られるのをみとめて、それがしも、あとを追い申した」
　豪太夫は、舌打ちした。
「まことだな？　軍勢に攻め寄せられて、あわてて、城から逃げたのではあるまいな？」
「この九十九谷左近が、左様な臆病者に見え申すか？」
「数千の兵に攻め入られれば、おのれといえども、怯じ気づくであろうが……」
「はっはっは……」
　左近は、高笑いした。
「たとえ、数千が、数万であろうが、それがし一人にかかって来るのは、せいぜい数十人。これを斬りはらう剣を、それがしが持たぬ、とお思いでござろうか」
「高言は、あとから、いくらでも、ほざけるぞ」
「城を焼きはらわれて、殿も、いささか、逆上気味になられて居る」
「なにっ！　おのれ、ののしるか、左近！」
　豪太夫は、凄じい形相になった。
　左近は、平然として、
「酒を一杯、頂戴つかまつる」
と、片手をのばして、盃を把った。
　豪太夫は、その盃を、足蹴にした。
　しかし、どうしたのか、白い液体を、もろに頭にかぶったのは、豪太夫自身であった。
　そこへ、清平が、下僕をつれて、もどって来た。
　絵図面を、豪太夫の前に置き、
「裏手の北山の頂上に、三十六基の墓標がならんで居り申す。まず、そこに立たれて、正しく東の方へ向い、目をこらせば、斜面一町の下方に、赤松が七本並んで居ります。その七本の列を、右方へ一直線に引いて、ちょうど、並の人間の歩幅で、三十歩……」
　くわしく、説明する清平を、左近は、なぜか、冷たい薄ら笑いをうかべながら、見まもっていた。
　豪太夫の方は、夢中であった。
　愕然となったことである。
　絵図面によって、その場所に立った時、豪太夫は、
「おのれがっ！」
と、おそろしい呻きをたてた。
　墓穴のような深い穴が、七つばかり、掘られていたのである。
　五摂家の金銀は、奪い去られていた。
「なんということだっ！」
　豪太夫は、この憤怒を、たたきつける対手がないままに、随従して来た家臣たちを、睨みまわした。
　どの顔にも、主君に対する信頼感を失った表情が、うかんでいるようであった。
　豪太夫は、恐怖を感じた。
　城を焼かれ、武器と糧秣を盗まれた豪太夫には、ここにかくされていた金銀を手にすることができなければ、絶対君主として、家来をしたがわせる力は、もはやないのであった。
　養う能力を持たぬ武将に、一兵も服従するはずがないのである。
「清平め！　わしを、一杯食わせ居ったなっ！」

豪太夫は、吼号した。
しかし、家臣一同は、唖のごとく、おし黙ったままであった。
これは、城を焼いた者の仕業であることが、あまりに容易に、合点されたからである。
豪太夫は、馬へとび乗るや、
「神矢城を襲うぞっ！　つづけっ！」
と、下知を下した。
いつもならば、これに応ずる声が、あがるはずであった。
一人として、口をひらく者はなかった。
「神矢城を襲うて、奪いかえすのだ！　者どもっ、つづかぬか！」
豪太夫は、馬腹を蹴った。
だが——。
あとにつづく者は、一騎もなかった。
裸同然の軍勢が、気勢もあがらぬままに、隣国へ攻め入ったところで、城を取ることなど、できようとは思われなかった。
四散。
いまは、それあるのみ、という絶望感が、すべての脳裡を占めていた。
ただ一騎、土煙りをあげて、麓へ疾駆して行く豪太夫の姿が、いかにもあわれなものに、眺められた。
これが、昨日まで絶対の地位を占めていた暴君であろうか。

この小山と谷ひとつへだてた山の頂上に、天満坊、夜八郎、泰国太郎はじめ、数十人の男女が立って、豪太夫の孤影を見送っていた。
「栄枯盛衰を、面（ま）の当りに見るのう」
天満坊は、かたわらの泰国太郎に、笑った。
「御坊の神算鬼謀、おそれ入った」
太郎は、心から、云った。

山城の若武者

今日も、暑気を増した陽ざしが、かわいた下界を、じりじりと照りつけていた。
伊吹野に入る街道は、西からも東からも山を越えなければならぬ。
東からは、山をふたつ越えることになるが、そのあいだに、ひとにぎりほどの盆地があって、宿駅が、つぶれかかったような家並を、街道の左右に二町ばかりつらねている。
この宿駅は、北からも山嶽が掩いかぶさるように迫って居り、渓流から、なお、わずかばかりであるが、落し水が街道を横切っているので、かなりのにぎわいをみせていた。
旅人たちは、東から来て、ここに一泊し、伊吹野を避けて南へ——海沿いの街道を辿って行くのであった。
編笠をかぶった武士が一人、この宿駅に現れたのは、午をすこしまわった時刻であった。
往還には、駅馬が二頭ばかり、首をたれているだけで、人影もなかった。
どの家でも、半裸の男女が、ひとときの午睡をむさぼっていた。天変地異がうちつづくと、人間は、絶望的になって、どうでもなりやがれとばかり、ひどく怠惰になるもののようであった。
武士は、この宿駅で他の家を圧して大きな構えをもつ旅籠（はたご）の前に来て、編笠をあげた。
土間には、草鞋が三四足ぬぎすてられているだけで、人の気配もない。
「たのもう——」
武士は、土間に入って、編笠をぬいだ。
総髪の若々しい貌であった。
日焼けした、たくましい眉目に、旅の疲れなどみじんもない。
しばらくして、裏口に物音がした。
武士は、土間を仕切る格子を開けた。
水桶をふたつ携げて入って来た若い女をみとめて、武士は、
「いち——」
と、呼んだ。
何気なく、こちらを見た娘は、
「まあ！　若様っ！」
と、歓喜の声をあげた。
「五年ぶりだな」
若様と呼ばれた武士は、にっこりした。
「ほんに——五年ぶりでございます！」
娘は、そばへ寄って来ようとしてから、はしたないのに気がついて、あらためて、
「おもどりなさいませ」

と、ていねいに挨拶した。
「そなた、元気でよい」
「はい。からだだけは、丈夫でございます。……若様は、ずっと、関東でございましたか？」
「うむ」
「関東で、どんな……、あ、いけない、若様を、そんなところに、立たせぱなしで、ごめんなさいませ。……さ、どうぞ、お上り下さいませ」
「泊めてもらうぞ」
「はい。うれしゅう存じます」
いちは、いそいそと、若い武士を、二階の部屋へ案内した。
案内してから、またあらためて、挨拶した。
奈良城義太郎。
それが、この若い武士の名であった。
五年前まで、伊吹野の管領であった奈良城義胤（よしたね）の嫡子であった。
伊吹野城が、田丸豪太夫の率いる一万余騎に包囲された時、義太郎は、まだ二十歳であった。
二十日間の攻防戦によって、伊吹野城は降服した。
その時、義太郎一人だけ、あくまで抗戦を主張したのであったが、父義胤は、田丸豪太夫の強さをおそれ、玉砕の無意味を説いて、手勢二百をひきつれて、大庄山の山城へ去ったのであった。
義太郎の方は、それを不満として、父と別れ、関東めざして、武者修業の旅へ出てしまったのである。
田丸豪太夫が、侵入して来るまでは、伊吹野は、ふしぎにただの一度も兵火のあがらぬ平和の土地であった。
義太郎が、馬責めに遠出して、この宿駅にしばしば憩うたのも、いずれ領主となった時、庶民の世界を知っておきたいためであった。
義太郎が現れる時は、いつも、ただ一騎であった。
そして、この旅籠の娘いちと親しくなったのである。
城主の嫡子とか、旅籠の娘とか、そんな身分の遠いへだたりなど、すこしも感じない間柄になったのである。
いちは、その頃まだ、十六であった。
「あの頃は、愉しかったな、いち」
「はい。そうでございました。若様のお供をして、よく茸を採りに、山へ参りました」
「熊が現れて、仕止めそこねたことがある。お前が、わしを、必死になって、とめたからだ」
「若様に、おけがをさせたくなかったからでございます」
「わしに、惚れていたか、いち？」
「まあ、なんということを――」
いちは、顔をあかくした。
五年前が、つい昨日のことのように思われる。
義太郎は、いちが、肌のきれいな、豊満な娘になっているのを眺めて、心をそそられた。
いちが、自分の帰りを待っていてくれたような気がした。
「いち」

「はい――」
いちは、あかるい表情で、義太郎を見かえした。
「今夜――、わしのものになってくれぬか？」
義太郎は、思いきって、たのんだ。
戦国の若武者は、後世の青年のように、こういう欲求に、ためらいをみせなかった。
さすがに、いちは、俯向いて、すぐには、返辞をしなかった。
「いやか、いち？」
「いえ……」
いちは、義太郎を見かえして、にこっとした。
「若様は、むかしから、せっかちでございました。すこしもかわっていらっしゃいませぬ」
「うむ、かわって居らぬ」
義太郎は、いちの手をとってひき寄せた。
「いけませぬ、若様。まだ、昼でございます」
「うむ。そうだな。……では、夜、忍んで参るな？」
「はい――」
いちは、承諾した。
いちは、それから、不安な面持になった。
「若様、大庄山のお城へ、おもどりでございますか？」
「うむ。ほかに、もどるところもない」
「若様が、お城におもどりなさると、軍勢をつくって、伊吹野城を奪いかえされるのでございますね？」
「それだけの力は、わしにはない」
「どうしてでございますか？　伊吹野城を奪られっぱなしで、くやしくはないのでございますか？」
「くやしくないはずがあるまい。あの日のことを思い出すたびに、腹の中が、にえくりかえるぞ」
「若様。田丸豪太夫というのは、それはもう、人間ではない、という噂でございます。鬼畜のように、百姓たちを殺して居ります」
「伊吹野でも、一揆が起っているのだな？」
「伊吹野は、生地獄でございます。水が、もう一滴もなくて、田植えもできませぬ」
「田植えもできない？　そんなはずはあるまい。大庄山には、太古から一度も涸れたことのない湖がある」
「……」
いちは、なぜか、黙って、俯向いた。
「田丸豪太夫を、攻め落す武将は、一人も現れぬのか」
義太郎は、吐き出した。
「若様。……お願いでございます。若様のお力で、伊吹野城を奪りかえして下さいませ」
「うむ！」
義太郎は、腕を組んだ。
その時、さわぎたてながら、おもてから入って来た一団があった。
野伏とも、山賊ともみえる二十数人の荒くれた男どもであった。
「いち！」

「いちはどこだ?」
「八荒竜虎隊のおもどりだぞ!」
「いちに、上﨟の衣裳をもって来てくれたぞっ!」
叫びたてながら、どやどやと、二階に上って来た。
「なんだ、あれは?」
義太郎が、たずねた。
「旅荒しです」
いちが、こたえた。
「旅荒し?」
「はい。もとは、都で、北面のさむらいだった、と申して居りますが、このあたりでは、旅荒しというて居ります」
「野伏のたぐいだな?」
「そうだと思います。けど、里の人たちには、悪いことはいたしませぬ。旅荷をねらって、山や野に待伏せていて、おそいかかるのだそうです。お大名の運ぶ荷など、いちばんのえものだ、と申しています」
「なにが北面の武士だ。あぶれ足軽どもだろう」
義太郎が吐きすてたとたんに、杉戸がひき開けられた。
「いち、こっちへ参れ」
髯だらけの顔が、大声をあげた。
義太郎が、
「他客の部屋を、無断で開けるな!」
と、きめつけた。
「なに!」
「その方ら、この宿で、わがもの顔に振舞って居るようだが、容赦せぬ客もいるぞ!」
「おうっ! おもしろい! やるか!」
髯面が、にたっとした。
「若様! およしなさいませ」
いちが、あわてて、あいだに入って、
「髯長さん、あっちへ、行って!」
と、手を振った。
「いいや、行かんぞ。挑まれては、あとへ引けぬわい」
「ダメ! あんたがた、この宿では、喧嘩をしない約束です」
「売られたものは、買わずばなるまい」
「ダメです! 喧嘩は、ゆるしませんよ」
中風の父親に代って、この旅籠を一人できりもりしているいちは、生来の気丈もあって、旅荒しなどをおそれてはいなかった。
「いち! その男、どうやら、お前の情夫らしいの」
「いやしいことを云わないで! 若様ですよ、若様!」
「どこのバカ様だ?」
「伊吹野城の御領主様の若様ですよ!」
「なに! 田丸豪太夫のせがれだと?」
「ちがいます! 伊吹野城は、奈良城義胤様のものじゃ。義胤様のおん曹子です」
「はっはっ……」
髯の長兵衛という、旅荒しの副将格の男は、哄笑した。
「田丸豪太夫に追いはらわれた腰抜け大名のせがれが、お

主か。はっはっは……」
これをきいて、義太郎が、すっと立ち上った。
その双眸が、氷のように冷たい殺気をみなぎらせているのをみとめて、いちが、
「若様!」
と、叫んだ。
次の瞬間、義太郎の差料が、鞘走った。
髯の長兵衛の首が、血飛沫(ちしぶき)あげて、刎ねとんだ。
旅荒しの一団は、他客の部屋へ首を突っ込んで、しきりに大声をあげていた髯の長兵衛が、不意に、その首をうしなった胴体を、どさりと、廊下へ倒したので、
「おっ!」
「なんだ!」
と、むかいの広間で、総立ちになった。
いちが、とび出して来て、
「待って!」
と、両手をひらいたが、一団は、もはや、いちなどには、目もくれなかった。
「何奴だ?」
「出ろっ!」
「たたき斬ってやるっ!」
口々に呶号しながら、廊下へふみ出して来た。
いちが、ふりかえって、
「若様! にげて――にげて、下さいませっ!」
と、絶叫した。
そのいちを、一人が、はねのけて、杉戸を、蹴倒した。
奈良義太郎は、平然として、部屋のまん中に立っていた。
「うぬは、何者だ?」
「何者でもよかろう。おのれら毒虫どもとは、いささか、身分がちがう者だ、とおぼえておけ!」
「ほざくなっ! 名を名乗れ、名を――」
「わめきたてるよりも、勝負がしたいのであれば、おもてへ出て、待って居れ」
「よし! うぬが――にげるなっ!」
「ひさしぶりで、毒虫を斬って、心気爽快だ。あと幾人居る。のこらず、片づけてつかわすゆえ、覚悟して、待って居れ」
義太郎は、どうやら、この五年間を、いたずらにすごさなかったようである。充分の腕前に、おのれを仕上げているようであった。
旅荒しの一団を、おもてへ奔り出させておいて、義太郎は、
「いち、今夜の約束を、忘れるな」
と、笑った。
「若様!」
いちは、全身をおののかせた。
「対手は、二十人以上もいるのでございますよ」
「だから、斬り甲斐がある」
「そ、そんな……」
「ははは……、いち、わしは、むかしのわしとは、チトち

がうぞ。五年間、風雪をしのいで、心身をきたえぬいた。合戦にも、十余たび加わって、無数の敵を斬った。……あいつらを、片づけるくらい、造作はない」
「でも……、対手がただって、人殺しにはなれている者たちですよ」
「心配するな。……今夜の約束だけを、忘れるな」
そう云いのこすと、義太郎は、悠々と、梯子段を降りて行った。
奈良義太郎と旅荒し二十余人との決闘は、宿はずれの明神祠の境内が、えらばれた。
境内といっても、塀は崩れ、雑草がしげり、御手洗は倒れ、松も三四本立枯れている荒涼たる景色であった。
義太郎は、さきに到着して、布陣した旅荒したちを、眺めやって、なんのためらうところもなく、ゆっくりと、進み入った。
と――。
一人が、義太郎の正面へ出て、
「口上、ひとつ」
と、云った。
「なんだ？」
「お主がもし、大庄山へおもむき、その父奈良城義胤に、伊吹野の百姓に、加えて居る塗炭の苦しみを、除いてやるように忠告するならば、この決闘を延期してやってもよい」
「わしの父が、百姓たちに、塗炭の苦しみを与えている？なんだ、それは？」
「おのれは、一度、伊吹野を歩いてみろ。一滴の水もないぞ」
「それがどうした？」
「大庄山の竜神湖には、湧き水が、満々とたたえられて居るぞ。あの水を、渓谷に落してみろ。伊吹野は、明日にも、田植えができるのだぞ」
「竜神湖の水を、ほせと申すか」
「そうだ。奈良城義胤は、かつて、名君と称されたこともあるぞ。しかるに、いまは、鬼畜だ」
「……」
「伊吹野は、飲み水さえも節約して居る。しかるに、大庄山には、太古から涸れたことのない水が、一望見はるかす広い湖に湛えられて居る。……伊吹野を奪われたからといって、百姓までも苦しめてよいのか。鬼畜でなくて、なんだ？」
「それだけの正義心があるならば、お主ら一同、大庄山へ行って、城主を説き伏せたらどうだ？」
「嫡子であるおのれこそ、説得する義務があるぞ」
「父は父、わしはわしだ。……怯じ気づいて、延期を申し出たか」
義太郎は、せせら笑った。
「怯じ気づいてだと！　おのれっ！」
正面の敵は、大身の槍をひとしごきして、じりじりと、肉薄して来た。

と同時に、二十余人が、抜刀しざま、円を描いて、義太郎を、包んで来た。
義太郎は、まだ抜かずに、すこしずつ、位置を移した。
旅荒したちは、義太郎の凄じい太刀筋を知っているだけに、容易に、襲いかかっては来なかった。
一瞬――。
義太郎は、猛然と、一角めがけて、身を躍らせた。
旋風（つむじ）のような迅さであった。
鞘走らせた早業も、目にもとまらぬものだった。
のみならず――。
血煙りをあげたのは、一人だけではなかった。
一人は、のけぞり、一人は、がくっと膝をついて、のめり込んだ。
義太郎は、一刀をつかんでいた。
「お主ら、こういうあんばいに、あの世へ行きたいか？」
旅荒したちの闘志は、一瞬にして、しぼんでいた。
義太郎は、一同の顔を見わたして、にやりとすると、一刀を、腰に納めた。
「旅荒しども。ただいまより、この奈良義太郎の家来となる。はっはっは……」
云いすてておいて、歩き出した。
その隙をうかがって、一人が、背後から、斬りつけた。
義太郎は、しかし、一歩も動かなかった。
しかし、次の瞬間、一同が視たのは、義太郎の小刀で胸を刺された仲間の、惨めな姿であった。
義太郎が、小刀をひき抜くと、口からどっと血汐を吐いて、仆れた。
義太郎は、ひとつひとつの顔を見まわして、
「家来になるのを承服できぬ者は、まだ、いるか？」
沈黙が、もはや、抵抗の意志のないことを示した。
義太郎は、境内を出ようとして、そこに、牢人者が、うっそりと立っているのを、見出した。
一瞥した刹那――。
義太郎は、全身に、異様な戦慄が走るのをおぼえた。
「お主は？」
義太郎は、眼光を刺した。
「決闘の見物に来た」
牢人者は、薄ら笑って、こたえた。
「ふん――」
義太郎は、二歩ばかり近づいた。
「ただの見物ではなさそうだな」
「そういうことだな」
「お主、兵法者か？」
「見れば、わかるだろう」
「わしと、たたかうのか？」
「おれは、強い奴に出会うと、見のがしはせん。……奈良城義胤の嫡子が、これほどの使い手であろうとは思わなかった。闘志がわいたぞ！」
「お主の名は？」
「九十九谷左近」

「よし！」
義太郎は、一刀を抜きはなつと、身構えた。
「来いっ！」
「……」
九十九谷左近と奈良城義太郎とのあいだには、殺気を盛りあげる沈黙が、つづいた。
尤も――。
殺気は、義太郎の方から、一方的に、左近にむかって、放射されていた。
左近の方は、だらりと、両手を垂らしたまま、義太郎が、いつ、攻撃して来るか、待っている。
強敵を発見した時の、猛獣が、しばらく、不気味な静止をつづけるのに、似ていた。
義太郎の背後に、旅荒したちが、寄って来たが、左近の目には、立木同様にしか、映っていなかった。
不意に、義太郎が、
「参るぞ！」
と、叫んだ。
叫ぶとともに、抜刀して、大上段に、ふりかぶった。
左近は、決闘の刹那に、湛える冷やかな微笑を、いまも、口辺に刷いた。
義太郎の長身が、地を蹴って、跳躍した。
旅荒したちは、あまりの凄じい激突に、声を発した者もあり、顔をつき出した者もあり、首を縮めた者もあった。
一瞬の、目にもとまらぬ激突のあとに、静止が来た。
そして――
静止によって、旅荒したちは、両者が、いかに迅業を用いたかを、みとめた。
義太郎は、大上段から、斬りつける刹那に、いつの間にか、それを左手で為し、右手には、小刀を抜いていた。
その猛撃をあびた左近は、右手に長剣を抜き持って、義太郎の真っ向からの白刃を受けとめ、左手で、小刀をつかんだ義太郎の右手の手くびをおさえていた。
そして、両者は、四つに組んだかたちで、静止したのである。
撃った義太郎の意外な迅業に対して、左近もまた、これを受けとめる見事な迅業を発揮したのである。
義太郎の双眼は、火と燃え、左近の眸子（ひとみ）は、氷のように冷たかった。
突然、
「止めて！」
鋭い、かん高い叫びが、とんで来た。
旅籠の娘いちが、息せき切って、走って来たのである。
「止めて！」
いちは、おそれずに、そばへ寄って来ると、叫んだ。
「どうする？」
左近は、にやりとして、問うた。
問われるまでもなく、義太郎は、この静止は、対手がしりぞかぬかぎり、おのれもしりぞけぬことを知っていた。

「引くぞ。……試合は、あらためて、やろう」
いちは、なお、呼吸をはずませながら、大股に歩く義太郎のそばに、つき添っていた。
「若様は、ほんとに、お強いのですね！」
「強くならねば、この乱世を生きては行けぬぞ」
こたえておいて、義太郎は、ふりかえってみた。
街道上に、遠く、九十九谷左近の後姿があった。
義太郎は、左近に、約束したのである。
「それがしは、大庄山の山城へ、戻る。試合は、そこで、やろう。待って居る」
義太郎は、父や家臣の前で、いかに、自分が強いか、それを、示したかったのである。
決闘の対手として、あの兵法者は、またとない強敵であった。
父義胤は、すでに、齢（よわい）六十を越えた老爺であり、すでに、伊吹野城を奪われた時から、一軍を率いる気力を失っている。五年経った今日では、さらに、弱っているに相違ない。
主人の座を、譲られるべきである。
義太郎は、その目的で、還って来たのであった。
「いち、一緒に、大庄山へ行くか？」
「え？」
いちは、義太郎の横顔を、仰いだ。
「わたしを、つれて行って下さるのですか？」
「お前は、勇気のある娘だ。わしのそばにいてくれるにふさわしいぞ」
「でも、わたしのような、旅籠の娘をおつれになれば、非難が起ります」
「かまわん。わしは、これまで、自分のしたいように、やって来た。これからも、やる！」
義太郎は、昂然と、云いはなった。
宿へもどって来ると、多勢の者が、寄り集って、さわいでいた。
いちが、たずねると、伊吹野城が、焼きはらわれてしまっているという。
「なに！」
表情を変えた義太郎は、伊吹野を通って来て、その惨状を見とどけた、と報らせた行商人のそばへ、つかつかと近づいた。
「それは、まことだな？」
「相違ありませぬ。去年、通った時は、美しゅうそびえていたお城が、あとかたもありませなんだ。こわごわ、近づいてみますと、焼け落ちていたのでございます。それも、ほんの二三日前、と思われました」
「田丸豪太夫を、攻め滅ぼす者が、現れたのか？」
「それが、妙でございます」
旅の商人は、首をひねりながら、
「城には、去年と同じ、旗が立って居ります。ご城主は、変らないように見受けました。……つまり、失火で、焼け

たのではございますまいか」

旅籠の一室にもどると、義太郎は、腕を組んだ。

――さて、これから、どうなる？

伊吹野城が、失火で焼けたにせよ、何者かの放火で炎上したにせよ、武器、兵糧が烏有に帰したのは、疑いを入れぬ。

田丸豪太夫は、その戦闘力を喪失しているに相違ない。撃つなら、いまである。

「やるか！」

義太郎は、顔をかがやかせた。

騎馬の群が、あわただしく、この宿に、駆け入って来たのは、この折であった。

義太郎は、はね立って、無双窓をひらいて、往還を見下した。

数騎ずつが一団になって、はやい勢いで、駆け抜けて行く。

「彼奴ら、伊吹野城の武者どもだな」

あきらかに、追われているようなあわただしい疾駆ぶりであった。

武器と兵糧を失った城を、見すてて行くのだ。

およそ、三百騎あまりが、あっという間に、通過して行った。

「田丸豪太夫め、手足をもがれたか！」

義太郎は、嘲笑した。

いちが、食膳を、はこんで来た。

「伊吹野城から、武者がたが、逃げて行くようです」

「豪太夫の命運は、尽きたぞ」

「いい気味でございます」

「しかし、待てよ」

義太郎は、首をひねった。

「もしかすれば、どこかの武将が、軍勢を伊吹野へ寄せて来て居るのかも知れぬぞ」

「……？」

「わしは、明日、伊吹野へ行ってみてやろう。状況を見とどけてくれる」

「危険ではないのでしょうか？」

「危険？　わしは、今日まで、数知れず、虎の尾をまたいで来たぞ」

云うなり、義太郎は、いちの手をにぎった。

「いち、よいな？　わしのものになれ」

「若様――」

いちは、手をにぎられたまま、

「お願いがございます」

「なんだ？」

「大庄山の湖の水を、伊吹野へ落して、百姓衆を、たすけてやって下さいませ」

「……？」

「田丸豪太夫は、もう、たたかう力がなくなったのですから、湖の水がなくなっても、攻めのぼっては来ないと思います」

気丈夫で、頭脳の働きのはやいこの娘は、義太郎に、わが身を提供するかわりに、条件を出したのであった。

「よし、約束してやろう」

「ほんとですね？　約束して下さいますね？」

「武士に二言はないぞ」

義太郎は、いちを抱き寄せた。

暴君狂乱

突如――。

血にまみれた者が、半焼けの女人館から、庭へ泳ぎ出て、のめった。

伊吹野城にどうにか住める程度に焼けのこっているのは、その女人館だけであった。

ふらりと、縁側へ現れた田丸豪太夫は、まさしく、悪鬼の形相であった。

槍をひっさげて、狂的に光るまなこを、虚空に据えて、

「どいつも、こいつも……」

と、吼え声をしぼった。

「逃亡をねらい居って――くそっ！　おのれらっ、出て来い！　一人のこらず、突き殺してくれる！」

すでに城内は、二百人にも足らぬ人数しかのこっていなかった。

焼けこげた木材をとりあえず組みたてた小屋をいくつか、建てて、住んでいたが、いずれも、もはや、この城にとどまる気持はなかった。

とどまっている理由があるとすれば、地下倉にたくわえられているであろう武器と兵糧に対する魅力にひかれてい

るからであった。
地下倉があることは、疑いを入れなかった。
しかし、そこに、どれだけの武器と兵糧が、たくわえられているのか、誰も知らなかった。
豪太夫は、庭へ降り立つと、槍を立てて、
「出て来いっ！　おのれら——、何をこそこそと、企んで居るかっ！」
と、呶号した。
豪太夫の目には、人影は、映っていなかった。
そこ彼処の物蔭に、家臣たちが、ひそんでいる気配がある。
豪太夫にとって、昨日までの家臣が、いまや、一人のこらず敵であった。
自分を視る目は、背信の小ずるい光しか持ってはいなかった。
豪太夫は、その目つきで視られると、我慢ならず、狂乱した。
すでにもう、十数人を斬りすて、突き殺していた。
まさに、荒城は、地獄図絵を描いていた。
しばらく、呶号をまきちらしていてから、豪太夫は、ふらふらと、館の中へ、もどって行った。
すると、あちらの物蔭、こちらの物蔭から、ぞろぞろと、士卒たちが、姿を現した。
「もう許せん？」
大声で云ったのは、旗本のうちでも重きをなしていた大場陣十郎であった。
「狂人を、主人に仰いで居るわけには参らん！」
「そうだ。討つのも、やむを得ぬ」
桜場勘助という若い近習が、応じた。
「おのおの——どうだ？」
陣十郎が、見まわした。
「異存はないぞ」
一人が叫び、
「今夜のうちにも——」
別の一人が、意気込んだ。
「よし——きまった！　北の出丸に、全員が集合だ」
「待った！」
不意に、すこしはなれた場所から、声をかけた者があった。
焼け落ち、つみかさなった材木の蔭から、のっそりと現れたのは、城内の者ではなかった。
忍びの装（なり）をしている。
一同は、気色ばんで、黙って、近づいて来た者を、睨んだ。
「かるがるしゅう、主人を殺すまいぞ」
枯草色の覆面のかげで、にやりとしてみせた。
「おのれは、何者だ？」
「見らるる通りの忍びの者」
「名のれ！」
「七位の大乗」

「なんだと？」
「おそれ多くも、京の御所にて、天子様を守護し奉って居った公卿忍者と知っておいてもらおうか」
「仰々しゅうほざくな！」
「田舎ざむらいどもには、きかせても、信用してもらえぬの」
「何が目的で、忍び入った？」
大場陣十郎と桜場勘助が、左右からつめ寄った。
七位の大乗は、一同の気色など、一向に意に介せぬ態度で、ぐるりと見わたし、
「よう焼けたのう。……合戦もせぬのに、城が焼きはらわれてしまったとは、あまりきいたこともない」
と、笑った。
「おのれ！　目的を云え！」
陣十郎が、呶鳴った。
「目的か——」
大乗は、おちつきはらっている。
「目的は、ない」
「なに！　目的もなしに、さまよい込んだと、ほざくか！」
「焼きはらわれた城に、未練たらしく、城主はじめ、お主らが、まだ、ごそごそと居残っているのは、みじめとも、あわれとも……」
云いおわらぬうちに、陣十郎が、凄じい勢いで、斬りつけた。
大乗は、かるがると、一間を跳んで、のがれると、
「むだに怒るものではない」
と、云った。
それから、語気をあらためると、
「手負い猪（じし）と化した主人を、暗殺しようと計るなど、人間の屑だぞ」
と、きめつけた。
一同は、しんとなった。
豪太夫は、一室に、大胡坐をかいて、酒をくらいはじめていた。
大瓶に、柄杓をつッ込んで、汲み出すと、口呑みにするのであった。
片隅に、小娘が一人、身を縮めて、控えていた。
逃げそこねた下婢であった。
みにくい顔だちで、土くさい。昨日までの豪太夫なら、目もくれなかった下婢である。
夜中、狂暴な欲情のにえにしているだけで、昼間は、酌をさせる気にもならぬ。
豪太夫は、ギラギラと光る双眸を宙に据えて、酒をがぶ飲みしているうちに、意味をなさぬ唸り声をたてはじめた。
この惨めな状態が、どう考えても、あり得ぬことに思われるのだ。
華々しい一戦を展開し、武運われに利あらずして、敗退したのであれば、勝敗は兵家の常で、あきらめることもできる。

神矢城からの献米使者と称する木菟入（ずくにゅう）に、まんまと一杯くわされて、城外へおびき出された隙に、城を焼かれてしまったのである。
なんとも、やり場のない無念、憤怒、痛恨であった。
当の木菟入は、何処かへ、姿をくらましてしまったのである。ひっ捕えて八つ裂きにしてくれれば、多少腹の虫もおさまるかも知れぬが、それもかなわぬ、となれば、家臣どもに、あたり散らすよりほかはなかった。
その家臣どもも、櫛の歯を挽くがごとく、逃亡して行っているのである。
――あり得ることか！
と、おのが悲運を、信じがたいのも、むりはなかった。
と――。
廊下に、黒い影が立った。
豪太夫は、まだ気づかずに、柄杓を口へはこんでいた。
「だいぶ、ご乱心のていにお見受けつかまつる」
声をかけられて、豪太夫は、
「なに！」
と、頭をまわした。
「おのれは、なんだ？」
「お忘れとは、なさけのうござる。七位の大乗でござる」
大乗は、おそれず、豪太夫の前に、進んで来て、正座した。
「火事泥棒に参ったか、下忍め――」
「お言葉でござるが、それがしは、おなぐさめに参上いたしたのでござる」
「おのれ、田丸豪太夫を、あざけるかっ！」
豪太夫は、たちまち、殺気をみなぎらせた。
「そう、見さかいなく、憤激なさるものではござらぬ」
大乗は、おちつきはらっていた。
「うるさいっ！ 下忍、早々に立去れっ！」
豪太夫は、呶号した。
「はは……、そのように、いたずらに、殺気立つものではござらぬ」
大乗は、わざと、おちつきはらって、笑った。
豪太夫は、いきなり、槍をつかんで、びゅっと、突き出した。
大乗は、耳朶すれすれに、流しておいて、平然としている。
豪太夫は、睨みつけているうちに、ふっと、直感するところがあった。
「下忍――、おのれは、城に放火した曲者めを、知って居るな？」
「存じて居り申す」
大乗は、即座にこたえた。
「叡山入道と称した木菟入の正体は、なんだ？」
「曾ては、禁廷の近衛兵十万を率いて、京畿におし寄せる諸国の軍勢を、四方に撃破した稀代の軍師でござる」
「……」
「たまたま、この伊吹野を過ぎようとして、土民の窮状を

眺め、さらば、とばかり、当城に蓄えてある米を、奇策をもって、奪いとって、わかち与えたものでござる。孔明、正成にまさるとも劣らぬ軍師の智能の前には、いかに勇猛の殿といえども、小児のごとく、手をひねりあげられたのは、やむなき仕儀でござった」
豪太夫は、呻いた。
「彼奴は、何処にいる？」
「もはや、数十里のさきを、飄々乎として、旅をされて居るものと存ずる」
「くそっ！」
豪太夫は、まなじりをひきつらせて、さらに凄じい唸り声を発した。
大乗は、冷やかに、豪太夫を、見まもりながら、
「さて――」
と、態度をあらためた。
「それがしが、うち眺めたところ、殿は、いうなれば、荒野に飢えて咆哮する猛虎でござるな」
「それがどうした？」
「ただ、いたずらに、ほえたててみたところで、それは、いよいよ、空腹を増す作用でしかござるまい」
「下忍ずれが、こざかしゅう、説法いたすか」
豪太夫は、吐き出したが、大乗の云うことはたしかにその通りであったので、語気から、憤りは減じていた。
「ひとたびは、この伊吹野を制圧された猛将である殿が、これしきの悲運に、逆上されるのは、おなさけない。……ここが、思案のしどころかと存じます」
「ええい、いったい、どうせい、と申すのだ？」
豪太夫は、いら立ちながら、呶鳴った。
大乗は、微笑しながら、
「ここに、再び、以前にまさる城を築くためには、まず、残留いたして居る家来らに、城主たる者の威力を示してやらねばなり申さぬ」
「それぐらいのことは、おのれに忠告されずとも、判って居る」
「では、うかがい申すが、残留いたして居る家来らは、自分に畏怖するがゆえである、とお思いでござろうか？」
「ふん――」
豪太夫は、あたりまえではないか、という表情をした。
「とんでもないお考えちがいでござる」
「なんだと？」
「家来らは、殿を畏怖して、とどまって居るのではござらぬ。地下倉に、なお、武器、兵糧が、充分蓄えられてある、と信じて居るからでござる」
「……？」
「それがしが、忍び入って参ると、家来らは、殿が狂気されたものと、みなし、今夜うちにも、弑逆（しいぎゃく）し……」
「なにっ?!」
豪太夫は、血相変えた。
「そ、それは、まことかっ！」

「おちつかれい！　殿には、もはや忠義だての臣は、一人もいないのでござるぞ。家来全員をむこうにまわして、どれだけのたたかいがなされるものぞ。それよりも、叛かんとして居る家来らを、いかに、翻心させ、信頼させるか――その智謀こそ、城主として、めぐらすべきでござろう」
「……」
「第一に、なすべきは、地下倉に、どれだけの武器、兵糧が蓄えてあるか、きかせて、安堵させることでござろうな」
「ふん――」
　豪太夫は、自嘲した。
「地下倉か――、なるほど、この城には、途方もなく広い地下倉が、設けられて居るぞ」
「それがしも、噂で、きいて居り申した」
「だが、矢一本、米一粒も、ありはせぬぞ！」
「え？」
　大乗は、愕然たる表情をつくった。
　内心では、にやりとして、
――やはり、そうか。
　と、合点していた。
　大乗は、天満坊から命じられて、地下倉にはたして、どれだけの蓄えがあるか、つきとめに来たのである。
「五年前、わしが、乗り込んで参った時、すでに、地下倉は、空であったわ。奈良城義胤め、城を奪われるのを予想して、ひそかに、大庄山へはこび去って居ったものよ。……どうじゃ、下忍。地下倉が空と知った家来どもが、黙って、とどまって居るか？　地下倉に、おびただしゅう、武器も米もあると思わせておけばこそ、なお、とどまって居るのではないか」
「わかり申した」
　大乗は、大きくうなずいてから、
「地下倉に、矢一本米一粒もない、となれば、殿として、早々に、なさるべきこと――唯ひとつ」
「なんだ？　どうせよ、と申すのだ？」
「城兵どもに、士気をふるいたたせる手段を講ずべきでござる」
「士気だと？」
「左様、坐して飢えるよりも、手に唾して宝を取るべし――殿、目を挙げて、大庄山をごらんあれ。奈良城義胤が拠る山城には、当城に蓄えてあった宝が、一杯あふれて居り申す」
「ふむ！」
　豪太夫は、にわかに、眼光を鋭いものにした。
　大乗に云われてはじめて、大庄山の山城のことに、気がついたのである。
　大庄山へ追い上げてしまった奈良城義胤など、もはや、なんのねうちもない存在だとばかり思っていた豪太夫である。
　豪太夫が、伊吹野城を奪って五年、義胤は、大庄山の頂上で、息をひそめて、くらしているかとみえたが、大乗に

云われてみれば、息をひそめているのではなく、武器も兵糧もありあまって、悠々とすごしていたのではないか、と思える。
　下界に起るさまざまの異変を、眺め下しながら、捲土重来の時節を、うかがっているのではあるまいか。
　いずれ、義胤は、伊吹野城が灰燼に帰したことを知って、嘲笑するであろう。
　そして、直ちに、奪還の手筈を、ととのえるかも知れぬ。
　いや、もう、いつでも、山を駆け下ることができるように、兵備は成っているかも知れないではないか。
　豪太夫は、
「よし！」
　と、叫んだ。
　片隅に控えた娘をふりかえると、
「大場陣十郎を、呼んで参れ」
　と、命じた。
　大乗は、豪太夫を見まもりながら、
――こんな単純きわまる野人が、よくも、五年もの間、城主でおさまっていられたものだ。
　と、なかば、あきれていた。
　こちらの思う壺にはまってくれるのだ。
　戦乱を生き抜く武将たちは、もっと猜疑深く、対手の肚の裡を読むのが、すばやいものである。
　豪太夫も、人を信じないことに於ては、人後に落ちぬかも知れぬが、巧妙な策にのせられることでは、少年のように単純にすぎる。
　大乗が、そそのかしたのは、大庄山を攻めるには、いかなる手段があるか、それを、調べたかったのである。
　大場陣十郎は、一人だけでは、現れなかった。
　桜場勘助以下、十人あまりをひきつれて、庭をまわって、近づいて来た。
「ご用でござりますか？」
　要心をおこたらぬ表情で、主君を、視た。
　豪太夫は、叛こうする家臣らを眺めると、にわかに憤怒が、こみあげて来た模様であったが、あらたな目的の前に、それを抑えた。
「一同の中に、大庄山の地勢にくわしい者が居るか？」
　豪太夫は、大声で、問うた。
「居るならば、進み出て、こたえい」
「お調べなされて、なんとなされます」
「きけ！」
　豪太夫は、にやりとして、
「奈良城義胤がこもる山城には、武器も兵糧も、山とあるぞ。義胤を撃ち滅ぼして、これを奪う。同時に、山頂の湖水を渓谷に落して、伊吹野へ引いてくれる。されば、農夫どもは、狂喜して、田植えをいたすであろう。人心収攬に、この上のてだてはあるまい。この挙が成れば、伊吹野城は、昔日をしのぐ偉容を再現いたすぞ。どうだ？」
　一石二鳥の妙計に、家臣たちも、顔面をかがやかせた。
と――。

「それがし、申上げまする」
日村弘達という人物が、名のり出た。かなりの年配であった。
以前は、奈良城義胤に仕え、伊吹野の代官をつとめていた人物であった。
「それがしは、十年あまり、横目として、四方の地勢をくわしく、踏査つかまつった者でござる。……大庄山の地勢も、くわしく記憶つかまつります」
「どうだ、難路か？」
「難路と申すもおろか、木樵、猟師といえども、登ることは、叶いますまい」
「義胤は、家来をひきつれ、武器、兵糧をはこび上げたぞ」
「その道は、すでに、ふさがれて居ります」
「ひらけばよかろう」
「ひらくのは、不可能かと存じます。なぜならば、旧主は、山にくわしい者たちをのこらず、ひきつれて、登りましたゆえ、道をふさぐのに完璧であったと存じます」
「その道ひとつしか、ないのか？」
「ございませぬ」
「ふむ！」
豪太夫は、腕を組んだが、急に、荒々しく、
「わしの経験によって物云うぞ。山というものには、必ず、人道のほかに、けものの径が通じて居る！　けものが通って、人間が通れぬはずはないぞ！」
と、叫んだ。
豪太夫の言葉は、たしかに、勇気のある、堂々たるものだった。
けものの径が通じている限り、そこを登ることは、不可能ではない。家臣一同は、主君の断言に、そんな気持になった。
日村弘達は、ちょっと、俯向いて、考えていたが、
「しばらく、お待ち下さいますよう——」
と、ことわって、下って行った。
「七位の大乗——」
豪太夫は、昂然と、胸をはった。
「やるぞ！　大庄山の山城を攻め落すぞ！」
「けもの径を、行かれますか？」
「けものが通る径を、人間が通れぬわけはなかろう」
「それがしには、ただの険路とは、思え申さぬ」
「どんな障害があると申す？」
「さあ、それは、それがしにも、想像がつき申さぬが、たぶん、意外の障害が、待ち伏せて居るに相違ござるまい」
「この田丸豪太夫に、それが突破できぬ、と申すか。笑止！　みて居れ。わしは、ただの五十騎もあれば、いかなる難関をも突破してみせてくれる。これまでが、そうであった。わずか十騎あまりで、五千の敵兵を蹴ちらしたこともある。百姓に化けて、敵地二十里を通り抜けたこともあるぞ。なるかならぬかは、度胸ひとつだ。……大庄山へ登ることが、なにほどの難事か！」

豪太夫は、うそぶいた。
ほどなく、日村弘達が、大きな絵図面を持参した。
さいわいに、焼けのこった根小屋に、しまってあったのである。
弘達は、豪太夫の面前に、それをひろげた。
「ごらん下さいませ」
弘達は、扇子をもって、説明しはじめた。
大庄山は、伊吹野随一の深山であった。南北朝の頃までは、霊境として、地下（じげ）の人々も、近づかなかった。
麓は、すべて、密林であり、檜、樅、栂（とが）、松など。竹藪も多かった。
曾て、木樵の入ったことのない密林なので、ものの一丁も、踏み込むことは、かなわぬ。
密林の彼方に、奇怪なかたちをした巨巌が、そびえているのが、望まれる。およそ、そこまで四里と、測れる。
その巨巌の後から、三丈ばかりの滝が西方へ落ちている。
この瀑布は、山澗より、巌をつたい、ただ、布をさらすがごとく落ちていた。雲飛んで、素練をたれ、石にむせびて明珠を散らす、という壮快な眺めであった。
しかし、それも、五年前のことで、いまは、水は涸れてしまっている。
山頂の湖水の口が、閉ざされたからである。
その五年前には、瀑布のかたわらを、桟道が通って居り、大庄山へ登る唯一の道筋であった。
もとより、瀑布まで至る山路は、険難をきわめている。
すべて、岨（そば）づたいに行くかけ路であった。その路も、断崖によって、しばしば、遮断され、木を伐り渡してならべ、藤かずらでからめて、辛うじて、人一人通れるあんばいであった。
巌と巌とをつなぐ桟道も、すくなくなかった。
奈良城義胤は、岨路を崩してしまうと同様に、桟道をも落してしまっている。
いまや、全く、道は、喪失しているのであった。
なお、瀑布の上は、日村弘達も、踏み込むことが、かなわずに、どのような地勢になっているのか、見当もつかなかった。
「のみならず……」
弘達は、俯向いて、告げた。
「滝は、むかしより、修験道の霊場と相成って居り、そこに修行した者たちが、そのまま、とどまって、山賤（やまがつ）となり、この世ならぬ修場をつくっている模様にて、常人が近づけば、直ちに、追い落す気配がございます」
かりに、岨路をひらき、桟道を架けて、滝まで辿りついても、そこに集っている山賤の一団に、襲われて、渓谷へ突き落されることになるのである。
「渓川は、水が涸れているのであれば、そこを登れぬのか？」
大場陣十郎が、たずねた。
弘達は、かぶりを振った。
「渓川は、大岩の累積で、それを進むことは、人間業では

為し得ぬ、と存ずる。よしんば、進み得たとしても、これを、山城で知れば、一挙に、水を落して参るでござろう。そうなれば、全員が、濁流に呑み込まれてしまうことに相成ります」

「よし、その道が登ることの不可能は、判った。……木樵路を、示せ」

豪太夫が、苛立って、叫んだ。

弘達は、当惑しつつ、おそらく、そうではなかろうか、と推測される木樵路を、扇子で、引いてみせながら、それが、いかに、危険な通行になるか、説明した。

すなわち。

いたるところに、毒蛇をはじめ、人間を襲うおそるべき生きものが、棲息していることであった。

木樵路がある、といっても、これは、霊域を冒す木樵のかくれ路なので、常人が、さがしさがし辿ることは、不可能に近いわざであった。

一同は、弘達の説明がすすむにつれて、絶望感を深くした。

豪太夫自身も、けものが通って、人間が通れぬことがあろうか、とうそぶいた時の意気が、しぼんで来た。

しかし、いま、絶望の声をあげることはできなかった。

「弘達——」

豪太夫は、にらみすえて、

「兵十名を与える。木樵路をさがして参れ！」

と、云った。

「それがしには、できかねまする」

弘達は、こたえた。

「なぜ、できぬ？　おのれを除いて、ほかに、さがすことができる者が居るか」

「戦場において、馬前に仆れるは、武士たる者の面目なれば、生命を惜しむものではありませぬが、毒蛇、毒虫に嚙まれて相果てるぶざまには、それがしは堪えられませぬ」

「大庄山を攻め落すためには、やむを得ぬぞ！　行け！」

「おことわりつかまつります」

「命令だ！　肯かねば、討ちすてるぞ！」

豪太夫は、いきなり、抜刀した。

弘達は、とっさに、はね起（た）って、遁げようとした。

「こやつ！」

豪太夫は、その背中へ、一閃を唸りおろしたが、わずかに、とどかなかった。

「殿っ！」

大場陣十郎が、太刀を鞘ごと突き出して、さえぎろうとした。

瞬間——。

「じゃまするなっ！」

豪太夫は、吼号とともに、横なぐりの一撃を、陣十郎へ、くれた。

「うわっ！」

顔面から血噴かせた陣十郎は、かたわらの桜場勘助へ、倒れかかった。

「殿っ！　狂気されたかっ！」

勘助が、叫んだ。

「うぬも、抗（あらが）うかっ！」

豪太夫は、血ぬれた白刃をふりかぶった。

家臣たちは、総立ちになって、身構えた。

豪太夫は、ひとつひとつの顔を、睨みまわして、

「どいつも、こいつも、恩を忘れた犬畜生どもめ！　叛くならば、叛いてみろ！」

と、喚いた。

その座から、いつの間にか、七位の大乗は、姿を消していた。

豪太夫が、女人館で、荒れ狂っている頃には、大乗は、すでに、遁げ出した日村弘達をつかまえていた。

「お主に、話がある」

大乗は、微笑しながら、

「ついて来てもらおうか」

と、うながした。

「何者だ？」

「七位の大乗——と申しても、わかるまい。この城を焼きはらった叡山入道と称した天下一の軍師にたのまれて、やって来た者だ。……お主を、軍師の許へ案内いたす」

けもの路

大庄山が長く裾を曳いた伊吹野北隅は、漆黒の帯を巻いたような密林のつらなりであった。

遠望しただけで、そこは、人跡未踏と判る。近づけば、野との境の巨樹の高梢が、怪奇なまでに、天をするどく刺している。

よほどの勇気がなければ、踏み込むことは、かなわぬ。その境に沿うた岨道を、いま、ひとつの人影が通って行く。

奈良城義太郎であった。

いちと一夜をともにして、なんの未練気もなく、その宿駅をすてて来た義太郎であった。

密林が、すこしくびれ込んで、そこだけ、松の疎林がつくられている地点で、義太郎は、木立の奥をすかしみた。

「ほう——まだ、いるな」

義太郎は、うなずいてから、大股にふみ込んだ。

ものの十歩も、すすんだ時、不意に、横あいから、褐色のけものが、宙を躍って、義太郎に、襲いかかって来た。

身を沈めざまに、義太郎は、抜刀した。

しかしすぐに、白刃を腰に納めると、

「おどかすな」
と、云った。
木立の薄闇の中に、鋭いまなこが、いくつか、光っていた。
山犬どもである。
一疋を斬れば、血のにおいに狂って、四方にひそむかれらが、一斉に、攻撃して来ることに気がついて、義太郎は、おのれを抑えたのである。
義太郎は、ゆっくりと進みつつ、左から、右から、宙を跳んで来る山犬どもを、頭上にかわした。
山犬どもは、ただ、しきりに、義太郎を、脅してみるだけであった。
もし、これに対して、抵抗の気色をみせれば、たちまち、狂暴な攻撃力を発揮して来るに相違なかった。
無視して、平然として進むのが、安全であった。
木立の奥に、草庵があった。
義太郎が、その前に立った時、山犬どもは、いつの間にか、遠くへしりぞいて、ひそと、ひそんでしまった。
「たのもう」
義太郎は、大声で、案内を乞うた。
しばらく、なんの返辞もなかった。
「いないのか？」
失望の色を、顔にうかべて、戸口へ一歩寄った時、不意に、
「修業が足らぬの、若――」
頭上から、声が、かかった。
義太郎が、仰ぐと、この草庵のあるじは、屋根の上に寝そべっていた。
おそろしく醜い貌をした、鍋底のように皮膚の黒い男であった。筒袖に、軽衫（かるさん）をはいていた。
「そこで、何をしているのだ、黙兵衛？」
義太郎は、問うた。
屋上の男は、やおら、起き上ると、両手を高だかとさしのべて、大あくびした。
「べつに、何もいたしては居り申さぬ。午睡の最中でござった」
「相変らず、変ったやつだ」
義太郎は、苦笑した。
奇人であった。人間とは一切没交渉なくらしをしている。どこから流れて来て、ここに住みついているのか、誰も知らぬ。
特技は、狂暴なけものを、手なずけることであった。
山犬も熊も、鹿も猿も、この男の手にかかると、家畜のようにおとなしくなるようであった。
また、どうやら、忍びの術も心得ているらしい。
屋根の斜面を、するすると、すべって、とんと地上に降り立った軽やかなわざは、常人のものではない。
「入られませい」
黙兵衛は、庵内に招じた。
火のない囲炉裏のそばに、小さな猿が、ちょこんと坐っ

ていたし、屋根裏の梁にも、栗鼠が二匹、とまっていた。
黙兵衛が、あぐらをかくと、小猿は、その膝に乗った。
「五年のあいだに、伊吹野は変ったようだな」
義太郎が云うと、黙兵衛は、さもばかばかしいといった首のふりかたをして、
「三年も雨が降らなければ、変りもいたすわい。百姓らは、よう生きて居る」
「大庄山には、水があるそうではないか」
「たっぷりとな」
「その水を渓に落さなければ、父上も、恨みを買おう」
「そういうわけでござるな」
「今朝、城を眺めて参った」
「焼きはらわれたようでござるな」
「あとかたもない。……しかしまだ、田丸豪太夫は、住んでいるようであった」
「兵は、三分の一も、のこっては居り申すまい。兵糧がなくなってはな」
「兵糧も焼けたか？」
「いや――」
黙兵衛は、かぶりを振った。
「百姓どもが、盗み去った模様でござる」
「では、城を焼いたのは、土一揆のしわざか？」
「そんなところでござろうな」
「田丸豪太夫が、むざむざ、土一揆にしてやられるとは、考えられぬが……」
「一人、秀れた軍師が指揮すれば、戦さずれした雑兵どもよりも、百姓たちの方が、はるかに、手足のごとく使えるものでござる」
「軍師だと？」
「左様、軍師がな」
黙兵衛は、にやりとした。
「軍師が出現して、百姓らに、味方した、というのか？」
義太郎は、眉宇をひそめて、たずねた。
「あの夜、なにやら、さわがしい空気が、城の方からつたわって参ったので、のこのこ、出かけてみ申した。……ははは、田丸豪太夫ともあろう猛将は、なんともはや、ぶざまきわまる醜態でござったな」
「どうした？」
「二千あまりの百姓どもが、旗やら幟やらをかかげて、軍勢とみせかけたのでござる。尤も、その布陣ぶりは、遠方から望めば、いかなる者の目にも、軍勢と映り申した。これは、よほど軍略を心得た者が指揮をとっていることは、明白でござったな。城兵どもが、騒ぎたて、城主田丸豪太夫も、錯覚を起したのは、当然でござったろう。おろかしくも、豪太夫は、城兵全員を率いて、城をとび出した、と思いなされ。その隙に、城内から、火が噴き申したな。……思うに、城内には、すでに、正体をかくした曲者が、乗り込んで、城主をたぶらかしていたのではござるまいか。多分そうでござったろう」
「お主のことだ。その曲者の正体をつきとめたであろ

う？」
「事のついでござるからな。空城を襲ったのは、百姓千人あまり。これを統率し指揮したのは、坊主でござったな」
「その坊主？」
「坊主、実は、それがしが、よく知っている人物でござったな」
「何者だ？」
「天満坊という通称を持つ乞食坊主。と申しただけでは、お判りになるまい。曾て、禁廷を守護する北面の武士を率いて、京洛に押し入ろうとする東海、北陸連合の大軍勢を、近江の野にひきつけて、縦横むじんに蹴散らした謀将でござるわ。一兵も持たず、百姓のみを使って、城を焼きはらったとは、流石に、天満坊でござった」
「どこに居る、そやつ？」
「公卿館に身を寄せて居り申すな」
「公卿館だと――。その坊主、泰国清平に味方いたして居るのか」
「そうらしゅうござるな」
「泰国清平は、すでに、おいぼれているはず。兵もたくわえては居らぬ。伊吹野城に反抗する気力などあろうと思えぬが……」
「乞食坊主が、ぶらりと現れて、伊吹野の惨状を眺め、ひとつ、乗り出してくれよう、とほぞをかためたものに相違ござるまいな。……田丸豪太夫が、逆立ちしても、とても、天満坊の智慧に及ぶものではござらぬ。それが証拠に、逆上した豪太夫は、翌朝、公卿館へ、おしかけ申したが、いかなる巧妙な策に乗せられたか、すごすごと引き上げ申したな」
「天満坊という奴、小面憎いな。ひとつ、公卿館へ、乗り込んでくれようか」
「お止めなされ。むだでござるて――」
　黙兵衛は、薄ら笑った。
「それよりも、若は、どうして、この伊吹野へ、もどってござったな？」
　黙兵衛は、たずねた。
「伊吹野は、わしが、生れ育った故郷だ。もどって参るのは、あたりまえではないか」
「さむらいに、故郷を恋う心などあってはなるまいが……」
「恋うて、もどって来たのではない。城をとりかえすためだ」
「天佑神助でござったな。若がもどられるのを待っていたごとく、城は炎上し、田丸豪太夫は、どうやら鋏をもぎとられた蟹といったあんばいでござる」
　黙兵衛は、にやにやした。
「皮肉か――」
　義太郎は、にらんだ。
「田丸豪太夫は、鋏はもがれても、まだ、七八本の脚を持って居りますぞ。若が単身をもって斬り込んで、敵うものではござるまい」
「大庄山へ行き、父を説く」
「ほう……、お父上と妥協されるか」
「あざけるか！」
「あざけりはいたさぬ。しかし、父上が、はたして、若に家来を貸して下さろうかな」
　奈良城義胤は、その六十年の生涯において、自ら合戦を起したことは、一度もない。城を攻められたことは、二度。一度は、ほとんど山賊野伏の群であったので、これを追いはらうのは、さして困難ではなかった。二度目の攻め手が、田丸豪太夫であった。
　戦乱の世に、三十余年も、平和なくらしをつづけて来られたことが、奇蹟に近いことだったが、それというのも、義胤が闘争をきらう君子人であったことが、諸国にきこえていたからであろう。伊吹野だけは、攻め取るべき国ではない、と武将らは、あたかも、互いに禁域の約束を守るかのように、伊吹野へは、兵馬を入れなかったのである。
「父が、兵を貸さねば、父を押し込めても、わしはやる！」
「お伝えしなければなり申さぬが、お父上は、若が知って居られる五年前の父上ではござらぬ。平和な城の頭領でおわした頃は、温厚な君子人でござったわな。ところが、いまは、極度な臆病を生じられ、田丸豪太夫をおそれること、疫病神のごとしでござる」
　伊吹野ひろし、といえども、大庄山へ登って、奈良城義胤と時おり会っているのは、黙兵衛ただ一人であった。
　したがって、黙兵衛だけが、大庄山の山城の消息を伝え得るので、義太郎は、たずねて来たのである。
「もうろくされたのか？」
「まずはな」
　黙兵衛は、かぶりを振ってみせた。
「よし！　それならば、奈良城家は、わしが受けとって、当主となるぞ」
　義太郎は、云いはなった。
　黙兵衛は、薄ら笑った。
「それは、かなうまい」
「黙兵衛、忠告ならば、むだだぞ」
「忠告ではござらぬ。……若は、どうやって、大庄山へ登られるおつもりかな？　すでに、ただひとつの道は、父上によって、ふさがれて居り申すぞ」
「それを知って居るから、ここへ、たずねて来た」
「ほう……、この黙兵衛に、案内役を命じられるおつもりかな」
「そうだ。たのむ！」
「ごめんを蒙り申す」
「なぜだ？　お主以外に、大庄山を登り得る者は居らぬ。……岨道を、案内してくれ」
「岨道すらも、大庄山は、消されて居り申すて」
「しかし、お主は、時おり、登って居るのであろう？」
「けもの路を、さがしてな」
「そのけもの路を、案内してくれ」

「おことわり申そう」
「お主に登れても、わしには、登れぬ、というのか？」
「そういうわけでござるな」
「ばかにするな！」
義太郎が、吼鳴った。
「ご立腹の模様だが、若が、忍びの術を修得されて居らぬ、と申して居るのではござらぬ。……若は、けものにはなれぬ、と申して居る」
「けものに？」
「左様——、けものにな」
「どういうのだ、それは？」
「人間であっては、大庄山の頂上に至ることは、不可能でござる」
「人間が、けものになれるか！」
「この黙兵衛は、けものになれ申す」
黙兵衛は、そう云うや、ひくく、口笛を吹いた。
とたんに、入口から、山犬が三疋、のそのそと入って来た。
「若は、こいつらを、追いはらうことが、でき申すか？」
「……」
「ふふふ——」
黙兵衛は、笑い声をたてた。
それから、山犬どもにむかって、片手をふった。
山犬どもは、すごすごした恰好で、出て行った。
義太郎は、黙兵衛の無造作な手ぶりが、山犬どもを自由にあやつれることに、おどろいた。
「黙兵衛、お主が案内に立ってくれれば、けものどもを、追いはらうことができるではないか」
「けものは、追いはらえるかも知れ申さぬが、蛇だとか、百足だとか——毒虫どもを、追いはらうすべは、それがしにもござらぬ」
「お主は、毒蛇にも、百足にも、噛みつかれぬ、というのか？」
義太郎は、猜疑の視線を据えた。
「けもの同様に、からだをきたえて居り申すのでな」
「どうしても、わしを、大庄山へつれて行けぬ、と申すのか？」
義太郎は、殺気立った。
「まあ、おちつかれい」
黙兵衛は、脇の小瓶（こがめ）から、ひとつかみ、粟をとり出すと、床へまいた。
すると、土間の上の梁にとまっていた六七羽の小鳥が、嘻々とはばたいて、飛び降りて来ると、せっせとついばみはじめた。
黙兵衛は、そのさまを眺めながら、
「若——」
と、呼んだ。
「山上に籠ったお父上は、もはや下界とは無縁に相成った癈人同様の御仁でござる。あのままで、そっと、あの世へお送りいたしたら、いかがでござろうな？」

「……」
「お父上に従って行った家臣らも、五年も、山籠りをいたすうちに、どうやら、腰抜けに相成った模様でござる。もはや、原野へおろして、馳駆せしめることは、むつかしかろうと存ずる。……使いものにならぬ家来どもを、お父上から借りて、叱咤してみたところで、焼城ひとつ奪うこともおぼつかぬでござろうて」
「黙兵衛！」
義太郎は、まなじりをひきつらせた。
「わしを、大庄山へつれて行きとうない理由が、ほかにあるのであろう？」
「猜疑深いのう」
黙兵衛は、ばからしげに、かぶりを振って、腰を上げようとした。
瞬間——。
義太郎は、抜く手もみせぬ凄じい抜き討ちをくれた。
間髪の差で、黙兵衛は、はね退（の）くと、
「ほう——腕の方は、相当なものになられたの」
と、云った。
「黙兵衛！　わしを、山城へつれて行け！」
義太郎は、絶叫した。
「なんともはや、人の云うことを、きかぬ若者じゃて——」
「おう、きかぬぞ！　わしは、山城へ行って、当主となるのだ。当主となって、再び、伊吹野へ現れ、田丸豪太夫の首を刎ねてくれるぞ！」
義太郎の双眼は、狂的に光った。
「登る途中で、毒虫に噛まれて、犬死されても、よろしいのかな？」
「毒虫ごときに噛まれて、果てるような奈良城義太郎か！」
「生身というものは、意外に、もろいものでござるがの」
黙兵衛は、この言葉を、しみじみとした口調で云った。
ところで——。
公卿館に於ては、七位の大乗がともなった日村弘達を、前に据えて、天満坊は、きわめてのんきな表情をしていた。
実は、天満坊は、弘達にむかって、田丸豪太夫と同じ質問をしたのである。
弘達もまた、豪太夫に対してこたえた言葉をくりかえした。
にも拘らず、天満坊は、にこやかに、
「ああ、なるほど……、大庄山征服は、いささか、面倒かな」
と、云った。
「面倒どころではござらぬ。不可能と申さねばならぬ。第一、たとえけもの路にもせよ、これを発見できれば、まだしも、登り得る可能も生じましょうが、さがし出す者が居り申さぬ」
「伊吹野に、猟師は、一人も居らぬ、と云われるか？」
「猟師も木樵も、一人のこらず、旧主が、大庄山の山城へ、

ともない申した」
「さて、困ったわい。お手前は、案内役は、まっぴらだと申されるしのう」
天満坊は、無精髭ののびたあごを、なでた。
弘達は、俯向いた。
そこへ、多門夜八郎が、ふらりと入って来た。
「夜八郎殿、大庄山へ登って、竜神湖の水を、切って落すのは、どうやら、不可能らしい」
天満坊は、云った。
夜八郎は、大乗から、伊吹野城内の様子は、あらましきいて来たので、天満坊の言葉に、べつに、眉宇もひそめなかった。
「伊吹野城から掠奪した米があるゆえ、芋粥をすすっていれば、来年までは、生きのびられるかも知れぬ」
「そうさな。……しかし、来年になっても、雨が降らぬとすると、どうなるかのう？」
「それほど、神も無慈悲ではなかろう」
「どうしてどうして、神様は、いったん、そっぽを向いてしまうと、容易なことでは、助けて下さらぬ」
「御坊の思案ひとつだ」
「愚禿は、もちろん――」
と、云いかけて、天満坊は、つるりと、頭をひとなでしてから、
「やるさ」
こともなげな口調で、云った。
弘達が、はっと顔をあげて、天満坊を視た。
「不可能ときかされると、それを可能にしてみたくなる。そういう意地っぱりが、愚禿の身上でな」
「しかし、伊吹野城を焼くに当って、御坊は、勝つようにして勝つのが軍略兵法と心得る、と云っていたではないか」
「申したぞ。しかし、こんどは、対手は、人間ではない。山だ」
天満坊は、にやりとしてみせて、
「山が対手では、軍略兵法は、めぐらしようがないの」
と、云った。
夜八郎は、天満坊が、何を考えているのか、ちょっと、見当がつかなかった。
この時、弘達が、顔をあげた。
「大庄山へ案内できる者が、一人、居るには居るのでござるが……」
「ほう、それは、結構――。何者かな？」
「黙兵衛と申す男でござる」
何処の者とも知れぬが、八年ばかり前に、飄然として、伊吹野に現れて、畜生藪とよばれる大庄山の麓の深い竹藪の中に、草庵を建てて、住みついている。
けものを手なずけるのに巧みで、草庵の内外には、絶えず、山犬とか熊とか猿、栗鼠をうろつかせている。
「どうやら、黙兵衛は、時おり、大庄山を登って、山城を訪れて居る模様でござる」

「けものを手なずけるのが巧みであるところをみると、忍びの者であろうかな」
「そのように存じられます」
「ふむ――」
天満坊は、ちょっと、首をひねって、考えていたが、
「まず――くどいても、動くまいな」
と、云った。
「動くか、動かぬか――くどいてみなければ、わからぬことだ」
夜八郎が、云った。
「くどいてみるかな、夜八郎殿？」
天満坊が、夜八郎を視た。
「くどいてみよう」
夜八郎が、立ち上った。
長い縁側をまわって、玄関を出ようとすると、柿丸が姿をみせて、呼びとめた。
「梨花様の容態が、思わしゅうござらぬ」
と、告げた。
梨花が、臥床したのは、数日前からであったが、かなりの熱を出し、つづけて二度ばかり、かなりの血を喀いていたのである。
柿丸は、梨花につききりで、看護をしていたが、目に見えて衰弱する梨花を見まもって、気が気ではなかった。
「熱が高くなったのか？」
「熱よりも、息づかいが、尋常ではなくなり申した」
「……」
「梨花様を、このような地獄野で、はかなくさせてしもうては、あまりに、おかわいそうでござる。……天満坊様は、なんとか、よい処方を心得ては居られますまいか？」
「引導を渡す心得は、あろうが――」
「ぶるぶるっ！　縁起でもないことを、申されますな」
柿丸は、夜八郎を、にらんだ。
夜八郎は、梨花が臥せている部屋に入った。
梨花は、夜八郎が枕辺に坐ると、すぐに、まぶたをひらいて、微笑をうかべてみせた。
「加減は、どうだ？」
夜八郎は、きいた。
「わたくしのことなど、忘れていて下さいませ」
梨花は、こたえた。
「柿丸が、おれがこの部屋に顔をみせぬのを、不服としているようだ」
「神様のようなひとです。どうして、このようにわたくしに、つくして下さるのか、わかりませぬ」
「そういう男なのであろう」
夜八郎は、熱のために、あかみをおびた顔を見まもりながら、
――あまり、永くは、ないかも知れぬ。
不吉な予感を持った。
「用事があって、他出する。……無心に、養生することだ」

夜八郎は、云いのこして、立った。
出ようとすると、梨花が、
「もし！」
と、呼びとめた。
頭をまわすと、梨花の双眸が、ふしぎな美しさに、光った。
「……わたくしが、この世においとまする時、そばに、いて下さいますか？」
梨花は、たのんだ。
「……？」
夜八郎は、ひとつの感動で、とっさに返辞ができずに、梨花を、見つめかえした。
「お願い申します」
梨花は、両手を合せた。
「まるで、近いうちにも、逝くようなことを云うではないか」
「じぶんのいのちは、じぶんが、いちばんよく、存じて居ります。……一日、一日が、尊いものに思われて参りましたゆえ……」
「早くあの世へ行く理由はない」
「はい。……生きたく存じます。でも……」
「生きるのだ。生きようとするのだ」
あらあらしく云いすてて、夜八郎は、部屋を出た。
柿丸が、そこにうずくまっていた。
――この男の誠心も、神は、すげなく、しりぞけようとするのか。
夜八郎は、そう思いつつ、黙って、歩き出していた。
柿丸は、そっと、部屋をのぞき、合掌している梨花の仰臥の姿を視ると、大きく吐息した。
あわてて、玄関へ追ってみると、もう、夜八郎は、門のところまで出ていた。
「それがしを、お供に――」
柿丸が、大声で呼んだが、夜八郎は、ふりかえりもしなかった。
柿丸は、首をふって、ひきかえした。
どこか、遠くから、陽気なざれ唄が、ひびいて来た。百平太の声であった。
「あついな」
木も草も、生気をうしなった野道を、たどりながら、夜八郎は、つぶやいた。
綿雲を点在させた空は、黄ばんで、烟っているようである。
暑気は、日一日と増しているのである。
ひび割れた田や畑は、わずかな風が渡っても、灰のような土煙りを舞いたたせる。
青みをうしなったくさむらから、虫の音がひびくのが、ふしぎなくらいである。この枯野に、虫が吸う露が、のこっているのであろうか。
いくつかの小さな林をぬけて、伊吹野を一望見はるかす地点へ出た時であった。

半町ばかり前方に、涸れた川の堤上に、一個の人影が、みとめられた。
「……？」
夜八郎は、黄塵でかすんだ白日の野をへだてて、そこに立つ者に、不審の視線を向けた。
――おれが、知っている者のようだな。
対手も、こちらを、視ている。
夜八郎が、歩き出そうとすると、急に、対手は、早い足どりで、こちらへむかって来た。
広い田をまっすぐに横切って来るや、夜八郎の行手数間のところへ、すっくと立った。
「多門夜八郎！　出会うたぞ」
九十九谷左近の日焼けた面貌に、薄ら笑いが、刷かれた。
「……」
夜八郎は、黙って、左近を見まもった。
「この日を、待っていたぞ。……今日は、遁さぬ！」
左近は、二三歩進み出て来た。
「お主は、城にいたそうだな？」
「いたぞ」
「天満坊と会ったにもかかわらず、田丸豪太夫に、それを告げなかったのは、何故だ？」
「告げようと告げまいと、おれの勝手だ。……天満坊が、どんな策を用いるか、それを傍観するのも、一興であったな」
「お主の胸中にも、義によって生きる心があるようだな」
「都合のいいような解釈をしてもらうまい。……おれは、兵法者だ。兵法試合にのみ生命を賭けて居る。そのほかのことには、一切おのが身を動かす気にはならぬ。……多門夜八郎、口上をもって遁れることは、許さんぞ！」
云いはなちざま、左近は、殺気をほとばしらせた。
「やむを得ぬ」
夜八郎は、決意した。
左近は、無造作に、抜刀すると、ずかずかと、迫って来た。
夜八郎は、二間に迫られて、差料を鞘走らせた。
その時、この決闘の殺気をあおるように、かたわらの林の梢から、大きな鳥が、ぎゃっ、と怪しげな啼き声をたてて、空へ飛び立った。
二間の距離が置かれたまま、二刀は、動かず、秒刻が移った。
左近の双眼は、炬となって燃えて居り、夜八郎の眸子（ひとみ）は、刃物のように冷たく光っていた。
やがて――、
「左近」
夜八郎が、呼んだ。
「このままでは、夜が来、朝を迎えるぞ」
「ほざくな！」
左近は、じりっじりっと、距離を詰めて来ると、
「一太刀の勝負だぞ！　かけひきは、許さぬ！」
「おれは、兵法者ではない。……一太刀を放つ汐合を知ら

ぬ。お主の方から、撃って来い！」
「よし！　待って居れ！」
左近は、さらに、一歩出て、太刀を、上段にかまえた。
夜八郎は、逆に、切先を下げた。
さらに、四半刻が、過ぎた。
ようやく、左近の総身に、烈しくせきたてられる気色があふれた。
夜八郎は、依然として変らぬ冷たさで、微動もせぬ。
突如——、
「やあっ！」
左近の口から、凄じい気合が噴いて出た。
もし、夜八郎が、一歩退っていたならば、左近には、一撃をあびせる隙が見出せたに相違ない。
夜八郎は、石のごとく、不動であった。
左近は、気合を放つだけにとどまった。
それから、さらにまた、四半刻が移った。
左近にも、夜八郎にも、目に見えて、体力の消耗が現れた。
「左近っ！　どうした？　なぜ、撃って来ぬ！」
夜八郎が、叫んだ。
その眸子には、対峙に堪え難くなった烈しい色がみなぎっていた。
左近の双眼が、火を噴くように、ぎらぎらと輝いた。
次の瞬間——。
「ええいっ！」
左近は、地を蹴った。
刃金と刃金が嚙む鋭い音が響いた。
夜八郎は、左近の電光の太刀を、切羽(せっぱ)で受けた。
眼光と眼光が、宙にぶっつかった。
左近は、渾身の力で、押して来た。
受ける夜八郎も、あらん限りの力をこめなければならなかった。
二つの顔が、みるみる汗にまみれた。
「うむっ！」
左近の力が、ついに、まさった。
そのせつな、弓なりに反っていた夜八郎が、自ら、地面へ倒れた。
渾身の力をふりしぼって、押していた左近には、とっさに、夜八郎があけた空間を、処理するいとまがなかった。
地面に倒れた夜八郎の方に、業を放つ余裕が生じたのは、皮肉であった。
左近としては、
「むっ！」
と、気合を嚙んで、ふみとどまるのが、せい一杯であった。
その瞬間、夜八郎は、なかば無意識に、左手で脇差を抜きつけに、きえーっ、と一閃していた。
血飛沫がはねざまに、左近は、数尺をとびあがっていた。
夜八郎が、すっくと立った。
「うーむっ！」

左近は、左手づかみの一刀を、防禦に——顔面の前へ、斜横にかざして、大きく股をひらいた。
その右手は、ダラリと垂れ下っていた。上膊を、骨までもふかぶかと斬り込まれていたのである。
「勝負はついたぞ」
夜八郎は、大小二刀を、地摺りに下げて、云った。
「まだ——まだっ！」
左近は、絶叫した。
おのが血飛沫をあびた顔面は、悪鬼さながらであった。
斬られた無念が、もはやこれ以上たたかうことの不可能を、肯定でき難いのであったろう。
「兵法者ならば、いさぎよく、敗北をみとめるがよい」
「まだだっ！」
左近は、大きく一歩ふみ出した。
とたんに、よろっと、上半身を傾けた。
気力で、立っているだけである。
夜八郎は、じっと、左近を見まもって、
「怨恨があっての勝負ではない。再度の立合いを希望するならば、後日がある」
二刀を腰に納めると、夜八郎は、左近に背中を向けた。
ゆっくりと歩き出した夜八郎に、
「待てっ、多門！」
と、左近は、絶叫した。
すでに、立つ力はうせて、地べたに、あぐらをかいていた。
夜八郎は、ふりかえった。
「お主、公卿館にいるのだな？」
「左様——」
「数日うちにも、行くぞ！」
「いそぐことはない」
夜八郎が遠ざかると、左近は、着物の袖をちぎって、血止めの手当をした。
それから、くさむらにころがると、目蓋を閉じた。
——おれが、やぶれた！
左近は、胸のうちで、つぶやいた。
——九十九谷左近が、はじめて、やぶれたのだ！
無念の泪が、滲み出た。

かげ草

畜生藪——ときいた。

まさに、その通りであることを、その深い竹藪のほとりの草路を辿りはじめた時、夜八郎は、さとった。

流浪の永い年月、さまざまの山嶽、原野を越えて来た夜八郎は、やはり、いつか、人間ばなれのした直感力をそなえていたのである。

——ふみ込むには、相当の危険を覚悟しなければならぬようだ。

黙兵衛という男は、けものを手なずけるのが得意、というが、おそらく、狂暴な野獣を、番犬代りにしているに相違ない。

夜八郎は、竹藪に沿うて、ものの一町も歩いてから、入口とおぼしい地点に立った。

べつに、ためらいもせずに、ふみ込んで行き、十歩と進まぬうちに、一疋の山犬に、躍りかかられた。

身を沈めて、これを頭上にかわしてから、ずうっと、見わたした。

「いるな」

夕闇のようなくらがりに、いくつかの光るまなこを、みとめて、つぶやいた。

次の瞬間から、夜八郎のつき進む路なき路の左右の太竹が、音たてて、つぎつぎと倒れはじめた。

脇差を抜いて、両断して行ったのである。

藪の中は、たちまち、ざわめきたった。

一本が倒れきらぬうちに、また一本が倒れかかる、という具合に、はげしい笹音がつづいたのである。

山犬どもは、その異変に怯じたか、ついに、動かなかった。

夜八郎は、草庵の前に立った。

案内を乞うたが、返辞は、なかった。

戸口は、手をかけても、開かなかった。

「留守か——」

失望したが、すぐに、引きかえす気になれず、入って待つことにした。

板戸をこじあけて、土間に入り、見まわした。

調度らしいものは、何ひとつ置いてない。

囲炉裏端に坐った夜八郎は、急に、疲労をおぼえた。

左近との決闘で体力が消耗していたのが、この小屋に入って、神経がゆるむと同時に、睡魔を呼んだのである。

「やすませてもらうか」

小屋の外に、山犬どもがうろつく気配があったが、べつに気にもかけず、夜八郎は、横になると、手枕して、目蓋を閉じた。

但し、太刀は、石火の迅さで抜けるところへ置いて、柄

へ右手をかけたままである。

十とかぞえぬうちに、夜八郎は、ねむった。

ねむりながら、夜八郎は、太刀の柄を、ぐい、とつかんだ。

意識がかえるよりさきに、ねむりの中でも、本能は起きていて、それをなした。

あるじがもどって来て、炉をへだてて、立ったのである。

夜八郎は、双眸をひらいた。

じっと、視おろす者と、視線が合ってから、やおら、身を起した。

「それがしは、多門夜八郎という牢人者」

夜八郎が、名のると、対手は、薄い笑顔をつくり、

「存じて居り申す。黙兵衛でござる」

と、頭を下げた。

「それがしを、どうして、知っている？」

「永らく、京に住みついて居りましたわい」

黙兵衛は、膝もとへ降りて来た栗鼠を、大きなてのひらにのせながら、

「お手前様は、ようあばれてござった。三条大橋で、二十人あまりも対手にして、大あばれにあばれてござるのを、見物したものでござる」

「……」

「見物人の中に、公卿ざむらいがいて、お手前様のことを、あれは、将軍の落し胤だ、と噂して居ったので、興味をおぼえ申した。……世間は、狭いもので、こんなところで、お目にかかろうとは、おもしろいものでござる」

「お主にたのみがある」

「大庄山の奈良城義胤の山城へ、案内せい、と申されるのでござろう」

「どうしてわかる？」

「お手前様が、公卿館から、わざわざ、ここへ足をはこんで参られるからには、目的はほかには考えられませんわい」

「きき入れてくれるか？」

「おことわりじゃな」

黙兵衛は、あっさりとこたえた。

「ことわる理由は？」

「大庄山の頂上に登りつくまでに、一人のこらず、死に果てることが、目に見えて居るからでござる。……無駄骨を折るのは、まっぴらでござるわい」

「お主自身も、生きのこる自信はない、とは云わせぬぞ」

夜八郎は、微笑しながら、云った。

「身共は、さようさな、これで、六度ばかり、登って居りますからな」

「とすれば、十人が登って、一人や二人は、生き残る可能は、考えられる」

「一人二人生きのこって、なんとなさる？」

「竜神湖の水を、渓谷へ、きって落す」

「……？」

「百姓たちに、水を与えてやらねばならぬ。米をつくらねばならぬ」

「お手前様は——」
黙兵衛は、けげんそうに、
「いつの間に、義のために生きる仁者におなりなされたか？」
「仁者などにはなって居らぬ。ただ、行きがかり上、あとへ引けなくなったまでだ」
「天満坊殿は、お手前様のような御仁までも、自由にあやつる軍師でござるな」
黙兵衛は、そう云って、さも感服したように、首を振った。
実は——。
黙兵衛は、奈良城義太郎を、山城まで案内して、もどって来たばかりであった。
その登攀は、文字通り決死であった。
途中、義太郎ほどの若者が、悲鳴をほとばしらせ、もはや一歩も動けぬ、と坐り込んだくらいであった。
黙兵衛が、山城を訪れてから、二年あまりが過ぎていた。
その二年の間に、登って行く道すじには、黙兵衛自身も、予測もしていなかったようなさまざまの障碍が待ち伏せていたのである。
それらは、黙兵衛を、しばしば、当惑させ、立往生させた。
しかし——。
黙兵衛は、いったん、ふみ出したからには、あとへは退けなかった。
黙兵衛が、義太郎をひきずるようにして、山頂へ立たせた時、黙兵衛自身も、全身傷つき、疲労しはてていた。
降りることに、恐怖さえおぼえていた。竜神湖の畔に、義太郎を睡かせておいて、黙兵衛が、ふたたび危険な路をたどって、降りてきたのは、意地というべきであったろう。
「お主が、承知してくれるまで、ここに居すわるか」
夜八郎が、云った。
「十日、居すわられても、首をたてに振り申さぬな」
黙兵衛は、こたえた。
夜八郎に対してこそ見せぬが、黙兵衛は、このまま、三日も死んだように睡りたいくらい、極度に疲労しつくしていた。
それを、すこしも、おもてに現さぬところに、忍者の意地があった。
夜八郎は、ふと、黙兵衛の左手に、腕からつたい落ちる血汐をみとめた。
「お主、手負うているのか？」
「いや、ほんのかすり傷でござるわ。別状ござらぬ」
黙兵衛は、こともなげに、かぶりを振ってみせた。
夜八郎は、しかし、その瞬間から、黙兵衛が、尋常の状態ではないことを、観察しはじめた。
「疲れている様子だな？」
「ほんの、わずかばかり——」
黙兵衛は、笑ってみせた。
栗鼠は、血汐におどろいて、屋根裏の梁へ、駆けもどっ

てしまった。
「おひきとり下さるかな？」
黙兵衛は、たのんだ。
「やむを得ぬ。出なおそう」
夜八郎は、腰を浮かせた。
その時であった。
藪の中で、鋭い悲鳴があがった。
若い女の声音であった。
野獣の群が、おそいかかる烈しい物音がつたわって来た。
夜八郎を、愕然とさせたのは、悲鳴につづいて、救いを求める叫びであった。
「夜八郎様っ！」
——おれを知っている女！
梨花が、起き上って、追って来たとは、考えられなかった。
「お！　小幸だ！」
夜八郎が、あわてて、おもてへ出て行こうとすると、
「待たれい！」
黙兵衛が、とどめて、やおら立ち上った。
「お手前様では、さばきがつけられぬ。……飢えた山犬どもは、若い女のにおいをかぐと、狂い立つでな」
「しかし、お主は、疲れはてて居るではないか。血も流して居る。生血のにおいをかがせれば、山犬どもは、よけいに、狂い立つのではないか」
「わしは、いわば、飼い主みたいなもの。心配無用じゃ」
黙兵衛は、出て行った。
夜八郎は、炉端で、待つことにした。
山犬どもが、急に、音をひそめたので、夜八郎は、やはり飼い主の威力だな、と思った。
しばらく、静寂がつづいた。
と——。
どうしたことか、前にも増した凄じい騒擾が、起った。
「なんだ！」
夜八郎は、土間へ跳んで、戸をひき開けた。
こちらへむかって奔って来る女の姿が、見えた。その彼方で、野獣と人間の目まぐるしい争闘の光景が、くりひろげられていた。
夜八郎は、走り寄った小幸を、小屋にひき入れておいて、修羅場へ向って、疾駆した。
山犬のむくろが、そこにも彼処にも横たわっている。
黙兵衛は、小刀を逆手に持って、襲って来る奴を、正確に、突き殺していた。
だがなお、十匹以上も、狂暴な跳躍をしかけて来ていた。
夜八郎は、抜刀しざま、一匹の胴を両断するや、
「黙兵衛！　引け！」
と、叫んだ。
「やはり、血のにおいをかがせたのは、不覚でござったわい」
黙兵衛は、喘ぎながら、云った。
夜八郎は、黙兵衛をかばって、その前に出ると、猛然と

迅業を発揮しはじめた。
　野獣どもは、もはや、おびえて逃げることをしなかった。
　それが、かえって、夜八郎には、都合がよかった。
　尤も、人間の敵に包囲された時とちがい、息つく間もなく、五体を敏捷に旋回翻転させねばならなかったが……。
　夜八郎は、なお数匹を斬りのこして、黙兵衛を、小屋まで、たどりつかせた。
　黙兵衛が、土間に入って、小幸にささえられるのを見とどけておいて、夜八郎は、残った山犬どもを、片づけるべく、ふみ出そうとした。
「もう……止されい」
　黙兵衛が、呼び止めた。
「一匹のこらず斬っておかねば、仲間を呼ぶだろう」
「いや、もう、遠方にいるのも、血のにおいを、嗅ぎつけ申したわい。……どうにも、相成らぬ」
　そう云われて、夜八郎は、微かな悪寒をおぼえた。
　黙兵衛は、炉端へ、ぼろきれのように倒れると、ひくく、
「不覚！」
　と、つぶやいた。
　小幸が、両手をついて、平伏した。
「おゆるしを！」
　小幸は、夜八郎が、畜生藪へおもむいたときいて、無我夢中で、追って来たのであった。
　小幸の父親は、先年、畜生藪で、山犬に襲われて、悲惨な最期をとげていたのである。
　夜八郎が、父親と同じ目に遭うのではないか、とおそれた小幸は、われを忘れて、公卿館をとび出したのであった。
　小幸は、夜八郎を、遠くから、恋していたのであった。
　もとより、近づいて、その想いを、態度に示す勇気はなかった。ただ、燃える恋慕の情を、じっと胸に抱いていただけである。
　恋が、小幸を、畜生藪にふみ込ませた、といえる。
　夜八郎は、小幸へは一瞥もくれずに、黙兵衛を、じっと見まもっていた。
　すでに、黙兵衛のおもてには、死相があらわれていた。
「黙兵衛――」
　呼んでみた。
　閉じたまぶたが、微かに、わなないた。
「黙兵衛、しっかりせい」
「妙な、死にざまを、ごらんに入れる」
　黙兵衛は、かすれ声で、云った。
「手当のすべがないか？　教えれば、努めるが……」
「いいや――」
　黙兵衛は、かぶりを振った。
「人間の体力には、限りがござるわい。……よもや、こういうあんばいに、生命を落そうとは、夢想もいたさなんだ。あっけないものでござるて」
「……」
　黙兵衛は、まぶたをひらいて、夜八郎を見上げた。
「実はな、それがしは、奈良城義胤殿のおん曹子が、長旅

から、もどって参られたので、それを、山頂まで、おくりとどけて来たばかりでござった」
「……」
　夜八郎は、息をのんで、死相濃い黙兵衛の顔を、見下した。
「自分で申すのは、いささかおもはゆいことながら……、よほどのことのない限り、死にかかるまでに、体力を消耗いたさぬ男でござる。……その男が、このていたらくになったのは、大庄山を登るのが、どれほどの難事か――それを、示すものでござるわい。……かりに、百人の徒党をもって、登るとして、頂上に辿りついた時、生きのこって居るのは、二人か三人……おそらく、そんなところで、ござろうな」
　語りながら、黙兵衛の息づかいは、急に、乱れて来た。
「しかし……」
　黙兵衛は、視力をうしなった双眸を、大きくひらいて、夜八郎へ向けた。
「お手前様は……、それと、わかっていても、登るのを、中止なさるまい。……あの押入の中に、行李がござる。……その中に、絵図面が、ござる。……竜神湖までの、道すじが、記して、あり申すゆえ……、是非にも、登ろうとされる時の、参考に、なされ……」
　そう告げておいて、黙兵衛は、目蓋と口を閉じた。
　じっと、見まもっていた夜八郎は、死に行く者の暗い翳を濃くする面貌に、胸がつまった。
「黙兵衛――」
　呼ぶと、微かに、目蓋をふるえさせた。
「やすらかに、なり申した。……極楽だか、地獄だか……むこうに、現れて、来居ったわい。……さらばでござる」
　忍者にふさわしい最期であった。
　小屋の外に、山犬の群が、しだいに頭数を増しはじめるのを、知りながら、夜八郎は、しばらくは、黙然として、黙兵衛の死顔を、見まもっていた。
　小幸のすすり泣きの声が、とぎれとぎれに、つづく――。
　夜八郎は、立ち上って、押入をひらいてみた。
　古びた行李がひとつ、置いてあった。
　かかえおろして、蓋を開くと、忍者が必要とする諸道具が入れてあった。
　夜八郎は、油紙に包んだものを見つけて、披いた。
　大庄山の地勢をこまかく描いた絵図面であった。
　無数の朱点が入れてあった。
　それらが、越え難い危険の場所を意味した。そして、ひとつひとつに、その理由が記してあった。
　読みすすむにつれて、夜八郎は、とうてい、突破することの不可能をおぼえた。
　顔をあげた夜八郎は、
「この図面を見た天満坊が、なんと云うか、だ」
　と、つぶやいた。
　それから、夜八郎は、小幸を見かえって、云った。
「それよりもまず、われわれが、どうやって、この畜生藪

を脱出するか――それを考えねばならぬ」
　戸口に、烈しくぶっつかる音、がりがりとひっかく音が、絶え間なく、起っていたし、仲間同士吠えあい、嚙みあう不気味な騒ぎもつづいていた。
　いわば――。
　夜八郎と小幸は、血に狂った野獣の群のまっただ中で、完全に孤立するかたちとなったのである。
　夜八郎一人ならば、突破することも不可能ではないかも知れぬが、小幸をつれていては、どうにも、すべはなかった。
「おゆるしなされませ。……わたしが、かるはずみに、貴方様を追うて来たばかりに……、こんなことに、なってしもうて――」
　小幸は、膝に置いた手の甲へ、泪をしたたらせた。
「泣くのは止さぬか。……おれは、過ぎたことを悔いはせぬ」
「はい。わかりました。もう、泣きませぬ」
「追って来たのは、おれの身を案じてくれたからか？」
「はい」
「畜生藪ときいて、来たからには、山犬がいることぐらいは知っていた。案じてくれることはなかった」
「館に、もう九十以上になる庭掃きの爺やが居ります。人相を観ます。……貴方様のお顔に、不吉な剣難の相がある、と云うて居りました。……それが、心配で――」
「剣難の相か」
　夜八郎は、笑った。
「剣難の相は、生れた時からあるに相違ない。しかし、畜生ごときに嚙み殺されはせぬ」
　そう云ったとたん、板戸が、凄じい音をたてて、倒れた。
　夜八郎が、太刀をつかんで、土間へ跳ぶのと、山犬が一匹、躍り込んで来るのが、同時であった。
　山犬の首は、刎ねとんだ。
　その血飛沫を慕って、そこへ、山犬の群は、一挙に、殺到して来た。
　夜八郎は、脅しのために、太刀に素振りをくれた。
　その脅しにも怯じずに、二匹が同時に、飛び込んで来た。
　夜八郎は、これらを、ほとんど一閃の刃光の下に、ころがした。
　小幸が、必死になって、板戸を起した。
「はめておけ！　裏口へまわれ！」
　叫んでおいて、夜八郎は、おもてへ踏み出した。
　その瞬間から、夜八郎は、一瞬の静止も許されなかった。
　小屋の板壁に沿うて、来るけものを、目にもとまらぬ迅さで斬りつつ、夜八郎は奔った。
　裏口に達して、夜八郎は、ようやく、息をついた。山犬どものほとんどは、仲間の屍へ、くらいついて、夜八郎を追うのを忘れたからである。
　裏口の戸を、小幸に開けさせて、身を入れた瞬間、夜八郎は、はじめて、左肩に、疼痛をおぼえた。

「やられたな」
　夜八郎は、苦笑した。
「血が！」
　小幸が、声をふるわせた。
「黙兵衛が腰にさげている革袋は、たぶん、薬のはずだ。手当をしてくれ」
　夜八郎は、片肌を脱いだ。
　小幸は、嚙み傷のむごたらしさを一瞥して、思わず小さな悲鳴をあげた。
　夜八郎は、手当がおわるまで、微かな呻きもたてなかった。
　外では――。
　山犬どもは、仲間の屍を骨になるまでくらいつくす不気味な音をたてていたが、やがて、しずかになった。
　腹を満たしたけものは、たぶん、明日まで、休息するのであったろう。
「いまなら、逃げられる隙があるかも知れぬ」
　夜八郎は、松明を振りながら、疾駆することを考えた。
　小幸に、松明をつくるように命じた夜八郎は、板戸の隙間から、おもてをうかがった。
　けものの影は、みとめられなかった。
「よし！」
　こころみに、板戸をひき開けた。
　せつな――。
　音もなく、一匹が、矢の迅さで、襲いかかって来た。
　手負うた夜八郎には、抜き討ついとまもなく、わが身をかばうのが、かろうじてであった。
　戸を閉めた夜八郎に向って、土間の奥から、山犬は、牙をひき剝いた。
　小幸が、壁から忍び槍をつかみとって、投げるのを、間髪でかわした山犬は、唸りを噴かせて、夜八郎に襲いかかった。
　これを両断する迅業は、夜八郎から、失われていた。
　その咽喉へ、切先を突き立てざまに、夜八郎は、土間へころがった。
「夜八郎様っ！」
　小幸は、土間へとび降りて、夜八郎に、しがみついた。かかえ起されかけて、夜八郎は、はじめて、肩の深傷（ふかで）の痛みに、呻いた。
　松明をかざして、藪の中を突破することは、不可能となった。
　火をおそれずに、襲いかかって来るのが、たとえ、三匹や四匹にせよ、いるに相違ない、とわかったからには、こちらに、斬りはらう迅業がなければならなかった。
　手負うた身に、それは失われている。
　夜八郎は、小幸とともに、板戸に突支（つっかい）をしておいて、炉端に、上った。
　黙兵衛のなきがらは、そこに、ひっそりと横たわっていた。

　夜が来た。

先刻まで、黙兵衛のなきがらが横たわっていたところに、夜八郎は、ねむっていた。

黙兵衛のなきがらは、土間の片隅に、土まんじゅうになっていた。小幸が、穴を掘って、埋葬したのである。

小幸は、死んだように動かぬ夜八郎を、じっと見まもっていた。

遠くから恋していた男が、いま、手負うて、発熱して、自分のかたわらにあることに、小幸は、感動していた。

土一揆に加わって、城めざして走っているところを、城兵に襲われて、みな殺しにあった直後、夜八郎から生命を救われた小幸であった。

その時から、小幸にとって、夜八郎が、この世で唯一の男性となったのである。

農夫の娘が、さむらいを恋することなど、許されるはずもない。

人には告げられない慕情であった。それだけに、かえって、小幸の心中で、慕情は、しだいに、熱いものになった、といえる。

恋を、その行動にあらわすすべなど、この娘は、知らぬ。ただ、こうして、じっと見まもっているだけで、幸福であった。

「しずかだな」

ねむっていると思っていた夜八郎が、ふいに、口をきいた。

小幸は、心の中を看すかされたように、狼狽の色を、顔に散らした。

「しずかだ」

夜八郎は、ひくく、くりかえした。

「はい。……しずかでございます」

「しずかすぎると、人間は、忘れていたむかしのことを、まとめて、思い出すようだな」

「……」

「まだ、十二三歳の頃であった。……おれは、京の寺に、あずけられていた。夜が、しずかすぎて、おれは、さびしくて、ねむれなかった。……それで、しかたがなく、木太刀をつくって、庭へ出て、素振りの稽古をした。月のある夜であった。狐がいっぴき、遠くにあらわれて、おれの稽古を、見物していた。……そのうちに、おれが、ひと振りするたびに、狐め、ピョンと、飛びあがりはじめた……。おれは、癪にさわった。狐が、自分を、からかっているのだ、と思ったのだ。おれは、しかし、無視することにした。その夜は、いつもより、百回も多く、素振りをした。おれは、狐の方が、さきに、飛びあがるのを止めるであろう、と思ったのだ。……狐め、止めなかった」

「……」

「おれは、次の夜も、同じ時刻に、庭へ出た。すると、狐めは、どこからともなく、現れた。おれが木太刀を振る。狐が、はねあがる。……おれは、へとへとになるまで、木太刀を振りつづけた。狐は、はねあがりつづけた。……おれは、地べたへ、へたばり込んだ」

小幸は、息をつめるようにして、夜八郎の話をきいていた。

「……その次の夜も、狐は、現れた。おれは、それが子狐であることを知った。おれの素振りにあわせて、飛び上る稽古をしているのだ、と――。おれは、子狐と競うことにした。子狐ごときに、負けてなるか、と思った。……おれと子狐の稽古は、それから、三月もつづいた。……どういうのであったろう。子狐めは、月が痩せて、しんの闇夜になると、現れなかったな」

きいているうちに、小幸は、胸が苦しくなった。

恋した娘だけが知る胸の鼓動の痛みであった。

「夜八郎様！」

思わず、小幸は、呼んだ。

夜八郎は、まぶたをひらいて、小幸を見上げた。

小幸は、言葉をつづけようとしたが、あまりの烈しい感動の波に、全身が宙に浮いたようになり、動悸のはやさに、口のうちが、かわいてしまった。

「ここへ、横になるがいい」

夜八郎が、すすめた。

「は、はい――」

小幸は、ためらわなかった。

小幸が、横になると、夜八郎は、片腕をのばして、その頭へまわした。

小幸は、夜八郎の胸へ、顔をうずめた。

――妙なものだ。

夜八郎は、心の中で、つぶやいた。

――無頼のおれが、この農夫の娘を、大切なもののように、扱っている。

――おれの性根にも、やはり、人間らしゅう、孤独のさびしさを知る善良さがあるのか？

夜八郎は、すなおに、それを、みとめようとした。

「……うれしい」

小幸が、微かな声音で、云った。

「そうか。うれしいか？」

「は、はい。……うれしゅうございます。……このまま、死んでもいい」

小幸は、そう云うと、口にした言葉に、羞恥をおぼえたか、急に、つよく、からだを押しつけて来た。

夜八郎は、痛みをこらえて、頭へまわした片腕に、力をこめてやった。

そのまま、かなり長い時間が、過ぎた。

突然――。

戸口に、凄じい勢いで、ぶっつかる音が起った。

山犬どもが、再び、さわぎはじめたのだ。

しかし――。

小幸も夜八郎も動かなかった。

そのうちに、夜八郎は、しだいに、意識がうすれて来た。

小幸は、そっと、顔をあげて、夜八郎の寝息をうかがった。

――おやすみなされた。

小幸は、さびしさをおぼえた。
絶え間なく、凄じい音響が、小屋の四方の壁に起って、夜八郎は、目ざめた。
小幸の姿は、かたわらになかった。
夜八郎は、小幸が、必死になって、戸口に突支をしているのを、視た。
戸は、なかば破られていた。
夜八郎は、おのが五体が、どれだけ働く力があるか、測った。
——やれるかも知れぬ。
夜八郎は、すばやく、土間へ降り立った。
「小幸、松明をつくれ！」
「はいっ！」
まだ、おもては、暁闇であった。
藪を突破できるか、できぬか——やってみなければわからぬことだった。
夜八郎が、抜刀するのと、戸が倒れるのが同時だった。
躍り込んで来た一匹を、真二つに斬った夜八郎は、
「はやくせい！」
と、叫んだ。
「は、はいっ！」
戸口には、闇に光る狂暴なまなこが、むらがって来た。
夜八郎は、刃を上にして、地摺りに構えた。
「うーおっ！」
数匹の唸りに送られて、一匹が、宙を跳んで来た。

そいつを、刎ねあげに、夜八郎は、斬った。
山犬は、首と胴をはなされつつ、おもてへ落ちた。
すると——。
たちまち、野獣の群は、仲間のしかばねへ、くらいついた。
そのほんの短い時間が、貴重であった。
「はいっ！　これを——」
小幸が、さし出した松明を、つかんだ夜八郎は、
「おれに、つづけ！　はなれるな！」
命じておいて、戸口を、一歩ふみ出した。
山犬どもは、一斉に、とび退った。
片手に松明を、片手に白刃をつかんで、夜八郎は、ゆっくりと進みはじめた。
小幸が、その背中に、ぴったりとより添っている。
十間あまりの距離を、ぶじに進んだ。
「よし！」
夜八郎は、小幸を、さっと前へ出し、松明を持たせた。
「走れ！」
「で、でも——」
「お前が、そばにいると、足手まといだ。走れ！　力のかぎり走れ！」
「はいっ！」
小幸は、奔り出した。
夜八郎は、狂犬の集団にむかい立った。
恰度、その時、この畜生藪に、無数の松明をかざした行

列が入って来た。天満坊が先頭であった。

父子無情

杉、檜、楓、なら、けやき、かし、くぬぎ……。
大庄山の山頂にひろがる竜神湖を包囲する樹林は、すべて、原始のままに、巨木の集りであった。
湖水は、その原始の世界で、神秘なまでに深い紺碧の色を、おもおもしく、たたえている。
太古に生れたこの湖水は、曾てただの一度も、涸れたこともなく、満々として、澄みきっている。
と——。
陽光のきらめきを、波にひろげながら、一艘の小舟が、はやい勢いで、南の岸辺へ、漕ぎすすめられて来た。
漕いでいるのは、半白のあたまの小男であった。
足もとの桶では、釣りあげた魚が、しきりに、はねあがっている。
間のびた歌声を、水面にわたらせながら、漕いでいるのであった。

　ひィふゥみィよォ
　四方（よも）の景色を、春とみて、
　梅にうぐいす、ほーほけ、きょう
　明日は、柳のくるわでなァ

琴をはやして
手まり歌

舟を、渚にすべり込ませた小男は、魚桶をさげると、水の中に降り、綱をひっぱって、砂地へ上った。

「さァて、大漁、大漁——といいたいところじゃが、ちかごろは、魚めも、甘い雨が降らんで、照りつけるばかりじゃで、底へもぐってしもうたわい」

独り言をもらしながら、草径を、たどって行こうとした。

とたんに——。

「お——？」

しかめ面になって、杉の木立際へ、視線を据えた。

人が倒れている。

この湖畔に、人影など、小男は、曾て見かけたことはない。

「はての？」

そっと、近づいた小男は、そこに俯伏しているのが、武士であるのを、みとめて、不審のかぶりを振った。

山城の住人ではない。

伊吹野から登って来たなどとは、とうてい考えられなかったが、しかし、山城の住人でないとすれば、下界の人間と受けとるよりほかはない。

「どうしたのじゃ、いったい？」

死んでいるのか、とのぞき込んだとたん、俯伏しのからだがうごいた。

「生きとる」

小男は、とび退った。

武士は、ひくいうなり声をもらしてから、目をさまし、のろのろと起き上った。

とたんに、小男は、驚愕の叫びを発した。

「若！」

小男は、信じられぬものを眺める表情になった。

起き上った武士は、奈良城義太郎であった。

「吾作か——」

義太郎は、笑って、両手を高くさしあげた。

「よう、ねむった。どうやら、わしは、一昼夜も、ねむりつづけていたのではないのか」

「若！　お前様、どうやって、登って来なさった？」

吾作は、狐狸でも化けたのではないか、となお疑う様子であった。

「足があるから、登って来た」

「山に不案内で、登って来られるはずがありませぬぞ」

吾作は、義太郎を幼年の頃から、世話をして来た下僕であった。

「それが、登れたのだから、おもしろかろう。……それよりも、父上は、どうされて居る？」

「……」

義太郎は、吾作の顔に、当惑の色がうかぶのを、みとめた。

「どうした？　父上の身の上に、なにか起っているのか？」

「若——」

吾作は、ひとつ、歎息をもらした。

「五年という歳月は、短いようで、長いものでござる」

「父上が、どうなされたというのだ。はやく、申せ」

「……」

「なぜ、申さぬのだ？」

「若——。父上様は、いまは、牢へ入っておいででござる」

「なに？　牢に入っている？　それは、どういうことだ？」

「父上様は、乱心なされたのでござる」

「……」

義太郎は、思いがけない報らせに、茫然となった。

「三年ばかり前から、挙動にあやしいところがあらわれ申して、とうとう……」

「……」

義太郎には、父義胤が乱心するような人間とは、思えなかった。

これには、なにか、わけがあるような気がした。

「父上が牢に入れられたあと、誰が、山城を支配いたして居る？」

「矢倉新兵衛様と、藤掛左馬之丞様と、庄野四郎五郎様の、お三人でございます」

「妙だな——」

義太郎は、云った。

「首名（おとな）は、一人も居らぬな」

城主がその支配力を失えば、当然、首名（家老）が、その代理をつとめるべきにもかかわらず、三人とも、もとはただの番衆であった。

戦国の世にあっては、後代の大名のように、整然たる機構がなされていたわけではなかった。それぞれの大名が、それぞれ独自の機構をつくり、職制を敷いていたのである。

家臣は、御家人または家中衆と称され、源平時代の家子郎党であった。

家中衆は、別に給人ともいわれ、武器と兵を持っていた。

家中衆は、三種にわかれた。

一門衆（または一族衆）

国衆

新参衆

この三種であった。一門衆は、領主の一族、一門である。領主とは血縁によってむすばれている。国衆は、領土内に古くから土着していたさむらいを指す。新参衆は、文字通り、あたらしく家来になった者で、他領より、併合や降伏などで、仕えたのである。

その三種の家中衆の下に、郎党、中間、若党、小者がいた。

吾作が、告げた三人は、いずれも、一門衆ではなかった。矢倉新兵衛、藤掛左馬之丞は国衆であり、庄野四郎五郎は新参衆であった。

「吾作——」

義太郎は、双眼を光らせた。

「浦上頼母や、久武大蔵は、いかがした？」

その二人は、首名（家老）であった。父義胤に従って、この大庄山へ来たはずである。

「それが……」

吾作は、ごくっと唾をのみ下してから、

「浦上様は、五年前に、山城へ参られる途中に、谷底へ落ちなされ……、久武様は、三年前に、熱病におかかりなされて、相果てられてございます」

「両人とも、いぶかしい死に様ではなかったのか？」

「いえ……、そのような——、わたくしめのような小者には、一向に……」

吾作は、かぶりを振った。

義太郎は、しばらく、沈黙を守っていたが、

「吾作——」

「はい」

「その桶の中の魚を、二三尾、焼け」

「はい」

「腹が空った」

「す、すぐに——」

吾作は、枯枝をひろいあつめると、砂地へ降りて、活魚を串刺しにして、焼きにかかった。

義太郎は、かたわらに来て、腰を下すと、

「こんなに、山上には満々と水があるのに、下界は、からからにかわいて居る。妙なものだな」

と、云った。

「百姓たちは、さぞかし、困窮いたして居りましょうな」

吾作は、声音に同情をこめた。吾作も、もとは農夫であった。

やがて、魚が焼けた。

義太郎が、うまそうにむさぼり食うのを見まもりながら、吾作は、

「よう、まあ、道もない道を、お登りなされた」

と、云った。

「白状すると、黙兵衛が、そこまで、案内してくれたのだ」

「ああ、あの忍びの御仁がな。それならば、若のおん身に別状なかった、と合点が参りますわい」

「吾作——」

「はい」

「伊吹野城は、焼けたぞ。田丸豪太夫は、木から落ちた猿だ。……近いうちに、わしが、一挙に攻めつけて、豪太夫の首を刎ねてくれる。伊吹野城を、新しく築いてやるぞ」

「若——」

「見ておれ！　わしは、やるぞ！」

「若——。父上様にお代りなされるおつもりでございますか？」

「あたりまえではないか。わしが、城主になって、なんのふしぎがある？」

「……」

「それとも、矢倉、藤掛、庄野らが、支配者面をして、主人の座を返さぬ、というのか？」

「……」

「吾作、知っていることを云え」

義太郎は、老下僕を、見すえた。

「わたくしめらには、ようわかりませぬが……、なにぶんにも、歳月が経って居りまするゆえ——」

「三名が、威張りかえって居る、というのだな？」

「はい。まあ、そ、そういうわけでございます」

「ほかの者どもは、黙って、頭を下げて居るのか？」

義太郎は、いまいましげに、舌打ちした。

吾作は、不安の視線を、血気の若主人へあてた。

——どうなるのであろう？

義太郎が還った城内に、大きな騒動が起ることは、目に見えて来た。

「田丸豪太夫を攻め滅ぼす前に、わしになさねばならぬ仕事ができたな」

「若——。ご要心なされませい。ただお一人でおもどりなされたのでございますゆえ……」

「はっはっは、心配するな。山城が、五年前とはちがっているように、わしも、五年前の義太郎ではないぞ。……からだを見せてやろうか。無数の刀槍傷があるぞ」

「……」

「城には、何人居るのだ？」

「三百二十人ばかりでございます」

「手勢としては、充分の頭数だな」

義太郎は、その家来を、率いるおのれに、なんの不安もおぼえていないようであった。

「よし——行こう」

義太郎は、砂をはらって、立ち上った。

「若——。今日一日、城の外から、様子をごらんなされては、いかがなものでございましょう？　わたくしめが、もどって、若らしいお姿を、湖水のほとりで見かけた、と報らせますれば、御一同衆が、どういう態度を示されるか、わかりますでございます」

吾作が、おずおずと、とどめた。

「ばかを云え！　城主の嫡子たるおれが、家臣どもの増上慢におそれをなして、城外からチロチロと、うかがうなどという阿呆なまねをするか」

義太郎は、ずんずん歩き出した。

吾作は、当惑して、立往生のかたちであったが、あわてて、追いかけた。

「若——」

必死な表情で、云った。

「てまえは、かくしていたことがございます」

「なんだ？」

「若——。城内には、もはや、若の味方は、一人も居りませぬぞ」

「おれが、帰って来たのを、家臣どもは、歓迎してくれぬと申すか。はっはっは……よかろう。おれが、たった一日で、家臣どもを平伏させてくれる」

「そんなことが、どうして、できますものか」

「できるか、できぬか、見て居れ。……矢倉、藤掛、庄野の三名のうち、どいつが、実権をにぎって居る？」
「庄野四郎五郎殿が、どうやら、主権を取られて居るらしゅうございますが、どうも、上の方のことは、わたくしめには、ようわかりませぬ」
「庄野四郎五郎ごとき、外様めが、のさばって居るとは——くそ！」
義太郎は、足もとの石を、蹴とばした。
その時、騎馬の音が、ひびいて来た。
「若——。かくれておいでなされ！」
吾作が、けんめいにすすめたが、
「かくれる必要などあるか！」
と、義太郎は、はねつけた。
木立の中を駆けぬけて来たのは、意外にも、武士ではなく、女であった。
まだ若く、美しかった。
男装をし、弓と矢を背負うていた。
義太郎には、見おぼえのない女であった。
義太郎の前に、さっと、馬をおどり出して来ると、たづなを引いて、にらみおろした。
「何者だ？」
義太郎は、こたえるかわりに、いきなり、女の足くびをつかむと、さっとひきずり落した。
「な、なにをする！」
女は、もがきつつ、ころがり落ちた。
はね起きざまに、脇差を抜いて、斬りかかった。
義太郎は、女の手から、苦もなく、小刀を奪いとると、
「小ざかしゅう、男まさりをみせて居るが、そなたは、いったい、どこから、つれて来られた女だ？」
と、にらみすえた。
「うるさいっ！」
女は、必死にもがいて、身の自由をとりもどそうとしたが、かえって、ねじりあげられた片腕が、折れる結果をまねきそうになって、すこしおとなしくなった。
「奈良城家の家中衆の中に、そなたのような女子は、いなかったぞ。云え、どこから、ひろわれて来た？」
「ひろわれてなど、来るか！ わたしは、城の姫じゃぞ！ 狼藉して、あとで、泣き面かかぬがいい」
「姫？」
義太郎は、哄笑した。
「姫とはおそれ入ったな。城に、姫と呼ばれる娘が居るわけがあるか！」
「わたしは、姫じゃ！」
「奈良城義胤に、娘などはない」
「あの老いぼれの狂人など、もう城主ではないわ！」
「乱心して居ろうと、城主は城主だぞ！」
義太郎は、むかっとして、その細手くびを、ひとねじりした。
「い、いたいっ！」
女は、悲鳴をあげた。

「云え！ おのれは、何者の娘？」
「新しい頭領——庄野四郎五郎のむすめ美代奈じゃぞ！」
女は、叫んだ。
義太郎は、吾作をふりかえった。
「まことか、吾作？」
「は、はい——」
吾作は、うなずいた。
「三年ばかり前に……、庄野四郎五郎様が、山を降りなされた時、ともないなされたのでございます」
「国で、乞食同様のくらしをいたして居ったのを、つれて来た、というわけか」
庄野四郎五郎は、どこかの国の牢人者であった。
奈良城家に随身した次第は、義太郎は、知らぬが、口舌の徒で、巧みに、父義胤に取入って、いつの間にか、納戸頭衆に加えられていた。
その新参者が、城主の狂気を境にして、家臣筆頭の地位にまで、のし上ったとは、よほどの悪智慧の働く曲者であったことである。
年寄、首名は、数人いたはずである。
それらの重臣は、いったい、どうした、というのか？
曾て、伊吹野城に在った時代は、階級、職別は、整然としていたのである。
家臣それぞれ、分を守って、くらしていたのである。
義太郎は、奈良城家中が、この山城に移ってから、奉公人の間に、どんな変化をみせたのか、見当もつかなかった。
宿老たちが、なぜ、権力を失ったのか？
諸奉行が、いたはずである。いずれも、一門衆と呼ばれてよい面々であった。それらの奉行連は、矢倉新兵衛や藤掛左馬之丞や庄野四郎五郎が、のし上って来るのを、黙って眺めていたのか？
矢倉や藤掛は、まだしも、国衆であるから、その実力によって、擡頭して来たとしても、合点できぬことはないが、庄野四郎五郎という新参者が、権力の主座を奪うのを、どうして、一門衆が、阻止できなかったのであろう。
義太郎は、想像するのも、ばかばかしかった。
「いたいっ！ はなせ！」
庄野四郎五郎の娘美代奈は、また、もがきはじめた。
「吾作——、縄はないか？」
「は、はい——」
吾作は、小舟へ走って行って、縄をもって来た。
義太郎は、それで、美代奈を、高小手に、しばりあげた。
美代奈は、地面へひき据えられると、あらん限りの憎悪をこめて、義太郎を、睨みあげた。
「おのれは、何者だ？」
「おれか——」
義太郎は、にやにやして、
「おれこそは、新しい主人だ。おぼえておけ」
「なにを、ほざくぞ！」
「奈良城義胤の嫡子義太郎が、もどって来たのだ。わかったか！」

云いざま、義太郎は、美代奈のはいている袴を、つかんで、べりっと、ひき裂いた。
ついでに、小袖の前を、むしるように、ひきはだけさせた。
太股まであらわにされて、美代奈は、「ひーっ！」と悲鳴をあげた。
「そなたを、焼こうと煮ようと、おれが奈良城義太郎である上は、自由勝手だぞ。思い知らせてくれようか！」
義太郎は、土足を、美代奈の膝のあいだへ、ねじり込ませた。
美代奈の顔面から、血の色が失せてしまった。
「よいか、女！　昨日までの乞食牢人の娘が、思い上って、姫になったなどと血迷うていたむくいを、受けろ！」
義太郎は、せせらわらった。
さすがに、気丈夫な娘も、城主のおん曹子の出現には、かえす言葉もなく、おののいた。
「ははは……」
義太郎は、冷たい笑い声をたてた。
「吾作、この葉むすめを、どうしてくれようか？」
吾作は、ただもう、小さく縮こまって、義太郎が美代奈をさいなむ光景を、息をのんで見まもるばかりであった。
美代奈は、屈辱に堪えきれず、
「ころせ！」
と、絶叫した。
ところが、そのさけびが、逆に、義太郎に、ひとつの計画を、思いつかせた。
――そうだ！
義太郎、にやりとした。
――この娘を、囮にしてくれる。
「吾作――」
「はい」
「この葉むすめを、監禁する場所はないか？」
「……」
吾作は、困惑の表情で、義太郎を仰いだ。
「それが、必要だ。さがせ」
「ど、どうなされるので？」
「虜（とりこ）にしておいて、利用する。庄野四郎五郎に、ひと泡ふかせてくれる」
義太郎は、そう云ってから、いきなり、凄じい勢いで、美代奈の顔へ、三つ四つ、平手打ちをくれた。
「贋姫め！　下手にあがくと、女のかくしどころを、えぐりとるぞ。いいか！　娘らしく、吾作に従え！　わかったか！」
「……」
「おのれの心次第では、わしの側妾（そばめ）にしてやってもよいのだ。わしは、そなたのような気丈な女が、きらいではない。……二度とは、くりかえさんぞ！　おぼえておけ！」
それから、半刻ばかり後のことであった。
義太郎は、美代奈が乗っていた馬に、うちまたがって、

落葉樹林をくぐり抜けて、山城の前面に、出現していた。
義太郎が、はじめて眺める山城であった。
城というよりも、砦といった方がよさそうな、粗末な建物や塀が、台地上にかまえられていた。
しかし、地所は、充分に余裕をとってあり、数百人が拠るには、むしろひろすぎるかとみえた。
苦心は、城の前面にめぐらした濠のようであった。これは、湖水を引き入れて、四季の増減もなく、まんまんとして石垣をあらって居り、かりに敵が攻め寄せても、五間余の幅をもった水面を泳ぎ渡らせぬように、工夫してあった。
石垣上の矢倉も、粗末ながら、おそろしく、長くつらなっている。
諸国の山城を眺めて来た義太郎は、これが、一見甚だ急造りの構造でありながら、攻めるには最もむつかしいことを、みとめた。
橋は、拮（はね）橋であった。
この橋だけは、伊吹野城のそれよりも、さらに、造りは岩乗なものであった。
義太郎は、蹄の音をたかくたてて、山城の拮橋へ、馬を駆け寄せた。
「もの申す！」
橋上へ、馬を立たせると、城内の奥までひびき渡るような大声を発した。
「奈良城義太郎、ただ今、帰着した。開門！」
城門わきの渡櫓の窓から、いくつかの顔がのぞいた。
「おっ！　若じゃ――」
「若が、もどられたぞ！」
騒然となるさまに、義太郎は微笑した。
しかし、どうしたわけか、門扉は、すぐには、開かれなかった。
そればかりではなく、急に、門内が、ひっそりとなった。
何も知らずに、到着したのであったならば、義太郎は、烈火の憤りを爆発させて、どなりたてたに相違ない。
すでに、城内に於ける下剋上の政変を知っている義太郎は、吼号するかわりに、門扉前まで馬を進めて、さっと鞍の上に立った。とみるや、ひと跳びに、櫓にとりついた。
蔀（しとみ）をけやぶって、内部に入った義太郎は、そこに立ちすくむ番士らを、にらみまわした。
「おれは、歓迎されぬ帰城者のようだな」
一人の胸ぐらをつかむと、
「城門をひらくな、と命じたのは、誰だ？　ぬかせ！」
と、叫んだ。
返辞をためらうのを、
「ぬかさぬかっ！」
と、鉄拳をくれて、ひっくりかえした。
それを足蹴にしておいて、櫓を駆け降りた義太郎は、桝形に集っている城兵の一団に向って、大股に、近づいた。
「おのれら、五年前に、おれを視た目つきとは、まるでちがって居るな。卑屈きわまる目つきだぞ！　おのれらが、これほどの腰抜けとは知らなんだぞ！」

義太郎が、迫るや、番士らは、おびえて、あとへ退った。
どの顔にも、当惑の色があった。
それが、城内の支配者は、すでに奈良城義胤ではなくなっていることを、示した。
義太郎自身、おのれが異端者であることを、感じた。
「おのれらを威圧して居るのは、庄野四郎五郎であろう。そうだな？」
義太郎の眼光に射すくめられて、一人が、うなずいた。
「庄野四郎五郎は、何者ぞ！　流れ渡りの牢人ではないか。そのような新参者に、おのれらは、屈服したのか？　伊吹野城の国衆たる誇りを、どこへすてた！」
義太郎は、一人を足蹴にし、一人を、なぐり倒した。
こうした場合、単身であることに、いささかの弱味もみせてはならぬのを、義太郎は、知っていた。
「父上の許へ、案内せい」
義太郎は、昂然と頭をあげて、命じた。
番士らは、おし黙って、義太郎を包囲するかたちをとっているばかりであった。
「案内せぬか、腰抜けどもっ！」
義太郎は、呶鳴りたてておいて、二歩ばかり、ふみ出した。
そこへ、八字髭をたくわえた武士が、いそいで、近づいて来た。
「若——。おひさしゅう存じまする」
矢倉新兵衛であった。
——こやつが、首名の座をぬすんだ一人か。」
義太郎は、憮然たる面持で、
「父上に会うぞ」
と、云った。
「ご案内つかまつる」
矢倉新兵衛は、さきに立った。
——こやつらのそっ首を刎ねてくれる機会を、近いうちに！
そう思いながら、義太郎は、あとをついて行った。
城内の眺めは、ここに、永らく籠らなければならぬためのつくりによって、ふつうの構造とは、ちがっていた。
広い畑もたがやされていたし、無数の根小屋がちらばっていた。
空堀も多く、切石を底に敷き詰めて、通路にしているのは、他の城と同様であったが、左右の斜面を、芋の葉で掩うているのは、山城らしいのどかな景色であった。
行き過ぎながら、義太郎は、山上に孤立しながら、それなりに、ここには、平和なくらしがあるのを、みとめないわけにいかなかった。
女や子供の姿も、チラホラと、眺められた。
しかし、主人の座が奪われたことと、城内の平和とは、なんの関係もないはずである。
主人が乱心したのであれば、その座を空けて、嫡子たる自分が戻るのを、待っているのが、家臣としての、つとめではなかったか。

「おい——」
義太郎は、本丸の北隅にある館にみちびかれると、門口で、新兵衛を呼び止めた。
「家老たちは、どうした？」
「は——」
「わしが帰って来たというのに、一人も、迎えに出て居らぬではないか」
この館に着くまでに、遠くに人影はあったが、みな、おびえたように、立ちすくんだり、コソコソとかくれたりしたのである。
門口は、ひっそりとしている。
「家老たちは、一人のこらず、その方らが殺した、とでもいうのか？」
矢倉新兵衛は、三人の家老のうち、一人は山を去り、一人は病死し、のこり一人も目下病臥中だ、と告げた。
義太郎は、その言葉を信じなかった。しかし、三人の家老が、もはや、目の前に現れぬことだけは、明白であった。
門を入ったが、そこにも、人影はなかった。
「どいつも、迎えには出ぬのか！」
義太郎は、いまいましく、ぺっと、唾を吐きすてた。
「後刻、集合を命じて、ご挨拶いたさせますゆえ、しばらく、お待ちのほどを——」
矢倉新兵衛は、云った。
——ぬけぬけと、申し居る！　おれが単身でもどって来たので、討ちとるのは造作のないことと、タカをくくって居るらしい。どっこい、そうは、いかんぞ！
玄関に入ると、そこに、一人の髭武者が、端坐していた。
藤掛左馬之丞であった。
挨拶するのへ、義太郎は、冷たい一瞥をくれただけで、式台へ上った。
建物は、新しかった。
寝殿造りの立派なものである。
天守を築かずに、この館に人手をかけたと思われる。
廻廊を歩き乍ら、義太郎は、片側に閉めきった檜戸のかげに、多くの家臣どもが、息をひそめているような気がした。
矢倉新兵衛と藤掛左馬之丞が、うしろを、ついて来ている。
と——一瞬。
義太郎は、檜戸の一枚を、ぱっと、ひき開けた。
二十畳ばかりの部屋は、空虚であった。
義太郎は、振り向くと、
「庄野四郎五郎が、その方らの上に、座を占めているそうだが、まことか？」
と、問うた。
矢倉と藤掛は、顔を見合せた。
「そのようなことは、ございませぬ。われら両名は国衆を代表し、庄野四郎五郎は新参衆を代表して、当城を守って居る次第にて——」
「一門衆は、一人も加えずにだな」

「若――。一門衆のかたがたは、当城には、居られませぬぞ」
「牧頼母は、どうした？」
「伊吹野城退出の際、深傷を負われて、登る途中に、相果てられました」
「富田織部は、なんとしたぞ？」
「出家なされて、叡山へお行きなされました」
「それから、三家老たちは、逃亡、死去、病臥というわけか」
「左様でございます」
「庄野四郎五郎は、なぜ、わしに挨拶をせぬ？」
「早朝より、狩に出て居ります」
「都合よく、弁解いたすのう」
　義太郎は、笑い声をたてて、歩き出した。
　廻廊から渡廊をこえて、別棟に入ると、そこに、太い格子をめぐらした座敷牢が、かまえられていた。
　義太郎は、その前に立つと、内部をすかし見た。
　広い、うすぐらい牢内の中央に、臥床（ふしど）がのべられ、ほんのわずかに、掛具が丘をつくっていた。
　義太郎は、じっと、のぞき込んで、
「父上！」
と、あらあらしい声音で、呼んでみた。
　布団の丘は、ビクリともしなかった。
「父上！　起きられい！　義太郎が、帰参いたした！」
　その呼びかけに対して、丘は、ほんのわずかに、動いたばかりであった。
　義太郎は、いら立つや、矢倉新兵衛と藤掛左馬之丞をふりかえり、
「中へ入って、ひき起してくれい」
と、命じた。
　自分が入って行くのは、そのまま、この二人に、とじこめられる危険があったので、要心しなければならなかった。
　矢倉と藤掛は、顔を見合せた。
「はやく、せい！」
　義太郎は、呶鳴った。
　やむなく、二人は、戸を開いた。
　矢倉が入って行って、掛具へ手をかけると、
「殿！」
と、ゆさぶった。
「殿――。若がもどられましたぞ。……お起きめされ」
とたんに――。
　布団の中で、破れ笛のような奇妙な悲鳴が発した。
「ゆ、ゆるして、くれ！……ゆ、ゆるせ！」
　そう叫んで、掛具をけんめいに、つかんで、縮こまっている。
　義太郎は、舌打ちした。
「ひきめくって、ここへ、つれ出せ！」
「しかし――」
　矢倉は、しかめ面になって、
「狂われている御方と、まともの対面にはなりますまい」

「かまわぬ。つれ出せ！」
　義太郎に命じられて、矢倉は、やむなく、掛具をむりやりにひき剝いだ。
　ぼうぼうと乱した蓬髪の、痩せさらばえた人間が、四肢を縮めて、そこを動くまいとするさまは、正視に堪えなかった。
　矢倉は、力ずくで、狂人を、ずるずると、ひきずって、格子外へ、つれ出した。
　義太郎は、蓬髪をつかんで、顔をひきあげてみた。
　ぞっ、と背筋を悪寒が走った。
　どす黒い皮膚に、無数の斑点が浮き、これは、まさしく、地獄図絵中の亡者であった。
　五年前の父の面影は、どこにもなかったあまりのあさましさに、義太郎は、泥でも呑んだような表情になった。
　しかし、義太郎は、糺明しなければならぬことにも、気がついていた。
　義太郎は、芋虫のように、板敷きへ俯伏した父親を、しばらく、睨み下していたが、急に、鋭い表情を、矢倉新兵衛と藤掛左馬之丞へ向けた。
「これは、ただの乱心ではないようだな。……毒を盛られて、狂った、とみたぞ！」
　二人は、さっと顔色を一変させた。
「途方もないことを！」
「なにゆえに、そのような云いがかりを！」
　同時に、二人の口から、憤然たる叫びが発しられた。
「おいっ！　わしを、五年前の青二才と、見くびったら、とんでもないまちがいだぞ！　奈良城義太郎は、むだに五年間を、流浪して居らぬぞ！」
　義太郎は、二人を、睨みつけた。
「若！　おちつかれい。お父上は、傷心のあまり、気が狂われたのでござる」
「そうは、思わぬ。父上の気象から考えて、乱心など、絶対にせぬ御仁だ。……おのれらが、共謀して、毒を盛ったに相違ないっ！」
　凄じい気勢を示す義太郎に、不意に、義胤が、しがみついた。
「ゆ、ゆるせ！……ゆるして、くれっ！……わしが、わしが、あ、あやまる！」
　焦点のない視線を、うろうろさせながら、けんめいに、わびた。
「父上！　わしが、義太郎であることが、おわかりにならぬか！　なんの許しを乞うているのだ？」
　義太郎は、いら立つと、父親をはねのけておいて、
「癈人になったものを、元通りにいたすことは、かなわぬ。……今日よりは、わしが、城主だ！」
と、宣言した。
　矢倉と藤掛は、こわばった表情で、おし黙っている。
「家臣どもを、集合させろ！」
　義太郎は、命令した。

しかし、二人は、なお、こたえようとしなかった。
「おのれら、わしに、反抗するか！」
義太郎の全身から、殺気が噴いた。
その時であった。
渡廊に、多勢の足音が起った。
――来居ったな！
義太郎は、ほぞをかためた。
先頭を進んで来たのは、長身の、恰幅のいい人物であった。
双眼に、冷たい光があった。
背後に、三十人あまりの家来をしたがえていた。
「庄野四郎五郎だな？」
義太郎は、この人物の顔には、あまり記憶はなかった。
それほど、庄野四郎五郎は、五年前は、目立たぬ新参衆であった。
庄野四郎五郎は、いんぎんに頭を下げてから、
「城の平穏をみだしにお帰りなされた、と存ずる」
と、云った。
「なにっ！」
義太郎は、かっとなった。
「もう一度、申してみよ、牢人上りめ！」
「お手前様は、父君に、そむいて、この土地を去られた御仁でござる」
庄野四郎五郎は、冷やかに、云った。
「それが、どうした？」
「この五年の間、思考の力を喪失された主君を奉じながら、われら家臣が、かような山城で、いかに生き抜くべきか――筆紙につくせぬ労をし、ようやく、自給自足の安泰を得たことを、申上げたい。勝手気ままな放浪の果てに、山へ登ってきて、自身が新しい城主だ、とうそぶかれても、それは、通用せぬことでござる」
「黙れ！　おのれは、主人に、毒を盛って、痴呆と化さしめ、佞弁をふるって、家臣一同をたぶらかし、奸計を弄して、支配の座へおさまったのであろう。家老たちを殺し、追いはらい、やがて、折を見て、父上を亡きものにして、おのれが城主となろう、と思い上って居るに相違ない」
「あらぬ妄想は、迷惑至極――。お父上と、いささか、頭脳の働きが似申したな」
「庄野四郎五郎！　わしが帰って来たので、狼狽いたしたろうな。……ひきつれて居るのは、手なずけた護衛隊か。いつの世にも、成り上りの奸物めは、心を許す側近を一人も持たず、あらゆる者を疑うあまり、四六時中、おのが身を護衛させる。……見おぼえのある顔も、相当交って居る！」
義太郎は、庄野の背後にならんだ屈強の旗本たちを睨みまわし、
「貴様ら、牢人上りの新参めの目付になって、よろこんで居るのか。恥を知れっ！」
と、呶鳴りつけた。
庄野四郎五郎は、眉宇を動かさずに、

「当城にては、若を、食客として待遇つかまつる」
と、宣告した。
「うたうな、奸物！　今日からは、わしが、城主だ！」
「あまり、事々しゅう、楯をつかれると、好まざる仕儀と相成りますぞ」
「おう――好まざる仕儀とは、いかなる処置をとると申すのだ！　やってみせろ！」
義太郎は、一歩出た。
とたんに、旗本衆から、数人が進み出て、庄野の前に立った。
義太郎は、正面に対峙したのが、かつては、小姓として、自分に、狩などには常に随っていた者であるのを、みとめて、血が逆流した。
「栗生、おのれもか！」
「若！　ここは、伊吹野城ではありませんぞ。……庄野四郎五郎殿の苦心があったからこそ、このように、大庄山上に、奈良城家の面目が保たれ、三百余の者どもが、日々を、なんの不安もなく、すごしていられるのでござる！」
「ほざくなっ！　おのれら一同、この奸物めに、たぶらかされて居るのだ！　目をさませ、目をさませ、目をっ――」
義太郎は、絶叫した。
「若――」
庄野四郎五郎が、冷やかに、呼んだ。
「休息なさる小屋は、用意いたした。そこでひとまず、心をしずめられては、いかがでござろう」
「城主は、城主の館に住むぞ。食客にするなどと、小ずるく、だまそうとしても、どっこい、そうは参らん。……おのれこそ、考えなおせ！」
「あくまで、埒もない横車を通そうとなさるなら、やむを得ませんぞ」
「どうする！　さあ、どうするのだ？」
義太郎は、よもや、若殿として仕えて来たこれら旗本衆が、自分に討ちかかるとは、思わなかった。
――やれるものなら、やってみろ！
その気持であった。
「山城の平和のためでござる！」
「わしを、討ちとると云うのか！　おもしろい！　やってみせろ！　栗生！　貴様っ、わしが討てるか！　討てるなら、討ってみろ！」
義太郎は、一歩迫った。
栗生大三郎の顔面がゆがんだ。
「来い！　勝負してくれる！」
「待たれい！」
渡廊を奔って来た者があった。
もう白髪の老武者であった。伊吹野城にあっては、旗本隊将をつとめていた蜂尾兵庫助であった。
「若！」
必死の形相で、
「は、はやまられてはならぬ！」
と、叫んだ。

「兵庫助か――。わしは、はやまってなど居らぬぞ。庄野四郎五郎めにたぶらかされた家臣一同の目をさましてくれるのだ！」

「それが、はやまったお振舞いでござるのじゃ。……いきなり、城内にお入りなされても、五年の年月をかけたくらしぶりが、お判りになる道理はござらぬ」

「兵庫！　おのれもまた、庄野四郎五郎にたぶらかされた一人か！」

「ちがい申す。この爺が、たぶらかされて、のめのめと生きのびるような卑劣者と思いめさるか。……ともかく、おしずまりなされ。この爺に、この場は、まかせて頂きたく存ずる」

なだめられて、義太郎は、ようやく、気色をしずめ、

「わしは、食客とはならぬ。これは、ことわっておく」

と云ってから、庄野四郎五郎へ、鋭い視線を向けて、

「庄野、おのれは、気丈夫な娘を持って居るな。伜でなくて、気の毒であったわ」

と、あびせた。

山城異変

蜂尾兵庫助は、義太郎を、館の奥の一室へ、ともなった。

そこは、城主の居間のようであった。

主をうしなって久しいらしく、カビくさい、しめった空気が、よどんでいた。

「若――」

兵庫助は、暗然とした面持で、義太郎を見まもった。

「思慮がなさすぎますぞ」

「あれよりほかに、奸臣めらをおさえつけるすべが、ほかにあるか」

「庄野四郎五郎は、策師でござる。若が、がむしゃらに、おさえつけようとしても、おさえつけられるものではござらぬ」

「わしは、やる。庄野ごとき新参者に、負けはせん！」

「若！　策師には、策をもって対抗いたさねばなり申さぬ」

「わしが、無策だというのか。ははは……、庄野に手出しをさせぬ手は、すでに打ってあるぞ」

「いかなる手を打たれたのじゃ？」

「庄野の娘を、虜にしてある」

「えっ？」

兵庫助は、愕然となった。

「ははは……、どうだ、わしの策は？」

「上策とは、思い申さぬ」

兵庫助は、かぶりを振った。

「ほかに、策があるか」

「若は、まだ、若すぎますわい。……当城のほとんどの者は、庄野に心服いたして居り申す。若が、新城主を宣告されても、これを、受ける者は、まず、見当り申さぬ」

「それは、どういうのだ？」

「庄野は、人心を収攬する智慧をそなえて居るのでござる。この年寄も、庄野の頭脳の前には、屈服いたすよりほかはなかったのでござる」

「……」

「若――。この山城の者どもは、もはや、伊吹野城の家臣ではござらぬ。そのことを、よく、わきまえて下されい。若は、孤立されているのでござる」

「孤立をおそれていては、何もできぬ！」

義太郎は、叫んだ。

兵庫助は、溜息をついた。

「兵庫！　生命が惜しいのか？」

「生命が惜しゅうて、申しているのではござらぬ。若のおん身を気づかっているのでござる」

「心配するな。わしは、負けはせぬ。必ず、主人の座は、うばいかえしてみせる」

兵庫助は、しばらく、考えていたが、

「それでは、ここ数日だけでも、おとなしゅうしていて下されぬか」

と、たのんだ。

「おとなしゅうして居ったら、どうなるというのだ？」

「それがしに、いささか、考えがござる」

兵庫助が、義太郎に約束させて、出て行くと、入れちがいに、庄野四郎五郎が、姿をみせた。

義太郎は、わざと、寐そべった。

「うかがい申すが、娘を、どうされたな？」

「どうされたとは、なんだ？」

「どこかへ、監禁でもされたか、おききいたす」

「知らんな」

義太郎は、そらとぼけた。

「湖畔で、娘に出会われたのでござろう。乗りつけられた馬は、娘のものでござった」

「空き馬が、うろうろして居ったので、乗って来たまでだ」

「嘘をつかれるのは、あまりお上手ではないようでござる。そのお顔に、それがしの娘を生捕ったと、書いてござる」

「お主も、娘は、可愛いであろう」

「親でござるゆえ――」

「もし、お主の娘が、監禁されていたとしたら、どう出るつもりだ？」

「若が、そのような悪党とは知り申さなんだ」

庄野の面上に、凄じい怒気がみなぎった。
「どうする？」
義太郎は、にやりとした。
「わしを殺せば、娘は、ある場所で、餓死するぞ！」
「若！」
庄野の両のこぶしが、ぶるぶるとふるえた。
「庄野四郎五郎！　わしは、新城主だぞ。それを、みとめてもらおう」
「……」
「みとめぬか！」
義太郎は、呶号した。
庄野は、苦渋の顔を、義太郎に向けて、憤怒を抑えていたが、
「みとめれば、娘をおかえし下さるのか？」
「お主の娘を、妻にしてくれよう」
庄野は、目を伏せて、しばらく、沈黙をまもっていたが、やがて、口から押し出すような語気で、
「やむを得ぬ仕儀と存ずる」
と、こたえた。
「よし、きまった」
義太郎は、庄野を、冷やかに見据えて、
「ところで、お主は、山城の一同を、いかなる口舌を弄して、心服させたか――それをきかせてもらおうか」
「誠意でござる」
「誠意だと――」
義太郎は、哄笑した。
「ふざけるな、庄野！　誠意などというしろもので、人心がつかめるか。お主が、弄した奸策を問うて居るのだ？」
「奸策など、それがしは、用いたことはござらぬ」
庄野は、にらみかえした。
これ以上の問答は無用と知ったのであろう、庄野四郎五郎は、座を立った。
「娘は、今日中につれて来て頂きたい」
「娘を、つれて来れば、わしを殺すであろう」
「……」
「当分は、娘を、某処にかくしておこう」
「そのような、無謀は、許されぬことでござる！」
「娘をつれて来た時は、すでに、わしの妻になって居る」
義太郎は、云いはなった。
庄野は、出て行った。
しばらく、そこに寐そべっていた義太郎は、頃あいを見すまして、そっと、起き上った。
広縁から、庭へ降り、中門へむかって歩き出した。
とたんに――。
身をひるがえしざま、地を蹴って、一角へ奔った。樹蔭にひそんでいた者が、あわてて逃げ出そうとするのを、一撃で、なぐり倒した。
目付の一人であった。
「庄野の犬か、おのれ！」
馬乗りになって、顔面がゆがむほど、鉄拳をくれた。

「若――。お、お待ち下され！」
悲鳴をあげながら、目付は、叫んだ。
「なにを待てとほざく！」
「犬ではござらぬ」
「犬ではない？」
義太郎は、すばやく、あたりを見まわし、
「参れ！」
と、命じた。
人目のない場所をえらんで、向い立つと、
「犬ではないのに、なぜ、わしを見張って居った？」
「蜂尾兵庫助殿より命じられて、若のおん身を――」
「守っていた、というのか？」
「はい」
「守るにしては、弱すぎるぞ」
義太郎は、あざ笑った。
「若は、ご存じありませぬのか？」
「何をだ？」
「屈強の若い衆は、山城には、居らぬのでござる。庄野殿を護衛する旗本衆三十騎をのこして、みな城を出て居ります」
「どこへ参って居るのだ？」
「道つくりでござる」
「わしが登って来たけもの路には、人影もなかったぞ」
「道は、あらたに、密林をきりひらいて、つくって居ります。降りるはたやすく、登るのは困難なように――さまざまの障碍を設けているのでござる」
「道をつくって、どうする所存だ？」
「若――。山城には、もはや、あと一年も、くらす兵糧は、ないのでござる」
目付は、こたえた。
「なに！　それは、まことか？」
義太郎は、愕然となった。
「ごく少数の人々しか、知っては居りませぬが、まことでござる」
「そうか。しかし、下界に、食いものはないぞ」
「は――？」
「兵庫助は、どこだ？」
「おのが小屋かと存じます」
「案内せい」
蜂尾兵庫助の根小屋は、密林をへだてて、砦をなした東南の一角に存（あ）った。
平地はすべて、たがやされ、野菜がつくられていた。
小者たちが、数人そこで立ち働いていた。
義太郎が、小屋に入ってみると、兵庫助は、薬草をきざんでいた。
義太郎は、前に坐ると、
「道をつくって居るそうだな？」
「目付が申しましたか」
「道をつくって、伊吹野へ、糧秣を奪いに行く所存か？」
「いずれ、伊吹野城を奪いかえさねばなり申さぬ」

「兵庫にだけ、打明けてやる。伊吹野城は、焼け落ちた」
「えっ?! そ、それは、まことでござるか?」
「田丸豪太夫は、家臣大半にそむかれ、翼をもがれた猛禽よ。これを、ふみつぶすには、手勢百もあれば足りる」
「何者に、襲われて、炎上いたしましたか?」
「わしを、ここへ案内してくれた黙兵衛の話では、京から下って来て、公卿館の食客になった天満坊という乞食坊主のしわざ、と申していたな。飢えた窮民どもをかき集め、これを軍勢とみせかけて、巧みに、豪太夫を城外へおびき出し、その隙に、城に火をかけられたらしい」
「城内には、おびただしい糧秣のたくわえがあった由でござるが……、それも焼けましたろうか?」
「百姓どもが、掠奪したようだぞ」
「まさか――?」
兵庫助は、首をかしげた。
それから、鋭い表情になって、
「若――。たとえ、地上の建物は、焼け落ちても、田丸豪太夫は、城を出て行きはいたしますまい。……伊吹野城には、地下に、秘密の広い倉がござる」
「わしは、知らぬぞ」
「殿とわれら数人の者しか、知り申さぬ。……その倉に、豪太夫は、豊富な食料をたくわえて居るに相違ござらぬ」
「……?」
兵庫助は、つづけた。
「地上に在った倉にも、多量の糧秣がたくわえてあったに相違ござるまいが、それを、ことごとく奪われても、豪太夫は、ビクともいたしますまい。地下倉には、それに数倍する食料がたくわえてあるはずでござる。……ところで、その地下には、城外からの地下道が、掘り抜かれてあったことを、若は、ご存じござるまい」
「地下道が――?」
「左様――。お父上は、用意周到のお方でござった。伊吹野城を築かれる際に、ついでに、城外へ脱出できる地下道をも、掘り抜かれたのでござる。……畜生薮が出口でござった」
「そうか――。わかったぞ。黙兵衛が、畜生藪の中で、悠悠とくらして居ったのは、その抜け道を知っていたからに相違ない。それをくぐって、糧抹をぬすんでいたものであろう」
「若が、三十騎も率いて行かれるならば、伊吹野城を奪取することは、造作もござらぬ。田丸豪太夫が、まだ、その地下道を知って居らぬのが幸いでござる」
「地下倉の糧秣取りの道づくりか」
義太郎は、ちょっと考えていたが、
「兵庫――。きくが、庄野、矢倉、藤掛の三奸臣の横暴を、このまま、黙過して居るわけではあるまいな? 時節が到来すれば、彼奴らを討つ存念は、あろうな?」
「……」
「兵庫、返辞をせい」
「若は、気早やにすぎますぞ」

「ははは……、兵庫、存念は読めた。……わしが、決行する時は、家臣どもを説き伏せい」
義太郎は、云いおいて、小屋を出た。
城を出た時、義太郎は、馬上の人となっていた。
風の迅さで、疾駆して行く義太郎を、たとえ追おうとする者があったとして、それはかなわなかったであろう。
密林の中の杣道を駆け抜けると、樹木が一本もない草原へ出た。
それを、まっしぐらに横切って行った義太郎は、ふたたび、密林に入った。
密林は、千仭の断崖で切れていた。
断崖ぶちで、馬をすてた義太郎は、
「吾作!」
と、呼んだ。
「吾作は、どこだ?」
こだまが、かえって来て、しばらくしてから、とある巌のあいだから、吾作の首がのぞいた。
「ここでございますよ、若――」
義太郎が近づいてみると、巌の下面が、くり抜かれたような通路になっていた。
それを抜けると、截り殺がれた絶壁に、岩の頭が、のぞいて居り、それに、藤かつらで編んだ桟道が渡してあった。
その桟道を渡って行くと、とある部分が、そっくり、丸くえぐりとられたように、凹みがつくられ、小屋ひとつ建てられるほどの空地ができていた。
そこに、かなりの大きさの洞窟があった。
原始時代に、けものどもと闘った人類のすみかであろう。
「どうした、娘は? おとなしゅうして居るか?」
「あきらめた様子でございます」
「じゃじゃ馬を、これから、牝らしゅう馴らしてくれる」
義太郎は、笑って、吾作を、桟道にのこしておいて、空地へ、降り立った。
その瞬間であった。
洞窟の中から、鹿がはねるようなしなやかで敏捷な速影が、義太郎めがけて、躍りかかって来た。
「おろか者っ!」
義太郎は、娘の手にひらめく白刃に、いささか狼狽して、どなった。
もし、これをかわせば、速影は、そのまま、勢いを止められずに、断崖から、空中へ、とび出してしまうであろう。
やむなく、義太郎は、一歩も動かずに、この突進を、受けた。
しかし、義太郎は、兵法者ではなかった。とっさの間に、無手で、この必殺の白刃を奪いとる業をそなえてはいなかった。
ひらめいて来る白い光にむかって、拳をふるって、はねとばそうとした。
ぐさ、と二の腕へ突き刺さる衝撃に、
「うっ!」
と、うめきつつ、義太郎は、一方の拳で、娘の顔面を、

なぐりつけて、足元へ、ころがした。
それから、流石に一呼吸してから、短剣を、二の腕から抜きとり、
「勇気のほどは、ほめてくれる」
と、云った。
庄野四郎五郎の娘美代奈は、烈しくあえぎながら、
「ころせ！」
と、絶叫した。
こだまが、こだまを呼んで、遠方へ吸い込まれて行った。
「ははは……、せっかくの虜を、むざと殺してなるか。……美代奈と申したな。そなたの父に会うて、そなたを、わしの嫁にしてくれる、と宣言して来たぞ。安んじて、わしに抱かれるがいい」
「いやだ！　死んでも、いやだ！」
「ははは……、いまに、死んでも、はなれたくなくなるぞ」
義太郎は、いきなり、美代奈へ、当て身をくれて、気絶させると、かつぎあげて、洞窟の中に入った。
内部は、ひんやりとして、住み心地はよさそうであった。
十歩も奥に入ると、けものの皮が敷かれ、さまざまの道具も置かれていた。
義太郎は、美代奈を、そこへ、横たえさせると、二の腕の傷の手当をした。
手当を終えて、ふと、視線を落すと、美代奈が、意識をとりもどして、じっと、睨みあげていた。
「わしが。憎いか？」
「……」
「憎まれる理由はないぞ」
「……」
「そなたの父は、主君であるわしの父に、毒を盛って発狂させ、家臣の主座によじのぼった奸臣だぞ」
「ちがいます！」
美代奈は、起き上って、じりじりと、あとへ退った。
「わたしの父は、そのような悪事は、行いませぬ」
「では、どうして、牢人上りの新参衆である庄野四郎五郎が、山城の主権をつかんだのだ？」
「それは……、父が、経営の才があったからなのです」
「譜代の老臣らが、三名とも、いなくなったのは、どうしたわけだ？」
「そんなことは、知りませぬ」
「わしが、もどって来ても、城主の座に据えようとは、せなんだぞ！」
「貴方様は、奈良城家を、家来を、すてた御仁です」
「もどって来たではないか」
「五年前とは、事情が一変して居ります」
「だまれっ！」
義太郎は、美代奈に、とびかかって、ねじ伏せた。
美代奈は、すこしばかり抵抗したが、すぐ、敵わぬとさとったか、力を抜いて、まぶたをとじてしまった。
義太郎は、残忍な欲情にかられるままに、その帯をむしり取り、衣服の前を、ひきはだけさせた。

仄暗い洞窟の中で、美代奈の肌は、幻のような白さであった。
肉（しし）のりはゆたかで、その白い肌に落ちた陰翳が、なまめかしく、美しかった。
「わしのものにするぞ！」
義太郎は、わざと大声で叫んだ。
美代奈は、死んだように、動かなかった。
義太郎は、その胸の隆起のひとつを、わしづかみにした。
「……あ！」
本能的な悲鳴をあげつつも、美代奈は、ひしと、まぶたを閉じていた。
まぶたを開かぬのが、唯一の抵抗のようであった。
義太郎は、野獣のように、白い肌をむさぼりはじめた。
美代奈は、ついに、さいごまで、なんの反応も示さなかった。

山城の本丸にあたる建物の奥では――。
庄野四郎五郎、藤掛左馬之丞、矢倉新兵衛の三重役が、鼎坐していた。
いずれも、にがりきった面持であった。
営々として、この五年間、山城に、平和なくらしを保つことに努めて来た三重役であった。
下界と全く隔絶した山上で、数百人が生きのびるためには、筆紙につくせぬ苦労をはらわねばならなかった。
伊吹野城で、のんびりとくらしていた重臣たちの力をもってしては、とうてい、きり抜けられる困難ではなかったのである。
庄野四郎五郎は、伊賀国育ちで、山中のくらしには馴れて居り、敵勢に包囲された山頂の砦で、一年も籠った経験の持主であった。
その経験を生かして、大庄山で生きのびる方策をたて、実行して来たのであった。
庄野が中心的人物となったのは、当然であった。
狂気した城主の嫡男が、ひょっこり帰って来て、
「わしが新城主だ」
と、うそぶいても、それをすぐに受け入れるわけには、いかなかった。
「庄野殿――」
矢倉新兵衛が、口をひらいた。
「決断をお願いいたそう」
藤掛左馬之丞が、その言葉に合せて、
「やむを得ぬ仕儀かと存ずる」
と、云った。
「いや――」
庄野は、かぶりを振った。
「当城が、奈良城義胤所有であることは、誰人もみとめて居るところゆえ、その嫡子がこれを継ぐのは、なんのうたがいもない。……それを受け継がせずに、弑逆することは、ゆるされまい」
「しかし、このまま、義太郎殿を主座に据えては、山城の

経営は――われわれの今日までの苦心は、水泡に帰す」
「と申して、主君の嫡子を弑逆すれば、われわれは、逆臣と相成る。家臣らのうちには、われわれに、必ずしも、心服している者ばかりは居らぬ。二派にわかれて、反目しあうようになれば、これは、一大事と相成る危険がある」
　三重役は、ふたたび、沈黙を置いた。
　藤掛が、急に、思いついたように、
「では、こういたそう。義太郎殿に、新城主たるには、それだけの器量を、発揮してもらうことは、いかがか？」
「と申すと？」
「伊吹野までの新しい道が通じたならば、義太郎殿に、三十騎あるいは四十騎を与えて、伊吹野城へ潜入してもらう。首尾よく、田丸豪太夫を討ちとることができたあかつきには、伊吹野城の城主として、われわれは、仰ぐことにする」
「成程――」
　庄野四郎五郎は、藤掛左馬之丞の提案に、合点した。
「新城主たる面目を示してもらえるならば、われら一同も、納得いたすことになる」
「もし、義太郎殿が、田丸豪太夫から、返り討ちにあえば……、それは、それまでのこと。ともあれ、義太郎殿に、大将たる器量を示して頂くことにいたそう」
　三重役の議は一決した。
「ところで――」
　矢倉新兵衛が、心配そうな表情で、庄野を視た。
「美代奈殿は、いかがされたか？　義太郎殿が、なにやら、意味ありげな皮肉を云われて居ったが……」
「どうやら、虜にされて、どこかに監禁されて居るらしい」
　庄野は、こたえた。
「不埒な！……義太郎殿に談判されるべきであろう」
「談判しても、解き放ってはもらえまい、と存ずる」
「しかし――」
「しばらく、知らぬ顔をいたしておこうかと、思って居る」
　庄野は、沈痛な様子で、云った。
　矢倉も藤掛も、庄野が、娘の美代奈を、いかに愛しているかを知っていた。
　肚裡では、にえくりかえるほどの憤怒を持っているであろう、と察しがついた。
　おちついているのが、ふしぎなくらいであった。
「義太郎殿が、美代奈殿を釈放するまで、黙って居るおつもりか？」
　藤掛が、いたましそうに、問うた。
「それよりほかに、すべはござるまい」
「それでは、さんざもてあそばれることに相成り申すぞ」
「美代奈が、義太郎殿に出会うたのが、不運であった、とあきらめるよりほかはない」
　庄野四郎五郎は、薄気味わるいくらい、冷静で沈着であった。
　矢倉と藤掛が出て行くと、庄野は、はじめて、他人に見せぬ凄じい形相になって、宙の一点をにらんだ。
「青小僧め！」

八つ裂きにしてやりたいほどの憤怒を、炎のように面上から、噴き出させた。
　腹心の部下が三名、音もなく、入って来た。
「八方をさがしまわりましたが、いまだ、どこに、監禁いたしたか、見当がつきませぬ。あと一日のご猶予を――」
と、一人が、乞うた。
「義太郎殿が、山上の地勢に通じて居るとは思われぬ。あるいは、味方して居る者が居るやも知れぬ。城内の者どもにも、監視の目をおこたらぬがよい」
　庄野は、そう命じた。

公卿軍勢

　かわききった街道を、十人を一伍とする軍兵が、黙々として、進んで行く。
　右方に、松林をへだてて、海原がひらけている。
　天も地もかわききっているために、海原もまた色あせたようにみえる。渡って来る風も、むし暑く、土ぼこりを吸いあげて、巻きあげる役にしか立たない。
　隊伍は、およそ五百――五陣にわかれているが、いかにも、くたびれた行軍であった。
　先陣につづいて、輿が一列につらなっていたが、これは、軍勢にふさわしからぬ人々が乗っていた。
　烏帽子に直衣（のうし）すがたの公卿が三人――眉をそりおとした生白い殿上人（てんじょうびと）たちが、いかにも、つかれた様子で、ゆられていた。
　そして、そのうしろの輿には、女官が七人、いずれも、炎天の下の長旅に疲れはてて、ぐったりと脇息によりかかっているのであった。
「あ、あついの」
　先頭の輿の公卿が、堪えがたそうに、つぶやいた。
「まだ、遠いのであろうか？」

うしろの輿の公卿が、同じくあえぎの声をあげた。
「四王天！……四王天！」
前の公卿が、のびあがるようにして、呼んだ。
脇を歩いていた公卿ざむらいが、
「呼びまするか？」
と、たずねた。
「うむ。これへ――」
公卿ざむらいが、先陣へ向って、走って行くと、ほどなく、長髯の武者が、具足を鳴らして、ひきかえして来た。
「御用でござるか？」
「延正――、伊吹野は、まだ、遠いのか？」
「いや、もう四里ばかりに、近づき申した」
四王天延正という武者は、こたえた。
「四里もか」
殿上人は、うんざりした声音をもらした。
「たかが四里でござる。辛抱めされ」
四王天延正は、あきらかに、公卿衆を、軽蔑しきっている態度を示した。
「たのむ。……ここらあたりで、しばし、休息いたそう」
「陽が高いうちに、いそがねばなり申さぬ」
「し、しかし……、女官たちが、もう、これ以上は、堪えられまい」
たしかに、輿は、見かけたところは楽なようであったが、始終ゆれつづけて、疲れるものであった。
「ぜいたくを申されるな。徒歩の者どもの苦しさを、お考えなされい」
「わかって居る。……しかし、かよわい女官たちのことを、察してくれい。たのむ。ほんの四半刻でよい」
公卿は、たのんだ。
「それでは、少時の休息をつかまつろう」
四王天延正は、馬首をかえすと、先陣へもどり、
「止まれ！　休息だ！」
と、叫んだ。
先頭を進んでいた同じく長髯の武者が、ふりかえって、
「ばかな！……なんのための休息だ？」
と、睨んだ。
「中納言殿のたのみだ」
「なに！」
四王天延正とともに、この軍勢の指揮にあたる鷹森周防は、短気らしく、かっと目をひきむいた。
「周防――。ここらあたりが、ちょうど、場所としては、おもしろいぞ」
四王天延正は、意味ありげに、にやりとした。
「なんだと？」
鷹森周防には、すぐに、その意味が通じないようであった。
「かねて、思案のことだぞ」
「うむ。そうか！」
周防は、合点すると、
「よし！　やろう！」

即座に、肚をきめた。
四王天延正は、大きく片手をさしあげて、振った。
「休息っ！」
全軍の足が、停められた。
兵たちは、思いがけぬ小休止を命じられて、おのおの松の木蔭をもとめて散らばって行った。
四王天延正と鷹森周防は、何ごとかを私語していたが、すぐに、一騎に命じて、各隊の隊長たちに、集合を伝えさせた。
輿の公卿たちは、隊長たちのあわただしい動きを、べつに気にもとめずに、仕丁に、湯をわかさせたり、薄茶を挽かせたりして、浜辺に出て、茶の湯をたのしもうとする模様であった。
四王天延正は、各隊長が集まると、険しく光る視線をめぐらして、
「ここで、あらためて、申すまでもないことだが、われらは、定住の国をもとめてさまようて居る、いわば、亡霊にひとしい軍勢だ」
と、云った。
どの隊長の顔にも、それを肯定する暗い表情があった。
延正は、つづけた。
「われらは、五摂家守護のために、三管領より遣わされた、寄合の軍勢であった。ところが、三管領が、京の都をすててしまったために、やむなく、一個独立したものとなって、五摂家に仕えるかたちをとらざるを得なくなった。しかし、われらは、あくまで、五摂家の家来ではない。三管領より遣わされた武辺者である。このことを、おのおのもまた、忘れては居るまい」
「さればと申して――」
隊長の一人が、声をあげた。
「われらが主人は、すでに、管領の地位を追われ、われらがことは忘れはてて居り申す」
「うむ、その通りだ。おのおのは、のこらず、主人をうしなった」
四王天延正は、にやりとしてみせた。
「申さば、主家を喪った者どもが、五摂家守護という名目だけをのこされて居る。その五摂家もまた、衰微した皇室を守護し奉る力も失って、朝臣にもあるまじく、都をすてて居る。さりとて、皇室の御料地たる能登、加賀、越前、摂津、丹波、美濃の国々は、すでに、大名どもの押領するところとなり、行ってこれを領する余地はない」
「では、何故に、この永旅を、されて居るのか？　われわれは、禁廷御領地へ参るものと存じて、従って参り申した」
「そのことだ――」
延正は、目顔で、一同に、もっと近くに寄るように命じた。
「四里のむこうに、伊吹野という一国があることは、すでに承知であろう。数十里にわたる肥沃の平野は、しかし、それがしの調べたところでは、水一滴もない荒土と化して

居る。にもかかわらず、東山中納言殿は、伊吹野を、目ざして居られる。……それがしが、生きる能わざる荒野である、と忠告いたしたにもかかわらず、頑として、伊吹野へ行け、と命じられた東山中納言殿には、われらにかくした秘密がある、と察した。……この秘密は、何であったか？」

延正は、思わせぶりに、一同を見まわした。

どの隊長の顔も、好奇の色を示した。

東山中納言は、五摂家（近衛、九条、二条、一条、鷹司）の間に立って、それぞれの家領を差配する人物であった。

五摂家の家領は、あちらこちらにちらばっていたので、その水損や干損などの処置に、直接摂家自身でかかずらうことはなく、差配にまかせきりであった。

しぜんに、差配の東山中納言は、実際上の権力を得ていた。

尤も、戦乱がうちつづくうちに、家領からの収入も、目に見えて減少し、いまでは、一粒の納米もせぬ土地さえあり、差配人としての権力もあやしいものになっていたが、五摂家としては、差配人を責めるよりも、機嫌をとらねばならぬなさけない状態であった。

東山中納言は、三管領から遣わされた軍勢を、家領を守るという名目で、わが下に置いていたが、先月末、突然、家領見廻りの布告を出して、自ら都を出て来たのである。

めざすのは、五摂家の家領ではなく、伊吹野であった。

その伊吹野に、東山中納言は、何か秘密の目的を抱いている。

「四王天殿は、中納言の秘密をさぐりあてられたか？」

隊長の一人が、のど奥を鳴らしてから、問うた。

延正は、ふたたび、にやりとした。

「中納言殿がひきつれて来た御所の六位蔵人壬生（みぶ）なにがしの口をひそかに割らせてみた」

一同は、息をのんだ。

「壬生が申すには、二十年のむかし、五摂家では、兵火をまぬがれるために、財宝をひとまとめにして、ひそかに、都から何処かの国へ、運ばれた、という。あるいは、その財宝が、伊吹野にかくされているのではあるまいか、と――」

延正は、そう告げてから、あらためて、隊長たち一人一人の顔を、ゆっくりと見まわした。

「もし、これが事実とすれば、おのおのは、どう考えるか――その意見をきこう」

延正に、指名された一人は、

「五摂家守護の役なれば……」

と、こたえた。

これをきくや、鷹森周防が、高い笑い声をたてた。

「はっはっは……、東山中納言が、その財宝を、五摂家から命じられて、取りにきたと思っているのか、お主は――。老人の甘さも、程があるぞ」

「では、中納言が、一人占めされるこんたん、と看られるのか？」

「あたりまえではないか。東山中納言の強欲を、お主は知らんか」

「それは、許せぬ」

その隊長は、憤然となった。

次に、延正から、指名された者は、

「二十年前と今日では、禁廷の事情は一変いたして居り申す。五摂家が、皇室を守護なされて居るのなら話は別でござるが、どの家も、おのれをまもるに必死のていは、あさましい限りでござる。財宝を返す必要は、さらにござるまい」

と、云った。

さらに、次つぎと、意見が出された。

大半の者が、その財宝は、もはや、五摂家のものとみなすことはない、という意見を述べた。

四王天延正は、ききおわると、

「われらは、まず、われら自身が、生きのびることを考えねばならぬ。東山中納言殿が、私利私欲のために、われら一軍を動かしているとすれば、これは、許されぬ。……それがしと鷹森周防は、この場に於て、東山中納言を糺問いたそうと思う。場合によっては、非常の手段をとるやも知れぬが、その時、おのおのは、かまえて、兵の動揺を抑えてもらいたい。……いかがだ？」

流石に、一同は、沈黙した。

下剋上の世の中であった。家来が、主人を倒すことは、珍しくはなかった。

しかし、武士はまだ、公卿に対して、無条件な敬意を抱いている時世ではあったのである。

ところで――。

輿の女官の中に、一人、目ざめるように美しい上臈が交っていた。

まだ、十七八歳であろう。

あまりに、肌白く、眉目がろうたけて完全であると、いっそ、いのちが、はかなげにさえ思われる。

烈しく灼きつける初夏の陽ざしに、透き通るような肌は、堪えられぬか、とみえる風情であった。

老いた老女がかしずいていたが、なにか云いかけられても、なかば放心気味のまなざしを、松の枝ごしに望む海原へ送って、沈黙をまもっている。

「美夜――」

むこうの輿から、東山中納言が、呼んだ。

「浜の砂地で、茶の湯をしようぞ。……参れ」

美夜と呼ばれた上臈は、その言葉も、きこえぬように、眸子（ひとみ）をじっとうごかさなかった。

東山中納言は、美夜の伯父であった。自分に子のない中納言は、美夜を、わが娘のように、慈愛をそそいでいた。

「姫さま――」

侍女が、声をかけた。

「中納言様が、茶の湯をしようと、仰せられて居ります」

「え――？」

美夜は、われにかえって、
「茶の湯を？」
びっくりして、伯父の方を見やった。
いくつかの山を越えて来るあいだに、渓谷にはしだいに汲むべき水がなくなって、いま、後備の小荷駄の水は、極度に節約しなければならないくらい乏しくなっていたのである。
兵らは、この休憩の時間にも、水を与えられてはいなかった。
渇えた兵らに、茶の湯の催しを見せつけるのは、あまりに、むごいのではあるまいか。
美夜は、かねてから、下の者に対して、いささかも心をつかわぬ伯父の冷酷な気象が、好きではなかった。
しかし、伯父に命じられては、従わざるを得なかった。
輿を降りて、歩き出した時、近くに憩うていた兵たちが、一斉に、視線を集中した。
「……まるで天女じゃのう」
「目がくらんで、いよいよ、のどがかわくわい」
そんな声が、美夜の耳にとどいた。
松林の中には、緋毛氈が敷かれ、茶の湯の道具が配置されてあった。
そこから、渚までは、かなりの距離であった。
渚までの砂地が、目にいたいほど白く、いちめんに、貝がちらばって、美しく光っていた。
「さあ、ひとつ、たのもうぞ」
東山中納言は、どっかと、緋毛氈の上に腰を下した。
「伯父上様――」
美夜は、中納言のむかいに坐って、心の重い面持になり、
「水が乏しい、ときいて居ります。このような催しを、兵らに見せては、うらみを買うのではありますまいか？」
と、云った。
「なにを申す。むだな心をつかわぬがよい。そなたは、近頃、なにやら、心細げな浮かぬ顔をして居るが、加減でもわるいのではないか？」
「いえ、そんなことは、ありませぬ」
「すべては、わしにまかせておけばよい」
他の公卿が、座についてから、風流の宴がひらかれた。
東山中納言は、こうした催しのための品ものを、ことごとく、小者に持参させていたのである。
横笛や、箏や鼓や太鼓まで、用意されていた。
中納言は、茶の湯がおわると、
「ひとつ、幸若でもやろうかな」
と、かたえの同じ羽林家の少将たちに、連を所望した。
笛が吹かれ、太鼓が鳴らされはじめた。
中納言と少将たちは、都を出る時おぼえたばかりの「夜討曾我」を、舞いはじめた。
これを、街道の左右に憩うていた兵たちは、望見して、
「ちえっ！　いい気なものだのう」
「くそ、莫迦にしてやがる。今夜のねぐらもきまって居らぬに、なんのざまだ！」

と、口々にののしりはじめた。
そして――。
先陣で、座を組んでいた隊長たちは、人もなげな公卿たちの振舞いに、非常の決意をかためた。
「四王天殿――」
隊長の一人が、代表して、声を発した。
「東山中納言に、非常の手段をとられること、われわれ一同、見て見ぬ振りをつかまつろう」
「うむ――では」
延正がうなずいてみせると、隊長たちは、一斉に起って、馬を駆けさせて、おのおのの隊へもどって行った。
風流の座では、美夜だけが、武者がたのせわしい動きに、不安をおぼえた。
中納言はじめ公卿たちは、幸若舞いに、夢中であった。
「鷹森――やるぞ！」
四王天延正は、云った。
「うむ。……もし、斬る時は、わしに、やらせろ」
鷹森周防は、そう云って、にたりとした。
無数の戦場を駆けめぐった荒武者であった。人を斬ることなど、大根を切ることぐらいにしか思っていなかったし、公卿に対する尊敬心も持ってはいなかった。
恰度――この時。
かなり、沖あいに、釣り舟が、波にゆられていたが、胴の間に寝そべっていた釣り人がむっくりと起き上った。
九十九谷左近であった。
「勘念――」
東の岬のかげにある古刹の納所が、いまでは、左近の唯一の家来になっていた。
坊主あたまに、鉢巻をして、舟をこいでいた。
「猿楽の音が、きこえるぞ」
「きこえますな」
「地獄の野で、猿楽をやっているとは、解せん」
勘念は、目をほそめて、陸地へ、じっと視線を送っていたが、
「軍勢でござる」
と、告げた。
「軍勢？」
左近も、目をこらした。
彼方の松林のむこうに、旗幟が見わけられた。
「なるほど――軍勢だな。伊吹野へやって来る軍勢がいたとは？」
「伊吹野城が焼け落ちたときいて、隣国の大名が、奪いにやって来たのでござろうか？」
「荒廃した野のまん中にある焼け城を奪ったところで、どうなるものでもあるまい。土地をもとめてうろついている落人の群だろう。……舟を寄せてみるか」
「危険ではありませぬかな？」
「小魚を二三尾ころがしてあるこの小舟に、なんの危険がある。寄せろ」
左近は、命じた。

左近は、多門夜八郎に、決闘を挑んで敗れ、手負うて、その寺院によろけ込み、居候しているうちに、この勘念を、家来にしたのであった。

古刹には、九十にもなろう住職がいたが、左近が、身を寄せて、数日経たぬうちに、他界したのであった。

いまでは、そこが、左近のねぐらになっていた。

左近が、いまなお、伊吹野を見すてずに、とどまっているのは、ふたつの理由があった。

多門夜八郎に、再度の決闘を挑むこと。これがひとつ。

もうひとつは、公卿館のあるじ泰国清平が、おびただしい金銀をどこかに隠匿している事実を、たしかめること。あわよくば、それを、奪いとってやろうという野心を起しているのであった。

「落人の群なら、餌を与えてやれば、一躍、大将になれるかも知れぬ」

左近は、つぶやいた。

兵法者として、剣ひとすじに生きようとしていた左近の心中に、いつの間にか、変化が起っていた。

左近の釣り舟が、渚ぎわまで近づいた時であった。

東山中納言の舞う緋毛氈のまわりを、四王天延正、鷹森周防はじめ、十数騎が、どやどや、とりかこんだ。

中納言も、少将らも、自分たちの幸若を、見物に来たのだと思い、得意げに、舞いつづけている。

延正が、ずかずかと、緋毛氈の上へ、土足をふみ込ませて来た。

「なんじゃ！」

中納言は、かっとなって、

「無礼であろうぞ、四王天！」

と、叱咤した。

「中納言殿に、うかがいたい儀がござる」

「だまれ！　われらが愉しみをさまたげ居って――下れ！　下れっ！　無礼者めが――」

中納言は、いきなり、扇子で、延正の顔をひっぱたこうとした。

延正は、すかさず、むこう臑を蹴とばした。

中納言は、ぶざまに、ひっくりかえった。

「な、なにを、いたす？」

中納言の顔には、はじめて、恐怖の色が刷かれた。

「おとなしゅうされるなら、生命をいただこうとは申さぬ」

「いったい、こ、これは、なんの謀叛じゃ？……われらを、なんとするのじゃ？」

「中納言殿。まず、用件を申す前に、知っておいて頂こう。……お主らは、ここでは、公卿の威光など、螢の明りほどもなくなって居るのだ。そこいらの小者、雑仕のたぐいと、なんらかわって居らぬ腰抜けでしかない。このことを、しかとおぼえておいてもらおう」

そうあびせられて、中納言はじめ公卿たちは、おののいた。

「たったいままで、大層に威張りかえって、われわれを家来のように、あごで使って来たが、笑止と申すほかはない。京を出た時に、すでに、お主らは、あわれな木偶（でく）と化して居ったのだ。それに、気がつかなかったおろかさを悔いるがよかろう」

「な、なにが、恨みで、このような、叛心を起したのじゃ？」

「叛心？　まだ、目がさめぬか！　この軍勢を率いるのは、お主ら腰抜け公卿ではないぞ！　この四王天延正だ！」

「な、なんという、横暴な！」

「ほざくなっ！　地べたに跪（ひざまず）いて、生命乞いをするのを忘れるな！　よいか！　軍勢の大将として、お主に、尋問することがある。つつみかくさず、こたえい。もし、ごまかす時には、そっ首を刎ねるぞ！」

延正は、いきなり、ぱっと抜刀してみせた。

中納言たちは、悲鳴をあげた。

「よいか！　かくすな！　ありのままを、こたえい。……伊吹野は、旅人の噂によれば、水一滴もなく荒土と化して居る。それを知りつつも、お主は敢えて、そこへおもむこうとして居る。何かのこんたんがあってのことに相違あるまい。……白状せい！」

四王天延正は、東山中納言を睨みすえて、呶鳴った。

「伊吹野は、これまで、一度も兵火に遭わなかった土地ときく。雨が降らぬのは、日本全土じゃ。明日にも、雨が降れば、伊吹野は、ふたたび、沃野にもどろう。……伊吹野を、しばらくのすみかにするのに、なんのふしぎがある。あらぬ疑いをかけるのは、武家と申す者の悪癖であろう」

「はっはっは……。公卿の口舌にだまされるほど、この四王天延正は、甘くできては居らぬぞ」

延正は、いきなり、中納言の肩を蹴った。

「な、なにをいたす！　無礼な！」

中納言は、恐怖と憤怒で、真っ青になった。

「おそろしいか、中納言？……お主ら堂上は、生れて一度も、生命の危機にさらされたこともなく、ぬくぬくと、酒をくらい、女を抱き、猿楽を舞うて居った。ここらあたりで、一度、斬られるおそろしさをあじわってみろ」

延正は、中納言の鼻さきへ、白刃をつきつけた。

「わしを、斬って、なにになるのじゃ？」

「伊吹野へ参ろうとするこんたんを白状せぬかぎり、お主のそっ首を刎ねることぐらい、大根を切るよりも造作はないぞ」

延正は、太刀を、ふりかぶってみせた。

中納言は、悲鳴をあげた。

他の公卿たちは、地べたへ、額をこすりつけた。

「ゆ、ゆるせ！」

中納言は、見栄をすてて、合掌した。

「では、白状せい」

「四王天――。わしを、責めて、なにを、云えと申すのじゃ？」

「公卿という奴は、首を刎ねられようとしても、なお、たぶらかそうとする小ずるさをすてぬ。……知って居るのだ

ぞ、中納言」
　延正は、にやりとした。
「伊吹野にある公卿館に、五摂家がはこんだ金銀を、お主は、ねらって居ろう。……どうだ？」
「……」
　中納言は、愕然となって、少将たちを見まわした。
　この中に、自分を裏切った者が居るのではなかろうか、と猜疑したのである。
　延正は、その様子を眺めて、せせら笑った。
「中納言！　お主が、都を出る時から、このことを、それがしは、知って居ったぞ。……どうだ！」

火辺水辺

　東山中納言は、屈服した。いや、そうみえた。
「武力の前には、われらも敵わぬ。四王天――、そちの申し条に従おう」
　中納言は、云った。
「公卿館に、五摂家の金銀が、預けられてあることは、やはり、まことであったのだな？」
「相違ない。……但し、公卿館の泰国清平と申す者、なみなみならぬ気骨の郷士ゆえ、なまなかのことでは、口を割らせることはできぬ」
「ははは……。こちらには、五百騎がござるぞ」
「四王天――。泰国清平を斬るは、たやすい。口を割らせることは、困難じゃ、と申して居るのじゃ」
「中納言殿には、口を割らせる策がある、と申されるのか？」
「あるからこそ、はるばると、参ったのだ」
「どうかな」
　延正は、侮蔑の目をくれて、
「ともかく、いまから、お主らは、われわれの指揮に従う。一挙手一投足たりとも、おのが自由にはならぬ。輿などは、

もってのほかだ」
「われらに、歩けと申すのか？」
「馬をくれる、といっても、馬には乗ったこともない、なさけない御仁だからのう。歩いてもらうよりほかはない」
「そんな、無茶な！　ひどいではないか！……馬でよい。馬をくれ」
　中納言は、いざって、延正の前に寄ると、鎧の草ずりをつかんだ。
　いかにも、惨めで、卑屈な哀訴ぶりであった。
　それが、つい、延正を、油断させた。
「女子のように、横乗りで行くか。……おい、公卿衆へ、馬をくれてやれ」
　延正が、後備隊へ、叫んだ瞬間であった。
　中納言は、延正の腰の脇差を、抜き取りざま、その脾腹へ、力まかせに、突き刺した。
「う、うっ！　な、なにをするっ！」
　延正は、苦痛に堪えつつ、中納言の頸を締めつけようとしたが、力がともなわず、大きく、上半身を傾けた。
　中納言は、死にもの狂いに、脾腹を、ひとえぐりして、大きく、喘いだ。
「鷹森っ！　鷹森っ！」
　延正は、地べたをはいずりながら、周防を呼んだ。
　鷹森周防は、そばへ歩み寄ったが、意外な冷酷さで、延正の死の苦しみを見下した。
「延正、不覚だぞ！」
と、あびせた。
「周防！　手、手当を――」
　延正は、片手をさしのべた。
　鷹森周防は、四王天延正の手当をするかわりに、東山中納言に対して、抜き討ちの一太刀をあびせた。
「げえっ！」
　肩を割りつけられて、中納言は、ひところびすると、生きものの本能で、狂ったように遁げ出した。
「ふん――」
　周防は、せせら笑った。
「どこへ、にげ出すというのか」
　中納言は、松林から渚へ、遁れ出ると、
「たすけてくれっ！」
と、絶叫した。
　中納言の必死の目は、ちょうど渚に乗り着けた釣り舟を、みとめていた。
　九十九谷左近は、舟から、降りると、ゆっくりと、中納言に、近づいた。
　中納言は、左近に、しがみついた。
「た、たすけてくれ！……死、死にたくない！……た、たすけて――」
「公卿か――」
　左近は、中納言を、つきはなした。
　中納言は、また、砂をひっかくようにして、左近に、匍いよると、すがりつこうとした。

左近は、一歩はなれて、
「血が流れすぎて居る。公卿でも、野郎の玉は股間にぶらさげているはずだぞ。往生際は、いさぎよいものにしろ」
「お、おねがいじゃ！……い、いま、死にとうは、ない。……た、たすけて、く、くれるなら、姫を——、姫を、さ、さしつかわす」
「姫？」
「天、天下一の、美、美女じゃ」
「ふん——。あさましゅう、ほざくの」
左近は、中納言を、見すてて、歩き出した。
中納言は、力つきて俯伏した。
十指で、砂をひっかきつつ、なにやら、うわ言のようにもらしていたが、そのうちに、ぐったりとなった。
左近は、軍勢から、かなりの距離を置いて、松林に入ると、じっと、すかし見た。
呶号が起り、白刃が、閃くのが、みとめられた。
四王天延正が、鷹森周防の裏切りをさとって、手負いの身をはね起して、斬りかかったのである。
「くたばれっ！」
周防は、延正を、まっ向から、斬り下げた。
それから、前陣後陣を見まわして、大音声を上げた。
「ただいまより、鷹森周防が、総大将ぞ！　おのおの、従えっ！」
東山中納言と四王天延正と、二人を同時に、片づけた周防は、いまや、頭を立て、胸を張っていた。
「成程——。上臈がいるな」
左近は、にやりとした。
勘念が、うしろに、そっと寄って来た。
「大層な美女とみえまするな」
「あれを、奪うか」
「左近殿は、まだ、腕の傷が、癒えて居られますまい」
夜八郎に斬られた右腕上膊の傷は、骨に達する重傷であった。
容易に、治癒するはずもなかった。
いや、もはや、左近の右手は、以前のごとき神速の業は、使えぬに相違ないのである。
「勘念、おれには、まだ左手が使えるぞ」
「しかし……」
「見わたしたところ、一人のこらず、へたへたになって居る、あわれな軍勢ではないか。五百騎が千騎であろうと、おそるるには足りぬ」
「わざわざ、生命がけで、奪わねばならぬ理由はござるまいが……」
「あれほどの美女は、容易に見つからぬぞ」
「と申して、なにも、軍勢をむこうにまわして、奪わねばならぬほどのことは——」
「坊主め、女戒を説くな。それよりも、おれの策に、助勢しろ」
「どうせよ、と申されます？」
「はれがましゅう、われこそ大将だと、うそぶいたあの男、

どうやら、頭脳は、単純とみえる。たぶらかすのは、造作もなかろう。……勘念、狐になって、だましてやれ」
「はて、どのようにして、だましたら、よろしゅうござろうか？」
「死相があらわれて居る、とでも、おどかしてやるのだな」
「そんなことを申したら、即座に、首を刎ねられましょうがな」
「お主の態度、次第だぞ。やれ！」
左近は、命じた。
勘念は、当惑していたが、ほぞをきめて、
「死相があらわれているのは、われらの方かも知れぬが、やむを得ませぬわい」
と、云った。
「おれは、あとから、馬で行く」
左近は、勘念と打合せをしておいて、すばやく、遠ざかって行った。
勘念が、松林を出て、街道に立った時、軍勢は、出発しかかっていた。
輿に乗せられていたのは、美夜という上臈だけで、ほかの公卿や女官は、徒歩を命じられていた。
一瞬裡に、足軽同然の身にひきずりおとされた公卿衆は、生きた心地もない様子であった。
伯父を殺された美夜は、輿の中で、経文をとなえつづけていた。
伯父を必ずしも尊敬していた美夜ではなかった。伯父から、都をつれ出される時は、生きることにも絶望していた美夜であった。
美夜の父は、羽林家の一人で、摂州水無瀬（みなせ）家の権少将であった。
智者のほまれ高く、学識に於て、宮廷に比肩する者はなかった。ただ、気象がはげしく、おのが主張を一歩もゆずらぬ人であったので、それがわざわいして、毒殺されたのである。
美夜が、まだ六歳の頃のことで、家が廃されると、母と姉とともに、父の兄に当る東山中納言にひきとられたのであった。
美夜が、死にたい、と思うほどの衝撃を受けたのは、十歳の頃であった。
伯父と母が密通している場面を、偶然にも目撃したのである。
美夜が、もしかすれば、父を毒殺したのは、伯父ではなかろうか、と疑うようになったのは、それからかなり年がすぎてからであった。
美夜の母は、美しかった。天子さえも、その美しさをたたえて、一首うたわれたくらいであった。
伯父は、横恋慕していたのではなかったか。そのために、実の弟である少将を毒殺して、その妻を、手に入れたのではなかったのか。
べつに証拠があるわけではなかったが、美夜の心には、

いつか、その黒い疑惑がわいていたのである。
そのために、伯父が、目の前で、四王天延正のために斬られても、驚愕こそすれ、いささかの悲嘆もおぼえはしなかった。
天罰のむくい——そんな気持も、脳裡を、ちらとかすめていたのである。
それにしても……。
伯父が討たれ、ついに、この世に身をすがらせるべき人を一人も失くした美夜は、輿の中で、経文をとなえつつ、おのが悲しい運命に、堪え難くなっていた。
ただ——。
美夜に、生きるささえを与えているものがあるとすれば、それは、自分自身に誓ったある目的が彼女にはあったからである。
七年前のことである。
美夜には、五つ年上の姉があった。姉もまた、美貌の噂が高く、近衛家にのぞまれて、関白の次男に嫁ぐことになり、陽明御殿に輿入れした。
しかし、姉が、その輿入れがきまってから、夜毎泣いていることを、美夜は、知っていた。
姉は、近衛家の次男をきらっていたのである。近衛家の次男は、幼時脳をわずらって、なかば痴呆だったのである。
しかし、この時代に於て、娘たちに、おのが意志を通す自由はなかった。
姉は、生きたしかばねとなって、陽明御殿へ、つれて行かれた。その時、美夜も乞うて、姉について行ったのである。
異変が起ったのは、それから十日もすぎてはいなかった。
一夜、一人の若者が、御殿に押し入って来たのであった。
夜半——。
陽明御殿の一室で、十三歳の美夜は、ふっと、目をさました。
枕もとに、ひとつの黒影をみとめて、美夜は、魂消（たまげ）る悲鳴を発しようとした。
黒影は、すばやく、その口をふさいだ。
「さわぐな！　おとなしゅうして居れば、斬りはせぬ」
曲者は、そう云った。
その時の光景を、美夜は、いまでも、ありありと、よみがえらせることができる。
曲者は、若者であった。
その双眼は、強く光っていたが、澄んでいた。
その双眸を見かえしているうちに、美夜は、なぜか、恐怖がうすらいだのを、はっきりとおぼえている。
「そなた、水無瀬家の小夜姫の妹だな？　似て居る」
若者は、云った。
美夜は、うなずいた。
「姉は、どこだ？　どこに居る？」
美夜は、かぶりをふった。
若者は、いらだたしげに、
「近衛の白痴息子に、そなたの姉を、嫁にくれるわけには、いかぬ！　この多門夜八郎が、奪って、妻にするのだ。

……寝所を知って居れば、教えろ！」
侵入者は、そう迫った。
もし、美夜が、姉が夜毎泣いていたことを知っていなければ、その言葉をおそろしいものに、きいたにすぎなかったろう。
美夜は、黙って、奥を指さした。
「ここから、いくつめの部屋だ？」
侵入者は、たずねた。
美夜は、四つめとこたえた。
「よし！」
侵入者は、立ち上ってから、ふと、思いついたように、美夜を視た。
「安心しろ。姉は、この多門夜八郎が、幸せにしてくれる」
そう云いのこすや、風のごとく、天井へ跳びあがって、姿を消したのであった。
姉は、そのまま、その若者に拉致され、ふたたび、近衛家には、もどらなかった。
美夜が、姉に会ったのは、それから三年後であった。
姉は、木幡里の天心山無量寺という古刹の方丈で、死の床についていた。
住職からの使いの寺僧が、東山家を訪れて、美夜を、ともなったのである。
姉と妹は、泪の対面をした。
姉は、やせほそった手で、美夜の手をにぎり、
「美夜に、たのみがひとつ、ありまする」
と、云った。
それは、自分を、近衛家から拉致した若者多門夜八郎に、いつの日にか、めぐり会うことがあれば、礼を云って欲しい、というねがいであった。
姉は、多門夜八郎を救いの主と感謝し、夜八郎が、再び、姿を現す日を、待っていたのである。
美夜は、姉がいまわのきわにのこした言葉を、おぼえている。
「近衛家の御殿に押し入って、わたしをうばった御仁です。ただの武士ではありませぬ。住職殿が申されるには、あの若者は、たぶん、将軍家——足利義晴殿のおん曹子であろう、ということです。そのお母ぴととともに不遇にすごされて、大層な乱暴者になられ、多門夜八郎と名のって、洛中をあばれまわられた御仁に相違ないとのこと、わたくしにとっては、救いの主でありました。わたくしは、いまはもう、あの御仁を、良人と思いさだめて、ふたたび、ここへ参られるのを待って居りましたが、不治のやまいのために、生きて、お目もじすることは、叶いますまい。……美夜どの、わたくしにかわって、いつの日か、会うて下され。そして、わたくしが、妻として、感謝しながら、この世を去った、とつたえて下され。おねがい申しまする」
そう云いのこしたのである。
「姉上様——、かならず、多門夜八郎様にお会いいたします。そして、きっと、おつたえします」

美夜は、誓った。
姉が息をひきとったのは、その翌日であった。
老僧は、美夜と対坐すると、
「姉ぎみは、お顔も美しいように、心も美しいおひとでござった。……ご自分をかどわかした若者を、生涯の良人と心にさだめて、三年間をすごされた。口にこそ出されなんだが、多門夜八郎が現れるのを、毎日、祈ってござったようじゃ。……しかれども、多門夜八郎は、世をすねた無法者ゆえ、ふたたび、もどっては参るまいか、と存ずる。申さば、あの若者は、兇刃をふるう不吉の兵法者ゆえ、あるいは、そなたは、お会いなさらぬ方がよかろうか、とも思うが、いかなものであろうな」
「いえ！」
美夜は、つよくかぶりを振った。
「わたくしは、会いまする。会わねばなりませぬ」
「ぜひと思いきめたのであれば、止めはいたさぬが……」
老僧は、かぶりを振ったことだった。
老僧は、夜八郎を、美しく心やさしい女性を幸せにしてやれる男とは、思っていなかったようである。
しかし——。
美夜の心には、いつの間にか、まだ見ぬ多門夜八郎の姿が、想い描かれていたのである。
——多門夜八郎殿に、会うこと。
それが、美夜の生きる目的とさえもなったのである。
多門夜八郎に会えば、幸せがおとずれるような気さえするようになっていた美夜であった。

鷹森周防は、得意の絶頂にいた。
「よーし！　全軍、進めっ！」
高らかに、片手をふった。
五百の軍勢は、すべて、おのが家来となったのである。思うがままに、動かせるのだ。
——伊吹野へ行って、五摂家の財宝を手に入れるならば、おれは、天下をも、わがものにすることができるぞ！
野望は、胸中に、あふれている。
そのおりであった。
一人の僧が、急ぎ足に、松林の中から現れて、
「あいや、おん大将殿——」
と、大声に呼びかけた。
「なんだ？」
にらみかえした周防に、僧は、平然として近づいた。
「まことに、はばかりあることを申上げますが、拙僧、林の中より、お前様の人相を、ちらと拝見つかまつりました」
「それが、どうした」
「危いかな！」
「なんだと」
周防は、目をひき剝いた。
「お手前様のように、遠目にもありありと、剣難の相があらわれて居る御仁は、滅多にあるものではござらぬ」
「乞食坊主めっ！」

周防の髭面が、一瞬、まっ赤になった。
「なんのこんたんがあって、この鷹森周防をたぶらかそうというのだ！　くそっ！」
周防は、抜き討ちの気勢を示した。
勘念は、あくまでおちつきはらって、
「仏門に帰依して、ひたすら、二十余年の間、祈禱にあけくれていた者に、一片の邪念とてあるべくもござらぬ。誠心をもって、申上げているのでござれば、お耳にとめ下され」
勘念は、そう云って、合掌してみせた。
そこまで云われると、周防も、ふと、不安をおぼえずにはいられなかった。
主人の地位にある東山中納言と、永年戦友として苦労をともにして来た四王天延正を亡きものにしたうしろめたさが、周防にないはずはなかったのである。
「この鷹森周防に、どうせよ、と申すのだ？」
「お見受けいたしましたところ、お手前様には、よき相談対手たる軍師をお持ちではないようでござる」
「ふむ！」
「お手前様が、剣難の相を払うには、おのが身の業(ごう)を、他の者に移すのが、唯一の手段と心得まするな」
「軍師をやとうて、そやつに、業を移せと申すのか！」
「左様——。軍師とは、ただ、いくさのかけひきのみを為すものに非ずして、主君のすべての業をも引き受けるものでござる」
「ばかな」
周防は、吐き出した。
「そのような軍師が、おいそれと見つかるはずがあるか」
「それが、居りまする」
勘念は、けろりとした表情でこたえた。
「居る？」
「すぐ、近くに——」
「近くにだと？」
「剣難を、代って受けるだけの人物が、容易に見つかるはずもない——とお考えはご尤もながら、これも奇縁と申すもの。……拙僧が、これから参る古刹に、一人、牢人衆が身を寄せて居りますが、まことにもって、おそるべき万人に一人の兵法者にて、しかも、世をすねて居りまする」
「ふむ？」
「他人の剣難を代って受けるには、それだけの業力を所有いたしていなければなりませぬ。その牢人者こそ、まさしく、お手前様の片腕となって、剣難を一身に引受けるに、またとない人物かと存じまする」
「どうも、おのれの言葉は、信用ならんぞ！」
周防は、なお、猜疑のまなこを光らせた。
「嘘とお思いになって、拙僧を、案内させてごらんなされては、如何でございましょうな？」
「よし——、案内せい」
周防は、行くことにきめた。
荒武者といえども、人間の弱点を衝かれては、つい、口

車に乗らざるを得なかった。

「しかし、もし、そやつが、とるに足りぬ屑者であったならば、坊主、おのれの人相見たても、でたらめであったことになるぞ。その時の覚悟はよいな？」

「もとよりのこと。その時は、即座に、この坊主首をはねられませ」

勘念は、平然としてこたえた。

外見は、いかにも平然としてみせてはいたが、しかし、勘念も、内心では、

――はたして、うまく、ゆくかな？

と、多大の不安を抱いていた。

周防の馬わきを歩きながら、勘念は、うしろをふりかえって、

「おん大将は、大層美しい上臈をおつれなされて居りますな？」

と、たずねた。

「はっはっ……、剣難の相とともに、女難の相も観たか」

「お手前様の想いものでございますな？」

「これから、わがものにしてくれるのだ。……その古寺に、上臈を抱くにふさわしい室があるか？」

「ありますとも。存分にお愉しみなされませい」

「破戒坊主め、話がわかるぞ」

周防は、ふたたび、いい気分になった。

五百の軍勢を率いたのは、生れてはじめてだったのである。

美女狂い

その寺は、伊吹野の平野をはるかに見渡す丘陵の上にあった。

丘陵は、裾から頂上まで、美しい枝ぶりの松で掩われていた。

これは、大昔の高貴の人の墳墓かともみえる。

ひと時代前までは、ここは、名刹として、廻国巡礼の足をはこばせたにちがいない。

平安から鎌倉、足利初期までは、人々は信仰あつく、百寺巡り、三塔の巡礼、三十三箇所の観音巡礼など、生涯かならずなさねばならぬことにかぞえていた。

戦乱になってから、諸国は兵馬に荒らされて、道路がふさがってしまい、巡礼の大方は、廃れてしまったのである。

この寺は、浄土宗たることを、山門の額にかかげてある。

全国二十五箇所の霊場のひとつであったのかも知れぬ。

五百の兵を率いて、山門の前に到着した鷹森周防は、五摂家守護の武士であるだけに、山門からなだらかに登っている参道と、その彼方にそびえている堂宇伽藍を、望むや、

「ほう、名刹だな」

と、云った。

かたわらに立つ勘念を見やって、

「まさか、お主が、住職ではあるまい」

「もとより――」

勘念は、笑って、

「拙僧は、ただの所化でござる。ただ、前年、師の聖（ひじり）が寂滅なされてより、あらたに、住職をお迎えできずにいるのでござる」

と、こたえた。

「お主が、かってに住職になることもできぬか」

「それは、なりませぬな」

「はっはっ、坊主という者は、不便だのう。われら武家は、力さえあれば、天下も取るぞ」

「まことにおうらやましいご身分でござる。……では、申しわけなきことながら、ここで、馬をすてていただきとう存じます」

「心得て居るわい」

山門を、馬上で通ることは、将軍家といえども、許されぬのである。

周防は、おのが旗本ときめた十人ばかりの武者に、

「姫をつれて参れ」

と、命じ、五百の兵には、野営の下知をしておいて、馬を降り、山門をくぐって行った。

美夜は、輿から出ると、歩き疲れている女官たちに、

「わたくし一人、楽なおもいをして、申しわけありませぬ。……参りましょう」

と、わびるとともに、いざなった。

「姫お一人を、ともない申す」

旗本の一人が、冷然として云った。

「えっ！」

美夜も女官たちも、顔色をかえた。

女官たちを、兵の群の中へ置きすてておけば、どのような事態になるか、容易に想像されるところである。

「それは、あまりにむたいと申すもの……。旗本ならば、かよわい女性を守護なされるのが、つとめでありましょう」

美夜は、怯じずに、云った。

「大将の命令でござれば、やむを得ぬ」

「いえ、鷹森周防殿は、大将ではありませぬ。ただの公卿守護のさむらいでしかありませぬ。わたくしたちに命を下す権利など持たれぬ」

美夜にとって、東山中納言は、敬慕できぬ伯父であったとはいえ、目の前で、むざんに斬られては、その対手を許すわけにはいかなかった。

女子のかよわい力では、討てぬために、だまって従って来たが、いずれ天罰が加えられるものと、信じている。

「姫が、なんと申されようが、四王天延正殿が果てられたあとは、鷹森周防殿が総大将じゃ」

問答は無用とみて、旗本の一人が、美夜の手をつかんだ。

女官たちは、泣いて、乞うたが、許されなかった。

鷹森周防が、兵の群の中へ、女官たちを置きすてたの

は、それだけのこんたんがあった。
兵たちに、永年の戦友を裏切る残忍をみせた周防である。兵たちの心を懐柔するには、女子を与えるに限る、と考えたのである。
そして……。
臈たけた美女の美夜を、まずわがものにしたあとは、旗本十人に、つぎつぎと、まわしてくれよう、という肚に相違なかった。
美夜は、泣きさけぶ女官たちに、うしろ髪をひかれながら、山門をくぐらされた。
前後を歩く旗本たちは、いずれも、陰惨なまでに暗い顔つきで、黙々としていた。
かれらは、鷹森周防に忠誠をちかって、旗本になったわけではない。しかたなしに、家来になったまでである。
鷹森周防が、大将と仰ぐべき人物ではないことは、判っていたのである。
ただ、野良犬の群にひとしい放浪の軍勢は、たとえ鷹森周防が、粗暴野卑な男でも、ひとまず大将として仰いでおかねば、かたちをなさぬのであった。
かれらの心中にあるのは、
――いったい、これから、どうなるのだ？
その不安だけであった。
東山中納言には、行先に心算があったに相違ないし、また、四王天延正ならば、五百の軍勢を生かす方法も考えつく器量を持っていたであろう。
鷹森周防は、ただもう、大将になりたいばかりに、残忍な行動に出たのだ。
この軍勢の行手は、暗澹たるものなのだ。
鷹森周防は、雑草がところどころにしげっている広い境内に立つと、
「そやつを、ここへ、つれて参れ」
と、勘念に命じた。
周防は、なにか卑怯な企てでもあるのではないかと疑い、本堂や方丈や、建物の中に入るのを、警戒したのである。
勘念は、笑いながら、
「お手前様は、もうご自身を、その者の目にさらしておいででござる」
と、云った。
「なに？」
周防は、目をむいた。
「そやつ、どこにひそんで居る」
「ひそんでは居りませぬぞ」
勘念は、片手をあげて、本堂の屋根を、指さした。
数尺もの厚さに葺いた萱屋根の斜面に、人が一人、ながながと、寝そべっていたのである。
「む？」
見上げて、周防は、うなった。
「九十九谷左近殿！」
勘念は、大声で呼んだ。
「起きられい。お客人でござる」

左近は、やおら、身を起した。
鷹森周防のどぎもを抜くには、この大屋根の上に寝そべってみせるにかぎる、と考えて、勘念に云いふくめておいたのである。
ぬっと立った左近は、じっと、周防を見下したまま、わざと、無言であった。
勘念は、いそいで、どこかへ消えたが、もどって来た時、一頭の牛を曳いていた。
「降りて参られい」
勘念が、まねくと同時に、左近は、屋根を蹴った。
周防も、いま境内に達した美夜や旗本たちも、あっと、目をみはった。
左近は、宙をきって地上めがけて、わが身をおとすや、かるがると、その牛のせなかに乗ってみせたのである。
こちらを、神秘めかした存在にみせかけるには、これぐらいのはなれ業を示す必要があったのである。
左近は、牛の上から、冷たく刺すような視線を、周防にあびせて、
「お主、大層な剣難の相をもって居るな」
と、あびせた。
「わかるか？」
周防は、ぎくりとなった。
「観相の術を学ばずとも、お主ほど、ありありと剣難の相をみせて居れば、すぐに、判る」
「ふむ――」
「お主の生命（いのち）は、長くて一月、あるいは、今日のうちにも、果てるかも知れぬ」
左近は、ものものしい口調で、宣告した。
「なにを、ばかな！」
周防は、憤然となった。
「この鷹森周防は、不死身ぞ！　そうやすやすと、生命を落してたまろうか」
左近は、せせら笑った。
「お主は、軍勢を率いて居るが、どうやら、にわか大将とみえる」
「……」
云いあてられて、周防は、むっと口をへの字に曲げた。
「自分で勝手に大将になったつもりでも、従っている者どもが、はたして、心服して居るか、どうかだ」
そう云って、左近は、じろりと、旗本たちへ、鋭い視線をくれた。
周防は、思わず、ぞくっと悪寒をおぼえて、旗本たちを、ふりかえった。
それから、虚勢をはって、
「おい、牢人！　嘲弄は、許さんぞ」
と、呶鳴った。
「ははは……」
左近は、笑った。
「いま、逆上して、おれにとびかかって参れば、お主は、自らすすんで剣難の相にたがわず、この場で、生命を落す

ことになる」
「ほざくなっ！」
周防は、長槍をかまえた。
すると、左近が、ゆっくりと、牛の上に、突っ立った。
周防は、なかば脅しのつもりで、左近めがけて、長槍を、突き上げた。
瞬間――。
槍の穂先は、けらくびから両断されて、空へ飛んだ。
そして、左近の姿は、牛のむこうがわへ、消えていた。
あまりの迅業に、茫然となった周防は、方丈の方へ、スタスタと歩み去ろうとする左近をみとめて、
「ま、待て！」
と、呼びかけた。
左近は、ふりかえりもしなかった。
「待て！　待たぬか！」
周防は、追いかけた。
左近は、立ちどまって、頭をまわし、
「大将の器（うつわ）でもない者が、勝手に軍勢を率いてみたところで、行手に横死しか待って居らぬ」
と、云った。
周防は、ごくっと生唾をのみ下してから、
「その方、わしの軍師になってくれまいか」
と、申し出た。
「軍師に――？」
「さ、左様――、軍師として、迎えよう。……たのむ！」
「ふん――」
「たのむ！　……是非、きき入れてもらいたい」
「軍師は、大将の行動をしばる役目だ。それでもよいのか？　おれに、爾後の行動をまかせるというのか？」
「まかせる。……但し、わしは大将として、五百の兵に、城を取ってみせねばならぬ。それを、その方にたのむのだ」
「城をか――」
左近のまなこが光った。
左近の最初の予定は、美しい上臈を掠奪して、逃走することであった。
しかし、鷹森周防を嘲弄しているうちに、考えが変って来た。
周防から、軍師になってくれ、と頭を下げられると、
――もしかすると……。
ふと、左近の脳裡に、兵法者にあるまじき野望が、鎌首をもちあげたのである。
――五百の兵を、そっくり、奪いとれるかも知れぬぞ。
もし、そうなれば、これは、夢にさえ想像していなかった世界が、おれのものになる。
一振りの剣に拠って、一生をつらぬこうとしていた左近も、一瞬、おのれをとらえた野望を、ふりはらい難かった。
「たっての希望ならば、城取りに役立とう」
左近は、こたえてしまった。
「有難い。……早速に、お主と策をめぐらしたい」

周防は、髯面をかがやかせた。
「勘念、方丈へ、大将を案内せい」
左近は、命じた。
勘念は、ちょっと、とまどった表情になった。
――この大将を、この場で、討ちすてるのではなかったのか？
勘念がきかされた計画は、にわか大将を、討ちすてて、軍勢を四散せしめ、上臈一人を奪うことであった。
――はて？　どういうことになるのか？
不審のままに、勘念は、周防を、方丈へみちびいた。
左近が、つづいて、その座敷に入ろうとすると、勘念が、そばへ寄って来て、
「どうなるのでござる？」
と、ささやいた。
「軍勢を、おれが、取る」
左近は、云った。
「取る、と申されても……？」
「兵法者が、大将にはなれぬ、というのか？」
「いや、そうは申しませんが……、これだけの軍勢をやしなうのは、容易ではござらぬ」
「おれに、まかせておけ。それよりも、あの上臈を、一人、別の部屋へ入れておけ」
「承知しました」
左近は、座敷に入って、周防と対坐するや、
「まず、第一に、おことわりいたそう」
「うむ？」
「其許を大将と仰ぎ、軍師をつとめるからには、その剣難を、それがしが、移し持つことに相成る」
「たのむ」
「其許が、恩義ある御仁ならいざ知らず、わざわざ、見知らぬ他人の剣難を、引受けるとは、これ以上ばかげた話はない」
周防は、あわてて、
「お主が、引受けてくれるからには、いかなる条件でも、のむことにいたそう」
と、云った。
「しかと、約束されるか？」
「いたすぞ！」
周防は、もはや、この兵法者の魅力に、眩惑されたかたちであった。
「よろしい。では、引受け申す。その条件というのは、さしたることではござらぬ」
「なんであろう？」
「上臈が一人、供に加わって居られる」
「うむ」
「あの上臈を、所望いたす」
「お主が欲しければ、くれるぞ」
周防は、美女よりも、城の方が欲しかった。
「ところで、城じゃが……、この伊吹野には、あるのだな？」

「もとより、伊吹野城があり申す」
「それを、奪うか！」
「但し、城は、先般何者とも知れぬ徒党の襲うところとなり、炎上いたした」
「城主は、如何した？」
「城主田丸豪太夫は、目下、その焼け落ちた城郭内にひそんで、傷ついた野獣のていでござるわ」
「では、奪うに造作はあるまい。この鷹森周防が、あらたな城を築いてくれる」
「そうたやすくは、事は運び申さぬ」
「なぜだ？」
「田丸豪太夫は、野盗よりのし上って、この伊吹野一国を掌中におさめたつわものでござる。城を焼かれたとはいえ、なお、城内には、数百の兵をやしなっているかにみえ申す」
「その程度の武力ならば、一挙に攻めて、討ちとればよかろう」
「そうは参らぬ。……其許自身が率いて居る兵を、みられい。一人のこらず、疲れはてて、気力も失せて居る。叱咤したところで、どれだけの働きをいたそうか」
　云っているうちに、左近は、おのれがいかにも軍師らしく思えて来た。
　軍略を多年研究し、いよいよ、諸葛孔明のごとく、臥竜ひとたび出廬の機を迎えたような気分になって来た。
「伊吹野城を奪うのは、真正面から攻めることは不可と存ずる」
「策が、お主にはあるのじゃな？　きこう。きかせてくれい」
　周防は、首をつき出した。
　目の前に菓子を置かれて、生唾をのむ児童のような単純な様子をむき出した周防を、左近は、
　――これで、大将のつもりか！
と、内心あざけりつつ、
「城主田丸豪太夫には、援軍が来た、と思わせる策をとることにいたす」
と、云った。
「援軍と思わせる？　わしは、田丸豪太夫などと、面識はないぞ」
　周防は、首を振った。
「そこが、策と申すもの」
　左近は、にやりとしておいて、立ち上った。
　周防は、あわてて、
「ま、待てい。その策とやらを、きかせい」
と、たのんだ。
「策は、これから思案いたす」
　そう云いすてておいて、左近は、どこかへ姿を消してしまった。
「ふん――」
　周防は、首をひねった。
　九十九谷左近と名のるあの兵法者、たしかに、薄気味わ

るいところがあるが、はたして、軍師として信頼できるのか、どうか？
　周防は、勘念が入って来たので、
「坊主――。彼奴は、下忍あがりの曲者であろう？」
と、問うた。
「途方もない。九十九谷左近殿は、楠木正成の苗裔でござる」
　勘念は、まことしやかな表情で、こたえた。
「自称して居るだけであろう。自称して居る奴に、本物は居らぬ」
「おん大将は、大層うたがいぶかいお方でありますな。……さればとて、貴方様の左右を見まわしますに、右腕とも左腕とも、たのむ御家来衆は、一人もおいではありませぬが――」
「わかった。もうよいわ！」
　周防は、いらいらして、叫んだ。
「姫は、どの部屋だ？」
「はい。奥の貴賓の間へご案内つかまつりました。まことに、お美しい上﨟でございますな」
「坊主のくせに、よけいなことを申すな。……案内せい」
「では、姫様に、おうかがいして参りましょう」
「すぐに、案内せい」
「姫様の方で、休息したいから、とおことわりになるかも知れませぬ」
「わしは、大将だ。なんのことわる必要がある！」
「女人をたずねるのは、その都合をたずねるのが、都の作法ではありますまいか？」
「つべこべと申すな！」
　周防は、呶鳴りつけて、ぬっと立った。
　九十九谷左近に、美夜を、生娘のままにくれるのは、いかにも、腹立たしいことなので、周防は、左近が迫っても、これを拒絶するように、云いふくめるつもりであった。
　勘念は、周防の肚のうちを読みとったような顔つきになったが、黙って、さきに立った。
　荒れてはいたが、名刹の方丈であった。周防は、その立派な構えを眺めて、広縁を歩みながら、
　――そうだ。この古寺を、当座の砦がわりにしてもよい。
と、考えた。
　その貴賓の間は、金泥の襖に、折上げの格（ごう）天井、二間の床も堂々として、名刹として、過去に、幾人かの高貴の人を迎えたであろうたたずまいをみせていた。
　美夜は、ひとり、そこに坐っていた。
　上座をさけて、庭を見わたせる場所で、脇息に、ひたいをのせて、まぶたを閉じていた。
　美夜は、疲れていた。
　孤独に閉じこめられた若い女の心が、疲れていたのである。
　ものを想う気力も失せているようであった。
　こうしていることは、美夜にとって、休息にはならぬ。
　虜（とりこ）の状態にほかならない。

行手に、光があるわけではない。

美夜は、姉の遺言によって、多門夜八郎という人物に、めぐり会う日のみを、心の奥に、願っている。

しかし、多門夜八郎が、はたして、いかなる性情の持主か、見当さえもつかなかったのである。姉は、多門夜八郎が現れるのを待っている三年の間に、いつとなく、自分自身でかってに、一人の理想の男性像をつくりあげてしまったのではなかろうか。

現実の多門夜八郎は、おそるべき粗暴な男ではあるまいか？

その不安が、美夜にないとはいえぬ。

そのような男を、さがしもとめている自分は、なんというあわれな娘であろうか？

ふっと――その気持が、起ったことも、一度や二度ではないのである。

この貴賓の間に入れられた時も、その気持が起った。そして、あわてて、ふりはらったものである。

さいわいにして、多門夜八郎が、姉が想い描いたような男子であったとしても、この広い世界の何処にいるのであろう。

めぐり会えるという幸運は、池の中に落ちた一本の針を、ひろいあげるような、奇蹟に近いものではあるまいか。

その絶望的な気持が、堪え難い孤独感をまねいてしまったのである。

この心の疲れは、からだの芯底を疼かせている。

「こちらでござる」

勘念の声がして、荒々しい足音が近づいて来たので、美夜は、われにかえった。

ぬっと入って来た鷹森周防を見て、美夜は、心も身も、ひきしめた。

周防は、大将らしく、どっかと上座に腰を据えると、

「そなた、この鷹森周防を、恨みに思うて居ろうな？」

と、問うた。

美夜の返辞はなかった。

「恨みに思うて居ろうな、とたずねて居る」

周防は、大声を発した。

美夜は、視線をそらしたまま、

「おのが悲運には、なれて居ります」

と、こたえた。

「悲運か――ふん、戦乱の時世に、家を喪った者が、幸運であろう道理がない」

周防は、態度に威厳をもたせて、云った。

「やむを得ぬ。弱肉強食じゃ。……今日よりは、そなたは、わしの命令を肯かねばならぬ。よいか？」

「なにを命令しようとなされます？」

美夜は、不安のまなざしをかえした。

「先程、そなた、本堂の屋根から跳び降りて参った兵法者を見たであろう？　あの兵法者を、われら軍師とした」

「……」

「九十九谷左近と申すあの兵法者、好色とみえて、そなた

に目をとめ居った」

「え？」

「これだけの軍勢に、軍師を持たぬ道理はない。九十九谷左近を、軍師にすることにいたしたが、条件をひとつ、つけて参った」

「……？」

「そなたを、寄越せ、と申した」

「まあ！」

「その場ではやむを得ず、承知してくれたが、そなたのような美女を、むざと、むさくるしい兵法者ずれに渡してなろうか。そなたさえ、たじろがねば、左近も、無下に、横車を押しては参るまい」

「はい」

「よいか。今宵、左近が押しかけて参っても、決して、たじろいでは相成らぬぞ」

「はい。わかりました」

美夜は、意外にも、この荒武者が自分に心をつかってくれるのに、素直にうなずいた。

「ところで――」

周防は、急に目を光らせた。

「もしかりに、わしが、近いうちに、城を取り、この伊吹野を治める領主となったならば、もとより、行きどころのないそなたは、城に住まうであろうな？」

「……？」

「そなたは、領主夫人になる所存はないか？」

「……？」

「どうじゃな？　……返辞をせぬか？　そなたは、わしを恨んで居らず、おのが悲運をあきらめている、と申したぞ。わしが、その悲運を、追いはらってくれよう。どうじゃ？　色よい返辞をせぬか」

「わたくしは、領主の妻になることが、幸運とは、思うて居りませぬ」

「なんじゃと？」

「わたくしは、なろうことなら、自分で、自分の生きる道を、見つけたいと思うて居ります」

「ばかな！」

周防は、呶鳴った。

「女一人が、この荒野のただ中で、どうして生きて行けるぞ！」

美夜は、冷たいまなざしを、単純で粗暴な荒武者に、かえした。

「わたくしに、いささかの野心でも、抱いて居られるならば、それは、あきらめて頂かねばなりませぬ」

「なに！」

まだ二十歳にもならぬ娘に、さげすまれて、周防は、かっとなった。

「身共は、そなたを城主夫人にしてやろう、と申して居るのだぞ。その好意を受けぬばかりか、身共を好色者と、さげすむか！」

「さげすみはいたしませぬ。……ただ――」

「ただ、なんじゃ？」
「ただ、力を持たぬかよわい女子（おなご）にも、心には武器を持って居ります」
「なんの武器じゃ？」
「操をけがすよりは、死をえらぶ――その強さを申して居ります」
「ほう、操をけがすよりも、死をえらぶ強さか！」
周防は、いきなり、すっくと立つと、ずかずかと、美夜に迫るや、猿臂をのばした。
「死ぬかどうか――試してくれよう」
抱きすくめようとしたとたん、美夜は、すばやく、周防の腰から、脇差を抜き取った。
「おっ！」
周防は、あわてた。
その隙に、美夜は、するりと、のがれて、白刃の先を、おのがのどに擬した。
「無理強いに手ごめにされようとするならば、突いてみせまする！」
美夜は、厳しい態度で、云った。
「小ざかしゅうおどかし居る」
周防は、いまいましく、舌打ちした。しかし、文字通り必死の態度を示されては、ひとまず、ひきさがらざるを得なかった。
「そなたは、意中の男でも居るのか！」
「そのような男子（おのこ）がいたならば、どのように、幸せでありましょうか」
「はっはっは……、かくさずともよいわ。そなたには、男が居ろう？」
「居りませぬ」
「そなたの顔に、書いてあるぞ。戦場往来の猪武者にも、それぐらいのことがわからずには居らぬぞ」
そう云われて、美夜も、思わず、とまどった。
その隙を、周防は、のがさなかった。片足をはねあげて、美夜の手を蹴った。
脇差は、高く飛んで、天井に突き刺さった。
「はっはっは……、死ねまいぞ、姫！」
周防は、にやにやしながら、美夜に迫った。
美夜は、あとへいざりつつ、
「舌を噛むこともできまする！」
「噛めるものなら、噛んでみい！　そうたやすく、死ねるものではないぞ」
周防は、ひとつかみの距離まで、肉薄した。
その時、広縁から、不意に、声がかかった。
「そこいらあたりまでに、とどめては如何であろう、おん大将」
左近が、そこで、笑っていた。
――しもうた！
周防は、狼狽した。
左近は、ふところ手で、入って来ると、
「このおん大将の約束は、あまりあてにはならぬらしい」

と、云った。
うっそりと立った姿は、いかにも、人を食ったものだった。
しかし、ただよわせている不気味な雰囲気は、周防の四肢の動きを封じるに充分であった。
周防は、ふてくされて、どっかと大あぐらをかくと、
「その娘、あまりに美しゅう生れついて居って、目ざわりだ。われらの目のつかぬところへ、連れて行ってもらおう」
と、いまいましげに云った。
「ははは……、正直なところは、取得らしい。しかし、別に観れば、大将の器には、程遠い」
「なにっ！」
「自身そうは思わぬか？」
「うるさいっ！　娘をつれて、消え失せろ！」
周防は、呶号した。
「消え失せるのは、貴殿の方ではないかな？」
「なにっ?!」
周防は、目をひき剝いた。
「きけば、お主は、年来の旧友を殺して、大将になった、という。乱世にあっては、野望をとげるためには、それもまた、やむを得ぬ措置かも知れぬ。しかし、まずかったのは、兵たちの眼前で、それをやってのけたことだ」
「……」
周防は、左近を睨みつけて、何か喚こうとしたが、言葉が見つからなかった。
「生死をともにした戦友を裏切る冷酷無情を、兵らに見せつけておいて、おれは大将だと胸をそらしてみたところで、誰一人として心服する者はあるまい。もし、お主のそばへ寄って来る者があれば、それは、お主を仆して、おのれが、大将の座に居坐ってやろう、と野心を抱いた者であろう」
その言葉のおわるかおわらぬうちに、周防は、けものの咆哮するに似た喚声を発して、抜き討ちをしかけた。
左近は、苦もなく、かわして、蹴倒した。
ぶざまに、ひっくりかえった周防は、
「斬れっ！」
と、絶叫した。
「斬らぬ。そのかわりに、お主にふさわしい振舞いをさせてやろう」
左近は、冷笑した。
五百の兵が、山門をくぐって、境内へ登って来るように命じられたのは、その翌朝であった。
兵たちは、野宿からまぬがれるのをよろこんで、ゾロゾロと登って来た。
境内には、十人の旗本が横列をなして、待っていた。
兵たちが、その前にかたまると、一人が、
「お前たちに見せるものがある。その前に、申しきかせるが、東山中納言殿を殺し、四王天延正を裏切った鷹森周防は、もはや、われら軍勢の大将ではない」

と、申し渡した。
兵たちは、どよめいた。
「われらは、大将を失ったのである。しかし、われらは、生きのびねばならぬ。この荒土の中で生きのびねばならぬ。生きのびるてだてを、われらに教示してくれる御仁が居る」
それに応えて、
「ここに居る」
という声が、空から降って来た。
本堂の大屋根に、寝そべっている左近を、兵たちは、あきれて仰ぎ視た。
左近は、やおら起き上ると、きわめて、無造作に、躍んだ。
兵たちの中には、叫び声をたてる者もいた。
左近は、かるがると、地に降り立つと、にやりとしてみせた。
兵たちをおどろかせ、息をのませるには、この上の鮮やかな演技はなかった。
「それがしは、九十九谷左近という兵法者だ。もとより、一軍を率いる器ではない。旗本衆のたのみによって、いささかの力を貸すにすぎぬ。……お主らには、城が要る。その城を、それがしが、取って、お主らに与えたく存ずる」
「そ、それは、まことでござるか？」
兵の一人が、叫んだ。
「九十九谷左近は、不可能なことを、公言はせぬ。誓おう。……さて、お主らの目の前を、一人の敗残者が通る。つつしんで、見送ってくれい」
左近が合図をすると、方丈から、勘念が出て来て、
「お立ちなされ」
と、内部へ声をかけた。
現れたのは、無腰の鷹森周防であった。
顔面をゆがめて、境内の光景を見まわした周防は、
「く、くそ！」
と、うめいた。
すべての目は、冷たく、周防を見まもっている。
周防は、広縁から降りて、歩き出さざるを得なかった。
左近は、周防が前に来ると、兵たちに、
「一同、昨日の大将に、敬意をはらうがよい」
と、云った。

孤身多恨

「夜八郎殿――」
しのびやかな声音に、夜八郎は、夢を破られた。
畜生藪から帰って来てから、夜八郎は、ずっと牀についていた。浪々十年の疲れが一時に出たように、夜八郎は、起き上れなかったのである。
「夜八郎殿――」
杉乃江の声であった。
夜八郎は起き上ってみて、もう三更をまわっているらしい、と感じた。
「御用か？」
「奥へ、来てもらえませぬか」
「奥へ？」
眉宇をひそめた夜八郎は、瞬間、はっとなった。
「梨花が、どうか、いたしたか？」
「おしずかに――」
杉乃江は、小袖の蔭から、手燭を出して、夜八郎を照らし、
「梨花どのは、お手前様と、二人きりで、別れを惜しみたいと……」
そこまで云いかけて、泪があふれたか、顔をそむけた。
夜八郎は、廊下を歩き出しながら、
「梨花は、意識がはっきりしているのですな？」
「はい。お手前様に見とられつつ、この世に別れたいと申されて居ります」
「……」
いずれ、この日が来ることは、覚悟していた夜八郎である。
――おれのような男を慕うために、このような見知らぬ土地で、果てるのか。
心の底を疼かしているのは、そのことであった。
廊下の曲り角に、ひとつ、人影がうずくまっていた。
「柿丸か――」
夜八郎が、立ちどまると、柿丸は黙って両手をついて、頭を下げた。
「知って居るのか？」
夜八郎の問いに、杉乃江がかわって、
「柿丸殿は、この十日あまりずっと、夜もねむらず、寝室の前の廊下に坐りつづけて居られます」
「そうであったか」
思えば、この男は、梨花をかどわかした敗軍の侍大将に従うた足軽の一人であった。そのおかげで、夜八郎は、梨花を知り、これを犯したのであった。
爾来、柿丸は、梨花を守護することを生甲斐とし、無二の忠僕としてつくして来たのである。

梨花を喪えば、この男は、明日から、なにを目的に生きて行くのであろうか。

「柿丸――、梨花に代って、礼を云うぞ」

「……」

柿丸は、ただ、無言で、さらにひくく、頭を下げただけであった。

寝室は、あかるくしてあった。

灯かげを受けて、梨花の顔は、白蠟のように冷たくなめらかなものになっていた。

夜八郎が、枕もとに坐ると、梨花は、細く、まぶたをひらいた。

しかし、もうその焦点が、さだまらぬ哀しさを、視線に示した。

夜八郎のすがたが、眸子（ひとみ）にとらえられなかった。

「ここにいる。夜八郎だ」

夜八郎は、薄い掛具の下をさぐって、梨花の手をにぎってやった。

「夜八郎様――」

梨花は、自分に納得させるように、つぶやいた。

「貴方様に……、わたくしは、なにも、して、さしあげることが、できませんでした」

「そなたは、わたしに出会うために、生命（いのち）を縮めたのかも知れぬ」

「いえ――」

梨花は、かぶりを振って、夜八郎の顔を、見わけようとした。

灯のあかるさにも、その視力は、はたらかなくなっている。

夜八郎は、そっと、梨花をかかえ起してやった。

梨花のからだは、あまりにも軽かった。

あまりの軽さが、夜八郎の胸を、烈しく疼かせた。

夜八郎は、洛外化野（あだしの）で、九十九谷左近と決闘をする朝、天満坊に案内された小さな家で、梨花とめぐり会い、そして、すぐ別れた時のことを思い出した。

あの時は、病んでいたとはいえ、梨花に、死の翳は落ちていなかった。

死の危険があったのは、夜八郎の方であった。

そのために、夜八郎の態度は、そらぞらしいものになっていた。梨花は、身を近づけることさえ叶わなかったのである。

いまは――。

こうして、優しく抱かれながら、梨花は、もうすぐ、夜八郎と、永遠に、別れて行かなければならなかった。

「……うれしい」

梨花は、微かに、つぶやいた。

死の使者が、そこまで、迎えに来て居りながら、梨花に、その恐怖はなかった。

死というものに思いをひそめつつ、生きて来たこの幾月間かであった。覚悟はできていたのである。

「……うれしい」

もう一度、梨花はつぶやいた。

その一言で、夜八郎を想いつづけて生きぬいて来た長い月日の苦労が、きれいにあらい流されるようであった。

「そなた、あの世で、待っていてくれ」

夜八郎は、云った。

「あの世では、そなたと二人きりの、くらしをしよう」

「はい。……お待ちして居ります」

ま近に寄せられた夜八郎の顔が、おぼろに見わけられるのであろう。梨花の眸子は、みひらかれ、まばたきもしなかった。

「あの世では、小さな家をもとめていてくれ。海の近い、小松にかこまれた家がよいぞ。……わたしが行くまで、小犬でも飼って、待っていてくれるか」

夜八郎は、視線を宙に置いて、話しつづけた。

「小犬のほかに、猫も、いや、鶏も、飼うがよい。わたしが、行くまでには、すこし間があるかも知れぬ。そなたが待っていても、わたしは、べつに、死に急ぎはせぬ。わしが、白髪まじりになって参っても、そなたは、いやがりはせぬであろう。……あの世では、もう死ぬことはない。そうとすれば、人間同士の争いもなかろう。わたしとそなたのくらしをさまたげるものは、何もないであろう」

夜八郎は、急に、てのひらに、梨花のからだの重みを感じて、その顔を視た。

まぶたは、閉じられていた。

夜八郎は、食い入るように、その寝顔を見まもった。

いま――。

清純なたましいは、しずかに、そのからだから、抜け出そうとしていた。

「梨花！」

夜八郎は、小声で呼んだ。

「安らかにな……」

神も仏も信じないこの牢人者が、いまはじめて、あの世で、梨花が、必ず、つつましい、草庵をもとめて、自分を待ちながらくらすであろうことを、信じた。

人を愛したのは、おそらく、これがはじめの、おわりではなかろうか。

夜八郎が、しずかに、遺体を仰臥させて、胸で、手を組ませた時、柿丸が、入って来た。

「見てやれ、柿丸――、美しい死顔だ」

夜八郎は、云った。

いざって、枕もとへ寄った柿丸は、その死顔を一瞥するや、双眼からどっと泪をあふらせた。

「梨花様！　もう、患いのつらさは、ありませぬぞ。たましいだけを、夜八郎様に、より添わせて、おいでなされ」

そう云いながら、わななく指で、乱れ髪を、ひたいからかきあげてやった。

天満坊が、しずかに入って来ると、誦経をはじめた。

その荘重な声をききながら、夜八郎は、じっと、死顔を見まもりつづけた。

宿運というものが、ひしひしと、夜八郎の胸をしめつけていた。
　異常な出会いをして、暴力で犯した女であった。その野蛮な男を良人と思いさだめて、ここまで、追うて来て、短い生涯を閉じたのである。
　戦乱の世とはいえ、あまりにはかない一生であった。

　朝――。
　枕元に坐って、線香を絶やさぬようにしていた夜八郎は、陽ざしが障子に映えた時、しぜんに、首をたれて、ほんのわずかなまどろみに陥ちた。
「……夜八郎様」
　縁側から、声があって、夜八郎は、目ざめた。
　柿丸が、うずくまっていた。
「おとむらいの用意ができました」
　墓穴を掘って来た、という意味であった。
「どこだ、墓地は？」
「土地の者たちが、月見の岡と称んでいる丘の上でござる。いつぞや、梨花様は、そこへ参られて、わしに、おたのみでした」
「そうか。自分で、墓地もきめていたのか」
　夜八郎は、ふかい溜息をした。
「では、葬ろうか」
「夜八郎様。お願いが、ひとつ、ござる」
　柿丸は、夜八郎を見つめて、云った。
「なんだ？」
「ご遺体を、わしに、背負わせて、月見の岡まで、はこばせて下され」
「……」
　夜八郎は、柿丸を、見つめかえした。
「お願い申します！」
　柿丸は、平伏した。
　――この誠実無比な男は、あるいは、梨花を、愛していたのかも知れぬ。
　――いや、きっと、そうであろう。
「お前が、そうしたければ、そうするがいい」
「忝（かたじけの）うござる」
　やがて、夜八郎は、冷たい梨花を背負うた柿丸と、並んで、公卿館を出た。
　門前まで、泰国家の人々、天満坊、百平太など、一人のこらず、見送って出た。
　葬列をつくることは、夜八郎が断ったのである。
　梨花を葬ってやるには、柿丸と二人だけの方がよい、と思ったのである。
　野道を辿って行きながら、
「お主と知りあった頃を、思い出す」
と、夜八郎は、つぶやくように云った。
　夜八郎と梨花と柿丸は、行手にあてのない旅をつづけたものだった。
　不毛の原野を越え、森に入って、盗賊小屋に辿りつくま

での幾日間かの旅が、いま、なつかしいものに思い出される。
　三人とも、孤独な身の上であった。それが、吹き寄せられたように、偶然に一緒になって、なんとなく、旅をすることになったのである。
　いまにして、それが、因縁というものであった、と思いだされるのである。
「あの時は、貴方様は、おそろしい、非情な御仁と思うて居りました。わしの思いちがいでござった」
　柿丸は、俯向いて、背中の梨花の重みを、一歩一歩かみしめるようにして歩きながら、云った。
「おれ自身も、非情な男と思っていた。また、そのような行動をとって来た」
　夜八郎は、今日も雲一片も見当らぬ夏空を見やりながら、云った。
「そうでなかったことを、ご自身でもお気づきなされたか？」
「さあ？　どういうものであろう？　対手次第で、悪鬼になるかも知れぬ」
「いや――。あの頃の貴方様と、いまの貴方様とは、まるっきり、別の御仁のように、人相がちがってしまわれた」
「そうか」
「いまは、どこやら、さびしそうな顔つきをなされて居ります。それが、かえって、気がかりでござる」
「おれに、さびしげな翳が出た、というのか」
　夜八郎は、自嘲の薄ら笑いを、頬に刷いた。
　――天心山の老僧や天満坊によって、おれの歪んだ性質が、矯（ため）されたのか？
　おのれに問うた時、夜八郎の胸中が、ふいに、痛んだ。
　たとえ、性情が矯されたところで、逝った者は、帰っては来ぬ。
　夜八郎は、二人の哀しい女性を、あの世に送っていた。
　一人は、陽明御殿から奪って来た水無瀬（みなせ）家の姫君であった。
　そして、もう一人は、いま、柿丸が背負うている。
　どちらも、夜八郎が、野獣のように、荒々しい犯しかたをした娘であった。
　それが、恨まないばかりか、夜八郎を良人と心にきめて、この世を去って行ったのである。
　――おれが、愛したのでもないのに、あの姫も、梨花も、どうして、おれを慕ったのか？
　夜八郎には、判らぬことだった。
　野道は、森に入り、森を出て、やがて、丘陵にさしかかった。
「夜八郎様。いつまで、この伊吹野にとどまっておいでなされる？」
　柿丸が、たずねた。
「わからぬ。……仕事が、ひとつ、のこって居る」
「なんでござろう？」
「大庄山の頂上にある湖の水を落して、百姓たちに、田植

えをさせてやらねばならぬ。天満坊が、それを計画して居る」

　べつだん、それを為すことが、罪業ふかい身のつぐないとは考えていなかったが、夜八郎は、引き受ける肚になっていた。

「わしも、その時は、つれて行って下され」

「十中八九、生命はないものと思わねばならぬ」

「べつに、このさき生きのびたところで、いい目に会うこともあるまいゆえ、惜しいとは思いませぬわい」

　なだらかな傾斜の道をのぼって行った二人は、そこに、ひとつの人影を、見出した。

　柿丸が掘った墓穴のかたわらに立っていたのは、杉乃江であった。

　夜八郎が、近づくと、杉乃江は、さみしく微笑して、

「梨花どのは、よい場所を、えらばれました」

と、云った。

「わたくしも、自分の奥津城（おくつき）どころを、このように風のすずやかな丘の上にえらびたいと存じまする」

　夜八郎は、杉乃江が旅装束をしているのを眺めて、

「京へもどられるのか？」

と、問うた。

「はい。梨花どのが逝かれたのをみて、急に、都が恋しゅうなりました」

　どのような仔細があって、京の御所を出て、この伊吹野にまで流れて来たのか、たずねたこともなかったが、都の空はあのあたりかと、毎日眺めくらしていたに相違ない。

　女官として幾十年かすごして来た婦人にとっては、やはり、このような片田舎に住むことは、堪えられないのであろう。

「女の一人旅は、危険です」

「このような婆を、からかう者は居りますまい。金子も所持いたしませぬ。寺から寺へ、宿をたのみながら、辿って参りますゆえ――」

「しかし、餓狼のような野盗が横行している山野を、一人で越えて行かれるのは、どういうものか」

「わたくしのことなど、ご心配には及びませぬ。それより、はよう、梨花どのを葬っておあげなされませ」

　やがて――。

　そこに、きれいな土まんじゅうが盛られ、白い墓標が立てられた。

　長い黙禱をおえてから、杉乃江は、

「お別れいたします」

と、夜八郎に、頭を下げた。

「柿丸――」

　夜八郎は、振りかえって、

「このご婦人を、京まで、送ってもらえまいか？」

と、たのんだ。

　柿丸は、ちょっとためらっていたが、

「お送りつかまつる」

と、こたえた。

「いえ、そのようなことまで、して頂いては……」

　杉乃江は、気の毒げに、柿丸を視た。

　柿丸は、珍しく笑顔をみせて、

「わしは、女子（おなご）衆の守護役には、向いている男でござる」

と、云った。

「この男がついていれば、安心です」

　夜八郎は、口を添えた。

「では、ご好意にあまえて、供をしてもらいます」

　杉乃江は、柿丸にも頭を下げた。

　生きてふたたび、会うこともあるまい人を、見送るのは、悲しいことであった。

　丘を下って、しだいに小さくなりゆく杉乃江の姿を、じっと、目で追いながら、夜八郎は、

――京へもどっても、御所では、あの女性を迎えてくれるであろうか？

　そのことを考えていた。

　五摂家の公卿までが、都を見すてている時世であった。

　禁廷の建物のなかばは、烏有に帰しているはずである。多くの女官たちも、散り散りになっているに相違ない。

　そのようなところへ、もどって行って、はたして、くらせるものであろうか？

　夜八郎は、追いかけて行って、思いとどまらせたい衝動にかられた。

　しかし、夜八郎の足は、動かなかった。

　生者必滅会者定離（しょうじゃひつめつえしゃじょうり）の宿運が、人間にあるかぎり、去らんとする者をとどめるのは、むだであろう。

　ふと――。

　夜八郎は、人の気配をおぼえて、頭をまわした。

　新しい墓の前に、女がうずくまっていた。

　小幸であった。

　祈りおわってから、立ち上ると、小幸は、俯向いて、夜八郎のそばへ寄って来た。

「一昨夜、梨花様は、わたしを、おそばへ、お呼びなさいました」

「……」

「梨花様は、自分が逝ったあとは、夜八郎様のお世話をたのみます、と遺言なさいました」

「……」

　夜八郎は、黙って、歩き出した。

「梨花様は、わたしが、貴方様をお慕い申上げているのを、とっくにご存じだったのでございましょうか」

「……」

「わたしが、お世話を申上げても、よろしゅうございましょうか？」

「べつに、世話をしてもらわずとも、野宿で生きて来た男だ」

「わたしが、お世話申上げたいのでございます」

「それは、そなたの心次第だ」

「お世話してさしあげても、よろしいのでございますね？」
小幸は、うれしそうな声をあげた。
夜八郎は、立ちどまって、丘の上を、ふりかえってみた。
墓標が、白く、あざやかに、目にしみた。
——あれが、おれの妻だ。
夜八郎は、自分に云いきかせた。
小幸は、夜八郎の暗い面貌を、せつなげに、見まもった。
夜八郎は、ふたたび、歩き出した。
小幸は、うしろにしたがいながら、
——このおかたのためなら、生命をすてても！
と、自分に云いきかせていた。

その人を

「杉乃江様は、やはり、京の都が、恋しゅうござるか？」
一歩毎に、灰のように土埃が舞うかわききった往還をすすみながら、柿丸が、たずねた。
「京に生れて、育った身ゆえ——」
「しかし、もう、都は、焼野原になって居るのではござるまいか」
「そなたが出て来た時は、どうでした？」
「なにやら、あわただしゅう、戦雲が動いて居るように見えました」
「……」
杉乃江の目もとがくもるのを、横目で見て、柿丸は、ちょっとあわてた。
「いや、したれど、御所だけは、安泰でござろう。天下人になるには、天子様の御詔勅を頂かねばなりますまいから、野望の武将らも、天子様をおびやかすようなことはいたしますまい」
「わたくしは、御所へは、もどりませぬ」
「はあ……？」
「比丘尼御所の方へ参ろうと存じて居ります」

「では、杉乃江様は、尼におなりなされますか」
「それよりほかに、わたくしのような者が、余生を送るすべはありますまい」
「成程——。尼におなりめさるのか。それは、結構でござる」
三里も進んだであろうか。
「杉乃江様。あそこの森のむこうに、寺院の大屋根が、見えますぞ」
「見えます」
「今夜は、あそこで、泊めてもらうことにいたしては、いかがで？」
陽ざしは、二人の足もとからのびた影法師を長いものにしていた。
「泊めてもらいましょう」
杉乃江は、はじめて長い道程（みちのり）を歩いたので、疲れをおぼえていた。
山門の見える地点までやって来て、柿丸は、
「はてな？」
と、小首をかしげた。
木立のあいだから、多勢の人影がうごくのを、みとめたのである。
「杉乃江様、しばらく、ここで、待っていて下され。どうも、様子がおかしい。ちょっと、見て参ります」
柿丸は、急ぎ足に、木立の中へ入って行った。
杉乃江は、路傍の石に腰を下して、一望かわきあがった野へ、目を置いた。
——どうして、雨が降らぬのであろう？
——もし、人身御供によって、雨が降るならば、わたくしが、そのいけにえになってもよいのだけれど……。
誰人のためにも役立ったおぼえのない杉乃江は、せめて尼になって、悲運に果てた人々の霊に祈ろう、と思いたったのであるが、それよりほかに、人の世に役立つことがあれば、よろこんで身を捧げたかった。
柿丸が、木立の中から、緊張した面持で、もどって来た。
「杉乃江様。この寺は、近寄ることは、叶いませんぞ」
「どうしたのですか？」
「軍勢が居ります。滞在しているのでござる」
「軍勢が——？」
「数百とかぞえられます。あるいは、ここを、砦がわりにしようというこんたんかとも、うかがわれます」
杉乃江は、ちょっと考えていたが、
「かまいますまい」
と、云った。
「泊まると、申されますか？」
「若い美しい女子（おなご）ならいざ知らず、このようなばばを、まさか、からかいもいたしますまい」
杉乃江は、微笑して、云った。
「そう申されれば、そうでござろうが……」
柿丸は、しかし、なんとなく、その寺に行くことに、不安をおぼえていた。

行けば、思いがけない異変が起るような気がしてならなかった。
「参りましょう。参って、大将にたのんでみることにいたします」
杉乃江は、疲れた足をすすませた。
柿丸は、見わたしたところ、ほかに宿をもとめる家もないし、杉乃江がもう一里も歩けぬほど疲れているのが、判っていたので、
――やむを得ぬ。
と、決心した。
やがて、山門の前に至って、見張りの兵に、
「おん大将に会わせてもらいたい」
と、申し入れた。
「御用は？」
「一夜の宿を、お借りしたい」
「旅人を泊めることは許されぬ」
兵は、きびしい態度で、拒絶した。
柿丸は、むっとなって、
「われらは、おん大将に会うてたのみたい、と申して居るのだ」
兵は、柿丸のうしろの杉乃江を見て、身分いやしからぬ婦人と知ると、黙って、境内へ登って行った。
すぐ引きかえして来ると、
「境内まで案内いたす」
と、告げた。
高い長い石段を、柿丸は、杉乃江の手をひいて、登って行った。
杉乃江は、途中立ちどまって、
「由緒のある古刹とおぼえます」
と、云った。
軍勢にけがされたことに、心をいためたのである。
境内には、所在なげに、兵たちが、たむろしていたが、
――なんだ、婆さんでははじまらん。
そんな目つきで、じろじろ見やった。
九十九谷左近は、十人の旗本衆を前にして、絵図面をひろげていた。
絵図面は、伊吹野城であった。
「この焼け城には、まだ、兵が残って居る。その頭数は、不明だ。二百は下るまい。……城主田丸豪太夫は、なかば狂乱の状態にある。乱心はして居っても、武将として戦うすべまで忘れては居るまい。お主らが想像するより以上の猛者であることだけは、それがしが、確信をもって、云う。二十人や三十人の雑兵に、包囲されても、ビクともするものではない」
そう云ってから、左近は、あらためて、旗本衆を見わたした。
――どうやら、戦場で阿修羅となって働いた経験をもっている者は、一人も、いないらしい。
旗本の走衆といえば、主君の身辺を守るえらばれた強者たちのはずであった。

どう見たところで、一騎当千の度胸の持主とは、受けとれぬ。
城攻めにあっては、まっさき駆けて、功名手柄を競うのが走衆であるが、左近が絵図面をひろげてみせても、一向に、気負い立とうとはしない。
はなはだ、たよりない面々であった。
「お主ら十人が力を合せて、奮迅して、ようやく、田丸豪太夫を討ちとれよう。……お主ら、その度胸は、あろうな？」
左近は、一人一人の顔へ、鋭い視線を当てた。
どの顔も、沈黙をまもった。
「その働きによって、お主らは、それぞれ、奉行となり、この土地を治めることになるのだ。おのれのためだ」
「……」
「返辞をきこう。それによって、それがしは、城取りをやるかやらぬか、きめる。……それがしは、剣の奥義（おうぎ）をきわめることのみを生涯の目的として生きて居る兵法者だ。城主になる野望など、持っては居らぬ。いずれ、伊吹野城が再築され、平野がみのったならば、それがしは、去る。お主らのうちから、一人、城主となる者がえらばれよう」
それをきいて、はじめて、一同の表情が動いた。
左近は、自分の言葉に効果があったことに、満足した。
その時、徒士（かち）が、庭へ入って来て、
「旅の者が二人、今夜の宿をもとめて居りますが……」
と、取次いだ。
「何者だ？」
旗本衆の一人が、問うた。
「品のある老婆と、小者でございます」
「追いかえしてしまえ」
徒士は、独断で、二人を境内までつれて来ていたので、ためらった。
左近が、絵図面へ目を落しながら、
「かまわぬ。泊めてやれ」
と、云った。

方丈の奥の一室では――。
丸窓のそばに、美夜は、坐って、裏手にせまった山麓の景色を、ぼんやりと眺めていた。
木立の緑を、しろじろと彩って、えごのきが、咲いていた。

路の辺（へ）の壱師の花のいちじろく
　人みな知りぬ我が恋妻は

そんな一首が、万葉集にある。
壱師の花とは、このえごのきのことであろうか。
美夜は、そんなことを、思っていた。
鷹森周防が追われ、九十九谷左近が頭首の座についてから、美夜は、一時の安泰を得たようであった。
左近は、あれから一度も、この部屋へ、姿をあらわしていなかった。

しかし、左近が、信じられる男である、という証拠は、何もなかった。
　いつ、夜半に、左近が、ふみ込んで来るか、知れなかった。
　その不安が、しばしば、美夜を、目ざめさせた。
　希望のない昼であり、怯えていなければならぬ夜であった。
　縁側に、足音が近づいた。
「こちらに、泊まられい」
「忝う存じます」
　言葉が交され、障子がひらかれた。
　美夜は、入って来た婦人を見やって、
　――どこかで、会ったような？
　そんな気がした。
「旅の者でありまする。一夜の宿をおかりいたします」
　杉乃江は、若く美しい上臈がいた意外さにおどろきながら、挨拶した。
「どうぞ、お心やすらかにおすごしなさいませ」
　美夜は、微笑して、挨拶をかえした。
　杉乃江は、お茶をたててすすめてくれる美夜を眺めて、
　――都のにおいをもったこの娘御が、まるで、とらわれ人のように、こんなところにいるとは？
と、いぶかった。
「うかがって、よろしいことかどうか……、貴女は、都で、姫君と呼ばれたおひとではありませぬか？」
　杉乃江は、たずねてみた。
「はい」
「お家は、公卿でありましょうか？」
「摂州の水無瀬でありまする」
「まあ――水無瀬家の！」
　杉乃江は、おどろいた。
「水無瀬家の姫君でおわしましたか！」
「いまは、ただの、家無しの女子にすぎませぬ」
「どうして、このようなところまで、おいでなさいました？」
　美夜は、伯父東山中納言につれられて、都を出たことを、語った。
「中納言殿は、この伊吹野へ行くと申されましたか？」
「はい」
「伊吹野の、公卿館をたずねるとは、申されませんでしたか？」
「はい。そのようなことを申して居りました」
「わたくしは、その公卿館に居りました」
　杉乃江は、告げた。
「……？」
　美夜は、杉乃江の気品のある顔を、見まもった。
「公卿館のあるじ泰国清平殿は、二十年ばかり前に、五摂家から、たくさんの金銀をお預りなされた由、ききおよびます。中納言殿は、あるいは、その金銀を受けとりに参られたのではありますまいか」

「……」
　美夜は、東山中納言が殺された理由を、納得した。
　杉乃江は、その暗い表情を眺めて、
「おさしつかえなければ、仔細をうかがいまする」
と、うながした。
　美夜は、三日前に起った惨事について、語った。
　杉乃江は、いたましげに美夜を見まもりながら、ききおわると、
「すると、貴女は、目下は、とらわれびとというわけですね？」
「はい」
「九十九谷左近という兵法者は、貴女を、どうしようというのでしょう？」
「わかりませぬ」
「わたくしのような力のない女には、どうしてさしあげることもできませぬが……、もし、貴女が、救いをもとめたいのでしたら、その救い手は居りまする」
「え？」
「わたくしが出て来た公卿館に、力を持った強い男子（おのこ）が居りまする。貴女のような美しい娘御を守るにふさわしい御仁です」
「……」
　美夜は、杉乃江を、じっと、見つめかえした。
　杉乃江は、微笑した。
「御自身は、ただの放浪の牢人者でしかない、と申されて居りますが、まことは、足利将軍家の血を継いでおいでです」
「えっ？」
　美夜は、はっとなった。
「世をすてておいでのようにみえますが、決意なされば、いかなる危険をも冒す勇気を持っておいでの御仁です。……わたくしが、明日にも、公卿館へひきかえして、その御仁に、貴女のことを、話して、おたのみしてみましょう」
「もしや、そのおかたは、多門夜八郎と名乗っておいではありませぬか？」
　美夜は、たずねた。
　杉乃江は、びっくりして、
「ご存じでしたか、多門夜八郎殿を？」
と、ききかえした。
　美夜は、うれしさで、両手を胸にあてた。
「やっぱり……多門夜八郎様は、わたくしが想像していた通りのおかたでした！」
　はずんだ声音で、云った。
　杉乃江は、
　――これには、なにか、仔細があるらしい。
と、思った。
　美夜は、杉乃江へ、熱で潤んだようなまなざしを当てた。
「わたくしが、今日まで持っていた唯ひとつの希望は、多門夜八郎様にめぐり会うことでした。亡くなった姉の遺言

でございます」
美夜は、つつまずに、夜八郎と姉とのあいだに起ったいきさつを語った。
幸せの薄かった姉が、病臥のあいだに描きあげた夜八郎の像を、そのまま、美夜が受けとっていることを、杉乃江は、きかされて、いくども、うなずいた。
「わかりました。明朝、わたくしは、公卿館へもどって、夜八郎殿に、貴女のことを、おつたえいたしましょう」
「お願い申します」
美夜は、頭を下げた。
胸の中に、眩しい光がさし込んで来たようなよろこびが、美夜の顔を上気させていた。
杉乃江は、その顔を、この上もなく美しいものに、見まもった。
――自分には、このようなよろこびが、ついに、一度も、おとずれなかった。
禁廷の女官として、冷たい形式にしばられた日々が、過去の記憶のすべてであった。
それだけに、この若く美しい娘を、幸せにしてやりたい、という願いが、胸にあふれた。
夜更けて――。
牀をならべてやすんでからも、二人の女性は、べつべつの想いで、ねむられそうもなかった。
杉乃江は、闇に眸子（ひとみ）をひらいて、云った。
「女の幸せは、やはり、良き殿御により添うてくらすことですね」
「はい――」
「夜八郎殿が、貴女を、姉君のかわりに、愛して下さればよいが……」
杉乃江は、丘の上にねむっている梨花のことを、考えていた。
梨花を喪った夜八郎は、もう別の女性を、愛そうとはせぬのではあるまいか？
その不安が、杉乃江の心にあったのである。
「わたくしは、この世に、多門様のほかに、おすがりするおかたが、ありませぬ」
美夜は、自分に云いきかせるように、はっきりと云った。

燃える剣

すさまじい音響が、渓谷に起り、遠山にいくつかのこだまを呼んでいた。
いまだ一度も斧を加えられたことのない密林が、伐りひらかれているのであった。
斧をふるっているのは、いずれも、屈強の若者たちであった。
「おーい！　もう、いいぞ。その樹は、のこしておけ。こんどは、この大岩の下を掘るのだ。抜け穴をつくる」
絵図面を携えている年配の武士が、大声で、その巨巌の上から、叫んだ。
若者たちは、斧をすてて、それぞれの場所に憩うた。
山城から、伊吹野の北の麓に通じる道つくりは、あと一息であった。
ただの道つくりではなく、降りるに易く、登るに難いつくりかたをしていたのである。
密林と巨巌と渓谷を利用し、さらに、蝮や百足の棲息地をあえてえらんで、道を通じさせていた。
陽が落ちれば、山犬の群が跳梁する地域もあった。
また――。
いつの頃からたて籠ったとも知れぬ、奇怪な山賤（やまがつ）の一団が、蟠踞している広い草原を横切らねばならなかった。
そこでは、すでに、七人の若者が毒矢を射込まれて、仆れている。
人間とも思われぬ敏捷無類の敵ゆえ、追うことは叶わなかった。本拠も、つきとめられなかった。
邪宗の信仰を抱いてでもいるのか、射かけて来る毒矢には、判読し難い梵字が書き込まれてあった。
かれらにとっては、その草原は、一族以外の者を一歩をも入れぬ掟を設けているに相違なかった。
山城側では、高札を立て、道つくりは、伊吹野城奪還の目的を持ってなされるものであり、成功のあかつきには、兵糧と武器の贈与をなす、と約束したのであった。そして、貴重な米を、五俵も、高札のわきに積んで、休戦の協定をもとめた。
一夜が明けてみると、米俵はなくなって居り、折られた毒矢一本が高札に突き立ててあった。
山城側では、休戦の協定に応じたものとみとめた。
しかし、なお、油断はならなかった。
草原を横切る際は、八方に目を配って、警戒をおこたらぬようにしなければならなかった。
いま、伐りはらっている密林は、その草原の下にあった。
密林を過ぎれば、山頂から落ちている渓谷へ出る。曾ては、どうどうと湖の水が流れていた渓谷であったが、いま

は、涸れて、ひとすくいもない。
渓谷の断崖ぶちに沿うて行けば、麓は、一里のさきにある。
普請奉行を命じられた横川勘兵衛は、巨巌の上に、絵図面をひろげて、思案をこらしていた。
と——。
人影が、その絵図面の上に、さした。
何気なく顔を擡げた勘兵衛は、そこに奈良城義太郎の鋭くひきしまった面貌（かお）を見出して、はっとなった。
勘兵衛は、ずうっと、工事の指揮にかかりきっていて、山城へは、しばらく戻っていなかった。
義太郎が、帰って来た、という報らせは耳にしていたが、まだ、会っていなかったのである。
勘兵衛は、義太郎が幼少の頃の、守り役であった。
「若か——」
「勘兵衛、わしが、今日からは、山城のあるじだぞ」
義太郎は、昂然と胸を張って、云った。
「三家老は、それを、承知いたしたのでござろうか？」
勘兵衛は、眉宇をひそめて、たずねた。
「承知するも、せぬもない。父親が乱心すれば、その嫡子が、あとを継ぐ。どこに、ふしぎがある」
「それがしどもに、異存はござらぬが、庄野、藤掛、矢倉ら首名（おとな）らは、大いに不服でござろう。殊に、山城をして、ゆるがぬ安泰に置いた庄野四郎五郎はな——」
勘兵衛は、ためらわずに、云った。
気骨のある武士であった。いま、工事に従事させている若者らは、ことごとく、勘兵衛の寄騎であった。
いうならば、山城の武力は、勘兵衛の手に、にぎられている、といって過言ではなかった。
義太郎が、城主としての真の権力を得るには、勘兵衛の無条件の味方がなければおぼつかなかった。
「庄野四郎五郎が、いかなる才覚を発揮して、大庄山に和平を敷いたかは知らぬ。しかし、その功績によって、城主の地位が買えるはずがあるまい」
「その通りでござる。したが、兵らが、はたして、首名側につくか、若の側につくか、それが問題でござろう」
「勘兵衛、お主が兵を説いてくれれば、なんの騒動にもなるまい」
「そのような役目は、まっぴらでござるな」
「なぜだ？」
「それがしは、政権の争いにかかわりあいたくはござらぬ」
勘兵衛らしい態度であった。
義太郎は、「よし——」と云った。
「たのまぬ。しかし、わしのなすことを、邪魔だてはせぬな？」
「若は、それがしは、むかし、守り役をつかまつった。倅とも思うて居り申す」
勘兵衛は、そう云って、微笑した。
義太郎が、ひきかえそうとすると、勘兵衛は、呼びとめた。

「若——。かるはずみな振舞いをなさるな」
「忠告なら、無用にせい。わしは、わしの思うがままに、行動する」
義太郎は、云いすてた。
勘兵衛は、歎息した。
わざと冷たい態度をとったのは、義太郎のためを思ったからである。武力を持つ自分が、一も二もなく、味方する態度を示せば、義太郎は、城主の座に就くために、どんな暴力をふるわぬとも限らぬ。それを憂えた勘兵衛であった。
勘兵衛は、庄野四郎五郎に、城主となる野望がある、とは考えていなかったのである。
「奉行殿——」
寄騎の一人が、そばへ寄って来た。
「それがしが、きいたところでは、若殿は、庄野殿の息女を、どこかへ拉致して、これを囮にして居られるそうでござる」
「まことか、それは——？」
勘兵衛は、愕然となった。
「若殿が、庄野殿にむかって、そのことを、はっきりと申されたのを、きいた者が居ります」
「なんという振舞いを！」
勘兵衛は、吐きすてた。
こちらが、道つくりに専念しているあいだに、山城では、思いもかけぬ波瀾が起っていたのだ。
勘兵衛は、道つくりを中止して、急遽、ひきあげたい衝動にかられた。
しかし、道つくりは、中止できなかった。
山城の兵糧は、乏しくなっていた。伊吹野城に侵入して、兵糧を奪取しなければならなかったのである。
「工事に、かかれい！」
勘兵衛は、下知しておいて、副将の佐田なにがしを呼んだ。
「城へもどって、様子を見て参らねばならなくなった。明朝には、もどる。それまで、わしに代って、指揮をたのむ」
「心得申した」
勘兵衛は、いそいで、義太郎のあとを追うことにした。
もし、勘兵衛が、そのまままっすぐに、足をはやめて登って行っていれば、頂上に至らぬうちに、義太郎に追いつけたに相違ない。
邪魔が入った。
草原を横切ろうとすると、不意に、山賤が三人、勘兵衛の前をふさいだのであった。
勘兵衛は、はじめて、その姿に接した。
いずれも、顔半面をくろぐろと髯で掩い、けものの皮でつくった袖なしを羽織り、短槍を携えていた。
勘兵衛は、山賤から、さらに、米五俵を要求された。
伊吹野城の地下倉から、兵糧を奪取するまで待ってもらわねばならぬ、という返辞を、山賤は、承服しなかった。

山城の本丸に於ては――。
庄野四郎五郎は、蜂尾兵庫助と、かなり険悪な空気の中で、対坐していた。
兵庫助が、現れて、
「若を、ひとまず、主座に就けては、いかがであろう」
と、申し出たのである。
これに対して、庄野四郎五郎は、冷然として、反撥したのであった。
「われらが、営々孜々（しし）として、今日まで努力して、保って来た平和を、若のために、ふみにじられることは、兵らの立場からも、断じて、許されぬ」
「若は、主座に就くことをもとめて居るのであり、専横の権力をつかもうとしているのではござるまい」
「主座に就けば、専横の権力をふるうことは、云うをまたぬ」
「それは、被害妄想と申すもの。若は生来寛潤の気象であり、この五年間、苦労もされて居り申す」
兵庫助としては、なんとか、事を穏便にしずめたい気持であった。
しかし、庄野の方は、いまや、意地にも、義太郎を、山城から追放したい意嚮をかためていた。
問答は、はてしがなかった。
空気は、険悪になるばかりであった。
そこへ、義太郎が、ぬっと、姿を現した。
「兵庫助――。無用の問答は、措（お）けい」
義太郎は、庄野を睨み据えて、云った。
「若！　敵同士ではござらぬ。おだやかに、話し合うことが、肝要でござるぞ」
「ふん――」
義太郎は、せせらわらった。
「勘兵衛に会うて来たぞ。勘兵衛は、わしの味方だ。寄騎一同、ことごとく、わしを主人と仰ぐと誓ったぞ！」
義太郎は、うそぶいた。
――云うべからざることを、どうして、わきまえぬのか！
兵庫助は、絶望的な気持になった。
庄野四郎五郎の面貌に、露骨に、憎悪の色がみなぎった。
義太郎は、ずかずかと、上座にあがって、どっかと、あぐらをかいた。
「庄野四郎五郎、即刻、当城を立去れい！」
大声で、命令した。
「主人でもないお手前様から、さような命令は、受けぬ」
庄野は、云いかえした。
「わしは、奈良城義太郎だ！　この大庄山および伊吹野の領主だ！」
義太郎は、叫んだ。
その時であった。
幽鬼のように、ひとつの人影が、ふらりと、入って来た。
庄野四郎五郎は、そちらを見やって、あっ、となった。
「美代奈！」

白蠟のように蒼ざめて、眸子（ひとみ）をうつろに宙に送ったわが娘の顔を凝視した庄野は、いかにひどい打撃を心身に蒙っているかを知った。
「美代奈！」
庄野は、あわてて立って行き、美代奈の肩をとらえ、
「どうしたのだ？　どこへ、監禁されていたのだ？」
「……」
美代奈は、唖のように、こたえなかった。
「美代奈！　そなたは、何をされたのだ？　これ――痴呆に相成ったのか！」
庄野は、烈しく、美代奈をゆさぶった。
瞬間――。
美代奈は、父の手をふりはらいざま、胸にしのばせた懐剣を抜くや、義太郎めがけて、突きかかった。
義太郎は、身をひねって、美代奈の手くびを打って、懐剣をとり落させた。
美代奈の形相は、一変していた。
「鬼！」
まなじりをつりあげ、眼球がとび出さんばかりに、かっとみひらいた凄じい憎悪の表情は、とうてい、若い女のものではなかった。
美代奈が、落ちた懐剣をひろいとるのを、庄野も、兵庫助も、息をのんで、見まもった。
義太郎は、冷然としている。
美代奈は、再び義太郎を突くかわりに、不意に、懐剣を、おのが胸に刺した。
「美代奈！」
庄野は、仰天して、とびついた。
美代奈は、がっくりと、父の胸によりかかって、目蓋を閉じた。
「美代奈っ！　な、なんということを！」
庄野は、わが娘をかかえて、全身をふるわせた。
義太郎が、座を立った。
とたんに、庄野は、美代奈のうらみを、そのまま、おのが面相にみなぎらせて、
「待たれい！」
と、呼びとめた。
義太郎は、じろりと、庄野を視かえした。
「おのが子を、このような目に遭わされて、父たる者、そのままに、ひきさがるわけには参らぬ！」
「娘の讐を復（かえ）すというのか？」
「左様――。勝負いたすぞ！」
「よかろう。兵庫助、検分せい」
義太郎は、昂然として、云った。
――やんぬるかな！
兵庫助は、嘆息した。
――いずれかが、仆れなければ、事はおさまるまい。
やがて――。
本丸の平庭上で、義太郎と庄野四郎五郎は、対峙した。
対手を寸毫も許さぬそれぞれの憎悪を、全身にみなぎら

せて、十歩の距離をとって、向い立った二人は、おのが人生に於ける最大の関頭に立ったと覚悟した。
蜂尾兵庫助ただ一人が、検分の役をとり、すべての者が、遠ざけられていた。
平庭はただ広く、三人の姿が、小さいものに見られた。
物蔭には、多くの者が、息をひそめているはずであったが、寂としている。
陽ざしが眩しく照りつけているばかりであった。
義太郎は、長剣を携げ、四郎五郎は短槍を小脇に、かいこんでいた。
先に——。
四郎五郎が、すうっと、穂先をさし出して、ぴたりと構えた。
「いざ！」
その声に応じて、義太郎は、抜きはなって、鞘を遠くへ、投げすてた。
「おうっ！」
義太郎は、高く叫んで、大上段にふりかぶるや、かっと、双眼を、ひき剝いた。
四郎五郎は、やや猫背になって、義太郎と逆に、細目になった。
戦いの場数をふんでいることにおいては、若年の義太郎の方が、多かった。四郎五郎は、文官としての手腕が秀れた人物であり、刀槍をふるうのは得意でなく、そのために、浪々のくらしが長かったのである。
とはいえ、戦国の武士であるからには、戦場を駆けめぐった経験は、一度や二度ではない。ただ、この場合、敵を斬るよりも、おのが生命の無事の方に、心を配って来たのである。
このような一騎討ちは、おそらく、はじめてであった。
義太郎を亡き者にする巧妙な策謀は、四郎五郎の脳裡に、うかばないはずはなかった。敢えて、策謀をすてて、決闘をえらんだのは、わが娘の死に出会って逆上したのではなく、かれもまた、戦国を生きる武士であったからである。
義太郎の方とすれば、この機会をこそ、のぞんでいたのである。
一太刀で斬る自信を、総身に満たして、義太郎は、すこしずつ、進みはじめた。
四郎五郎は、動かぬ。
白く広い庭上に、動くものといえば、義太郎の長身とその地上の影法師だけであった。
横川勘兵衛が、もどりついたのは、その時であった。
義太郎と四郎五郎が決闘をしているときいて、
「ばかな！」
と、叫んで、走り出した。
その距離は、五歩にまで縮まった。
大上段にふりかぶった義太郎が、一瞬、にやりとした。
四郎五郎の構えに、ひるみが生じるのを視たのである。
勘兵衛が、奔り出て来たのは、その時であった。
「若っ！」

絶叫するのと、義太郎が、地を蹴るのが、同時であった。
白刃と槍の穂先が、交叉した。とみえた刹那、そこに、血飛沫（ちしぶき）が、噴水のごとく、ほとばしった。
「ああっ！」
勘兵衛は、間に合わなかったくやしさを、その叫びにこめた。
四郎五郎は、よろめきつつ、槍を杖にしたが、おのが五体を支えきれず、がくっと、膝を折った。
兵庫助が、いそいで歩み寄って、かかえた。
「遺言は——？」
耳もとでうながされると、四郎五郎は、かぶりを振り、がくっと、顔を仰向けた。
闇になって行く世界へ、大きく双眼をみひらきながら、
「ほ、ほろびる。……ほろびるぞ」
そのつぶやきを、この世にのこした。
義太郎は、その最期を、冷然と見下していた。
勘兵衛が、寄って来て、
「若！　奸賊ならばいざ知らず、この山城の安泰につくした首名を、斬るとは、あまりの所業と申さねばならぬ」
と、云った。
「わしが、挑んだ勝負ではない」
「庄野が挑んだ、と申されるのか？」
勘兵衛は、納得しがたい表情になった。
兵庫助が、
「美代奈が、面前で、自害したため、娘の仇討ちをしようとして、返り討ちに相成った」
と、説明した。
矢倉新兵衛、藤掛左馬之丞はじめ、家臣たちが、こわばった面持で、近づいて来た。
義太郎は、昂然と胸をはると、
「庄野四郎五郎に心服して居った者は、居らぬか？」
と、家臣一同を見わたした。
「居るならば、出い。一騎討ちをしてくれる！　居らぬか？」
誰も、その正面に出て来る者はいなかった。
「よし！　されば——ただいまより、当城のあるじは、この奈良城義太郎だぞ。不服の者は、即刻、去れ」
満々たる自負をもって、宣言する義太郎の横顔を、兵庫助と勘兵衛は、それぞれの暗い気持で、見まもった。
——はたして、このがむしゃらな若者を、主君にして、どうなるのであろうか？
暗い気持の中の不安は、共通していた。

宿敵卍

えんや、ほう
えんや、ほう

多勢のかけ声が、庭の一隅からきこえて来る。

井戸掘りである。

百平太が指揮して、二三日前から掘りにかかった。青助、黒太、赤松、白次など、労力をきらう都の夜盗たちも、せっせと働いている。

それまで使っていた井戸が涸れて、いよいよ水が乏しくなり、別の井戸を掘らねばならなくなったのである。

ただの深さでは、水は、わいて来そうもなかった。

水がいかに貴重なものか、思い知らされた青助たちは、背に腹はかえられず、早朝から日暮れまで、けんめいに掘りつづけている。

えんや、ほう
えんや、ほう

かけ声のうちでも、青助の声が、いちだんと高い。祭文語りをやったことのある男である。

天満坊は、座敷で、そのかけ声をききながら、一枚の絵図面をひろげていた。

夜八郎が、黙兵衛からもらって来た、大庄山の地勢をこまかく描いた絵図面であった。

無数の朱点が、入れてある。越え難い危険の場所であることを、示していて、その理由が説明してある。

一読しただけでは、とうてい、突破は不可能である。

天満坊は、夜八郎から、これを渡された時、

「これでは、鬼神か天狗ででもない限り、竜神湖まで辿りつくことは、おぼつかぬ」

と、云ったものであった。

田丸豪太夫の攻撃をおそれた奈良城義胤が、まるで狂気にちかい必死な努力で、登り道をふさいでしまったのである。ただふさいだだけではなく、餌をまいて、山犬の群をおびき寄せて、そこへ棲みつかせ、あるいは、蝮をはなった。渓谷の上をさしわたした釣り橋を切り落したばかりか、両断崖には、百足を飼って、岩にむらがらせていた。

さらには、中腹の草原には、怪しい神を奉ずる得体の知れぬ山賤の一党の巣窟がある。

尋常一様のわざをもってしては、登攀は不可能であった。

だが——。

伊吹野は、いまや、絶体絶命の瀬戸際まで追いつめられている。

この二十日あまりの間に、雨が降らなければ、田植えはできないのである。そうなれば、農夫たちは、伊吹野を逃散するか、あるいは、餓死しかのこされていない。

天を仰げば、雨が降るのは、絶望である。

なんとしても、竜神湖の水を落して、伊吹野に流し入れなければならなかった。

その日から、天満坊は、この絵図面を、睨んで、毎日すごしている。

——やれるかも知れぬ。

すこしずつ、その気持になって来た。

絵図面が示す限りでは、人間業をもってしては到底不可能事も、あたってくだければ、意外の幸運によって、成功するかも知れないのだ。

敢然として進む闘志と自信を、おのれのものにする必要があった。

「御坊——」

影のように、すっと入って来た者に、呼ばれて、天満坊は、絵図面から、顔をあげた。

七位の大乗であった。

ある日、忽然として姿を消して、それきり行方知れずになっていたのである。

「お主は、もう、都へもどった、と思って居ったが……」

「当地は、気に入って居り申す」

大乗は、にやりとして、

「大庄山の麓を、うろついて居り申した」

と、告げた。

「ほう……、何か収穫はあったかな？」

「奈良城勢は、どうやら、伊吹野へ降りて来る気配がござる」

「なんと……、まことかな？」

「たしかに！　それがしは、こころみに、渓谷を途中まで登って行ってみたのでござる。……すると、人跡未踏の密林で、樹が伐り倒される音が、間断なく、ひびいて参った。道つくりをして居るとしか、考えられず、思いきって、渓谷から、絶壁をよじのぼってみようといたしたところ……、いやはや——」

大乗は、片袖をまくって、二の腕を示した。

凄じい傷が、ついていた。

「いかがしたな？」

「山犬の群が、一挙に襲って来申したわ」

「ほう——」

「やむなく、水の涸れた谷底まで退却いたしたところで、そこでもまた、ひどい目に遭い申した」

「何が襲うて来たな？」

「百足の大群でござった。岩かげという岩かげから、ゾロゾロとはい出して来た光景は、鳥肌がたつ、などという程度の不気味さではござらぬ」

「ふむ——」

「たしかに、奈良城勢は、道つくりをいたして居り申すが、途中にうごめいて居るけだもの、毒虫のたぐいを、どうやって、はらいのけるのか、見当もつき申さぬ」

「敵が降りられる道なら、こちらも登れぬはずはないがのう」

天満坊は、急に、

――いよいよ、やってのけるか！
と、ほぞをきめた。
「大乗――」
しばらく沈黙を置いてから、天満坊は、忍者へ、いつになくきびしい表情を向けた。
「なんでござる？」
「お主これまで、到底不可能と思われる冒険に、生命を賭けたことはないか？」
「……」
大乗は、腕を拱（こまぬ）いて、考えた。
「お主のような、盗賊と忍者を兼ねている者ならば、そのような機会が、一度や二度は、あったろう」
「それは、ないとは申さぬが……、死地と判って居れば、それに対する充分の準備をいたしたゆえ――」
「それは、そうであろう。しかし、充分の準備をいたして、その死地に忍び入りながら、絶体絶命の状態に陥った場合は？」
「悪運というやつでござる。おのれ自身、思いもかけぬ智慧がひらめいたり、身をすてて躍った瞬間に予期もせぬものが救ってくれて、道がひらけたり……、いわば、これは、測らざる偶然が、生命をたすけてくれるのでござる」
「それじゃな」
天満坊は、にっこりした。
「御坊は、いよいよ、大庄山を襲われますか？」
「背に腹はかえられぬ。水は、竜神湖にしかない。虎穴に入らずんば、虎児を獲ず、だのう」
「御坊が、覚悟をきめられたのであれば、それがしは、もう一度、奈良城勢の道つくりの状況を、調べて参る」
「たのむ」
大乗は、これから直ちに、大庄山へ向う気色をみせて、座を立った。
入れちがいに、多門夜八郎の姿が現れた。
「当家のあるじの臨終が、せまった」
夜八郎が、沈んだ声音で、告げた。
「ほう――」
天満坊も、暗い面持になった。
公卿館の主人泰国清平が、重態に陥ったのは、十日ばかり前からであった。
「遺言は、おわって居るのであろう」
「いや、太郎は、まだ、きいて居らぬ、という」
「……？」
「五摂家の金銀を、どこに埋めてあるか、太郎は、知らされて居らぬのかな？」
「たぶん――」
「困ったものだな。清平殿は、もう意識はないのであろう」
「目ざめる希望はない」
「清平殿ともあろう者が、どうして、口をつぐんだまま、逝こうとするのか」
天満坊は、立った。

夜八郎は、天満坊が出て行くと、自分はのこって、そこにひろげられてある絵図面へ、目を落した。
――金よりも、水か。
やがて、夜八郎が、清平の寝所へ行くべく、立ち上った折であった。
小幸が、あわただしく、駆け入って来た。
「杉乃江様が、おもどりになりました」
「なに？」
夜八郎は、おどろいて、玄関へいそいだ。
よほど、急いでもどったものであろう。杉乃江は、玄関の式台に坐って、苦しげにあえいでいた。
「どうなされたのだ？　何か起ったのであろうか？」
「はい。貴方様に、ぜひともお願いしなければならぬことが起りました」
「何か？」
「伊吹野の東の岬に、古刹がありまする。そこに、都からやって参った五百ばかりの軍勢が居りまする。その軍勢とともに、一人の姫君が、おいでです」
「……？」
「摂州水無瀬家の姫君で、美夜と申されまする」
「水無瀬家の――？」
夜八郎は、はっとなった。
「お会いなされたおぼえがおありでしょう？」
「それがしは、かつて、水無瀬家の姫をかどわかしたことがある。その妹であろうか」
「そうなのです。……美夜様は、お姉上の遺言によって、貴方様をさがしもとめて居られまする」
「……」
「貴方様にお目もじすることを、唯一の生甲斐になされている天涯孤独のおひとでございます」
「……」
「美夜様は、目下、監禁同様のおん身でありまする。貴方様以外に、救い出せる御仁は、見当りませぬ」
「その軍勢を率いるのは、何者であろう？」
「それが、率いて参った大将ら二人は、一人は斬られ、一人は追放され、いまは、得体の知れぬ兵法者が、主謀格となって、伊吹野城を奪おうと、計っている由――」
「兵法者？」
「はい。九十九谷なにがしと名のる、稀代の使い手の由にございます」
「左近か！」
「ご存じでしたか？」
「それがしの宿敵だ」
「まあ！」
夜八郎は、微笑して、
「あの兵法者とは、三度び、闘うことになる。いずれ、出会うであろうという予感はあった」
と、云った。
「では、美夜様を、救い出しに行って下さいますか？」
「参ろう」

夜八郎は、陽明御殿にふみ込んだ時に、一室で出会った少女を、ありありと思い出していた。
夜八郎は、杉乃江から、柿丸を、その古刹にのこして、ひそかに、美夜の身辺を守護させているときいて、単身でおもむく肚をきめた。
夜八郎は、清平の寐所から出て来る天満坊に、そのことを告げた。
「死地に入らねばならぬほど、その娘を救わねばならぬ義理があるとは思えぬが……」
天満坊は、云った。
「それが、ある」
「どうしてじゃな」
「御坊には、わかるまい。おれは、けがれを知らぬ娘を、二人までも、あの世へ送っている。おれのせいなのだ」
「……」
「三人目の娘を、あの世へ送るわけにはいかぬ」
「成程のう――」
「美夜という娘が、おれにめぐり会おうとして、都を出て来たのを、勝手なふるまいだと、すてておくわけにはいかぬ」
「五百の軍勢のまっただ中へ乗り込んで、九十九谷左近と、決闘し、これに勝って、姫を救い出す――。世の中が、万事、そう都合よくはこぶのであれば、苦労はあるまい」
「わかって居る。しかし、おれは、行かねばならぬ」
「お許（こと）の生命は、大切なのだ。お許を措いて、誰が、大庄山へ登って、竜神湖の水を、きって落せるかの？」
そう云われると、夜八郎も、口をつぐまざるを得なかった。
「一人の女子（おなご）を救うことと、伊吹野一万の農民を救うのと、どちらが大切か、自ら明らかであろうがな」
「……」
「と申したところで、ひとたび決意したことを、変えるお許でもあるまい。……行かっしゃれ」
「うむ――」
夜八郎は、一揖（ゆう）しておいて、館を出た。
百平太が、馬を用意して、待っていた。
「多門様。わしを、供にして下され」
「いや、おれ一人で行く」
「足手まといには、なり申さぬわい」
「お前がじゃまなのではない。おれは、おれ一人の力を試してみようと思うのだ」
「ざんねんじゃ」
百平太は、かぶりを振った。
門前には、杉乃江と小幸が、ならんで見送った。
「武運のほどを、お祈りして居りまする」
杉乃江が、頭を下げると、夜八郎は、笑って、
「神を信じなかった男が、天佑を信じて居る。……待っていてもらおう」
夜八郎は、まっしぐらに、馬をとばしはじめた。
杉乃江は、見送る小幸の双眸に、泪がわきあがるのをみ

とめて、
――ああ、この娘も！
と、思った。

ところで――。
伊吹野城の田丸豪太夫は、焼きはらわれた荒城の中で、手負い猪のように、昼夜うめきつつ、逼塞（ひっそく）していたのであろうか？
いや、野伏の中から身を起した豪太夫は、やはり、不死身であった。
擁する兵は、二百にも足らなくなっていたが、結果としては、豪太夫の力を信ずる者たちがのこったことになり、その団結はかたいものとなった。
ひとつには、豪太夫が、奇蹟でも行うように、多量の武器と兵糧を、焼土の下から、とり出してみせたからである。
また、もうひとつの理由として――。
豪太夫は、いずれ、近い時をえらんで、公卿館を、再び襲い、こんどこそ、五摂家の金銀を奪ってみせる、と兵らに誓ってみせたからである。
豪太夫が住む仮の館も、士の屯（たむろ）する根小屋も、そして兵らの起居する小屋も、つくられていた。
新しく井戸も二箇処に掘られ、水の不足もなかった。
兵らとしては、旱魃の野をうろつくよりも、よほど、荒城にとどまっている方が、楽であった。
女も何十人か、拉致されて来ていた。
その中から、見目のいい女を数人えらんで、豪太夫は、かたわらにすえて、酒をくらう余裕をみせていたのである。
その日。
夕陽が沈みかけた頃あい、海へ、漁網を打ちに行っていた武者三騎が、馳せもどって来ると、豪太夫に、耳よりな吉報をもたらした。
「殿――。東の岬にある古寺に、五百ばかりの軍勢が、憩うて居りますぞ。具足の派手さから見て、都から落ちて参ったこと明らかでござる」
これをきいて、豪太夫の双眼が、光った。
「都から落ちて来たのであれば、疲労がひどいであろう」
「もとより、士気はたるみはてている、と見え申した。浜辺へ、小魚すくいに出て来た雑兵の一人を生捕って参りましたゆえ、尋問なされい」
「庭さきへ、曳け」
豪太夫は、縁側へ出ると、地面へひき据えられた雑兵を、見下し、
「生命が惜しくば、つつみかくすな！」
と、まず一喝をくらわせた。
雑兵は、首をすくめて、豪太夫を、仰いだ。
「大将は、何者だ？」
問われて、雑兵は、ごくっと、生唾をのみ下してから、
「大将は、居りませぬ」
と、こたえた。
「大将が居らぬ？　何を、ほざくっ！　大将の居らぬ軍勢

が、どこにある！　おのれ、そのそっ首を刎ねられたいか！」
豪太夫が、呶鳴りつけると、雑兵は、いよいよ首を縮めながら、
「ま、まことでござる」
「まことだと！」
豪太夫が、佩刀を抜きはなたんとする気勢を示すと、雑兵は、必死の形相で、
「お願いでございます！　嘘は、申しませぬ！……大将は、殺されたのでございます！」
と、叫んだ。
「殺された？」
「は、はいっ！　四王天延正様は、殺されました」
「殺したのは、何者だ？」
「鷹森周防様でございます」
「なんだ、そやつ？」
「四王天様と、ともに、都を出て参られたおひとでございます」
「ふむ――、裏切ったわけだな。いまは、そやつが、大将ではないか。大将は、居るではないか」
「と、ところが、どうした次第か……、鷹森様は、追い出されてしもうたのでございます」
「追い出された？　追い出したのは、旗本どもか？」
「そ、そうでございます」
「不甲斐ない軍勢だのう。旗本どもが、協議して、率いるというのか。ばかくさい。そんなことは、できるものではないわ。軍勢と申すものは、権威と実力を兼備した大将が、掌握してこそ、士気もたかまり、陣形をととのえるものぞ。……おのれら、ただ、うそうそと、当惑いたして居るばかりであろうが……」
「そ、それが……、軍師が、おつきなされたので、決して、わたくしどもは、当惑は、いたして居りませぬ」
「軍師？」
「はい。左様でございます。鷹森様が、追い出されたのも、その軍師が、お旗本衆に、お命じになったからと、存じられます」
「どんな軍師だ？　そんな奴が、どこにいた？」
「お寺においでございました。兵法者でございます」
「兵法者？」
「途轍もない早業をお持ちなされている兵法者でございます」
「そやつ――九十九谷左近とは、申さんか？」
問う豪太夫のまなこが、凄じい光を放った。
「は、はい――」
「左近め！　おのれ――」
豪太夫は、べろりと、唇をなめた。
「一人で、うまい汁をくらおうと、浅智慧を働かして居るのであろうが、そうはさせぬぞ！」

「やあっ！」
「おーっ！」
「たあっ！」
凄じい懸声が、森をくぐりぬけ、岬にこだまし、海原の上を流れた。
旗本十騎、いずれも、上半身をむき出して、木刀をそれぞれの構えにとっているのであった。
これに、向って、うっそりと立っているのは、九十九谷左近一人だけであった。
木刀を左手に、ダラリとさげて、構えもとって居らぬ。
左近の眼眸（まなざし）は、氷のようにひややかに、十人の構えへ、ゆっくりと移動していた。
いずれもが、必死であることは、みとめられる。
しかし――。
左近から、見れば、なっていないのだ。
どれ一人として、戦場を馳せめぐった経験をもっていないことが、あまりも明白であった。
どの裸身にも、刀傷槍傷が、ひとつもついていないのだ。ついていないのはよい。ただ、修羅場をくぐった者と、そうでない者の差は、その度胸の発揮にある。前者は、敵に対して、退るよりも進む方が、かえって、おのが生命（いのち）に利があることを知っている。
十騎は、一人として、進んで来ようとはせぬのである。
「どうした？　なにを、ぐずぐずして居る？　撃って来ぬか？」
左近は、ひややかにさそった。
誰も、進んでは来なかった。
左近の姿が、巌のごとく、巨大なものに目に映っていて、動けないのであった。
「来ぬかっ！」
左近が、一喝した。
一人、
「くそっ！」
呶号しざま、地を蹴って来た。
左近は、一歩も動かず、そいつを、もんどりうたせておいて、
「次だ！」
叫んで、ずかずかと迫った。
旗本たちは、さっと散った。
「臆病者っ！」
左近の木刀が、閃くとともに、三人ばかりが、よろけたり、のけぞったりした。
じっとしていても、撃ちのめされると知るや、旗本たちは、なかばやけくそで、四方から、とびかかって来た。
それが、左近の思う壺であった。
木刀と木刀の打ち音さえしなかった。呻き声だけが、そこに、ここに、起って、みるみるうちに、裸身が土にまみれた。
「お主ら――」
左近は、ぶざまに倒れた旗本たちを見まわして、
「それで、旗本か！　不甲斐ない、というもおろかだぞ！

合戦になった時、その腰抜けぶりで、なんとする！」

べっと唾を吐きすてておいて、踵をまわした。

左近は、旗本どものあまりの弱さに、不快になって、方丈へもどって来ると、

「話にならん！　なにが、五摂家守護の軍勢だ。くそ度胸のある野伏に二十名もあばれ込まれたら、八方に散りぢりになるて」

と、吐きすてた。

こんな軍勢を率いて、伊吹野城を攻めることなど、到底おぼつかぬ。

焼け城の手負い猪とはいえ、いやしくも、田丸豪太夫は、おのが力でのしあがって、一国一城のあるじとなった武将である。

こんな軍勢に攻め寄せられたぐらいで、降伏するはずがない。

一瞥しただけで、

「なんだ、この蝿どもは！」

と、せせら笑うに相違ないであろう。

左近は、率いていることが、ばからしくなった。

「左近殿――」

勘念が、入って来ると、声を落して、

「どうやら、士卒ともども、蟬の抜殻でござるようじゃ」

と、云った。

「どうにもならん。旗本にしてくれた者どもが、一人として、戦場に出たことがない。刀も槍も、使いかたを知らぬのだ。……ばかばかしくなって来た」

「かげで、ぶつぶつ、不平だけは、こぼしているようでござる」

「ふん――。兵糧も乏しくなって来たのだろう」

「左様でござる。兵らは、自分の米を盗んだとわめいては、つかみあい、粥の分配が不公平だと申しては、隊と隊でにらみあい――まるで、餓鬼地獄でござるわ。……どうなされるおつもりですかのう？」

「……」

「このような軍勢で、伊吹野城を攻め落すことは、かないますまい」

「おれも、そのことを、考えていた」

「いっそ、追いはらってしまわれたら、気がせいせいしませぬかな」

「まァ、待て――。烏合の衆でも、使いかたによっては、役に立つ。……ひとつ、兵糧が一粒もなくなるまで、すてておいて、本当の餓鬼にしてくれるか。そうすれば、伊吹野城に、たんまり、兵糧のたくわえがある、ときかせれば、死にもの狂いになって、働くのではないか」

「それも、一案でござろうが、どうやら、伊吹野城には、百や百五十の兵は、のこっている模様でありますぞ。ふみとどまった兵らは、ここの雑兵どもとは、くらべもならぬ荒らくれぞろいではありますまいかな」

「そうであろうな」

「まず、城取りの希望は、ござるまい」

「勘念――。他人事のように申すな。……おれは、いかなる手段をもってしても、城を取ってみせるぞ」

「ところで――」

勘念は、左近へ、小ずるい目を向けた。

「あの娘御を、左近殿は、どうなされる？」

「どうするか、まだ、考えては居らぬ」

「あれは、ただの娘御ではないようでござる」

「公卿の娘だろう。……公卿の娘であろうと、土民の娘であろうと、家をはなれてしまえば、おれの目には、ただの娘だ」

「いや、その意味ではござらぬ。昨夜泊って、今朝がた出て行った老女が居り申したが、娘御とのひそひそ話を、拙僧は、そっと、ぬすみぎいたのでござる」

「勘念！　貴様、邪念を起して、忍び寄ったな？」

左近は、睨みつけた。

勘念は狼狽して、手をふった。

「そ、そうではござらぬ。あの老女に、どこやら、見おぼえがあり申したので、ちょっと、気にかかり……」

「ごまかすな！　邪念を起したのなら、起したと云え！」

「そ、それも、なくはなかったのでござるが……ともかく、ぬすみぎいたところでは――」

「なんだ？」

「あの老女は、公卿館へ、身を寄せていた者でござった。先年、拙僧が、亡師の供をして、何かの法要に公卿館へ参った節、出会った老女でござった。……老女と娘御の会話に、耳をすませているうちに、娘御は、公卿館にいる多門夜八郎と申す武士を、さがしている、と判ったのでござる」

「なに！」

左近の双眼が、にわかに光った。

「多門夜八郎が、公卿館にいる?!」

「そ、そうでござる。……で、つまり、老女は、公卿館へひきかえし、多門夜八郎に仔細を告げて、娘御をたすけに――」

左近は、みなまできかずに、立ち上ると廊下へ出た。

勘念が、追って出て、呼ぶと、左近は、ふり向きもせず、

「来るな！」

と、呶鳴りすてた。

勘念は、

――やれやれ。

と、肩をすくめた。

左近は、奥へ入ると、いきなり、檜戸を烈しい勢いでひき開けた。

美夜は、念珠を手にして、床の間にかけられた阿弥陀三尊にむかって、経文を誦えていたが、びくっとなって、ふりかえった。

左近は、立ったままで、

「そなたに、問うことがある」

と、云った。

「なんでございましょうか？」

美夜は怯じずに、見かえした。
「そなたは、多門夜八郎をさがしている娘だそうなが、まことか？」
「……」
美夜の顔から、血の色が引いた。
「それは、まことか、ときいて居るのだ？」
左近の凄じい形相に、美夜は、目を伏せないわけにいかなかった。
「まことでございます」
「なんの仔細があって、さがして居る？」
「亡き姉の遺言でございます」
「遺言？」
「はい」
「その姉と、多門夜八郎と、いかなる因縁がある、と申すのだ？」
「……」
「かくすな！　云え！」
「貴方様とは、なんのかかわりもないこと」
「かくすことは、許さん！」
左近は、ずかずかと、美夜に迫った。
美夜は、全身を硬直させて、あとずさった。
「そなたの姉は、夜八郎と契って居ったのか？」
「いえ――、でも、心では、妻として……」
「妻としてだと！　ふん――」
左近の顔面が、陰惨なゆがみかたをした。
伊吹野城内にあって、左近は、梨花という美女を犯そうとしたことがある。
梨花は、多門夜八郎を良人と思いきめている女性であった。
それを知った左近は、にわかに狂暴な発作にかられて、梨花に襲いかかったものであった。
多門夜八郎の妻だから、犯す、とうそぶいた左近であった。
邪魔が入って、犯すことはできなかった。
梨花をとりにがした当座、左近は、無性やたらに、狂暴な衝動にかられたことを、おぼえている。
いま、また――。
夜八郎をさがしもとめる別の美女を、目前にして、左近は、名状し難い苛立たしさをおぼえていた。
夜八郎を慕う女が――それも、並すぐれた容色の持主が、つぎつぎと、自分の前にあらわれるとは、いったい、どうした因縁なのか？
「そなたは、公卿の娘であろう？」
「はい」
「公卿の娘が、あの牢人者を、なぜ、慕う？」
「多門夜八郎様は、ただの牢人衆ではありませぬ」
「なんだと？」
「将軍足利義晴様の御実子です」
「な、なにっ?!」
左近も、流石に、愕然となった。
「彼奴が――、将軍家の子息だと？」

「はい。相違ありませぬ」
「将軍家の子息が、なぜ、牢人となって、諸方をうろついて居る？　そなたら、たぶらかされて居るな？」
「いいえ。わたくしは、亡き姉の口から、きいて居ります」
美夜は、亡き姉が、近衛家の嫡嗣に、嫁がせられようとして、陽明殿へつれて来られた時、多門夜八郎に拉致されたいきさつを語った。
そして、三年後に逝くまで、姉が、夜八郎を慕いつづけていたことも――。
「ふん！」
左近の顔面が、また、みにくくゆがんだ。
夜八郎は、女を暴力で犯しながらも、結果においては、慕われている。
しかるに、この九十九谷左近は、どうだ！
左近の脳裡には、柳の遊廓に身を沈めた一人の不幸な女の俤が、泛んでいた。
花鳥大夫といい、柳の遊廓で、随一の人気をほこっているが、もとは、青蓮尼という比丘尼であった。
曾て、左近が、山科の山道で、出会うて、これを犯した比丘尼であった。
左近は、青蓮尼を還俗させて、三月ばかり、妻として、一緒にくらしたものであった。しかし、青蓮尼は、左近に対して、憎しみをすてず、その三月のあいだに、二度も、短剣で刺そうとしたことであった。
やがて、左近によって女の官能をめざめさせられた青蓮尼は、女が地獄の使いであるならば、いっそ身を泥沼に沈めようと、決意して、傾城になったのである。
傾城になった青蓮尼を、左近がたずねたのは、化野（あだしの）で、多門夜八郎と決闘をする約束をした前夜である。
花鳥大夫は、客として現れた左近に対して、客としてしか、扱わなかった。
女郎にまで堕とされた女としては、当然のことであったろう。
しかし、多門夜八郎に対する女たちの慕いかたは、これは、どういうのだ？
夜八郎が、それほど、優しいとは思えぬにもかかわらず、女たちは、おのが心身を捧げて悔いぬのだ。
左近は、彼我の差を比べて、どす黒い業念が、心中に渦巻くのを、おぼえた。
「そなたもまた、まだ見ぬ多門夜八郎を、慕って居るようだな？」
「……」
「そうであろう。かくすな！」
「わたくしには、この世で、ほかに、のぞみとて、ありませぬゆえ――」
「夜八郎を、いつの間にやら、天下に唯一の男、と思いきめたか！」
「はい」
「ばかめっ！」

　左近は、一喝した。
　美夜は、悪鬼に似た左近の形相に、戦慄した。
「多門夜八郎は、この九十九谷左近の生涯の宿敵だ！　彼奴を斬るか、おれが死ぬか――倶に天をいただかぬ敵同士だ。それを、知ったならば、そなた自身の身が、どうなるか、判るだろう！」
　かっ、と逆上したならば、この孤独な兵法者は、狂人と化す。
　理性というものは、完全に喪失してしまうのだ。
　美夜の肩をつかんだ左近の十指は、野獣の鋭い爪に似ていた。
「な、なにを、なされる！」
　美夜は、もがいた。
　反抗は、かえって、左近の狂暴性をあおった。
「犯すのだ！　おれのものにしてくれるのだ！　おれは、残忍なけだものになってみせてやる！」
　左近は、かつて、梨花にむかってあびせたと同じ言葉をうそぶいた。
　美夜は、懐剣を抜いて、突こうとした。
　しかし、かんたんに、たたき落された。
「恥を知るがよい！」
「けだものが、恥など知るか！」
　左近は、薄ら笑いながら、美夜を、押し倒し、膝のあいだへ、片足をふみ込ませた。
　前のみだれる羞恥と口惜しさに、美夜は、声をしぼって、救いをもとめた。
「叫べ！　しかし、たすけはないぞ！　ここに、おれに手向う奴は居らぬ」
　左近の片手が、美夜の胸の隆起をねらって、うごめいた。
　美夜は、悲鳴をほとばしらせた。
　その時――。
　檜戸がひき開けられ、
「九十九谷左近！　それが、兵法者のなすべき振舞いか」
　呶号が、あびせられた。
　美夜を救う者は、一人、この寺にいたのである。
「なに！」
　ふりかえった左近めがけて、猛然と、斬りつけたのは、柿丸であった。
　かよわい女子を守護する。それが、この純朴な若者に与えられた運命のようであった。
　左近は、あやうく、そのすざまじい一撃をかわして、差料をつかんで、遠くへ、すっくと立った。
「おのれは、何者だ？」
「多門夜八郎の家来――柿丸という者だ」
「ふん――」
　左近は、双眼をほそめた。
　左近は、狂人から、兵法者にかえった。
　狂人やけだものでは、尋常の勝負はできぬ。人と人との闘いは、常に、心気が冷たく冴えていなければならぬ。
　左近は、もとの左近に、還った。

「貴様のような小者では、対手にとって不足だが、ひさしぶりに、斬る快味をあじわうには、まず、手頃であろう。……庭へ出い！」
　左近は、そう云って、にやりとした。
「よし！　出てやる！」
　柿丸としても、遁げるわけにはいかなかった。
「もし！」
　美夜が、出て行こうとする柿丸を、呼んだ。
「お止しなさい！　貴方は、勝てませぬ！」
　必死になって、かぶりを振ってみせた。
　美夜とすれば、柿丸に、多門夜八郎が到着するまで、時刻をかせいでもらいたかった。
　この若者が、左近と闘って、百に一も、勝機をつかむことは、至難であろう。
　みすみす、柿丸が斬られるのを、美夜は、眺めているわけにはいかなかった。
　美夜は、左近が、狂人から兵法者に還ったのを、看てとっていた。もはや、再び、けだものになって、襲いかかって来ることはあるまい、と思われたのである。
「男子の意地として、いったん挑戦したものを、ひきさがるわけには参らぬでござる」
　柿丸は、かぶりを振ってみせて、ぱっと、庭へとび出して行った。
　左近は、すでに、庭へ出て、利剣を、朝陽にかざしていた。
幾十人の敵の血を、この白刃にぬったことであろう。
利剣はなお、強敵の血汐をもとめて、鬼哭啾啾（きこくしゅうしゅう）として、左近に、訴えている。
びゅん！
びゅん！
と、素振りをくれてから、左近は、近づいて来た柿丸を、振りかえった。
「小者――、覚悟はよいな？」
「おう！」
　柿丸は、一刀を大上段に、ふりかぶった。
　柿丸は、もとより、剣法など知ってはいない。人を斬ったことさえもない。
　あるのは、闘志だけである。
　この兵法者がおそるべき使い手であることは、判っている。判っていながら、闘志だけで、たたかおうとするのである。
　柿丸は、まぶたを閉じた。
　天満坊から教えられていたのである。
「絶対死地に追いつめられた時には、敵を見ずに、立ち向うことだ」
　柿丸は、その言葉を思い出したのであった。
「ふむ！」
　まぶたを閉じて、大上段に構えた柿丸を、じっと、正視して、左近は、
「柿丸、と申したな。自ら進んで盲目となる剣法も、この

九十九谷左近には、通用せぬぞ！」

と、云った。

「来い！」

柿丸は、叫んだ。

「生命が惜しければ、斬りかたがあるぞ」

「うるさいっ！」

柿丸は、無謀な前進を開始した。

その瞬間――。

左近は、思いもかけず、おのれ自身の内に、ふしぎな心理をさとった。

――この小者を、斬ったならば、兵法者として、名折れになる。

ふっと、脳裡に、その思いが、かすめたのである。

なぜ、起ったのか、左近には、わからなかった。

しいて云えば、双眼をしっかとふさいで、おそれず、ためらわず、前進して来る柿丸の姿に、その性情の純一なものが、あらわれていたからであろうか。

「止まれ！」

左近は、叫んだ。

柿丸は、止った。

「そこから、一歩でも出たら、斬るぞ！」

そう云われて、柿丸は、まぶたをひらいた。」

「なぜ、勝負をさけるのじゃ？」

「貴様が、あまりに、弱すぎる」

それをきくや、柿丸は、敢然として、地を蹴った。

「ばかめっ！」

左近は、すり上げの一閃で、柿丸の一刀を、宙へはねとばした。

柿丸は、その衝撃で、どどっと泳ぐや、地べたへ匐った。

「去（う）せろ！　二度と、おれの前に現れるな！」

左近が、きめつけた時であった。

馬蹄の音が、坂道に起った。それを、制止しようとする叫びも、ひびいて来た。

左近は、奔って、本堂の廻廊上へ、とび上った。

多門夜八郎以外に、単騎で乗り込んで来る者はいないはずであった。

はたして――。

山門をくぐって、馬を境内におどり込ませたのは、夜八郎であった。

「来たな！」

左近の眉間が、ビリビリと痙攣した。

左近は、先般、夜八郎と、野路で出会って、勝負を挑み、敗れている。

その勝負は、左近が、業と力に於て勝ち、夜八郎には、勝運があった。

左近は、右腕を斬られはしたものの、敗北をみとめる気持は起らなかったのである。

それは、夜八郎もみとめるところであろう。

いまこそ、雌雄を決する時、といえた。

左近は、一間余の高さの廻廊上から、夜八郎は、馬上か

ら、

「……」

「……」

無言で、凝視しあった。

旗本はじめ、かなりの人影が、あちらこちらの隅に出て来ていたが、一瞬にして、境内にみなぎった殺気に、息をのんだ。

さきに、口をひらいたのは、夜八郎の方であった。

「水無瀬家の姫は、どこだ？」

その問いを投げた。

それに対して、左近が、

「多門夜八郎！　まず、勝負せい！」

と、叫んだ。

夜八郎は、たけっている馬をしずめながら、微笑した。

「姫に、会っておかねばならぬ。お主に敗れて、生命を落したあとでは、会えまい」

道理であった。

左近は、殺気を五体から抜くと、

「方丈に居る。……早くしろ！　おれは、長くは、待たぬぞ！」

と、云った。

「心得た」

夜八郎は、地上に降り立つと、柿丸に案内するように、と目くばせしておいて、方丈へ向って歩き出した。

柿丸は、うれしげに、

「生命びろいをつかまつった」

と、云った。

「どうした？」

「左近め、姫君を手ごめにしようといたしたので、わしは、立合ったのでござる」

「お前が、立合ったのか？」

夜八郎は、あきれた。

「はい。立合い申した」

「どうして、斬られなかった？」

「どうしてだか、わからんのでござる」

「左近が、立合って、お前を斬らぬはずはないが……」

夜八郎は、納得できぬ面持であった。

方丈に入りながら、

「あるいは、左近は、お前を見ているうちに、斬る気が失せたのかも知れぬ」

と、云った。

「なぜでござる？」

「そこが、お前の人柄であろう」

「人柄とは？」

「おのれの好ましさを、おのれ自身は、気がつかぬ。それが人柄だ」

夜八郎は、笑った。

柿丸は、奥の一室へ、案内した。

「ここでござる」

夜八郎は、檜戸を開いた。

美夜は、大きく眸子（ひとみ）をひらいて、夜八郎を視て、まばたきもしなかった。
夜八郎は、前に坐ると、
「多門夜八郎だ」
と、告げた。
「はい。……すぐに、わかりました」
「わかった？　どうしてだな？」
「おぼえて居ります」
「おぼえて居る？」
「陽明御殿で、貴方様は、わたくしのやすんでいる部屋へ、忍び入って、姉の寐所を、おききなさいました」
「うむ——。あの折の少女が、そなたか？」
「はい——」
美夜は、夜八郎を、見つめながら、胸が疼くような感動をおぼえていた。
姉が、三年のあいだ、夢に、うつつに、恋い慕いつづけていた人物が、いま、ここにいる。
美夜は、ついに、めぐり会えたのである。
「姉の遺言によって、わたしをさがしていた、ときいたが、まことか？」
夜八郎は、たずねた。
「はい——」
「わたしに、つたえることがあるのか？」
「はい。ございます」
美夜は、じっと、夜八郎を見つめながら、
「あれから、わたくしは、三年後に、無量寺に、姉をおとずれたのでございます。……姉は、わたくしに申しました。姉は、貴方様を、救いの主と感謝し、いつか、良人と心に思いさだめて居りました」
「……」
美夜は、姉の言葉をつたえた。
「……あの御仁（おひと）を、良人と思いさだめて、ふたたび、ここへ参られるのを待って居りましたが、不治のやまいのために、生きて、お目もじすることは、叶いますまい。……美夜どの、わたくしにかわって、いつの日か、会うて下され。そして、わたくしが、妻として、感謝しながら、この世を去った、とつたえて下され」
姉は、そう云いのこしたのであった。
夜八郎は、ききおわっても、しばらく、無言をつづけた。
「多門様——。わたくしは、貴方様に、姉の遺言をとどけるのを、ただひとつの生甲斐にして参りました。それを、いま、おわりました。このさき、どうやって、世をすごして参ればよいのか、お教え下さいませ」
美夜は、ためらわずに、願った。
夜八郎の双眸が、翳をふかいものにするのを、美夜は、みとめた。
「そなたは、姉と生写しといってもよいほど、よく似ている」
夜八郎は、つぶやくように、云った。
「そなたを眺めていると、七年前を思い出す。わたしは、

そなたの姉に対して、いっぴきの兇暴な野獣であった。……わたしの所業を、恨まぬばかりか、感謝しながら、この世を去った、ということを、わたしは、無量寺の老僧からきかされて、納得し難かった。しかし、そなたとこうして会っていると、あの姫の優しい心が、判って来るような気がする。……姉を、不幸のうちに死なせたわたしは、妹を、幸せにしてやらねばならぬのであろう。姉は、それを、のぞんで、遺言したのかも知れぬ」
「……」
「美夜——と申したな？」
「はい」
「美夜を、幸せにしてやらねばならぬ」
「ありがとう存じまする」
「但し、わたしに生命があれば、だ」
「え？」
「これから、九十九谷左近と、決闘をいたす」
「貴方様は、必ず、お勝ちなさいます」
「それは、勝負してみなければ、判らぬことだ」
「いいえ！」
美夜は、つよく、かぶりを振った。
「貴方様は、必ずお勝ちになりまする！」
「それは、わからぬ。左近は、兵法者だ。無数の強敵とたたかって、勝ちのこった稀代の使い手だ。わたしは、兵法者ではない。ただの、放浪の牢人者にすぎぬ」
「いいえ——。わたくしには、はっきりとわかりまする。貴方様は、お勝ちになります！」
美夜は、叫んだ。
叫びつつも、心の中では、恐怖がひろがった。
「わたしが斃れたら、柿丸という男が、そなたを守護することになろう。都へもどるがよい」
「いいえ！」
美夜は、必死に、かぶりを振った。
「貴方様は、お勝ちになりまする！」
くりかえして、叫ぶうちに、泪があふれて来た。
境内から、左近の声が、ひびいて来た。
「出て来いっ！　多門夜八郎——。ぐずぐずいたすなっ！」
夜八郎は、立ち上った。
「多門様！」
美夜は、われをわすれて、すがりついた。
「お願いでございます！　生きて下さいませ！」
「……」
夜八郎は、しずかに、美夜をはなすと、部屋を出た。
美夜の哭き声が、追って来た。
廊下に、柿丸が、坐っていた。
夜八郎は、微笑して、
「柿丸、人間には、それぞれ、役目があるとみえる。……お前は、若い女を守護するように、運命づけられて居るようだ」
と、云った。
「お引きうけいたします」

柿丸は、頭を下げた。
夜八郎は、境内へ、出た。
「おそいぞ！」
左近は、夜八郎を、睨みつけた。
「試合をするにあたり、条件がひとつある」
夜八郎は、云いかけた。
「なんだ？」
「もし、お主が勝った時は、あの娘を、そのまま、ここを出て行かせてもらいたい」
「よかろう」
左近は、承知した。
「そちらに、条件があれば、きこう」
夜八郎は、うながした。
「ふん――」
左近は、せせら笑った。
「おれは、勝つ！」
「敗れる場合も、ある」
「いいや！　おれが今日までの修業の一切を結集して、汝に勝つ！」
左近は、云いはなった。
剣の道に於ては、「心秘」ということが、重んじられる。心に秘める、という意味ではない。各人各様、それぞれ、同じ極意を学んでも、心に受けとるものは、ちがっている、という意味である。
太刀生れ。
諸流によって、それぞれ、太刀の法形はちがっている。しかし、太刀を使うには、その備わるところは、打つ、突く、払う――この三つのほかにはない。振りかぶった太刀は、振り下げねば、業（わざ）にならず、突き出した太刀は、引かねば業を成さぬ。陰陽の理である。したがって、法形は如何にあれ、業の極まるところはひとつであり、会得するものは、おのれ自身によってである。極意をさとるのに、師はないのである。
次に、無学、ということが、「心秘」の重点にある。
学習するところは、師伝である。しかし、変にのぞんで、師伝のごとく、使うのは、下手である。たたかいは、臨機応変である。敵には、大兵者も居り、小兵者も居る。太刀に長短があり、力量優れた者、構えのさまざま、業の遅速緩急、そして、時と所と位がある。師に学んだ通りを為しても、必勝は期しがたい。したがって、その時の決闘に於て、師から学んだものをはなれて、おのが見、知るままに働く位を、「無学」といい、その無学によって、その瞬間に至るまで知らなかった太刀筋をもって勝つのが、天性の妙である。これを、「極意」という。
夜八郎が、太刀を携げて、境内へ出て来た時の心境は、まさに、その「心秘」であった。
尋常の業をもってしては、左近に、勝てる道理がないのである。左近は、兵法者であり、その天稟もまた万人に一人のものである。

それにひきかえて、夜八郎には、正しい剣の修業など、なかった。
試合にあたって、左近と対するには、勝とうと思わず、負けようとも思わず、おのれ自身も知らなかった意外の業が、機に臨んで生れることを、期すばかりであった。
「参ろう！」
左近は、云いはなつや、三尺の長剣を抜きはなった。
その双眼は、炳乎たる光芒を放っている。常人では、とうてい、受けとめられぬ凄じい眼光であった。
地上は、木立の影を衘わせて、光の縞を織っている。
四方に立つ見物の士らも、樹木のように動かぬ。
静寂が、暑気はげしい空間に、びっしりと張りつめているのであった。
両者は、十歩の距離を置いていた。
「抜け！」
左近は、叫んで、ゆっくりと、上段に構えた。
夜八郎は、左近の凄じい眼光をあびながら、スーッと、白刃を抜くと、右手につかんだまま、地へ下げた。
そして、ややほそめた双眸を、沈静な色で、いろどった。
「多門夜八郎！　なんの構えだ？」
左近が、大声で、問うた。
「お主に対して、構えは、無用であろう」
「なんだと？」
「わたしは、兵法者ではない。お前ほどの使い手に、いかなる構えをとっても、むだと知った」
「ふん――」
左近は、しかし、夜八郎の言葉を、言葉通りには、受けとらなかった。
夜八郎は、たしかに、兵法修業をして居らぬ。それは、あきらかに、みとめられる。しかし、おのが身をはこぶところに、修羅場があり、それを、くぐりぬけて来ている。そして、いつの間にか、異様なまでに強い決闘者となっている。
いうならば、禅の文句の、
「夢幻空華、なんぞとらえるに労せん」
という心境を持っている。
これが悟りだとか、これが極意だとか、とらえようとしない心境である。
すなわち、夜八郎自身知らぬ業を、石火の間に発揮するおそろしさを、左近は、見てとっているのであった。
右手にダラリと太刀をさげているばかりの、きわめて自然な立ち姿を、左近は、かえって、おそるべきものにみとめざるを得なかったのである。
「いざ！」
左近は、総身に満ちた闘志を、その一声に、ほとばしらせた。
切っ先は、天を刺している。
やや、左半身になったのは、誘いの構えであった。
左から、円を描いて、進むことになる。
これは、左近が、有利な位置を占めているためであった。

左近の長身は、木漏れの陽を、うしろから受けて、かげになっていた。

これを受けている夜八郎の顔に、陽が当っていたことである。

ということは――。

陽ざしをまともにあびるのは、不利であることは、いうまでもない。それを判っていながら、平然として、その位置に立ったのは、夜八郎は、待たせた者の仁義にしたがったのである。

敵をあざむくためではなかった。

尋常の業をもってして勝てぬ以上は、おのれを不利な立場に置くことも、さして苦痛ではなかった。

陽のまぶしさも、意識のうちに入れぬ「無学」が、夜八郎には、かえって、心気を冴えさせることになる。

第三者には、自暴自棄ともみえるかも知れなかった。

結果は、しかし、不明である。

宿敵は、最後の一瞬にむかって、時間をきざみはじめた。

運命刀

左近は、ゆっくりと、左へ、左へと、円を描きはじめた。

それにつれて、夜八郎も、からだをまわしはじめた。剣は、なお、ダラリと下げたままであった。

孫子に「兵は詭道なり」という言葉があるが、夜八郎は、その構え、その地歩に於て、わざと、左近に有利を与えたがごとくみせている。

はたして、それが、たたかいの上での詭道かどうか？

夜八郎自身、まず、身をすてて、死中に活を得ようとしているのであったろうか？

左近は、あきらかに、一太刀必殺を期している。これに対して、夜八郎は、ふせぎ、というより、にげ、の姿勢しかとっていないのであった。

この両者の相違は、そのまなこにあらわれていた。

左近の双眼は、らんとして、殺気のほむらを燃やして、夜八郎の痩身を焼いている。

夜八郎のそれは、沈静な色を湛えて、やや細められ、殺気はもとより、闘志の色すらにじませてはいないのである。

これは、戦乱に生きる二人の、闘争というものに対する心構えが、おのずから異質であることを、示してもいるよ

うである。

左近にとって、生きるということは闘うことと同じ意味であった。絶えず、強い者をさがし、えらんで、これと闘って、勝つこと――それが、左近の人生であった。

夜八郎は、生きることとは何か、という暗中摸索をつづけて来た孤独な牢人者であった。そのために、若い日には、京の都をあばれまわり、無頼の行状をかさねた。しかし、その心情の中には、常に、虚しさに堪えようとする寂寥感があったのである。闘争は、その寂寥感を忘れるための一方便にすぎなかったのである。

剣をふるうことは、夜八郎にとって、第一義ではなかった。

と、対比してみれば、表面上は、あきらかに、この決闘は、左近の方に、有利であった。

ただ、いかなる決闘にあっても、優勢の者が、必ず勝利をおさめるとはかぎっていない。

勝敗の岐れは、一瞬の――まったく、一毛の差もない間によって、決するのであり、それは、技をこえたものである場合がある。

生きようとする魂の在り方が対極を為しているとはいえ、そして、その修業も異るとはいうものの、ともに、数知れぬ戦いの場をふみこえて来た剣士たちであった。

業前（わざまえ）のすぐれていることは、さして、問題とならぬ。

あるいは、一瞬の間に、運命の神が、どちらに微笑むか、であろう。

すっ、すっ、すっ……と、左近は、大地をすべって、迫った。

そして、ついに、夜八郎を、大上段にふりかぶった大太刀の一撃圏内に、容れた。

夜八郎は、なおも、その片手地摺りの、構えともいえぬ姿を、変えてはいなかった。

「多門夜八郎、いかにっ！」

突如として、左近は、叫んだ。

「……」

夜八郎は、その叫びに対して、声を発するかわりに、はじめて、大きく、双眼をひらいた。

――刹那。

「ええいっ！」

左近は、一羽の巨きな鳥と化したごとく、地を蹴った。

背後から、陽ざしを受けている左近であった。地面を匐っていたその影法師が、夜八郎に掩いかぶさったのである。

虚空を截って、大上段からの一閃が、夜八郎の頭上へ、はしった。

左近としては、文字通り、一撃必殺であったろう。

いや、左近は、その肉眼に、夜八郎の姿を、まっ二つにした、と映していたに相違ない。

いうならば、左近は、夜八郎の影を斬って、形をのがしたのだ。

なぜならば、夜八郎は、その必殺の一撃に対して、なん

の受け太刀もみせずに、斜横に、飛んだのであった。
それは、かわして跳躍した、というよりも、わが身を、目に見えぬ何者かに投げつけられたように、空中へほうり出した、という方がふさわしい動きであった。
それが、証拠に、夜八郎は、六尺のわきで、地面へ倒れて、一廻転したのである。
「おっ！　しゃっ！」
仕損じたとさとった左近が、そのまま、夜八郎のはね起きるいとまを与えるはずがなかった。
ただ、左近は、その一撃に、完全なる業と力をぶちこめたので、むなしく宙を截った太刀を、そのまま、地上に倒れている夜八郎へむけての攻撃へ継続させるわけにはいかなかった。
ひと呼吸をもって、次の一撃を放つ構えをとらざるを得なかった。
そのほんの一瞬間が、夜八郎に、たとえ立ち上るいとまはなくとも、横たわったなりでの防禦の構えをとらせ得た。
「喝っ！」
左近は、再び叫んで、夜八郎めがけて、襲いかかった。
紫電となって降って来た白い光を、夜八郎が、受けとめたのは、いつの間に抜いたか、小刀の方であった。
ぱっと、火花が散った。
刃と刃は、嚙みあったまま、空中に停止した。
左近が、はっと、おのが不利をさとったのは、この瞬間であった。
おのれは、大地に大きく大股をふみひらいて、立っている。
夜八郎は、倒れたままで、小刀で、左近の太刀を受けとめている。
誰の目にも、左近が、絶対の優勢をたもっているかに見える。
そうではなかった。
動けなくなったのは、左近の方であった。
もし、跳び退るならば、その一瞬の隙をえらんで、夜八郎の右手の剣が、襲って来るに相違なかったのである。
左近が、その大太刀で、夜八郎の左手の小刀を押さえつけているからこそ、夜八郎は、それを受けとめるために、渾身の力を集めていて、右手の剣を使う余裕がないのだ。
小刀で受けとめている力から解放されるならば、夜八郎は、完全に自由をとりもどす。
跳び退る左近に対して、存分の一颯業（いっさつわざ）をふるうことができるのである。
左近は、跳び退ることは、不可能であった。
動けぬからには、のこされているのは、業ではなく、力のみであった。
すなわち、押さえつける力が、受けとめる力に、まさればいいわけであった。
「う、むっ！」
左近の顔面が、朱を散らした。
大太刀が折れよとばかり、満身からの力をこめた。

受けとめている小刀が、じりじりと、夜八郎の顔へ下った。
そして、ついに、小刀の峰が、夜八郎の額へふれようとした。
左近のからだは、夜八郎の上へ、完全に掩いかぶさるほどに、傾いていた。
左近のまなこも、夜八郎の眸子（ひとみ）も、もはや人間のものと思われぬ凄じい動物的な光をぎらつかせていた。
左近は、これがおのれの力の限界と思うばかりに、小刀を押した。
その瞬間であった。
夜八郎は、目蓋を閉じるとともに左腕から、ふっと、力を抜いた。
あらんかぎりの力をふりしぼっていた左近は、受けとめる力を抜いた小刀を、夜八郎の額へ、めり込ませるほど、押しつけた。
だが、力と力の均衡が崩れたこの瞬間、左近のからだもまた崩れた。
夜八郎は、その隙をのがさなかった。
夜八郎は、左腕から抜いた力を、右腕に使う業にこめて、左近の胸を、ふかぶかとつらぬいた。
「う、ううっ！」
左近は、のけぞった。
地ひびきたてて、左近が仆れても、夜八郎は、まだ起き上らなかった。
小刀をはさんで、左近の白刃で、額を押された痛みのために、意識がなかば薄れていたのである。
異様に、しらけた静寂が、境内を占めていた。
この凄じい決闘を見まもった十人の旗本はじめ、すべての人は、あまりの緊張のあとに来た一種の放心状態で、声を発しなかったのであろうか。
夜八郎もまた、そのまま、しばらく、仰臥して、目蓋をとじて、動かなかった。
「……多門……、夜八郎――」
かすかに、ひくい声音で、呼ばれて、夜八郎は、起き上った。
呼んだのは、ふかぶかと胸に白刃を突き立てられていた左近であった。
夜八郎は、よろめき立つと、左近のそばへ寄り、白刃を、その胸から、ひき抜いた。
血汐が、傷口から、どっと、噴き出た。
夜八郎は、いそいで、左近の片袖をひきむしり、その片手で、傷口を押えさせた。
「……もう、間に合わぬ」
左近は、つぶやいた。
「おれが……敗れた。……しかし、悔い、は、ない。……多門、夜八郎――お、お主には、運が、ある。……お主は、老いぼれに、なるまで、生き、のびるだろう」
「……」

「おれが、いまわのきわに、云うのだ。……まちがいは、ない。……長生き、しろ」
左近は、まなこをひらいている力もうせたか、かすかにふるわせつつ目蓋をとじた。
わずかの沈黙を置いてから、
「この、おれにも、こうして、敗れて……死ぬ時が、あった」
その言葉を、この世へのこした。
夜八郎は、しばらく、死顔を、じっと、見下していた。
曾て、一度も、この兵法者に、憎悪をおぼえたことはない夜八郎であった。
左近が、挑んで来たから、たたかったまでであった。
剣の道ひとすじに生きたこの兵法者の短い生涯は、壮烈であり、凄絶であった。心から、敬意をはらうに足りた。
左近に、権謀術策はなかった。あくまで、堂々と、正面から、たたかいを挑んで来たのであった。敗れたのは、不運の二字につきる。
夜八郎は、合掌した。
夜八郎の生涯にあって、これほどの強敵に出会うことは、またと再び、ないであろう。敵も、かくまでに宿命的な間柄になれば、親友にひとしく、その死が惜しまれる。
方丈へ向って歩き出した夜八郎は、胸中に、ぽっかりと、空洞でもできたような、ある種の虚しさをおぼえていた。
美夜と柿丸が、方丈に待っていたが、勝利をおさめながらも、沈痛な色に、顔を沈ませている夜八郎を、いぶかった。
「では――参ろうか」
夜八郎は、やがて、立ち上った。
「軍勢をどうなされる？」
柿丸が、問うた。
「おれが率いて居るのではない。兵どもが、自分自分で思案することだ」
「しかし、すておけば、野伏になるばかりでござる」
「おれは、城取りの野望はないゆえ、軍勢など、必要はない。第一、見受けたところ、軍勢とは名ばかりで、烏合の衆というのも、おろかな、どの面も、まるで生気がない。左近とおれの立合いを見た者どもは、旗本衆であろうが、一人として使いものにはならぬ。隊列をつくって、ここまでやって来たのが、笑止というものだろう。……のたれ死をさせておけ」
夜八郎は、ばかばかしげに云いすてて、方丈を出た。
その時、遠くに、軍馬の音が起るのを、きいた。
はっとなって、夜八郎は、境内の端へ急いで歩いて行き、木立越しに、野を望見しようとしたが、重なり合った枝葉が厚くて、視界をさえぎっている。
やむなく、地を蹴って、松の高枝へとびつくと、小手をかざして、のびあがった。
土煙りをあげて、黒い一隊が、こちらをめがけて、進んで来る。
伊吹野城の方角からであった。

――田丸豪太夫だ！
夜八郎は、心身がひきしまった。
焼け城の中にうずくまっていた手負いの猛獣が、獲物をもとめて、出て来たのである。
すておけば、この五百の軍勢は、ひとたまりもなく、蹴散らされ、降伏させられるのであろう。
すておけないのは、降伏した兵どもが、豪太夫によって、きたえなおされ、戦闘分子にしあげられることであった。
地面へ跳び降りた夜八郎は、柿丸に、
「いかん！　田丸豪太夫が、残兵を率いて、おし寄せて来る！」
と、云った。
「どうなされる？」
「やむを得ぬ。この幽霊のような兵どもを、使ってみよう」
「使えるのでござるか？」
「豪太夫の捕虜にするわけにいかぬ。お前は、姫をつれて、館へ奔れ。おれの馬で行け」
命じておいて、夜八郎は、本堂の廻廊上へ駆け上ると、大音声をあげた。
「小人頭以上は、集合せい！　火急だ！」
集って来た者たちの、ひどくのろのろした動作に、夜八郎はなかば絶望しながら、
「ここへ攻め寄せる一隊がある！　百騎足らずとみたが、士気を持って居るぞ！　お主ら、これとたたかって勝てば、城と武器と兵糧を獲ることができる！」
夜八郎は、ここで、いちだんと声をはりあげた。
「もし、敗れるならば、お主らは、捕虜となり、雑兵に墜とされる！」
旗本、走衆、小人頭らは、しんとして、一語も発せずに、夜八郎を仰いでいる。
この沈黙は、夜八郎にとって、まことにたよりないものであった。
――よし！　されば、得物をとって、迎撃してくれよう！
そうした戦意士気は、この沈黙の中に、さっぱりふくんではいなかった。
ただ、ぼんやりと、夜八郎の激しい言葉をきいているだけで、危機感さえもおぼえていないようであった。
夜八郎は、痴呆の群に向って、いたずらに、叫びたてているようなむなしさをおぼえた。
「お主ら、いやしくも、五摂家守護にあたったさむらいであろう。捕虜のはずかしめを蒙り、雑兵に墜ちる生恥をさらして、おめおめと、都へもどれるものかどうかだ！」
そうあびせられて、ようやく、一同の顔色がうごいた。
いつの日か、都へ帰る。それが、一同の唯一の希望であったのだ。
「もし、伊吹野城の田丸豪太夫に敗れんか、お主らは、都へもどるのぞみは、断たれる！　それでも、よいか？」
夜八郎は、いちだんと、声を高いものにして、あびせた。

すると、ようやく、旗本の一人が、口をひらいた。
「伊吹野城に、武器、兵糧があること、相違ござらぬか？」
「誓って、嘘は申さぬ！」
夜八郎は、こたえた。
その旗本は、二歩ばかり前へ出て、味方へ向きなおった。
「おのおの方！　戦おうではないか！　都へ帰るためには、武器と兵糧が必要だ」
「おう！」
まばらながら、応じる声があがった。
「よし！　きまった！」
すかさず、夜八郎は、云った。
「お主らに申しきかせることが、ひとつある。それがし多門夜八郎の素姓をあきらかにしておく。それがしは、将軍足利義晴が一子義正だ」
一同は、半信半疑の表情になって、夜八郎を、見つめた。
「その証拠を見せる」
ただ一騎で、五百の軍勢へ乗り込むには、何かの役に立つかも知れぬ、と思って、馬の鞍につけて来た品を、夜八郎は、左手につかんで、高くかかげてみせた。
それは、いつぞや、夜八郎が山賊小屋に忘れたのを、百平太がひろって、ずっと所持していた品であった。
夜八郎は、百平太から返されていたのである。
夜八郎は、それを、たかだかと捧げて、云った。
「日本の国に、ひとつあって、ふたつとないもの――とくと、見とどけるがよい」
云いざま、さっと、うち振った。
巻きこまれていたそれは、ぱあっと華やかに、宙にひろがった。
錦でつくられた日輪模様の旗であった。
さむらいならば、これが、将軍の在るところにひるがえるのを、知らぬ者はない。
「この旗を、ひろいものと疑う者があらば、進み出てもらおう。出陣の血祭といたす」
夜八郎は、云いはなつや、さっと、白刃を抜きはなった。
この時、走衆の一人が、
「わしは、将軍家を、間近に、拝したことがある。この御仁と生写しと申してもよい」
と、云った。
平常寡黙で、律儀な、嘘のつけぬ男であることを、一同は、知っていたので、
――そうか！　この御仁が！
と、もはや疑わなかった。
旗本の一人が、廻廊下へ、進み寄って、
「多門夜八郎様！　われら五百の士卒、貴方様のために、命をなげ出しまする！」
と、誓ってみせた。
「たしかに、きいた！」
夜八郎は、一同を見まわし、
「誓うか？」

と、問うた。
おーっ！
旗本も走衆も、小人頭も、生きかえったような表情で、高らかに応じた。
将軍家のおん曹司が、おのれらの大将となったのである。
ふるい立たざるを得なかった。
「では、下知する。五人一伍、十人一火、五十人一隊――旗本衆が、その隊長となる。……先陣は、お主だ」
夜八郎に、指された者は、
「浦上彦十郎」
と、名のった。
「二陣は、お主」
「寺部外記」
「三陣は、お主」
「小幡左門」
「三陣までを、鳥雲の備えとなす。麓の地形に拠って、伏せろ。早く、行け！」
命令を受けて、浦上、寺部、小幡の三名は、奔って行った。
鳥雲の備え、とは、鳥の集散するごとく、雲の変化するごとき陣法である。これは山中の備えで、樹木、岩石、凹地などを利用して、分合自在の伏勢をなすのである。
夜八郎は、のこり七隊のうち、三隊を、鳥雲の備えの予備として、行かせた。
そして、あとの四隊を、おのれ自身、率いることにした。
戦略は、たちどころに、成った。

「停止せい！」
自ら、先頭をきって、疾駆していた田丸豪太夫が、たづなをひいて、片手をかかげた。
岬の森が、すぐ、間近に迫っていた。
五百の軍勢が、そこにいる、というのに、ひっそりとして、人影ひとつ、見当らぬ。
「物見せい！」
下知を受けて、二人の士が、馬をすてて、木立を利用しながら、奔って行った。
「殿――」
すぐ背後にしたがっていた岩室半左衛門という物頭が、
「一気に、踏み散らされるご所存か？」
と、問うた。
「わしは、今日まで、ただ一度も、姑息の策を弄して居らぬ。常に、正々堂々と、真正面から攻（う）ちかけて居る」
豪太夫は、云った。
鎧袖一触の自信が、豪太夫の胸中に満ちていた。
実は、昨夜のうちに、忍び物見をはなって、この岬の古寺に拠っている軍勢が、どの程度のものか、調べさせてある。
報告によれば、士気がたるんでいる、というもおろかな軍勢であった。ようやく、ここまでたどりついて、へたばり込んでいる、という状態である、という。

九十九谷左近が、どうして、そんな軍勢を手下にしたのか知らぬが、左近一人、いかに勇猛の兵法者であったとしても、手足となる兵らが、へたばり込んでしまっていては、戦陣の張りようもあるまい。

——左近に、目に物見せてくれる！

豪太夫は、左近がただ一人血まみれになってあばれ狂う光景を想像しながら、馬を進めて来たのである。

異変が起り、その指揮が、左近から多門夜八郎にとってかわったことを夢にも知らぬ豪太夫は、この一戦を、捲土重来の好機と考えていた。

軍勢五百のうち、百人を殺し、百人を遁走させたとしても、三百を捕虜として、おのが手勢に加えられる計算をたてていたのである。

豪太夫が、焼け城の中で、思案していたのは、大庄山を襲い、奈良城義胤とその家来どもを、討ちはらっておいて、竜神湖の水を伊吹野へ落して、農夫どもを狂喜させることであった。

そうすれば、農夫どもは、この田丸豪太夫を、神とあがめるに相違なかった。

伊吹野の領主として、昔日にまさる権威を誇るためには、その手段しかないようであった。

大庄山を襲うには、城内に残った士卒だけでは、足りなかった。

三百の兵を加えることは、思いもかけぬ運がめぐって来たのを意味している。

豪太夫の狸の皮算用は、胸中において、成っていたのである。

物見の士二人が、駆けもどって来た。

「申しあげます！」

馬上の豪太夫を仰いだかれらの顔は、緊張していた。

「どうした？」

「すでに、わが隊の攻め寄せるのに対する陣形を構えている様子と、見てとりました。麓の松林の中には、鳥雲の備えがあるように、察しられ、また、頂上の寺院の、もの静けさも、怪しむべしと存じました」

この物見の士二人は、ともに、すでに、いくたびも戦場を馳せめぐった熟練者であった。

異常なまでに緊張してみせているのは、敵の備えが、なみなみでない証左である。

豪太夫は、意外な思いがした。

「九十九谷左近が、軍略に秀れているはずがないが……？」

兵法者というものは、武士とは区別されて考えられていた時代であった。

腰の一剣に、おのが生命を賭けて、諸方をわたり歩く、いわば一匹狼であり、その業が、必ずしも、大きな合戦に役立つものとは、武将たちは、考えていなかった。

したがって、兵法者は、臨時にやとわれて、合戦に加わっても、兵などは、あずけられなかった。隊長になどされなかったのである。兵法者自身も、剣をみがく方便として、やとわれただけであった。

功名手柄を期して、大将首をねらったりするようなことはなく、乱戦裡で、剣をふるう修業をしたのである。

戦場武者とは、おのずから、別の存在として、みられていた。そのような兵法者が、軍略などを学んでいるとは、とうてい考えられなかった。

——左近のほかに、陣法にくわしい、いくさのかけひきに長じた武辺がいるのか？

そうとしか、思われなかった。

「では、容易に、近づけぬ、と申すのだな？」

「ご要心なさいまするに、こしたことはないと存じます」

「弱兵が、一夜にして、強兵に変化するはずもあるまいが……」

豪太夫は、ちょっと、首をひねっていたが、

「佐々兵庫——」

と、呼んだ。

長髯をたくわえた、見るからに強そうな組頭が、馬をのり出して来た。

「その方、二十騎を率いて、あの林の前を駆けすぎつつ、矢を射込んでみろ」

「は——、かしこまりました」

「戦うのではない。伏せている敵兵どもに、士気があるかないか、それをはかり、判断して参れ」

「心得ました」

佐々兵庫は、馬責めの巧みな士を、つぎつぎと指名し、これを、一列縦隊にならばせるや、

「行くぞ！」

と、下知して、まっさき駆けて、馬腹を蹴った。

雨を受けるのを忘れた、かわききった荒地は、一線をひいたごとく三間ずつの間隔をとって疾駆する二十騎のひづめに蹴られて、幕でも張るように土煙りをひろげた。

その林にむかって佐々兵庫は、わざと、まっしぐらには近づかずに、大きく迂廻して行った。

佐々兵庫はじめ、つきしたがっている者たちは、豪太夫が伊吹野城を奪取するまでの、戦闘に明け暮れる時代を、ともにすごして来た面々であった。

いわば、いずこの武将の下にあっても、強い武力をなす分子であった。

戦闘そのものが好きな男たち、といえた。

疾駆のさまに、その勇猛の気魄があふれていた。

林に近づくと、佐々兵庫は、背中から矢を抜いて、弓につがえた。つづく者も、それにならった。

「よいな！　一矢だけ、放つのだ。二矢を放ってはならぬ！」

兵庫は、叫んでおいて、手綱に頼らぬ乗尻のまま、馬を責めた。

木立の中は、しんとしていた。

しかし、林の前に至るや、兵庫の目は、樹木のかげに、ちらちらとうごく人影を、いくつか、みとめていた。

馬の前へ躍り出て来るか？

それとも、先に、矢を放って来るか？

伏兵ならば、当然、その反撃があることを、覚悟すべきであった。
兵庫は、それを予期しつつ、敢えて、木立ぎわを、駆け抜けざまに、一矢を射込んだ。
悲鳴がつらぬくのをききながら、兵庫は、馬首をまわした。
つづく者は、のこらず、兵庫にならって、一矢を射込んでおいて、草地に円を描きつつ、遠くへのがれた。
木立の中で、つぎつぎと、悲鳴があった。
しかし——。
伏兵が躍り出て来る気配もなければ、一矢さえもむくいては来なかった。
襲撃隊は、いったん、林にむかって、半町あまりの距離をとって、横列になり、しばし、待ちかまえた。
木立の中では、射倒された者を介抱したり、はこんだりする動きはあったが、撃って出て来ようとする様子など、全くみとめられなかった。
「あきれたものだ。伏勢が、敵に矢を射込まれても、伏せたまま、無抵抗とは、なんたるざまだ！」
兵庫は、ばかばかしさに、唾を吐きすてた。
この報告は、ただちに、豪太夫にもたらされた。
「ふむ。こちらをあざむく策とはみえなんだか？」
豪太夫は、たずねた。
「もしあれが、策ならば、われらの目にとまるように、矢を射込まれたうろたえを見せはいたしますまい」
佐々兵庫は、伏勢に、戦意がないものと断定したのである。
戦意はあったが、疾駆して来た騎馬隊の、みなぎらせた勇猛の気魄に圧倒され、喪失してしまったもの、と高言するにはばからなかった。
主人の豪太夫の方が、まだ、要心ぶかかった。
「もう一度、脅し矢をくれてみるか」
「いいや、もうその必要はありますまい。一挙に、衝くべきかと存じます」
「その方の判断に、めくらの部分はあるまいな？」
「確信をもって！」
「よし！　では、撃とう」
豪太夫は、百騎を左右に散らせて、鶴翼の陣形を、とらせた。
「まっしぐらに、突入せい！」
下知を受けて、鶴が翼をひろげたごとく横へひらいた騎馬陣は、一斉に、土煙りをあげて、岬の丘陵めがけて、突進しはじめた。
その時、夜八郎の方は、ちょうど、反対側の麓を、二百の兵を率いて、まわりかけていた。
佐々兵庫が、伏勢に、脅し矢を射かける光景を、眺めていたならば、臨機応変の戦法も思案し得たであろうが、それを見ていない夜八郎は、敵軍が突入して来るには、まだ時間がある、と考えていたのである。
そのあいだに、麓をまわって、突入して来た敵陣の背

を衝く策であった。
誤算であった、というよりも、やはり、都ぐらしで腑抜けになった兵の戦意の乏しさをどうすべくもなかったのである。
「あれは？」
夜八郎は、馬蹄のひびきと、木立のむこうに舞い立つ土煙りを見てとって、はっとなった。
——しまった！　おくれた！
夜八郎は、
「つづけ！」
と、叫ぶや、奔りはじめた。
将軍家御曹司に率いられている、という気持が、この二百の兵を、伏勢三百人とはちがって、かなりの勇気をふるい起させていた。
しかし、人間の足はあまりに、のろかった。
麓をなかばまわらぬ頃、すでに、むこう側では、騎馬陣に突入された伏勢三百人が、ふるえあがって、われ勝ちに、寺院めがけて、逃走しはじめていた。
文字通り、蜘蛛の子を散らすような、なさけない卑怯ぶりであった。
騎馬陣の放つ矢を、前で受けた者は、ほとんどなく、背中にあびて、ばたばたと倒れていた。
「追いあげてしまえ！」
豪太夫は、久しぶりに、勝利の快感に、血をわきたてていた。
一陣・浦上彦十郎、二陣・寺部外記、三陣・小幡左門——いずれも、兵らを叱咤するかわりに、おのが生命ひとつをまもるのに必死になって、境内めがけて、駆け登ろうとしていた。
それに向って、騎馬隊が、疾風の迅さで殺到して来た。
「来たっ！」
「わあっ！」
「たすけて、くれっ」
後続の兵たちは、馬蹄に蹴られたり、槍で突かれたりして、悲鳴をあげて、逃げまどった。
「ああっ！」
「降伏を——」
「にげろ！」
隊長三人は、それぞれの叫びをあげて、死にもの狂いに、脱兎の卑怯ぶりをみせていたが……。
まず、小幡左門が、背中を、槍でつらぬかれて、
「げえっ！」
と、絶鳴をほとばしらせた。
つづいて、寺部外記が、大太刀で、肩を斬られて、つんのめった。
浦上彦十郎は、もはや、のがれられぬと知って、老松をうしろ楯にして、刀を構えた。
それへ、馬を駆け寄せたのは、佐々兵庫であった。
「おのれ、隊長の一人だろう。なんのざまだ！　恥を知れっ！」

馬から跳び降りると、長槍を、ぴたっと構えて、

「大将はどこだ？　九十九谷左近は、どこだ？　云えっ！」

「大将は、九十九谷左近では、ご、ござらぬ——」

彦十郎は、恐怖の目をむきながら、かぶりを振った。

「左近が大将であるとは、忍び物見が、調べあげて居るぞ！」

「い、いや！　左近は、死に申した」

「では、大将は、何者だ？」

兵庫は、槍の穂先を、彦十郎の鼻さきへ、突きつけた。

彦十郎は、刀をすてて、その場へ、へたばり込んだ。

「降伏つかまつる」

「大将は、何者だ、と問うているのだ！」

「多門夜八郎——将軍家の御曹司でござる」

「なにっ?!」

「ま、まことでござる。……降伏つかまつる」

「将軍家の御曹司が、この伊吹野に在ると申すのか！　信じられぬわ。……第一、おのれら腰抜けが、将軍家直参であろうはずがないぞ！」

兵庫は、槍の穂先で、彦十郎の頸根をたたいた。

「たわ言を申すな！」

「い、いつわりは申さぬ。神明に誓い申す」

浦上彦十郎は、たすかりたい一心で、恥を忘れて、地べたへ両手をついた。

「よし！　そやつが、そうほざいて居るのだな。贋者め、どこにかくれて居る？　云えっ！」

佐々兵庫は、呶鳴った。

「四隊を、率いて、裏手へ、まわり申した」

「裏手は、断崖ではないか」

「降り路が、ござる」

「そうか、わが軍の背後を衝く策であったのだな。よし——」

兵庫は、馬へとび乗った。

その時、すでに、一方的な戦いは、ほぼおわっていた。

参道の左右に、降伏した兵が、ずらりと土下座させられていた。

豪太夫が、その中を、駆け上って来た。

「どうした？」

「殿——。この腰抜け軍勢を率いて居るのは、将軍家御曹司を詐称いたして居る多門夜八郎という者らしゅうござる」

「将軍家御曹司だと？　大層なほらを吹いて居るな」

兵庫は、その多門夜八郎が、裏手の断崖をつたい降りて、背後を衝く策をとっていたことを告げ、

「ひとまず、山門を入って、待ち構え、参道下に寄せて来たところを、一挙に、片づけてはいかがかと存じます」

「よかろう。捕虜どもを、まず、追いあげい」

浦上彦十郎は、ひっくくられて、先頭に立たされた。

どうやら、隊長として捕えられたのは、自分一人のようであった。

予備三隊の隊長たちは、殺されたか、野へのがれたか、

いずれかであろう。

兵庫は、境内へ捕虜どもを坐らせると、彦十郎を、豪太夫の面前へひき据えて、目くばせした。

豪太夫は、捕虜どもを見わたし、

「おのれらは、ただいまより、伊吹野城主たる田丸豪太夫に、忠誠を誓い、粉骨砕身いたせ。よいか！」

申し渡しざま、陣太刀を抜いて、彦十郎の首を刎ねた。

「よいか！　異心を抱く奴は、即刻、このように成敗いたすぞ！　忠誠を誓うか？」

捕虜どもは、平伏した。

山門ぎわでは、十騎ばかりが、参道下へ、鋭い目を光らせていた。

兵の動きは、見られなかった。

兵庫が歩いて来て、

「寄せて来る気配はないか？」

と、問うた。

「ありませぬ。物見もまだ、もどっては来ませぬ」

「もうすこし、待とう」

一刻が、過ぎた。

参道の入口は、ひっそりとして、ついに、人影のうごく様子もない。

ただ、あやしまれたのは、放った忍び物見が、いまだに、還って来ないことであった。

殺された、と断定せざるを得なかった。

兵庫は、念のために、さらに二人をえらんで、麓まで奔らせることにした。

「ただちに、もどって来い」

命じられた通り、二人は、すぐに、参道をかけあがって来た。

「麓のどこにも、敵らしい影は、見当りません」

その報告に、兵庫は、首をかしげた。

本堂に憩うている豪太夫のところへ来た兵庫は、その旨を告げて、

「いましばらく、お待ちなされるか？　それとも、こちらから降りて、裏手へまわり、ひそんで居るところを、襲いましょうか！」

と、問うた。

「夜陰に乗ずる。それまで、待て」

豪太夫は、云った。

将軍家御曹司と称している男が、どれだけの智能をそなえているか、判らぬことだった。また、豪太夫自身、そうした高い身分に対して、極端な劣等感を持っているだけに、慎重な態度をとることになった。

その軍勢が、裏手の密林の中にひそんでいることは、疑いを入れぬところであった。

出るに出られず、やむなく、じっと気配をひそめているもの、と判断される。

「兵庫、いら立たずともよいぞ。ゆっくりと構えて、兎狩りのつもりでやろう」

豪太夫は、そう云って、笑ってみせた。

「はーーしかし」
「しかし、なんだ？」
「さきに放った忍び物見二名は、熟練の者でありますれば、たやすく捕えられたり、斬られたりはせぬはずでござる。たとえ、一人は殺されても、一人は、にげもどって参るに相違ないのでござるのが……、その点が、あやしまれてならぬのでござる」
「熟練の忍び物見にも、不覚はある。心配は無用にせい。それよりも、捕虜どもを、眺めて、使いものになるかならぬか、その方の意見をきかせい」
兵庫は、豪太夫が珍しくおちつきはらっているのを、なかばいぶかりつつ、境内へひき据えられている捕虜の群を、視察しに行った。
豪太夫は、方丈にたくわえてあった酒が、発見されて、はこばれて来ると、
「女をつれて来るのであったのう」
と云って、高坏（たかつき）の魚の干物をかじりながら飲みはじめた。
陽は、西に傾いた。
ようやく、騎馬隊も、気がゆるんで来た。本堂の廻廊や方丈のあちらこちらに憩うているうちに、いびきをかく者も出て来た。
ここが奇襲されるおそれはない安心感が、惰気を催したのである。
突如ーー。
本堂の裏側から、凄じい鯨波が噴きあがったのは、陽がようやく西の山かげへ没しようとした頃合であった。
「なんだ？」
豪太夫は、思わず、盃を投げつけて、立ち上った。
兵庫が、階（きざはし）へとび上って来た。
「殿っ！　不覚でござった！」
「莫迦っ！」
豪太夫が、廻廊へとび出した時、喚声をあげた兵が、どっと、境内へ奔り出て来た。
まさしく、豪太夫のうかつであった。
断崖を降りて裏手へまわったのであれば、再び、そこをよじのぼって来る場合がある、と考え及ぶべきであったのだ。
こちらをおそれて、密林中にひそんだなり、身動きできぬもの、と勝手に思いきめていたのは、甚しいうぬぼれであった。
豪太夫は、殺到して来た敵兵の死にもの狂いの勢いを視て、うなった。
迎える配下は、全くの不意を衝かれた狼狽で、各個ばらばらに、得物をつかんで、向って行ったが、その光景は、いかにもだらしないものにみえた。
具足をぬいでいる者が大半で、その姿で、あわをくらって、槍のかわりに旗をふりまわしたり、雪崩をうって来る敵兵の前で、茫然とつっ立って、為すすべもなかったり、もろくも刀をたたき落されて、逃げ出したりーーたちまち、敗色を濃いものにした。

境内にひき据えられていた捕虜どもも、味方の奇襲に、狂喜して、一斉に、立ち上ると、八方へ散った。
豪太夫の呶号も、兵庫の絶叫も、騒然たる修羅の渦の中では、なんの威力もなかった。
まさしく、それは、死にもの狂いになった人間の渦であった。
伊吹野勢は、その渦の中へ、まき込まれてしまった。
戦闘というものは、勢いの優劣によって、勝敗が決する。雑兵といえども、ひとたび勢いに乗れば、意外な目ざましい働きを示すものである。
多門夜八郎によって、生か死か、この戦いが、お主らの運命を決する、と鼓舞された四隊二百の兵は、捕虜になった兵どもとは、同じ軍勢と思われぬくらい、勇敢な闘志をむき出していた。
「こなくそ！」
「野郎っ！」
「くたばれっ！」
渦の中へまき込んだ敵へ、襲いかかる勢いは、けだものと化したように、おそれを知らなかった。
そこにーー。
ここにーー。
地面を血汐にそめて、ころがるのは、伊吹野城の武者ばかりであった。
「おーー！」
ただ一人ーーといってもいい凄じい阿修羅ぶりを発揮していた佐々兵庫が、大きく、目をひきむいた。
方丈の広縁に、一人の敵兵がかかげる旗をみとめたのである。
日輪の旗であった。
「あれは、将軍のーー」
兵庫は、猛然とそこへむかって、突進した。
三人ばかりの敵兵が、躍りかかって来たが、案山子のように、はねとばされた。
「多門夜八郎とか申す牢人は、何処だ？　出い！」
兵庫は、広縁下に仁王立って、叫んだ。
「ここに居る！」
声は、背後から来た。
ぱっと向きなおった兵庫は、そこに立つ着流しの牢人姿を一瞥しざま、
「おのれかっ！」
大太刀を、真向から、なぐりつけるように、襲いかかった。
兵庫は、夜八郎が、鳥影のように、斜横にとぶのを、視た。
それが、兵庫のこの世に於ける見おさめであった。
兵庫を地面へ仆した夜八郎は、身をひるがえし、本堂へ奔った。
豪太夫は、廻廊上に立って、兵庫が、斬られるのを目撃していた。
「おのれかっーー将軍家落胤と詐称する不埒者はーー」

豪太夫は、長槍をひとしごきするや、ぴたっと、構えた。

階を一気に駆けのぼった夜八郎は、薄ら笑った。

「教えてくれよう、田丸豪太夫。伊吹野城を焼いたのは、この多門夜八郎だ、と知れ」

「なにっ！」

「手負い猪になって、しばらく息をひそめていた、と思っていたら、また、牙をむき出して来たな」

「うぬがっ！」

豪太夫は、全身を憤怒のかたまりにして、夜八郎めがけて、長槍を突きかけた。

数知れず、戦場を駆けめぐって、一国一城のあるじにまでのし上った田丸豪太夫であった。突き出した長槍の凄じい勢いは、尋常の者の受けとめ得るものではなかった。

夜八郎は、本能的に、一歩退った。

豪太夫は、猛獣のように唸りを発しつつ、突きまくって来た。

夜八郎は、あとへあとへと、後退した。

豪太夫の攻撃は、夜八郎に息をつくいとまを与えなかった。

突く、引く——その迅さは、夜八郎に剣を振る業を使わせなかった。

ついに——。

夜八郎は、階を、降りはじめた。

自らを最も不利な位置に移したのである。

追いつめられて、やむなく、後退しているのだ、とみえた。

そうでなければ、自らをわざと不利の位置に移すわけがなかった。

階を、一段一段と降りつつ、豪太夫の突きまくって来る長槍をふせぐのは、ほとんど、不可能であった。

豪太夫は、もはや、完全に、おのが勝ちを疑わなかった。

その自信が、豪太夫に、夜八郎を睨み下して、にたりとする余裕を生ましめた。

夜八郎の方は、実は、その瞬間をつかむために、わざと、自らを不利の位置に移したのであった。

豪太夫が、にたりとした——そのせつな、夜八郎は、五体を躍り上らせた。

槍の穂先が、空中へ、はね飛んだ。

「おっ！」

豪太夫は、両断された槍の柄を、夜八郎へ投げつけておいて、陣太刀を抜こうとした。

夜八郎は、しかし、そのいとまを与えなかった。

陣太刀が、鞘をはなれたか、はなれぬ瞬間、夜八郎が、下から、ぴゅん、とはねあげた白刃が、豪太夫の頤から額まで、まっ二つに割った。

大きく弓なりにのけぞりつつ、豪太夫は、陣太刀を、宙にひとふりした。

廻廊の床を、大きく音たてて、豪太夫が仰のけに倒れるのを見とどけてから、夜八郎は、境内にむかって、

「たたかいは、おわったぞ！」

と、叫んだ。

境内では、すでに、旗色は完全に明らかになっていた。

奇襲の兵は、捕虜になっていた味方を加えて、勢いに乗じて、伊吹野城の百騎を、片っぱしから、討ちとっていた。

なおまだ十数騎が、血みどろになってあばれまわっていたが、夜八郎の一声で、がっくりと力を落し、太刀をほうりすてる者もあれば、どさっと地べたへ坐り込む者もあった。

「残党は、捕虜にはせぬ」

夜八郎は、そう申し渡しておいて、階をのぼって、廻廊上に立つと、

「お主らは、よく働いた。合戦というものは、士気如何によって、勝敗の決することが、よく判ったであろう。……かちどきを！」

凜乎として、夜八郎が、太刀を高くかかげるや、数百の兵は、狂喜の叫びを合せた。

夜八郎は、ゆっくりと境内に降りると、鐘楼わきの松につないである馬に寄って、ひらりと、うちまたがった。

夜八郎にしたがって、裏手から奇襲した隊長の一人が、あわてて近づくと、

「いかがなされる？」

と、問うた。

「お主らに、将軍の旗を贈る。伊吹野に入るもよし、京の都へ帰るもよし——。お主ら隊長たちの協議によって、きめるがよかろう」

栄枯盛衰

おそろしく、ひょろ高い男であった。六尺二三寸は、あろう。

それが、鎧櫃を背負って、長槍を杖にして、林の中から出て来て、刎ね橋のたもとに立つと、伊吹野城を、眺め、

「ふうん——」

と、大きな鼻孔をふくらませた。

「これは、いったい、どういうのだ？」

濠のむこうに、城壁はあるが、建物が消えてしまっている。

牢人者は、一歩毎に、脚の骨が、ぽきっぽきっと鳴るような、歩きかたで、橋を渡った。

「何者だ？」

城門わきの渡櫓から、番兵が、誰何（すいか）した。

「天堂寺虎蔵が、もどって参った、と殿に取次いでもらおう」

「天堂寺虎蔵？　そんな名は、きいたことがない！」

「お前ら、昨日今日やとわれた雑兵には、わからん。さっさと、取次げ」

「殿は、お留守だ」
「もどられるまで、待つ」
しばらく、返辞がなかった。
天堂寺虎蔵は、城門に焼けこげたあとがあるのをみとめて、
「ひと合戦があったらしいな」
と、つぶやいた。
やがて、潜り戸が、開かれた。
見覚えのある顔が、のぞいて、
「入られい」
と、招じた。
「数馬か。元気か」
虎蔵は、笑いかけた。
対手は、しかし、こわばった表情のまま、虎蔵を門内へ入れた。
「ほう――」
虎口に立った虎蔵は、ずうっと城内を見渡した。
「これは、みごとに焼きはらわれたものだのう。何者に、攻められたな？」
しかし、森口数馬という小姓は、その質問にこたえずに、先に立って歩いた。
「おい、なぜ、こたえん？」
「何者とも、知れ申さぬ」
「何者とも知れぬ？　それは、どういうことだ？　そんな阿呆な話はあるまい」
「隣国神矢右衛門太郎のみつぎ使者と申す、坊主武者が、米五十俵をはこんで参り、奸策を用いて、城を焼いたのでござる」
「殿は、まんまと、乗せられたのか？」
「とうてい贋者とは、見えなかったのでござる」
「おのが左右に、信頼すべき智慧のある家臣を持たなんだ不運だのう」
「殿は、その叡山入道と称する坊主武者を、軍師にしようとお考えになった模様でござる。ただの曲者ではなかったのでござる」
天堂寺虎蔵は、新しく建てられた城主館に入った。
このひょろ高い人物は、三年前までは、田丸豪太夫の右腕として、武勇のほまれ高かった侍大将であった。
些細な事柄から、豪太夫と口論して、いきなり、庭へ投げとばしておいて、それなり、城を退去したのであった。
戦国の世に、最も存在価値のある、豪気ひとすじに生きる武辺であった。
田丸豪太夫は、たしかに、横道きわまる暴君であったが、家臣の働きに対しては、公正な眼力をそなえていた。豪太夫は、天堂寺虎蔵を、最も信頼していたのである。
ただ、その場の空気で、双方ともに短気一徹であるために、憤怒を激突させてしまい、虎蔵が、主君を見すてる結果になってしまったのであるが、憎悪をあとにのこしたわけではなかった。
「殿は、どこへ、出向かれた？」

虎蔵は、小姓に問うた。
「都から落ちて来た五百ばかりの軍勢が、東の岬の古寺に籠っている、という報告があって、これを征伐に――」
「……？」
虎蔵は、眉宇をひそめた。
「程なく、捕虜どもをつれて、もどられると存ずる」
「いったい、何騎で、城を出て行かれたのだ？」
「百騎でござる」
「百騎？　当城には、それだけしか、のこって居らぬのか？」
「恩知らずどもは、城が炎上した直後、姿をくらましてしまい申した」
「殿が、狂気の振舞いをみせられたからであろう」
虎蔵には、その時の豪太夫の行動が、手にとるように、判った。
若い女が、酒をはこんで来た。
虎蔵は、どこからか拉致されて来たに相違ない若い女を眺めて、
「兵を集める前に、まず、夜伽をさらって来るとは、殿もあい変らずだのう」
と、笑った。
酒を飲むと、旅の疲れが出たか、虎蔵は、ごろりと、横になった。
陽は、西に傾いた。
しかし、豪太夫が率いた百騎が、帰還して来る様子はなかった。
ふっと、目をさました虎蔵は、瞬間、鋭い表情になった。
床下に、人がいる。
気配ともいえぬほど、微かな気配であったが、虎蔵の神経に、つたわって来た。
虎蔵は、そっと音もなく立ち上ると、壁にたてかけた長槍を、つかんだ。
つかむやいなや、気合もろとも、ぐさっと、床板をつらぬいた。
ねらいは、あやまらなかったはずである。
しかし、手ごたえはなかった。
虎蔵は、穂先をひき抜くと、しばらく、床板を、じっと、睨み据えた。
床下から、気配は、消えている。
どこかに、伏せて、息を断っているに相違なかった。
虎蔵は、こちらから誘いをかけるより、ほかはない、とさとると、
「おい、曲者！　ひそんで居る場所は、判って居るぞ！　生命が惜しければ、降伏せい！」
と、云いかけた。
すると、はたして、気配がうごいた。
間髪を入れず、虎蔵は、そこをめがけて、長槍を、突き入れた。
しかし、こんども、手ごたえはなかった。
そればかりか、引こうとしたが、ビクともしなかった。

柄をつかまれたのである。
なみなみならぬ手練を持つ曲者であった。
　虎蔵は、
「うむっ！」
　と、渾身の力をこめて、長槍をひき抜いた。」
と――。
　床下から、
「天堂寺虎蔵殿でござろう」
　と、声がひびいて来た。
「いかにも、おれは、天堂寺虎蔵だ。おのれは、何者だ？」
「貴殿の目の前へ、ただいま、姿を現し申す」
「よし――出て来い」
　虎蔵は、万一の用心に、床柱を背にして、待ちうけた。
　やがて、次の間とを仕切る檜戸が、開かれ、忍び装束が、すり足に入って来た。
「忍者か」
「明りをつけ申す」
　部屋は、すっかり暗くなっていた。
　燭台から、灯かげがひろがると、虎蔵は、
「大乗――貴様か」
　と、おどろきの声をあげた。
　この三年あまりの浪々漂泊の間に、ふと知りあった忍者であった。
　この忍者に、野伏七八人を加えて、山城の強欲な酒造りの大尽の屋敷を襲って、砂金袋を荷駄一疋分、掠奪したことがある。
「こんな焼け城の中を、何用あって、うろうろいたして居る？」
「お手前こそ、どうして、ここへおいでか？」
「当城の田丸豪太夫殿は、おれの旧主だ」
「ほう、これは、初耳でござる。左様でありましたか」
　七位の大乗は、ゆっくりとかまえると、顔へひっかかった蜘蛛の巣をはらった。
「おい、大乗、どうして、床下へ忍んだ？」
「故意に、忍んだわけではござらぬ。なんとなく、そうなり申した」
　七位の大乗は、こたえた。
「こら、天堂寺虎蔵を、なめてかかると承知せんぞ」
「とんでもない。正直なことを申上げて居るのでござる」
「理由を云え！」
「地下の抜け穴をつたって来ているうちに、そうなったのでござる」
「城外からか？」
「城外も、城外――三里もむこうからでござる」
「この伊吹野城に、抜け穴が掘ってあるとは、知らぬぞ」
「たぶん、前城主の奈良城義胤殿が、掘ったものでござろうな」
「その三里さきの場所とは？」
　虎蔵は、訊問した。

「大庄山の麓――当城から、恰度真西に当り申すな」
　大乗は、そうこたえてから、鼻孔をひらいたと思うや、くしゃみをした。
「三里の抜け穴を辿ると、さすがに、からだがひえて、腹底まで、ふるえが来申すて」
「貴様、どうして、そんな場所にいた？」
「ちょっと、調べることがござってな」
　大乗は、天満坊の依頼によって、奈良城勢が、大庄山から降りる新しい道を作っている状況を、調査していたのである。
「何を調べて居った？」
「それは、ちょっと、申上げかねる」
「おい、大乗――、おれにかくすのか？」
　虎蔵に、睨みつけられて、大乗は、額へ、三筋ばかり、当惑の皺をつくった。
「かくすな！」
「弱り申したな」
　大乗は、頭をかいた。
「なにが、弱る？　貴様が、どこかに義理だてして、秘密を守るような仁義の男か。小ずるくて、欲深で、決して損になるような立廻りをせぬ奴だ。何か、利得をもくろんで居るのであろうが！」
「ところが、天堂寺殿――、最近、この大乗、いささか宗旨がえいたしていたって、殊勝な振舞いをつかまつる」
「なんだと？」
「と申しても、頭から、信じては頂けまいが、きくだけ、きいて下され」
　大乗は、ひどく、真剣な表情になった。
「いかにも、きいてやろう。話せ」
「天堂寺殿は、どの方角から参られたか存ぜぬが、この伊吹野に、水が一滴もない惨状は、ごらんなされたかな？」
「ああ、見た。百姓どもは、困窮しているのだろう？」
「まさしく――、今年、田植えができなければ、伊吹野の住人は、ことごとく　飢え死するか、逃散するか、どちらかでござるな。……そこで、七位の大乗、義をみてせざるは勇なきなり、と――」
「はっはっは……」
　天堂寺虎蔵は、大乗の真剣な話のなかばで、大声をあげて、笑った。
　大乗は、予期してはいたが、あまりにばかにされて、さすがに、むっとした顔つきになった。
「それがしは、まじめに話して居るのでござる」
「うむ。盗人にも仏心はある、と申すのだな。それで――？」
「公卿館をご存じでござろう？」
「知って居る。藤原氏の嫡流などと称して居る泰国家だろう」
「公卿館に、天満坊といわれる面白い大器量人が、逗留されて居るのでござる」
「天満坊？　坊主か？」

「左様──」
「その坊主に、説法されて、貴様、宗旨がえをした、と申すのだな？」
「いや、説法などは、きき申さぬ。ただ、その人格に服したのでござる。ただの坊様ではござらぬ」
「わかった。そやつだな、この城を焼きはらったのは！」
「……」
「おい、かくしてもはじまらぬぞ、大乗！」
「たしかに──」
「隣国のみつぎ使者といつわって、乗り込んで来て、焼きはらうとは、孔明正成の智能だな」
「その通りでござる。天満坊殿は、まさしく、百年に一人、あらわれるかあらわれぬほどの大器量人でござる」
「その坊主が、百姓どもを救おうと企てて居る。それを、貴様が、たすけて居る、というのだな？」
「いかにも──、それがし、この年になって、はじめて、善行を為すことの快味をおぼえて居り申す」
「報酬は、なんだ？」
「報酬など……」
「黙れ！　貴様が、いかに善行にもせよ、報酬なくして、働く奴か！」
「それが、神明に誓って──」
「嘘をつくな！」
虎蔵は、一喝をくらわせた。
大乗は、ふたたび、当惑の皺を、額へ三本きざんだ。
「報酬は、なんだ？」
「やむを得ぬ。天堂寺殿には、かくすわけに参るまい。……実は、公卿館には、莫大な金銀が、かくしてあるのでござる」
「まことか？」
「二十年前に、五摂家から、預ったのでござるて──」
「ほう、そうか。五摂家が、都が兵火に罹るのをおそれて、金銀を、この伊吹野にかくしたわけだな。……忍者め、やっぱり、欲の皮をつっぱらして居るではないか。なにが、農夫のための善行だ！」
虎蔵は、呶鳴りつけた。
大乗は、あわてて、手を振り、首を振って、弁明につとめた。
「ともかく、天堂寺殿も、天満坊殿にお会いなされば、その大器量人ぶりが、はっきりと判り申す」
「それは、それとしておこう。……で、お前の役目は、なんだ？」
「大庄山の奈良城勢の動静をさぐることでござる」
「さぐって、どうする？」
「大庄山の竜神湖の水門を開けて、伊吹野へ水を引くためには、山城を攻め落さねばならぬからでござるな」
「おい、ちょっと、待て。途方もない企てを、平気で申すな」
「途方もない企てには相違ござらぬ。しかし、これは、夢想ではなく、是が非でもやりとげなければならぬ焦眉の急務でござる」
「いかに、焦眉の急務であろうと、不可能は、あくまで不可能ではないか」
「天満坊殿は、不可能事を、可能にする御仁でござる」
「ばかを云え！」
虎蔵は、まったくばかばかしげに、かぶりを振った。
「信じられぬならば、それまでのことでござる」
大乗は、いささか憤然となって、云った。
「それよりも、ききたいことがある」
虎蔵は、鋭く大乗を見据えて、
「お前は、奈良城勢の動静をさぐっているうちに、抜け穴を発見した、と申したな？」
「左様──」
「すると、抜け穴は、大庄山に通じているのだな？　それは、中腹か、それとも頂上までか？」
「とんでもない。山麓まででござる」
「山麓？　山麓で、どうして奈良城勢の動静が、さぐれるのだ？」
「奈良城勢は、山頂から麓までの、降り道を作って居り申すな」
「なんだと？」
虎蔵は、おどろいた。
「奈良城勢は、野へ降りて来る計画をたてて居るのか？」
「道を作っているからには、そのこんたんでござろうな」
「再び、この伊吹野城を、奪いかえす、というのか？……あの腰抜けの奈良城義胤に、それだけの計画がたてられる道理がないが……」
虎蔵が、そう云うのをきいて、大乗は、ちょっとためらっていたが、
「奈良城義胤は、乱心して、もはや癈人の模様でござる。ただ、どうやら、山城には異変が起り、権力の座には、別の者が就いたらしゅうござる」
「そうか、それなら、話がわかる。城を焼かれ、兵を失った田丸豪太夫を、この機会に、一挙に、討ちとろうというわけか」
主君横死の悲報をもって、一騎が、駆けもどって来たのは、その頃であった。
城内にのこっていたわずかばかりの兵は、茫然となった。小姓の森口数馬は、天堂寺虎蔵に、告げるべきかどうか、まよった。
しかし、いまは、城内には、数馬より上の地位にあるさむらいは、一人ものこっていなかった。
数馬自身、残兵を率いる勇気も器量もなかった。
皮肉にも──。
主君と争って、退散した天堂寺虎蔵が、三年ぶりに、ぶらりと舞いもどった時に、その主君は、果てたのである。
数馬は、やむなく、虎蔵にたよるよりほかはなかった。
数馬が、その部屋に入ると、虎蔵は、
「騎馬がもどって来たようだな？　どうした？」
と、見据えた。

「殿はじめ、全騎、討死つかまつりました」
　数馬は、うつ向いて、告げた。
「なんだと？　まことか？」
「生きのこったのは、わずか十数騎の由。四方へ散ったと申します」
「いったい、敵は何者であったのだ？　判っていたのか？」
「ただの落人勢ではなく、将軍家の旗をかかげた——つまり、足利家のおん曹司であった、と申します」
「バカな！　将軍の息子が、こんなところを、うろついて居るわけがあるか！　贋者だろう。……ふん、贋者に、殿がのう……」
　虎蔵は、腕を組んだ。
　田丸豪太夫ともあろう豪の者が、自ら百騎を率いて、攻め出て行って、全滅するとは、なんということであったろう。豪太夫は、たとえ、家来全員が討死しても、最後に一人、生き抜く人物である、とかねてから、虎蔵は、信じていた。
　神力も、業力の熾んな者には、天罰が加えられず、という言葉があるが、まさしく、豪太夫は、そういう業力の所有者であったはずである。
　この城が焼けるとともに、その業力も衰えたのであろうか？
　それにしても、この最期は、あっけなさすぎる。
「天堂寺様——」
　数馬が、必死の面持で、呼んだ。
「なんだ？」
「この上は、お手前様に、われら生き残りの者は、おたのみするよりほかに、すべを知りませぬ」
「城には何人のこって居る？」
「二十名あまりかと存じます」
「足軽ばかりだろう？」
「はい」
「まあよい、集めろ」
　数馬が兵を集めるために出て行くと、入れちがいに、七位の大乗が、再び、姿をあらわした。
「田丸豪太夫も、ついに、悪運つき申したな」
「おい、気をつけて、物を云え。おれの主人だぞ」
　虎蔵は、大乗を、にらんだ。
「天堂寺殿の主君としては、いささか、軽うござったて。……唯今より、ご貴殿が、当城のあるじになられた。めでとうござる」
「足軽雑兵が二十人しか居らぬのに、なにが、あるじだ。……ところで、大乗、将軍のおん曹司と称する奴が、ここらあたりをうろついていると、きいたことがあるか？　どうせ、贋者だろうが……」
「贋者ではござらぬ」
「なに？」
「まさしく、将軍家のおん曹司——多門夜八郎と申される御仁でござる」
「懇意か？」

「懇意も懇意——。多門夜八郎殿は、公卿館に身を寄せられ、天満坊殿と力を合せて、伊吹野の住民どもを救おうとしてござる」
「それが、どうして、都からの落人勢を率いて居る？」
「さあ、そこらあたりのいきさつは、存ぜぬが、ともあれ、夜八郎殿が、数百の兵を旗下に置いたとなると、これは鬼に金棒でござるな。いずれ、明日にも、当城へ駆け入って来られようて」
「大乗！」
　虎蔵は、態度をあらためると、
「それがしを、多門夜八郎に引き合わせい」
「どうなさる？　一騎討ちでもされる所存かな？」
「主君の敵だから、仇討をするのが家来としてのつとめであろうな。しかし、仇を討ったところで、べつに、どういうこともあるまい。それよりも、田丸豪太夫を討ち果した強者（つわもの）を、一度、見たい興味だ。会った上で、一騎討ちをやるかどうか、きめるぞ」
「それもよろしかろう。……したが、天堂寺殿は、このまま、当城をあずかって、野望をたくましゅうされるのではござるまいな？」
「さむらいならば、それくらいの野望を持つのも、わるくあるまい」
　虎蔵は、高笑いした。
「申上げておくが、奈良城勢は、すでに、降り道をほぼ完成つかまつった。されば、近日中に、一挙に、当城へ、攻め込んで参り申すは、あきらかでござる」
「地下の抜け穴をくぐって参る、というのであろう。なんのこともあるまい。火薬でもしかけて、木っ端にしてくれよう」
　虎蔵は、平然として、云いはなった。
「さて、そうたやすく、片づけられますかな」
「まあ、見ておれ。……大乗、お主も、ひとつ、力をかせ」

地下の敵

「ほう——水無瀬家の息女と申される」

公卿館の書院で、天満坊は、対坐した美貌の娘を、無遠慮に、しげしげと眺めて、

「あでやか！」

と、云った。

「多門夜八郎は、まことに果報者。つぎつぎと、美女に慕われて、男冥利につきると、申すものじゃな」

美夜は、うつ向いて、

——つぎつぎと？　多門様は、姉のほかにも、慕われる女性がいたのであろうか？

と、思った。

「和尚殿——」

美夜を案内して来た柿丸が、縁側から声をかけた。

「わしは、これから、岬へひきかえして、様子を見て参ります」

「いや、それには及ぶまい」

天満坊は、とどめた。

「気がかりでござるゆえ……」

「多門夜八郎は、不死身じゃ。五百の軍勢が一人のこらず滅んでも、おのれ自身は、生きてもどって参る。もどって参らねばならぬ。このような臈たけた美女が、待っているのじゃからの」

「しかし——」

「まあ、よい。待って居れ。……多門夜八郎が、もし無為無策で、敗れるようなことがあったら、将軍家おん曹司の資格はない。武辺の面目を発揮する好機であろう。首尾よく、田丸豪太夫を討ちとることが出来たならば、人間が一段と大きくなろう」

「運不運と申すものがありますぞ。不運によって敗れるようなことがあっても、それは、夜八郎様の落度ではござるまいが——」

「不運もまた落度のうちじゃ。不運のさなか、おのが身ひとつを生きのびさせるのが、男子の力と申すものじゃのう」

柿丸は、天満坊の言葉に、すなおにうなずくことはできなかった。

——わしは、わしの考えによって、行動するまでのことだ。

柿丸は、館の門を、走り出ようとした。

「おーい！」

百平太が追って来た。

「おれを、つれて行け」

夜八郎が、岬の古寺で、落人勢を率いて、田丸豪太夫の攻撃を受けていることは、たちまち、館内にひろまっていたのである。

「お主など来ても、何もならん」

柿丸は、かぶりを振った。

「そっちは役立って、こっちは役立たず、などと、勝手にきめるな」

百平太は、柿丸にならんで走り出した。

「百平太！　不具にされながら、もう、夜八郎様をうらんで居らぬのか？」

「とおのむかしに、消えたわい」

「性根は、善い奴だな」

「措けい。そういうお主は、どういうつもりで、夜八郎様の家来になって居る？」

「家来になっている方が、働きやすいからだ」

「成程な——」

百平太は、柿丸の足の迅さに、おくれまいと、首を肩の中へめり込ませるような恰好になりながら、

「身分地位などというやつは、人間が勝手にきめたもので、癪にさわる、と思うていたが……、生れつき、大将になる者と、家来になる者と、きまっているのかも知れんな」

「あたりまえだ。わしやお主が、かりに城をもらったとしても、兵がやしなえるか」

「そりゃそうだ」

百平太は、正直に、合点した。

「夜八郎様は、これまで、自分が、将軍家の子だ、と吹聴されたことは、一度もなかった。ただの牢人者という顔をされて居った。家来など一人も、持とうとは、されなんだ。……それにも拘らず、いざとなると、軍勢が、むこうから、ころがり込んで参る」

「お主もすすんで家来になるし、おれも、耳を斬られたうらみを忘れる、か」

「わしは、夜八郎様が、やがて、将軍の位に就かれる、と信じて居る」

「それは、チト夢想にすぎぬかな？」

「いいや！」

柿丸は、前方をにらんで、走りながら、かぶりを振り、

「一介の牢人者として、憂世の苦労をされた夜八郎様が、将軍家になられたならば、天下は、たちまち、治まる。わしら下賤の者らが、愉しゅうすごせるような世の中にして下さるに相違ない」

「それは、そうかも知れんぞ。うん！　夜八郎様に、ひとつ、将軍になって頂こうかい。それには、まず、田丸をやっつけて、伊吹野城を奪って——」

やがて、埃道が、三叉（みつまた）に岐れる辻へ来た。

南へ行けば岬、北へ行けば伊吹野城。そして、西へ向えば、大庄山の麓へ行き着くことになる。

二人は、岬への道筋をえらんだ。

その時——。

彼方から、一騎、土煙りをあげて、疾駆して来るのが、見受けられた。

「はてな？」

眸子（ひとみ）をこらしていた柿丸は、
「あっ！　夜八郎様だ！」
と、叫んだ。
「相違ないか？」
「わしの目に狂いがあろうか」
たちまち――。
二人の前へ来た夜八郎は、たづなを引いて、笑った。
「出迎えか」
「ご無事で――」
「田丸豪太夫は、斬った。天満坊へ、つたえてくれ」
「貴方様は、どちらへ？」
「城だ。城を、取る」
夜八郎は、馬首を、北への道筋に向けた。

夜八郎が、城へ向って来た時刻、天堂寺虎蔵は、七位の大乗をつれて、地下の抜け穴へ、降りていた。
ひいんやりとした、土くさい空気が、こもった抜け穴は、意外に広かった。
虎蔵は、大乗がかかげる灯火で、ぐるぐると見まわし、
「大層な地下道を作ってあったものだ。ついぞ、気がつかなんだぞ」
進みかけて、ふと、片側の壁の一箇処へ目をとめた。
「はてな？」
虎蔵は、そばへ寄った。
そこだけが、きれいに塗られてあったのである。
大乗も、はっとなった。
気づかなかったことである。這入って来た時は、暗黒のの中を手さぐっていたからである。
「ここは、どうやら、戸口になって居るぞ」
虎蔵は、小柄を抜くと、壁を切りはじめた。
二尺四方を切って、ひき剝ぐと、
「ほう、これは！」
虎蔵は、声をあげた。
壁のむこうは、鉄の板がはめられていたのである。
「この奥には、倉が設けられてあるぞ。大乗、手つだえ」
「もしかすれば、地下牢かも知れ申さぬ。……中には、髑髏ばかりがころがっているのではござるまいかな」
「開けてみなければ、わかるまい」
虎蔵と大乗は、壁を切り破り、剝ぎ落した。
一間四方の鉄の板は、岩壁の中に、きっちりとはめてあり、二人が突いたぐらいでは、ビクともするものではなかった。
「さてな！　こいつを、どうやって、破るかだのう」
「手がかりがござらぬな」
「大乗、忍者ならば、思案せい」
「と申されてもな」
大乗は、しきりに、鉄の板を、調べていたが、
「これを開くのは、見当もつき申さん」
と、弱音をあげた。
「だらしのない忍者めが――」

虎蔵も、調べなおしてみたが、どうにも、開けるすべがなさそうであった。
「火薬ででも、爆破させねばなるまいて」
虎蔵が、なげ出すように云った。とたん、大乗の目が、ひそかに、光った。
――そうだ、このかくし倉には、武器や火薬が、たくわえられているに相違ない。それに、兵糧もだ。
実は、大乗には、開けるすべは、判っていたのである。
「まあ、よい。急ぐことはない。……ともかく、抜けてみよう」
虎蔵は、鉄の板を開けるのを、ひとまずあきらめて、抜け穴を辿ってみることにした。
「大乗――、およそ、どれくらいの長さだ？」
「さて、およそ十五町――いや、もっと、十七八町はござろうか」
「奈良城義胤は、よほど要心ぶかかったとみえる。これだけの長さの抜け穴をつくるには、十年も費したろうな」
二人は、灯火をつぎ足し、つぎ足しながら、進んで行った。
およそ、五六町も進んだろうか。
突然、大乗が、あかりを消した。
「どうした、大乗？」
「足音が、きこえ申す」
「なに？」
虎蔵は、耳をすました。
はるか遠くから、微かに、地底をつたって来る音が、ひびいて来る。
「奈良城勢だな！」
「さて、どうでござるかな？」
大乗は、奈良城勢が攻め込んで来るには、すこし早すぎるような気がした。
さらに、半町ばかり進んだ時、大乗が、
「おっ！」
と、叫びを発した。
「なんだ？　どうした？」
「あのひびきは、何か、ちがう？」
「何かとは？」
「人間の足音とは、ちがい申すぞ」
「すると？」
「あるいは――」
「あるいは？」
「天堂寺殿、ひきかえされい」
「おい、大乗、何者が、やって来るというのだ？」
「餓狼でござるわい！」
大乗は、云いすてるや、くるっと踵をまわして、走り出した。
「大乗、待て！」
虎蔵も、あわてて、大乗のあとから、走りはじめた。
忍者は、闇を疾走する修業を積んでいる。しかし、いかに戦場の荒武者といえども、暗黒の地下道を走ることは、

おぼつかなかった。

たちまち――。

大乗は、かなり後方で、人間とけものが、凄じい争いをひき起す音をきいた。

「虎も、餓狼の群には、敵わぬ」

大乗は、つぶやいた。

虎蔵を救うすべはなかった。

大乗は、おのが生命ひとつを守るのが、かろうじてであった。

虎蔵を倒したけものの一団は、猛然と、大乗を追って来た。

「来たか！」

大乗は、やむなく、天井へとびあがり、蝙蝠のように、身を岩壁へはりつけた。

多門夜八郎が、伊吹野城へ到着したのは、ちょうど、その時刻であった。

夜八郎は、刎ね橋のむこうの城門が開かれているのを、見た。

ただ一騎、生き残った武者が駆けもどった時に、開かれて、そのままになっているのであった。

――雑兵だけが、幾人か残っているらしい。

夜八郎は、馬を一気に、駆け入らせた。

これをとがめる者は、いなかった。

新しく建てられた城主の館と判る本丸まで、馬を進めるあいだ、人影を見なかった。

馬をすてて、つかつかと、館の玄関へ近づいた時、はじめて、人が出て来て、

「誰人（たれびと）でござろうか？」

と、とがめた。

「多門夜八郎。当城主田丸豪太夫の首級（しるし）をあげた者だ」

そう告げて、夜八郎は、馬の背にのせていた包みを、とりおろした。

それは、古刹の方丈にあった住職の袈裟でくるんだ豪太夫の首であった。

「お主は――？」

と、問われて、蒼白になった応対者は、

「小姓森田数馬――」

と、名のった。

「お主の上に立つ武士は、残って居らぬのか？」

「新城主となる御仁が、もどって居られる」

「新城主？」

「三年前に、当城を退去された侍大将の天堂寺虎蔵殿が、今日、もどって参られた。……天堂寺殿が、そのお首を、受領つかまつる」

「案内をたのむ」

夜八郎は、数馬のあとから、館内へ入った。

ひっそりとして、空家さながらであった。

曾て、夜八郎が、忍び入った時は、建物も大きく立派なものであったし、あらゆる場所に、兵の気配が満ちていた

ものであった。

まさしく、栄枯盛衰のはかなさを、この城は、示している。

数馬は、城主の居間の前へ来て、天堂寺虎蔵を、呼んだ。

返辞はなかった。

夜八郎は、檜戸を開いてみた。

広い部屋は、がらんとしていた。

上座に置かれてある円座が、わびしげに、白く浮きあがっていた。

夜八郎は、その円座の上へ、首級を置いた。

「どこへ参られたのであろう？」

下座へ就いた数馬は、首をかしげた。

夜八郎は、円座のわきに坐ると、

「お主のほかに、何人の雑兵が残って居る？」

と、問うた。

「二十名ばかり――」

数馬は、うつ向いてこたえた。

「天堂寺虎蔵なる侍大将が、いかに豪の者でも、雑兵たった二十を家来にしたのでは、どうにもなるまい」

夜八郎が、微笑して、云った。

「おうかがいつかまつる」

数馬は、夜八郎を見つめた。

「われら主人が率いた百騎は、いかが相成りましたか？」

「あるいは討死。あるいは逃散。……当城へ、舞いもどることは、おれが、許さなかった」

「お手前様の兵は？」

「あれは、おれの兵ではなかった。京へひきかえして行った」

「お手前様は、首級をご持参なされて、当城を取ろうとなされるのでありましょうか？」

「空城を接収するのに、手勢は必要あるまい。天堂寺虎蔵が、新城主となる、と申すなら、それと一騎討ちをいたす」

数馬は、不敵な言葉を平然として吐くこの若い牢人者を、

――いったい、何者であろう？

と、うたがいおそれた。

その折――。

数馬をぎょっとさせたのは、不意に、どこからか、こもり声がひびいたことである。

「そこにおいでなさるのは、多門夜八郎殿でござるか？」

声は、そう問うた。

「左様――」

夜八郎が、こたえると、片隅の床板が、ぽんと、揚げられて、首がひとつ、ヒョイとのぞいた。

「大乗か」

「いやはや、大変な目に遭い申した」

七位の大乗は、のこのこと上って来ると、顔にひっかかった蜘蛛の巣をはらいのけながら、

「あやうく、生命びろいをつかまつった」

「どうした？」

「大庄山麓とこの城をつなぐ抜け穴が設けられてあるので

ござる」

大乗は、説明しはじめた。

それを発見して、ここへ忍び込むと、旧知の荒武者天堂寺虎蔵と出会い、問答ののち、案内して行こうとしたところ、山犬の群に襲われた。

夜八郎も、数馬も、眉宇をひそめて、大乗の話をきいた。

「で――つまり、天堂寺殿は、彼奴らのえじきになった模様で、それがし一人、生命からがら、逃げもどった次第でござる」

「その山犬の群を、使っている者が、いたか、どうか、だな」

「たぶん……、後方には、その者がいたでござろうな」

「奈良城勢と思うか？」

「さあ？」

大乗は、首をかしげた。

夜八郎が、立ち上った。

「参ろう」

「参ろう――と申されて？」

「おれが、調べる」

「抜け穴を、でござるか？」

大乗は、あっけにとられた。

「案内してくれ、大乗」

「そ、それは……しかし、山犬どもは、まだ、うろうろいたして居りますが……」

「けものなどに、遠慮はして居られぬ」

夜八郎は、笑って、云ってのけた。

「しかし、あの群は、わざと飢えさせて居り申すゆえ、狂暴きわまる気色でござる」

「狂暴であればあるほど、片づけやすい」

夜八郎は、ふと、思いついて、

「お主――」

と、数馬へ、視線を向け、

「雑兵十人に、松明を持たせて、おれのあとに、従わせてもらおう」

「は――？」

数馬は、ためらった。

「天堂寺虎蔵が、相果てた上は、当城は、この多門夜八郎の支配に置かれる。そうではないか」

「たしかに――」

数馬も、いまは、夜八郎に服従するよりほかはなかった。

数馬は、いそいで、館を出ると、大声で兵を集めた。

「松明を用意せい。急げ」

わけのわからぬままに、兵らは、走って行った。

そのあいだに――。

夜八郎は、大乗の案内で、抜け穴の出入口を、調べた。

大乗は、身ひとつ通れるだけ、鉄蓋を開いていたが、夜八郎は、それをとりはずしてみた。

灯火を入れてみて、

「これは、かなりの荷物をはこぶように設けられている」

と、云った。

石段がひろく、数人がならんで昇降できるように、大がかりに掘られているのであった。

「おそらく、奈良城義胤は、この城から遁れ出る際、武器と兵糧を、相当量はこんだに相違あるまい」

「そういえば、地下にも、倉が設けてある模様でござる」

「そうか。これだけの抜け穴をつくった以上、倉も設けたであろう」

「武器や兵糧も、なお、倉にかくしてあるのではござるまいか」

「わかった！　奈良城勢が、大庄山に降り道をひらいたのは、当城を奪いかえす目的だが、それには、地下倉にかくした武器と兵糧を取る、ということが含まれて居る」

「成程――、たしかに、その通りでござるわい」

大乗も、うなずいた。

大乗は、石段を降りて行き、地下道の様子をうかがっていたが、程なくひきかえして来て、

「餓狼の群は、ひきあげたようにみえ申す。気配はござらぬ」

と、報告した。

「むこうの出入口近くに、飼っているのであろう。檻でも設けてあるのか」

夜八郎は、推測した。

数馬が、松明をかざした兵十人をつれて、やって来た。

「お前らを、つれて、当城から大庄山の麓に至る抜け穴を通る」

夜八郎は、云った。

兵らの顔に、怯えの色がうかんだ。

「お前らに、危険はない。……かりにも危険が迫って来るようなことがあれば、逃げろ」

夜八郎と大乗は、先に立って、石段を降りて行った。

十本の松明に照らされて、地下の道は、すみずみまで、見わけることができた。

「この岩盤を切り抜くのは、容易ではなかったろう。地下道をつくる技術を備えた者がいたに相違ない」

しばらく行ってから、大乗が、

「それでござる」

と、岩にはめこまれた鉄板を示した。

「成程――。地下倉だな」

「開けてみせ申すかな」

「いや、待て。開けるのは、あとだ」

夜八郎は、背後から松明の明りを送られて、前方へ長い影法師をはわせながら、進んで行く。

大乗が、ふっと、背すじに悪寒をおぼえて、

「大丈夫でござるかな？　敵は、餓狼の群――それも、二三びきではござらぬ」

と、ささやいた。

「大乗――」

「なんでござる」

「他人のすみかに忍び入ったことは、無数だろう。どのような思いもうけぬ危険が待ち伏せているかも知れぬに――」

「それは、そうでござるが……」
「おれたちは、危険のただ中を歩くような運命に生れついて居る。安楽浄上の後生とは、無縁だ」
「そういう言葉を吐かれるので、それがしは、お手前様に従わぬわけに参らぬのでござる」
大乗は、いまいましげに、云った。
夜八郎は、笑い声をたてた。
大乗は、全神経を緊張させて、行手の闇の中からひびいて来るどんな微かな音も、ききのがすまいとしていたが、とある地点まで至ると、
「お！」
と、足を停めた。
「どうした？」
「対手が餓狼なら、こっちも、かぎ犬になり申す。……要心めされい。これからさきは、地獄でござる」
「地獄か――よかろう」
夜八郎は、差料の鯉口をきった。
それから、後にしたがう兵らをふりかえって、
「五人ずつわかれて、左右の壁に吸いつくのだ。動いてはならぬ」
と、命じた。
十人の兵は、生命の危険が迫れば、にげ出してもよい、と云われて、従って来たのだが、どうやら、こんなに奥まで進んできた以上、にげることは不可能だ、とさとった。
いかなる敵が殺到して来るのか、わからぬままに、覚悟をきめなければならなかった。
「大乗――。餓狼を近づけさせて、一気に片づけるのだ。よいな！」
「かしこまった」
その地点は、行手が、大きく曲った箇処で、敵を迎え撃つには、有利であった。
夜八郎も大乗も、左右にわかれて、壁へ、からだを寄せて、待ちかまえた。
やがて――。
疾駆して来る四つ足の群の、名状し難い不気味な音が、高くなって来た。
「大乗！　一瞬の勝負だぞ！」
「心得て居り申すわい！」
曲り角に、黒いけものの集団が、どっと出現した。
「あっ！」
兵らの口から、恐怖の叫びがあがった。
「動くな！」
夜八郎は、叱咤した。
牙を持った野獣の群は、燃えあがる松明の炎に、一瞬、ひるんだ。
大乗は、大きく一呼吸した。
――来やがれ！
大乗は、右手に一本、そして左手に、七八本の手裏剣をつかんでいた。
餓狼の群は、唸りをたてながら、ゆっくりと迫って来た。

大乗は、夜八郎の下知を待つ。
夜八郎は、容易に、口をひらかなかった。
距離は、ついに、二間あまりに縮まった。
「撃て！」
夜八郎は、叫ぶとともに、五体を躍らせて、餓狼の群のまっただ中へ――。
「応っ！」
大乗は、手裏剣を、目にもとまらぬ迅さで投げはじめた。
夜八郎が、一閃毎に、首を、胴を、刎ねて行く、その左右へ、手裏剣は、吸い込まれるごとく、飛んで、確実に、一疋ずつ斃した。
攻撃太刀と援護手裏剣の、みごとな一致であった。
夜八郎は、二疋ばかりが遁走して行くのを見送って、けものの返り血のなまぐささに、ふうっと、ひと息ついた。
「やっつけ申したわい」
大乗が、そばへ来て、云うと、夜八郎は、
「これからだ」
と、こたえた。

もののふの日

そのあたりは、幾百年かのむかし、心得ある地頭が、植えたものであろう、同じ高さの杉が、鬱葱として山麓を帯になって巻いている密林地帯であった。
その密林の中の一箇処が、伐りひらかれて、陽ざしを呼び入れ、あかるい空地となっていた。
大庄山の頂上からの道は、そこへ通じていた。
山城の侍大将、横川勘兵衛は、床几に腰をおろして、足下に横たわっている血まみれの男を、じっと、見まもっていた。
血まみれの男は、天堂寺虎蔵であった。顔面は、いちめんに傷ついて血を噴かせ、衣服はずたずたに、噛み破られていた。
常人ならば、とっくに、息絶えているところである。
流石は、刀創槍傷を全身にもっている戦場武者であった。意識こそうしなっているが、胸はゆっくりと上下に動いている。
横川勘兵衛は、まばたきもせずに、見まもりつづけている。
と――。

虎蔵は、太い眉をしかめた。眩しい陽ざしが移って、顔に当ったのである。
――不死身の男よ！
勘兵衛は、微笑した。
虎蔵は、まなこをひらいた。どうして、こんなところに横たわっているのか、すぐには、思考力が働かぬようであったが、そこにいる人間に気がついて、視線を仰がせると、事態をさとった。
起き上ることは、よほどの苦痛であったろうが、虎蔵は、横たわっている屈辱には、堪えられなかった。
「おれは、とりこか」
虎蔵は、血唾をぺっと吐きすててから、云った。
「まずはな」
勘兵衛は、微笑しながら、うなずいてみせた。
「貴公は？」
「奈良城義胤の家臣横川勘兵衛」
「それがしは……天堂寺虎蔵だ」
「伊吹野城に、抜け穴が設けてあったのを、貴公は、よく知って居ったものだ」
「それがしの旧知の忍者が、さぐりあてた」
「成程――忍者ならば、さぐり当てるかも知れぬ。しかし、お主は、何故に、一人で抜け穴を通って来ようとしたのか？　家来どもを、どうしてひきつれなんだ？」
「家来一同に、抜け穴があることを、知らせることの是非を考えたまでだ」
虎蔵としては、主君以下旗本全員が、ことごとく滅んでしまったことを、敵である奈良城方へ、知られたくはなかった。
「いささか、うたがわしいの」
勘兵衛も、さる者であった。
「焼け城には、もう兵はのこって居らぬではないか」
「兵がのこって居るか居らぬか、貴公自身で、見とどけたらよかろう」
虎蔵は、疼痛はげしい上半身を、立てた。
「いや、少々ばかりの兵がのこって居っても、落日をもはや中天にもどすことは不可能だ。田丸豪太夫の命脈は、すでに尽きて居る」
「さあ、それは、どうであろうかな。山城で飢えた奈良城勢の方が、野へ降りて来るのが、おこがましい、と申すものではあるまいか」
虎蔵が、せせらわらった時であった。
一人の若い士が、血相かえて奔って来ると、
「地下道に強敵が、出現つかまつりました」
と、報告した。
「旗本勢が寄せて来たか？」
「いえ、多勢ではなく、雑兵をしたがえた牢人ていの男と、忍びの者らしき者の二人だけでありますが……忽ち、犬どもを斬り殺してしまい、進んで参ります」
「……？」
勘兵衛は、ちょっと、首をかしげてから、虎蔵を見やっ

た。
「お主がやとうた牢人者か？」
「伊吹野城には、あらたに召しかかえた猛者が、百騎を下らず！」
虎蔵は、云いはなった。
云いはなちつつも、心中では、
――何者を、七位の大乗がつれて来たのか？
と、疑惑を起していた。
「虚言には、乗らぬが……、要心はいたそう」
勘兵衛は、床几から立つと、呼子笛を吹いた。
後方の密林中から、屈強の若者たちが、どやどやと姿をあらわして、勘兵衛の前に横列をつくった。
勘兵衛の手足となって、工事をやりとげた面々であった。
「伊吹野城からの地下道を、手強（ごわ）い太刀使いがやって来る、という急報が来た。猶予はならぬことに相成った。そやつを片づけて、お主らがまず尖兵となって、城内へ攻め込む。もし、まだ、城内に、田丸豪太夫が、百騎二百騎の武者をやしなって居るのであれば、お主らは、全滅の悲運を覚悟することに相成ろう。よいな？」
勘兵衛は、申し渡した。
勘兵衛としては、すでに、抜け穴が、田丸勢に知られてしまった、と考えざるを得なかったのである。
「ま、待てっ！」
虎蔵が、叫んだ。
「みすみす、全滅の憂目に遭うと知りつつ、なぜ、これらの若者たちを、行かせるのだ？」
虎蔵は、勘兵衛をなじった。
虎蔵としては、わずか二十騎でも、城内におどり込まれたならば、万事休すのだ。
城内には、雑兵がわずかしかのこってはいないのである。
勘兵衛は、虎蔵を見下し、
「お主が、もし、拙者の立場にあったならば、五百あるいは千の兵を率いて、地下道を駆ける、というのか」
と、云った。
虎蔵は、ぐっと、返答につまった。
虎蔵が勘兵衛であったならば、やはり、この手飼いの若武者たちに、乗るかそるかの冒険をさせるに相違なかった。
狭い地下道なのである。多勢をもって攻め入ることは、むだであった。
寡勢で、攻め入って、城内をかきまわしておいて、城門をひらき、味方の主勢をみちびき入れるのが、戦略というものであろう。
「では、勝手にするがよかろう」
虎蔵は、あきらめた。
その様子を見下していた勘兵衛が、にやりとした。
「読めたぞ」
「なに？」
「伊吹野城には、兵は一人もいないのであろう。どうだ？」
「……」
「かくしてもはじまるまい。もしかすれば、もはや、田丸

豪太夫も、城から去って居るのではないか？」
「……」
「おい、どうだ？　図星であろう」
「いにも、その通りだ。伊吹野城は、空城に相成って居るのだ。兵は一人も居らぬ。……但し」
虎蔵は、肩をひとゆすりした。
「生命知らずの牢人どもの巣窟に相成って居ると、知ってもらおう」
こんどは、勘兵衛が、黙って、虎蔵を睨んでいる番だった。
「京畿にあぶれた数名の牢人が、東へ向って、歩き出しているうちに、一人また一人と、連れになり、この伊吹野に到着した時には、およそ百名をかぞえて居った。軍勢にあらず、いうならば、餓狼の群――それが、伊吹野城を乗っ取った。地下倉に、兵糧と武器があると知った。……となると、奈良城勢も、容易に攻め入ることは、かなわぬ。はっはっは……」
「信じられんの。が、まあ、要心いたそう。お主は、むこうの小屋で、ゆっくり休養せい」
勘兵衛は、虎蔵をそこへすてておいて、空地を横切って、密林の中へ入って行った。
巨大な岩が、一本の老杉を抱くようにして、どっしりとわだかまっていた。
その老杉の蔭が、岩に大きく口をあけていた。
地下道は、そこが出入口であった。

勘兵衛は、岩の前に立っている二人の若者に、
「何名、入って行った？」
と、問うた。
「十名、入り申した」

――そろそろ、地上が近いな。
夜八郎は、しのびやかな風に頬をなでられて、そう感じた。
雑兵たちは、城内へ還し、大乗と二人きりであった。
地下道は、すこしずつ、広くなっていた。
まっすぐに進んで来たのが、急角度で曲ることになり、そこで、夜八郎は、足を停めると、ちょっと、思案した。
「どうされる？」
数歩のあとを従いて来ていた大乗が、急いで寄って来て、ささやいた。
「敵が、むこうに待ちかまえて居る気配でござるな」
「さほどの頭数ではなさそうだ」
大乗は、地べたへ身を伏せると、耳を土につけた。
「どうだ？」
夜八郎が、たずねた。
大乗は、起き上ると、
「およそ、十名あまりかと存ずる」
と、告げた。
「よし！　おれが、一気に、斬る。大乗、援護せい」
「お一人で、大丈夫でござるか？」

「闇に利く目を持っているはずだぞ。お主の手裏剣が、あやまって、おれの背中を刺さぬかぎり、一人のこらず、片づけてみせる」
夜八郎は、餓狼を斬った剣を、すらりと抜いた。
――この勇気！
大乗は、肚裡で、うなった。
――七位の大乗、終生他人の下には就かぬ、と心に誓って居ったが……、如何せん、この高貴の牢人衆の魅力には勝てぬわい。
「では、よいな？」
「かしこまった」
次の瞬間――。
夜八郎は、疾風を起して、その曲り角から、奔り出た。
そこは、おどろくほどの広さに、掘りひろげられて居り、採光にも充分の考慮が、払われていた。
その明るさは、しかし、この場合、奈良城側にとって、不利であった。
夜八郎は、闇に馴れた目をもって躍り出て来たのである。奈良城側は、陽の眩しい地上から降りて来たので、この地下はいっそ暗いものであった。
「来た！」
「包め」
十人の若者は、すでに、抜刀して居り、一斉に、半円の陣形をとった。
夜八郎の疾駆は、まさしく、猛狗に似ていた。
来た、と見て、太刀を構えた瞬間には、もう、その若者は、目くらむような一閃の白い光と、凄じい衝撃をくらって、のけぞっていた。
同時に――。
曲り角の闇の中から、手裏剣が、つづけさまに、放たれた。
斬る。
跳ぶ。
斬る。
躍る。
夜八郎の闘いぶりは、魔神に似た凄じさであった。
ほとんど、一颯の太刀で、一人を斬った。
夜八郎の翻転が止んだ時、山城の若者たち九人の生命が、喪われていた。そのうち四人は、手裏剣を、のどや胸に受けていた。
夜八郎は、生きのこった一人を、じっと、見据えた。
岩壁に、背中をすりつけて、太刀を構えた若者は、絶体絶命の一瞬に追いつめられて、ふいごのように胸を喘がせていた。
「山城のことを、包まずに、語れば、斬らぬ」
夜八郎は、云った。
「……」
若者の顔面に、ほっとした色が、うかんだ。
「山城に、奈良城義胤は、健在か？」
若者は、かぶりを振った。

「患っているのか？」
「乱心されて居る」
「主君に代って、支配するのは、誰だ？」
「おん曹司――義太郎殿」
「奈良城義太郎は、伊吹野城を奪われた時、出奔して、行方知れず、ときいて居るぞ」
「還って参られた」
「兵の数は？」
「……」
「云え！」
「……」
「云わぬと、斬る！」
「三百――」
「まことだな？」
「相違ない」
「降り道をひらいた一人だな、お主は？」
「さ、さよう――」
「降りるはやすく、登るは難しい、と判断し得るが……、難所は、幾箇処だ？」
「無数だ」
「幾箇処あるか、ときいて居る。難所である理由も、だ」
若者は、こたえる代りに、気力がつきたとみえて、太刀を下げると、ずるずると、くずれ落ちた。
大乗が、かたわらに寄って、懐中にしのばせていた絵図面をひろげた。
「さ――ひとつ、降り道を、示してもらおう」
若者は、ふるえる指さきで、説明しようとした。
とたん――。
唸りを発して、一矢が飛来して、若者の頸根を刺した。
第二矢もおそって来たが、これは、大乗が、手刀で打ち落した。
「油断した！」
夜八郎は、壁ぎわへしりぞいた。
矢は、それきり、飛来しては来なかった。
夜八郎と大乗は、岩壁へ、身を寄せたなり、かなり長い時間を動かなかった。
不気味な静寂が、つづく……。
大乗が、ついに、しびれをきらした。
「どうなされる？　進まれるか、それとも、退かれるか？」
「退却はせぬ」
夜八郎は、こたえた。
「しかし、進めば、矢が襲って参る」
「そうとは、かぎるまい」
「と申されると？」
「敵が多勢ならば、矢は、つぎつぎと、飛来したろう。第二矢で止めたのは、寡勢を意味して居る」
「成程――」
「ただ、こっちは、要心しているだけだ。……こっちが、いら立つならば、同時に、むこうも、いら立っていることだ。もうすこし、待とう」

「かしこまった」
夜八郎の洞察力は、鋭かった。
それから……ものの百もかぞえたろうか。
頭上から、パラパラと、土が落ちて来た。
瞬間――。
大乗の右手から、そのくらがりめがけて、手裏剣が投じられた。
巨きな蝙蝠のように、弓と矢を持った黒装束の男が、落下して来た。
夜八郎は、男が地面に横たわる前に、奔って、石段下に達した。
と――。
そこから、躍って来た二名の敵を、ほとんど、一閃裡に斬り仆した。
とみる間に、夜八郎は、石段を駆けのぼって行った。
巌をうがってつくられた洞窟が、そこにあり、夜八郎は、いったん、そこで立ちどまったが、襲撃の気配はない、とさとるや、すばやく、地上へ、すべり出た。
そのせつな――。
ぶん、と宙を唸って、一本の矢が来た。
これを頭上にかわした夜八郎は、
「問答を求めるぞ！」
と、大声で、云いはなった。
木立の中に、数個の人影がみとめられたが、動かなかった。
「隊長は、どこだ？」
夜八郎は、二三歩、進み出て問うた。
次の矢をつがえた者が、樹蔭から正面に姿を現し、
「なんの問答だ？」
と、叫びかえした。
「お主らでは、対手にならぬ。隊長の許へ案内せい」
その返答は、弦を鳴らして、矢をきって放って来ることだった。
夜八郎は、目にもとまらぬ迅業で、その矢を、ま二つに両断した。
「むだにさからうと、ことごとく、斬るぞ！」
夜八郎の面前へ、横川勘兵衛が立ったのは、それから十もかぞえぬうちであった。
夜八郎は、一瞥して、
――これは、ひとかどの侍大将だな。
と、直感した。
勘兵衛は、夜八郎を、睨み据えて、
「剣の豪なる者に対して、敬意を表するのは、われら戦国の武士の作法と、心得る。但し、談合如何によっては、われら奈良城の兵全員をくり出しても、貴殿を討ちとってみせる」
と、云った。
まず、先手を打ったのである。
夜八郎は、微笑した。
「それがしは、もとより、兵法者でも、また、戦場武者で

もない。闘争によって、身を立てては居らぬ。したがって、身を守ることはするが、好んで、攻撃に出るものではない」

「よろしかろう。で、問答とは？」

「水が欲しい」

夜八郎は、ずばりと云った。

「水？」

「左様、水が欲しい。竜神湖の水をもらいたい」

「……」

「それがしは、泰国清平が公卿館に身を寄せる牢人者。多門夜八郎という、都落ちの漂泊の徒にすぎぬ。天下がどう動こうと、一城一国が誰人に奪われようと、一向にかかわり知らず、おのが身ひとつを、その日その日生きのびさせれば、それでよい、と考えているすね者と、思って頂こう。したがって、この伊吹野の支配者が、田丸豪太夫であろうと、奈良城義胤であろうと、どうでもよい。……しかし、当地でしばらくすごすうちに、幾千の農夫が、一滴の水もない野で飢えているさまを、そのままには、看過できなくなった。申すまでもないことだが、人間は食わねばならぬ。その米をつくる農夫が、さげすまれ、奴隷のごとく、扱われていることに矛盾があるが、それはさて措き、米をつくろうとしている農夫に、水を呉れるのを拒否することが、伊吹野の領主たりし奈良城義胤のなすべきことかどうか、考えれば、自明の理であろう。……領主の座を奪いあうのは、武士の面目をかけることであろうが、農夫を、その戦いの犠牲にすることは、断じて許されぬ。そうではあるまいか」

夜八郎の口調は、きわめて淡々としていた。

黙って、きいていた勘兵衛は、夜八郎が言葉を切るのを待って、

「貴殿の申し条は、重々尤もと心得る。しかしながら、城を奪われ、兵の大半を滅ぼされて、山上へ追い上げられた者の、復讐の一念が、どれだけ熾烈なものであるか、これは、第三者の傍観によっては、はかり難い。主取り随身を知らぬ貴殿の冷やかな目には、伊吹野を涸らせることは、狂気の沙汰としか映らぬとしても、これは、また、やむなき措置である」

「では、奈良城方は、伊吹野の農夫一人のこらず、飢え死んでもよい、といわれるのか？」

「伊吹野城が、奈良城家にかえらぬ限りは、野に在る者を救うことはできぬ。城が再び奈良城家のものにもどれば、竜神湖の水は、のこらず、農夫らに与えられよう」

「奈良城家があっての、農夫だ、といわれるのか？」

「左様、とこたえれば、人間の尊敬をけがすもの、と嘲罵があびせられよう。貴殿は、知るまい。田丸豪太夫が、攻め入って来た五年前、伊吹野の農夫どもが、いかなる態度をもって、この攻防に処したか。数十年にわたる奈良城義胤の仁慈の政治を享けながら、田丸豪太夫が、暴風雨のごとく攻め入って来るや、ただ、おそれおののいて、家の中にかくれひそんでいたばかりであった。もし、領主の高恩

を感じていたならば、たとえ、敵わぬまでも、鋤鍬をとって、城方へ味方していたであろう。……都落ちの貴殿などには、農夫というものが、いかに、小ずるく、利己主義で、恩義知らずか、知るところではないのだ。……五年前、もし、伊吹野の農夫が、のこらず決起して、城方へ味方していたならば、田丸豪太夫をして、ムザとは城へ攻め込ませはしなかったはずなのだ。当時、農夫どもの冷酷非情ぶりを、貴殿が目撃していたならば、よもや、その窮状を、救おうとはせぬであろう。今日、かれらが飢え死のうとして居るのは、いわば、自業自得、むくいと申すほかはない」

勘兵衛は、云いたてた。

夜八郎は、しかし、その言葉にたじろがなかった。

「農夫が、おのれを守ろうとして、政権の争奪に目をつむるのは、当然のことではあるまいか。武器を持たず、米をつくるすべしか知らぬ農夫が、ひとたび、戦争が起れば、さざえのごとく、かたく殻をとじて、かくれひそむことを、責めることは、断じて、できぬ。鋤鍬を武器としてとれ、とのぞむ方が無理ではあるまいか。武士と農夫は、同じ人間とはいえ、生きている目的が全くちがって居ることに、思いをいたせば、その利己主義をそしることは、断じて、できぬはず――」

「その言葉は、農夫どもの冷酷非情を目撃しなかった者の吐くもの。数十年恩顧を蒙った農夫どもが、領主が滅ぶさまを、黙って傍観した利己主義は、断乎として許されぬ。……もし、農夫どもが、水を欲するならば、天に祈って雨乞いする前に、伊吹野城の田丸豪太夫が、滅ぶことを祈るがよかろう」

「その必要はない。田丸豪太夫は、すでに、滅亡した」

「なに?!」

勘兵衛は、大きく目をひきむいた。

「それは、まことか？」

「相違ない」

夜八郎は、こたえた。

横川勘兵衛としては、天堂寺虎蔵を眺めているうちに、そんな予感も起っていたのである。

しかし――。

田丸豪太夫ともあろう猛獣にも似た武将が、このようにはやばやと、業力が尽きるとは、どうしても、想像しがたかった。

勘兵衛としては、兵の過半を失っても、田丸豪太夫自身は、なお、焼け城に、蟠踞しているものと思っていた。

夜八郎から、滅亡した、ときかされても、すぐには、信じ難かった。

「田丸豪太夫が、もはや、この世にないとは！」

勘兵衛は、うめくように、云った。

「信じられぬのであれば、それがしが、城内へ案内いたす」

夜八郎は、云った。

勘兵衛は、そう云われて、はじめて、夜八郎を冷静に観察する余裕をもった。

ただの牢人者ではなかった。

風貌は、さわやか、という形容がふさわしい。この秀れた眉目は、下層の世界からは生れぬものである。由緒ある家系が、永い時代をかけて、つくったものといえる。

態度には、陰険な翳などみじんもない。颯爽としているのである。ただ一人で、立ちながら、おそれを知らぬ明るさをはなっているのは、よほどの勇気を示すものである。もとより、その剣技の冴えば、充分に見とどけられたことである。

勘兵衛は、問うた。

「貴殿は、ただの牢人衆とは思われぬが、もしかすれば、幕府から遣わされた御仁か？」

「いや、生れながらの牢人者」

夜八郎は、こたえた。

「かくされずともよい」

「べつに、かくしては居らぬ。それがしが何者であれ、それは、当面の談合に、なんのかかわるところもない。……それがし個人の利益を欲して、罷り出たのではない。そのことを、承知されたい」

「……」

勘兵衛は、黙って、まばたきもせず、夜八郎を見つめていたが、やがて、大きくうなずいた。

「貴殿を信じることにいたそう」

「城内へ、案内いたす」

「案内ねがおう」

勘兵衛は、ふりかえって、若者たちに、待っているように命じた。

すると、若者たちは、口々に、一人で入るのは危険である、ととどめた。

勘兵衛は、笑って、

「武士が、ひとたび、対手を信ずる、と云ったならば、敵城へ単身乗り込むことを避けるわけには参らぬ。もし、わしが、二刻経っても、もどって来なかったならば、その時は、城内には、なお、田丸豪太夫が生きているものと思うがよい」

と、云いのこした。

生死一如

一刻あまりが、過ぎた。

密林の中で、待つ奈良城衆は、しだいに、いら立ちはじめた。

横川勘兵衛が、単身で、得体の知れぬ牢人者に案内させて、伊吹野城へおもむいて行ったのは、あまりにも、無謀な振舞いではなかったろうか。

若者たちの脳裡には、ひとしく、その不安が生れていた。

「おい。われわれは、ここに、待っているのは、おろかではないのか」

一人が、不意に、声をあげた。

「そうだ。もう、じっとはして居れん！」

「乗り込むか」

「まず、山城から、味方を百騎ばかり呼び寄せて、城の大手から、乗り込もうではないか」

「よかろう」

二十人あまりの若者たちは、一斉に、動いた。

その時——。

岩窟から、勘兵衛の姿が、現れた。

若者たちは、息をつめて、勘兵衛を、見つめた。

勘兵衛の表情は、おもむく時とすこしも変ってはいなかった。

「お主らは、ここを守って居れ」

そう申し渡しておいて、山城へ向って、歩き出した。

「隊長殿、田丸豪太夫の生死は？」

一人が、問うた。

勘兵衛は、向きなおると、

「多門夜八郎というあの牢人の言葉は、信じてよい」

と、こたえた。

「では、田丸豪太夫は、もはや、この世の者ではないのでござるな？」

「生死のほどは、まだわからぬ。ただ、城には、もはや、とどまって居らぬことは、たしかめて来た。城内には、雑兵わずかしか留守居して居らぬ。しかし、お主らだけで、攻め入ってはならぬ。これは、厳重に、申し渡しておく」

若者たちは、勘兵衛の態度が、どうも解せなかった。

功名を欲するならば、ただちに、自分たちをひきつれて、城を取るべきではないか。なぜそうしないのか？

勘兵衛の姿は、樹林の中へ、遠ざかって行った。

勘兵衛という人物の大きさを知っているかれらは、その命令には、絶対服従して、いささかの不満もなかったが、それにしても、いまの態度は、納得しがたかった。

降り道を、苦心してつくったのは、城を奪いかえすためであった。にもかかわらず、勘兵衛は、敵将が城から姿を消しているのをたしかめても、すこしも、うれしそうでは

なかった。
「どうも、わからんな」
一人が、口をとがらせ、となりの者も、
「どうする、というのであろう？」
と、小首をかしげた。
勘兵衛は、新しい山道を、ゆっくりと登って行く——。
敵将・田丸豪太夫が、相果てた、と知りながら、勘兵衛の心は、重かった。
多門夜八郎という牢人者の魅力が、勘兵衛の心中を占めたからである。
山城の新主人である奈良城義太郎と、あまりに差がありすぎた。
多門夜八郎に比べれば、義太郎は、野卑粗暴な猪武者でしかなかった。
——あのような青年が、わがあるじであれば……。
その想いが、勘兵衛の気持を重くしているのであった。
多門夜八郎は、しかし、目下の状況に於ては、敵であった。夜八郎の要求するところは、奈良城側としては、容れることはできなかった。
奈良城一党が、即刻、大庄山を降りて、伊吹野城へ帰還することは、不可能である。義太郎はじめ主だった人々が、多門夜八郎の言葉を信用するはずがないのであった。
必ず、それは、奸策である、と議決されるに相違ないのだ。
勘兵衛には、義太郎を説得する自信はなかった。
しかし、勘兵衛は、その努力をしなければならなかった。むだと知りつつも、であった。
勘兵衛は、密林の中をくぐり抜けて、やがて、草原の一端へ出た。
まっすぐに、横切って行こうとすると、東方と西方から、同時に、馬蹄の音が起った。
たちまちに、勘兵衛めがけて、疾駆して来たのは、裸馬にまたがった山賤（やまがつ）であった。
左右から二人ずつ、勘兵衛をはさむ敵意をみなぎらせた構えをとった。
いずれも、顔半面を髯で掩い、短槍を小脇にかい込み、凄じい眼光を、勘兵衛へ刺した。
「お主、約束を破ったな！」
一人が、呶号するように、あびせて来た。
「身共が、約束を破った？　……米五俵のことか？」
「すでに、道は通じた。にもかかわらず、米五俵を、われらへ贈って参る気配はないぞ」
「道は通じたが、わが隊は、まだ伊吹野城へ、入っては居らぬ。したがって、地下倉の兵糧を、当方に収めては居らぬ」
「云うな！　伊吹野城は、すでに、焼きはらわれて居るぞ。野へ降りたわれらの一人が、それを見とどけて来た。……地下倉に、兵糧がたくわえてある、などと、ようも、われらを騙したな！」
「騙しはせぬ。伊吹野城の地下には、兵三千が三年籠るだ

けの兵糧がたくわえてある。まちがいはない」
「この期（ご）に及んで、まだ、たぶらかすかっ！」
一人が、いきなり短槍を、突き出した。
おそろしい敵であった。
考え様によっては、この山賤の一団は、千をかぞえる軍勢にもまさる強敵であろう。
勘兵衛の想像するところでは、百に満たぬ一団であろうが、まさしく一騎当千という形容があてはまる面々である。
いかなる神を信仰しているのか、もしくは、下界には見当らぬ偶像でもあがめているのか——その狂信によって、一個の力を常人の十倍にもして、それを異常な団結力としている一団であった。
この草原を聖域となし、守護するためには、いかなる狂暴な手段もあえて辞せぬ徒党である。
熱狂的な信仰心というものが、人間を、どのように凄じい闘争の権化となすか、いまさら、云うを俟たぬ。
この草原には、一族以外の者を一人も入れぬ掟を設けた山賤団が、奈良城勢の道つくりを黙許したのは、伊吹野城奪還のあかつき、武器と兵糧を多量に贈与するという条件をつけられたためであった。下界と絶縁してくらしている山賤団にとって、その条件は、非常な魅力であったのである。
それだけに、期待は大きく、一日千秋の思いで、首をながくしていたに相違ない。
ところが——。
伊吹野城は、すでに、惨たる廃墟と化している、という報告がもたらされて、山賤団は、期待が大きかっただけに、かえって、
「だまされた？」
と、激怒も凄じかったのである。
勘兵衛としては、絶体絶命の立場に置かれたわけであった。
突き出された短槍のけら首を、むずとつかんだ勘兵衛は、
「待て！　談合をのぞむぞ——」
と、叫んだ。
「なんの談合か！　かたり者め！」
さらに一方から、短槍が、電光の迅さで、襲って来た。やむなく、勘兵衛は、身を沈めて、それを頭上にかわしざまに、馬脚を、抜き討ちに、払った。
馬が倒れ、乗り手が、ほうり出されるや、他の三人が、
「おのれが！」
「くそっ！」
と、雄叫びして、馬上から跳んだ。
「待て！　討ちあいは、好まぬ。……首領に会おう、首領に——」
勘兵衛は、なんとかして、山賤団との闘争を、避けたかった。
しかし、対手がたは、勘兵衛をかたり者ときめてしまっていて、談合の余裕などあるべくもなかった。
四人は、前後左右から、じりじりと、穂先をきらめかせ

て、迫って来た。
　――やむなし？
　勘兵衛は、覚悟をきめた。
「やあっ！」
　正面の敵が、鍾馗（しょうき）に似た形相に、闘志をみなぎらせて、びゅっと短槍を突き込んで来た。
　勘兵衛は、これを柄なかばから、両断するや、くるっと向きなおりざま、背後の敵めがけて、跳躍した。
　戦場に於ける死闘を、いくたびとなく重ねている勘兵衛は、いわば、討ちあいのコツというものを心得ていた。
　正面の敵と太刀打ちした次の瞬間には、右か左かの敵へむかって、斬りつけて行く――というのは、本能が生んだ定法である。敵がたも、当然、そう動くものと、考えている。
　勘兵衛の豊富な経験は、定法をやぶるところに、勝機があることを、教えていた。
　勘兵衛は、背後の敵へ向って、跳躍した。
　背後に在る者には、まず正面の味方に初撃の手柄を与える気持がある。それが隙となっているのであった。
　勘兵衛は、ぞんぶんに、その敵を、脳天から斬り下げた。
　そして、血けむりあげて倒れる敵の上をとび越えて、余裕のある構えをとった。
「やりやがったな！」
　短槍を両断された正面の敵が、一尺あまりの無反りの野太刀を抜いて、猛然と、襲って来た。
「犬死ぞっ！」
　勘兵衛は、一喝とともに、頸根から肋まで、手ごたえ充分に斬った。
　その時。――。
　草原を、こちらへめがけて、鳥影がかすめる速度で、疾駆して来た一騎があった。
　すると。
　残りの二人が、ぱっと、一間ばかり、とび退った。
　勘兵衛は、眉宇をひそめて、近づく者を見た。
　女であった。
　しかも、若い。
　長い黒髪を、山の涼風になびかせて、たちまち、そこへ至ると、勢いあまって、馬を棹立たせたが、そのとたんに、裾がめくれて、太股まであらわになった。
　弓と矢を、背負うていたが、太刀は帯びていなかった。
　小麦色の貌（かお）に、眸子（ひとみ）の大きいのと、唇のあかいのが、あざやかであった。
「おのれは、奈良城勢の侍大将か？」
　男子の語気をぬすんだ、威厳をふくませた声音で、問うた。
「横川勘兵衛。この草原に、道を通じた者――」
　勘兵衛は、こたえた。
「廃墟と相成った伊吹野城から、兵糧と武器をはこんで来て、われらに呉れる、とだました張本人だな」
「だましはせぬ。約束の実行が、おくれたまでのことだ」

「黙れっ！　焼け城に、兵糧・武器がのこって居ろうか！」
　まだ、二十歳にも満たぬであろう。口もとのあたりには、少女の稚さをのこしている。
　しかし、その態度は、あきらかに、山賤団のかしらに立つものであることを示していた。
「伊吹野城の地上は焼けても、地下まで火はとどいて居らぬ。地下倉には、五年前の退去の際にかくした兵糧と武器が、そのまま、のこって居る。それを、今日、拙者自身の目で、たしかめて来た。神明に誓う」
　勘兵衛は、こたえた。
　山賤娘は、その言葉をすぐには信ずべくもなかったが、勘兵衛の堂々たる応対ぶりに、直感を得たか、
「あと幾日を待てばよいのだ？」
「十日」
「おそい！」
　娘は、かぶりを振った。
「そなた、首領か？」
「頭主は、父じゃ。されど、父は、三日前に、天に還った」
　天に還る――。この徒党の信仰する宗門では、逝くのは、天に還る、ということなのであろう。
　異邦から伝わって来た宗門と推察される。
「父御（てご）がみまかったのであれば、当然、そなたが、首領の座に就くのではないのか」
「女子は、頭主にはなれぬ。……それよりも、期限は、五日。五日が一日ものびることは、許さぬ」
「承知した」
　やむなく、勘兵衛は、うなずいた。
　山賤娘は、生き残った者たちへ、仆れた味方を担いで、ひきあげるように、命じた。
「あいや――」
　勘兵衛は、馬首をめぐらした娘を、呼びとめた。
「なんじゃ？」
「そなたの名は？」
「天香」
　娘は、こたえた。
「信仰する神とは？」
「神は神じゃ。この世に、神がふたつとあろうか」
「成程――。だが、われわれの信ずる神と、同じ神かどうかだな」
「おのれらの信ずる神は、神ではない。邪鬼じゃ」
　娘は、云いのこすや、馬脚をあおって、みるみるうちに、草原の彼方へ小さくなって行った。
　勘兵衛は、山城へ向って、歩き出した。
　――五日、か。
　この短い期限は、苦痛であった。
　はたして、五日のうちに、兵糧と武器を、あの地下倉から、はこんで来れるであろうか。
　多門夜八郎は、竜神湖の水門をひらくのと同時に、こちらは地下倉の扉をひらこう、という条件を申し出たのである。

勘兵衛は、夜八郎とたたかいたくはなかった。

山城の広場では――。

義太郎が、あらたに、旗本に指名した若ざむらい三十騎を、ふんどし一本にして、九尺柄の槍を構えさせ、突撃の修練をさせていた。

義太郎自身も、半裸になり、二間柄の長槍をひっさげていた。

突く的は、松の立木であった。

うわあっ！

喚声をあげて、十間を駆けざまに、突くのであったが、生木を突くのは容易のわざではなく、皮を殺（そ）いでよろめいたり、手がしびれて、唸ったり、突くには突いたが、引き抜けずに、狼狽したり――あまり、気勢のあがらぬ光景を呈していた。

義太郎は、そのために、ひどく、不機嫌になっていた。

若ざむらいたちは、朝からぶっ通しの訓練で、疲労しはてていたが、義太郎は、止めさせようとはしなかった。

「もう一度！」

義太郎は、呶鳴った。

二三人が、うらみ顔を向けた。

「こらっ！ 貴様ら、これしきの修練に、精根がつきるのか！ それで武士といえるか！ 庄野四郎五郎の懐柔策に乗せられて、どやつもこやつも、女子（おなご）のように、からだがなま白く、ふやけてしまって居るのだ。きたえなおされるのが、それほど、つらいか。おいっ！」

義太郎に、穂先を胸もとへ突きつけられた一人は、蒼ざめながら、

「い、いえ！ 倒れるまで、やりまする」

と、こたえた。

「そうだ！ 血反吐（へど）を流すまで、修練してこそ、この戦乱の世を生き抜く武士になれるのだ。……もう一度、突けっ！」

三十騎は、再び横列の陣をとるや、義太郎の下知をあびて、うわあっ、と立木へ向かって、殺到して行った。

しかし、その突きぶりは、前よりも、もっとぶざまであった。

「おのれら――なんたるざまかっ！」

義太郎は、ほとんど逆上の形相で、呶号するや、もどって来た若ざむらいの一人を、石突きで突き倒しておいて、

「見ておれ！ 槍というものの使いかたを教えてくれる」

と、ピタッと長槍を構えるや、一瞬、立木の一本を睨みすえたが、

「おーっ！」

と、満身からの気合をほとばしらせて、地を蹴った。

疾風を起す、とはその疾駆のことであったろう。

黒い風と化して、地上を掠めて行った義太郎は、

「えいっ！」

と、長槍の柄まで通れと、立木を突いた。

穂先は、ぞんぶんに生木をつらぬいた。

瞬間――。

義太郎は、苦もなく、引き抜いて、隣りの立木を、ぐさと突き刺した。

その時、広場の一隅には、蜂尾兵庫助が姿を現して、この光景を、じっと、見まもっていた。

――強い！ たしかに、強い。だが……。

兵庫助は、心中で、かぶりを振った。

――このあまりの強さは、大将たる者の強さではない。

兵庫助は、つぶやいた。

――大将の強さは、苦難に遭って、堪えることなのだ。目に見えた強さではない。家来どもが、危機を迎えて動揺した時、一人毅然として、いささかも顔色を変えぬ強さこそ、大将にそなわって居るべきもの。槍で突いたり、太刀をふるったりする強さは、家来にまかせておけばよい。

兵庫助は、庄野四郎五郎を義太郎が討った時から、奈良城勢の運命がきまったような不吉な予感をおぼえていたのである。

庄野四郎五郎を殺すべきではなかったのだ。たしかに、この五年の間に、庄野四郎五郎がつかんだ権勢は大きかった。しかし、それは、奸策を弄して、つかんだものではなかったのだ。庄野自身の功績の大きさに正比例したものであった。

庄野四郎五郎がいたからこそ、山城に拠る将士と兵は、生きのびられた、といっても過言ではない。

義太郎が、もしまことの大将の器（うつわ）ならば、庄野四郎五郎の才覚を利用する度量があるべきであったのだ。

矢倉新兵衛も藤掛左馬之丞も、そのほか主だった家臣らは、いまは、沈黙をまもっているとはいえ、義太郎のがむしゃらな暴挙を、悪（にく）んでいることは、兵庫助には、手にとるように、判るのである。

さらに――。

義太郎が、このような凄じい訓練をほどこせば、若ざむらいたちも、心を離反させるに相違ないのだ。

兵庫助は、一人暗然として、義太郎の姿を見まもっている。

とは気づかずに、義太郎は、大股にひきかえして来ると、いまいましげに、

「これらの腰抜けを率いて、伊吹野城を奪還することは、不可能だぞ、兵庫助」

と、云った。

「わずかの日数をもって、強者に仕上げようとしても、無理でござろう」

兵庫助は、おだやかな口調で、云った。

「待てぬ！ この月うちにも、おれは、伊吹野城を攻め落してくれるのだ！」

義太郎は、云いすてておいて、馬卒に馬を曳かせるや、とび乗って、まっしぐらに、湖水へ向った。

遠く沖まで泳いで来るのが、義太郎の日課となっていた。

そのあいだに、横川勘兵衛が、帰城して来た。

まず、兵庫助と会った勘兵衛は、

「若と、議論をたたかわすために、もどり申した」
と、云った。
兵庫助と勘兵衛は、しばらく、じっと、顔を見合せて、沈黙をまもっていた。
言葉をもってせずとも、通じ合うものが、互いの心と心の間を流れた。
やがて兵庫助が、口をひらいた。
「お主、死ぬつもりか？」
「いや、まだ、犬死はつかまつりとうござらぬ。ただ――」
「……」
兵庫助は、勘兵衛の眉間をかげらせる暗い色をみとめた。
「事態如何によっては、拙者一個の生命をもって、奈良城一党の危機をはばみたく存ずる次第――」
「お主は、伊吹野城に、何か異変が起るのを見とどけて参ったのではないか？」
「いかにも、見とどけて参り申した」
「われわれにとって、不利な異変か？」
「田丸豪太夫は、相果てたげに、うかがわれ申した」
「ほう……それは！」
「しかし、それは、事実まちがいなし、とつきとめた次第ではござらぬ。氏素姓いやしからぬ若い牢人者が、一人、城を占拠して居り、拙者をして、城内を自由にくまなく歩かせるにまかせ申した」
「どういうのであろう？」
「それが奸策か否か――いまだ、思案の中にあり申す。あるいは、かれは、田丸豪太夫がやとった軍師かも、知れ申さぬ」
「お主――」
兵庫助は、ひとつ大きく呼吸してから、
「若に下知を仰いで、城を奪いかえす存念か？」
「左様でござる」
「お主は、若を、なんと見て居る？」
「なんと見るとは？」
「その振舞いを、疑わずに受け入れるほど、若の器量を、高く買っているか、どうかじゃ」
「……」
「包まずに、意見をきかしてくれぬか？」
「蜂尾殿は、若を、主人として仰ぐことに、危惧を抱いておられる？」
「……」
「さもあろう、と存ずる。若に心服して居る若ざむらいは、一人も居りますまい」
「と、身共も思う」
「しかし、若は、奈良城家の嫡男でござる。主人となられることに、異議をとなえることは、われらとしては、でき申さぬ。意見が分かれれば、死をえらぶか、退去するか、そのいずれかが、随身者の辿る道でござろう」
「お主の云う通りだ。云う通りではあるが……、その振舞いが、あまりにも、狂気の沙汰であれば、これを、黙過はできまい」

兵庫助が、そう云った時であった。
馬蹄の音がひびき、たちまち、庭さきへ、ふんどしひとつの逞しい裸像を、馬上に立てた義太郎が、駆け入って来た。
兵庫助と勘兵衛は、顔を見合せた。
義太郎は、しずくのぼたぼたとしたたる裸身を、どっかと上座に据えると、
「勘兵衛――、降り道は、完成したらしいな。どうだ、抜け穴から、伊吹野城へ、もぐってみたか？」
と、せっかちな口調で、たずねた。
「入って見申した」
勘兵衛は、こたえた。
「どうだ、田丸豪太夫は、焼け城の中に、兵をどれくらいやしなって居る？」
「田丸豪太夫は、城内から姿を消して居り申す」
「なに？　なんだと?!」
義太郎は、目をひきむいた。
勘兵衛は、くわしく、経過の報告をした。
まず、よく飼いならした山犬の群を、抜け穴へ送り込み、田丸勢の侍大将と称する天堂寺虎蔵という荒武者を、生捕ったこと。天堂寺虎蔵の白状したところでは、豪太夫は、何処の何者とも判らぬ一軍とたたかって、討死したこと。その事実の有無を調べに、若ざむらいたちを、送り込もうとしたところ、城内から降りて来た一人の牢人者のために、まず山犬どもが一疋のこらず退治され、次いで、若ざむらいたちも、討ちとられてしまったこと。
そこまできくと、義太郎は、双眼を、ぎらぎらときらめかせて、
「そやつ、兵法者か？」
と、叫んだ。
「いや、兵法者とは、見え申さず、どこやら、都育ちの典雅なけしきをただよわせて居り申した」
「勘兵衛、そやつと闘ったのだな？」
「いや、談合をつかまつっただけでござる」
「ばかなっ！　若ざむらいどもを討たれて、談合とは、何事か！」
「山犬と若ざむらいどもを、立ち向かわせたのは、こちらでござる。対手は、これを討ちはらったまでのことでござる」
「弁解は、きかぬ！　勘兵衛、貴様も、老いぼれたな」
「若！」
勘兵衛は、態度をあらためた。
「すでに、伊吹野城には、田丸豪太夫の姿はござらぬ。戦わずして、城へ還る秋（とき）が参ったのでござる。……拙者は、多門夜八郎と申すその牢人者を、信頼すべき人物と、心得申したゆえ、談合によって、和平裡に、わが一党が下山できれば、と存じたのでござる」
「それが、老いぼれた証拠だぞ！　田丸豪太夫が、相果てたなどと、誰が信じようか。彼奴、兵の頭数が足らぬため、小ずるい策を弄して、われらをおびき寄せて、討ちはらお

う、というこんたんに相違ないぞ。……それが、わからぬとは、なんたる腑抜けになりはてたものか。勘兵衛、おのれをなさけないと思え！」

義太郎のこの罵倒は、勘兵衛が予想していた通りであった。

義太郎が、田丸豪太夫の討死を信じようとしないことは、勘兵衛自身そのことを、半信半疑であるくらいであるから、当然のことであろうし、また、見も知らぬ牢人者一人に、部下を斬られて、闘いもしなかった勘兵衛に対して義太郎が激昂するのは、わかりきっていたのである。

しかし、勘兵衛としては、おのが立場を不利にしても、義太郎と議論をたたかわさざるを得なかった。

「若、きいて頂きたい！」

勘兵衛は、らんと双眼を据えるや、舌頭から、鋭い気合をほとばしらせた。

「ぬかしてみよ、弁解の余地があるか！」

義太郎は、肩をそびやかした。

しかし、勘兵衛が、ひとたび、決死の気色を示すと、少年の頃、しばしば、その粗暴をとりひしがれた記憶をもつ義太郎は、他の家臣に対するような威圧をもって抑えつけるわけには、いかなかった。

勘兵衛は、説きはじめた。

人間は、これと見込んだ対手には、みじんも疑わずに信頼を寄せることが、いかに肝要であるか。その信頼があるからこそ、主従、朋友の間柄が、緊密はなれるべからざるのではあるまいか。権謀術数の乱世であればこそ、武士は、武士を観る目を持たねばならぬ。

自分は、多門夜八郎を一瞥した時、この人物は信頼するに足りる、とおのれの目に確信を持った。もとより、根拠のない信頼である。しかし、おのれの目に自信なくしては、生きることの放棄を意味する。

このたびこそ、横川勘兵衛が一身に、責任を負う覚悟を据えて、見知らぬ牢人者を信頼してみたいのである。

「若――、おねがいつかまつる。この横川勘兵衛に、御一任下されませい」

勘兵衛は、ふかく頭を下げた。

しばらく、じっと、勘兵衛を見据えていた義太郎は、

「よし！　まかせてくれる。……しかし、そやつは、条件なくしては、城を明け渡しはすまい。条件を申し出たであろう」

「いかにも、申し出てござる」

「条件は、なんだ？」

勘兵衛は、頭を立てると、

「竜神湖の水を、伊吹野に落してやり、農民どもに、田植えをさせてやることでござる」

と、云った。

「なにっ！」

たちまち、義太郎は、血相を変えた。

かたわらの兵庫助もまた、はっとなった。

「勘兵衛！」

義太郎は、つっ立った。

「おのれ！　奈良城一党を裏切る存念か！」

義太郎は、城内中にひびき渡るような呶号を発した。

「おのれがっ――田丸豪太夫に、いかなる好餌をもって釣られたか、裏切り者となったとは、なんたる不義不忠かっ！　そのそっ首を刎ねてくれるぞ！　覚悟せい！」

義太郎は、佩刀をつかみとりざま、抜きはなった。

勘兵衛は、誠心をもって説いたことが、全く徒労であったことを知った。

「多門夜八郎が、伊吹野城を明け渡すに当り、竜神湖を落す条件をつけたのは、私心ではござらぬ」

勘兵衛は、むだと知りつつ、なお、説こうとした。

「ええいっ！　申すなっ！　弁明は、きかぬぞ！　勘兵衛、立てっ！」

義太郎は、切先を、勘兵衛の鼻さきへ突きつけた。

「言訳でも弁解でもござらぬ。事実そのままを申上げて居り申す」

勘兵衛は、自若として、云った。

――斬られてもよい！

勘兵衛の覚悟は、きまっていた。

「ほざくな、と申すに！」

義太郎は、太刀を、大上段にふりかぶった。

黙って眺めていた兵庫助は、義太郎が本当に、勘兵衛の首を刎ねるのではなかろうか、という恐怖をおぼえた。

「若！」

兵庫助は、さっと立って、義太郎の前をふさいだ。

「横川勘兵衛は、奈良城家にとって、唯一無比の忠臣でござるぞ。勘兵衛を失って、いったい、誰が、軍を率いるのでござろうか？」

「裏切り者に、軍をまかせられるか！」

「当山城の士卒全員が、離反いたしても、勘兵衛は、若を裏切り申さぬ！」

兵庫助は、毅然として、云った。

流石に、義太郎は、気勢をくじかれて、一歩退ると、

「竜神湖の水を、野へ落すことは、断じて許さぬ！」

と、呶号しておいて、奥へ去った。

兵庫助と勘兵衛は、しばし、黙然としていた。

やがて、兵庫助が、口をひらいた。

「明日の運命は、誰人にも、わからぬ」

と、独語した。

「蜂尾殿――」

勘兵衛は、さみしげに、微笑して、

「われらは、山を下っても、どこへ行くあてもない者でござれば、若に随うよりほかはござるまい」

と、云った。

兵庫助は、勘兵衛を視て、

「お主、その多門夜八郎とやら申す牢人者が、もし、わがあるじであれば、と想像したのではないか？」

「ご明察――。世はままならぬものでござる」

戦鬼九人

「わが手足となって働く者を、十人ばかりえらんで、至急に、伊吹野城へ、遣わされたい」

七位の大乗が、多門夜八郎のその依頼を、公卿館へもたらしたのは、山城にあって、勘兵衛と義太郎の対決があった頃である。

天満坊は、微笑して、

「いよいよ、やるかの」

と、云い、

「さて、多門夜八郎の手足となって働く者どもは——？」

と、考えはじめた。

大乗は、その様子を見まもりながら、

「もとより、それがしが、加わることはきまって居り申して」

と、云った。

天満坊は、まず、泰国太郎を呼び、次いで、柿丸、百平太を呼んだ。

「多門夜八郎が大将となって、いよいよ大庄山の奈良城勢と一戦を交え、竜神湖の水を、野へ落すことに相成った。成功の是非は、お主たちの働きにかかって居る」

天満坊は、云った。

「お主たちは、ただいまより、人間ではなく、戦う鬼——戦鬼になる。よろしいな？」

「かしこまった」

泰国太郎が、こたえた。

「したが、この四人だけでは、頭数として、不足ではありますまいか。農夫の中より、屈強の者を二三十人えらんでは？」

「いや——」

天満坊は、かぶりを振った。

「農夫は、米をつくるのが、使命じゃな。戦鬼にはなれぬ」

「しかし——」

「ほかにもう四人、戦鬼になる者どもが居るな」

天満坊は、青助、黒太、赤松、白次の無頼漢四人の名を挙げた。

泰国太郎は、眉宇をひそめた。

「あの者どもは、いざとなれば、おのが生命を、惜しんで、遁走いたすのではありますまいか？」

「ところが、意外に役に立つ、と愚僧は考える」

天満坊は、四人を呼んだ。

庭さきへまわって来たかれらを、座敷へ上げた天満坊は、「お前らの生命を、もらいたいと思うが、どうであろうな」

と、云い出した。

青助、黒太、赤松、白次は、互いに顔を見合せた。

天満坊は、微笑しながら、

「生命は、たったひとつしかないもの。いちど、すてると、とりかえしはつかぬ。生命は惜しいもの。これは、申すまでもない。しかし、男子と生れて、そのたったひとつしかない生命を、いかに、気前よくなげ出して、世のため、人のために、つくすか——これこそ、まことの面目と申すものじゃ」

「いったい、おれたちに、何をしろ、と仰言るんで？」

青助が、目を光らせながら、たずねた。

「戦う鬼になってもらいたい」

「戦う鬼？」

「ひとつの目的にむかって、まっしぐらに突き進む鬼じゃな。突き進む行手には、人間の業では、とうていのりこえられぬものが、たちふさがる。しかし、鬼となった以上は、これを、のりこえるのだ。不可能事を可能にしてみせる。ただの人間ならば、為し得ぬであろうが、鬼ならば、やってのけられる。どうじゃな？」

「ふうん、こいつは、大変だ」

青助は、他の三人をかえりみて、

「どうだ、おめえたち、鬼になれるか？」

と、問うた。

「わからねえ」

赤松が、かぶりを振った。

「おれは、鬼になんぞ、なれそうもねえ」

白次が、つぶやいた。

黒太だけは、腕を組んで、むすっ、としていたが、

「もし、鬼になって、やりとげたら、どんな報酬が頂戴できるんですかい？」

と、きいた。

「さむらいになりたければ、さむらいにしてつかわそう。足軽十人を与えようかな。金が欲しければ、黄金百枚」

「そんな大金が、どこにあるんですかい？」

「当館に在る」

「へえ？　ほんまですかい？」

「黒太、あるんだ。おれは、ちゃんと知っているんだ」

青助が、鼻翼を、ひくひくとうごめかしながら、云った。

「むかし、京都の五摂家からよう、百疋の馬で、この館へ、はこばれて来た金銀詰めの長持が、十棹もある、と地獄耳にはさんでらあ」

「その通り！」

七位の大乗が、大声で、云った。

「実は、それがしも、その金銀が欲しさに、この伊吹野へやって来たのだ」

「よおし！　わかった。和尚様、なりますぜ、鬼に！」

黒太が、叫んだ。

赤松も白次も、黒太が叫んだからには、自分だけ、しりごみするわけにいかなかった。

「さて、きまったぞ！」

天満坊は、大きくうなずいた。

「御坊、われら八人だけで、足り申そうか」
泰国太郎は、なお、不安をのこした。
なろうことなら、農夫の中から、屈強の若者をえらび出して、党に加えたかったのである。
「兵は、多きをもって強しとせず。寡勢、能く、雲霞の敵を蹴散らすところに、男子の本懐があろう。たのむ！」
天満坊は、頭を下げた。
かくて、大庄山頂の竜神湖の水門へ向って、突進して行く戦鬼は、そろった。九人である。

多門夜八郎
泰国太郎
柿丸
百平太
七位の大乗
青助
黒太
赤松
白次

天満坊の冷静な目で眺めて、この戦鬼党は、決して、一騎当千ではなかった。夜八郎と大乗は別として、他の七人は、いずれも、平凡な男たちであった。剣を把って強いというのでもなければ、他に自慢できる特技をそなえているわけでもなかった。膂力が秀れているというのでもないし、異常な度胸の持主という次第でもなかった。
夜八郎が、はたして、これらの凡夫を率いて、鬼神の活躍ができるかどうか、疑問と云わざるを得ない。
しかし、天満坊は、信念を持っていた。
凡夫だからこそ、戦鬼になれるのだ。そこに、人間の大の尊さ、偉大さがある。秀れた人間が、秀れた働きをするのは、なんのふしぎもない、そこらあたり、どこにでもいる凡庸な人間が、ひとたび、ほぞをかためて、生命をなげ出して、不可能と思われる難事を克服するところに、真の面目があり、これこそ、たたえねばならぬ。
百年に一人、百万人に一人、という英傑の偉業のみが、世にたたえられるのは、真理ではない。
凡夫が、その力の限りをふりしぼり尽して、為しとげた仕事こそ、まことの偉業ではなかろうか。
おそらく、その仕事は、後世にまで伝えられはすまい。歴史にとどめられるような事柄ではないのだ。だからこそ、たたえられるべき仕事ではあるまいか。
天満坊は、目前にならぶ平凡な戦鬼たちを見わたして、胸の奥底に、微かな痛みをおぼえた。
美夜が杉乃江をともなって、酒肴を持って、現れると、青助たちは、その美しさに、
「へえ！」
とか、
「ほう――」
とか、歓声をあげた。
美夜は、﨟たけた顔に、優しい笑みをたたえながら、八人の戦鬼に、盃を与え、酒をついでまわりはじめた。

「こんな途方もない天女様に、酌をしてもらうとは、生命を、ほうり出さざるを得んわい」
黒太が、舌なめずりしながら、青助に、ささやいた。
「よだれをたらすな、黒太。みっともねえぞ」
青助が、小突いた。
天満坊は、美夜が酌をしおわるのを待って、
「さて――、お主たちに、申しておきたいことが、ふたつ、みつ」
と、八人を見わたした。
「うかがい申す」
泰国太郎が、代表して、こたえた。
「まず、第一に――。われらが壮挙の目的は、竜神湖の水を、この涸れはてた荒野へ、落すことにあって、奈良城勢を滅ぼすことではない。よって、湖の水門をひらくまでは、石にかじりついても、おのが生命を守って、そこへ、たどりつかねばならぬ。生命をなげすてることより、生命を守ることの方が、十倍も、いや百倍も、むつかしいことは、申すまでもない。……第二には――。この壮挙をなしとげるためには、おのれ一人の力をもって、手柄にしようという考えを、すてることじゃな。多門夜八郎の下に、お主らが、縦糸でつながるとともに、また横糸でもつながり、九人が完全なる一体となって働く――そのことが、肝要であろう。抜くべからざる危機に遭うた際には、九人が一体になることによって、能く突破し得るものじゃの。もし、すすんで、生命をすてるとすれば、その時――おのが生命をすてれば、八人が前進できると知った時であろう」
天満坊は、そう云って、微笑した。
青助ら四人の無頼者たちは、神妙に、きいている。
天満坊は、やおら、手を叩いた。
下僕二人が、かなり大きな櫃を、重そうにかかえて、入って来ると、天満坊の前に据えた。
天満坊は、蓋をひらくと、両手をさし入れて、革袋を四個、つかみ出し、青助ら四人の前に置いた。
「これが、お主らへの報酬じゃ」
青助らは、大急ぎで、袋の口をひらいてみて、歓声をあげた。
砂金であった。
さらさら、と掌へ受けてみて、なんともいえぬ快い重さに、無頼者たちは、われを忘れた。
この一袋あれば、五年は、寝てくらせるであろう。これを携げて、都へ帰って行った時の光景が、四人の脳裡に想いうかべられた。
顔見合せて、にやっとしてから、
「黒太、やろうぜ」
「うむ！　やろう！　赤松、度胸がきまったのう」
「わしの生命と同じ重さじゃわい。そうではないか、白次？」
「そ、そうじゃて。一生に一度、これぐらいの金が持ちたい、というのが、おれの夢だったぞい」
歓喜する無頼者たちを、眺めやっていた天満坊は、

「では最後に、ひとつ。お主らの働きに、伊吹野八千人の百姓の生命が、かけられていることを、申し添えて置く」
その時刻、伊吹野城においては――。
多門夜八郎は、焼け崩れた大手門の渡り櫓の上に立って、刎ね橋を、ゾロゾロと出て行く雑兵の列を見送っていた。
田丸豪太夫が館にのこしていた金と兵糧を、雑兵たちに分配して、
「どこへでも、去るがよい」
と、命じたのである。
残りたい、と願い出る者が二三人あったが、夜八郎は、首をたてには振らなかった。
伊吹野城から、田丸豪太夫が支配したものは、一切払ってしまうことにしたのである。
これは、多門夜八郎の潔癖であるとともに、横川勘兵衛との対策でもあった。
雑兵たちの姿が、森の彼方に遠ざかった時、森口数馬が、櫓へのぼって来た。
「城内は、全く無人と相成りました」
数馬は、報告した。
この小姓は、誠実な人柄であった。夜八郎の命令を奉じ、雑兵たちを指揮して、城内を整然と片づけ、いつ、奈良城勢が入って来ても、明け渡せるようにしたのである。
「ご苦労だった。厚く礼を云う」
夜八郎は、数馬へ頭を下げた。
数馬は、夜八郎を見まもって、
「おうかがいしておきたい儀が、ひとつ、ござる」
と、云った。
「なんであろう？」
「横川勘兵衛なる侍大将は、信頼のおける人物でござろうか？」
「おれは、信頼しておる」
この城を、奈良城家に返還するのを条件として、竜神湖の水を野へ流す、という約束を、夜八郎がしたことを、数馬は、知っていたが、それに疑念を抱いていたのである。
「それならば、結構でござる。……では、それがしは、これにて、退去つかまつる」
数馬は、頭を下げた。
「何処へ行く？」
夜八郎は、問うた。
「それは、まだ、きめて居りません」
「野へ出てみて、もし、気が向けば、公卿館へ寄るがよかろう。天満坊という人物が、お主を迎えてくれよう」
「天満坊と申すのは、われらがあるじをだまして、当城を、焼きはらった敵でござろう。それがしは、田丸豪太夫の小姓でござる、天満坊に、頭を下げることは、できません」
数馬は、きっぱりとこたえた。
――どこの城にも、このような誠実な男が、必ず一人や二人、いるものだ。
夜八郎は、暗い気持で、櫓を降りて行く数馬を眺めた。

やがて、刎ね橋を、馬に乗って出て行く数馬の姿があらわれた。替え馬を一疋ひきつれていた。
――幸せが、あの若者におとずれるように。
夜八郎は、振りかえって会釈する数馬に、応えながら、祈ってやった。
夜八郎は、城主の館にもどると、広間に入って、ごろりと横になり、手枕をして、目蓋をとじた。
全くの無人となった焼け城の中で、ただ一人、悠々と寐そべっているところに、一種の快感をおぼえた。
……いつの間にか、うとうと、とまどろんでいた。
どれくらいの時刻が、移ったか。
ふと、夜八郎は人の気配に、意識をよみがえらせた。
次の間に、忍びやかに歩く者がある。
夜八郎は、動かず、目蓋を閉じたままでいた。
やがて、仕切の杉戸が、そろそろと開かれた。
夜八郎は、依然として、そのままでいる。
戸を開いた者は、じっと、夜八郎を見下していた。
と――。
不意に、夜八郎は、起き上った。
むこうは、あわてて、身をしりぞけた。
「女、どうした？」
夜八郎は、声をかけた。
観念したらしく、怯ず怯ずと入って来たのは、若い女であった。
「そなた、この館の召使いか？　どうして、残って居る？」
夜八郎は、たずねた。
「ちがいます。城の者ではありません」
若い女は、かぶりを振った。
「では、旅の者か？」
「いえ――。山むこうの田無宿の旅籠のむすめでございます。いちと申します」
「どうして、この城へ、忍び込んだ？」
「若様を――奈良城義太郎様を、さがして――、もしや、この城におもどりかと……」
いちは、田丸豪太夫が討死した、という噂をきいたので、思いきって来てみたのであった。
いちは、五年ぶりで還って来た義太郎に、操を与えていた。
義太郎を慕っていたためではなかった。なかば暴力に屈してしまったかたちであったが、操を与えるかわりに、いちは、義太郎に、条件を出していた。
大庄山の竜神湖の水を、伊吹野へ落して、百姓衆に、田植えをさせること――それであった。
義太郎は、約束して、山城へ去ったのである。
田丸豪太夫が滅んだいま、当然、義太郎が、伊吹野城へもどって来る、と思い、いちは、気丈夫にも、一人で、やって来たのであった。
いちは、義太郎のかわりに、見知らぬ牢人者を、焼け城内に見出したのである。
いちは、その前に、正座した。
「旅籠のむすめか」

夜八郎は、いちを見まもっていったが、
「奈良城義太郎を、慕うているのだな」
と、微笑した。
「わかりません」
いちは、俯向いて、こたえた。
「わからぬ？　慕うているのではないか？」
「若様は、奈良城家のおん曹司でございます。わたしは、いやしい旅籠のむすめでございます。いくら、慕うても、どうにもなりませぬ」
「待て――」
夜八郎は、いちに据えた眼眸を、冷たく光らせた。
「そなたは、奈良城義太郎が、いかなる男か、どうやら看破っているようだな？」
「……」
「かくすな。恋に心をもやしているのならば、こちらの問いに、そのように平静な返答はできぬはずだぞ」
「……」
「たぶん、そなたは、奈良城義太郎に、操を奪われて居るのであろうが、心から慕うているのではあるまい」
「……」
「かくすな！」
鋭く問いつめられて、いちは、きっとなった。
「貴方様は、どなたなのです？」
「おれか。おれは、ただの牢人者だ。どこかの馬の骨と思ってもらってよい」
「どうして、ここへ、たった一人で、とどまって居られます？」
「奈良城勢に、当城をひき渡すためだ」
「但し、条件をつけてある。大庄山の頂上にある湖から、水を落す、という条件をな」
「え――？」
「……」
いちは、自分が操を与える時と同じ条件を、この牢人者が要求していることに、おどろいた。
「どうだな、奈良城義太郎は、おれのつけた条件をのむと思うか？　そなたの考えを、きかせてもらおうか」
「若様は、ここに、貴方様がたったお一人でとどまっておいでのことを、ご存じでございましょうか？」
「そうきいたであろうな」
「それならば……、若様は、兵を率いて、襲って参られます」
「おれの出した条件をふみにじる、と予想するのか？」
「若様は、荒々しい気象の御仁（おひと）でございます。貴方様が、この城にお一人でとどまっていられる、ときかれたら、すぐさま、攻めて参られるに相違ありません。敵と思いきめたなら、野獣のようにたけり狂って、襲う荒武者でございます」
「そうか。そういう男か」
夜八郎は、腕を組んだ。
泰国太郎を先頭に、八人の戦鬼が、到着したのは、それ

から四半刻ばかり後であった。
「お手前の指揮のもとに、生命をすてるように、天満坊殿より、命じられ申した」
太郎から、そう告げられて、夜八郎は、あらためて、八人の顔を、ひとつひとつ、見やった。
それから、夜八郎が、まず、声をかけたのは、
「青助――」
「へい」
「お前は、おのれに、人より秀れている点がある、というものを持って居るか？」
「さあ？」
青助は、正直に、首をひねった。
「お前は、さんざ、都で悪事を働いて来たのであろう。その間に、特技を身につけたのではないか？」
「べつに、ございません。ただ、ちょっと、闇に目が利くぐらいのもので……」
「それも、特技だ。人間は小ざかしく、小ずるく生れついて居るようだし、乱波（らっぱ）の役目はつとまるだろう」
乱波とは、敵地へ忍び入って、危険を冒して、状勢を調べて来る者のことを、指していう。
「黒太は、どうだ？」
「へ、へい。……おれは、別に取得はねえです」
黒太がこたえると、青助が、代って、
「夜八郎様。こいつは、毛虫だろうと、蛾だろうと、土だろうと、なんでも食うことができますぜ」
と、こたえた。
「そんなのは、特技にゃならねえ」
黒太は、かぶりを振った。
「いや、それも、特技のひとつだろう。役に立つ。次に、赤松だが――」
「おれは、木樵のせがれで、山のことなら、すこしは、わかりますがね。そのほかのことは、バカでさあ」
「山のことが判るとは、なによりの貴重だ。その知識を大いに役立ててもらおう。さいごに、白次だが、これまで、人にやれなかったことをやったか？」
「へえ？」
白次は、首をかたむけた。
「夜八郎様――」
青助がまた代って、こたえた。
「こいつは、のろまで、何をやらしても、満足なことはひとつもできませんが、寒中すっ裸にされて、二昼夜も、加茂の磧（かわら）にころがされていたのに、くしゃみひとつもしなかった野郎でございます」
「そうか。それは、やはり特技のひとつだな」
夜八郎は、微笑した。
百害あって一益もないような無頼者も、それぞれに、何か特質をそなえているものであった。
生命をすてる覚悟さえ据えれば、それらの特質は、充分な威力を発揮する、と考えられた。

山へ

闇の中であった。
咳ひとつしても、ものすごいこだまが、かえって来る。
柿丸と百平太は、その深い静寂の闇の中に、腰を下していた。
地下の抜け道の、ちょうど、地下倉に近い地点であった。
「しずかすぎるのう」
百平太が、つぶやいた。
「しずかなのは、きらいか？」
柿丸が、問うた。
「つまらんことが、思い出されるから、ごめんだな」
「どんなことを？」
「おふくろめが、若い男にすてられて、半狂乱になったことか、丹波の山中で、子連れの商人の女房を手ごめにしたこととか……」
「……」
「柿丸さん、あんたは、悪事というものを犯したことは、ないだろうな？」
「雑兵になって、あっちこっちの戦場を駆けまわっていただけだ」
「敵の城が陥ちた時、乗り込んだことは、ないのか？」
「ある」
「その時は、さむらいも足軽も、われ勝ちに、女を手ごめにしたり、品ものをかっさらうのじゃないのかい？」
「それは、やる。そのために、兵にやとわれている者が多い」
「あんたは、やらなかったのかい？」
「ああ、わしは、やらなかった。……しかし、やる者を、止めもしなかった」
「止めたら、あんたが殺されるだろう」
「そうだな」
「おれは、山賊になったり、野伏の仲間になったが……、足軽になるのだけは、ごめんだった」
「どうしてだ？」
「戦争ってえやつが、大きらいだからよ。大将たちは、城や土地を取ったり取られたりするから、いいだろうが、足軽なんてやつは、死んだら死に損、勝っても、城に入りきらなけりゃ、追っぱらわれる。あんなつまらねえやつは、いねえからな」
「……」
「それにくらべりゃ、山賊なんぞ、おもしろいものさ。自由きままなくらしができるからな。首領は別だが、あとは、女も物も、平等に分配するんだ。食って飲んで、寝ていられるあいだは、何日でも、そうやって、ごろごろしているわけよ」

「そんなお主が、どうして、天満坊殿の家来になったのだろう？」
「いまだに、おれ自身も、わからねえや。……和尚様は、おれに、水一滴がどんなに貴いものか、ということを教えてくれたんだが、それをきいただけで、おれの心が、くるりとひっくりかえったはずもねえんだが……」
百平太は、われながら、ふしぎだ、と思うのだ。
「やっぱり、お主は、性根は善良なのだ」
柿丸は、云った。
「自分でも、むかし、悪事をやりながら、こんなことをして、天罰があたる、といつも思っていたことは、いたんだが……」
「その天罰は、夜八郎様に、両耳を切られることだけで、済んだのだな」
「ははは……、有難いことさ。生命（いのち）冥加というやつだ。それにしても、おれのようなろくでなしが、百姓衆のために、働くことになったのだから、世の中は、面白いしくみになっているものだ」
百平太が、そこまで云った時、柿丸が、「しっ！」と制した。
「なんだい？」
「誰か、こっちへ来る」
「おっ！　たしかに――」
遠くに、微かに、赤い灯かげが、闇に滲んでいるのが、見わけられた。
「知らせよう」
百平太が、立ち上ろうとすると、
「待て！　軍勢じゃない。一人だぞ」
と、柿丸が、云った。
灯火は、しだいに、大きくなって来た。
柿丸と百平太は、息をひそめて、じっと、待ちかまえている。
やがて――。
はっきりと、ただ一人で、地下を辿って来たとわかる対手は、待ち伏せる男たちの前方三四間のところに、立ちどまった。
こちらを、すかし見ていたが、
「そこに、いるのは、多門殿の家来衆か？」
と、声をかけて来た。
「そうだ。おめえは、何者だ？」
「拙者は、横川勘兵衛と申す者。多門殿に、取り次いでもらおう」
その姓名をきいた瞬間、柿丸の双眼が、愕きで、大きくみひらかれた。十余年前、母親が臨終にあたって、十一歳の柿丸に告げた父親の名が、横川勘兵衛であったのだ。
柿丸は、しかし、歯をくいしばって、黙った。
「奈良城のさむらいか？」
百平太がたずねた。
「うむ」
「なんの用だ？」

「取り次げば、判る」
「そうかんたんには、取り次げねえ。おれたちは、ここで、地下をもぐって来やがる奈良城の奴らを、片づけるように、命令されているんだ。火薬があるぞ、火薬が！」
「拙者は、闘いに来たのではない。多門殿と交した約束を守って、参ったのだ」
「ほんとかい？」
「この御仁、手負うているぞ」
　柿丸が、ひくくうなるように、
「うむ。重傷のようにみえる」
「じゃ、とびかかっては来るめえ」
　百平太は、安心して、
「柿丸、案内してやれ」
「うむ」
　勘兵衛は、歩み寄って来た。柿丸が先に立った。
　左手に松明を、右手に杖をついていた。一歩毎に、上半身を、苦しげに傾けていたのである。
　勘兵衛は、肩と太股に、槍傷を受けていた。山を下ろうとして、突如、背後から、刺されたのである。
　義太郎の命令によって、旗本数人が襲って来たのであった。予期したことであった。
　義太郎が、無断で山を下ろうとする勘兵衛を、そのまま、黙認するはずはなかったのである。
　勘兵衛は、襲撃者二名を、その場において斬り伏せておいて、山を下って来た。
　偶然、勘兵衛を救って、城までともなってくれたのは、天堂寺虎蔵であった。戦場武者は、戦場武者を知るものであったろう。
　柿丸にみちびかれて、地上へ登る勘兵衛は、いかにも、息苦しげであった。
　柿丸が、見かねて、手をかそうとすると、勘兵衛は、もののふらしく、それを拒絶した。
　夜八郎の前に坐った時、勘兵衛の顔には、死相とみえる色が濃かった。
　夜八郎は、一瞥して、この荒武者が、山城で、どのような立場に追い込まれたか、察知した。
「裏切り者になられたか？」
　夜八郎は、問うた。
「いかにも――」
　両腕を膝に突き立てて、上半身を支えながら、
「ごらんのごとく、身共は、役に立ち申さなんだ」
「ご貴殿を、裏切り者にして、申しわけない」
「いや、――。若殿を説得しようといたしたのは、身共の意志から出たことでござる。……山城は、すでに、若殿の独裁権が敷かれて居り申す。もはや、身共個人の力をもってしては、如何ともなり申さぬ」
「やむを得ぬ仕儀と心得る。どうぞ、やすまれい」
　夜八郎は、七位の大乗に命じて、勘兵衛を、別室に横たわらせようとした。
「いや、身共は、いまだ、奈良城家を裏切っては居り申さ

ぬ」
　勘兵衛は、かぶりを振った。
「そのからだで、どこへ行かれる？」
「すておかれい」
　勘兵衛は、大きく、ひとつ息をついてから、
「奈良城勢は、数日うちにも、当城を攻めるべく、新道を降りて参るでござろう。……貴殿は、当城に籠って、攻撃を受けるか、それとも、奈良城勢が降りて来る前に、新道を登って、湖の水門をひらくか、いずれをえらぶか――今明日のうちに、決意されるがよろしかろう」
「忝けない。ご厚意、生涯忘れ申さぬ」
　夜八郎は、頭を下げた。
　勘兵衛は、見送りをことわって、城門から出て行った。
　門前には、天堂寺虎蔵が待っていた。
　柿丸一人が、ひそかに、櫓にのぼって、よろめきながら遠ざかる手負い武者二人の姿を、いつまでも見送った。

　その宵――。
　九人の戦鬼は、城主館の広間で、酒宴を催した。
　どこからさがし出して来たか、七位の大乗が、大瓶（がめ）にたっぷりと仕込まれた酒を、青助たちにはこばせて、中央に据えたのである。
　酌をする女もいた。いちであった。
　柿丸が一滴も飲まないのを除いて、他の者たちは、いずれも、酒には強かった。
　飲むほどに酔うほどに、青助たちは、生地をむき出して、わめき、踊り、いちを追いかけまわした。
　夜八郎は、床柱を背にして、黙々として、盃を口にはこんでいた。
　やがて――。
　夜八郎は、一人そっと立って、館を出た。
　外には、満月があった。
　夜八郎は、濡れたように濃いおのが影法師をふんで、広場を横切ると、伊吹野を見渡せる断崖ぶちに立った。
　かわききった野は、夜の光に彩られて、夢幻のひろがりをみせていた。
　こうして、寂寞の世界にたたずむと、夜八郎には、この世界に生きる人間というものの、卑小さが、想われるのだ。
　あちらの国、こちらの国を、孤独な放浪をつづけながら、夜八郎が、おのれを救うひとときを持つのは、こうした深夜の景色の中に、身を置く時であった。
　月や星や山や野や林は、黙々として、人間の営みを見まもっている。
　人間同士が、血みどろになって闘い、勝ったり負けたりしながら、やがて、勝った者も負けた者も、死に絶えて行く――その歴史を、自然は、黙々として、見まもっている。
　夜八郎は、満月を仰いだ。
　――この月は、無数の人間の勝負を見下して来た。
　その感慨が、夜八郎の胸を湿らせた。
　背後に、人の気配がした。

「何を見ておいでなのですか？」
いちの声が、たずねた。
「夜を見て居る」
夜八郎は、こたえた。
「夜がお好きなのですか？」
「好きだから、夜八郎と名乗って居る。夜は、みにくいものをかくしてくれる」
「貴方様は、不幸なお育ちをなされたのですか？」
「過ぎ去ったことは、忘れた」
「申しわけありませぬ」
いちは、わびた。
「そなたは、いま、さびしゅうはないか？」
夜八郎が、たずねた。
「さびしゅうございます」
「おれは、こうして、月の下に立っていると、人間が、いかに、つまらない生きものかを想う」
「……」
いちは、夜八郎の後姿を見まもるうちに、急に、胸の痛みをおぼえた。
夜八郎が、湿った感慨をふりはらって、館へもどろうと、踵をまわした時、
「おねがいでございます！」
いちが、月光に濡れた顔に、真剣な表情をうかべていた。
「なんだ？」
「わたしも、ご一党にお加え下さい！」
「おれは、まだ、女を家来にして、使ったことがない」
「働きます！　どんな働きでもいたします！」
「ことわる」
夜八郎は、冷たく、突きはなしておいて、歩き出した。
「おねがいです！　どうか、働かせて下さいませ！」
いちは、夜八郎の袖をとらえた。
夜八郎は、
「そなたに、男子三人分の働きができようとも、ことわる」
「なぜですか？」
「先刻、酒をくらった男どもが、そなたを、血走ったまなこで、追いかけまわしたであろう」
「……」
「あれは、酒がなさしめた、と思うな。あれが、男の正体と申すものだ」
「……」
「そなたが一行に加われば、そなたの白い肌や胸のふくらみが、男どもの本能を刺戟する。それが、決死の壮挙にとって、いかに邪魔になるか、おれには、手にとるようにわかる」
「……」
「そなたに働いてもらうとすれば、唯ひとつ——今夜、飢えた男どもに、からだを抱かせてくれることだ。そして、明朝、城を出て行くことだ。……そなたに、できるか？」
「……」

いちは、こたえなかった。
夜八郎は、袖をはらっていちから遠ざかりながら、
——むごいことを云った。
と、微かな悔いをおぼえていた。
広場を横切りながら、振りかえってみると、同じ場所に、佇立している黒影が、見わけられた。
夜八郎は、館にもどると、広間に倒れている八人を見わたした。
それから、突如声を発した。
「皆、起きろ！」
鋭い叫びをあびせられて、八人は、一斉にはじかれたように、とび起きた。
夜八郎は、上座に坐ると、
「これから、二つの手段を、云う。お主らが、そのいずれをえらぶか、多数決とする。よいな」
と、ひとつひとつの顔を、順に見やった。
「うけたまわる」
泰国太郎が、代表して、応じた。
「奈良城義太郎が、その兵を率いて、降りて来る。それに対するわれらの手段は、二つある」
夜八郎は、云った。
「ひとつ——当城にたて籠って、攻め寄せる敵勢を迎え撃つか。いまひとつ——敵が山を下って来る前に、われら九人で、登って行き、湖水へ行き着き、水門をひらくか。いずれかをえらばなければならぬ事態に相成った」
そう告げて、あらためて、八人を見渡した夜八郎は、
「お主ら、前者をえらぶか、それとも後者をとるか——いずれか、おのおのの意見をきこう」
と、問うた。
しばらく、沈黙があった。
七位の大乗が、口をひらいた。
「大将のご意見は——？」
「まだ、いずれともきめかねて居る。敵勢を当城へ引きつけて、奈良城義太郎の首級(しるし)を挙げ、兵を屈服せしめたのち、山を登って、水門をひらくがよいか。それとも、機先を制して、敵が降りて来る前に、山を登って行くか」
夜八郎は、八人の決意を一致させるために、そう云った。
泰国太郎が、夜八郎を見つめながら、
「山城の兵力は、三百以上と思われるが、われら九人をもって、これを迎撃して、はたして、蹴散らせるものでござろうか？」
と、当然の質問を発した。
夜八郎は、微笑して、
「もとより、奇策を用いなければ、撃ちかえすことはできぬ。それが、成るか成らぬかは、神のみが知って居ろう。さいわいに、こちらには、豊富な火薬があるが……」
「九対三百か——ふむ、おもしろい戦いではあるのう」
大乗が、つぶやいた。
「おれは——」
百平太が、口をひらいた。

「おれは、城になど籠らずに、先に山を登った方がいいと思う。もし、城を攻められて、こっちがみんな討死しちまったら、誰が水門をひらくんだ！」
「わしも、そう考える」
柿丸が、賛成した。
「しかし、山を登る途中で、敵勢に襲われたら、それこそ、ひとたまりもない」
と、泰国太郎が、かぶりを振った。
「では、明朝にも、出発すればよい」
百平太が、云った。
「敵が、明日、降りて来るのに、ぶっつかったら、如何する？」
「それは、その時のことだ」
「水門をひらくまでは、死んではならぬ身だ」
「しかし、敵にぶっつかったら、もうしようがねえだろう。九人のうち、二人でも三人でも、生きのこって、水門にたどり着くことだ」
「二人や三人では、水門をひらけぬぞ」
「じゃ、どうするんだ？　城に籠って、奈良城義太郎という野郎が攻めて来るのを待つのか？」
泰国太郎と百平太のあいだに、険悪な空気が起った。
「まあ、まあ――」
大乗が、両手を挙げた。
「甲論乙駁をやっても、はじまらぬ。意見は意見として述べて、大将の決断にゆだねようではないか」
「よし――。それがしは、多門殿に奇策があるならば、敵勢を、当城にひき寄せて、一挙に、潰滅せしめ、しかるのちに、山を登る手段の方をえらぶ」
泰国太郎が、云った。
「太郎殿に賛成の者は？」
大乗が、問うた。
返辞をする者はなかった。
「わしは、明朝にも、山を登る手段をとる」
柿丸が、云った。
百平太は、勿論、その組であった。
「青助たちは、どうだ？」
夜八郎が、四人を見やった。
四人は、顔を見合せた。
「おれたちには、どっちがよいか、よく、わかりませんや。大将が、おやりなさる方に、したがいます」
青助が、代表して、こたえた。
夜八郎は、目蓋を閉じて、しばらく、黙思していた。
八人は、固唾をのんで、待った。
夜八郎が、双眸をひらいた。
「夜が明けるとともに、城を出て行く！」
ひくいが、強いひびきの口調であった。
決断はなされた。
夜八郎は、一人一人に、所持して行く武器を指示しておいて、座を立った。
地下倉は、すでに調べてあり、必要とすべき物は、はこ

び出してあった。地下倉にはおどろくべき多量の武器と兵糧がたくわえてあったのである。
七位の大乗は、これを見出した時、
「大将、これを、百姓らに渡して、一軍を組んで、山城を襲ったら、いかがでござろうか」
と、提案したものであった。
夜八郎は、かぶりを振った。
「百姓は、米をつくるのをつとめとしている者どもだ。得物を与えて、戦いの場へかりたてるのは、許されぬ！」
きっぱりと、云ったことだった。
もし、九人がのこらず、討死しはてたならば、その時は、あるいは、天満坊が、農夫数千を率いて、決起するかも知れない。それは、夜八郎自身、かかわり知れぬ後日のことである。
いまは、九人が一丸となって、目的に突進するばかりである。
夜八郎は、自分の寝所にえらんだ一室に入った。
夜明けまでには、なお、二刻あった。
夜八郎は、こうした場合でも、熟睡できるからだをつくっていた。
どれくらい、睡ったか――。
夜八郎の本能が、室内に人の気配があることをさとった。
そのまま、夜八郎は、ねむったふりをしていた。
忍び入って来た者は、片隅に、ひっそりと坐っている。
「どうしたのだ？」
不意に、夜八郎は、声をかけた。
対手は、いちであった。
いちは、夜八郎へ、視線を向けると、
「わたしを、役立てて下さいませ」
と、云った。
夜八郎は、仰臥したまま、
「役立てろ、とは？」
と、問うた。
「貴方様は、わたしに、仰言いました。女子のわたしにできるのは、からだを与えることしかないのだ、と――」
「……」
「わたしのからだを、さしあげたく存じます」
「……」
「どうぞ、お取り下さいませ」
夜八郎は、起き上って、いちを見かえした。
いちは、決意したおちつきをみせている。
「おれは、たしかに、云った。おれが、率いて行く八人のうち六人までは、無頼の極道者たちだ。この伊吹野へ来るまでは、二日に一度は、女を抱いていたに相違ない。この伊吹野へ来てからは、抱くべき女を持たず、よく我慢しているものだ、とひそかに感心していたものだ。……明朝、山へ向って出発すれば、おそらく、生きて再び、降りて来られる者は、一人か二人であろう。せめて、この世のなごりに、女を抱かせてやりたい、と思って、つい、そなたに、あのようなことを、云ってしまった。……しかし、それは、

おれの思いちがいであったようだ」
「なぜでございますか？」
「むこうにやすんでいるかれらは、念頭に、女の肌などは、ないであろう。無頼の極道者も、今宵のいっときを境にして、義に勇む士と変った。人身御供を抱くあさましい料簡はすてて居る、と信じられるのだ」
「……」
「そなたの好意は、忝けない。あつく礼を云う。……だが、もはや、かれらに、女体は無用である。そなたは、あちらで、やすんでくれてよい」
「でも、それは、貴方様お一人の、勝手なお考えではございますまいか」
「いや――。おれ自身が、平気で、女を犯した男だ。明日、死ぬ、とわかった夜、若い女を前にして、このような殊勝な態度を示すことなど、昨日までのおれには、想像もできなかったことだ。自分でもよくわからぬ。……いまのおれは、ぐっすりとねむることだけを考えて居る。そして、むこうにやすんでいる八人も、おれと同じに相違ないのだ」

奇襲むざん

昧爽（まいそう）――
夜八郎は、夜具をはねて、起きた。すでに、身仕度をしていた。
その時を待っていたように、七位の大乗が、姿を現した。
「慧眼、恐れ入り申した」
にやりとしつつ、云った。
「来たか」
夜八郎も、微笑した。
昨夜、夜八郎は、いちが去ったあとで、そっと、大乗を呼び、
「奈良城義太郎は、あるいは、明朝あたり、忍び物見を送って来るかも知れぬ。お主、充分に気をつけて居れ」
と、命じておいたのである。
はたして、夜八郎の予感した通りであった。
「抜け穴を通って、約十騎が潜入して参り申した。いま、柵を破って居ります」
「お主一人で、片づけられるか？」
「青助を手つだわせて、苦もなく、みなごろしに――」
大乗は、館を出た。

すでに、青助が、命を受けて、六尺あまりの細竹を一本持って、待ちうけていた。竹のさきは、たんぽにしてあった。
「よし、ついて来い」
「へい」
大乗は、地下道の出入口に来ると、青助をふりかえって、
「足音をたててはならぬ」
と、命じた。
「大乗殿のように、気配まで消すわけには参りませんぜ」
「お前の身軽さならば、呼吸を腹でして、かかとをつけなければ、わしと同様に、忍び歩けるぞ」
二人は、そっと、石段を降りて行った。
物音が、ひびいて来ている。生木で組んだ柵をこわしている音である。敵がたも、なるべく、そっとこわしているのであったが、地下道でたてるために、大きな響きになる。
大乗は、降りきると、
「匍うのだ」
と、ささやいた。
数間はなれると、物のかたちもおぼろになる暗さであった。
大乗は、まるで爬虫類のように、するすると匍って行くので、これに、青助がおくれぬようにするのは、容易のわざではなかった。
ものの二十間も、匍い進んだろうか。
「よし――。たんぽに火をつけろ。つけたら、にげろ！」
大乗は、命じた。
燧石を打つ必要はなかった。忍者は腹火と呼んでいる、衣服の中に、燃える小さな火をかくしていたのである。
青助は、それをとり出すや、細竹のさきのたんぽへつけるや、大乗に渡しておいて、一目散に遁走した。
柵と大乗たちの伏せていた地点との距離は、十間あまりであった。
大乗は、青助が腹火をとり出した時には、すでに、すっくと立って、手裏剣を五六本つかんでいた。
闇に、腹火がにじむとともに、忍び物見がたから、矢が射放たれて来た。
同時に、大乗が、ものすごい迅さで、手裏剣を投げとばした。
青助が身をひるがえした瞬間には、大乗は、手裏剣を投げつくして、たんぽの燃える細竹をつかみとっていた。
とみた次の一瞬――。
燃える細竹は、大乗の手から、はなれて、宙を飛んだ。
それは、柵より一尺ばかり手前の地面に落ちた。
すると、その地面の土が、ぱっと白い火花を散らして、燃えあがった。
火薬が撒かれ、それに土をかぶせてあったのである。
文字通りの火の海であった。
白い火花は、柵をくぐって、忍び物見たちが立つ地面へむかって、凄じい勢いでひろがったのである。
狼狽して、後退する敵勢にむかって、大乗は、奔り寄り

ざま、あらたにつかんだ手裏剣を、充分の余裕をもって、一人一人狙いさだめて、放った。
二人ばかりが、その手裏剣をかわして、柵を突破して来た。
大乗は、わざと、背中をみせて、遁走した。
上り口まで来た時、くるっと向きなおりざま、まず一人を、手裏剣で仆しておいて、最後の一人に、
「降伏しろ！」
と、叫んだ。
しかし、対手は、脚絆やふんごみをぶすぶすと燃えさせながら、手負い猪のように突進して来た。
大乗は、再び身をひるがえして、石段を駆けあがった。
「待てっ！」
若い敵士は、躍起に、追いかけて来た。
大乗は、地上へ誘い出すと、もう一度、
「降伏しろ！」
と、呶鳴った。
「うぬがっ！」
朋輩をみなごろしにされた若者が、その勧告を耳に入れるものではなかった。
猛然と斬りかかって来た。
とたんに、物蔭から、青助が、手槍をもって、とび出して来て、背後から、
「やああっ！」
と、突きくれた。
したたか脾腹を刺された敵士は、よろめきつつ、槍を両断し、そして、倒れた。
「ばかっ！」
大乗が、青助を叱咤した。
「よけいなことをするな！　生捕りにしようとしたのだぞ！」
いつの間にか、夜八郎が、近くに立っていた。
仆れた敵士のそばへ、寄って、すでに絶息しているのをみとめると、
「惜しいことをした」
と、云った。
青助が、土下座して、
「許されませい！」
と、頭を下げた。
「これからは、命令以外の行動は、一切禁ずる」
夜八郎は、八人がそろうのを待って、一人一人の顔を、順に、見わたした。
「お主らのうち、誰がまず最初に斃れるか、それは、神のみが知っている。誰でもよい、生き残った者が、水門を、開くのだ。必ず、開くのだ！」
八人が、その言葉に応える決意の色を、目にも口にもみなぎらせた。
「参ろう」
歩き出そうとして、ふと、夜八郎は、彼方にたたずむいちの姿を、見出した。

一瞬、夜八郎の心に、つれて行ってやりたい衝動が起った。
しかし、それを抑えると、夜八郎は、大股に、ゆっくりと、地下道の出入口に近づいて行った。
「多門様、あの娘を、どうなされる？」
柿丸が、うしろから、問うた。
「どうもせぬ」
「すてておかれますか？」
夜八郎は、ふりかえって、柿丸を視た。
「そうであったな。これまで、孤独で不運な娘がいると、必ず、お主に預けることになった。しかし、あの娘は、その必要はない。一人で生きて行ける娘だ」
「そうでござるか」
柿丸は、ほっとしたように、いちを見やった。
いちは、頭を下げた。
柿丸は、手をあげてやった。
黒太が、赤松に、
「もったいないことをしたのう。大将は、あの娘に、どうやら、手をつけなんだらしい」
と、ささやいた。
「わしらが手ごめにしようとしたら、大将から、首を刎ねられとるわい」
青助が、云った。
泰国太郎は、しきりに何か考えている様子であったが、
「百平太――」
と、呼びかけた。
「なんでござるな？」
「われらが出た直後に、奈良城勢が攻め入って来ることも考えられる。多門殿は、そのことを危惧されては居らぬのか？」
「さあ？」
「地下倉の武器を奪われたら、一大事だぞ」
「その心配はない」
こたえたのは、大乗であった。
「扉を破ろうとすれば、火薬が爆発する仕掛けをほどこしてある」
九人の戦鬼は、地下道へ降りた。
七位の大乗が、先頭に立ち、足もとへ、革袋から、すこしずつ、黄燐をまいて、進んで行った。
青白い微光が、ひとすじ地面へ、のびて行く。
暗闇の中を辿るのに、これが最も巧妙な手段であった。
大乗自身は、闇に目が利くのである。
柵を越える時、大乗は、気をつけるように、注意した。
しかし、のろまな白次が、やっぱり、仆れている敵をふみつけて、
「ひゃっ！」
と、声をたてた。
あとは、一路――まっすぐに、進んで行けばよかった。
奈良城義太郎は、忍び物見十騎を送り込んで来ただけで、第二陣を備えてはいなかった。これは、夜八郎が、推測し

た通りであった。
　森林の中へ抜け出るにあたって、大乗が、まず、さきに、地上を窺い、
「大丈夫でござる」
と、告げ、苦もなく、巨岩の蔭から、つぎつぎと、空地に立った。
「この密林をくぐり抜ければ、渓谷に降りることになり申す。そこから、旧道と新道に岐れるのでござるが、どちらを進むか、大将の判断に、おまかせいたす」
　大乗は、云った。
　新道を行けば、奈良城勢に、正面衝突する危険もあり、また、さまざまの障害が設けてあるはずであった。
　旧道は、敵と遭遇する心配はないが、すでに、破壊されつくしている。
　いずれをえらぶか、判断はむつかしい。
　夜八郎は、渓谷へ行き着くまでに、きめよう、とこたえた。
　密林には、通り路がつくられてあった。
　しかし、大乗は、わざと、路を踏むことをさけて、かたわらの茨を切りはらいつつ進んだ。
　路には、必ず何かの仕掛けがしてあるもの、と考えたのである。
　はたして――。
　しんがりを歩いていた黒太が、悲鳴をあげて、ひっくりかえった。
　茨を押しわけるのが面倒なので、うっかり、路を踏んだとたんに、落葉の下から、鋭い短い唸りを発して、鉄の環が、はねあがって来て、脛へ嚙みついたのである。
　山犬や熊を獲る罠であった。
「うっ！　痛えっ！　てっ！　畜生っ」
　黒太は、うめいて、鉄の環をはずそうとしたが、容易なことでは、はずれそうもなかった。
　百平太と青助と赤松の三人がかりで、ようやく、黒太を自由の身にした。
　密林は、突如として切れた。
　深夜ならば、幾人かが、宙を踏んで、断崖から、渓谷へ転落したに相違ない。
　密林をまっ二つに截ったように、絶壁が、数丈も深い渓谷へ落ちていた。
　むこう側の絶壁まで、約三間の距離である。
　新道も旧道も、彼方に在った。
　渓谷の底は、涸れていた。
　竜神湖の水を落しても、この渓谷へは流れて来ないのである。太古から、底は涸れているようであった。
　それればかりではなく、重なりあった岩石の蔭から、黄色の薄煙が、ゆうゆうとたちのぼるのが、みとめられる。
　夜八郎は、渓谷を見わたして、首をかしげた。
　太古から水が涸れているならば、当然、樹木が茂っているはずであるが、一本すらも、見当らぬ。これは、立ち昇る黄煙が、猛毒を含んでいる証拠である。

　降りて行けば、たちまち、毒気に当てられて、仆れるに相違ない。
　ちょうど、むこう正面の断崖縁に、高い丸太の梯子が、まっすぐに立ててある。奈良城勢は、その梯子を架けて、仮橋をつくるのである。
「あの梯子を、どうやって、倒して、架けるかだな」
　大乗が、独語した。
　すると、赤松が、
「わしが、やってみるかの」
と、云った。
　木樵の伜として、物心のついた時から、青年まで、山中をかけまわったこの男は、こういう場合に、役に立つ。
　腰に携げていた細引の輪をはずすと、その先に、脇差を鞘毎、結びつけた。
　そして、腰を落して、身構えた。
　別人のように、鋭くひきしまった表情で、
「一、二、三！」
　懸声とともに、梯子めがけて、投げつけた。
　脇差は、長く尾をひいて、宙をはねあがった、とみるや、見事に、梯子の九尺ばかり高い横木へ、ひっかかった。
「よし！」
　赤松は、細引を、ぐいと引きしぼった。
　脇差は、縦木と横木へかっちりと押しつけられた。
　赤松は、細引にすがって、苦もなく、渓谷の上の空間を、飛び渡って、梯子へとりついた。
「木樵の伜の芸当よのう」
　百平太が、にやにやして、云った。
　赤松は、喬木の幹へ梯子をくくりつけた綱を解くと、
「そーら、倒すぞ！」
と、叫んだ。
　梯子は、大きく傾いて来たかとみるや、こちらの断崖縁へ、どさっと乗った。
　梯子を渡って、むこう縁に着くや、夜八郎は、ためらわずに、
「新道を進む」
と、宣言した。
　泰国太郎が、
「新道を進めば、必ず、奈良城勢と正面衝突する予感がいたす。数百の兵を対手に闘って、勝算がござるのか？」
と、なじるように問うた。
「勝算はない」
　夜八郎は、こたえた。
「当って砕けるのはよいが、全員討死いたしては、それこそ犬死ではあるまいか」
「一人がおのれを殺して、一人を助けて進ませるという手段がある。四人が斃れれば、四人が生きのびよう。最悪の場合でも、三人は生きのこり得る、とおれは考える」
　夜八郎は、云った。
　今更ながら、文字通りの決死行であることを、八人の肚裡に据えさせた。

泰国太郎としても、これ以上口にすべき言葉はなかった。

前進があるばかりであった。

再び、密林の中を通じた道を――その道わきを、茨を切りはらいつつの前進がなされた。

やがて、樹木は疎らになり、陽ざしが、足もとにまでさして来る地域に来た。

夜八郎が、足をとめて、

「黒太――」

と、呼んだ。

「へい」

「前方に、臭気があるな？」

「へい、あります」

「なんの臭気だ？」

「もっと、よく、かいで参ります。ここで、待っていて頂きましょうわい」

黒太は、あまり敏捷でない動作で、木立を縫って、進んで行った。

黒太が戻って来るまで、八人は無言であった。

梢には、鳥がさえずり、足もとを栗鼠が掠め過ぎた。

しだいに、暑気が増して来るのが、感じられた。

黒太は、戻って来ると、首を振った。

「とても、通れる原じゃありませんや」

いまいましげに、かぶりを振った。

「何が居る？」

「くちなわでさあ。七色のね」

「毒蛇か？」

「へい。あんなに数知れず、うごめいてやがる光景は、はじめて、お目にかかりました」

「突破は、不可能か？」

「まずね。山城の奴らの中に、くちなわ飼いが居りますぜ。ただ、あの原に、集ったとは、思われねえ。わざと、はなし飼いしてやがるに相違ありません。あの中を進むには、それだけの身がためをしなけりゃ、とても――」

夜八郎は、黒太を見すえて、

「毛虫でも毒蛾でも喰べるお前のことだ。思案があろう」

と、云った。

黒太は、ちょっと、考え込んでいたが、にわかに、異様な決意を肚に据える気色を示した。

「山犬でも猿でも、そうなんだが、くちなわにも、むらがっている時は、かならず、長（おさ）が居りまさあ。そいつが、動き出すと、他のやつらも、それに従って、ゾロゾロと動くものでさあ。その長を、おれが、なんとか、してくれよう」

皆は、じっと、黒太を、見まもった。

「おれが、長を、誘い込んで、場所をかえている隙に、原をつっ走って頂きますぜ」

「大丈夫か、黒太？」

百平太が、たずねた。

「大丈夫でさあ。そのかわり、おれ自身は、ひょっとすると、ひょっとすらあ」

黒太は、にやっとしてみせた。

「参ろう」

夜八郎が、歩き出した。

樹木が一本も見当らぬその野芝の原は、約百歩のひろさで、ちょうど沼のように、やや窪んだ地形を、九人の前に置いた。

左右は、断崖になっている。いわば、渡廊のあんばいで、ここが、大庄山の登り口に当る。

夜八郎はじめ、すべての者が、慄然となって、立ちすくんだ。

野芝をうめつくして、無数の毒蛇がうごめいている光景は、ここからさきが、人界と隔絶した地獄であることを、暗示しているようであった。

山野に起き伏しすることに馴れている戦鬼たちも、これほど不気味な光景に接しては、背筋が冷たくならざるを得なかった。

「じゃ、やりますぜ」

黒太は、なんのおそれる気色もなく、一人で原へふみ込んで行くと、ずうっと、物色していたが、

「いたぜ」

と、にやりとした。

毒蛇の長を、発見したのである。

黒太は、脇差を抜くと、左腕へ、ぶすりと刺したてた。

そして、その左腕を振って、血汐をまきつつ、断崖縁の方へ、身を移して行った。

と――。

毒蛇の群が、一斉に、鎌首を立てた、とみるや、動きはじめた。

夜八郎たちの立つところからも、はっきりとみとめられる、ひときわ巨きな長が、血のにおいをかいで、黒太めがけて動き出したので、群は、それに従ったのである。

「いまだ！」

夜八郎が、まっさきに、奔り出した。

七人は、一列になって、疾駆した。

夜八郎ら八人が、百歩の距離の原を、ぶじにつっ走った時、すでに、毒蛇の長は、黒太の足元に達していた。

高く鎌首を擡げて、二条に割れた赤い舌を、ヒラヒラさせていた。

黒太は、脇差をかまえて、とびかかって来たら、斬りすててくれるぞ、と息をつめていた。

「黒太！」

百平太が、呼ぶのをきいた瞬間、黒太は、おそろしい絶望感に襲われた。

毒蛇の長から、目をはなしたならば、自分の敗北であることに、気がついたのである。

しかし、遁走するには、目をはなさなければならなかった。

長が、とびかかって来ぬかぎり、他の毒蛇どもは、じっと待っているのだが、しかし、もし、黒太が、長を襲って、斬りすてれば、一斉に、躍りかかって来るであろう。

黒太は、やむなく、じりじりと、後退しはじめた。
もとより、背後にも、毒蛇は匐っていた。
それを踏みつけないように、細心の要心をしながら、黒太は、七八歩、後退した。
「黒太！　何を愚図愚図してやがる。走らねえか！」
青助が、いら立って、叫んだ。
黒太は、それにこたえる余裕さえもなかった。顔の全面から、油汗が滲み出ていた。
一瞬——。
黒太は、一匹を、かかとで、踏みつけた。
そのなんとも名状しがたいイヤな触感が、ついに、黒太に、忍耐力をうしなわせた。
ぱっと、身をひるがえすと、疾駆しはじめた。
しかし、人間の脚よりも、毒蛇のすべる方が、はるかに、迅かった。
毒蛇の長が、大きくはねあがって、黒太の背中を襲うのが、夜八郎たちの目に映った。
「黒太っ！」
「にげろっ！」
「ああっ！　いけねえっ！」
青助、赤松、白次が、同時に、絶叫した。
それは、正視に堪えぬむざんな光景であった。
黒太は、毒蛇の長に、頸根を嚙みつかれるや、反射的に、左手を背中にまわして、その胴をつかみさま、脇差をひらめかして、胴を両断した。
すると、ザワザワと野芝を鳴らして追って来ていた無数の毒蛇が、その瞬間を待っていたように、黒太めがけて、とびかかったのである。
人間は、黒い細長い爬虫にまみれて、異様な叫び声を、そこにのこして、断崖から、谷底へ、転落して行った。
毒蛇がうごめく渡廊を過ぎると、あとは、赤松の疎林の斜面を、登って行くことになる。
勾配の急な斜面であったが、その地域だけが地質がちがっているように、目に痛いほど白く、暑気を増した陽ざしをあびた景色は、いかにものどかであった。
すでに、伊吹野の平野は、はるかな眼下にあった。
一行は、場所をえらんで、持参した弁当をつかった。
そのひとときは、物見遊山にでも来たような状態であったが、誰もが口数すくなかった。
黒太の悲惨な最期が、脳裡にこびりついていたし、この憩いが決して、のんびりしたものではなく、絶えず、四方に神経を配っていなければならなかったからである。
「いくさの前でも、平気で大食できたが、いまは、初陣の直前のように、食欲がない」
柿丸が、にぎり飯を膝に置いて、つぶやいた。
泰国太郎も百平太も、同様であった。
夜八郎は、水を飲んだだけで、仰臥して、目蓋を閉じていた。
七位の大乗は、しきりに、あちらこちらを、歩きまわって調べていた。

一人、白次だけが、むしゃむしゃと、にぎり飯を、頬ばっていた。
大乗が、夜八郎のそばへ、もどって来た。
「この松林の上は、どうやら、広い平らな台地になって居り申す」
告げられて、夜八郎は、むっくり起き上った。
「見渡したか？」
「無数の大岩が台地と松林を区切って居るので、岩かげから、そっと、のぞいてみただけでござるが……」
大乗の予感では、そこらあたりに、毒蛇以上のおそるべき障害がありそうであった。
「行こう」
夜八郎は、歩き出した。
ものの二町も登ると、太古に、大庄山が火を噴いた時、ころがり落ちて来たか、と想像される巨岩が、そこに、重なりあって、視界をさえぎっていた。
「岩へのぼって、姿をさらすな」
夜八郎は、皆へ忠告しておいて、岩と岩との隙間をさがして、岩肌へ身をこすらせながら、抜けた。
岩蔭から望むと、大乗の告げた通り、平坦な台地が、東方へむかって、やや下りかげんにひろがって居り、ところどころに、喬木が樹冠を大きくひろげていた。
小松が匐っていたり、灌木がむらがっていたり、草地になっていたり、変化に富んでいる台地であった。
「ここなら、人間も住めるな」
柿丸が、何気なく云った時、二頭の鹿が、東から、疾駆して来るのが、みとめられた。
「おっ！」
大乗が、声を発した。
他の者の目には、映らなかったが、疾駆する鹿へむかって、矢が射かけられたのである。
「いかん！」
大乗が、首を振って、
「みな、伏せろ！」
と、叫んだ。
二頭の鹿は、こちらへ向って、みるみる近づいて来た。
それを追う者の姿が、彼方に出現した。
三人——いずれも、はだか馬にうちまたがって、鮮やかに、灌木を躍り越えて来る。
「大将！　彼奴ら、ここまで来申すぞ」
「ただの猟師ではないようだな」
夜八郎が、小首をかしげると、のびあがって、眸子（ひとみ）をこらしていた泰国太郎の口から、ひくい呻きが発しられた。
「あれは、山賤（やまがつ）だ！」
「山賤とは？」
「邪宗を奉じて、当山にたてこもっている一族でござる。いつぞや、数人が野へ降りて来たのを、一人を生捕ったところ、舌を嚙んで果て申した。背負っていた矢には、猛毒が塗ってあり、奇妙な梵字らしいものが書き込んであり申

した。彼奴らが、どれだけの人数か、判らぬが、とても、闘うことは、かなわぬ！」
太郎は、山賤四人と争った時の、凄じい反撃ぶりを想起して、ぶるっと身ぶるいした。
邪宗を狂信している者ぐらい、おそろしい存在はない。可能なかぎり、闘いはさけねばならなかった。
しかし、皮肉にも、そう祈る八人が、身を伏せている其処へ向って、二頭の鹿は、逃げて来るのだ。
「大乗、発見されたら、やむを得ぬ。あの三人を、斬るぞ」
「かしこまった」
二頭の鹿は、其処へ三間あまりの距離にまで近づくと、急に方角を転じた。
その瞬間――。
飛来した矢が、一頭を斃した。
のこり一頭が灌木のしげみへ、躍り込んでしまったので、追手たちは、あきらめて、斃した鹿のそばで、馬を降りた。
その場で、皮を剝ぐ作業が、はじまった。
八人は、息をのんで、見まもっていた。
と――。
白次が、先程から、飯粒が鼻孔に入っていて、しきりに小鼻をひくつかせていたが、ついに、我慢ならずに、くしゃみを発してしまった。
山賤の一人が、それをききとがめた。
鋭い視線をこちらへ投じていたが、大股に、近づいて来た。
――万事休す！
大乗は、胸でつぶやいた。
山賤が、二間の近くへ寄って来るや、突如、夜八郎が、躍り立った。
疾風を起す――とは、まさに、夜八郎のその瞬間の行動であった。
一太刀で、近づいた山賤に血煙りをあげさせるや、あとの二人へ向って、数間の距離を猛然と奔ったのである。
そのすさまじい勢いに、敵がたは、矢を放つことを忘れ、野太刀を抜いて防禦の構えをとるのが、せいぜいであった。
夜八郎は、奔り寄りざま、まず一人を、一閃の太刀で、斬り伏せた。
「ああっ！」
残った敵は、悲鳴ともひびく声を噴かせて、一間あまり、跳び退った。
夜八郎は、冷たく冴えた視線を据えて、
「二人のあとを追うか、それとも、こちらの問いにこたえるか！」
と、あびせて、じりっと迫った。
「……」
夜八郎の長身から、めらめらと萌え立つ剣気に、山賤の本能は、怯えた。
その恐怖を、肩の喘ぎに示して、山賤は、じりじりと後退した。
「こちらは、さきを急いで居る。返辞をせぬのは、生命が惜しくないことに、受けとるぞ！」

「ま、待った！」
山賤は、五指をひらいた片手をさし出して、夜八郎の一撃をこばんだ。
「こちらの問いにこたえるか？」
「こ、こたえる」
「おのれら一族の頭数は？」
「七十八人」
「砦を築いて居るのか」
「いや――」
「それでは、くらしぶりは、木樵や猟師とかわらぬのか？」
「……」
「なぜこたえぬ？」
「われらは、天帝を仰ぐ。天帝の霊示に従って、その日その日をすごして居る」
「天帝とは？」
「天帝とは、全世界の神を僕（しもべ）とする、われらが唯一の守護本尊だ」
「その天帝とやらの霊示を、貴様たちに伝えるのが、頭領だな？」
「左様――」
「頭領の前身は武士か、それとも農夫か？」
「……」
「こたえい！」
夜八郎は、大きく一歩、迫った。
山賤は、ごくっと生唾をのみ下してから、
「頭領は、みまかった」
と、こたえた。
「では、貴様らの自治か？」
「い、いや……。頭領の息女を、われらは、主座に置いて居る」
「娘を、新しい頭領にしようとして居る？」
夜八郎は、ちょっと、何やら思慮の様子をみせたが、次の瞬間、大きく地を蹴るや、その残りの一人をも、一太刀のもとに、斬り仆した。
その時であった。
「大将！　もう一人、いたっ！」
青助が、叫んだ。
大乗に命じられて、近くの松の高処（たかみ）によじのぼって、彼方をうかがっていたのである。
彼方の樹冠をひろげた喬木の蔭に、裸馬に乗った山賤がいて、こちらの光景を、目撃しているのを、みとめたのであった。
夜八郎が、命令を下すより早く、大乗は、そこに乗りすてられていた裸馬に、とび乗るや、
「やあーっ！」
と、馬腹を蹴っていた。
夜八郎は、追跡して行く大乗を見送っておいて、
「急ぐぞ！」
と、六人へ云いおいて、足早やに歩き出した。
柿丸が、心得て、目じるしに、樹の幹を、削りながら、

進んで行った。
二町も進むと、草木がなくなり、賽の河原とでも、名づけたいような、荒涼たる岩場へ出た。
地面は、大小無数の岩石で掩われ、自然につくられたとはいえ、化生（けしょう）のつくったものとしか思われぬような形や、積みかさなりが、見る者を慄然とさせる。
夜八郎は、見渡して、
——あの山賤一族は、ここを、天帝の降りて来る霊場にしているのかも知れぬ。
と、想像した。
この区域を、身を陽にさらしながら渉って行くことに、危険をおぼえざるを得なかった。
「ここで、大乗を待つ」
夜八郎は、六人に、岩蔭に身を伏せるように、命じた。
四半刻を経て、大乗が、裸馬をとばして、追いついて来た。
異常に緊張した表情が、遁れた者を仆せなかったことを、告げていた。
裸馬から、とび降りると、夜八郎の前に立ち、
「この岩場は、彼奴らのすみかに通じて居り申す。いまに、われわれをもとめて、一族を挙げて、馳せ寄せるに相違ござらぬ」
と、云った。
「夜を待つよりほかに、突破するすべはないようだな」
「まず——」
「柿丸——」
夜八郎は、呼んで、
「今夜の天候を看ることができるか？」
「は——」
柿丸は、しばらく、空を仰いでいたが、
「月光をさえぎるだけの雲が、出るかどうか？」
と、首をかしげた。
もし、月光に照らされたならば、突破することは、絶望であろう。
陽が落ちるまでには、二刻（四時間）あまりがあった。
夜八郎ら七人は、岩場から、はるか後方へしりぞいて、灌木の中に身をかくした。
山賤一族は、全員とかぞえられる隊を組んで、岩場を進んで来たが、これは、大乗が決死の策によって、あざむくことに成功した。
すなわち。
山賤隊を、半町の近くまで進ませておいて、大乗は、けものがにわかの敵の襲来におどろいて遁走するごとく、とある喬木の蔭から、裸馬をとび出させたのであった。
「おっ！　彼奴っ——あそこだ！」
山賤隊は、一斉に、岩場から、草地へ、殺到した。
大乗は、いかにもあわてふためいた様子で、味方の伏せている場所とは反対方角へ、馬を駆けさせて行った。
そして——。

馬をどこかへすてて、夜八郎たちの処へもどって来たのは、陽が傾いた頃合であった。
どさっ、と坐り込むと、
「やれやれ——、一代の忍者も、ひと汗かき申したわい」
と、肩で大きくひと呼吸をした。
巧みに、敵勢を翻弄して、さんざ追いかけまわさせた挙句に、行方をくらまして、もどり着いたのであった。
「お主の観たところでは、尋常の敵ではないか？」
「まさに！」
大乗は、うなずいてみせた。
「真正面から衝突しては、洪水にむかって、柄杓をふりまわすようなものでござるな」
「夜を待とう」
だが、その夜が来た時——。
じっと、空へ向って、視線を仰がせていた柿丸が、
「だめだ！」
と、絶望の声をもらした。
「今夜は、月が海の上をすべるようなものだ！」
月光は、くまなく下界を照らし、身をかくすすべはないのだ。
岩場には、いたるところに、見張りがひそみ、こちらが出現すれば、即座に、これを告げる方法を用意しているに相違なかった。
「お主たち——」
夜八郎は、決然として云った。
「この邪宗の地域で、半数が生命をすてることになるが、覚悟してもらおう」
「どうするといわれるのだ？」
泰国太郎が、問うた。
「山賤の本拠を、こちらが、奇襲する！」
夜八郎は、云った。
「一族の大半は、あの岩場に分散して居る。本拠には、少人数しか居るまい。これを奇襲して、頭領の娘とやらを捕える！」
敵の裏をかいて、その本拠を衝く——。
この奇襲策は、まさに、いま、戦鬼らがえらぶ唯一の戦法であった。
敵が、我に十倍する頭数であっても、岩場に分散している限り、その力はきわめて弱い。
頭領が亡くなり、その娘が王座に就いている、ということは、こちらにとって、何よりもさいわいであった。娘を捕虜にしてしまえば、一族を屈服させることは、なんの造作もない。
ただ、果して、その本拠が、どのような構造をもっているのか？　攻め入って、その虚を衝けるほど、ただの山砦にすぎないのか、どうか？
これは、あるいは無謀きわまる奇襲かも知れなかった。
しかし、虎穴に入らずんば虎児を獲ず、というたとえもある。
夜八郎は、ほぞをきめると、立ち上った。

大乗が、先導し、六人は黙々として、夜八郎のうしろに、従った。
およそ、一里を進んだろうか。
月光が、しだいに、冴えかえった。
「ここで──」
と、大乗が、手を挙げてとどめた。
「むこうの、大きな岩がふたつ──あのあいだを抜けると、かれらのすみかがある、と看てとり申す」
夜八郎は、じっと、すかし見ていたが、
「裏手へまわれぬか？」
「こちらの岩場を越えれば──」
「岩場には、ふみ込めば、たちまち露見する仕掛けがほどこしてあるに相違ない」
「しかし、むこうは、断崖絶壁になって居る模様でござる」
「ということは、そちらには、警戒の目がないことだ」
「それは、そうじゃが……」
「越えられるか、越えられぬか──ためしてみてくれ」
「大将は、どうされる？」
「おれは、まっすぐに、あの岩の間を抜けて、ふみ込む」
「お一人でか？」
「おれには、十人や十五人を斬り伏せる剣がある」
「よろしゅうござる。絶壁を渡ってみようわい」
その時、赤松が、
「絶壁を渡る方法は、ないことはないて」
と、云った。
「よし、木樵の本領を発揮せい」
手筈は、ととのった。
要心すべきは、この本拠に於て、乱闘がくりひろげられるのを、岩場に分散した者どもに感づかせないことであった。
ただ、絶体絶命の場合を考慮して、それぞれが、火薬を、身につけた。
夜八郎は、ただ一人、その場にのこって、その時を待った。
夜八郎が冴えかえる月光をあびて、微動もせずにうずくまっていた時間は、およそ半刻であった。
ふと──。
夜八郎の耳に、奇妙な音が、ひびいて来た。
じっと、耳をすませると、それは太鼓の音に合せて誦する呪文めいた祈禱の声であった。
夜八郎は、月を仰いだ。恰度、亥刻──乙夜（午后十時）である。
祈禱の時間に相違ない。
──よし！
夜八郎は、一人微笑すると、身を起した。
天が味方するごとく、空に雲がわいていて、かなりのはやさで流れていた。
夜八郎は、月が雲にかくれるのを待って、音もなく、地上を奔った。

月光が落ちると、ぱっと身を伏せた。
いくたびか、奔っては、伏せて、ついに、その岩に行き着いた。
大乗が看てとった通り、岩と岩の間が、通路になっていた。
夜八郎は、その通路を、そろそろと、匍匐しはじめた。
三間あまりむこうに、冠木（かぶき）門のような木戸が設けてあった。
太い角材で組んだ格子の扉のむこうに、人影が、ゆっくりと行ったり来たりしているのを、夜八郎は、みとめた。
それが、一人だけであるのを確認するや、夜八郎は、大乗から借りた忍び手裏剣を、投じた。
これは、手練の技であった。
絶鳴をあげさせずに仆すには、心臓を刺しつらぬかねばならなかった。夜八郎は、見事に、それに成功した。
夜八郎は、すばやく、木戸に寄って、扉をしらべ、大乗が渡してくれた忍び袋の中から、七つ道具をとり出して、これを破った。
通路は、そこから五筋に岐れていた。いわゆる露地の迷路、という敵をあざむく砦構えであった。
その道を、あやまって進めば、陥穽が待ちかまえている。
夜八郎は、地に伏せて、耳を土にあてた。奇妙な祈禱の声は、どの道筋からひびいて来るのか？
これを正確に判断するのは、大乗のような忍者でなければ、能く為し得ない。
夜八郎は、むかって右から二番めの通路へ、足をふみ出した。
柵が左右につらねてあり、道幅は三尺の狭さであった。およそ二十歩を進んだ時、前方に人声がした。
はっ、と一瞬、足を停めたが、
──ままよ！
夜八郎は、不敵に、再び前進しはじめた。
山賤四人が、その道筋を、こちらへむかって来ていた。三尺幅の狭い通路を、一列になって歩いて来るのである。
夜八郎は、もはや、ひきかえすわけにはいかなかった。
距離が、七八歩に縮まった。
先頭の者が、月かげにすかし見て、
「誰だ？」
と、叫んだ。
その刹那、夜八郎は、地を蹴って、旋風のごとく、襲った。
もし、そこが、身を自由にひるがえさせる広さをもっていたならば、夜八郎は、敵に味方を呼ぶ余裕を与えはしなかったであろう。
一人を斬って、その屍を躍りこえて、次の一人を斬るよりほかにすべはなかった。
三人を斬り仆した時、しんがりの者が、絶叫をあげて、逃走しはじめた。
夜八郎は、その背中をまっ二つに割るや、
──あとは、死闘のみ！

と、覚悟をきめた。
岩場に散っていた者どもが、砦内の急変をききつけて、馳せもどって来る音が、潮騒のように、ひびいて来る。
夜八郎は、まっしぐらに、建物めがけて、奔った。
建物から、篝火をつかんだ者が、十人あまり、どっと、とび出して来た。
夜八郎は、その正面へ、身をさらした。
「なんだ？」
「山城の廻し者かっ？」
「おしつつめ！」
吶号をあげつつ、包囲の陣形をとろうとした。
夜八郎は、そのいとまを与えず、矢の迅さで、建物の玄関に達した。
神殿造りの宏壮な建物であった。
玄関には、五人の者が、弦をひきしぼっていた。
夜八郎が地面に伏せるのと、矢が唸りすぎるのが同時であった。
球のごとくはね起きた刹那には、夜八郎の剣は、一閃裡に、二人を斬っていた。
「曲者っ！」
「ここだっ！」
叫ぶ者もまた、夜八郎の剣の贄（にえ）になった。
——娘を虜（とりこ）に！
血ぶるいした夜八郎は、奥へ向って、廊下を突進して行く。
それをはばもうとして、殺到して来る山賤たちの得物は、刀、槍、薙刀、くさり鎌など、さまざまであった。
夜八郎は、躍りかかって来る敵を、一太刀ずつで斬る凄じい強さを発揮しつつ、次第に、奥へ入った。
唐戸や柱の蔭から、不意に襲って来る敵に対しても、夜八郎は、無類の迅業を示した。
夜八郎が、長い廊下を突破して、渡廊でつなぐ奥殿とおぼしい建物をむこうにのぞむ庭へ出た時であった。
突如——。
その奥殿の裏手から、もの凄い音響とともに、火柱が噴きあがって、たちまち、あたりを、昼のあかるさに浮きあがらせた。
——やったぞ！
夜八郎は、追いすがって来る敵を、四方に置きながら、にやりとした。
大乗が、六人の仲間を指揮して、火薬を炸裂させたのである。
たちまち。
奥殿内は、騒然となった。
火と人間がまき起すあらゆる音が、渦をまいて、夜の空気をかきみだした。
夜八郎自身は、躍起になって襲いかかって来る敵を、もうかぞえきれぬくらい、斬り仆し、なおも、剣をふるいつづけていた。
と——。

奥殿から、まっしぐらに、渡廊へ奔り出て来た白衣の姿を、ちら、とみとめたせつな、夜八郎は、
——これが、頭領の娘だな！
と、直感した。
直感した次の一瞬には、夜八郎の姿は、翔けるがごとく、渡廊上に在った。
長い黒髪を乱した白衣の女は、その小脇に、大きな白銀（しろがね）の珠をかかえていた。
それが、かれらの信奉する神を象徴するものであったろう。
夜八郎は、その前に、立ちはだかるや、
「頭領のむすめは、そなたか？」
と、問うた。
「乱入者っ！　なにがための存念かっ？」
「われわれは、この山砦を滅ぼしに来たのではない。そなたの生命をもらいに来たのでもない。……われわれは、この地域を通って、山頂へ行きたい。それだけだ。それを、そなたら山賤が拒否するために、やむなく、自衛の反撃に出たまでだ」
「……」
故頭領の女（むすめ）・天香は、けもののようにらんらんと目を光らせて、夜八郎を睨みつけている。
「われわれが、山頂へ行きたい理由を云おう」
そこまで云った瞬間、背後から、猛然と、槍が突きかけられた。
夜八郎は、わずかに、身をねじって、槍の柄をつかむや、突き手を蹴倒し、四方を睨みまわした。
「おのれら！　おとなしくせぬと、この白球を、まっ二つに斬るぞ！」
その叫びは、山賤全員を、しずまりかえらせるのに、絶大な効果があった。
夜八郎は、天香に視線を当てると、
「竜神湖の水を、伊吹野へ流して、農民らに田植えをさせる——それが目的だ」
夜八郎は、天香の眸子（ひとみ）に、微かに動くものをみとめた。
「われわれ八人は、これまで、世の中に対して何ひとつ益になることはしなかった。いや、害毒を流す余計者であった。ところが、伊吹野の惨状を眺め、餓死に追いつめられた農夫の窮迫ぶりを訴えられるや、人間が神から本来与えられている倫理の観念にめざめた。八千の農夫の生命を救うために、おのが生命を投げ出す決意をした。……そなたらが、いかなる神を信じているかは知らぬ。しかし、いやしくも、神と名のつくものを信仰している者に、おのれをすてて働こうとしている者に、味方してやろうという心情がわからぬはずはあるまい。ただいたずらに、聖域をふみ荒そうとしているのではない、ということが判ったならば、こころよくそこを通してくれるのが、神を信仰する者の態度ではあるまいか」
夜八郎のその言葉に対して、天香は、しばし、沈黙を守

っていたが、やがて、山賤一同へ視線をまわして、
「お前たち、退るがよい」
と、命じた。
「こやつらを、通すと云われるのか？」
一人が、問い、他の者が、
「朋輩の半数を斬られ、奥殿を焼かれて、許すわけには参らぬ！」
と、声を張った。
天香は、凛とした態度で、
「通すのじゃ！」
と、叫んだ。
「通すわけには参らん！」
憤りをこめた声が、はねかえされた。
「わたしの命令をきけぬのか？」
「天香殿は、頭領ではござらぬぞ！」
「頭領ではなくとも、この御珠の霊示をつたえるわたしじゃ！　もし、お前らが肯（き）かぬと申すならば、御珠を地へ投げて、みじんにくだき、一人のこらず天罰を蒙ろうぞ！」
その宣言は、山賤一同を動揺させた。
天香は、夜八郎へ視線をもどして、
「お行きなされ」
と、云った。
「忝い」
夜八郎は、頭を下げた。

それから、
「泰国太郎！　大乗！　柿丸！　百平太！」
と呼んだ。
炎上する奥殿の蔭から、最初に現れたのは、柿丸であった。
袖やたっつけを、ぶすぶすとこがしながら、奔って、夜八郎のそばへ来た。
「他の者は？」
「わ、わかりません。青助は、崖を渡る時、落ちてしまったのを、見とどけましたが……」
いかに必死な働きをしたか、という証左であった。一人一人が、大乗の指示によって、人間の力の可能ぎりぎりの働きをしたのである。
「参ろう」
夜八郎は、歩き出した。

水

夜が明けた。
岩場と草地のさかいに、三個の人影が、朝陽をあびて、たたずんでいた。
夜八郎と柿丸と白次であった。
青助は、断崖から墜落し、赤松もまた、仲間を奥殿裏手へよじのぼらせる時に、自らを犠牲にして、谷底へ消えたのであった。木樵の伜である赤松がいたおかげで、その断崖を渡ることができたのであった。
百平太は、奥殿を破壊するにあたり、火薬を仕掛けるいとまがなく、自ら、火薬を抱いて突入し、五体を四散させたのであった。
泰国太郎は、奥殿守護の山賤七人と血みどろの闘いをくりひろげて、敵をことごとく斬るとともに、自らも無数の重傷を受けて、仆れたのであった。
七位の大乗の姿は、どこへ消えたか、判らなかった。
夜八郎は、岩場を横切る前に、大乗が、生きて、現れるのを、そこで、待つことにしたのである。
しかし——。
すでに一刻半が過ぎていたが、大乗が現れる気配は、さらになかった。
「もう、待てぬ」
夜八郎は、ほぞをきめた。
「生き残ったのは、われら三人だけだ。この三人で、竜神湖の水門を開かねばならなくなった」
この岩場を横切るために、あまりにも大きな犠牲を払わなければならなかった。これは、夢にだに予測しないことであった。
はたして、この三人だけで、水門をひらくことが、できるものであろうか。
山頂へ辿りつくことさえ、おぼつかぬのではあるまいか。
「行こう」
夜八郎は、岩場へ、足をふみ入れた。
柿丸も白次も、山賤の砦のある方角を視やった。
倒れた仲間への哀悼をこめたまなざしであった。
夜八郎は、振りかえって、
「早く来ぬか」
と、うながした。
二人は、急いで、あとにつづいた。
岩場を、なかば横切った時であった。
「おーい！」
後方に、呼び声が起った。
三人はふりかえって、目をかがやかせた。
大乗が、意外な方角の密林の中から、とび出して、まっしぐらに、こっちへ疾駆して来る。

「どこに行って居った？」
「大将！」
大乗は、合掌してみせた。
「われわれが、山賤の砦で闘っているあいだに、山城の奈良城義太郎が、手勢を率いて、降りて行き申した。万歳でござる！　もはや、行く手に、敵影はござらぬ」
——神よ！
夜八郎は、生れてはじめて、その加護を信じた。
「奈良城義太郎は、山城の兵総員を率いて行った、とみえたか？」
「およそ三百とかぞえられ申したゆえ、おそらく、全兵でござろうな」
「では、水門には、見張りの兵二三人しか居るまい」
「左様でござろうな。ここからは、一路、なんの障害もなく、進めそうでござる。奈良城勢の降りて来る様子を眺めて、そう判断つかまつった」
「大乗——」
夜八郎が、微笑した。
「なんでござる？」
「伊吹野城の地下倉に、お主、仕掛けをしたか？」
「蓄えてある兵糧、武器は、まことに、もったいないことながら、あの鉄扉を開けば、爆発する仕掛けに相成って居り申す」
「ふむ——」
「扉が爆発すれば、倉の中の火薬も、爆発つかまつる。されば、奈良城義太郎とその手勢も、吹きとぶことに相成る次第でござる」
「やむを得ぬ仕儀だな」
「まことに、やむを得ぬ仕儀でござる」
そうこたえてから、大乗は、眉宇をひそめた。
「百平太も、相果て申したか」
「うむ」
「しもうた！」
大乗は、舌打ちした。
「どうした？」
「百平太には、水門を開く火薬を持たせてあったのでござる」
「……」
「火薬がなければ、水門を開くことは、不可能でござる」
「……」
「どうすればよいのか？」
大乗が、困惑の表情をみせたのは、よくよくのことである。
「われわれの人力では、開けぬか？」
「そんなことは、到底かない申さぬ。……おそらく、水門は、滑車の鎖で閉じてあるに相違ござるまい。水中にもぐって、その鎖を切るのは、とうてい、できるわざではござらぬ。魚にでも化けぬ限り、そんなに長い時間、水中にもぐっていることはかない申さん」
大乗は、いまいましく、吐き出した。

この時、白次が、遠慮ぎみの重い口調で、
「わしは、若狭の海辺で育った男やで、ちっとばかり長く、水の底へ沈んでいることは、できそうじゃ」
と、云った。
「よし！」
夜八郎は、決然として、云った。
「当って砕けることだ」

公卿館の座敷で、天満坊は、結跏趺坐の姿勢で、じっと、瞑目していた。
一昨日から、そうやって、坐禅を組みつづけていたのである。
厠へ立つほかは、その坐蒲を動かずにいた。
坐ったまま、ねむる修業が、天満坊には、できていた。
衣ずれの音が、縁側でした。
「おかゆをお持ちいたしました」
ものしずかな美しい声音に、天満坊は、目蓋をひらいた。
「これは……、姫君が、わざわざ、はこんで頂いて、恐縮に存じますの」
天満坊は、美夜の、すこしやつれたかにみえる気品の匂う顔を、視た。
「なにか、からだをうごかしていなければ、おちつきませぬゆえ……」
美夜は、云った。
「多門夜八郎は、不死身の御仁じゃ。案ずることはない」
「そうでございましょうか。わたくしも、信じては居りますけど……」
「今日あたりは、山を下って参るのではあるまいかな」
天満坊が、そう云った時であった。
野の遠くで、叫び声があがった。そして、その叫び声が、つぎつぎと、こだまを生むように、彼方此方に、同じ叫び声を伝播させた。
「水だあっ！」
「水じゃっ！」
「水が落ちて来たぞっ！」
「水っ！　水っ！　水が、やって来たあっ！」
一瞬にして、館内も、騒然となった。
「大徳どの！」
美夜は、何か云おうとして、声がつまった。泪が、あふれた。
天満坊一人、おちつきはらっていた。
「あの九人ならば、必ず、やってのけるであろうと思っていた。期待を裏切らなかったのう」
すべての家から、人々はとび出して来て、渦をまいて水が落ちて来る渓谷へ向って、奔っていた。
と——。
人々の足を一瞬、地に釘づけする大音響が、彼方で起った。
それは、地軸を裂くような凄じい爆発であった。
「おおっ！　城がっ——城が、火柱をたて居るっ！」

人々は、わけがわからずに、目をみはった。

天満坊は、はじめて坐蒲から立って、高櫓へ登って、伊吹野城に、幾本もの火柱が噴きあがるさまを、望見した。

「ぬかりはなかったのう。おそらく、奈良城勢を押し入らせておいて、地下倉の火薬を爆発させたものであろう。よくぞ、やった！」

山頂から落ちた濁水は、伊吹野に掘りめぐらされた灌漑溝を、ひたひたと満たして行った。

水が流れる！

ただそれだけのことが、これほど、人間を、狂喜させ、乱舞させた例が、これまであったろうか。

八千の人々は、溝を満たして行く水を、食い入るように見つめて、この水が、自分たちの血であることを感じた。

そして――。

水は、伊吹野のすみずみまで流れ渡った。

その時刻、九人の戦鬼のうちから、たった一人が、公卿館へ、戻りついた。

柿丸であった。

遠くに、その姿をみとめて、小幸が叫びたてながら、注進して来たので、天満坊、美夜はじめ、館中の人々が、門前に集って、迎えた。

柿丸は、疲労に堪えるこわばった表情で、ゆっくり近づいて来た。

たった一人しか戻って来なかった！　迎える人々は、息をのみ、粛然として、しずまった。

柿丸は、天満坊の前に立った。

「ご苦労であった」

天満坊は、まず、感動をこめてねぎらった。

柿丸は、無言で、頭を下げた。

「さ、ゆっくりと休息するがよい」

天満坊は、何もきかずに、柿丸を、いざなおうとした。

美夜が、たまりかねて、

「あ、あの……、ほかの人たちは、いかがなされたか？」

と、問うた。

柿丸は、美夜を、視た。

何かいおうとしたが、思いとどまった気色で、天満坊に向くと、

「黒太は、無数の毒蛇がうごめく原を、われらを通すために、自らを犠牲につかまつりました。泰国太郎殿と百平太と青助と赤松は邪宗を奉じて居る山賤団の山砦にて、壮烈な最期をとげました。……それから、水門を開くにあたって七位の大乗と白次が、水中にもぐり――滑車の鎖を断ち切ることに成功つかまつりましたが、そのまま、ついに浮かび上らず……」

そこまで、告げて、口ごもり、頭を垂れた。

大乗と白次は、水門から怒濤となって噴き出た洪水に呑み込まれてしまったのであった。火薬がない以上、身をすてて、水門を開くよりほかにすべはなかったのである。

「では――」

美夜は、必死の面持で、たずねた。

「夜八郎様は、どこで、お果てなされたのでしょう？」

「……」

柿丸は、返辞をためらった。

「柿丸、夜八郎殿は、斬り死か？」

天満坊が、問うた。

柿丸は、頭を擡げた。

「申上げます。……夜八郎様から、口どめされて居りましたが、申上げます。夜八郎様は、不死身でござった。水門をひらくにあたり、そこを警備していた兵は、三十余名の多きをかぞえましたが、これを、阿修羅となって、斬り散らし、生き残られたのでござる」

「ああっ！」

美夜の口から、歓喜の叫びがほとばしった。

「されど……、もはや、自分の為すべきことは終った、と申されて、麓に降りると、わし一人に報告をまかせられて、一人、東へ向って、歩いて行かれたのでござる」

飄然として遠ざかって行く夜八郎を見送ったのち、柿丸は、館へもどって来たのである。

人間業とも思われぬ仕事をなしとげながら、狂喜する人人を見ようともせず、一人で立ち去って行くとは、いかにも、多門夜八郎らしかった。

天満坊は、死んで行った七人の霊を胸の中に抱いて歩いて行く孤影を、想いやった。

――まことの武士とは、あの人物のことであろう。

すすり泣きの声が起ると、人々は、すべて、頭を垂れた。

天満坊が、急に、

「姫君――」

と、呼んだ。

「は、はい」

美夜が、泪の顔を擡げた。

「長い旅を覚悟なされるか？」

美夜は、天満坊の云おうとする意味を、すぐに、さとった。

「はい、行きまする。どこまでも――」

「そのお覚悟ならば、行かれい。……柿丸、お供をするか？」

「は――」

「お主は、美しい女性のお供をして、主人のあとを追うて行くように生れついているのではないかな？」

「はい。どうやら、そうらしゅうござる」

市女笠と杖を手にした旅装束の美夜は、柿丸をしたがえて、人々に見送られながら、公卿館を出た。多門夜八郎のあとを慕うて――。

行く手に、どのような運命が待っているかは知らぬ。ただ、一人の男子（おのこ）を恋う女の、ひたむきな情熱のみが、心で燃えていた。

五百年を経た今日、伊吹野は新しい地名となり、野を横切って、東海道新幹線が走っている。

九人の戦鬼のいさおは、大庄山の麓の松林ぎわ、細い草

径のほとりに、苔むした一基の碑となって、とどめられている。しかし、刻まれた文字も、いまでは、風化して、ほとんど読むこともおぼつかない。

（完）

われら九人の戦鬼

昭和四〇年七月　五　日　第一刷
昭和四三年一月二五日　第一〇刷

定価　四九〇円

著　者　柴田錬三郎
発行者　上林吾郎
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
印刷所　凸版印刷
製本所　矢嶋製本

＊乱丁・落丁のものはお取替えいたします

© 1965 Renzaburo Shibata　Printed in Japan